

上越新幹線關係  
埋藏文化財発掘調査報告

第6集

# 下佐野遺跡

II 地区(2)

平安時代・中・近世編

1986

群馬県教育委員会  
財)群馬県埋藏文化財調査事業団  
日本鉄道建設公団



資料	(財)群馬県埋蔵文化財	01-310
	調査事業団保管	12-2
NO. 61-193	昭和61年5月30日	(4)



上越新幹線関係  
埋蔵文化財発掘調査報告

第 6 集

# 下佐野遺跡

II 地区 (2)

平安時代・中・近世編

1986

群馬県教育委員会  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
日本鉄道建設公団



# 目 次

## 第2分冊(平安時代・中・近世編)

### 第6章 検出された遺構と遺物

#### 2 14地区の調査

(3) 平安時代	257
1 竪穴住居跡	257
2 掘立柱建物跡	540
3 溝	554
4 墓 塚	565
(4) 中・近世その他	575
1 土 塚	575
2 井 戸	603
3 溝	613
4 道路状遺構	615
5 近世遺構群	617
6 グリット遺物その他	618
3 ま と め	620
(3) 平安時代	620
1 平安時代の土器について	620
2 平安時代の甗について	634
3 平安時代の遺構について	639

結	646
---	-----



# 插图目次

第186图	3区1号住居跡遺構図	257	第229图	4区21号住居跡遺構、遺物図	306
第187图	3区1号住居跡遺物図	258	第230图	4区23号住居跡遺構図	308
第188图	3区2号住居跡遺物図	260	第231图	4区24号住居跡遺構、遺物図	309
第189图	3区2号住居跡遺構図	261	第232图	4区25号住居跡遺構、遺物図	311
第190图	3区3号住居跡遺構図	262	第233图	4区26号住居跡遺物図	312
第191图	3区3号住居跡遺物図	263	第234图	4区26号住居跡遺構図	313
第192图	3区4号住居跡遺構図	264	第235图	4区27号住居跡遺構図	314
第193图	3区4号住居跡遺物図(1)	265	第236图	4区28号住居跡遺構、遺物図	315
第194图	3区4号住居跡遺物図(2)	266	第237图	4区29号住居跡遺構図	316
第195图	4区1、2号住居跡遺構図	268	第238图	4区29号住居跡遺物図	316
第196图	4区1、2号住居跡遺物図	269	第239图	4区30、31号住居跡遺構図	317
第197图	4区3号住居跡遺構図	270	第240图	4区30、31号住居跡遺物図	318
第198图	4区3号住居跡遺物図	270	第241图	4区32号住居跡遺構図	320
第199图	4区4、5、6号住居跡遺構図	272	第242图	4区33号住居跡遺構図	321
第200图	4区5号住居跡カマド図	273	第243图	4区33号住居跡遺物図	322
第201图	4区4、5、6号住居跡遺物図(1)	274	第244图	4区34号住居跡遺構図	323
第202图	4区4、5、6号住居跡遺物図(2)	275	第245图	4区34号住居跡遺物図	324
第203图	4区7、8号住居跡遺構図	277	第246图	4区35、36号住居跡遺構図	326
第204图	4区7、8号住居跡カマド図	278	第247图	4区35、36号住居跡遺物図(1)	327
第205图	4区7、8号住居跡遺物図	279	第248图	4区35、36号住居跡遺物図(2)	328
第206图	4区9号住居跡遺構図	280	第249图	4区37号住居跡遺構図	331
第207图	4区9号住居跡遺物図	281	第250图	4区37号住居跡遺物図	332
第208图	4区10号住居跡遺構図	281	第251图	4区38号住居跡遺構、遺物図	333
第209图	4区10号住居跡遺物図	282	第252图	4区39号住居跡遺構図	334
第210图	4区11号住居跡遺構図	283	第253图	4区39号住居跡遺物図	335
第211图	4区12号住居跡遺構図	284	第254图	4区40号住居跡遺構、遺物図	336
第212图	4区12号住居跡遺物図	285	第255图	4区41、42、46、47号住居跡遺構図(1)	337
第213图	4区13号住居跡遺構図	286	第256图	4区41、42、46号住居跡遺構図(2)	338
第214图	4区13号住居跡遺物図	287	第257图	4区41、42、46、47号住居跡遺物図(1)	340
第215图	4区14号住居跡遺構図	289	第258图	4区41、42、46、47号住居跡遺物図(2)	341
第216图	4区14号住居跡遺物図	290	第259图	4区43号住居跡遺構、遺物図	345
第217图	4区15号住居跡遺構図	292	第260图	4区43号住居跡遺物図(2)	346
第218图	4区15号住居跡遺物図	293	第261图	4区44号住居跡遺構図	348
第219图	4区16号住居跡遺構図	294	第262图	4区44号住居跡遺物図	349
第220图	4区16号住居跡遺物図	295	第263图	4区45号住居跡遺構図	349
第221图	4区17号住居跡遺構図	296	第264图	4区45号住居跡遺物図	351
第222图	4区17号住居跡遺物図(1)	297	第265图	4区61号住居跡遺構図	353
第223图	4区17号住居跡遺物図(2)	298	第266图	4区62号住居跡遺構図	353
第224图	4区18号住居跡遺構、遺物図	301	第267图	4区62号住居跡遺物図	354
第225图	4区19号住居跡遺構図	302	第268图	4区63、64号住居跡遺構図	355
第226图	4区19号住居跡遺物図	303	第269图	4区63、64号住居跡遺物図(1)	356
第227图	4区20、22号住居跡遺構図	303	第270图	4区63、64号住居跡遺物図(2)	357
第228图	4区20、22号住居跡遺物図	304	第271图	4区65号住居跡遺構図	359

第272图	4区66号住居跡遺構図	360	第319图	6区2号住居跡遺物図(2)	431
第273图	5区1号住居跡遺構図	361	第320图	6区3号住居跡遺構図	433
第274图	5区1号住居跡遺物図	362	第321图	6区3号住居跡遺物図	434
第275图	5区3A、3B、3C号住居跡遺構図	363	第322图	6区4A、4B号住居跡遺構図	436
第276图	5区3B、3C号住居跡遺物図	365	第323图	6区4A、4B号住居跡遺物図(1)	437
第277图	5区5A号住居跡遺構、遺物図	367	第324图	6区4A、4B号住居跡遺物図(2)	438
第278图	5区5A号住居跡遺物図(2)	368	第325图	6区5号住居跡遺構図	440
第279图	5区6号住居跡遺構、遺物図	371	第326图	6区6号住居跡遺構、遺物図	441
第280图	5区6号住居跡遺物図(2)	372	第327图	6区8号住居跡遺構、遺物図	443
第281图	5区6号住居跡遺物図(3)	373	第328图	6区10号住居跡遺構、遺物図	444
第282图	5区7A、7B号住居跡遺構図	376	第329图	6区11号住居跡遺構図	445
第283图	5区7A号住居跡遺物図	379	第330图	6区11号住居跡遺物図	446
第284图	5区7A、7B号住居跡遺物図	380	第331图	6区13号住居跡遺構図	448
第285图	5区8号住居跡遺構図	381	第332图	6区13号住居跡遺物図	449
第286图	5区8号住居跡遺物図(1)	382	第333图	6区14号住居跡遺構図	451
第287图	5区8号住居跡遺物図(2)	383	第334图	6区14号住居跡遺物図	453
第288图	5区9号住居跡遺構、遺物図	386	第335图	6区17号住居跡遺構、遺物図	454
第289图	5区10号住居跡遺構図	388	第336图	6区19号住居跡遺構図	455
第290图	5区10号住居跡遺物図(1)	389	第337图	6区19号住居跡遺物図	456
第291图	5区10号住居跡遺物図(2)	390	第338图	6区21号住居跡遺構図	458
第292图	5区10号住居跡遺物図(3)	391	第339图	6区24、25号住居跡遺構、遺物図	459
第293图	5区11号住居跡遺構図	394	第340图	6区24、25号住居跡遺物図(2)	460
第294图	5区11号住居跡遺物図	395	第341图	6区24、25号住居跡遺物図(3)	461
第295图	5区71号住居跡遺構、遺物図	397	第342图	7区1号住居跡遺構、遺物図	464
第296图	5区48号住居跡遺構図	399	第343图	7区1号住居跡遺物図(2)	465
第297图	5区48号住居跡遺物図	400	第344图	7区1号住居跡遺物図(3)	466
第298图	5区49号住居跡遺構、遺物図	402	第345图	7区1号住居跡遺物図(4)	467
第299图	5区50号住居跡遺構、遺物図	404	第346图	7区2号住居跡遺構、遺物図	470
第300图	5区50号住居跡遺物図(2)	405	第347图	7区3号住居跡遺構、遺物図	472
第301图	5区51号住居跡遺構図	407	第348图	7区6号住居跡遺構、遺物図	473
第302图	5区51号住居跡遺物図	408	第349图	7区7、15号住居跡遺構図	475
第303图	5区52、53、72号住居跡遺構図	410	第350图	7区7号住居跡遺物図	476
第304图	5区52、53、72号住居跡遺物図	412	第351图	7区8、9号住居跡遺構図	477
第305图	5区54号住居跡遺構図	413	第352图	7区8、9号住居跡遺物図(1)	478
第306图	5区54号住居跡遺物図	415	第353图	7区8、9号住居跡遺物図(2)	479
第307图	5区55号住居跡遺構図	416	第354图	7区10号住居跡遺構、遺物図	481
第308图	5区55号住居跡遺物図(1)	417	第355图	7区12号住居跡遺構、遺物図	483
第309图	5区55号住居跡遺物図(2)	418	第356图	7区13号住居跡遺構、遺物図	484
第310图	5区56号住居跡遺構、遺物図	420	第357图	7区13号住居跡遺物図(2)	485
第311图	5区56号住居跡遺物図(2)	421	第358图	7区14号住居跡遺構、遺物図	487
第312图	5区59号住居跡遺構図	424	第359图	7区16号住居跡遺構図	488
第313图	5区59号住居跡遺物図	425	第360图	7区16号住居跡遺物図	489
第314图	5区60号住居跡遺構図	426	第361图	7区17、36号住居跡遺構図	490
第315图	5区67号住居跡遺構、遺物図	426	第362图	7区17、36号住居跡遺物図(1)	492
第316图	5区68号住居跡遺構図	427	第363图	7区17、36号住居跡遺物図(2)	493
第317图	6区1号住居跡遺構、遺物図	428	第364图	7区18号住居跡遺構図	496
第318图	6区2号住居跡遺構、遺物図	430	第365图	7区18号住居跡遺物図(1)	497

第366図	7区18号住居跡遺物図(2)	498	第413図	6区7、8、10号溝遺構図	560
第367図	7区19号住居跡遺構図	501	第414図	7区4号、8区2、3、4号溝遺構図	562
第368図	7区19号住居跡遺物図	502	第415図	溝遺物集成図	563
第369図	7区20号住居跡遺構図	504	第416図	7区113号土壇遺構図	565
第370図	7区20号住居跡遺物図	505	第417図	7区113号土壇遺物図	566
第371図	7区21号住居跡遺構図	506	第418図	7区59号土壇遺構図	566
第372図	7区26、31号住居跡遺構、遺物図	507	第419図	7区59号土壇遺物図	567
第373図	7区27、29号住居跡遺構図	509	第420図	7区101、102号土壇遺構図	568
第374図	7区27、29号住居跡遺物図(1)	510	第421図	7区101、102号土壇遺物図	568
第375図	7区27、29号住居跡遺物図(2)	511	第422図	7区61、62、63号土壇遺構図	571
第376図	7区32号住居跡遺構図	512	第423図	7区61、62号土壇遺物図	572
第377図	7区33号住居跡遺構図	513	第424図	7区64号土壇遺構、遺物図	574
第378図	7区33号住居跡遺物図	514	第425図	土壇(1)3区	579
第379図	7区37号住居跡遺構、遺物図	516	第426図	土壇(2)4、5区(1)	580
第380図	7区39号住居跡遺構、遺物図	517	第427図	土壇(3)4、5区(2)	581
第381図	7区40号住居跡遺構、遺物図	518	第428図	土壇(4)4、5区(3)	582
第382図	7区46号住居跡遺構、遺物図	520	第429図	土壇(5)4区	583
第383図	7区47号住居跡遺構図	521	第430図	土壇(6)4、5区(4)	584
第384図	7区47号住居跡遺物図	522	第431図	土壇(7)4、5区(5)	585
第385図	7区50号住居跡遺構、遺物図	524	第432図	土壇(8)6区(1)	586
第386図	7区52号住居跡遺構図	525	第433図	土壇(9)6区(2)	587
第387図	7区52号住居跡遺物図	526	第434図	土壇(10)6区(3)	588
第388図	7区53号住居跡遺構、遺物図	529	第435図	土壇(11)6区(4)	589
第389図	7区54号住居跡遺構図	530	第436図	土壇(12)6区(5)	590
第390図	7区54号住居跡遺物図	531	第437図	土壇(13)6区(6)	591
第391図	7区55号住居跡遺構図	533	第438図	土壇(14)6区(7)	592
第392図	7区55B号住居跡遺物図	534	第439図	土壇(15)7区(1)	593
第393図	7区55A、55B、55C号住居跡遺物図	535	第440図	土壇(16)7区(2)	594
第394図	8区2号住居跡遺構図	537	第441図	土壇(17)7区(3)	595
第395図	8区2号住居跡遺物図	538	第442図	土壇(18)7区(4)	596
第396図	4区1号掘立柱建物跡	540	第443図	土壇(19)7区(5)	597
第397図	4区2号掘立柱建物跡	541	第444図	土壇(20)7区(6)	598
第398図	4区3号掘立柱建物跡	542	第445図	土壇(21)7区(7)	599
第399図	6区1号掘立柱建物跡	543	第446図	土壇(22)7区(8)8区	600
第400図	7区1～5号掘立柱建物跡	544	第447図	土壇遺物集成図	601
第401図	7区6号掘立柱建物跡	546	第448図	3区1号、4区2、5、7号井戸遺構図	604
第402図	7区7号掘立柱建物跡	547	第449図	4区1、3、4、6号井戸遺構図	605
第403図	7区8、9号掘立柱建物跡	548	第450図	5区8、9号井戸遺構図	606
第404図	7区10号掘立柱建物跡	549	第451図	6区2、3、4、5号井戸遺構図	607
第405図	7区11号掘立柱建物跡	550	第452図	3区2号、7区4、5、7、8号井戸遺構図	608
第406図	7区12号掘立柱建物跡	551	第453図	井戸遺物集成図(1)	609
第407図	7区13号掘立柱建物跡	552	第454図	井戸遺物集成図(2)	610
第408図	7区14号掘立柱建物跡	553	第455図	井戸遺物集成図(3)	611
第409図	4区3、5、6号溝遺構図	555	第456図	3区1、2号、4区1、2号溝遺構図	614
第410図	5区4、7号溝遺構図	556	第457図	6区道路状遺構図	616
第411図	6区1、2、4、11、12号溝遺構図	558	第458図	6区近世遺構群	617
第412図	6区1、2号溝断面図	559	第459図	グリット出土及びその他の遺物	618

第460図	第I期の土器群	622	第466図	第VII期の土器群	628
第461図	第II期の土器群	622	第467図	第VIII期の土器群	630
第462図	第III期の土器群	624	第468図	第IX期の土器群	630
第463図	第IV期の土器群	625	第469図	第X期の土器群	632
第464図	第V期の土器群	625	第470図	第XI期の土器群	632
第465図	第VI期の土器群	628	第471図	馬具計測表	645

## 表 目 次

第36表	3区1号住居跡出土遺物観察表	259	第69表	4区41、42、46、47号住居跡出土遺物観察表	342
第37表	3区2号住居跡出土遺物観察表	261	第70表	4区43号住居跡出土遺物観察表	347
第38表	3区3号住居跡出土遺物観察表	263	第71表	4区44号住居跡出土遺物観察表	349
第39表	3区4号住居跡出土遺物観察表	266	第72表	4区45号住居跡出土遺物観察表	350
第40表	4区1、2号住居跡出土遺物観察表	269	第73表	4区62号住居跡出土遺物観察表	354
第41表	4区3号住居跡出土遺物観察表	271	第74表	4区63、64号住居跡出土遺物観察表	358
第42表	4区4、5、6号住居跡出土遺物観察表	275	第75表	5区1号住居跡出土遺物観察表	362
第43表	4区7、8号住居跡出土遺物観察表	278	第76表	5区3B、3C号住居跡出土遺物観察表	364
第44表	4区9号住居跡出土遺物観察表	281	第77表	5区5A号住居跡出土遺物観察表	369
第45表	4区10号住居跡出土遺物観察表	282	第78表	5区6号住居跡出土遺物観察表	374
第46表	4区12号住居跡出土遺物観察表	285	第79表	5区7A、7B号住居跡出土遺物観察表	377
第47表	4区13号住居跡出土遺物観察表	288	第80表	5区8号住居跡出土遺物観察表	384
第48表	4区14号住居跡出土遺物観察表	289	第81表	5区9号住居跡出土遺物観察表	387
第49表	4区15号住居跡出土遺物観察表	293	第82表	5区10号住居跡出土遺物観察表	392
第50表	4区16号住居跡出土遺物観察表	295	第83表	5区11号住居跡出土遺物観察表	396
第51表	4区17号住居跡出土遺物観察表	299	第84表	5区71号住居跡出土遺物観察表	398
第52表	4区18号住居跡出土遺物観察表	301	第85表	5区48号住居跡出土遺物観察表	400
第53表	4区19号住居跡出土遺物観察表	302	第86表	5区49号住居跡出土遺物観察表	403
第54表	4区20、22号住居跡出土遺物観察表	305	第87表	5区50号住居跡出土遺物観察表	406
第55表	4区21号住居跡出土遺物観察表	307	第88表	5区51号住居跡出土遺物観察表	409
第56表	4区24号住居跡出土遺物観察表	310	第89表	5区52、53、72号住居跡出土遺物観察表	411
第57表	4区25号住居跡出土遺物観察表	312	第90表	5区54号住居跡出土遺物観察表	414
第58表	4区26号住居跡出土遺物観察表	313	第91表	5区55号住居跡出土遺物観察表	418
第59表	4区27、28号住居跡出土遺物観察表	315	第92表	5区56号住居跡出土遺物観察表	422
第60表	4区29号住居跡出土遺物観察表	317	第93表	5区59号住居跡出土遺物観察表	424
第61表	4区30、31号住居跡出土遺物観察表	319	第94表	5区67号住居跡出土遺物観察表	427
第62表	4区33号住居跡出土遺物観察表	322	第95表	6区1号住居跡出土遺物観察表	429
第63表	4区34号住居跡出土遺物観察表	325	第96表	6区2号住居跡出土遺物観察表	432
第64表	4区35、36号住居跡出土遺物観察表	329	第97表	6区3号住居跡出土遺物観察表	434
第65表	4区37号住居跡出土遺物観察表	332	第98表	6区4A、4B号住居跡出土遺物観察表	438
第66表	4区38号住居跡出土遺物観察表	334	第99表	6区6号住居跡出土遺物観察表	442
第67表	4区39号住居跡出土遺物観察表	335	第100表	6区8号住居跡出土遺物観察表	443
第68表	4区40号住居跡出土遺物観察表	336	第101表	6区10号住居跡出土遺物観察表	445

第102表	6区11号住居跡出土遺物観察表	447	第125表	7区33号住居跡出土遺物観察表	515
第103表	6区13号住居跡出土遺物観察表	450	第126表	7区37号住居跡出土遺物観察表	516
第104表	6区14号住居跡出土遺物観察表	452	第127表	7区39号住居跡出土遺物観察表	518
第105表	6区17号住居跡出土遺物観察表	455	第128表	7区40号住居跡出土遺物観察表	519
第106表	6区19号住居跡出土遺物観察表	457	第129表	7区46号住居跡出土遺物観察表	521
第107表	6区24、25号住居跡出土遺物観察表	462	第130表	7区47号住居跡出土遺物観察表	523
第108表	7区1号住居跡出土遺物観察表	468	第131表	7区50号住居跡出土遺物観察表	525
第109表	7区2号住居跡出土遺物観察表	471	第132表	7区52号住居跡出土遺物観察表	527
第110表	7区3号住居跡出土遺物観察表	471	第133表	7区53号住居跡出土遺物観察表	528
第111表	7区6号住居跡出土遺物観察表	474	第134表	7区54号住居跡出土遺物観察表	532
第112表	7区7号住居跡出土遺物観察表	476	第135表	7区55A、B、C号住居跡出土遺物観察表	536
第113表	7区8、9号住居跡出土遺物観察表	480	第136表	8区2号住居跡出土遺物観察表	539
第114表	7区10号住居跡出土遺物観察表	482	第137表	溝出土遺物観察表	563
第115表	7区12号住居跡出土遺物観察表	483	第138表	7区113、59、101、102号土壇 出土遺物観察表	569
第116表	7区13号住居跡出土遺物観察表	486	第139表	7区61、62号土壇出土遺物観察表	573
第117表	7区14号住居跡出土遺物観察表	488	第140表	土壇一覧表	575
第118表	7区16号住居跡出土遺物観察表	489	第141表	土壇出土遺物観察表	602
第119表	7区17、36号住居跡出土遺物観察表	494	第142表	井戸一覧表	603
第120表	7区18号住居跡出土遺物観察表	499	第143表	井戸出土遺物観察表	611
第121表	7区19号住居跡出土遺物観察表	501	第144表	グリット出土およびその他の遺物観察表	619
第122表	7区20号住居跡出土遺物観察表	505	第145表	平安時代居穴住居跡一覧表	642
第123表	7区26、31号住居跡出土遺物観察表	508			
第124表	7区27、29号住居跡出土遺物観察表	511			

## 図 版 目 次

図版 78	4区全景(北)		図版 86	4区5号住居跡全景(西)	
〃	5区全景(北)		図版 87	4区3号住居跡遺物	
図版 79	7区全景(北)		〃	4区5号住居跡遺物	
〃	8区から15地区を望む		図版 88	4区7、8号住居跡全景(西)	
図版 80	3区1号住居跡全景(西)		〃	4区7、8号住居跡遺物	
〃	3区1号住居跡遺物(1)		図版 89	4区9号住居跡全景(北)	
図版 81	同上(2)		〃	4区9、10号住居跡遺物	
〃	3区2号住居跡遺物		図版 90	4区10号住居跡全景(西)	
〃	3区3号住居跡遺物		〃	4区12号住居跡全景(西)	
図版 82	3区2号住居跡全景(西)		図版 91	4区13号住居跡全景(西)	
〃	3区3号住居跡全景(西)		〃	4区12、13号住居跡遺物	
図版 83	3区4号住居跡全景(西)		図版 92	4区14号住居跡全景(西)	
〃	3区4号住居跡遺物(1)		〃	4区14号住居跡遺物(1)	
図版 84	同上(2)		図版 93	同上(2)	
図版 85	4区1、2号住居跡全景(西)		〃	4区15号住居跡全景(西)	
〃	4区1、2、3号住居跡遺物		図版 94	4区16号住居跡全景(西)	
図版 86	4区3号住居跡全景(北)		〃	4区16号住居跡遺物	

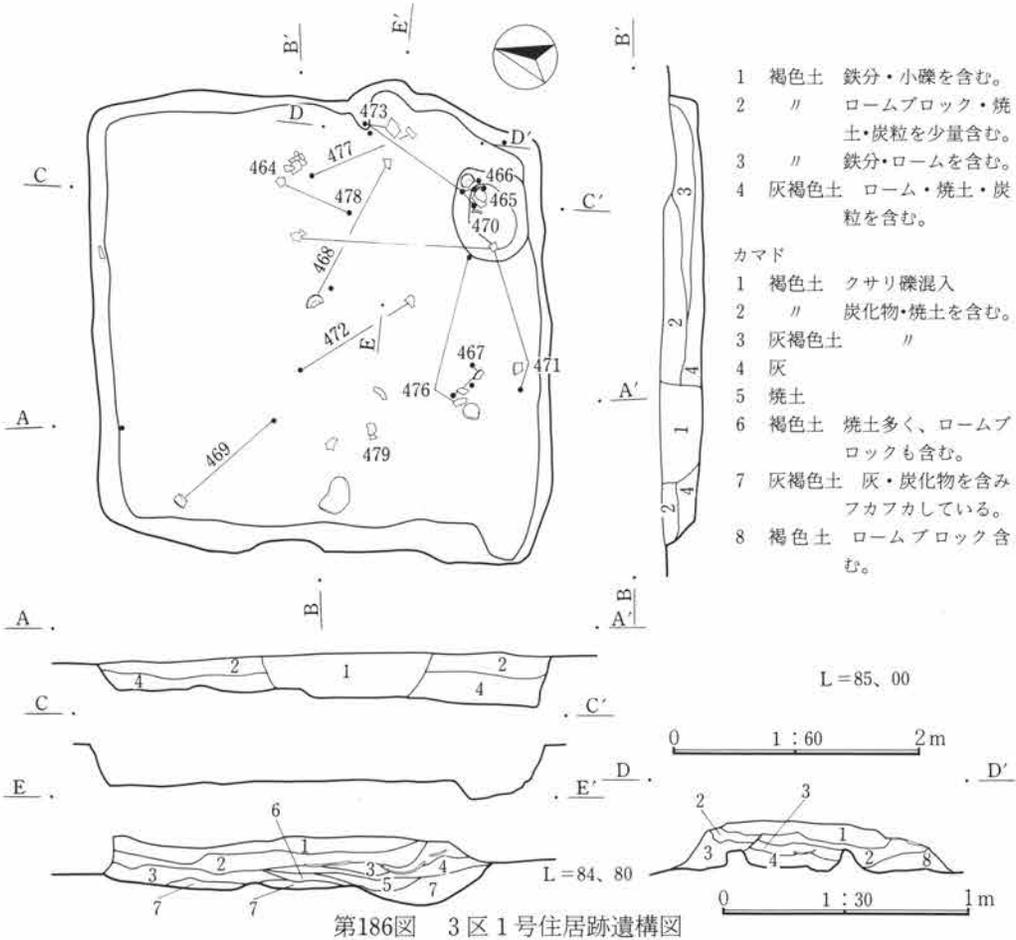
- 図版 95 4区17号住居跡全景(西)  
 // 4区17号住居跡遺物(1)
- 図版 96 4区17、18、19号住居跡遺物
- 図版 97 4区18号住居跡全景(西)  
 // 4区19号住居跡全景(西北)
- 図版 98 4区20、22号住居跡全景(西南)  
 // 4区20号住居跡遺物
- 図版 99 4区21号住居跡全景(南)  
 // 4区23号住居跡全景(西)
- 図版100 4区24号住居跡全景(西)  
 // 4区26号住居跡全景(西)
- 図版101 4区21号住居跡遺物  
 // 4区24号住居跡遺物  
 // 4区25、27、28、29号住居跡遺物
- 図版102 4区30、31号住居跡全景(東)  
 // 4区30、31号住居跡遺物
- 図版103 4区32号住居跡全景(西)  
 // 4区33号住居跡全景(西)
- 図版104 4区34号住居跡全景(西)  
 // 4区34号住居跡遺物
- 図版105 4区35、36号住居跡全景(西)  
 // 4区35、36号住居跡遺物(1)
- 図版106 同上(2)  
 // 4区37号住居跡遺物  
 // 4区38、39号住居跡遺物
- 図版107 4区37号住居跡全景(西)  
 // 4区41、42、46、47号住居跡全景(西)
- 図版108 4区41、46、47号住居跡遺物
- 図版109 4区43号住居跡全景(西)  
 // 4区43号住居跡遺物(1)
- 図版110 同上(2)  
 // 4区44号住居跡遺物  
 // 4区45号住居跡遺物(1)
- 図版111 4区44号住居跡全景(西)  
 // 4区45号住居跡全景(西)
- 図版112 4区45号住居跡遺物(2)
- 図版113 4区63、64号住居跡全景(西)  
 // 4区62、63号住居跡遺物
- 図版114 4区65号住居跡全景(北)  
 // 4区63、64号住居跡遺物
- 図版115 5区3号住居跡全景(南)  
 // 5区1、3A、3B号住居跡遺物
- 図版116 5区3B号住居跡遺物  
 // 5区5A号住居跡遺物
- 図版117 5区6号住居跡全景(西)、同遺物(1)
- 図版118 5区6号住居跡遺物(2)
- 図版119 5区7A、7B号住居跡遺物
- 図版120 5区8号住居跡全景(西)、同遺物
- 図版121 5区8、9号住居跡遺物
- 図版122 5区10号住居跡全景(西)  
 // 5区10号住居跡遺物(1)
- 図版123 同上(2)
- 図版124 5区11号住居跡遺物  
 // 5区48、49号住居跡遺物
- 図版125 5区48号住居跡全景(西)  
 // 5区49号住居跡全景(西)
- 図版126 5区50号住居跡全景(西)  
 // 5区50号住居跡遺物
- 図版127 5区50~53号住居跡遺物
- 図版128 5区51号住居跡全景(西)  
 // 5区52、53、72号住居跡全景(西)
- 図版129 5区54号住居跡遺物  
 // 5区55号住居跡遺物
- 図版130 5区54号住居跡全景(西)  
 // 5区55号住居跡全景(西)
- 図版131 5区56号住居跡全景(西)  
 // 5区56号住居跡遺物
- 図版132 5区59号住居跡全景(西)  
 // 5区59号住居跡遺物
- 図版133 5区67、71号、6区1、2号住居跡遺物
- 図版134 6区1号住居跡全景(西)  
 // 6区2、3号住居跡全景(西)
- 図版135 6区2、3号住居跡遺物
- 図版136 6区4号住居跡全景(西)  
 // 6区4A、4B号住居跡遺物(1)
- 図版137 同上(2)  
 // 6区4B号住居跡遺物(3)
- 図版138 6区6号住居跡全景(西)  
 // 6区6、8号住居跡遺物
- 図版139 6区10号住居跡全景(西)  
 // 6区10号住居跡カマド
- 図版140 6区11号住居跡全景(南)  
 // 6区11号住居跡遺物
- 図版141 6区13号住居跡全景(西)  
 // 6区13号住居跡遺物
- 図版142 6区14号住居跡全景(西)  
 // 6区14、17、19号住居跡遺物
- 図版143 6区17号住居跡全景(北)  
 // 6区19号住居跡全景(東南)
- 図版144 6区24号住居跡遺物
- 図版145 6区24、25号住居跡遺物  
 // 7区1号住居跡遺物(1)
- 図版146 7区1号住居跡全景(西北)  
 // 7区1号住居跡遺物(2)

- 図版147 7区3号住居跡全景(東)  
 // 7区6号住居跡全景(西)
- 図版148 7区2、3、6、7、9号住居跡遺物
- 図版149 7区8、9号住居跡全景(西)  
 // 7区9号住居跡遺物
- 図版150 7区10号住居跡全景(北)  
 // 7区12号住居跡全景(西)
- 図版151 7区10、12、13号住居跡遺物
- 図版152 7区13号住居跡全景(東)  
 // 7区16号住居跡全景(西)
- 図版153 7区16号住居跡遺物  
 // 7区17号住居跡遺物
- 図版154 7区17、36号住居跡全景(西)  
 // 7区18号住居跡全景(西)
- 図版155 7区18、39号住居跡遺物
- 図版156 7区19、26、31、32、37、39号住居跡全景(西)  
 // 7区19号住居跡遺物
- 図版157 7区20号住居跡全景(西)  
 // 7区20、26、31、36、37、39号住居跡遺物
- 図版158 7区27、29号住居跡全景(西)  
 // 7区27号住居跡遺物
- 図版159 7区33号住居跡全景(西)  
 // 7区33号住居跡遺物
- 図版160 7区46号住居跡全景(西北)  
 // 7区50号住居跡全景(西北)
- 図版161 7区47号住居跡遺物  
 // 7区50、52号住居跡遺物
- 図版162 7区52号住居跡全景(西北)  
 // 7区52号住居跡遺物
- 図版163 7区53号住居跡遺物  
 // 7区54号住居跡遺物  
 // 7区55B号住居跡遺物
- 図版164 7区55A、B、C号住居跡遺物
- 図版165 8区2号住居跡全景(東南)  
 // 8区2号住居跡遺物
- 図版166 4区3号掘立(東)  
 // 7区1、2、3、4、5号掘立(西)
- 図版167 7区6号掘立(西)  
 // 7区7号掘立(西)
- 図版168 7区8、9号掘立(西南)  
 // 7区10号掘立(北)
- 図版169 7区11号掘立(西)  
 // 7区12号掘立(西南)
- 図版170 7区113号土壇全景(西)  
 // 7区113号土壇遺物
- 図版171 7区59号土壇全景(西)  
 // 7区59号土壇遺物  
 // 7区101号土壇遺物
- 図版172 7区101、102号土壇全景(東南)  
 // 7区64号土壇(東)  
 // 7区64号土壇(東)
- 図版173 5区4号溝  
 // 6区1号溝  
 // 6区8、10号溝
- 図版174 土壇遺物  
 // 溝遺物
- 図版175 4区1号井戸  
 // 4区2号井戸  
 // 4区7号井戸
- 図版176 7区62号土壇鉄器(1)  
 // // (2)
- 図版177 鉄器(1)、鉄器(2)
- 図版178 鉄器(3)、鉄器(4)
- 図版179 鉄器(5)、鉄器(6)



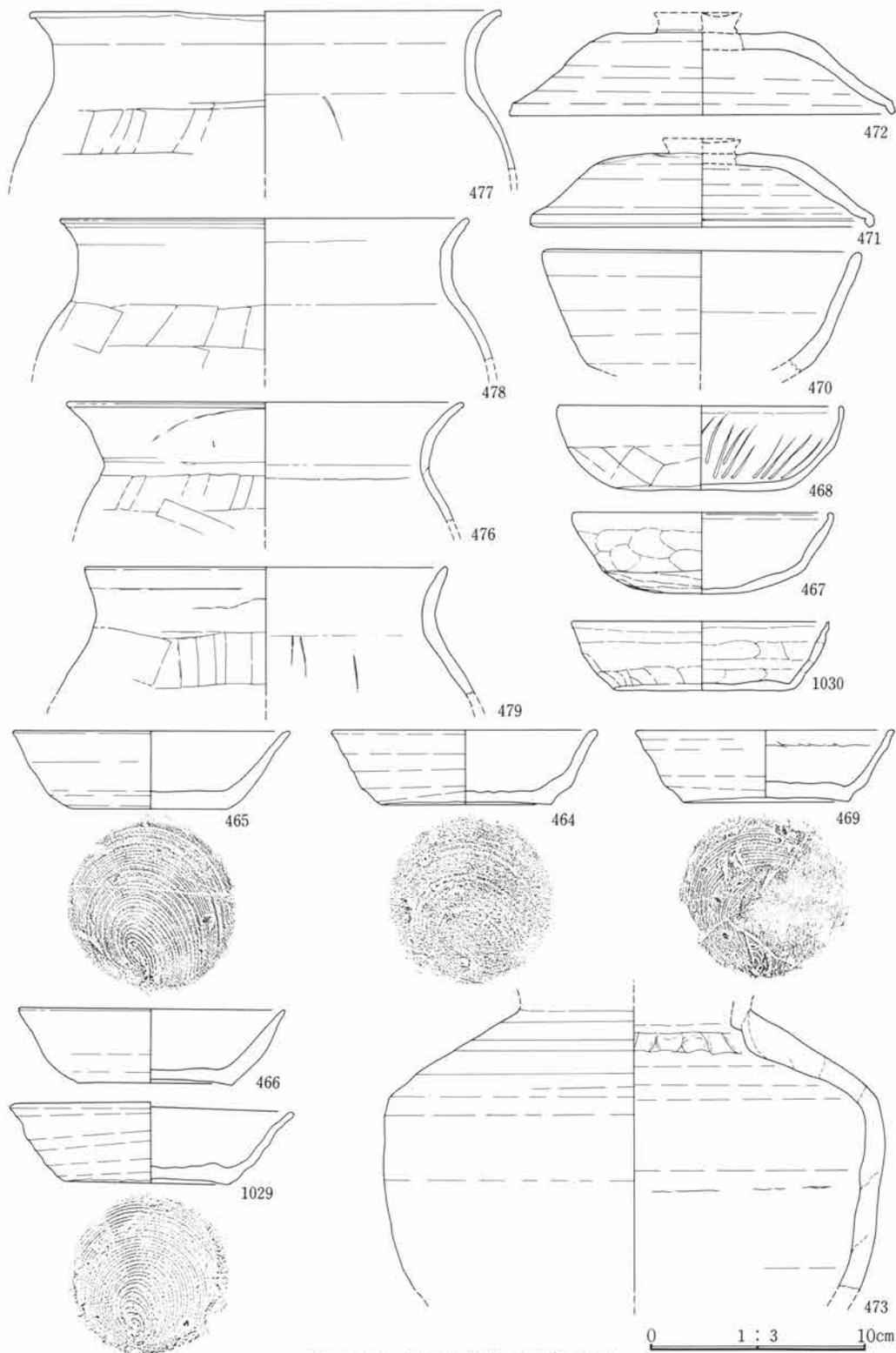
## (3) 平安時代

## 1 竪穴住居跡



## 3区1号住居跡 (第186・187図、第36表、図版80・81)

本住居跡は、基本土層の第6層上面で確認された。住居跡北西隅より、南辺中央部にかけて、3区1号溝が横切る。1号溝底面と住居床面の高さがほぼ同一である為、かろうじて、床面の状態が保たれていた。南西隅に風倒木痕も認められた。規模は、横3.58m、縦3.63m、方位は、N-72°-Eを測る。平面形は、ほぼ方形を呈する。壁は、20cm程残存し、ほぼ直行するか。西辺では、傾斜をもつ。床面は良好でない。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺中央部よりに構築されていたが、残存状態はきわめて悪い。貯蔵穴は、東南隅にあり長径70cm×短径58cm×深さ15cmを測る。又、南辺西よりに、110cm×70cm×20cmの床下土壇が確認された。遺物は、破片が多く、床直上のものが少ないが、貯蔵穴中とカマド周辺から、土師器の甕、坏、須恵器の蓋、坏、壺が出土している。又、西辺中央寄りに、上面が扁平な河原石が認められた。遺構の時期は、出土遺物とカマドの状況から、平安時代(9世紀前葉)とする。(長谷部)



第187図 3区1号住居跡遺物図

第36表 3区1号住居跡出土遺物観察表

(第187図、図版 80・81)

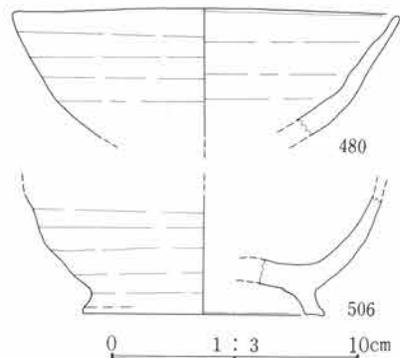
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
464	坏須恵器	口-12.3、底-7.9、高-3.5○略完存	砂粒多く含む。還元、やや軟質。灰色	体部直して外へひらく。腰部に稜をもつ。底部、回転糸切り無調整、ロクロ右回転	重ね焼き痕あり
465	坏須恵器	口-12.8、底-7.1、高-3.6○略完存	砂粒多く含む。還元、やや軟質。灰白色	体部直して外行し、口縁やや外反。底部回転糸切り無調整、ロクロ右回転	重ね焼き痕あり
466	坏須恵器	口-12.3、底-7.2、高-3.4○完存	砂粒多く含む。還元(酸化雰囲気)、やや軟質。にぶい黄橙色	腰部張りをもち内湾のカーブをもつ口縁端部、薄手の仕上げ。底部回転糸切り、外縁部手持ちヘラケズリ調整、ロクロ右回転	重ね焼き痕あり
467	坏土師器	口-12.1、底-9.3、高-3.7○完存	砂粒多く、きめ粗。酸化、軟質。褐色	器形ゆがみあり、体部、ナデ調整。口唇部ヨコナデ、内側に丸いかえりをもつ。底部、手持ちヘラケズリ	
468	坏土師器	口-13.4、底-8.1、高-3.9○略完存	砂粒多く含む。酸化、軟質。にぶい橙色～褐色	体部中央で稜をもつ。下半部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。底部、手持ちヘラケズリ、内面、ヘラがき暗文	
469	坏須恵器	口-[12.0]、底-[7.6]、高-3.4○ $\frac{1}{2}$	砂粒多く含む。還元、やや硬質。灰白色	腰部に稜をもち、体部直してひろく。底部回転糸切り、無調整、ロクロ右回転	
470	鉢須恵器	口-[14.8]、高-(6.0)○ $\frac{1}{3}$	黒色砂粒を含む。還元、やや硬質。灰色	腰部張り、体部直してひろがる。口縁端部丸味をもつ。器肉、体上半厚味をもつ	
471	蓋須恵器	口-[16.0]、高-(4.4)○ $\frac{1}{3}$	黒色、白色砂粒を含む。還元、硬質。灰色	肩部丸味をもち、口縁端部かえり厚手で丸味あり。肩部ヘラケズリ調整後、さらにナデ調整、粗雑な仕上げ	
472	蓋須恵器	口-[17.8]、高-(3.7)○ $\frac{1}{4}$	黒色砂粒を含む。還元、硬質。灰白色	肩部稜をもち、体部外反、口縁部かえり、薄手で外側へひらきぎみ。天井部回転ヘラケズリ、ロクロ右回転	
473	瓶須恵器	胴-[23.2]、頸-[10.8]、高-(12.7)○ $\frac{1}{3}$	砂粒を含み、粗。還元、やや硬質。灰白色	体部やわらかい丸味をもち、肩部強い張りをもつ、頸部しまり弱い。体部、粘土積痕残、回転ヘラナデ調整、頸部内側に指おさえ痕あり	
476	甕土師器	口-[18.4]、高-(5.6)○口縁部 $\frac{1}{4}$	砂粒多く含む、黒色輝石を含む。酸化、軟質。橙色	頸部しまり、口縁部へくの字に外反口唇部薄手で外側に丸味をもつ。体部ヨコヘラケズリ、口頸部ヨコナデ器肉、薄く均質	
477	甕土師器	口-[22.0]、高-(7.4)○口縁部 $\frac{1}{4}$	砂粒多く、黒色輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	コの字状口縁、頸部のくびれ明確、口縁直下で外反、口縁端部外側に丸味をもつ。体部ヨコヘラケズリ、口頸部ヨコナデ。器肉、薄手、均質	

第6章 検出された遺構と遺物

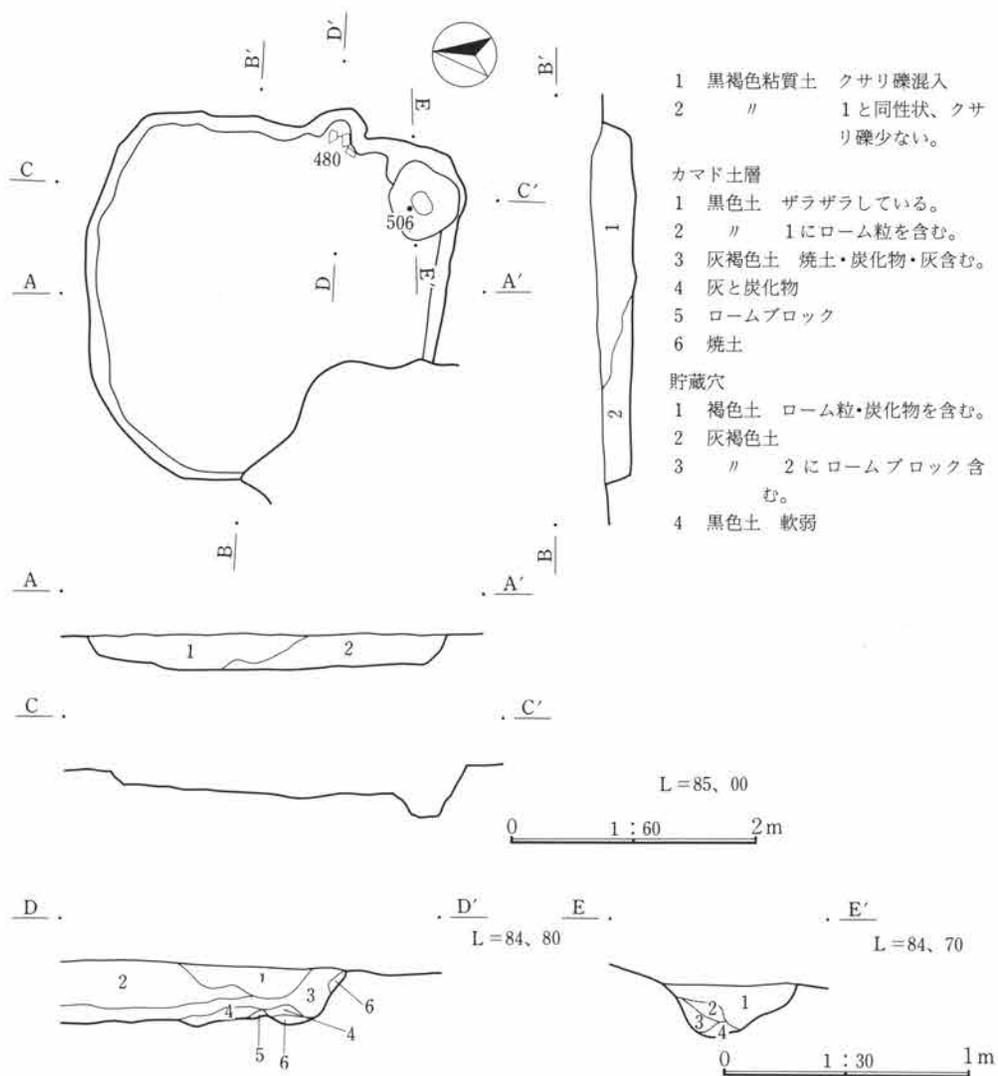
478 3区1号 住	甕 土師器	口-[19.0]、高-(6.5)○口~上胴部 $\frac{1}{2}$ 。	砂粒多く、黒色輝石を含む。酸化、軟質。赤褐色	コの字状口縁、頸部のくびれ明確、口縁直下で外反、口縁端部外側に沈線めぐる。体部ヨコヘラケズリ、口頸部ヨコナデ。器肉、薄手、均質	
479	甕 土師器	口-[16.9]、高-(5.8)○口~上胴部 $\frac{1}{2}$ 。	砂粒多く、黒色輝石を含む。酸化、軟質。赤褐色	コの字状口縁、やや立ちぎみで外反もゆるい。上胴部ヨコヘラケズリ、口~頸部ヨコナデ。器肉やや厚手	
1029 参	坏 須恵器	口-13.1、底-7.7、高-3.8○完存	砂粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	体部ゆるい内湾のカーブをもって、外側へ広がり、口縁部やや外反。端部薄手の仕上げ、底部回転糸切り無調整	堀方土壇出土
1030 参	坏 土師器	口-11.9、底-8.5、高-3.2○略完存	砂粒多く、黒色輝石を含む。酸化、軟質。橙色	体部直行し、口縁部内湾さみ、下半部ナデ、口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	堀方土壇出土

3区2号住居跡（第188・189図、第37表、図版81・82）

本住居跡は、基本土層の第6層上面で確認された。住居跡西南隅に風倒木痕が認められ、隅の壁は確認できなかった。規模は、横2.85m、縦2.92mで、方位は、E-4°-Sを測る。小規模の隅丸方形を呈する。壁高は27cmあり、なだらかな傾斜をもって立ち上がる。床面は、1号住と同様、軟弱で状態は良くない。西南隅に焼土と灰の分布が認められた。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺中央より南寄りに設置されている。残存状態が悪く、燃烧部部分のみの調査であった。貯蔵穴は、東南隅にあり、長径63cm×短径56cm×深さ20cmを測る。本住居跡内のカマド位置と貯蔵穴の位置関係は、本住居跡の時期の一般的なあり方を示している。又、西辺中央に、堀方土壇が2つ並んでいた。遺物は、出土量が少なく、土師器坏、須恵器高台付碗（身の深い器）等、数片である。時期は、出土遺物とカマドの位置関係、及び近接する住居跡のあり方から、平安時代（9世紀前葉）のものと考えている。  
（長谷部）



第188図 3区2号住居跡遺物図

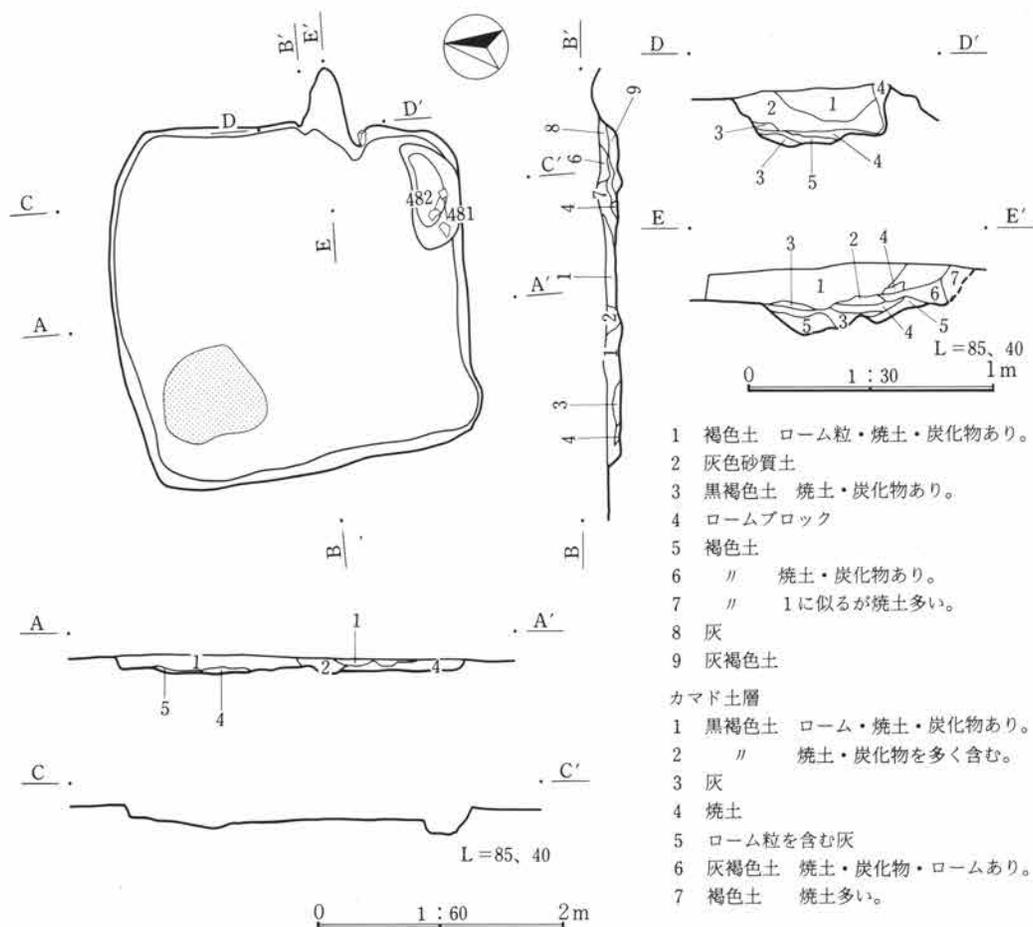


第189図 3区2号住居跡遺構図

第 37 表 3区2号住居跡出土遺物観察表

(第188図、図版 81)

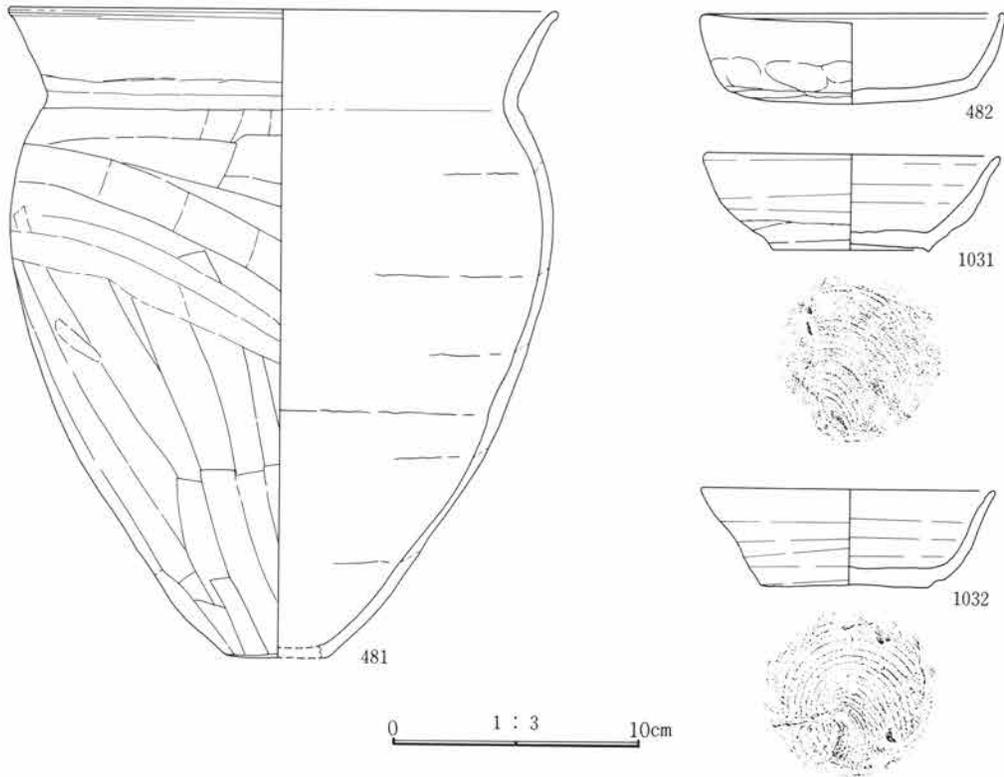
番 号	土器 種類	法量 (口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備 考
480	鉢 須恵器	口-[15.0]、高-(5.0) $\circ\frac{1}{2}$	小石粒含む。還元、硬質。灰白色	腰部で張りをもち、体部直行して広がる。口縁端部丸味をもつ	
506	鉢 須恵器	底-[9.7]、高-(4.7) $\circ\frac{1}{6}$	砂粒を含む。還元、硬質。灰白色	腰部で張りをもち、体部直行する。底部回転糸切り後、貼付高台、高台断面、外側へ張り出す台形	



第190図 3区3号住居跡遺構図

3区3号住居跡 (第190・191図、第38表、図版81・82)

本住居跡は、3区北西端に位置し、基本土層の第6層上面で確認された。規模は、横2.76m×縦2.84m、ほぼ方形を呈する。方位は、N-80°-Eを示す。壁は、深さ11cmで直立する。床面は前述の1、2号住居跡と同様、良好ではない。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺中央より、やや南寄りに設置されている。向って右側の袖部に、半截の河原石が縦に設置されていた。袖部の芯材と思われる。焚口部は凹状にくぼみを持ち、燃焼部に向って凹凸を持ちながら上る。貯蔵穴は、東南隅にあり、長径85cm×短径38cm×深さ12cmで東西に長い楕円形を呈する。北西隅に焼土と灰の分布が認められる。遺物は、出土量少なく、カマド周辺と貯蔵穴より、土師器、甕、坏が出土している。又覆土中より須恵器、坏、2点が出土したので参考資料として図示した。時期は、遺物その他により、平安時代(9世紀初頭)とする。(長谷部)

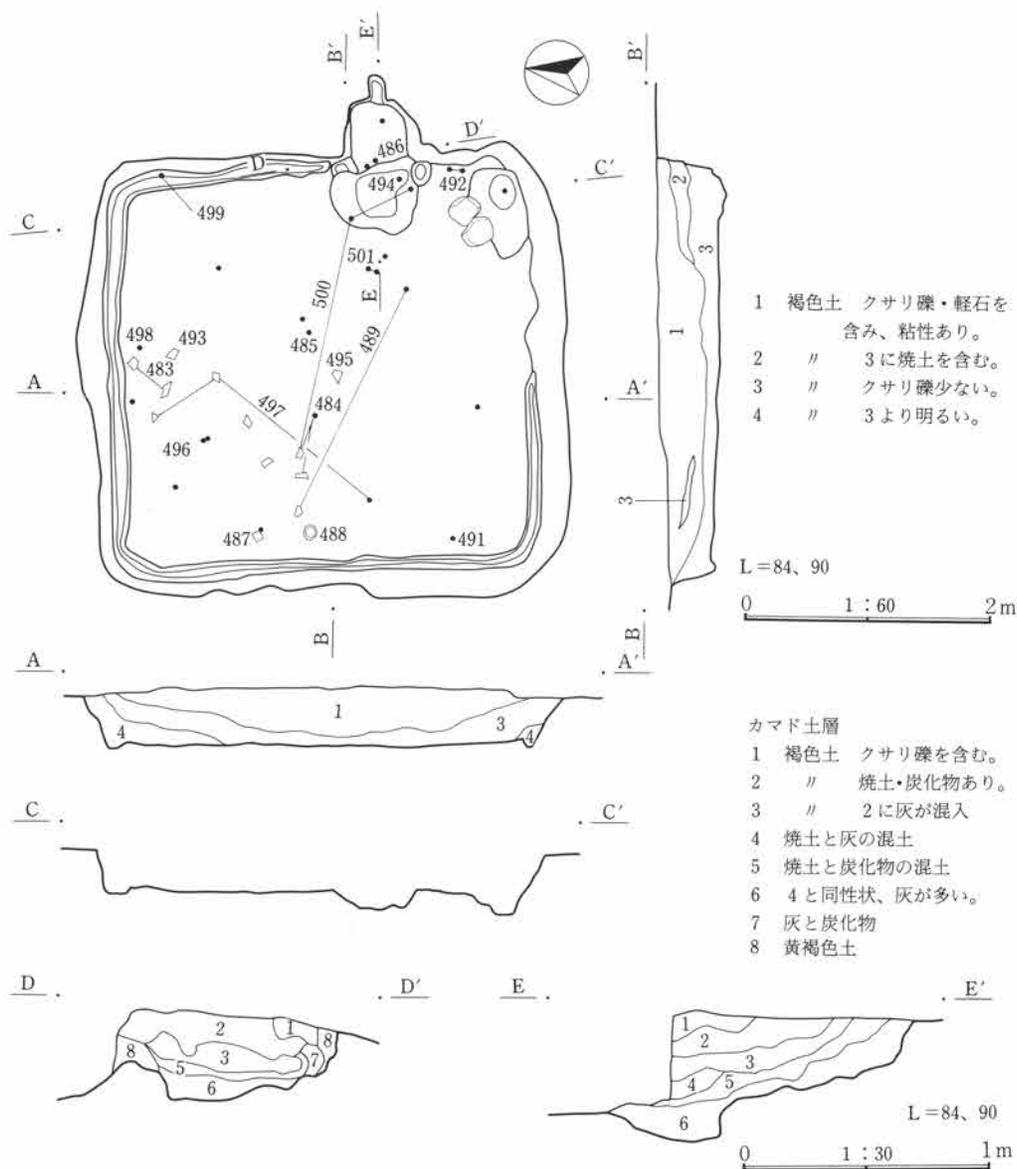


第191図 3区3号住居跡遺物図

第 38 表 3区3号住居跡出土遺物観察表

(第191図、図版 81)

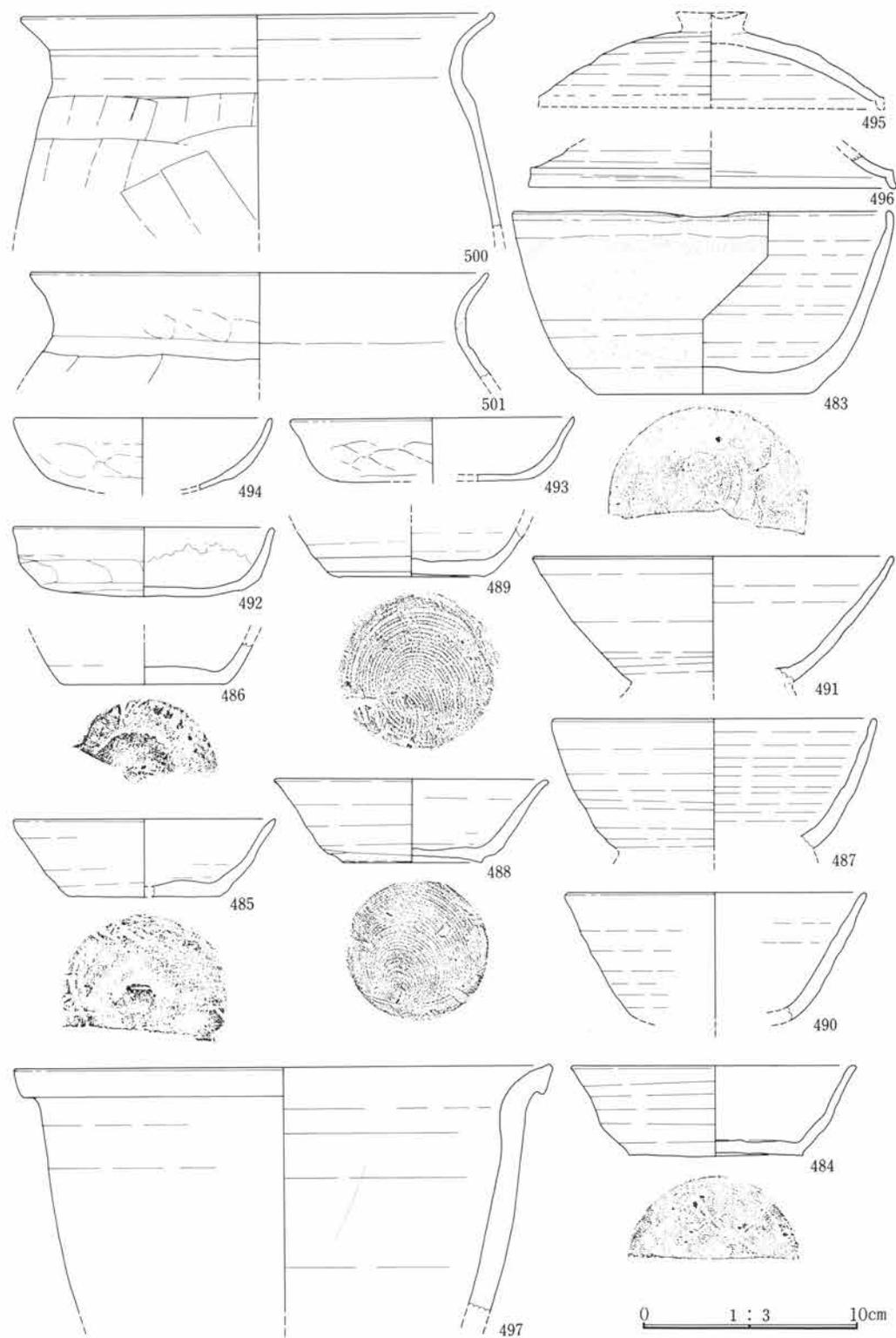
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
481	甕 土師器	口-[22.2]、底-[4.2]、高-(25.9) ○口～底 $\frac{1}{2}$	砂粒多く、黒色輝石含む。酸化、軟質。にぶい褐色	頸部くびれ、口縁外反する。口縁端部丸味をもつ。上胴部に張りをもつ。体部上半横ヘラケズリ、下半タテヘラケズリ、口頸部ヨコナデ	
482	坏 土師器	口-12.4、底-10.0 高-3.6○略完存	砂粒多く、黒石輝石含む。酸化、軟質。明赤褐色	口縁部わずかに内湾する。体部下半指ナデ、上半ヨコナデ、底部手持ちヘラケズリ	
1031 参	坏 須恵器	口-12.0、底-6.2、高-3.8○完存	白色砂粒多く、きめ粗い。還元、やや硬質。灰色	腰部、張って稜をもち、体部直行して口縁へひろがる。口縁わずかに外反、底部回転糸切り、ロクロ右回転	フク土 重ね焼き痕あり
1032 参	坏 須恵器	口-11.9、底-6.8、高-3.9○完存	白色砂粒多い。還元、硬質。灰色	腰部わずかに稜をもち、体部直行してひろがる。口縁端部丸味をもつ、底部回転糸切り、ロクロ右回転	フク土 重ね焼き痕あり



第192図 3区4号住居跡遺構図

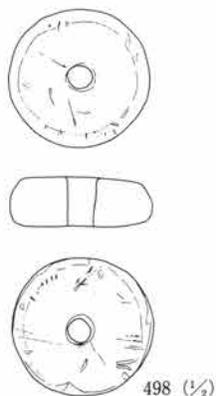
3区4号住居跡 (第192~194図、第39表、図版83・84)

本住居跡は、基本土層第6層上面で確認された。3区東側に位置し、一部拡張をして、全掘した。本住居跡は、3区の中では、良好な状態で調査されたものである。規模は、横3.50m×縦3.70mで、ほぼ方形を呈する。壁高は、48cmを測り、外側にゆるい傾斜をもってたちあがる。方位はN-83°-Eを示す。床面は、壁側がわずかに高く、中央やや凹み、良好であった。柱穴は、確認できなかった。周溝は、東南隅の部分を除いて、巾10~15cm、深さ5~7cmでめぐる。カマドは、東辺中央やや南寄りに、方形の掘り方をもって、壁外に突出して設置されていた。袖石はないが、



第193図 3区4号住居跡遺物図(1)

第6章 検出された遺構と遺物



第194図 3区4号住居跡遺物図(2)

両袖部に小穴があり、河原石を利用して袖石としたことを、うかがわせる。焚口底面と燃烧部は、段によって区別される。貯蔵穴は、東南隅に、長辺80cm×短辺40cm×深さ20cmで方形である。すぐ北側に、板状の河原石を2個据えた状態であった。遺物は、土師器甕、坏、須恵器蓋、坏、碗、鉢、甑がある。加工痕のある角閃石安山岩も覆土中より出土している。カマドに使用されたものであろう。時期は、平安時代(9世紀前葉)と考えている。(外山)

第39表 3区4号住居跡出土遺物観察表

(第193・194図、図版 83・84)

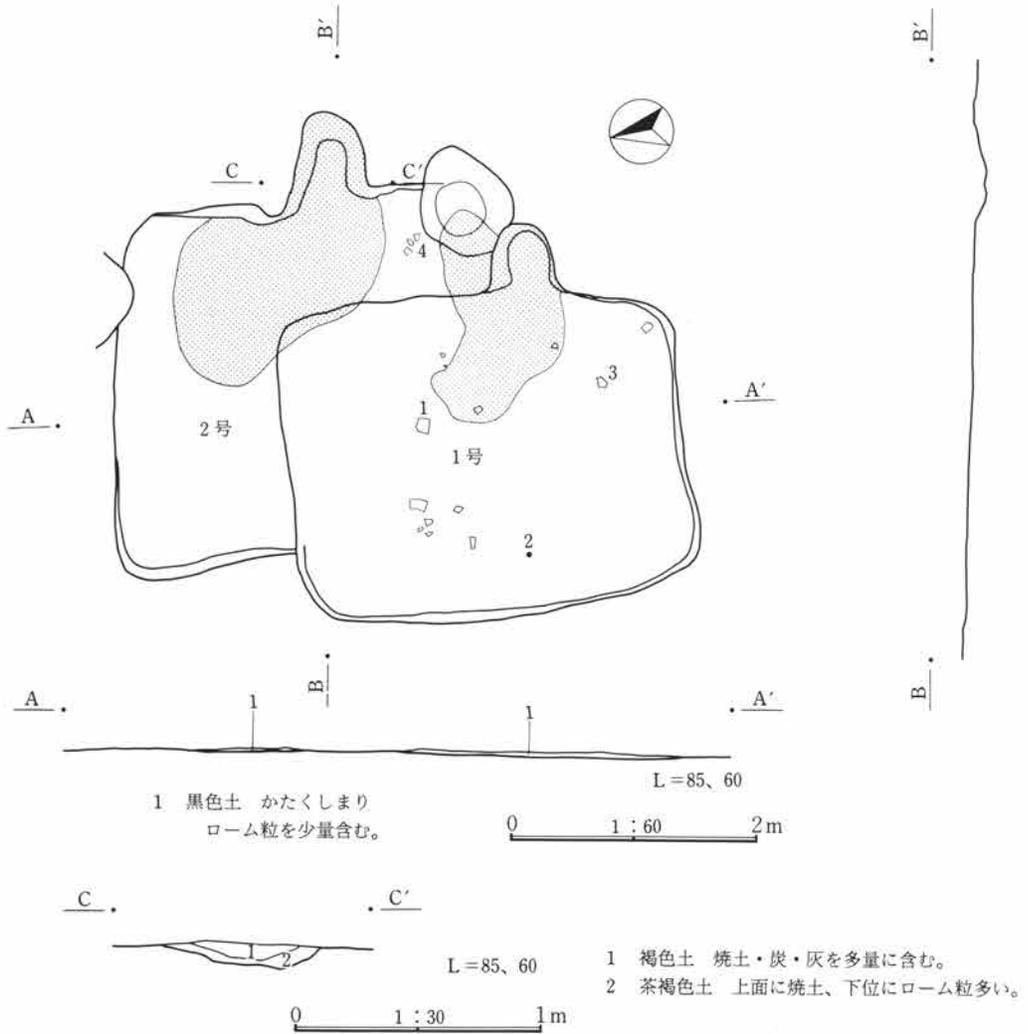
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
483	鉢 須恵器	口-[17.7]、底-[9.6]、高-8.4 ○ $\frac{1}{2}$	白色砂粒を含む、黒色斑文あり。還元、硬質。灰色	体部ゆるやかな内湾のカーブをもってたちあがる。口縁部ツマミナデによる外反あり、又、一部分ツマミ込みあり。底部回転糸切り後、回転ヘラケズリ調整	秋間産か
484	坏 須恵器	口-[13.1]、底-[8.1]、高-4.1 ○ $\frac{1}{2}$	白色砂粒を含む。還元、硬質。灰~灰黒色	腰部、やや張りを持つ。口縁端部丸味あり。底部回転ヘラ切り	重ね焼き痕あり
485	坏 須恵器	口-[12.2]、底-[7.2]、高-3.6 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒を多く含む。還元、やや硬質。灰~灰白色	体部直直して広がる。底部回転ヘラ切り、ロクロ右回転	重ね焼き痕あり
486	坏 須恵器	底-[7.6]、高-(2.0) 〇底部 $\frac{1}{2}$	砂粒を多く含む、粗。還元、やや硬質。灰色	体部直線的にひろがる。底部回転ヘラ切り、底部縁辺スレあり	
487	鉢 須恵器	口-[14.7]、高(5.9) 〇 $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。還元、硬質。灰色	体部、ゆるい内湾のカーブをもつ身の深い器。器内均質。ロクロ右回転	484と胎土、焼成、近似する
488	坏 須恵器	口-[12.6]、底-6.5、高-3.8 〇 $\frac{1}{2}$	砂粒を含むが、細密。還元、硬質。灰色	腰部で稜をもち、体部直線的にひろがり、口縁部わずかに外反、底部回転糸切り、無調整。ロクロ右回転	
489	坏 須恵器	底-6.8、高-1.9 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒を多く含む。還元、やや硬質。灰色	腰部、やや張りを持つ。底部回転糸切り、無調整。ロクロ右回転	
490	鉢 須恵器	口-[14.0]、高-(5.9) 〇 $\frac{1}{2}$	砂粒多く、粗。還元、やや硬質。灰白色	体部、ゆるい内湾のカーブをもち、口縁部ひろがる。口縁わずかに外反、端部薄手の仕上げ	高台付か

491 3区4号住	鉢 須恵器	口-[16.8]、高(5.8)○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含むが、細密。還元、やや硬質。灰色	体部直線的にひろがる。口縁部ツマミナデによるゆるい外反。器肉、薄手、均質	高台付か
492	坏 土師器	口-[12.1]、底-[9.7]、高-2.8○ $\frac{1}{2}$	砂粒と黒色輝石を多く含む。酸化、軟質。赤褐色	体部中央で内湾して、口縁部たちあがる。体下半ナデ、上半ヨコナデ、底部、手持ちヘラケズリ	内面、炭化物付着
493	坏 土師器	口-[13.2]、高-(2.9)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	体下半部で内湾し口縁部へひろがる。口縁部直下でくびれをもつ。体下半部ナデ、上半ヨコナデ、底部手持ちヘラケズリ	
494	坏 土師器	口-[12.0]、高-(3.3)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。にぶい黄褐色	体部ゆるい内湾のカーブをもつ。体下半部ヘラナデ、上半部ヨコナデ、底部手持ちヘラケズリ	
495	蓋 須恵器	口-[16.0]、高-(2.9)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、小石を含む。還元、やや硬質。灰色	肩部の張り強く、身の高い器形。天井部～肩部、回転ヘラケズリ調整、ロクロ右回転	重ね焼き痕あり
496	蓋 須恵器	口-[17.0]、高-(1.5)○ $\frac{1}{4}$	白色、黒色砂粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	身の高い器形。口縁部かえり、やや外側へひらく。口縁部端部、丸味をもつ	
497	甗(?) 須恵器	口-[25.0]、高-(11.3)○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	体部、わずかに内湾のカーブを持って、鉢状に口縁部へたちあがる。口縁部外反、外稜をもつ。回転ナデ調整	口縁部～体部の形状から、甗と考えている
498	紡錘車 (滑石製)	径-3.9、厚-1.3、孔-0.8○完存	灰～灰黒色	側面、丸味をもつ、円盤状の作り。上下両面、放射状刻線あり	
500	甗 土師器	口-[22.0]、高-(9.8)○口～胴 $\frac{1}{4}$	砂粒多く、黒色輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	コの字状口縁の甗。頸部くびれてたちあがり、口縁部外反する。口縁部内側に丸味をもつてかえりあり。上胴部ヨコヘラケズリ。器肉、均質	
501	甗 土師器	口-[21.2]、高-(5.6)○口～胴 $\frac{1}{4}$	砂粒多く、黒色輝石を含む。酸化、軟質。にぶい褐色	コの字状口縁の甗。頸部くびれて立ちあがる。口縁部外反、胴部丸味を持つ、上胴部ヨコヘラケズリ。器肉均質	

## 4区1号、2号住居跡 (第195・196図、第40表、図版85)

両住居跡とも基本土層第5層上面で確認された。1号住居跡は、2号住居跡と棟方向を同じくして、その南西半に重複し、2号住居跡を切っている。

1号住居跡の規模は、北辺2.44m、東辺3.22mの南北にやや長い隅丸方形の平面形をとる。方位は北辺でE-8°-Sである。壁は確認高5cm程である。床面はローム層中に構成されるが、北西部に1.5×1.2m、深さ20cm程の皿状の凹みがあり、この部分は貼床される。柱穴、周溝は認められない。カマドは東壁の南寄りに構築され、周辺には広く焼土が認められる。遺物は須恵器の羽釜、

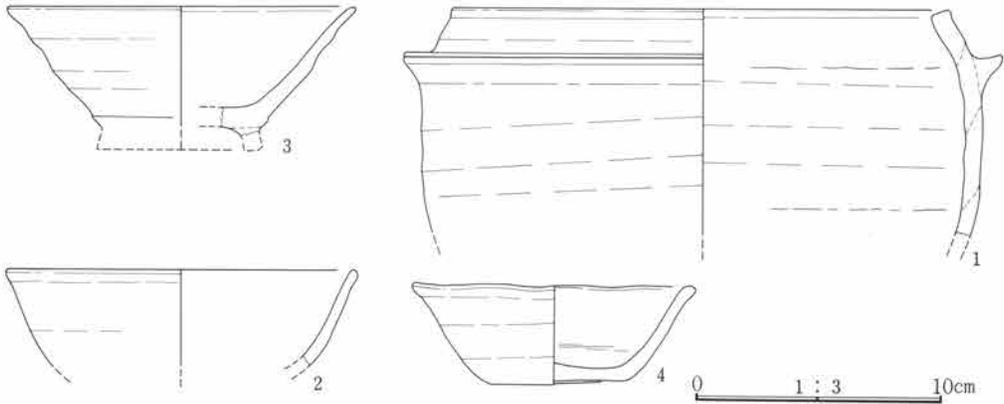


第195図 4区1号、2号住居跡遺構図

塀、高台付塀などがあり、皿状堀方内からの破片出土が多い。

2号住居跡は北辺が2.92mある。他の3辺は1号住居跡に切られていて不明。東辺は3mまで認められる。隅丸方形の平面形で、ほぼ正方形に近いプランと思われる。東辺ほぼ中央にカマドが付設され、カマドからの焼土は住居中央にまで広がる。床面レベルは1号とほぼ同じである。北西隅には柱穴が1ヶ所認められた。遺物は、カマドの右手前に土師器皿が出土したほか出土量は概して少ない。時期は出土遺物から見て1号が11世紀初頭、2号は10世紀後葉と考えられる。

(桜場)



第196図 4区1号、2号住居跡遺物図

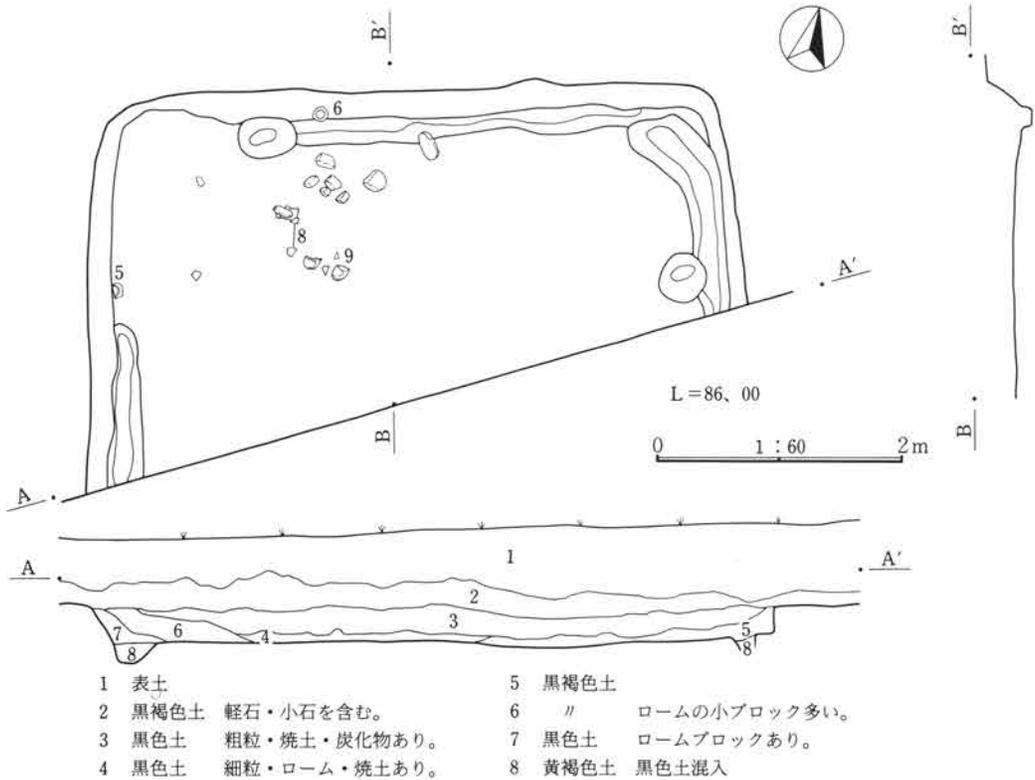
第40表 4区1号、2号住居跡出土遺物観察表

(第196図、図版 85)

番 号	土器種 種	法量 (口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備 考
1 4区1号 住	羽 釜	□-[20.2]、高一 (9.0) ○ $\frac{1}{6}$	砂粒多く含む。酸化、やや硬質。暗褐色	口縁内傾、端部平坦面有り。鈔断面上向きの三角、体部粘土積痕有。上胴ロクロナデ、下胴ヘラケズリ調整	床直 外面、スス附着
2	碗 須恵器	□-[14.2]、高一 (3.9) ○ $\frac{1}{6}$	石粒混入。酸化、軟質。橙色	体部内湾のカーブをもつ。口唇部丸味有り。ロクロ調整	床直
3	坏 須恵器	□-[14.0]、高一 (5.1) ○ $\frac{1}{6}$	砂粒含む。酸化、やや硬質。橙色	体部直行して外反。口唇部薄手の仕上げ。体部ロクロ調整。貼付高台	床直 赤焼き
4 4区2号 住	坏 須恵器	□-11.4、底-5.5、高一4.0○完存	砂粒含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	体部直行し、口縁部、外反、端部は丸味をもつ。底部回転糸切り、無調整、ロクロ右回転	内面、炭化物附着→灯明皿 底部円盤別作り

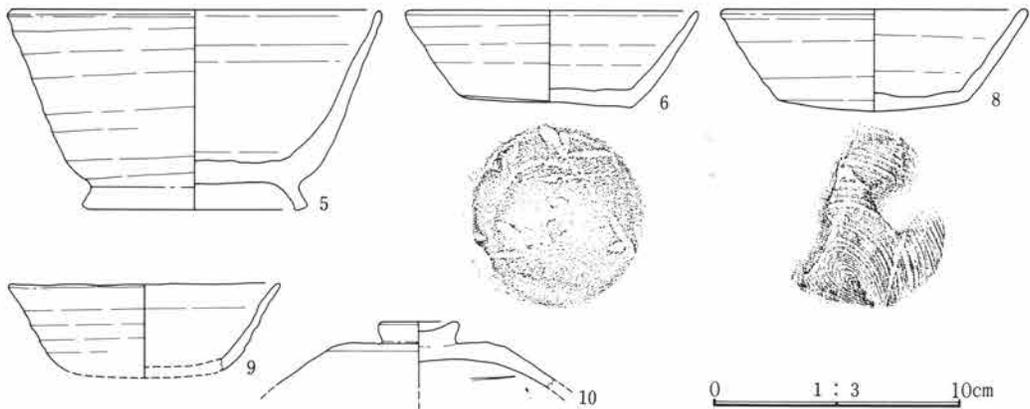
## 4区3号住居跡 (第197・198図、第41表、図版85・86・87)

北半を確認しただけで、南半は道路下となる。第4層上面で確認され、その規模は北辺5.30m、東辺1.18m、西辺2.90mである。平面形は不明であるが、隅の丸みは大きく、各辺は直線的である。方位は北辺でN-75°-Wを示す。覆土は自然に埋没した様相を示し、西北方向からの流れ込みが目立つ。壁はほぼ直に立ち上がり、20~28cmの高さが確認された。床面はほぼ平坦で、中央部は固く締っていた。床面は、中央の一部を除き、他の部分は全面が貼床され、床面下には堀方がある。堀方は、周壁に沿って溝状に一段深く掘り込まれて、中央部の掘り込みは浅く、起伏がある。また、中央やや東辺寄りの床面下には、楕円形を呈した、規模1.30×0.95m、深さ34cmの落ち込みがある。柱穴はなく、本住居跡を切る柱穴2本が確認された。周溝は西北隅周辺を除く他の部分では全周し、幅12~30cm、深さ平均18cmで、断面はU字状をなしていた。カマド、貯蔵穴等の施



第197図 4区3号住居跡遺構図

設は確認されなかった。遺物は、西北隅寄りの床面及び床面近くに殆ど集中し、坏、碗、蓋等の完形や小片9点が出土した。他に覆土中や堀方から小破片が少量出土した。本住居跡の時期は、平安時代（8世紀末葉）と考えられる。（下城）



第198図 4区3号住居跡遺物図

第 41 表 4 区 3 号住居跡出土遺物観察表

(第198図、図版 85・87)

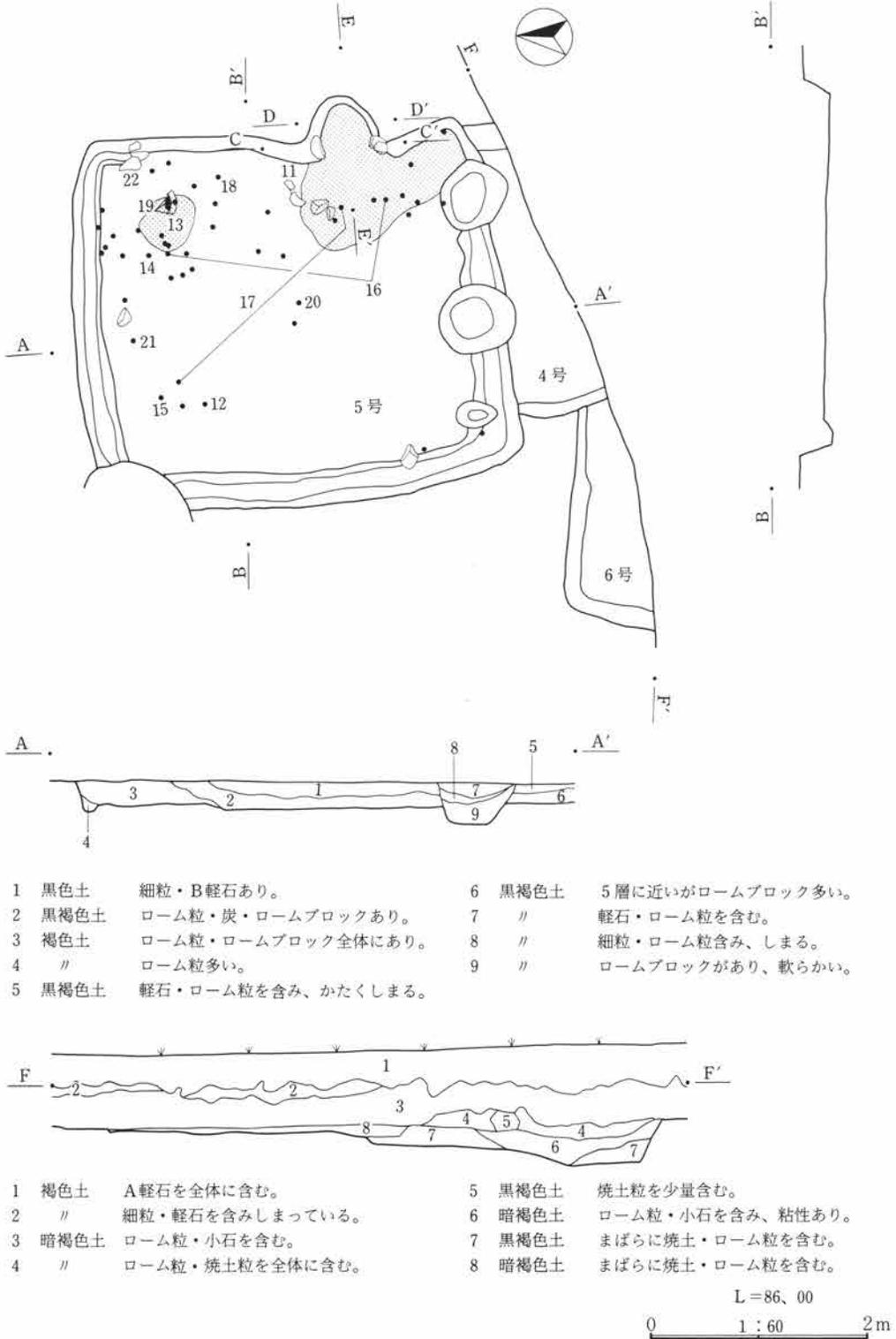
番 号	土 器 種 類	法量（口径・底径・器高）遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形 ・ 技 法 の 特 徴	備 考
5	鉢 須恵器	口-[15.2]、底-[9.0]、高-8.0 ○ $\frac{1}{3}$	砂粒を含む。還元、硬質。灰色	体部直行、深めの器。底部、回転ヘラ切り、貼付高台、高台断面、外側へひらく台形、ロクロ右回転	床よりやや上 体部、粘土積痕 残る
6	坏 須恵器	口-11.8、底-7.1、高-3.8○完存	きめの細かい砂粒含む。還元、やや硬質。灰白色	体部直行。底部、回転ヘラ切り、無調整、底部外縁、スレあり、ロクロ右回転	床直 重ね焼き痕あり
8	坏 須恵器	口-[12.4]、底-[7.6]、高-4.1 ○ $\frac{3}{4}$	砂粒、白色石粒含む。還元、やや硬質。灰色	体部直行して外側へひらく。口縁端部、丸味をもつ。底部、回転糸切りロクロ右回転	床直 重ね焼き痕あり
9	坏 須恵器	口-[11.0]、底-[6.4]、高-(3.5)○ $\frac{1}{3}$	砂粒、黒色斑文あり。還元、硬質。灰黄褐色～灰色	体部やや丸味をもつ、小型の器。器肉、薄手。ロクロナデ調整、焼きゆがみあり	床直 秋間産か
10	蓋 須恵器	つまみ径-3.2、高-(2.5)	白色砂粒、黒色斑文あり。還元、硬質。灰色	天井部切り離し後、回転ヘラケズリ、ボタン状つまみ貼付。身の深い蓋と思われる。ロクロ右回転	壁際 重ね焼き痕あり

## 4 区 4 号住居跡（第199・201・202図、第42表）

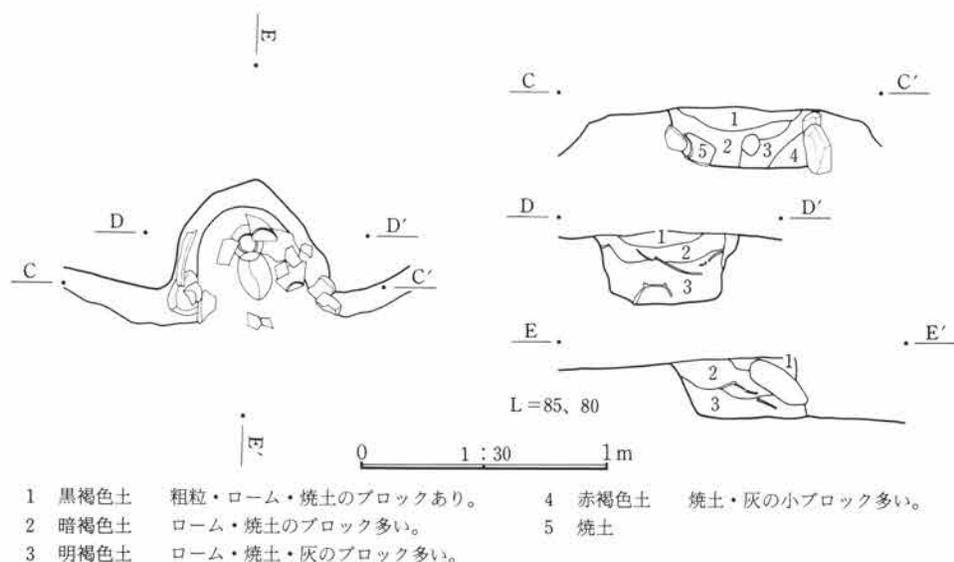
基本土層の第4層で確認された。5号、6号住居跡を切り、3軒の中で最も新しい。北半の一部を確認しただけで、その大半は道路下となる。現状の規模は、東西2.57m、南北1.56mで、平面形は不明である。方位は北辺でN-85°-Eを示す。覆土は自然に埋没した様相を示している。壁は平均14cm程の高さが確認され、やや斜めに立ち上がっている。床面は平坦であるが、あまり固く締っていない。柱穴、周溝はなく、カマド、貯蔵穴等の施設も確認されなかった。遺物は、覆土中より高台付碗、糸切碗、小型甕の小破片が少量出土しただけである。本住居跡の時期は明確ではないが、平安時代（10世紀～11世紀）と思われる。（下城）

## 4 区 5 号住居跡（第199～202図、第42表、図版86・87）

基本土層の第4層で確認された。4号住居跡、4号土壇に切られ、南辺の一部も2本の柱穴によって切られている。規模は北辺3.36m、西辺3.94mで、隅丸の方形に近い形状を示している。方位は北辺でN-85°-Eを示す。覆土は自然埋没した様相を示している。壁は平均23cmの高さが確認され、ほぼ直に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、カマド前から中央部にかけて、非常に固く締っている。カマド前から東南隅にかけての床面上には、カマドから流出した焼土と灰が薄く堆積しており、東北隅寄りの床面上にも焼土が薄く堆積していた。なお、床面は全面が厚さ4cm程貼床され、やや起伏のある堀方を持っている。柱穴はなく、周溝は東南隅から東辺にかけては存在せ



第199図 4区4号、5号、6号住居跡遺構図

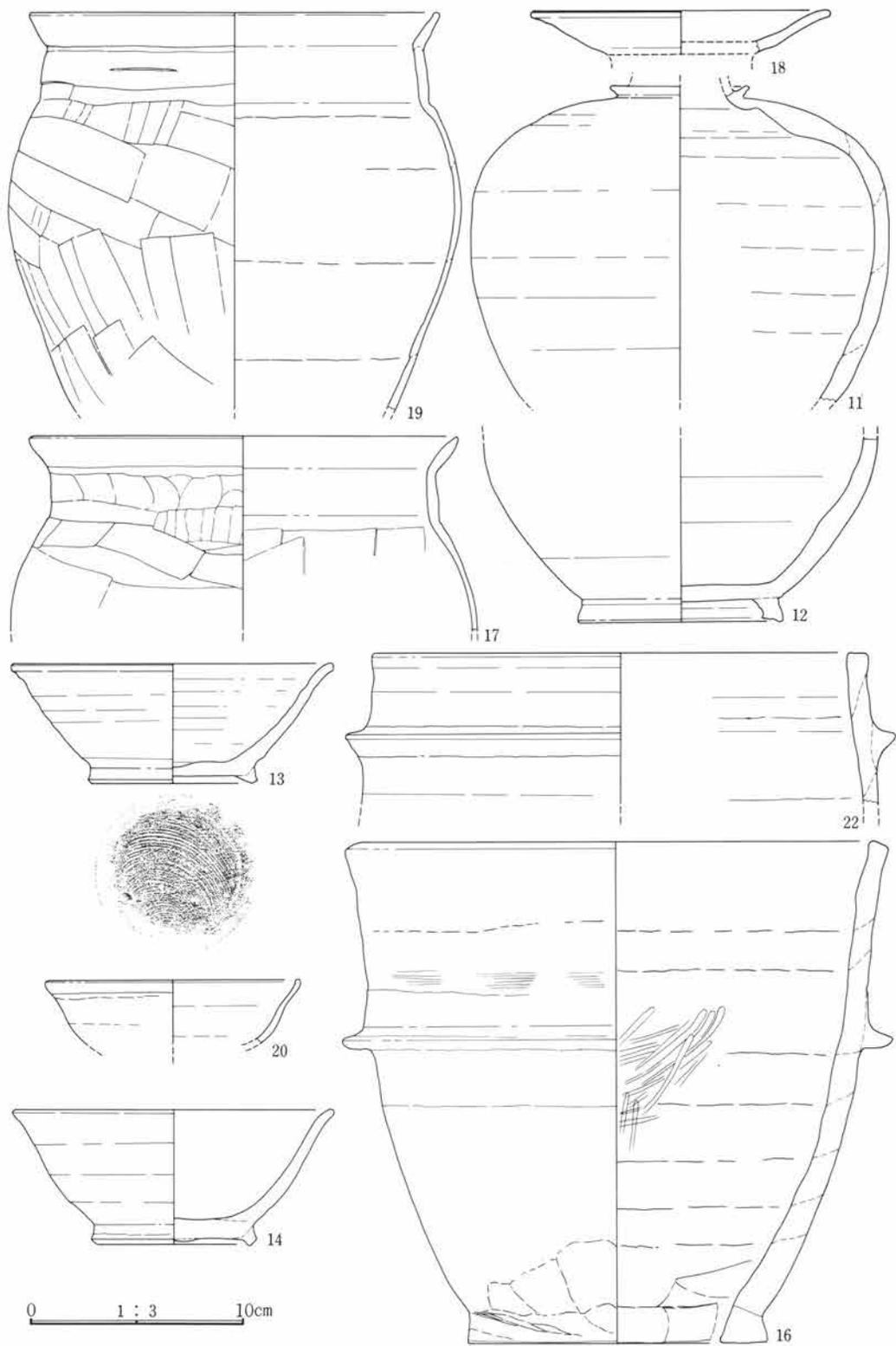


第200図 4区5号住居跡カマド図

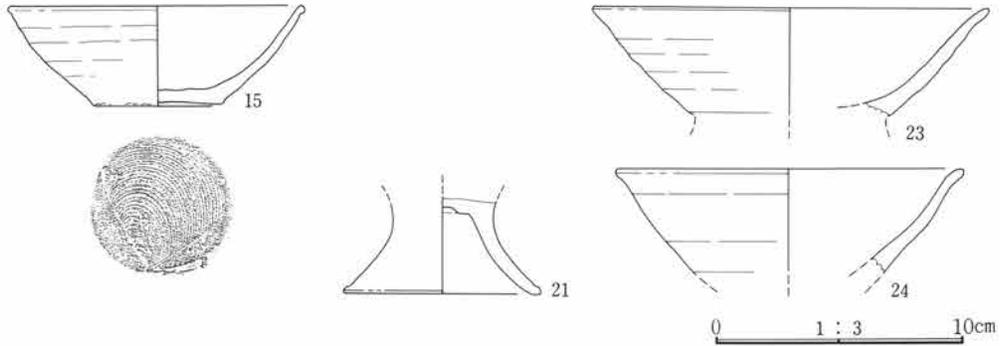
ず、他の部分では全周している。周溝は幅10～28cmでやや広く、深さは5～10cmで、断面形はU字形を呈している。カマドは東辺中央やや南寄りに位置し、半円状に張り出している。焚口幅は56cm、奥行58cmである。焚口の両袖には砂岩と安山岩の円礫による側石が据えられている。覆土上部には角閃石安山岩の円礫があり、カマドの用材として使用されたと考えられる。カマド内には焼土や灰が堆積しており、周壁が特に焼けている。堀方は、燃焼部底面中央下部にむかって、搦鉢状に掘り込まれており、ロームの粗いブロックが詰められている。貯蔵穴はない。遺物はカマド内とカマド前、東北隅の焼土周辺に集中し、カマド内からは土師器甕、須恵器壺、高台付埴等の大きな破片が多く出土し、カマド前には羽釜、甕、東北隅には土師器甕、埴の大小の破片がある。本住居跡の時期は、平安時代（10世紀初頭）と考えられる。（下城）

#### 4区6号住居跡（第199・201・202図、第42表）

基本土層の第4層で4号に切られて確認された。東北隅寄りの一部を確認しただけで、殆どが道路下となり、平面形や付属施設等は不明である。現状の規模は東西2.50m、南北0.85mで、方位は北辺でE-1°-Sを示す。覆土は上半がやや乱れているが、自然埋没した様相を示す。壁は35cmの高さが確認され、やや斜めに立ち上がっている。床面は平坦だが、あまり締っていない。西北隅は床面下が落ち込んでいる。遺物は覆土中より埴の小破片が数点出土しただけで、本住居跡の時期は明確ではないが、9世紀後葉の可能性がある。（下城）



第201図 4区4号、5号、6号住居跡遺物図(1)



第202図 4区4号、5号、6号住居跡遺物図(2)

第42表 4区4号、5号、6号住居跡出土遺物観察表

(第201・202図、図版 87)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
11	壺 須恵器	胴-[19.6]、頸-[4.9]、高一(14.5)○ $\frac{1}{2}$	白色砂粒を多く含む。還元、硬質。灰色	肩部張りをもち、頸部しまり強い、頸部凸帯めぐる。体部内面、粘土積痕残、ロクロナデ調整	床直
12	壺 須恵器	底-[9.5]、高一(8.4)○ 胴~底 $\frac{1}{2}$	白色砂粒を多く含む。還元、硬質。灰色	下胴部ゆるい内湾のカーブをもつ。底部、切り離した後、貼付高台、高台断面外側へひらく台形、粘土積痕を残す	カマド出土 11と同一個体か
13	碗 須恵器	口-15.0、底-7.8、高一5.5○略完存	砂粒を多く含む。還元(焼き)、やや硬質。黒色	体部、ゆるい内湾のカーブをもつ。口縁部わずかに外反、底部回転糸切り、高台は底部外側に貼付。ロクロ右回転	カマド出土 底部円盤別作りか?
14	鉢 須恵器	口-[15.0]、底-[7.6]、高一6.2○ $\frac{1}{2}$	褐色砂粒多く含む。還元、やや硬質。灰白色	腰部に張りを持ち、わずかに稜を持つ。口縁まで直線的に広がる。底部器肉、厚手、高台部貼付、高台断面三日月状の台形。体部器肉、均質	床直、底部円盤別作りか?高台部分、灰釉碗を意識か
15	坏 須恵器	口-[12.0]、底-5.4、高一4.0○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。還元、やや硬質。灰黄色	体部直線的にひろがり、体部中央で内湾のカーブとなる。口縁部つまみナデによる、わずかな外反、口縁端部丸味をもつ。底部回転糸切り。ロクロ右回転	カマド出土 内面付着物あり
16	甗 須恵器	口-[25.4]、底-[14.0]、高一23.1○ $\frac{1}{2}$	砂粒多く、黒色輝石を含む。酸化、やや硬質。橙色	鉢状にひろく器形。口縁端部平担口~罎の間、ひろい、罎断面上むきの三角、底部、台形に肥厚、スレあり。内底部、ヘラケズリ。罎、貼付体部、粘土積痕残、ヨコナデ	カマド出土
17	甗 土師器	口-[20.0]、高一(9.0)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。赤褐色	コの字状口縁、上胴部に張りをもち、頸部くびれてたちあがり、口縁直下で大きく外反する。口縁端部丸味をもつ。体部ヨコヘラケズリ	カマド出土

第6章 検出された遺構と遺物

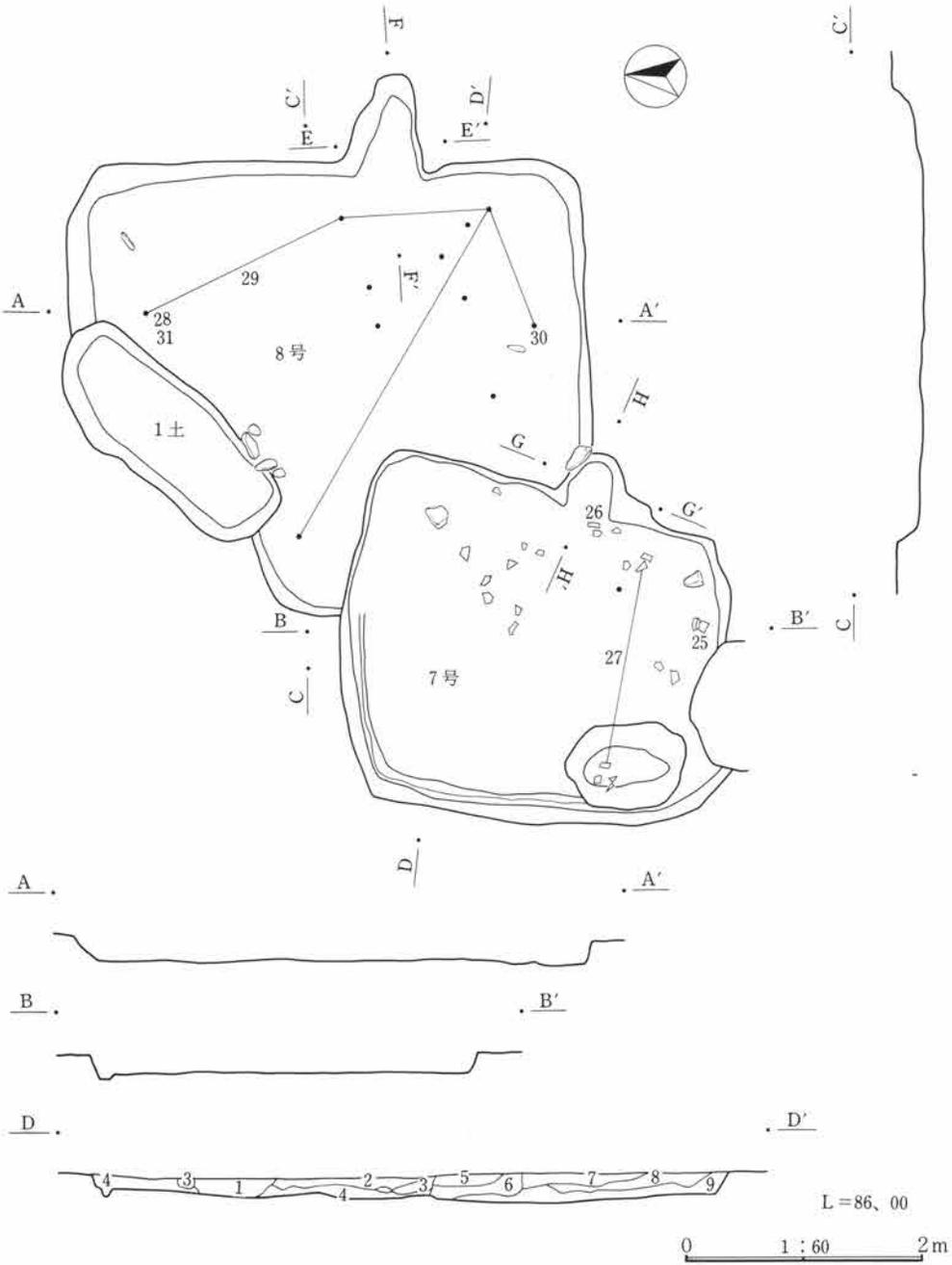
18 4区4・ 5・6号住	皿 須恵器	口-[14.0]、底 -[6.8]、高一(2.0) ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、黒色輝石を含む。 酸化、やや軟質。にぶい 橙色	身浅く、口縁へひろがり、わずかに 外反する。口縁端部、角ばる。ロク ロ使用の調整、高台付と思われる	
19	甕 土師器	口-[19.2]、高 -(18.4)○ $\frac{1}{2}$	砂粒多く含む。酸化、軟 質。にぶい橙色	コの字状口縁、上胴部に張りもち、 頸部でくびれ、内傾ぎみにたちあが り、口縁部強く外反する。上胴ヨコ ヘラケズリ、下胴タテヘラケズリ。 器肉、薄手、均質	
20	坏 土師器	口-[12.0]、高一 (3.0)○小片	砂粒多く含む。酸化、軟 質。明赤褐色	体部内湾してひろがり、口縁部、く びれて、さらに内湾する。口縁端部 内側に丸味をもつ。体部ナデ	床直
21	甕 土師器	底-[8.0]、高 -(3.8)○脚のみ	砂粒を多く含む。酸化、 軟質。にぶい褐色	小型台付甕の、八の字にひろく脚台 部のみ、端部丸味をもち、器肉、均 質。ヨコナデ調整	床直
22	羽 釜	口-[23.2]、高 -(7.0)○ $\frac{1}{6}$	砂粒を多く含む。酸化、 硬質。淡赤橙色	口縁直直し、口縁端部、平坦、鋸断 面丸味のある三角、ロクロ調整	カマド前出土
23 4区6号 住 参	碗 須恵器	口-[16.0]、高 -(4.3)○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。酸化、やや 硬質。橙色	体部わずかに内湾してひろがり、口 縁部外反、端部、薄手の仕上げ、ロ クロ調整	フク土 底部円盤別作り (内面の糸切り スタンプ)
24 4区6号 住 参	碗 須恵器	口-[14.0]、高一 (4.2)○ $\frac{1}{2}$	白色、黒色砂粒を含む。 酸化、やや硬質。にぶい 赤褐色	体部上半で内湾し、口縁部ゆるく外 反、端部角ばる。ロクロナデ調整。 内面黒色	重ね焼きか

4区7号、8号住居跡(第203~205図、第43表、図版88)

両住居跡とも基本土層第4層で確認された。7号住居跡の東北部と8号住居跡の南西部が重複し、7号が新しい。床面は8号住居跡の方が低いため、7号住居跡の8号と重複する部分は貼床になる。

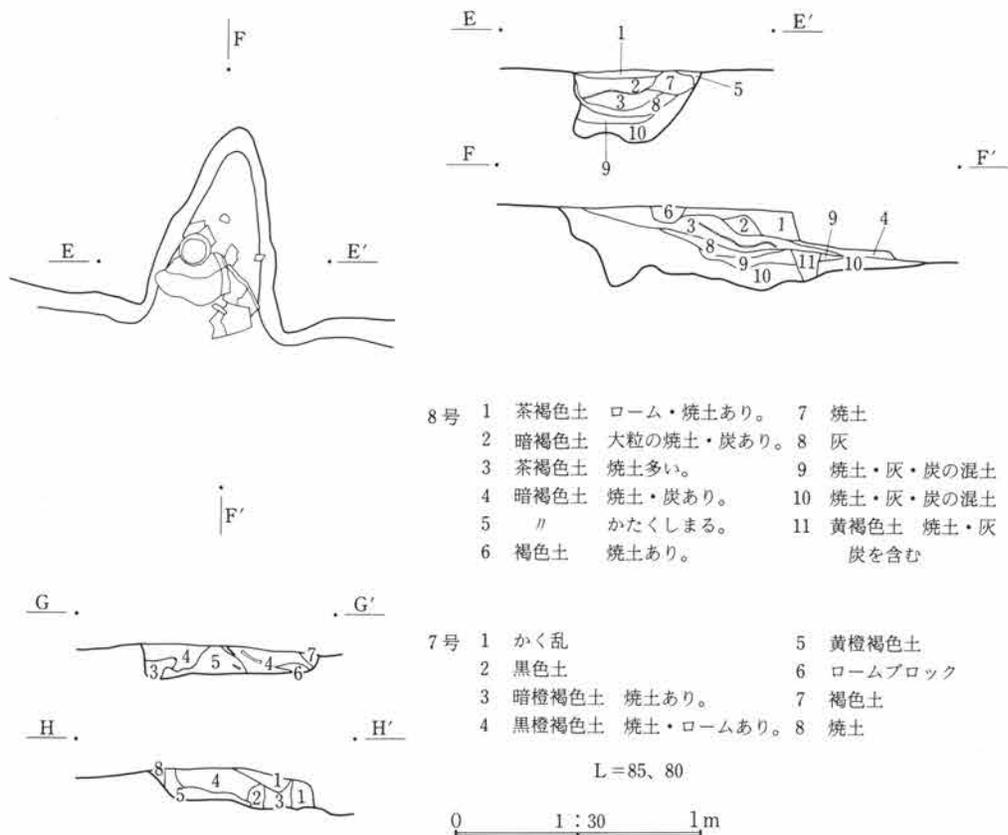
7号住居跡は、北辺を底辺とする台形状を呈する。東辺2.90m、西辺2.95m、南辺2.40mの規模で、南辺中央を4号土壇が切る。方位は南辺でE-5°-Sである。覆土は暗褐色土を主体とする。壁体はローム土のみの確認で高さは15cm内外である。床面はローム層で、南西隅に不整形のピットがあるほか柱穴、周溝は認められない。カマドは東壁南寄りにあるが、焼け具合から見てあまり使用された痕跡は認められない。遺物は、羽釜、高台付碗、灰釉碗などがあり、カマドのある東半部に多く出土した。

8号住居跡は7号とやや軸線をずらし、カマドのつく東辺でN-14°-Eを測る。平面形は西北隅部が欠けた変則五角形状を呈すが、同部に新しい土壇が重複するため、形状は明らかでない。東辺4.30m、南辺3.75mの規模である。東辺南寄りにカマドが外方に突き出して付設される。カマド内から土師器長甕・坏が一括出土しているほか、床面上から甑が出土している。出土遺物から7号住居跡は11世紀中葉、8号は8世紀末葉の時期と考えられる。(桜場)



- |    |   |       |                |    |   |      |                  |
|----|---|-------|----------------|----|---|------|------------------|
| 7号 | 1 | 暗褐色土  | ローム粒含まず。       | 8号 | 5 | 暗褐色土 | ローム粒少量含み、軟質      |
|    | 2 | 暗褐色土  | ローム粒含まず。       |    | 6 | //   | 軽石多い、砂質          |
|    | 3 | 暗黒褐色土 |                |    | 7 | //   | ローム粒・黒土ブロックあり。   |
|    | 4 | 暗褐色土  | ローム粒あり、しまっている。 |    | 8 | 茶褐色土 | ロームブロック多い、焼土粒あり。 |
|    |   |       |                |    | 9 | 黒褐色土 | 焼土粒多い、ローム粒少量あり。  |

第203図 4区7号、8号住居跡遺構図

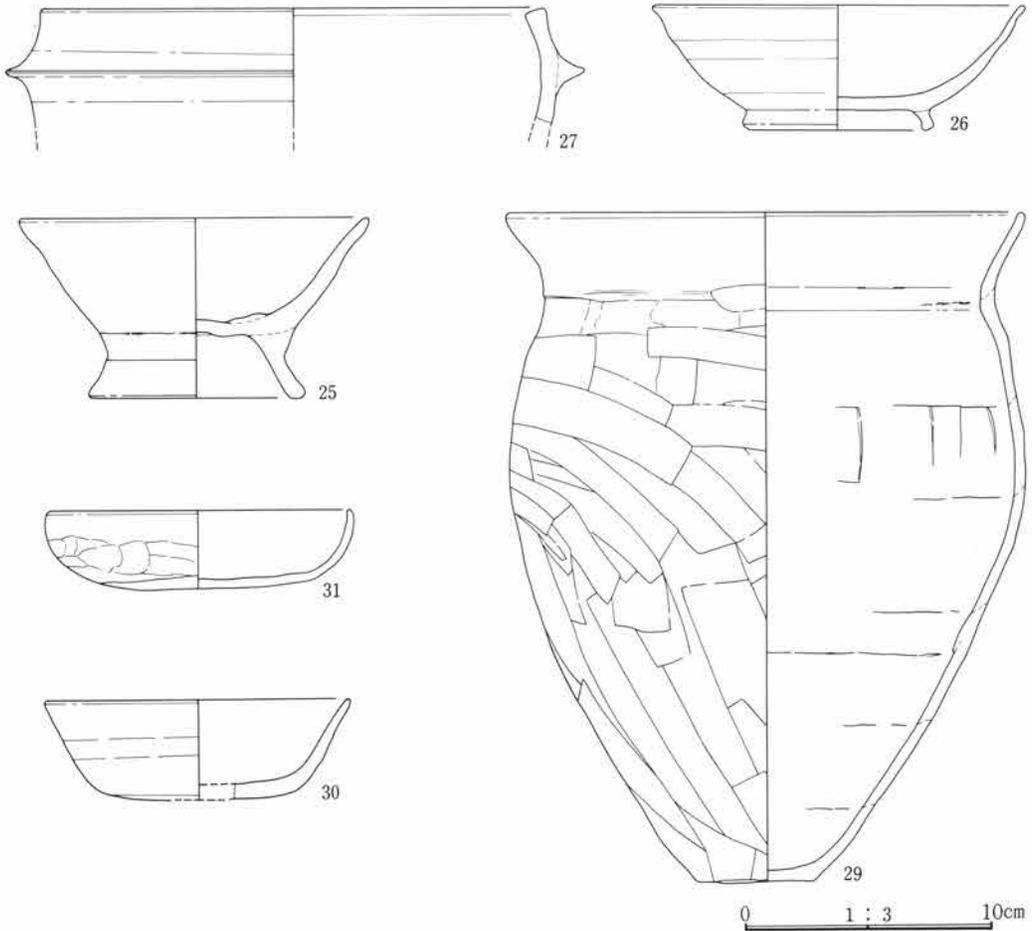


第204図 4区7号、8号住居跡カマド図

第43表 4区7号、8号住居跡出土遺物観察表

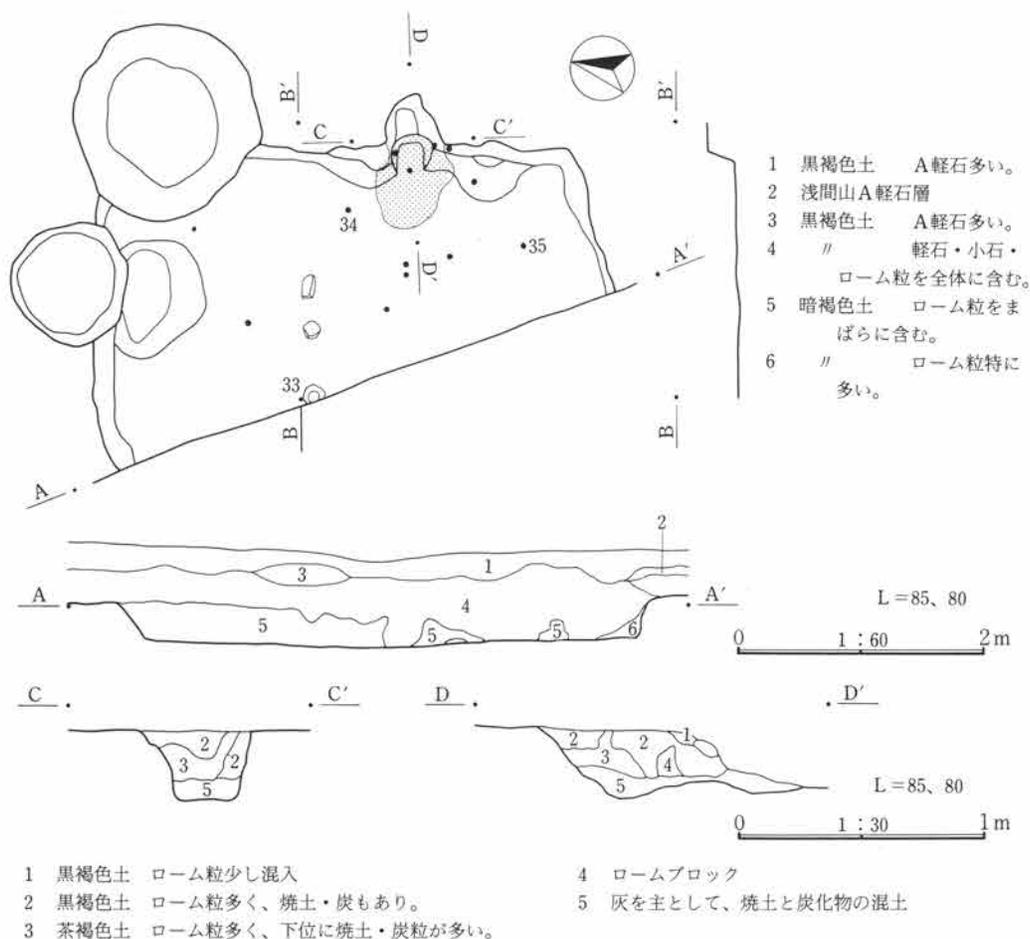
(第205図、図版 88)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
25 4区7号住	碗 須恵器	口-[14.2]、底-[7.8]、高-7.2 ○ $\frac{3}{4}$	黒色輝石を多く含む。酸化、やや硬質。にぶい褐色	高足高台付碗。体部ゆるい内湾のカーブをもつ、口縁、わずかに外反、底部回転糸切り、貼付高台。ハの字にひろがる	床直。口縁端部古い欠けあり。スス付着、灯明皿に転用か
26	碗 灰釉陶器	口-[15.0]、底-[7.4]、高-5.0 ○ $\frac{1}{2}$	小砂粒を含む。還元、硬質。灰白色、釉-オリーブ灰色	体部ゆるい内湾のカーブをもってひろがり、口縁部ツミナデによる外反。底部回転糸切り、貼付高台、高台断面、丸味のある台形	カマド前出土
27	羽釜	口-[20.2]、高-(4.7) ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、やや硬質。橙色	中型で器内、薄手のタイプ。口縁内傾、端部平坦面あり、鈔断面、三角ロクロナデ調整	カマド前出土、内面スス付着



第205図 4区7号、8号住居跡遺物図

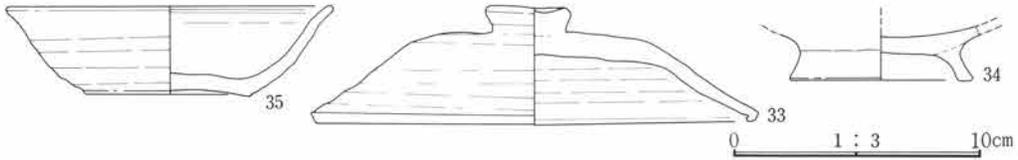
29 4区8号 住	甕 土師器	口-21.1、底-4.8、高-26.8○略完 存	砂粒、黒色輝石を多く含む。酸化、軟質。明赤褐色	小さい平底の底部、上部に最大径をもつ卵形の胴部、頸部ゆるやかにくびれ、口縁部内湾のカーブをもつてくの字状に外反する。口縁端部内側に丸味をもつ。胴上半、ヨコ、下半タテ方向のヘラケズリ	カマド内一括
30	坏 須恵器	口-[12.4]、底-[7.2]、高-4.0 ○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含む。酸化、やや硬質。橙色～浅黄橙色	平底、腰部丸味をもつが体部直線的にひろがる。口縁端部薄手の仕上げロクロナデ。底部回転ヘラ切り(?)	
31	坏 土師器	口-12.5、底-8.3、高-3.2○略完 存	砂粒多く、黒色輝石を含む。酸化、軟質。橙色	平底、体部中央で内湾する。口縁たちあがり、端部内湾し丸味をもつ。体下半、ユビナデ、口縁ヨコナデ、底部、手持ちヘラケズリ	カマド内出土 同形の坏、その他3個体分あり



第206図 4区9号住居跡遺構図

4区9号住居跡 (第206・207図、第44表、図版89)

基本土層の第4層で確認された。3号井戸と9号土坑により切られている。住居跡の東半を確認しただけで、西半は道路下となる。規模は現状で東辺4.20m、北辺2.15mで、平面形は隅丸長方形を呈するものと思われる。方位は北辺でN-80°-Eを示す。覆土は自然埋没した様相を示す。壁高は平均36cmで、やや斜めに立ち上がる。床面は平坦で、全体的にやや固く締っている。床面は全面が貼床され、床面下には起伏のある堀方がある。また、床面下には円形や楕円形の3基の落ち込みがある。柱穴、周溝はない。カマドは東辺中央やや南寄りに位置し、コの字状に壁外へ張り出している。焚口幅50cm、奥行46cmで、全体が良く焼けている。両袖部には袖石の抜き取り穴があり、袖部に石が使用されていたと推定される。貯蔵穴はない。遺物は、蓋の完形が中央寄り床面より出土し、カマド前の床面や覆土には土師器甕の小片が散布していた。また、東南隅の堀方から完形の坏が出土した。本住居跡の時期は、平安時代(9世紀後葉)とされる。(下城)

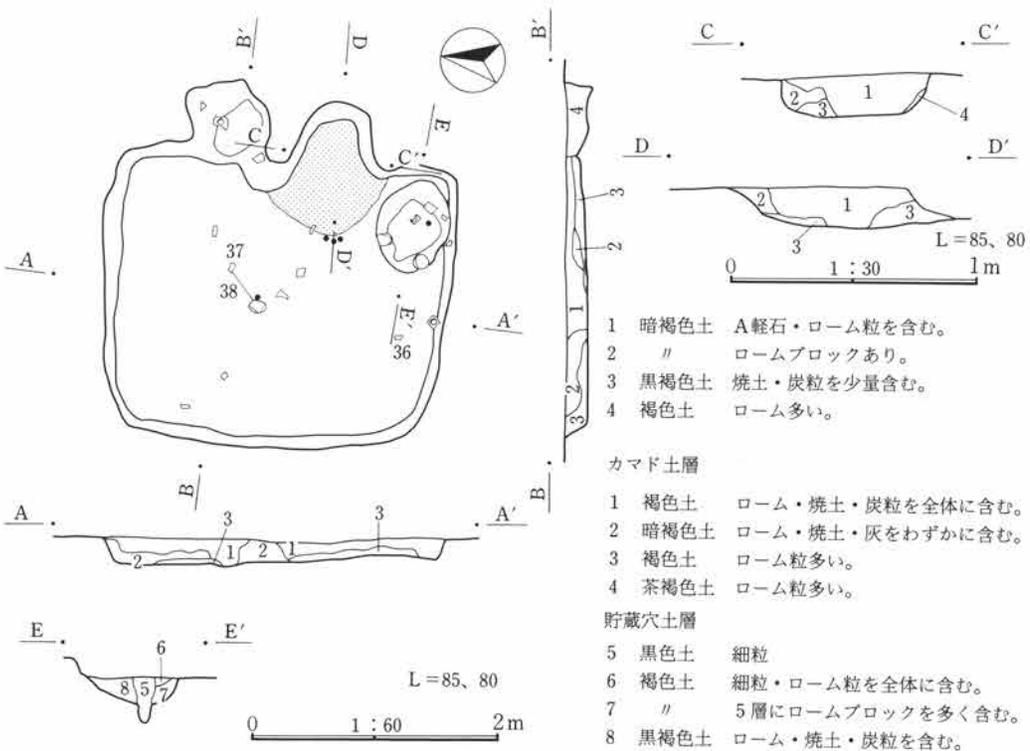


第207図 4区9号住居跡遺物図

第44表 4区9号住居跡出土遺物観察表

(第207図、図版 89)

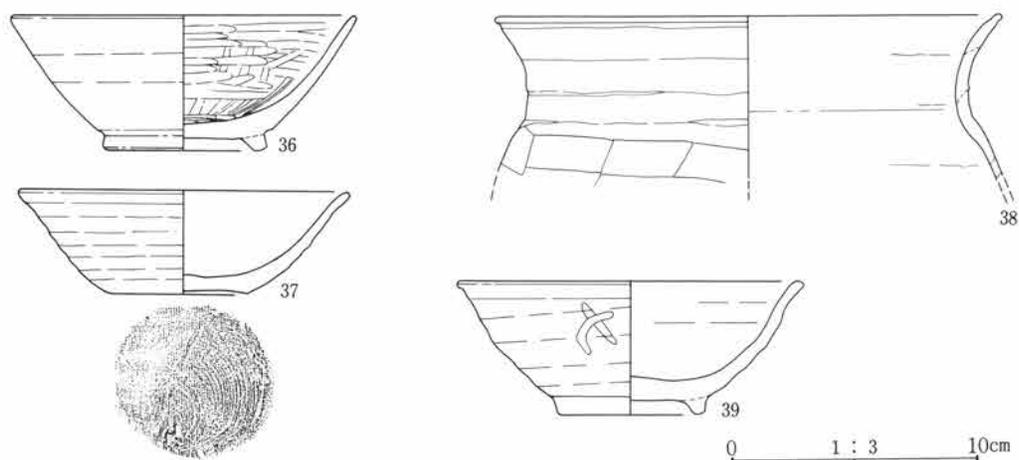
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
33	蓋 須恵器	口-18.0、つまみ 径-3.5、高-3.8 ○略完存	黒色砂粒を含む。還元、 やや硬質。灰白色	天井部～肩部丸味あり、体部稜を もって外反、口縁部でさらに外反。 端部内傾してたちあがる。丸味あり。 天井部回転ヘラケズリ、ボタン状つ まみ貼付。ロクロ右回転	床直
34	埴 須恵器	高台径-7.4、高一 (2.8) ○底のみ	砂粒を含む。還元、やや 硬質。灰白色	ロクロ調整の埴。貼付高台、高台断 面、外傾する台形	床直
35	坏 須恵器	口-13.2、底-6. 7、高-3.6 ○略完 存	白色、黒色砂粒を含む、 粗。還元、硬質。浅黄色 存	平底、体部内湾しながらひろがる。 口縁部外反し、端部丸味をもつ。体 部ロクロナデ調整、回転糸切り、ロ クロ右回転	堀方出土。 重ね焼きの痕跡 あり



第208図 4区10号住居跡遺構図

4区10号住居跡（第208・209図、第45表、図版89・90）

基本土層第4層で確認された。東辺のほぼ中央部を柱穴状の落ち込みによって切られている。この落ち込みからは、墨書のある高台付碗が出土している。規模は北辺で2.37m、東辺2.84mである。平面形は隅丸方形を呈し、北辺の方位はE-2°-Sを示す。覆土はやや乱れ、部分的に炭化物が目立つが、自然に埋没したものと思われる。壁は平均22cmの高さが確認され、ほぼ直に立ち上がる。床面はやや起伏があるが、ほぼ全面が固く締っている。床面はカマド前を除き、全面が貼床され、床面下には起伏のある堀方がある。また、カマド前と中央に各々1基、西辺寄りに2基の円形や楕円形を呈した、床面下の落ち込みがある。柱穴、周溝はない。カマドは東辺中央やや南寄りに位置し、半円状に張り出している。焚口幅75cm、奥行54cmで焼け方は弱く、焼土と灰が薄くカマド前まで分布していた。カマド堀方は、燃烧部底面下部に向かって挿鉢状に落ち込んでいた。貯蔵穴が東南隅にあり、76×60cmの規模で楕円形を呈し、深さ38cmで断面は丸底状を呈していた。遺物は南辺に接して高台付碗が出土し、中央床面周辺には土師器甕、坏の小片が、貯蔵穴からは高台付碗や蓋の小片が出土した。カマドからは遺物は出土しなかった。本住居跡の時期は、出土遺物から平安時代（9世紀後葉）に位置付けられる。（下城）



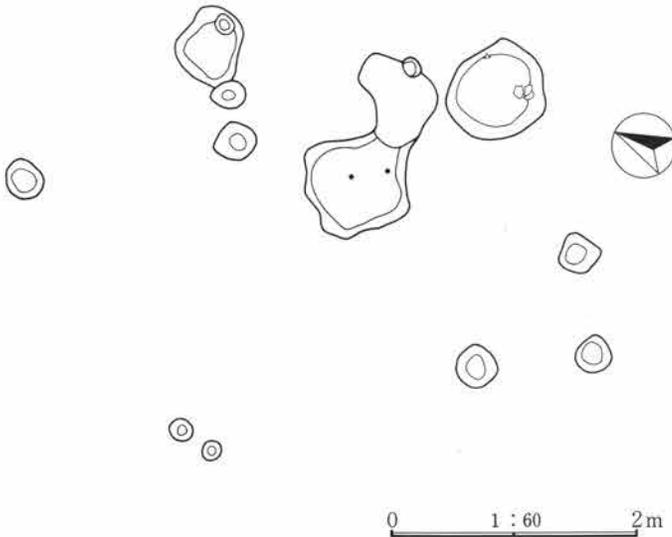
第209図 4区10号住居跡遺物図

第45表 4区10号住居跡出土遺物観察表

(第209図、図版89)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
36	碗 土師器	口-[14.0]、底-6.6、高-5.4○ $\frac{3}{4}$	砂粒多く、小石も含む。酸化、軟質。橙色、内黒	内黒、研磨の碗。体部わずかに内湾しながら、口縁へひろがる。口縁部直行、底部回転糸切り、貼付高台、高台断面、丸味のある台形、体部ゆるいロクロナデ調整、内面底部ヨコ、下半タテ、上半ヨコ方向のヘラ研磨	床直

37 4区10号 住	坏 須恵器	□-[13.4]、底-[5.8]、高-4.2 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒を多く含む。還元、やや硬質。灰白～灰黄色	体部わずかに内湾してひろがり、口縁部外反し、端部角ばる。底部回転糸切り、ロクロ右回転	床直
38	甕 土師器	□-[20.4]、高-(6.4) ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。にぶい褐色	上胴部に丸い張りをもち、頸部のくびれ弱く、口縁部へちあがり、ゆるく外反。口縁端部外側に沈線めぐる。体部外面ヨコヘラケズリ	
39 参	埴 須恵器	□-[12.0]、底-[6.0]、高-5.3 ○ $\frac{3}{4}$	砂粒多く含む、粗。還元、やや硬質。灰色	腰部で張りを持ち、ゆるやかな内湾のカーブをもつ。口縁端部肥厚して丸味あり、底部回転糸切り、貼付高台、ロクロ右回転。高台断面、台形	新ピットより出土。重ね焼き痕あり。「七」字墨書



第210図 4区11号住居跡遺構図

## 4区11号住居跡

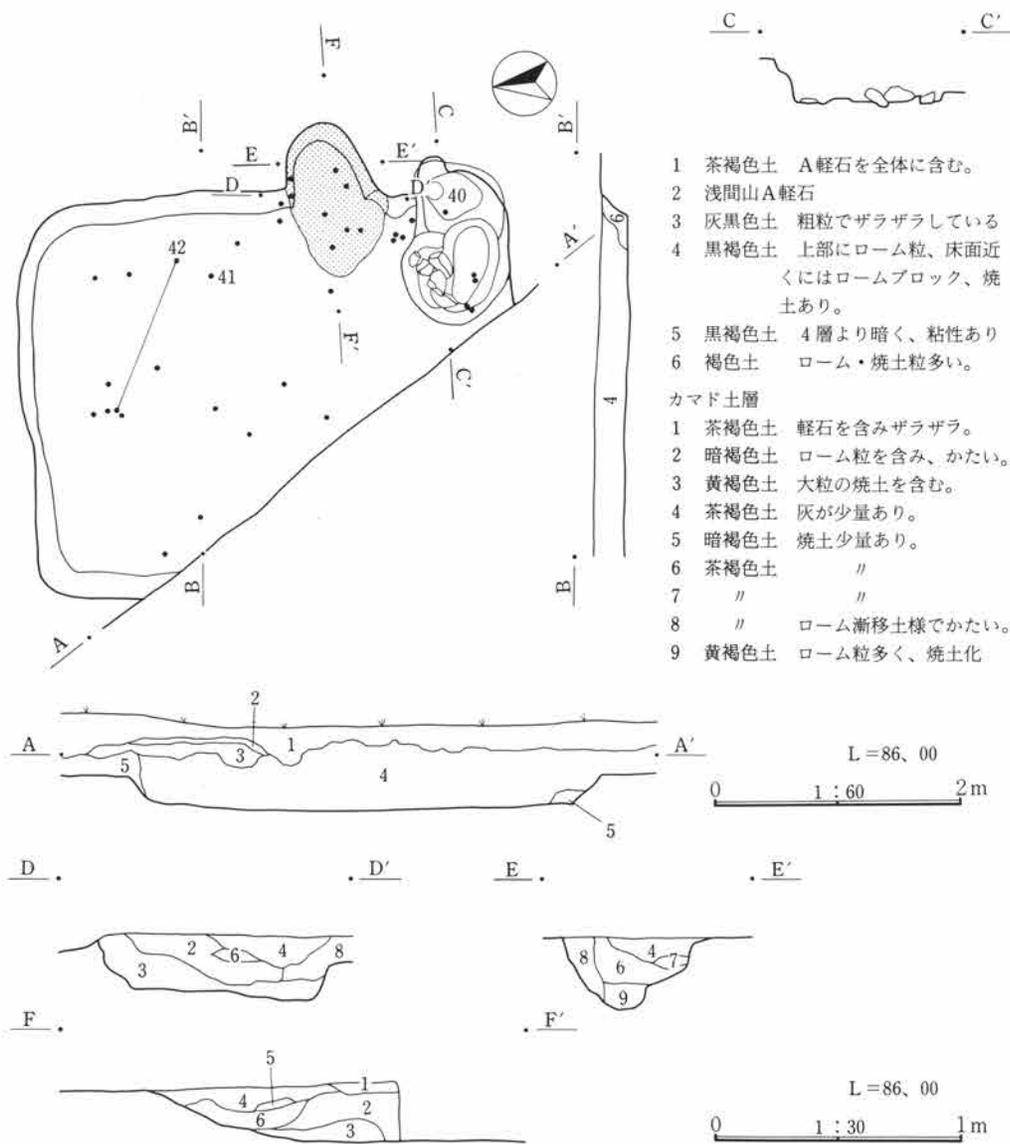
(第210図)

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。確認時、床面の大半が露呈した状態で、西半分については削平されていた。規模、方位は不明、平面形は東辺にカマドを持つ方形と推定される。床面は、ローム面を平坦に踏み固めており、堅緻である。柱穴、周溝、貯蔵穴は不明。カマドは、東辺中央部と推定される位置

に不整形の堀方様のものがあり、焼土、炭化物が多いことから、その痕跡かと推定される。遺物は、カマド痕跡と推定される位置及びその周辺から、土師器の甕、坏等が破片状態で少量出土している。遺構の時期は、出土遺物から平安時代（9世紀）である。 (女屋)

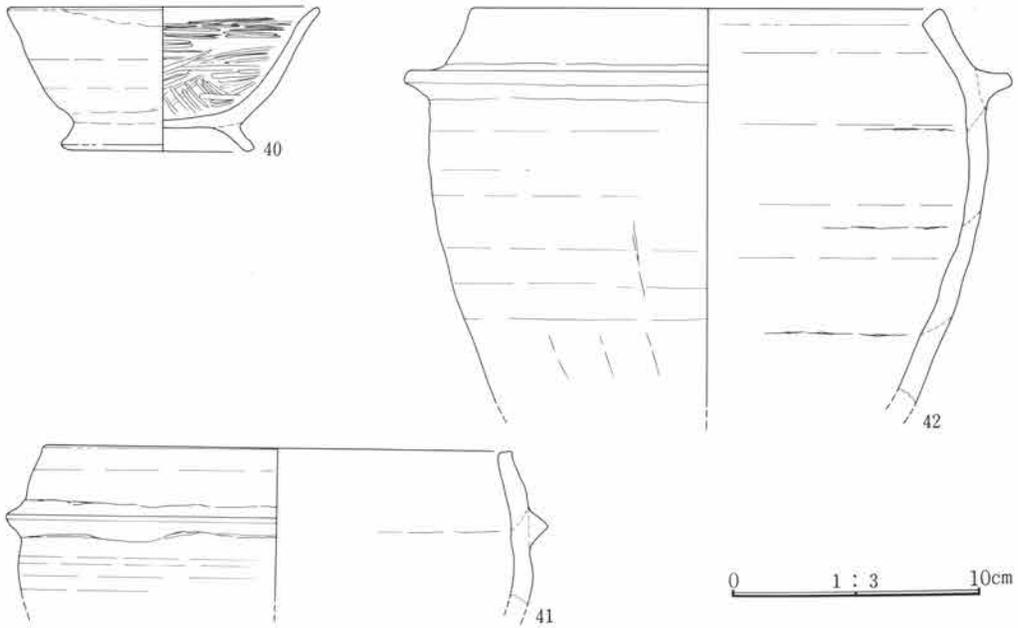
## 4区12号住居跡（第211・212図、第46表、図版90・91）

基本土層の第4層で確認された。西南隅寄り道路下となり、全体の $\frac{2}{3}$ 程を確認した。規模は東辺4m、北辺3.16mである。平面形は隅丸長方形を呈すると推定され、方位は北辺でE-8°-Sを示す。覆土は自然埋没の様相を示す。壁は平均24cmの高さが確認され、ほぼ直に立ち上がる。床面は平坦で、全面が固く締っている。中央部床面下には、楕円形を呈する3基の落ち込みが重



第211図 4区12号住居跡遺構図

複して存在し、貯蔵穴周辺とともに貼床となっている。柱穴、周溝はない。カマドは東辺中央よりやや南に位置し、半円状に張り出している。焚口幅58cm、奥行64cmで、全面的にやや良く焼けている。堀方の焚口両袖には抜き取り穴があり、両袖には石材を使用していたと考えられる。貯蔵穴は東南隅にあり、122×85cmの規模で楕円形を呈し、壁外へ扶れ込んでいる。深さは20cmで底面はやや起伏があり、断面は丸底状を呈する。遺物はカマド、貯蔵穴と東北隅寄りに分布し、貯蔵穴からは内黒の高台付碗が出土し、東北隅寄りの床面周辺には羽釜の小片が分布していた。本住居跡の時期は、平安時代（10世紀中葉）とされる。（下城）

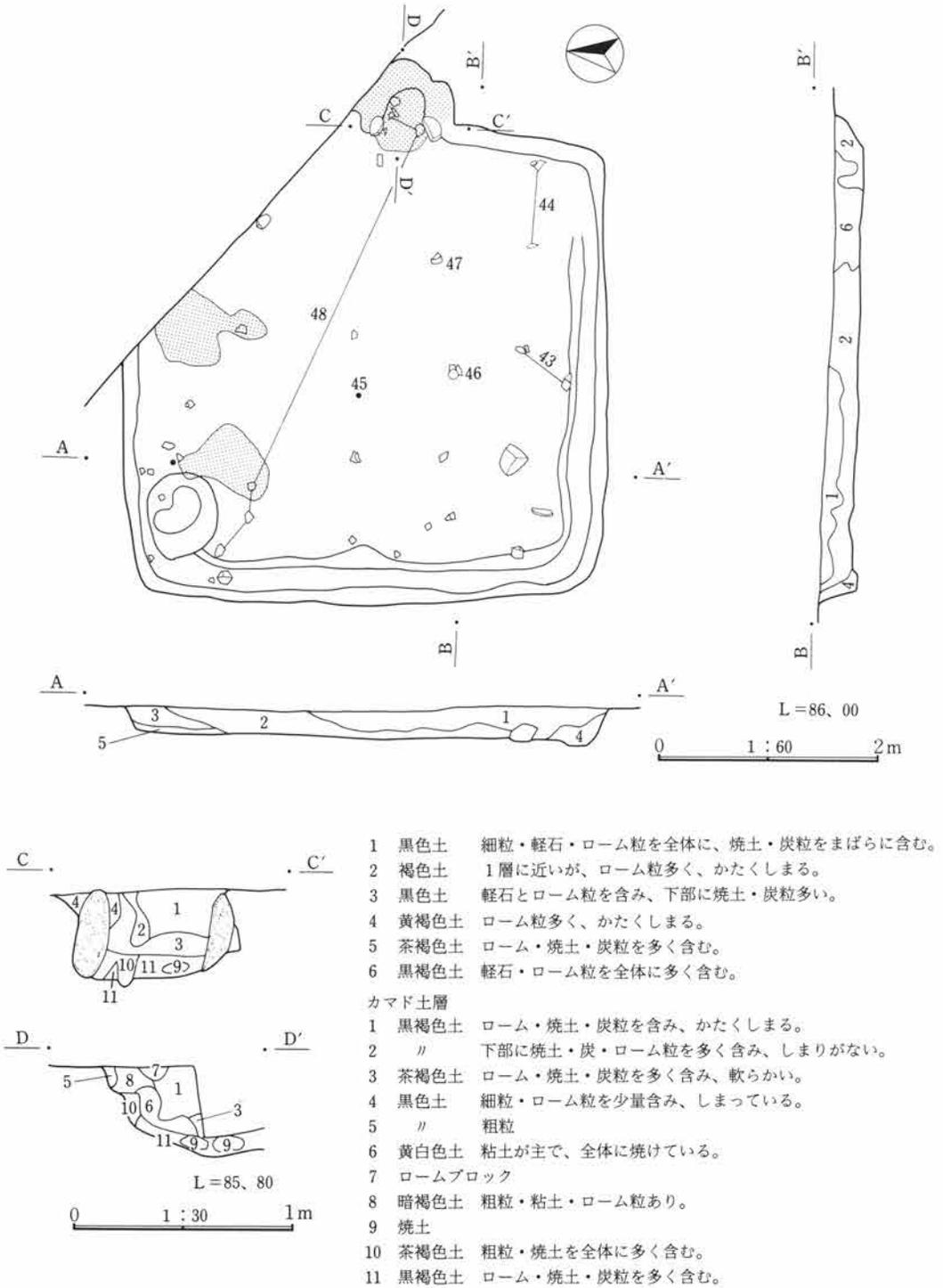


第212図 4区12号住居跡遺物図

第 46 表 4区12号住居跡出土遺物観察表

(第212図、図版 91)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
40	碗 土師器	口-[12.6]、底-6.7、高台径-7.7、高-5.8○%	砂粒、黒色輝石を多く含む。酸化、やや軟質。にぶい黄橙色、内黒	体部内湾してひろがる。口縁部わずかな外反。貼付高台、高台断面、ハの字にひろく台形、体部粘土積の後ヨコナデ、内面、研磨、黒色処理	貯蔵穴出土 回転のゆるいナデ調整である
41	羽釜	口-[19.0]、高-(6.0)○%	砂粒多く含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色	体部丸味をもち、口縁内傾、口縁端部平坦面あり。鏝断面三角、粘土積痕残りロクロナデ調整、鏝貼付。器肉、薄手。ロクロ目細かい	
42	羽釜	口-[19.0]、高-(15.8)○%	砂粒多く含む。還元、硬質。灰色	胴上部で張りをもち、口縁内傾、口縁端部平坦面あり。鏝断面、丈長の台形、器肉、厚手、均質。粘土積ロクロナデ、下胴部ヘラケズリ	

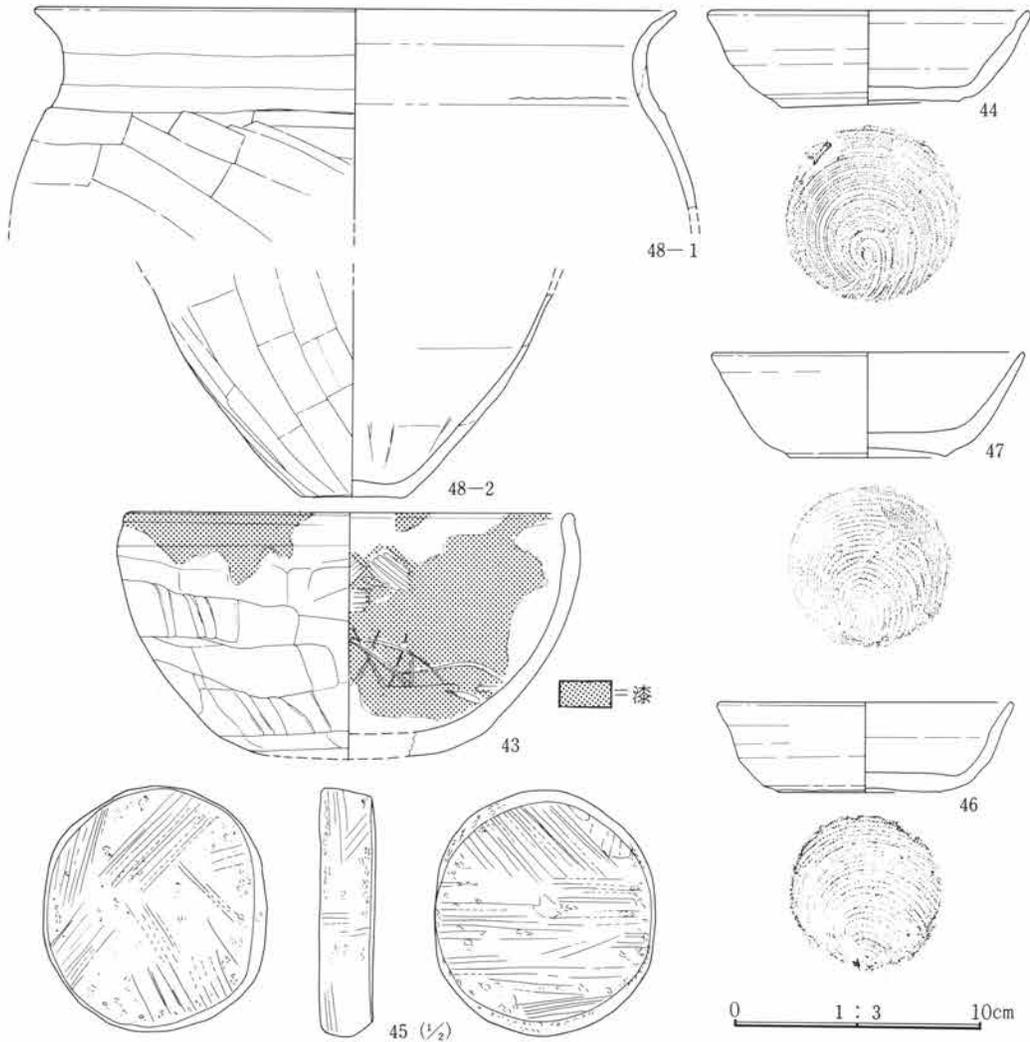


第213図 4区13号住居跡遺構図

## 4区13号住居跡（第213・214図、第47表、図版91）

基本土層の第4層で確認され、東北隅寄りには調査区外となる。東辺は風倒木痕を切っている。規模は南辺4.38m、西辺4.25mである。平面形は隅丸長方形を呈し、方位は南辺でE-10°-Sを示す。覆土は自然に埋没した様相を示す。壁高は平均28cmである。床面は平坦で、中央周辺が特に固く締っている。西北隅と南辺寄りの中央に床面下の落ち込みがある。柱穴はなく、周溝が西辺から南辺にかけて沿っている。カマドは東辺のほぼ中央に位置し、半円状に張り出している。焚口幅46cm、奥行51cmで、焚口に河原石の袖石を据え、燃烧部やや北寄りには支石が1点ある。遺物は、カマド部分には土師器甕の小片があり、住居跡西半を中心に坏破片が分布していた。また、砥石状の円形の石製品が中央床面より出土した。本住居跡の時期は、平安時代（9世紀前葉）とされる。

(下城)



第214図 4区13号住居跡遺物図

第47表 4区13号住居跡出土遺物観察表

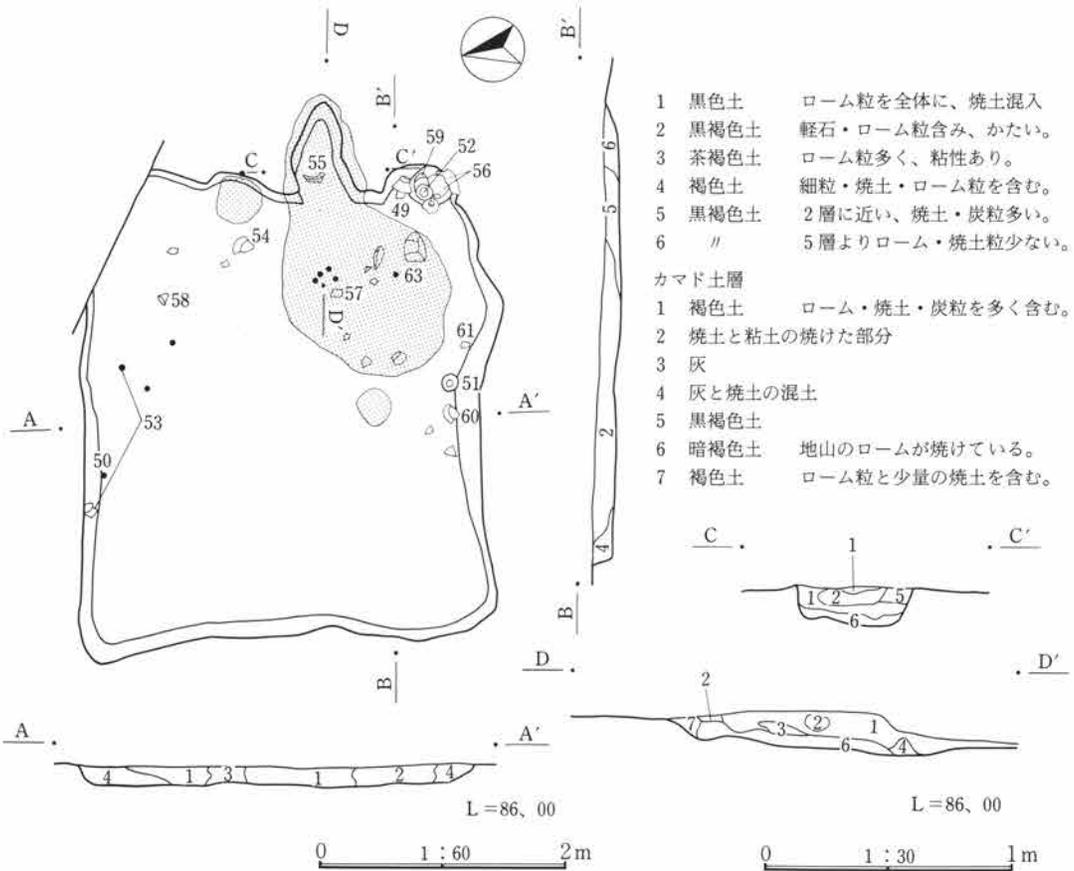
(第214図、図版 91)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
43	鉢 土師器	口-[18.0]、底-[11.1]、高-9.8 ○ $\frac{1}{4}$	砂粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい橙色	碗状大型の鉢。底部凸状の平底、体内内湾、口縁はわずか直行ぎみ、底部、体部、手持ちヘラケズリ調整、口縁部ヨコナデ。器肉、厚手	床直 内面、漆付着し かきとり痕あり
44	坏 須恵器	口-13.0、底-7.2、高-3.9○完存	砂粒を含む。還元、やや硬質。灰~灰白色	腰部で張りをもち、体部わずかに内湾してひろがる。口縁端部丸味あり。底部、回転糸切り、ロクロ右回転	貯蔵穴出土 重ね焼きの痕跡あり
45	円盤状石製品	径-6.6×6.1 厚-1.4○完存	材質—角閃石安山岩	扁平で側面、丸味をもつ。上下面、擦痕残る	床直
46	坏 須恵器	口-[12.0]、底-6.6、高-3.6○ $\frac{3}{4}$	砂粒を含むが、緻密。還元、やや硬質。灰白色	腰部で張りをもち、内湾ぎみにひろがる。口縁部わずかに外反。底部回転糸切り、ロクロ右回転。器肉薄手	
47	坏 須恵器	口-[12.6]、底-[6.4]、高-4.2 ○ $\frac{1}{2}$	白色砂粒多く、黒色斑文あり。還元、硬質。灰色	腰部で張りを持ち、体内内湾してひろがる。口縁直行、底部回転糸切りロクロ右回転	重ね焼きの痕跡あり
48	甕 土師器	口-[26.0]、底-[4.2]、高-(8.0) ・(8.2) ○ $\frac{1}{4}$	砂粒多く含む。酸化、軟質。明赤褐色	大型の甕。上胴部に張りを持ち、頸部しまり、内傾して立ちあがり口縁外反する。コの字状口縁、上胴部ヨコ、下胴~底、タテヘラケズリ	上、下、接合しないが、同一個体と思われる

## 4区14号住居跡 (第215・216図、第48表、図版92・93)

基本土層第4層で確認された。規模は東北隅部が調査区域外のため未調査であるが、遺存状態の良好な住居跡である。北辺〔3.92m〕、東辺〔2.95m〕、南辺3.77m、西辺3.38mのややゆがんだ長方形を呈する。北辺の方位はE-10°-Sである。覆土はレンズ状堆積をしており、黒色土から暗褐色土を主体としている。壁体はローム層で構成され、現認高約15cmである。床面は掘方が皿状のくぼみを多く持っているため、これを埋土して構成される。カマドは東辺に突出して設けられている。カマドからかき出された焼土と灰が手前の床面に広がっている。

遺物は良好な状態で出土し、点数も多い。カマド内に長甕があり、手前の焼土中には割石、坏、甕の破片が多い。南東隅部からは一括して高台付碗、坏、台付甕が出土している。南壁下には列状に坏、皿が置かれる。北壁下には台付甕と石製紡錘車が出土している。住居跡での遺物配置がわかる好例といえる。遺構の時期は、出土遺物の特徴から9世紀中葉である。(桜場)



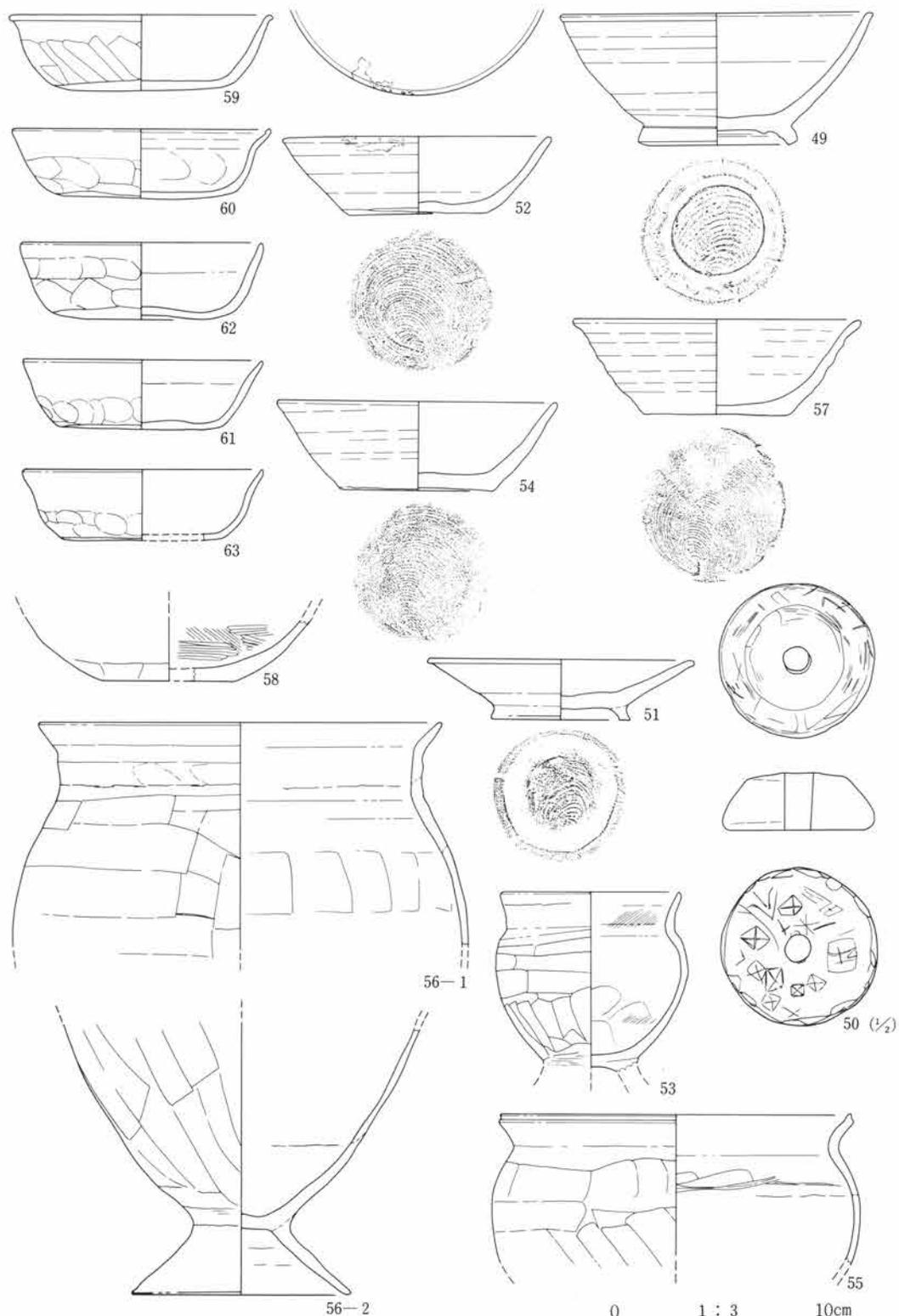
第215図 4区14号住居跡遺構図

第 48 表 4区14号住居跡出土遺物観察表

(第216図、図版 92・93)

番 号	土 器 種 類	法 量 (口径・底径・器高) 遺存状態	胎 土 ・ 焼 成 ・ 色 調	器 形 ・ 技 法 の 特 徴	備 考
49	碗 須恵器	口-[15.0]、高台 径-7.6、高-6.2 ○略完存	砂粒を多く含む。還元、 やや硬質。灰黄色	体部、わずかに内湾してひろがる。 口縁端部玉縁状を呈する。底部、回 転糸切り、貼付高台、アテ具による ナデ調整。高台断面、外側にひらく 台形。ロクロ左回転	床直、カマド右 脇出土
50	紡 錘 車 石 製	底径-4.9、上径- 3.1、厚-1.8、軸 孔径-0.8○完存	材質-蛇紋岩類	底面平坦、上面外端~中心軸間わず かに凹む。側面は底面よりたちあがり、 丸い稜をもって、上面へ直行、 端部丸味、スレあり	底面、刻字、刻 線あり、文字不 明
51	皿 須恵器	口-12.6、高台 径-6.6、高-2.8 ○完存	砂粒多く含む。還元、や や硬質。にぶい黄橙色	体部やわらかい内湾のカーブもつ、 口縁部外反する。底部回転糸切り、 貼付高台、断面台形。ロクロ左回転	

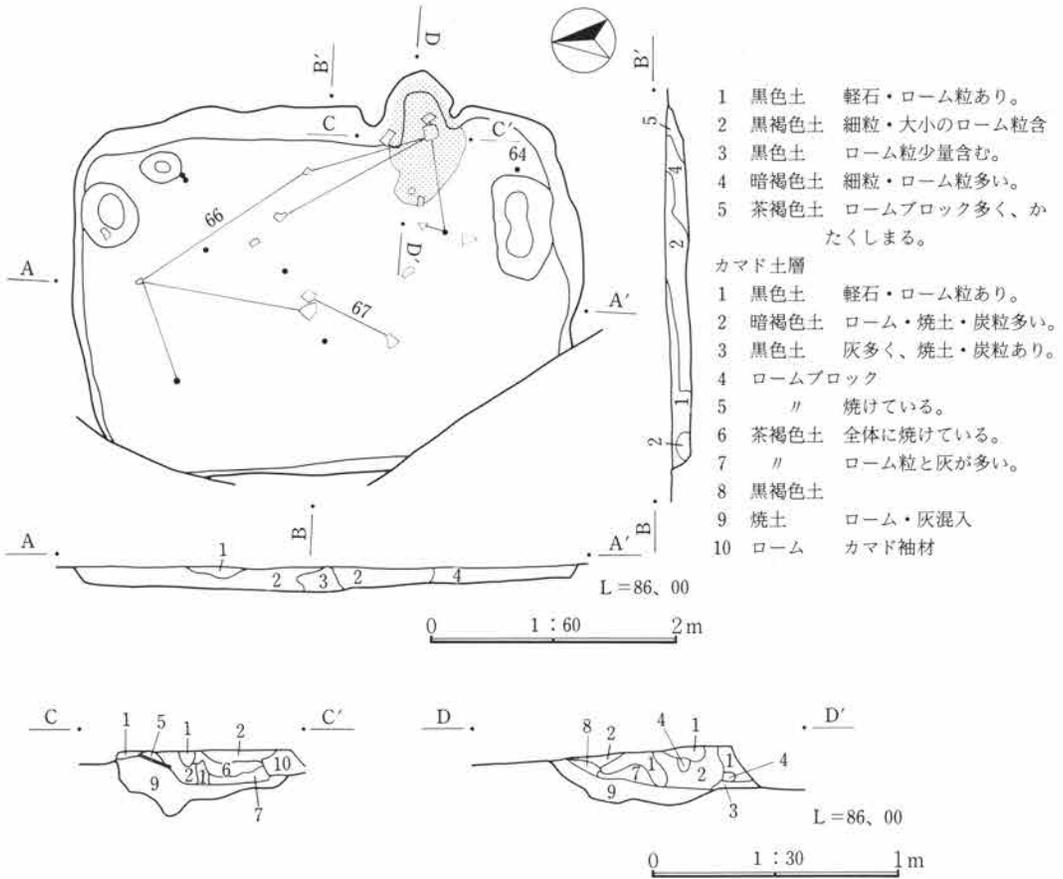
第6章 検出された遺構と遺物



第216図 4区14号住居跡遺物図

## 2 14地区の調査 (平安時代)

52 4区14号 住	坏 須恵器	□-12.8、底-6.5、高-3.6○略完存	白色砂粒多く含む。還元、硬質。灰色	体部ほぼ直行してひろがる。口縁端部丸味をもつ。底部回転糸切り後、外縁部、手持ちヘラケズリ。ロクロ右回転	床直、カマド右脇出土 重ね焼き痕あり 漆付着
53	甕 土師器	□-[8.6]、底-3.9、高-(8.5)○ $\frac{2}{3}$ 脚台部を欠く	砂粒多く、黒色輝石を含む。酸化、軟質。にぶい褐色	コの字状口縁をもつ、小型台付甕。口縁部ゆるいコの字を呈する。上胴部ヨコ、下胴部タテのヘラケズリ調整、内面、ナデ調整	床直 内外、スス付着
54	坏 須恵器	□-[13.4]、底-7.3、高-4.2○ $\frac{2}{3}$	白色砂粒多く含む。酸化、やや硬質。にぶい褐色	体部やわらかな内湾を呈し、口縁わずかに外反。端部丸い。底部回転糸切り、ロクロ右回転	底部外縁、スレあり
55	甕 土師器	□-[16.6]、高-(7.0)○ $\frac{1}{8}$	砂粒多く含むが、きめ細かい。酸化、軟質。にぶい赤褐色	上胴部で丸味をもち、くの字に外反する口縁をもつ。口縁端部、外側に丸い稜をもち、沈線めぐる。内側にかえり持つ。上胴部ヨコ、下胴部タテ方向のヘラケズリ調整	鍋と呼ぶべきか
56	甕 土師器	□-[19.2]、底-(4.6)、脚台径-10.4、高-(10.5)・(12.5)○ $\frac{1}{3}$	砂粒多く、黒色輝石を含む。酸化、軟質。橙色	コの字状口縁の台付甕。上胴部に丸味をもち、底部小さく、脚は八の字状にひろく。上胴部ヨコ、下胴部タテのヘラケズリ、体部粘土積痕明瞭	上下、接合しないが、同一個体と思われる
57	壺 須恵器	□-[13.8]、底-[6.8]、高-4.5○ $\frac{1}{2}$	白色砂粒、小石を含む。酸化、硬質。にぶい赤褐色	体上位で内湾、口縁部外反する。口縁端部丸味あり、底部回転糸切り、ロクロ右回転	重ね焼きの痕跡あり
58	壺 土師器	底-[6.2]、高-(3.0)○ $\frac{1}{6}$	砂粒多く含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色、内黒	平底、体部内湾する。底部ヘラケズリ、腰部、縁ヘラケズリ、内面ヘラ研磨、黒色処理、良質	調整の技法から土師器と考えた
59	坏 土師器	□-[12.6]、底-8.7、高-3.6○ $\frac{1}{6}$	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい褐色	平底、体部やや内湾、口縁端部外側に丸味もつ。底部手持ちヘラケズリ体下半ヘラナデ、口縁ヨコナデ	貯蔵穴位置
60	坏 土師器	□-[12.4]、底-8.4、高-3.3○略完存	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい褐色	平底、腰部で内湾、口縁部外反、口縁端部内側にかえり、丸味もつ。底部手持ちヘラケズリ、体下半指ナデ	
61	坏 土師器	□-[11.4]、底-8.0、高-3.3○ $\frac{1}{6}$	砂粒多く含む。酸化、軟質。明褐色～橙色	平底、体中位で稜をもつ。口縁端部薄手の仕上げ、底部手持ちヘラケズリ、体下部ナデ、口縁ヨコナデ調整	
62	坏 土師器	□-[11.6]、底-8.5、高-3.6○ $\frac{1}{6}$	砂粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい橙色	平底、体部中位でわずかに稜をもつ底部、手持ちヘラケズリ、体下部ナデ、口縁部ヨコナデ調整	
63	坏 土師器	□-[11.6]、底-[7.6]、高-3.3○ $\frac{1}{2}$	砂粒を多く含む。酸化、軟質。明赤褐色	平底、体部中位で丸味をもち、口縁部わずかに外反。底部手持ちヘラケズリ、体下部ナデ、口縁部ヨコナデ調整	

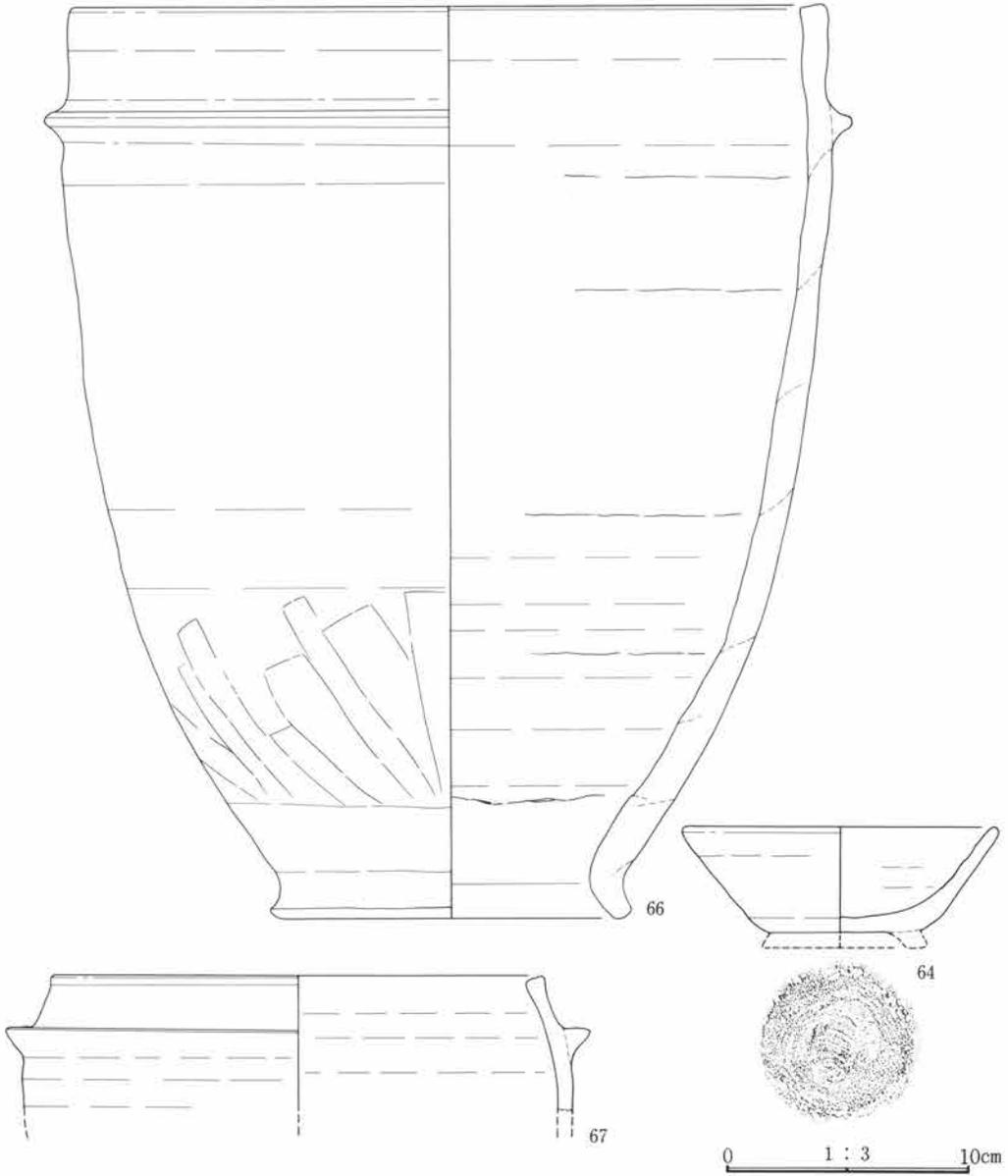


第217図 4区15号住居跡遺構図

4区15号住居跡 (第217・218図、第49表、図版93)

基本土層第4層で確認された。南西隅は道路敷のため未調査であり、北西隅部は溝で切られているが、おおむねその形状は把握できる。規模は東辺が3.85m、他の3辺はその一部を欠くため正確を期しがたいが、中央部での東西長は2.95mとなるところから、南北に長軸をとる隅丸長方形を呈する。北辺の方位はE-3°-Sである。覆土は黒色土から暗褐色土を主体とし、土層断面図からは東から西へ流れ込んだ様子がうかがえる。壁面はやや傾斜し、現高10~15cmが認められる。床面は貼床であり、堀方面にはいくつかの浅いピットが認められる。カマドは東辺の南寄りに付設される。カマドはよく焼けており、煙道部には焼土と灰がたまっている。周辺には焼土が分布する。カマドの右方には貯蔵穴が設けられる。85×50cmの長円形をし、深さは35cmである。他に東北隅に2ヶ所のピットがあるが、形状、位置から見てその性格は不明である。

遺物の出土点数は少ない。カマド内及びその手前から体部に羽釜の形状を持つ甕が出土している。また、住居中央部からは羽釜の破片が、貯蔵穴付近からは高台付碗が出土している。遺構の時期は、出土遺物の特徴から10世紀後葉である。(桜場)



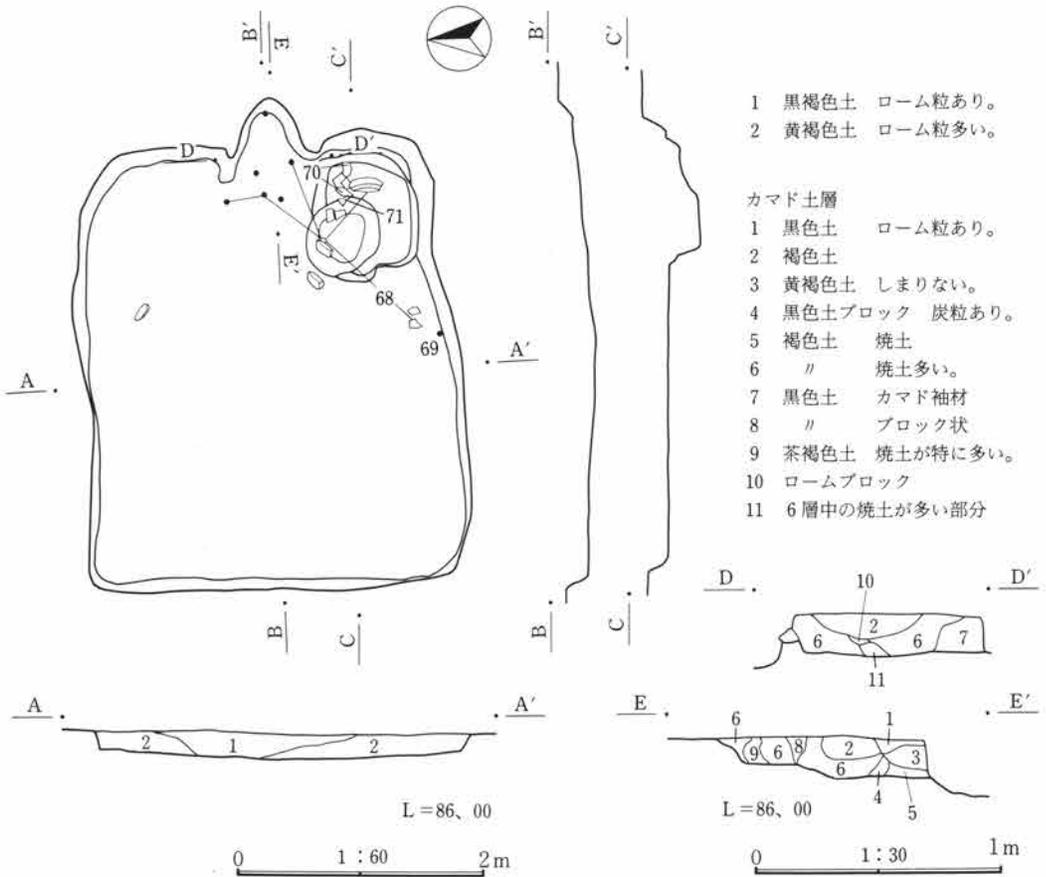
第218図 4区15号住居跡遺物図

第 49 表 4区15号住居跡出土遺物観察表

(第218図)

番 号	土 器 種 種	法量 (口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
64	坏 須恵器	□-13.0、底-6.2、高-(4.3)○ $\frac{1}{2}$	砂粒を多く含む。酸化、やや硬質。褐灰〜にぶい黄橙色	高台部を欠く、高台付坏。腰部で張りをもち、体部直線的。底部回転糸切り後高台貼付。底部外縁スレあり	底部円盤別作り 高台欠損後も灯明皿に使用

66 4区15号 住	瓶	口-[31.0]、底-[14.8]、高-[37.2] ◯%	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色	体下部でふくらみを持ち、口縁部へ直線的にたちあがる。口縁部平坦鏝断面、端部の丸い三角、裾部ゆるい外反、端部丸味をもちスレあり。体上部、裾部ロクロナデ、体下位タテヘラケズリ、内面粘土積痕あり	接合不完全の為器高3cm程、図より低くなると思われる
67	羽釜	口-[20.2]、高-(5.6) ◯%	砂粒を含む。還元、やや硬質。灰黄色	口縁部内傾する。口縁部平坦面あり。鏝断面上むきの三角、体部ロクロナデ調整。器肉、薄手	出土レベル、やや高め

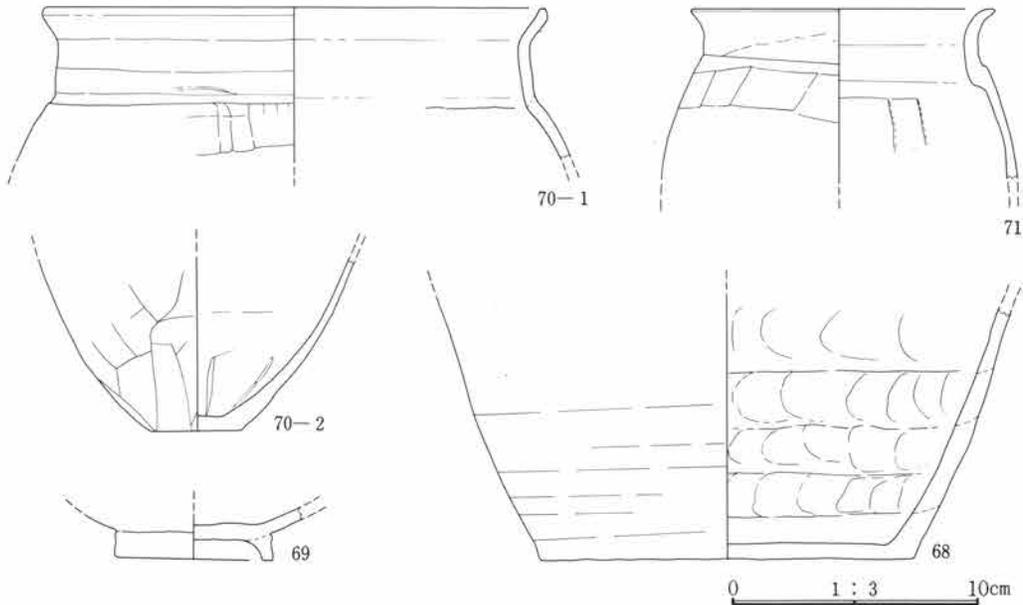


第219図 4区16号住居跡遺構図

4区16号住居跡 (第219・220図、第50表、図版94)

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。北辺側に17号住居跡が隣接して位置する。規模は、東辺側3.05m、北辺側3.55mを測り、方位は北辺でE-2°-Sである。平面形は、東西に長い方形を呈するが、西辺側がわずかに広い。床面は、北辺から東辺にかけて、大きく風倒木痕に重複するため、北半分は壁とともにやや軟弱、南半分はロームを踏み固めている。カマドは、東辺の中央部で確認された。地山を壁外に舌状に掘り込み、住居内に両袖の痕跡を残す。両袖には、

黒色土を用いており、左袖に袖石の一部を残す。焼土の量はやや多く、煙道付近が赤く焼けており、焼土の一部は住居内にも分布する。貯蔵穴は、住居東南隅に接して、長径96cm、短径84cm、深さ26cmの不整形形の土壇が確認された。遺物は、カマド及び貯蔵穴周辺に見られ、土師器甕、須恵器鉢、高台付碗がある。遺構の時期は、出土遺物により平安時代(9世紀中葉)とする。(新井)

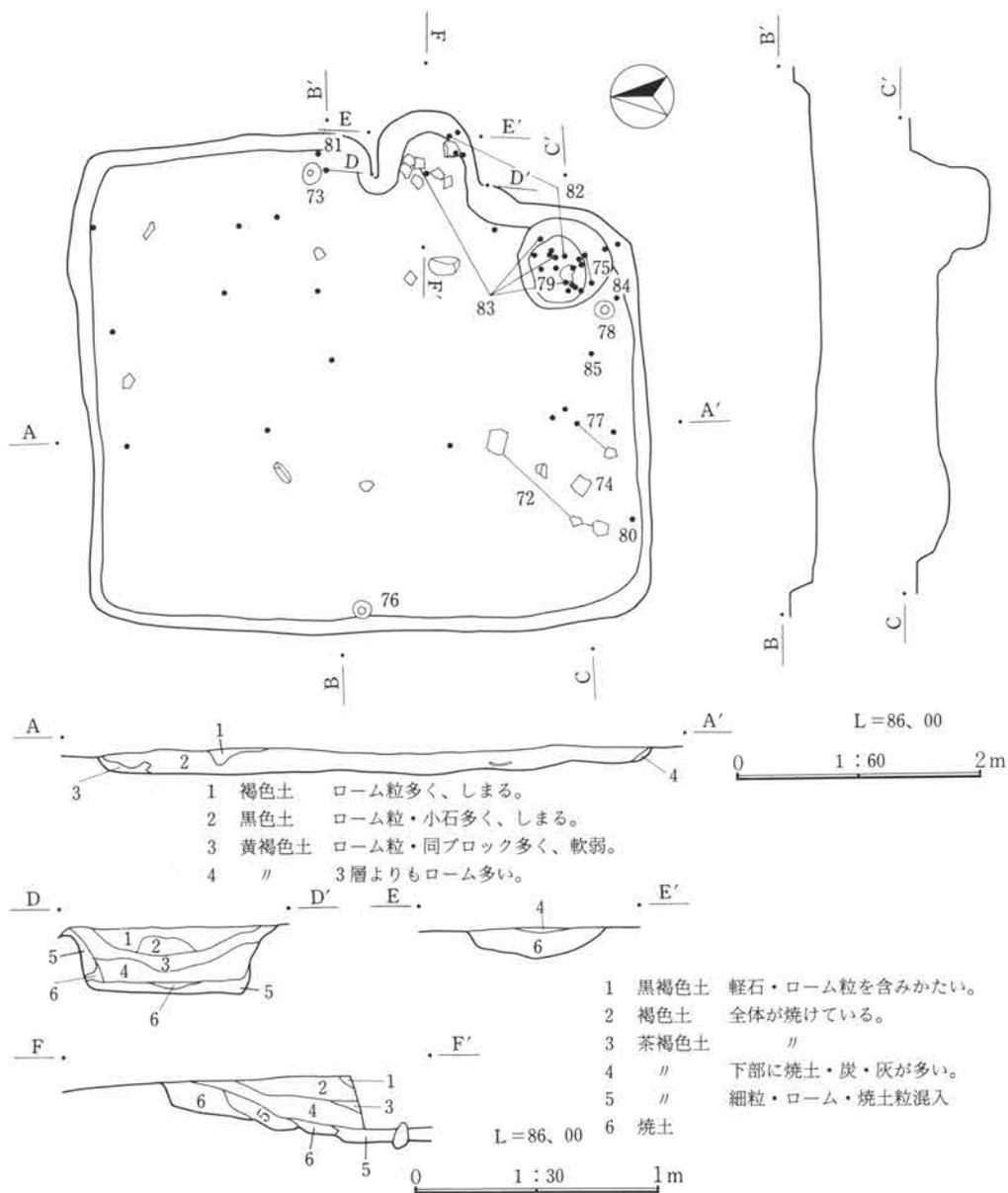


第220図 4区16号住居跡遺物図

第50表 4区16号住居跡出土遺物観察表

(第220図、図版 94)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
68	甕(?) 須恵器	底-[15.2]、高-(9.9) ○ $\frac{1}{2}$	白色砂粒を含む。還元、硬質。灰色	平底、大型の器。体部わずかにひろがり直線的にたちあがる。粘土積痕あり。体部ロクロナデ調整、内面指おさえの痕あり。底部ヘラナデ調整	
69	碗 須恵器	底-[6.4]、高-(1.7) ○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む、きめ細かい。還元、やや硬質。灰色	高台付碗。体部内湾か。底部回転糸切り、貼付高台、高台断面、直行する台形	
70	甕 土師器	口-[20.4]、底-3.7、高-(6.0)・(6.7) ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。褐色～明褐色	コの字状口縁の甕。平底で小さい底部、頸部しまり、わずかに内傾してたちあがり、口縁外反して端部たちあがる。体上部ヨコ、下部クテヘラケズリ調整	不完全な接合であるが同一個体
71	甕 土師器	口-[12.2]、高-(6.8) ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、輝石を含む。酸化、軟質。橙色～黒褐色	コの字状口縁の小型台付甕。体部丸味をもち、頸部ゆるくくびれて、たちあがる。口縁外反する。体上部ヨコヘラケズリ調整	脚台部もあり、細片の為、図化していない

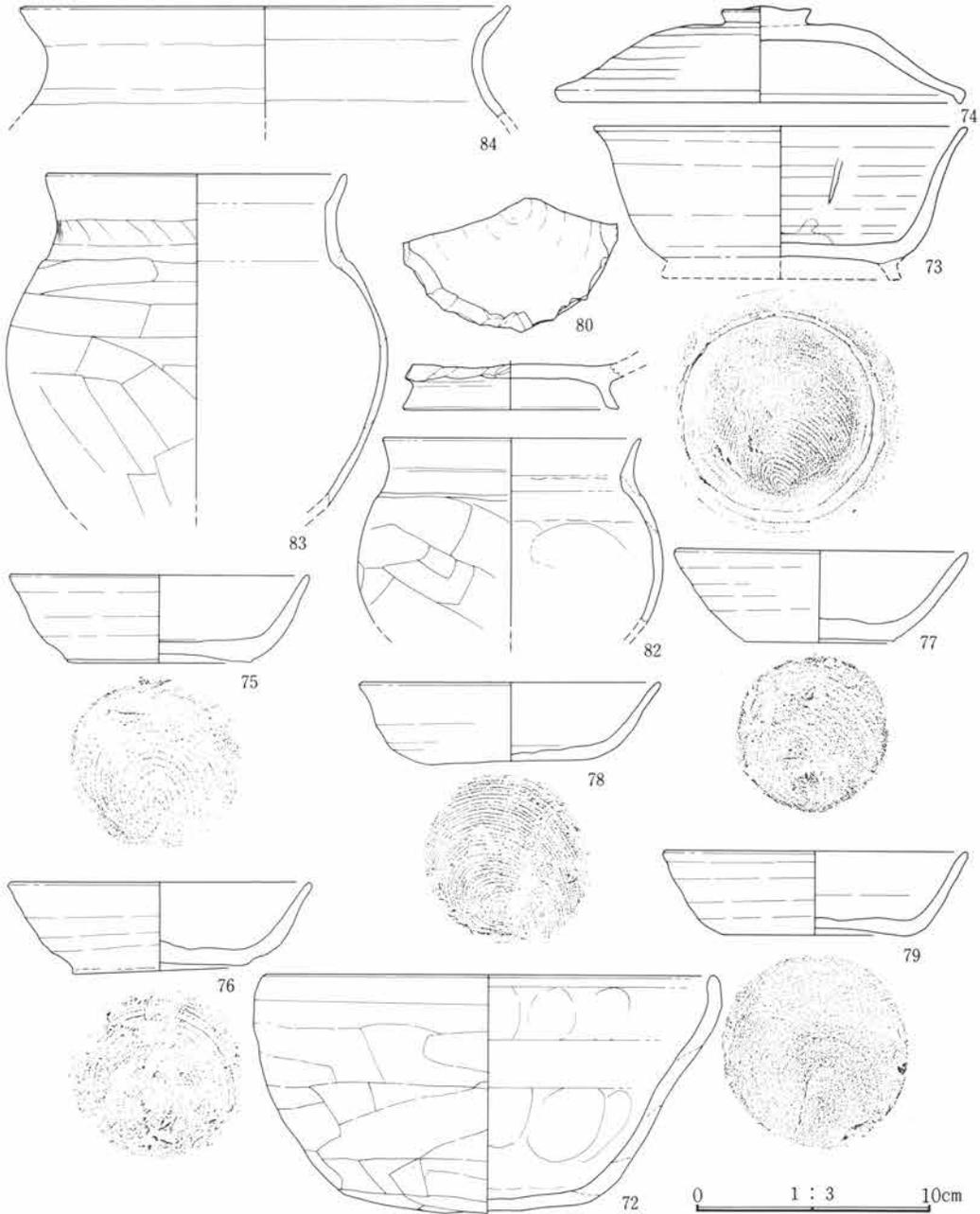


第221図 4区17号住居跡遺構図

4区17号住居跡 (第221~223図、第51表、図版95・96)

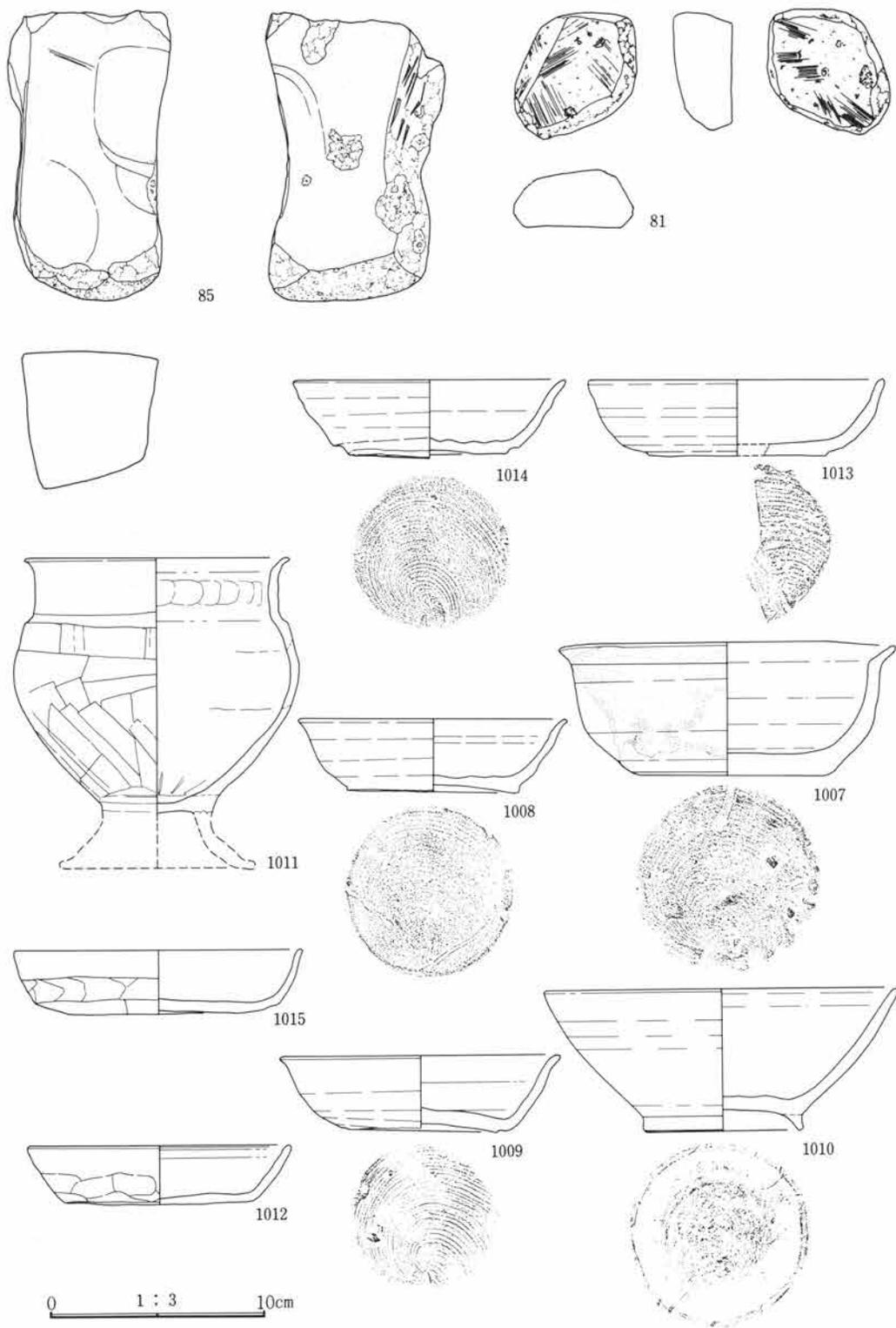
本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。規模は、東辺4.60m、北辺3.80m、南辺3.30mを測り、方位は北辺でN-90°-Eである。平面形は、南北に長い方形を呈し、北辺に比して南辺が短い。床面は、暗褐色土を用いて貼床をし、全体に平坦である。柱穴、周溝は確認されず、壁高は約20cmである。カマドは、東辺の南寄りで確認された。地山を壁外に半円状に掘り込み、右袖がわずかに残る。暗褐色土を袖材とし、カマド中央から煙道部にかけて焼土が見られる。住居内カマドを外れて、角礫が確認され支石と推定される。貯蔵穴は、住居東南隅に接して、直径76cm、

床面からの深さ43cmの断面袋状の円形土坑が確認された。遺物は、住居内全体に多く、カマド及び貯蔵穴内に顕著である。土師器甕を始めとして、埴、須恵器高台付埴、蓋、砥石がある。遺構の時期は、出土遺物により平安時代（9世紀前葉）とする。床面下の堀方は、全面に土坑が重複し合う状態で、多量の遺物が伴う。遺物は床面をはさんで時期差はない。（新井）



第222図 4区17号住居跡遺物図（1）

第6章 検出された遺構と遺物



第223図 4区17号住居跡遺物図(2)

第 51 表 4 区17号住居跡出土遺物観察表

(第222・223図、図版 95・96)

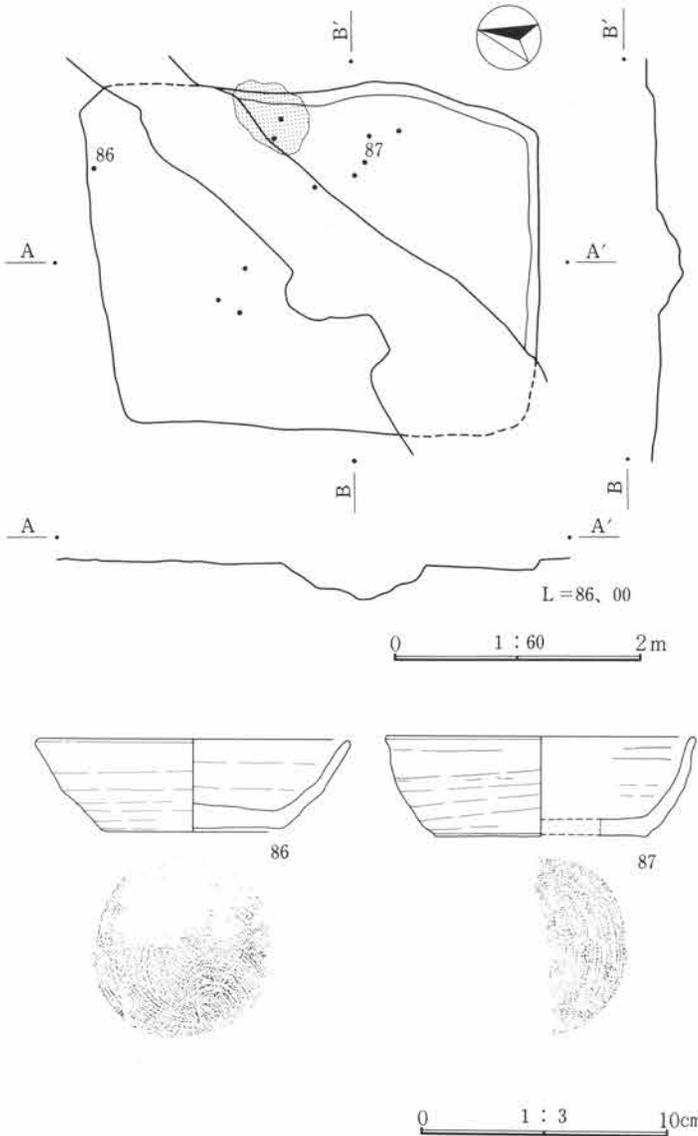
番 号	土 器 種 類	法量 (口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
72	鉢 土 師 器	口-[19.5]、底-[11.1]、高-10.0 $\frac{1}{2}$	砂粒多く、黒色輝石含む。酸化、軟質。にぶい橙色	碗状大型の鉢。底部凸状の平底、体部ゆるやかに内湾、口縁端部丸味をもつ。底部ヘラケズリ、体下部ヨコヘラケズリ、体上部ヘラケズリ後ナデ調整、口縁ヨコナデ	ゆがみあり
73	坏 須 恵 器	口-[18.0]、底-10.4、高-(6.5) 高台を欠く $\frac{1}{4}$	砂粒多く含む。還元、硬質。灰白色	高台付坏。腰部に稜をもち、体部わずかに内湾してひろがる。口縁ゆるい外反、底部回転糸切り、外縁ヘラケズリ調整、貼付高台、ロクロ右回転	内面、漆付着
74	蓋 須 恵 器	口-[17.2]、つまみ径-3.8、高-4.1 $\frac{1}{4}$	砂粒多く含む。還元、やや硬質。白灰色	天井部、平坦、体部、直線的にひろがり、口縁部外反して、端部内傾ぎみにおりかえず。天井部回転ヘラケズリ、ボタン状つまみ貼付	
75	坏 須 恵 器	口-[12.8]、底-7.8、高-3.7 $\frac{1}{4}$	砂粒含むが、きめ細かい。還元、やや硬質。灰白色	体下部で張りをもち、内湾する。口縁部、直線的にひろがる。端部薄手の仕上げ、底部回転糸切り右回転	
76	坏 須 恵 器	口-13.0、底-7.4、高-3.9 $\frac{1}{2}$	砂粒多く含む。還元、やや硬質。淡黄色	腰部で張りをもち、体部直行してひろがる。口縁端部丸味をもつ。底部回転糸切り、ロクロ右回転	
77	坏 須 恵 器	口-[12.6]、底-[6.4]、高-3.9 $\frac{1}{4}$	砂粒多く含む。還元、やや硬質。灰~淡黄色	体部直線的にひろがり、口縁端部丸味をもつ。底部、回転糸切り、底部外縁スレあり、ロクロ右回転	重ね焼きの痕跡あり
78	坏 須 恵 器	口-12.9、底-7.0、高-3.5 $\frac{1}{2}$ 完存	砂粒多く含む。還元、やや硬質。灰白色	体下部で内湾のカーブをもち、口縁部わずかに外反する。底部回転糸切り、ロクロ右回転	
79	坏 須 恵 器	口-13.0、底-8.2、高-3.6 $\frac{1}{2}$ 完存	砂粒多く含む。還元、やや硬質。灰白色	腰部で張りをもち、体部直行してひろがる。口縁端部丸味あり。底部回転糸切り、ロクロ右回転	
80	碗 須 恵 器	底-[8.0]、高台径-[9.3]、高-1.9 $\frac{1}{8}$	砂粒含むがきめ細かい。還元、やや硬質。灰白色	底部のみ残存する。底面平らで、大型の器。底部回転糸切り、貼付高台高台断面、外側へへの字にひろく台形、体部周辺、故意の打ち欠きあり	内底面、スレあり、周辺の打ち欠きとあわせて転用であろう
81	砥 石	縦-5.7、横-5.7、厚-2.6 $\frac{1}{2}$ 完存	材質一角閃石安山岩	不定形、表裏と上端面に、使用及び調整痕あり	
82	甕 土 師 器	口-[11.0]、高-(7.9) $\frac{1}{2}$	砂粒多く、輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色~にぶい褐色	体部丸い、小型甕。頸部、自然にくびれ、たちあがって、口縁部わずかに外反。内側には、二段の稜をもつ体上部、ヨコヘラケズリ、薄手均質	台付か(?)

第6章 検出された遺構と遺物

83 4区17号 住	甕 土師器	口-[13.0]、高- (14.1)○ $\frac{1}{4}$	砂粒多く、黒色輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	体部中位で最大径をもつ、中型の甕頸部しまつてたちあがり、口縁部外反。口頸部内側に二段の稜あり。体上部ヨコ、下部タテヘラケズリ	台付か No82と同型の大小である
84	甕 土師器	口-[21.0]、高- (4.6)○ $\frac{1}{6}$	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色	大型の甕。頸部しまつてたちあがり口縁部外反。口縁部内側にかえりあり。薄手、均質	
85	砥石	縦-(13.3)、横- 6.3、厚-6.1○ $\frac{1}{2}$	材質一多孔質安山岩	四角柱状の砥石。自然丸石を利用して、三面を砥面としている	
1007 参	鉢 須恵器	口-15.2、底-6. 3、高-6.2○略完 存	砂粒、石粒を含む、粗。還元、硬質。灰色	体部中位で内湾してたちあがる。口縁部外反、口縁内側に稜をもつ。底部回転糸切り、底部外縁ヘラケズリ調整、ロクロ右回転	堀方出土 焼きゆがみあり 外面、自然釉かかる
1008 参	坏 須恵器	口-[12.5]、底- 8.0、高-3.4○ $\frac{1}{5}$	砂粒を含む、黒色斑文あり。還元、硬質。紫がかった灰色	体部中位でわずかに内湾してひろがる。口縁部やや外反。口縁部薄手で丸味をもつ。底部回転糸切り、ロクロ右回転。薄手、均質で良質	堀方出土 秋間産か(?)
1009 参	坏 須恵器	口-[13.0]、底- 7.7、高-3.5○ $\frac{1}{5}$	砂粒を含む。還元、やや硬質。灰色	腰部で張りをもって、内湾しながらひろがり、口縁部わずかに外反。底部回転糸切り。ロクロ右回転	堀方出土 No78と近似する
1010 参	碗 須恵器	口-[16.4]、底- 7.5、高-6.5○ $\frac{1}{2}$	砂粒、白色石粒を多く含む、粗。還元、やや硬質。灰色	大型の高台付碗。体部わずかに内湾しながらひろがる。口縁部平坦、底部、回転糸切り。貼付高台、高台断面、台形。ロクロ右回転	堀方出土 “鉢”とすべきか
1011 参	甕 土師器	口-12.2、底-5. 2、高-(12.0)○ 脚台部欠損 $\frac{1}{5}$	砂粒、輝石を含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色	小型台付甕。底部小さく、体上部で内湾。頸部凹線をめぐらして、くびれ、たちあがり、口縁直下で外反。口頸部内側に、二段の稜線めぐる。体上部ヨコ、下部タテヘラケズリ。脚台部貼付、ヨコナデ	堀方出土 加熱の痕跡あり
1012 参	坏 土師器	口-[12.2]、底- [8.6]、高-2.7 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。橙色	平底。体部わずかに内湾してひろがる。口縁部丸味あり。底部手持ちヘラケズリ。体下部ナデ	堀方出土
1013 参	坏 須恵器	口-[13.8]、底- [8.2]、高-3.5 ○ $\frac{1}{4}$	砂粒を多く含む。還元、やや硬質。灰白色	腰部張りをもち、内湾しながらひろがる。体上部でわずかに稜をもつ。底部回転糸切り、ロクロ右回転	堀方出土 No1009、No78と 似る
1014 参	坏 須恵器	口-[12.6]、底- 7.3、高-3.6○ $\frac{1}{5}$	砂粒を含むが細密。還元、硬質。灰白色	腰部に稜をもち、体部直線的にひろがり口縁部わずかに外反。底部回転糸切り、ロクロ右回転	堀方出土
1015 参	坏 土師器	口-[13.3]、底- [11.3]、高-2.4 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色	平底、体部たちあがり、口縁部ゆるい内湾。底部手持ちヘラケズリ、体下部ナデ、口縁部ヨコナデ	堀方出土

## 4区18号住居跡（第224図、第52表、図版96・97）

本住居跡は、基本土層第4層で確認された。住居跡の中央部を斜めに4区1号溝が重複していることや、確認時、床面の一部が露呈していたこともあり、旧状の一部を失う。規模は、東辺で3.65m、南辺で2.80mを測り、方位は南辺でN-76°-Eである。平面形は、東北隅が少し突出する方形を呈するが、南北が少し長い。床面は、第4層を踏み固めているが少し軟弱である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺中央北寄りに焼土と炭化物の分布が見られ、痕跡と思われる。遺物は、推定のカマド及びその周辺から、土師器の甕、坏等が少量出土している。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代（9世紀前葉）とする。（女屋）



第224図 4区18号住居跡遺構、遺物図

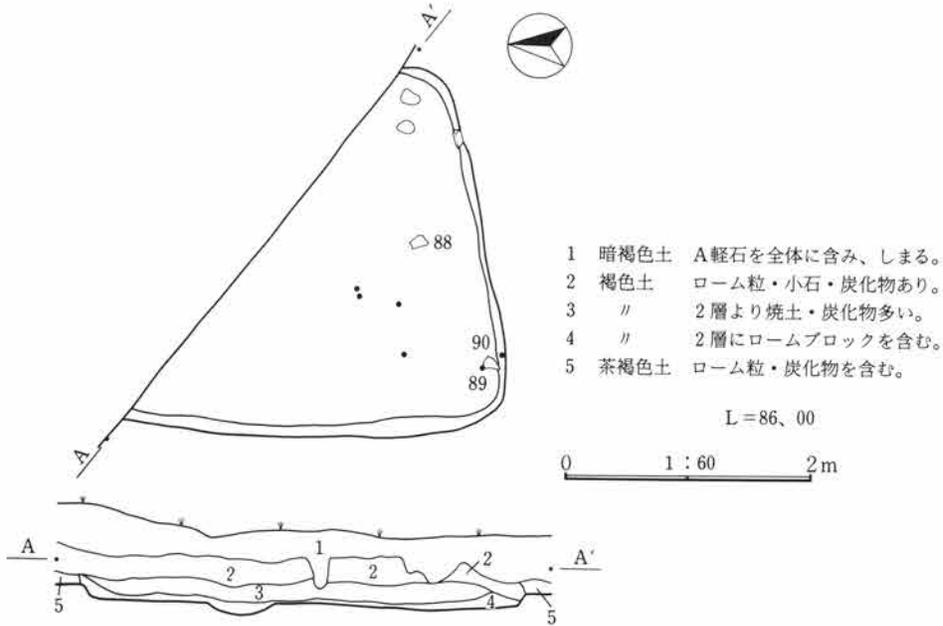
第52表 4区18号住居跡出土遺物観察表

(第224図、図版96)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
86	坏 須恵器	口-[12.6]、底-[7.3]、高-3.7 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	平底、体部中位で稜をもち、たちあがってひろがる。口縁端部丸味あり 底部回転糸切り、ロクロ右回転	重ね焼き痕あり

第6章 検出された遺構と遺物

87 4区18号 住	坏 須恵器	口-[12.8]、底-[8.6]、高-4.0 ○ $\frac{1}{3}$	砂粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色	腰部で稜をもち、内湾のカーブでたちあがる。口縁部わずかに外反。底部回転糸切り、ロクロ右回転	重ね焼き痕あり No86と焼成、成整形とも近似
------------------	----------	-------------------------------------------	---------------------	-----------------------------------------------	----------------------------



第225図 4区19号住居跡遺構図

4区19号住居跡 (第225・226図、第53表、図版96・97)

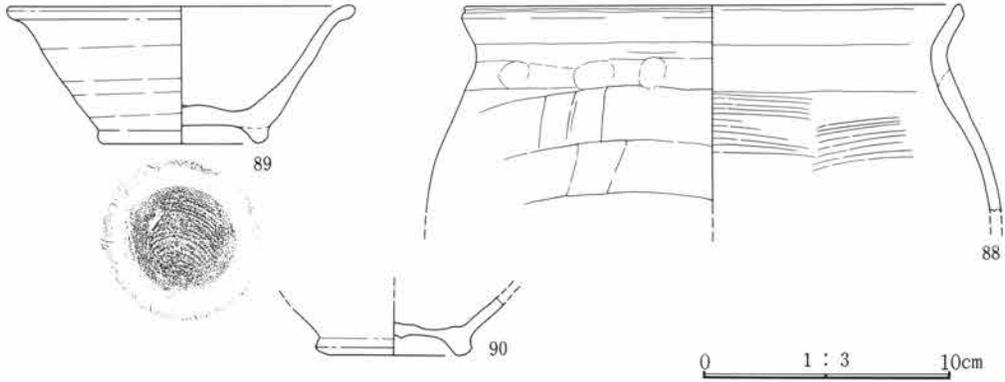
本住居跡は、基本土層第4層で確認された。隣接する18号住居跡と同様、確認面が浅いこと、住居跡の約半分が調査区外のため、カマド、貯蔵穴等不明部分が多い。規模は、確認範囲で西辺3.10m、南辺は2.92mを測り、方位は南辺でN-74°-Eである。平面形は、南北に少し長い方形を呈すると推定される。柱穴、周溝は確認されなかった。床面は、第4層を踏み固めているが、やや軟弱である。遺物は、南辺寄りで土師器の甕等が出土している。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代(10世紀初頭)とする。(女屋)

第53表 4区19号住居跡出土遺物観察表

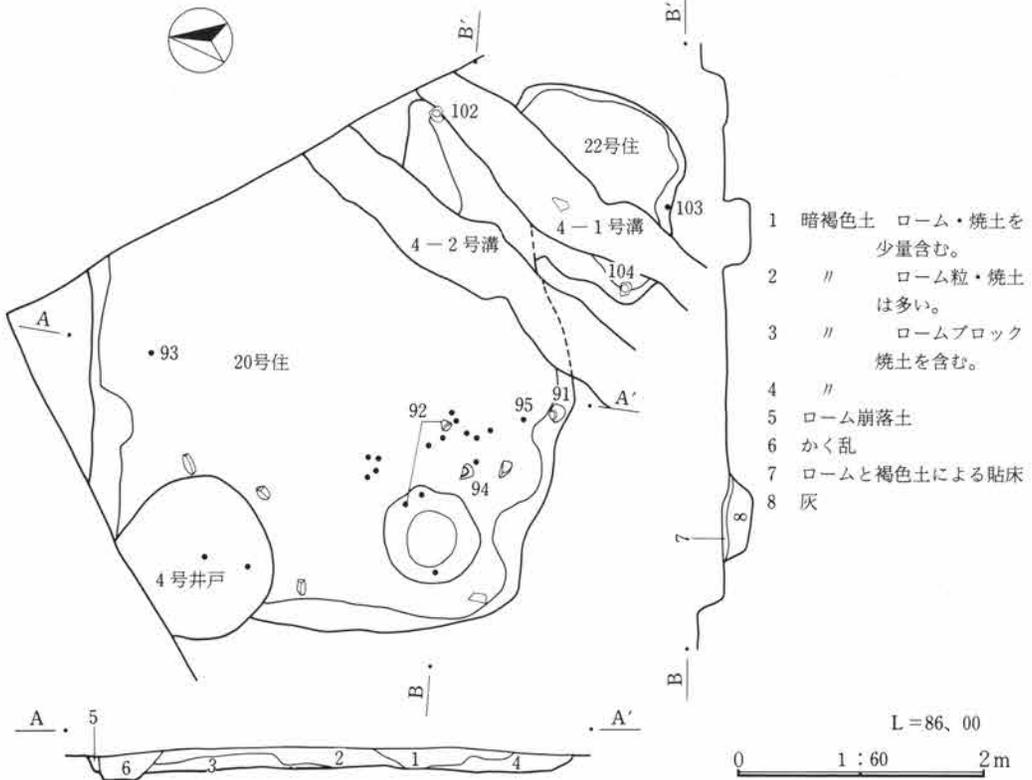
(第226図、図版96)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
88	甕 土師器	口-[20.4]、高-(8.4) ○ $\frac{1}{3}$	砂粒を含み、輝石を含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色	コの字状口縁の甕。体部~頸部ゆるいカーブ、口縁部ゆるい外反、口縁端部肥厚、外側に沈線めぐる。器肉厚手、体上部ヨコハラケズリ	

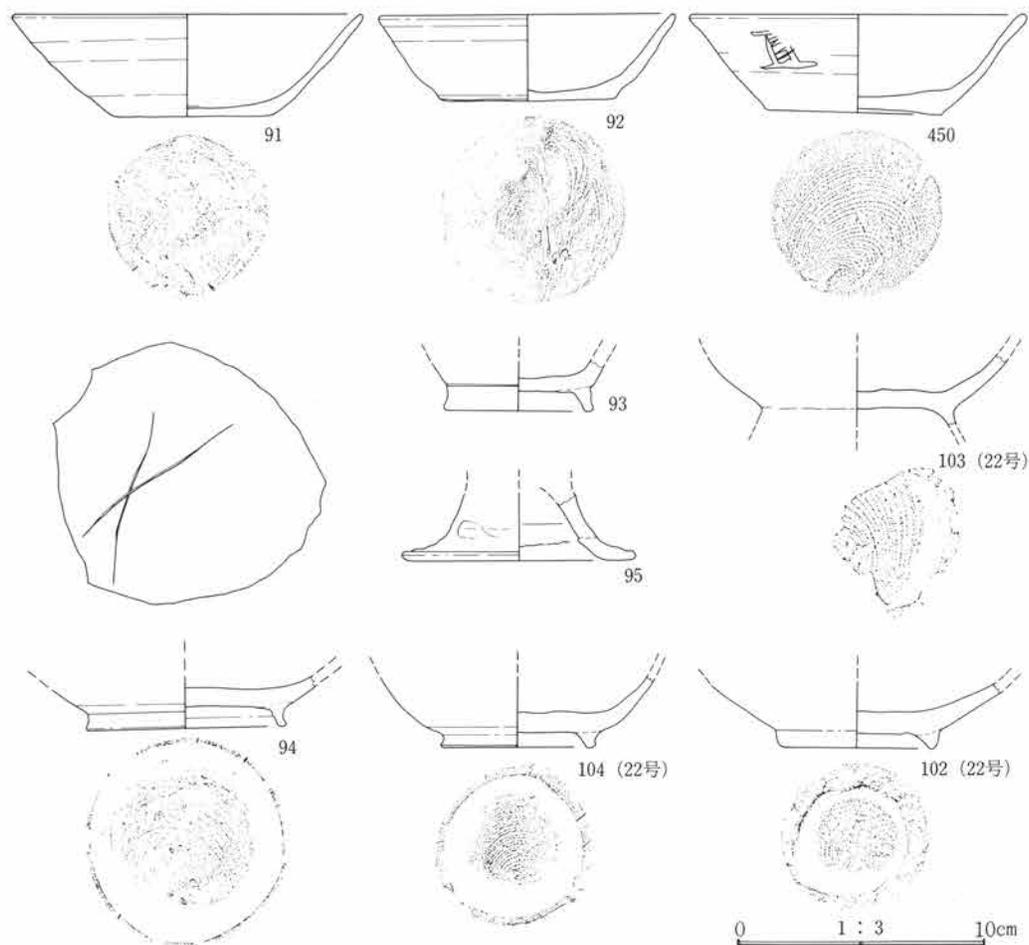
89 4区19号 住	埴 須恵器	口-[14.0]、底- 7.0、高-5.5〇 $\frac{1}{2}$	砂粒多く、黒色輝石を含 む。還元、やや硬質。に ぶい黄橙色	腰部張りを持ち、体部外反してひら く。口縁部肥厚してさらに外反。底 部回転系切り痕あり。貼付高台、高 台断面、かまぼこ状	底部円盤別作り 体部粘土積痕残 る
90	埴 須恵器	底-6.3、高-(2. 1) 〇 $\frac{1}{4}$	砂粒多く、黒色輝石を含 む。酸化、やや硬質。橙 〜 にぶい橙色	体部内湾のカーブを有する。底部回 転系切り、貼付高台、高台断面、直 行する台形	



第226図 4区19号住居跡遺物図



第227図 4区20号、22号住居跡遺構図



第228図 4区20号、22号住居跡遺物図

4区20号、22号住居跡（第227・228図、第54表、図版98）

両住居跡とも基本土層第4層で確認された。両住居の重複部は2条の溝が切断していて、遺構からの前後関係は不明である。

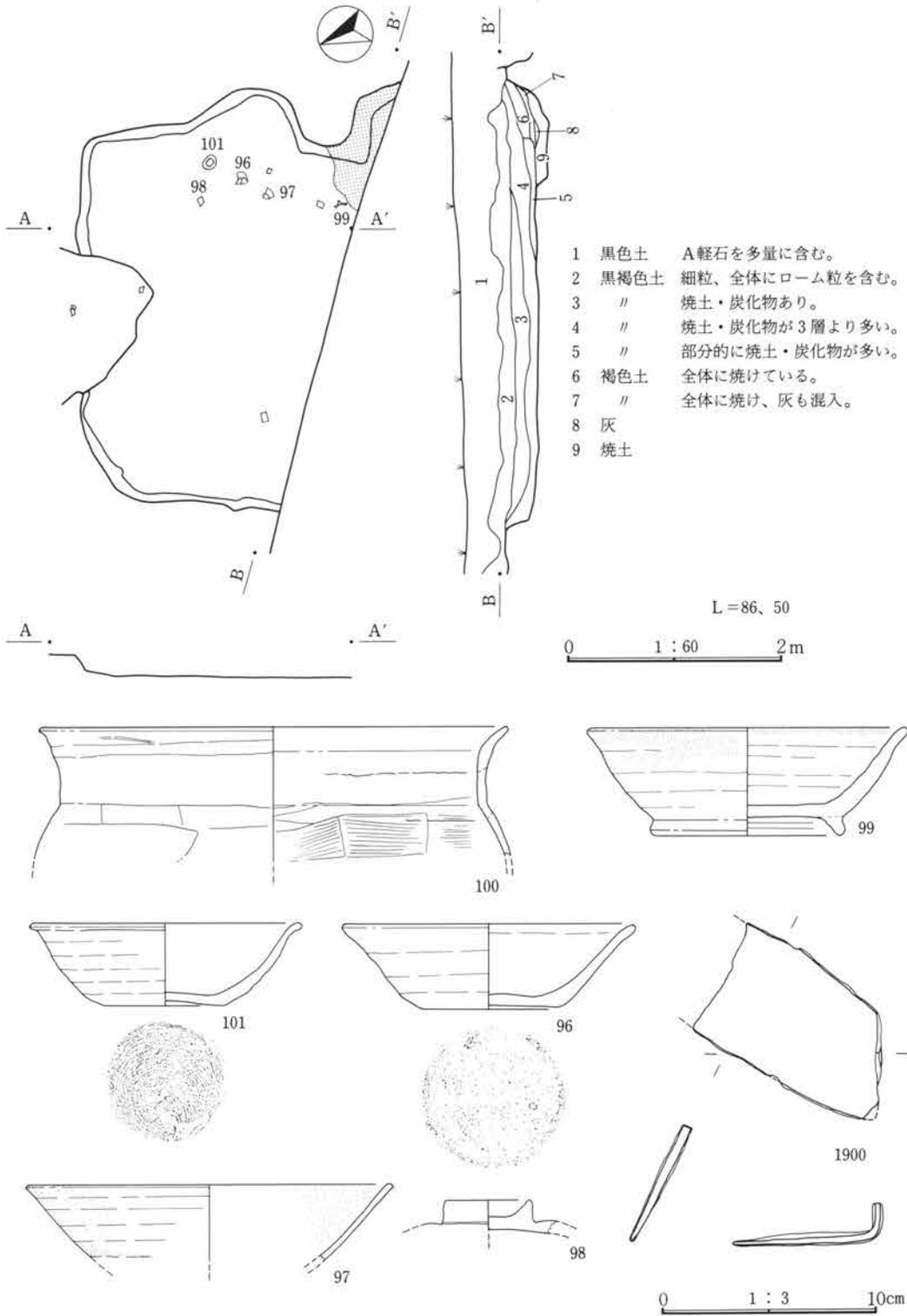
20号住居跡の東部及び西北隅は市道のため未調査であり、4号井戸によって切られている。東西辺は現状で4m程まで確認されている。南北辺は3.9mである。平面形は東西にやや長い方形を呈すると思われる。方位はN-85°-Eである。覆土はレンズ状の堆積を示し、暗褐色土中に焼土を多く含む。壁面は全体に残りが悪いが、比較的良好的な西辺では20cmの高さがあり、傾斜している。床面はロームを掘りくぼめて構成されるが、あまり踏み固めた様子が見られない。柱穴、周溝は認められない。カマドは焼土の分布と同時期住居跡の傾向から見て、東辺に付設されたものと思われる。西南隅に径80cm、深さ25cmのピットがあり、灰がたまっていた。出土遺物は少なく、小破片が多い。西南より比較的まとまって坏、高台付埴、台付甕等がある。

22号住居跡は20号の東南隅寄りに位置する。中央を溝で切断されているため、詳細は不明である。一辺1.45mのほぼ正方形を呈すると思われる。出土遺物には高台付碗が数個あるが、カマドや柱穴などの付属施設は不明である。規模や施設の存否から見て、住居の機能はなかったものと思われる。時期は出土遺物から見て20号は9世紀中葉、22号は9世紀後葉を中心とした頃か。(桜場)

第54表 4区20号、22号住居跡出土遺物観察表

(第228図、図版 98)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
91 4区20号住	坏須恵器	□-[14.2]、底-6.6、高-4.1○ $\frac{1}{4}$	砂粒多く、輝石を含む。還元、やや軟質。燻し、黒色	平底、体部直線的にひろがる。底部回転糸切り。体部ナデ、ていねいな作り。器肉、均質。ロクロ右回転	底部内面、粘土塊貼付補修
92	坏須恵器	□-[12.0]、底-[7.0]、高-3.5○ $\frac{1}{4}$	砂粒含むが、細かい。還元、やや硬質。灰黄色	平底、底部よりわずかにたちあがって、腰部張りをもつ。体部直行してひろがる。底部回転糸切り。ロクロ右回転、体部ナデ調整良好	
93	碗須恵器	底-[6.0]、高-(1.8)○ $\frac{1}{4}$	砂粒含む。還元、硬質。灰色	小さい底部より、体部急速にたちあがりみせる。底部回転ヘラケズリ調整、貼付高台、高台断面、台形	
94	碗須恵器	底-8.0、高-(1.6)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒含む。還元、硬質。灰白色	高台付大型の碗。底部回転糸切り、貼付高台、断面、外反する、三角	内底面にヘラ記号あり「×」
95	甕土師器	脚裾径-[9.4] 高-(2.7)○ $\frac{1}{6}$	砂粒含む、細かい。酸化、軟質。黒褐色	台付甕。脚部、ハの字状にひらき、裾部、外側にかえる。ヨコナデ	
102 4区22号住	碗須恵器	底-6.0、高-(2.4)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。褐灰色~灰黄褐色	高台付碗。底径に対して体部大きくひらく。底部回転糸切り、高台断面、丸い台形。ロクロ右回転、貼付高台	重ね焼き痕あり 体部故意の打ち欠きで九角形
103	碗須恵器	底-[8.3]、高-(2.7)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰色	大型で身の深い高台付碗。底部回転糸切り、貼付高台、高台断面、三角形。ロクロ右回転	体部欠損、故意の打ち欠きか
104	碗須恵器	底-6.2、高-(2.7)○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含む。還元、やや硬質。浅黄色	体部内湾する高台付碗。底部回転糸切り、貼付高台、高台断面台形で端部は外側にめくれる。ロクロ右回転	体部、打ち欠き故意と思われる
450	坏須恵器	□-[13.6]、底-7.2、高-4.0○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含む。還元、やや硬質。灰色	平底。体中部でゆるく内湾して、口縁外反、端部丸味あり。底部回転糸切り、外縁スレあり。ロクロ左回転。体部粘土積痕残る。体部ヨコナデ	4-1溝出土、 4-20、21、22住と関連性あり 墨書「宜」か底部円盤別作り



第229図 4区21号住居跡遺構、遺物図

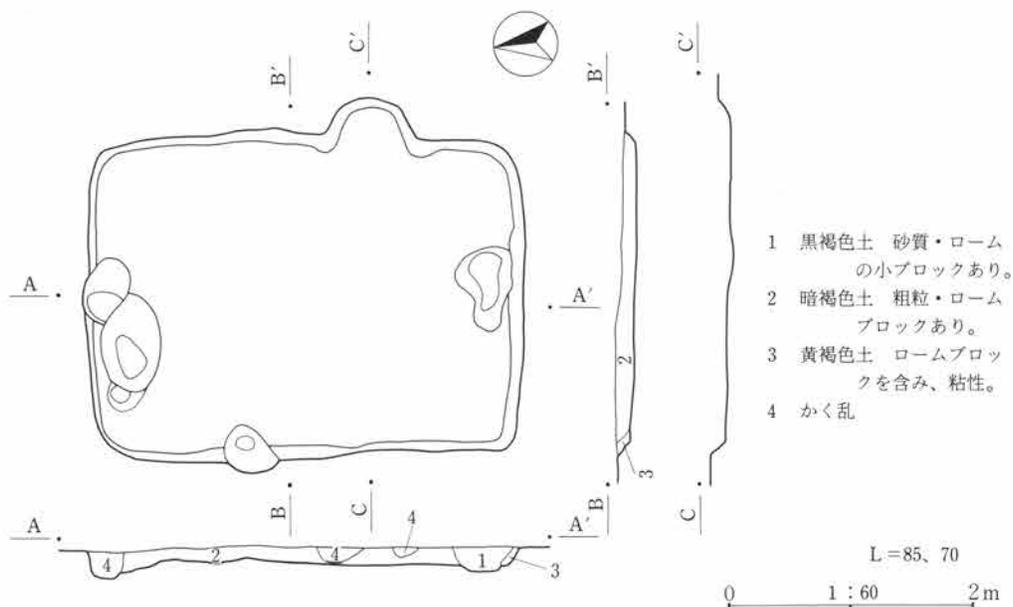
## 4区21号住居跡(第229図、第55表、図版99・101)

基本土層第4層で確認された。南半を調査区域外に、北辺は27号土壇に切られている。規模は東西辺で3.5m、南北辺は不明であるが、東辺に設けられたカマドは南寄りにあると思われることから、東西辺とほぼ同じ長さを持つものと思われる。西北隅部は丸みを持ち、東北隅部は直角に近い。東辺のカマド左方は間口1m程の半円状の張り出しを持つ。北辺の方位はE-22°-Sである。住居跡の確認は床面近くまで及んでしまったが、土層断面では黒褐色土を主体とするレンズ状の堆積が認められる。壁高は25cm程である。床面下には数ヶ所のピットを持った堀方があり、貼床が施される。柱穴、周溝はない。カマドは左半分のみを検出である。壁外に張り出す形態でカマド床面には10cm程の厚さで焼土が堆積し、その上には灰が厚く層をなしていた。遺物の出土は東半に多く、灰釉陶器皿、須恵質坏、蓋などがあるほか、西辺寄りから鉄鎌が出土している。遺構の時期は、出土遺物から9世紀後葉と考えられる。(桜場)

第55表 4区21号住居跡出土遺物観察表

(第229図、図版101)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
96	坏 須恵器	口-[13.6]、底-6.4、高-3.9○ $\frac{1}{5}$	砂粒多く含む。還元、やや硬質。灰~灰黄色	平底。腰部に稜をもち体部直線的にひらく。口縁わずかに外反、端部丸味あり。底部回転糸切り、右回転	重ね焼き痕あり
97	埴 灰釉陶器	口-[17.0]、高-(3.6)○ $\frac{1}{5}$	砂粒含むが、細密。還元、硬質。淡黄色、釉-灰白色	大型の埴。体部ゆるやかな内湾のカーブを有する。口縁部やや肥厚し、端部外反する。器肉、均質、薄手	床直 釉がかり、うすい
98	蓋 須恵器	つまみ径-4.0 高-(1.5)	砂粒含む、黒色斑文あり。還元、硬質。灰色	つまみのみ。貼付。ボタン状より中央のくぼみ大きい。断面、三角状	内面に自然釉かかる
99	埴 須恵器	口-[15.0]、底-[9.0]、高-5.0○ $\frac{1}{4}$	砂粒多く含む。還元、硬質。褐灰~灰色	体部ゆるやかな内湾のカーブをもってひらく。口縁外反し端部丸味あり。底部回転糸切り、貼付高台、ロクロ右回転、高台断面端部丸い台形	床直
100	甕 土師器	口-[21.6]、高-(6.0)○ $\frac{1}{6}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	体部丸味をもち、頸部くびれて、たちあがり、口縁部短かく外反する。内面稜二段持つ。体部ヨコヘラケズリ、体部内面ヨコハケナデ	
101	坏 須恵器	口-12.6、底-5.6、高-3.8○完存	砂粒多く含む。還元、やや硬質。灰白色	平底。体部内湾のカーブをもち、口縁部外反。口縁端部、つまみ出し。底部回転糸切り。ロクロ右回転	
1900	鉄製鎌	長-(9.1)、巾-5.9、厚-0.4	巾広の大型品、鈍鎌か。刃部直線的で、峰側の端を折り曲げて、柄着装部としている。刃部と柄の角度は、119°		



第230図 4区23号住居跡遺構図

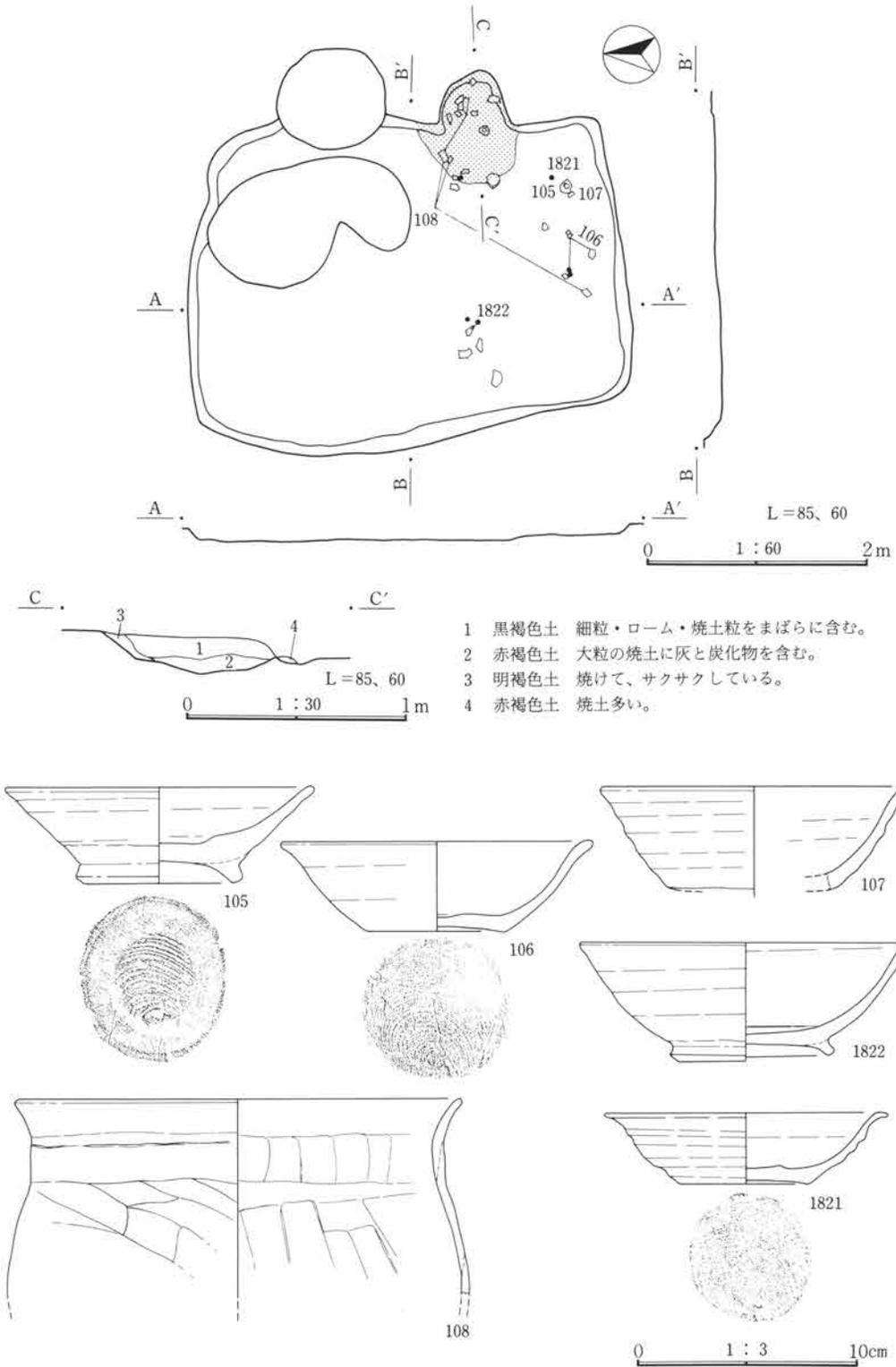
4区23号住居跡 (第230図、図版99)

本住居跡は、基本土層第4層で確認された。確認面は浅く、一部には攪乱を受けている。規模は、西辺で3.52m、南辺で2.60mを測り、方位は南辺でE-6°-Sである。平面形は、南北に長い方形を呈する。床面は、第4層を踏み固めているが壁際は軟弱である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺少し南寄りの位置で確認されたが、焼土、炭化物は僅少で遺物の出土もなかった。貯蔵穴は、東辺を除いた各辺で壁に接して小土壇数基が確認されたが、いずれも決め手を欠き確定できなかった。遺物は、全体として少なく、土師器の甕、碗、須恵器の蓋、碗の各破片が出土している。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代(9世紀後葉)とする。(女屋)

4区24号住居跡 (第231図、第56表、図版100・101)

基本土層第4層で確認された。新しい土壇により東北部の一部が攪乱されているほかは、ほぼ良好な遺存状態であった。南北に長い隅丸長方形を呈し、東辺3.5m、西辺3.9m、南辺2.5m、北辺2.7mの北半のやや広い形状である。南辺での方位はN-88°-Eである。床面直上の覆土は黒褐色土である。壁高はローム確認面から5~15cmである。床面は多くのピットからなる堀方を、粘性の強い黒褐色土で貼床にしている。柱穴、周溝は認められない。

カマドは東辺南寄りに付設される。壁外に張り出す構造で、焚口幅55cm、全長75cm程の半円形である。カマド床はU字状に掘りくぼめられ、焼土粒を含む軟かい褐色土を埋めて床を作り出す。遺物は、カマドを含む南半に集中しており、須恵質の高台付碗、碗、土師器長甕が出土している。時期は、出土遺物から9世紀後葉頃である。(桜場)



第231図 4区24号住居跡遺構、遺物図

第56表 4区24号住居跡出土遺物観察表

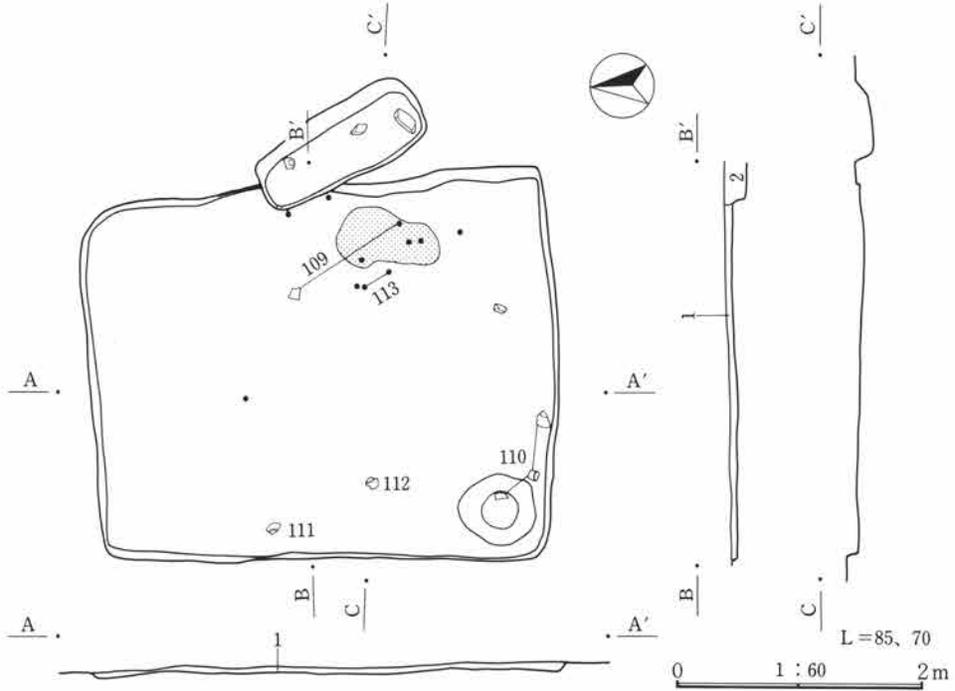
(第231図、図版 101)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
105	坏須恵器	口-[14.0]、底-7.6、高-4.3○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒多く含む。還元、やや硬質。灰黄～暗灰黄色	体部直線的にひらき、口縁直行。口縁端部内側に肥厚して丸味あり。底部回転糸切り痕あり。貼付高台、断面台形。体部粘土積痕あり。ロクロ右回転	重ね焼き痕あり 底部円盤別作り
106	坏須恵器	口-[14.0]、底-[6.2]、高-4.0○ $\frac{1}{2}$	白色砂粒を多く含む。還元、やや硬質。灰色	平底。体部わずかに内湾し、口縁部外反。口縁端部肥厚して、丸味もつ。底部回転糸切り。ロクロ右回転	
107	埴須恵器	口-[14.0]、底-[6.4]、高-(4.7)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。にぶい黄色	高台付(?)埴。体部ゆるい内湾。口縁端部丸味あり。体部ロクロ目。粗な作り	
108	甕土師器	口-[20.2]、高-(8.8)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色～にぶい橙色	コの字状口縁の甕。頸部のしまり弱く、口頸部内側の稜ゆるやか。口縁端部薄手。体上部ヨコヘラケズリ。器肉、やや厚手	
1821 参	坏須恵器	口-[12.8]、底-5.8、高-3.2○完存	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	平底。体部内湾してひろがり、口縁部強い外反。口縁端部丸味あり。底部回転糸切り。ロクロ右回転	内外、炭化物付着
1822 参	埴須恵器	口-[15.1]、底-7.4、高-5.3○ $\frac{1}{2}$	砂粒を多く含む。酸化、やや硬質。淡黄～黄灰色	やや大ぶりの埴。体部ゆるやかに内湾してひろがり、口縁部わずかに外反。口縁端部肥厚して丸味もつ。底部回転糸切り。貼付高台、断面台形で端部外側にめくれる。ロクロ右回転。体部ナデ調整ていねい	

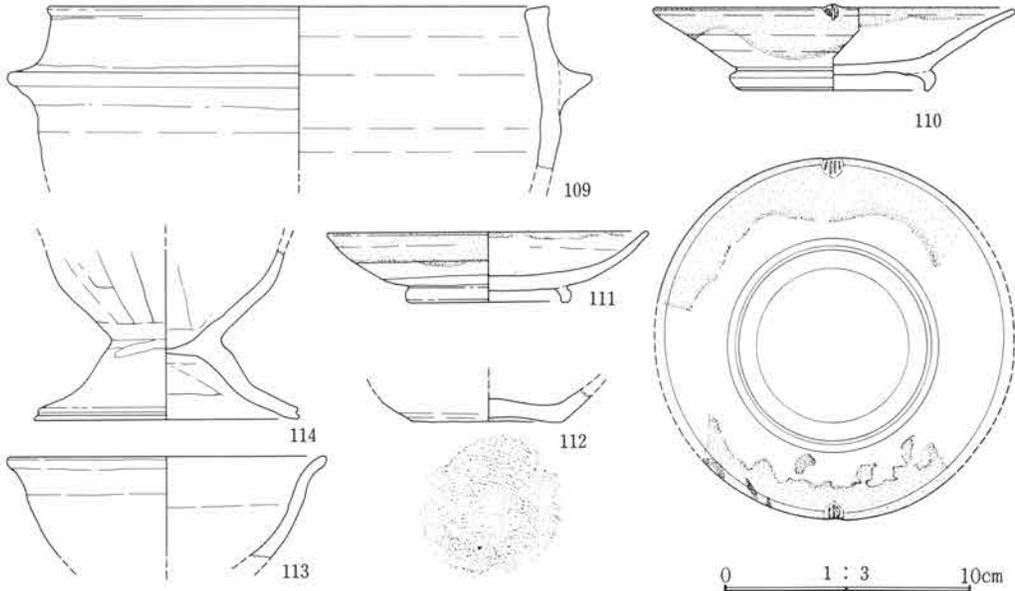
## 4区25号住居跡(第232図、第57表、図版101)

基本土層の第4層で確認された。東辺中央部を長方形土壇状のもので切られ、中央部やや北寄りを柱穴が切っている。規模は東辺3.80m、西辺3.65m、南辺3.15m、北辺2.85mを測り、歪みを持った長方形を呈している。方位は北辺でE-1°-Sを示す。覆土は自然に埋没した様相を示す。壁は平均9cmの高さを確認しただけである。床面はほぼ平坦で、全面がやや締っている。円形や楕円形を呈する床面下の落ち込みが、中央やや西寄りに2基、東辺寄りに1基、南辺やや東寄りに2基存在する。周溝、柱穴はない。カマドは不明であるが、東辺寄り中央の床面上に焼土が分布していた。また、貯蔵穴と思われるピットが南西隅にある。径60cmの円形を呈し、深さは32cmで、断面は丸底状をなしている。遺物の出土状態としては、東辺寄りの焼土部分から土師器甕、羽釜、埴等の小破片が出土し、貯蔵穴と思われるピットと西辺やや北寄りの部分からは灰釉陶器片が出土した。また、南辺部分の床面下落ち込みからは土師器甕の小破片が出土し、中央部やや

西南寄りの落ち込みからは埴の小破片が出土した。本住居跡の時期は、出土遺物から平安時代（10世紀中葉）と考えられる。（下城）



- 1 暗褐色土 粗粒・ロームブロックを含み、焼土粒あり。  
 2 // 軽石を含み、しまりがいい。



第232図 4区25号住居跡遺構、遺物図

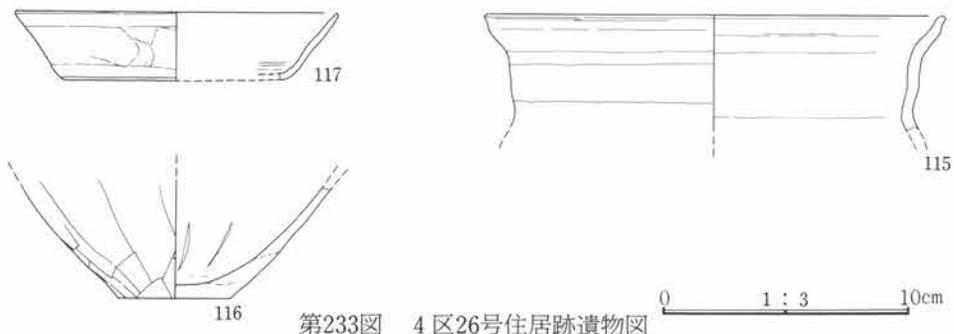
第57表 4区25号住居跡出土遺物観察表

(第232図、図版 101)

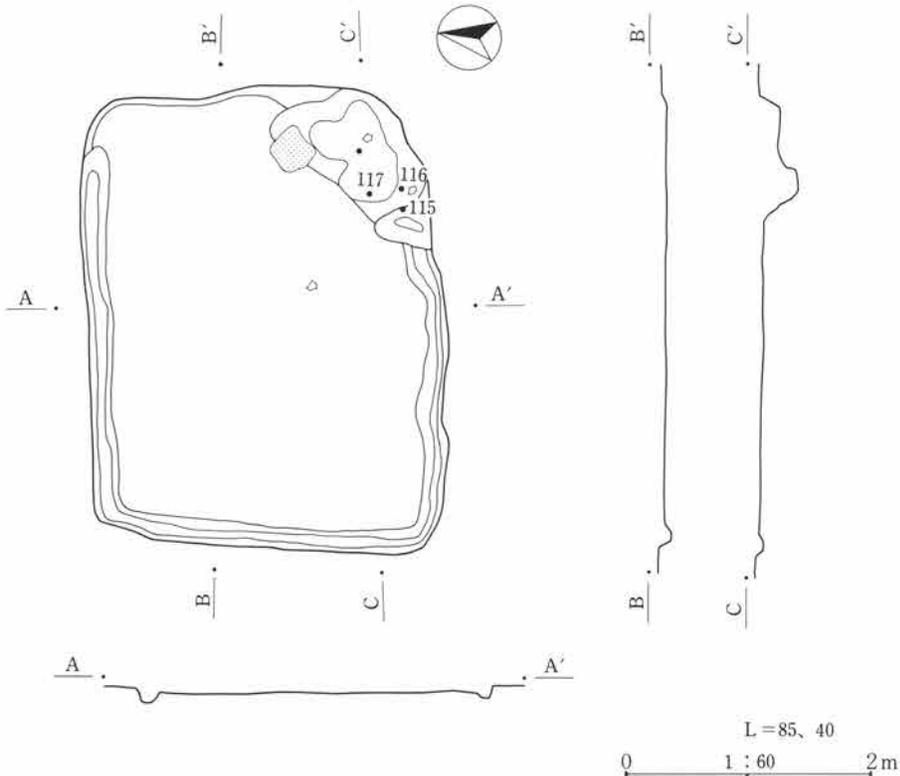
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
109	羽釜	口-[20.4]、高-(6.5) 〇 $\frac{1}{4}$	砂粒を多く含む、粗。還元、やや硬質。灰白色、内面黒色	口縁部わずかに内傾する。口縁端部平坦面あり、鑿断面丸味のある三角、体部ロクロナデ調整	
110	皿 灰釉陶器	口-[14.6]、底-7.5、高-3.3 〇 $\frac{3}{4}$	砂粒含むが、細密。還元、硬質。灰白色～浅黄色、釉-灰緑色	体部直線的にひらき、口縁直行、口縁端部薄手。底部回転ヘラケズリ調整後貼付高台、高台断面、厚手の三日月状。口縁部現存で一对のつまみあげあり、輪花状となるか。器肉、やや厚手、均質。釉、つけがけ	重ね焼き痕あり
111	皿 灰釉陶器	口-[13.0]、底-[6.6]、高-2.8 〇 $\frac{1}{4}$	砂粒含むが、細密。還元、硬質。灰白色、釉-灰白色	体部中位で内湾する。口縁端部、つまみなどによる、わずかな外反、丸味をもつ。底部～体中部まで回転ヘラケズリ調整。貼付高台、高台断面丸味のある台形	重ね焼き痕あり
112	坏 須恵器	底-6.0、高-(1.5) 〇 $\frac{1}{8}$	砂粒、白色石粒含む、粗。還元、やや硬質。灰色	底部、回転糸切り、ロクロ右回転	
113	碗 須恵器	口-[13.0]、高-(4.0) 〇 $\frac{1}{4}$	砂粒多く含む。酸化、やや硬質。にぶい赤橙色	体部内湾し、口縁直下に凹線めぐり、口縁部外反、端部肥厚する。体部ロクロナデ調整	
114	甗 土師器	底-4.4、脚裾径-(10.8) 〇 $\frac{1}{10}$	砂粒多く含む。酸化。軟質。赤褐色	台付甗。底部～脚台部のみ残る。脚部中位で折れまがって八の字状にひろがる。端部肥厚して沈線めぐる	

4区26号住居跡(第233・234図、第58表、図版100)

本住居跡は、基本土層第4層で確認された。規模は、西辺で2.90m、北辺で3.68mを測り、方位は北辺でN-80°-Eである。平面形は、東西に長い方形を呈する。床面は、ローンを踏み固めて、平坦で堅緻である。東辺を除いた各辺では、上幅約10cm、深さ約5cmの周溝が確認された。柱穴



第233図 4区26号住居跡遺物図



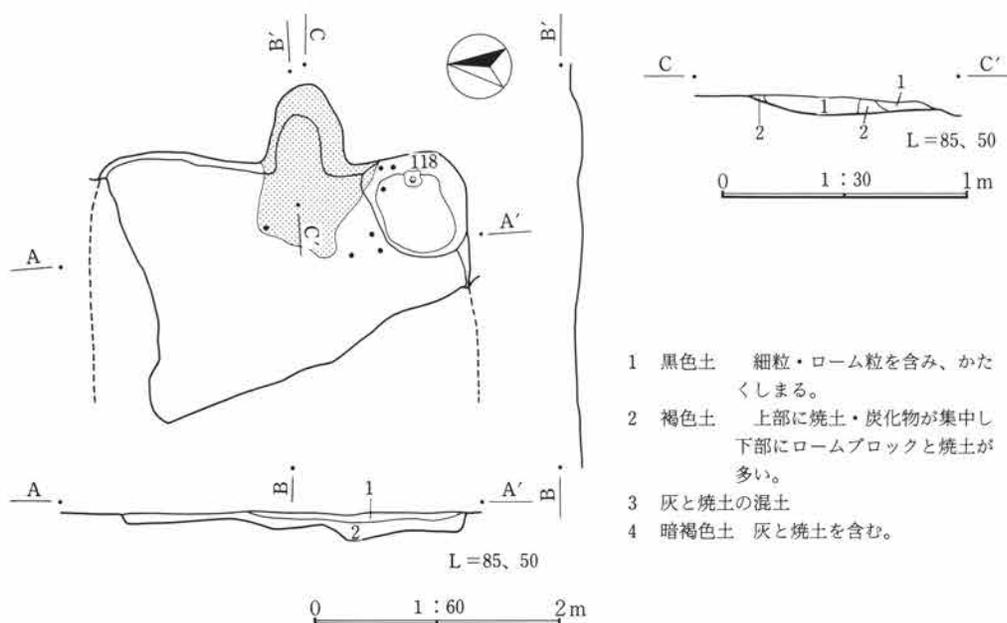
第234図 4区26号住居跡遺構図

は、確認されなかったが、壁外の各隅近くにピットが7ヶ所見られた。カマドは、東辺中央部で若干量の焼土が見られたが、その痕跡と見られる。貯蔵穴は、東南隅を占める位置に不整形の土壇状のものが見られ、遺物の伴出もあり可能性高い。遺物は少なく、土師器甕、坏がある。遺構の時期は、出土遺物により平安時代（9世紀後葉）とする。（新井）

第 58 表 4区26号住居跡出土遺物観察表

(第233図)

番 号	土 器 種 類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
115	甕 土 師 器	口-[18.6]、高一(4.5) $\circ \frac{1}{2}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。橙色	コの字状口縁の甕。口縁部わずかに内湾のカーブをもって、外反	
116	甕 土 師 器	底-[4.5]、高一(4.5) $\circ \frac{1}{2}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。褐色	甕の底部。底部ヘラケズリ。体下部タテヘラケズリ、内面ヘラナデ	
117	坏 土 師 器	口-[13.0]、底-[9.4]、高一2.8 $\circ \frac{1}{2}$	砂粒多く含む。酸化、軟質。にぶい橙色	平底。体部ほぼ直線的にひろく、口縁端部、薄手の仕上がり。体下部ナデ、口縁部内外、ヨコナデ	



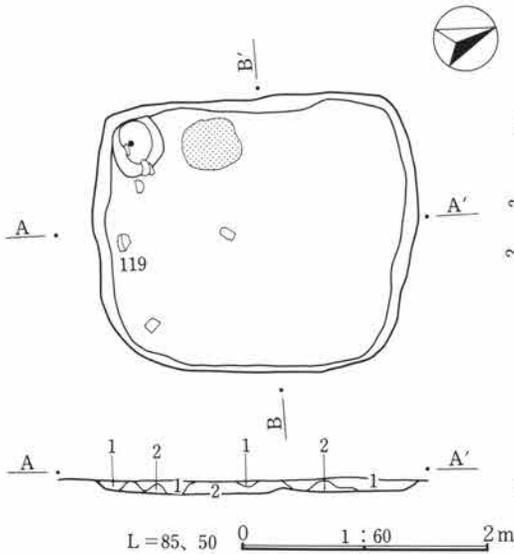
第235図 4区27号住居跡遺構図

#### 4区27号住居跡（第235・236図、第59表、図版101）

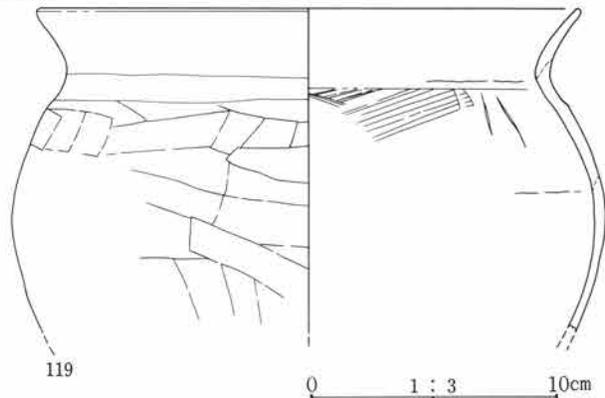
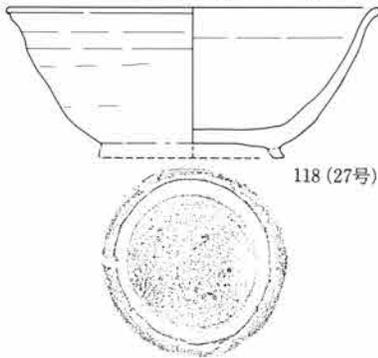
本住居跡は、基本土層の第4層で3号溝と重複して確認された。重複関係は、本住居跡が新しい。カマドのある東辺側を除いては大きく攪乱を受けている。規模は、東辺で推定3.15m、北辺側は2.15m以上となり、方位は南辺でN-86°-Eである。平面形は、東西に長い方形を呈すると推定される。床面は、ロームを踏み固め、平坦で堅緻である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の中央部で確認された。壁外に方形に伸びる堀方を持ち、暗褐色土を用いて袖としている。焼土、炭化物の量は多く、住居内へも一部が広がっている。貯蔵穴は、東南隅に接して、長径84cm、短径75cm、床面からの深さ11cmの不整形の土壇が確認された。遺物は、僅少で土師器甕、坏、須恵器碗がある。遺構の時期は、平安時代（9世紀後葉）とする。（新井）

#### 4区28号住居跡（第236図、第59表、図版101）

基本土層の第4層で確認された。3号溝を切って構築されている。規模は東辺2.30m、西辺2.61m、南辺2.22m、北辺2.13mである。平面形は各辺も丸みを持ち、各隅は丸みが大きく、歪みを持った隅丸方形を呈している。方位は南辺でE-21°-Sを示す。覆土はやや乱れているが、自然に埋没した様相を示している。壁は平均14cmの高さが確認され、斜めに立ち上がっている。床面は平坦で、全体が縮っているが、特に中央周辺が固く縮っている。全面が厚さ約3cm程の貼床で、堀方は全体に起伏がある。また、中央の南辺寄りの部分に2基の床面下の落ち込みがある。この落ち込みのうち1基は径85cm、深さ20cmで円形を呈し、断面は皿状をなしている。もう1基は径33cm、



- 1 黒色土 軽石・ローム粒を含み、かたくしまる。
- 2 黒褐色土 ローム粒多く、かたくしまる。
- 3 // 2層に焼土粒とロームブロックを混入



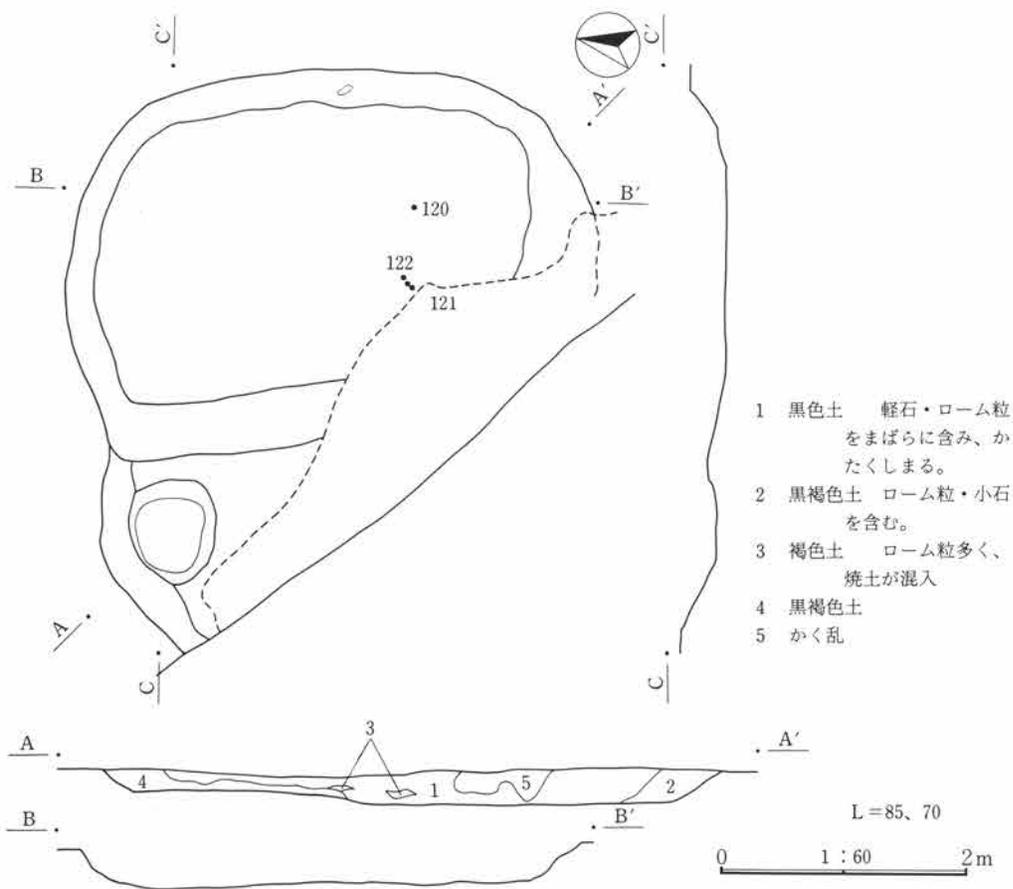
第236図 4区28号住居跡遺構、遺物図

深さ28cmで柱穴状をなしている。柱穴、周溝はない。カマドは不明であるが、西辺のやや南に寄った床面上に焼土と灰が径50cm程の範囲に散布していた。貯蔵穴と思われるピットが南西隅にあり、45×42cmの規模で不整形円形を呈し、深さは20cmで断面は2段に落ち込む丸底状を呈している。遺物は、貯蔵穴状ピットと南辺寄りの部分だけから出土し、貯蔵穴状ピットからは埴と土師器甕の小破片が出土し、南辺寄りの部分からは土師器甕と須恵器甕の破片が出土した。本住居跡の時期は、出土遺物の特徴から平安時代（9世紀初頭）と考える。（下城）

第 59 表 4区27号、28号住居跡出土遺物観察表

(第236図、図版 101)

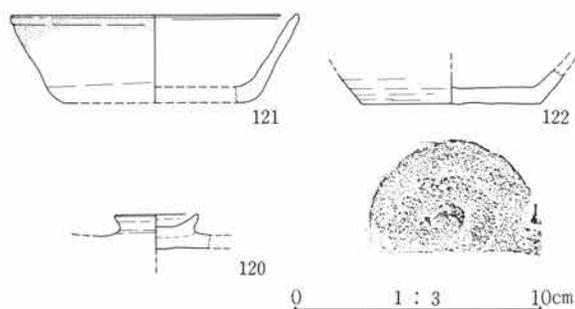
番 号	土 器 種 類	法量（口径・底径・器高） 遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
118 4区27号 住	埴 須恵器	□-[15.0]、底-7.2、高- (5.6) ○ $\frac{3}{4}$	砂粒多く、粗。還元、やや硬質。におい黄褐色	大型の高台付埴。高台部を欠く。腰部で張りをもち、体部ゆるやかに内湾、口縁端部外側へつまみ出し丸味をもつ。底部回転糸切り、貼付高台ロクロ右回転。器肉、均質、薄手	高台欠損後も使用。底部外縁、スレあり
119 4区28号 住	甕 土師器	□-[22.0]、高-(13.0) ○ $\frac{1}{2}$	砂粒多く含む。酸化、軟質。におい赤褐色	コの字状口縁の甕。体部丸味をもち頸部たちあがり弱く、口縁部外反。口縁端部薄手。体上部ヨコ、下部夕テヘラケズリ。内面ヨコヘラナデ	



第237図 4区29号住居跡遺構図

4区29号住居跡（第237・238図、第60表、図版101）

基本土層の第4層で確認された。西南半は攪乱を受け不明である。規模は東辺4.30m、北辺で3mを測る。平面形は各辺が丸みを帯びた不整隅丸長方形で、方位は北辺でN-73°-Eを示す。覆土は自然に埋没した様相を示す。壁高は平均29cmで、斜めに立ち上がる。床面は全面がやや固く締っている。周溝、柱穴はなく、カマド等の施設も不明である。遺物は碗、蓋等の小破片が少量



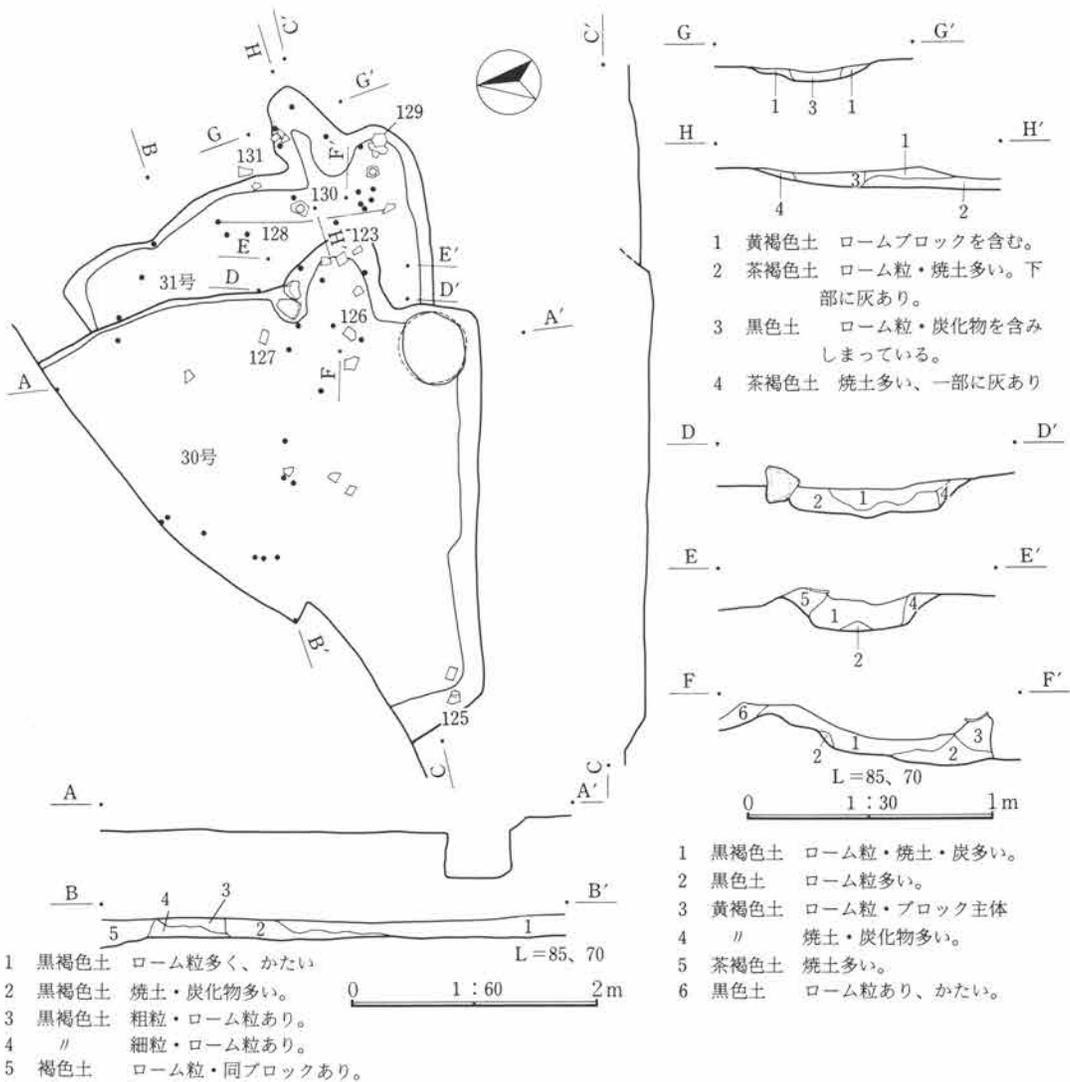
第238図 4区29号住居跡遺物図

出土しただけである。本住居跡の時期は平安時代（8世紀末葉）である。なお、西辺側に約1.5m張り出す部分があり、床面とすると本住居跡より約4cm低く、貯蔵穴様の径85cmの土壇もある。遺物はないが、残存する形状から住居跡の可能性を持つ。（下城）

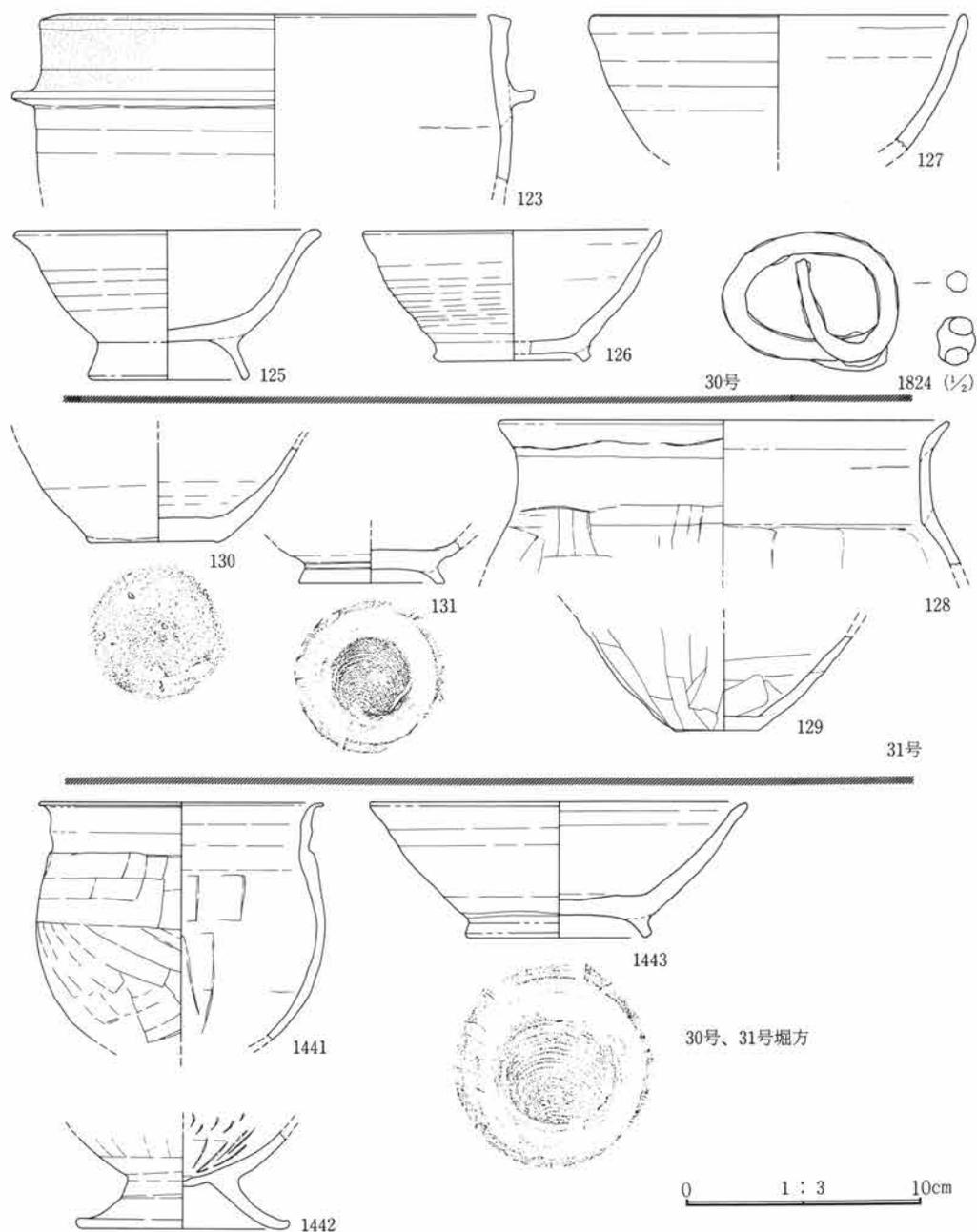
第 60 表 4 区29号住居跡出土遺物観察表

(第238図、図版 101)

番号	土器種類	法量（口径・底径・器高）遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
120	蓋 須恵器	つまみ径-3.3 高一(1.4)	砂粒含む。還元、硬質。 明青灰色	つまみ部分のみ残。貼付、ボタン状	
121	坏 須恵器	口-[11.6]、底-[7.6]、高-3.5 ○%	砂粒含む、黒色斑文あり。 還元、硬質。灰白色	平底。体部直行してひらく。口縁端部薄手。底部、回転ヘラ切り。体部ロクロナデ調整	口縁外側、自然釉付着
122	坏 須恵器	底-[7.2]、高一(1.4) ○%	砂粒含むが、細密。還元、硬質。灰白色	平底。体部直行する。底部回転ヘラ切り。ロクロ右回転	



第239図 4区30号、31号住居跡遺構図



第240図 4区30号、31号住居跡遺物図

4区30号住居跡 (第239・240図、第61表、図版102)

本住居跡は、基本土層の第4層で、31号住居跡と重複して確認された。重複関係は本住居跡が新しい。北辺側は道路敷のため未調査である。規模は、東辺で3.60m以上、南辺で推定3.45mを測り、方位は南辺でE-6°-Sである。平面形は、南北に長い方形を呈すると推定される。床面は、ロームを踏み固め、平坦で堅緻である。カマドは、東辺の南寄りで確認された。褐色土を用いて

袖材とし、角閃石安山岩の割石を袖石とする。焼土の量は多い。貯蔵穴は、東南隅に接して径約60cm、床面からの深さ約35cmの円形袋状土壇が確認された。掘り方は、しっかりしており、底面は平坦である。遺物は、カマド周辺に多く、住居内全体に見られる。羽釜を始めとして、土師器甕、須恵器高台付碗、鉄製品がある。遺構の時期は、平安時代(11世紀初頭)とする。

## 4区31号住居跡(第239・240図、第61表、図版102)

本住居跡は、30号住居跡と重複して確認された。重複関係は本住居跡が古い。規模は、東辺で3.02m、南辺で1.48m以上あり、方位は南辺でN-74°-Eである。平面形は、方形を呈すると推定されるが、東南隅が突出している。床面は、ロームを踏み固めているが、やや軟弱である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の南寄り確認された。遺存状態は悪いが、壁外に舌状に伸びる堀方を持ち、暗褐色土を用いて袖としている。遺物は、住居内全体で見られ、土師器甕、高台付碗、須恵質碗がある。遺構の時期は、平安時代(9世紀中葉)とする。(新井)

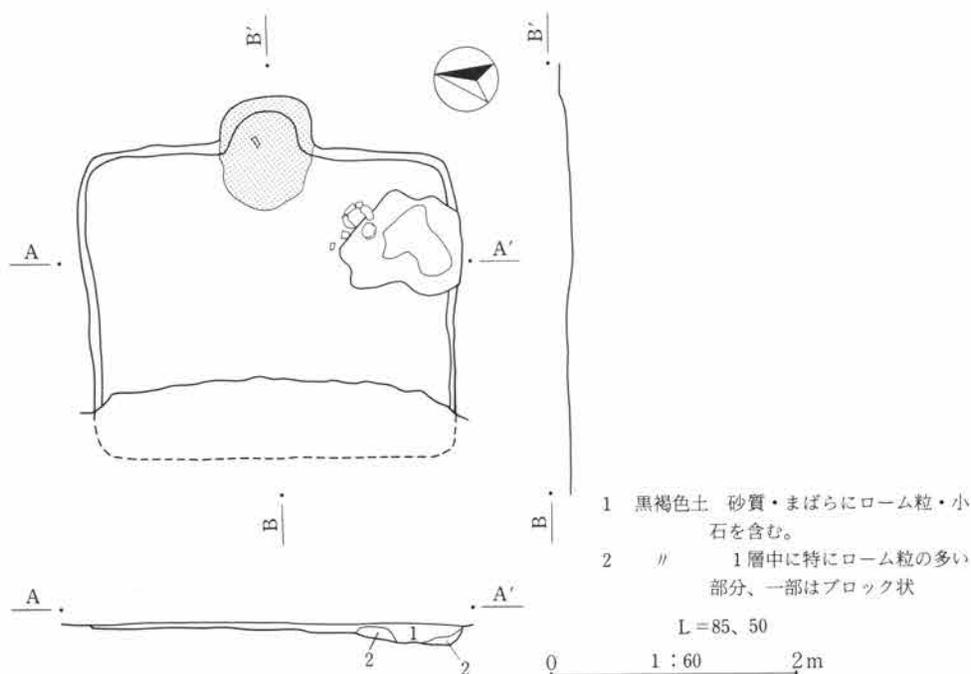
第61表 4区30号、31号住居跡出土遺物観察表

(第240図、図版 102)

番号	土器種別	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
123 4区30号住	羽釜	口-[20.0]、高-(7.0) $\circ\frac{1}{10}$	砂粒多く含む。還元、やや硬質。にぶい黄橙色	口頸部直行する羽釜。口縁端部、平坦面をもち、外斜する。罫断面、角ばった台形。体部ロクロナデ調整。器肉、薄手	
125	碗 須恵器	口-[13.0]、底-6.0、高台径-6.8、高-6.3 $\circ\frac{1}{4}$	砂粒多く含む。還元、やや硬質。灰白色	高足高台付碗。体部丸く内湾し、口縁部外反。口縁端部、肥厚して、外側へつまみ出しあり。貼付高台、ハの字に張り出し、端部丸味あり	
126	碗 須恵器	口-[12.8]、底-[6.8]、高-5.5 $\circ\frac{1}{6}$	砂粒多く含む。還元、やや硬質。灰白色	体部中位で、ゆるく内湾し、口縁部強いナデによる凹線めぐり、口縁端部、薄手の仕上げ。底部回転糸切り、底部外縁に、高台貼付。体部、細かいロクロ目	底部円盤別作りか(?)
127	碗 須恵器	口-[16.0]、高-(5.7) $\circ\frac{1}{8}$	砂粒を多く含む。還元、やや硬質。淡黄色	体部わずかに内湾してひろく。口縁端部、やや肥厚し、丸味あり。体部ロクロナデ	重ね焼き痕あり
1824	不明 鉄製品	縦-4.0、横-5.0、径-0.6	ほぼ丸い断面をもつ鉄を、螺旋状に巻き、楕円を呈する		
128 4区31号住	甕 土師器	口-[19.2]、高-(6.1) $\circ\frac{1}{10}$	砂粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい褐色	コの字状口縁の甕。頸部のしまりゆるく、立ちあがり部分長めで、口縁部短かく、外反。内面、ゆるい稜あり。器肉、やや厚手	

第6章 検出された遺構と遺物

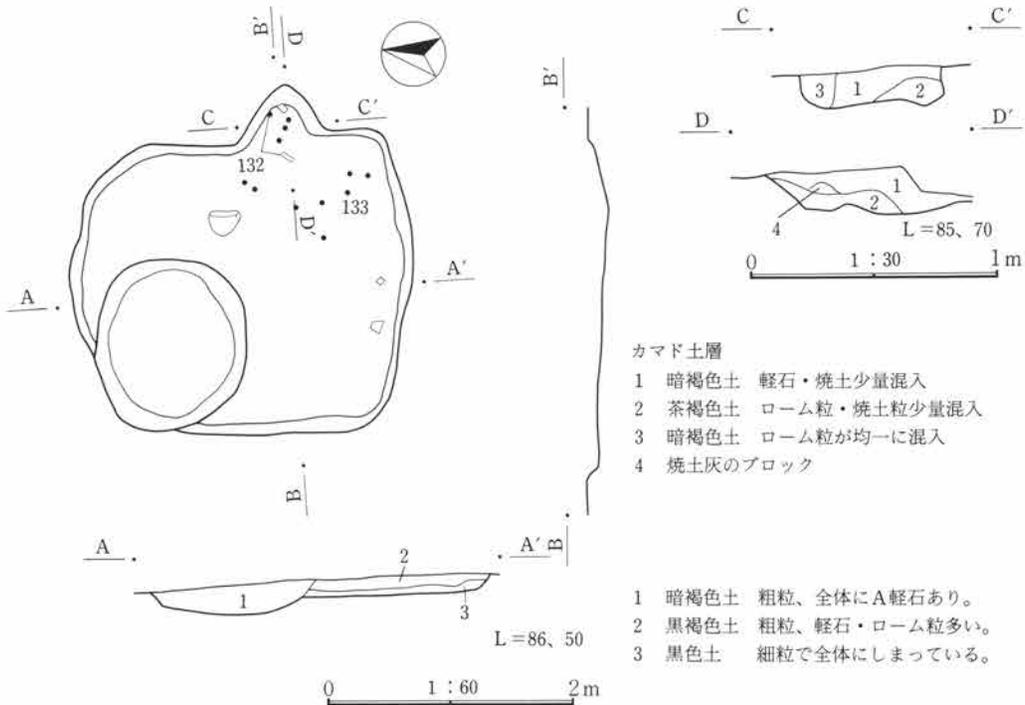
129 4区31号 住	甕 土師器	底-3.6、高-(4.0) $\circ\frac{1}{2}$	砂粒、輝石を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	小さい平底。体部ややふくらみを持つ。底部ヘラケズリ、体下部タテヘラケズリ。内面粘土紐接合痕あり	
130	埴 須恵器	底-5.6、高-(3.9) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒、輝石を含む。還元、やや硬質。灰黄色	平底。体部内湾する、やや身の深い器。底部回転糸切り。ロクロ右回転	重ね焼き痕あり
131	埴 須恵器	底-6.2、高-(1.8) $\circ\frac{1}{6}$	砂粒を含む。還元、やや硬質。灰黄色	高台付埴。底部回転糸切り。貼付高台、断面、台形。ロクロ右回転	
1441 参	甕 土師器	口-[12.0]、高-(10.0) $\circ\frac{1}{6}$	砂粒を含むが、きめ細かい。酸化、やや軟質、良好の焼き。赤褐色	小型台付甕。体部丸味強く、頸部に凹線をもつ。頸部たちあがり、口縁部短かく外反する。口縁端部外側へかえりあり。内側、ゆるい稜。体上部ヨコ、下部タテヘラケズリ	堀方出土
1442 参	甕 土師器	底-4.7、脚裾径-[8.8]、高-(3.8) $\circ\frac{1}{10}$	砂粒を含むが、きめ細かい。酸化、やや軟質。赤褐色	小型台付甕、脚台部。体部丸味をもつ。脚部八の字にひらき端部玉縁状。内外、ヨコナデ調整	堀方出土1441と同一個体と思われる
1443 参	埴 須恵器	口-[16.0]、底-7.8、高-5.7 $\circ\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を含み、粗。還元、やや硬質。灰白～灰黄褐色	体部ゆるやかに内湾してひろく、大型の高台付埴。口縁部わずかに外反、端部丸味をもつ。底部回転糸切り。貼付高台、粗雑。ロクロ右回転	堀方出土 口縁部古い欠けあり、体部スス付着——灯明用



第241図 4区32号住居跡遺構図

## 4区32号住居跡(第241図、図版103)

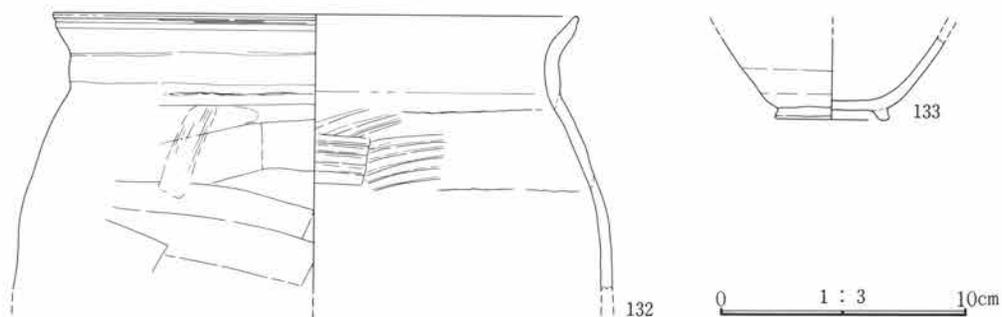
本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。西辺側は、攪乱を受け推定による。規模は、東辺で3.05m、北辺で推定2.45mを測り、方位は北辺でN-80°-Eである。平面形は、南北に長い方形を呈する。床面は、ロームを踏み固め、平坦で比較的堅緻である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の中央部で舌状の焼土分布が確認された。わずかに痕跡を残す程度で、遺存状態は悪い。貯蔵穴は、南辺の東南寄りでは浅い不整形の土壇が見られたが、判然としない。遺物は少なく、土師器甕を見る程度である。遺構の時期は、平安時代(9世紀)とする。(新井)



第242図 4区33号住居跡遺構図

## 4区33号住居跡(第242・243図、第62表、図版103)

基本土層の第4層で確認された。3号溝と1号掘立柱建物跡を切り、時期不明の円形土壇に切られている。規模は東辺2.75m、南辺2.42mである。平面形は不整隅丸方形で、方位は南辺でN-81°-Eを示す。覆土は自然に埋没している。壁高は平均16cmで、ほぼ直である。床面は平坦で、カマド前から中央周辺が非常に固く締っている。床面はほぼ全面が厚さ4cm程貼床され、床面下中央に楕円形の落ち込みがある。周溝、柱穴、貯蔵穴はない。カマドは東辺の中央やや南寄りに位置し、半円状に張り出す。焚口幅52cm、奥行45cmで焼け方は弱い。遺物は、カマド内から前にかけては土師器甕の破片があり、南辺寄りの部分は碗の破片が分布していた。本住居跡の時期は、出土遺物から平安時代(9世紀後葉)とする。(下城)



第243図 4区33号住居跡遺物図

第 62 表 4区33号住居跡出土遺物観察表

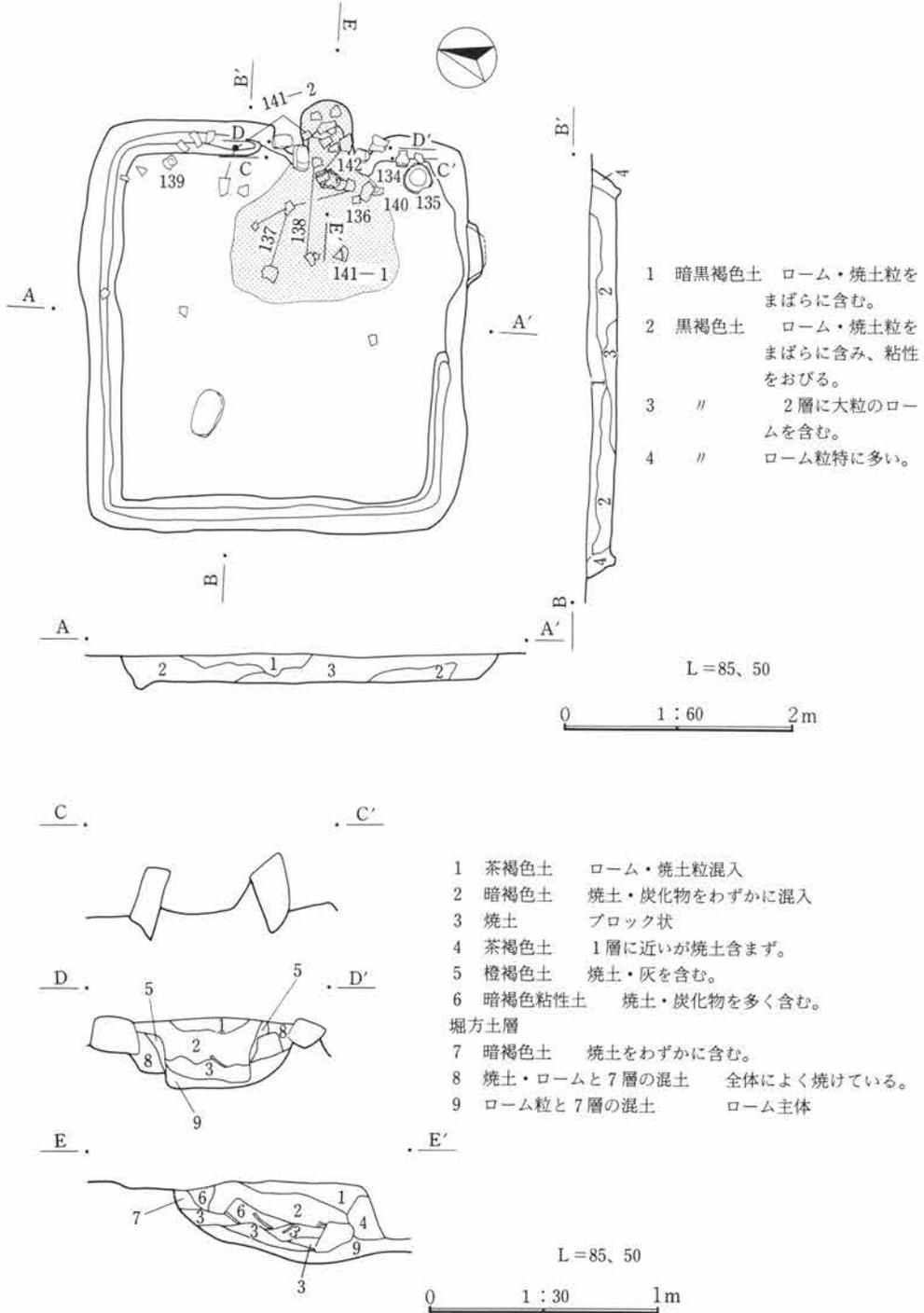
(第243図)

番 号	土器種 種	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備 考
132	甕 土師器	口-[21.0]、高-(11.0) 〇 $\frac{1}{4}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。褐色	コの字状口縁の甕。全体にゆるいコの字で、口縁端部、外側たちあがって、沈線めぐり。体上部ヨコヘラケズリ。内側ハケナデ。器内やや厚手	
133	碗 須恵器	底-[4.6]、高-(3.2) 〇小片	砂粒を多く含む。還元、やや硬質。黄灰色	底部小さく、やや深めの碗か。底部回転糸切り痕あり。貼付高台。器肉薄手	底部円盤別作り

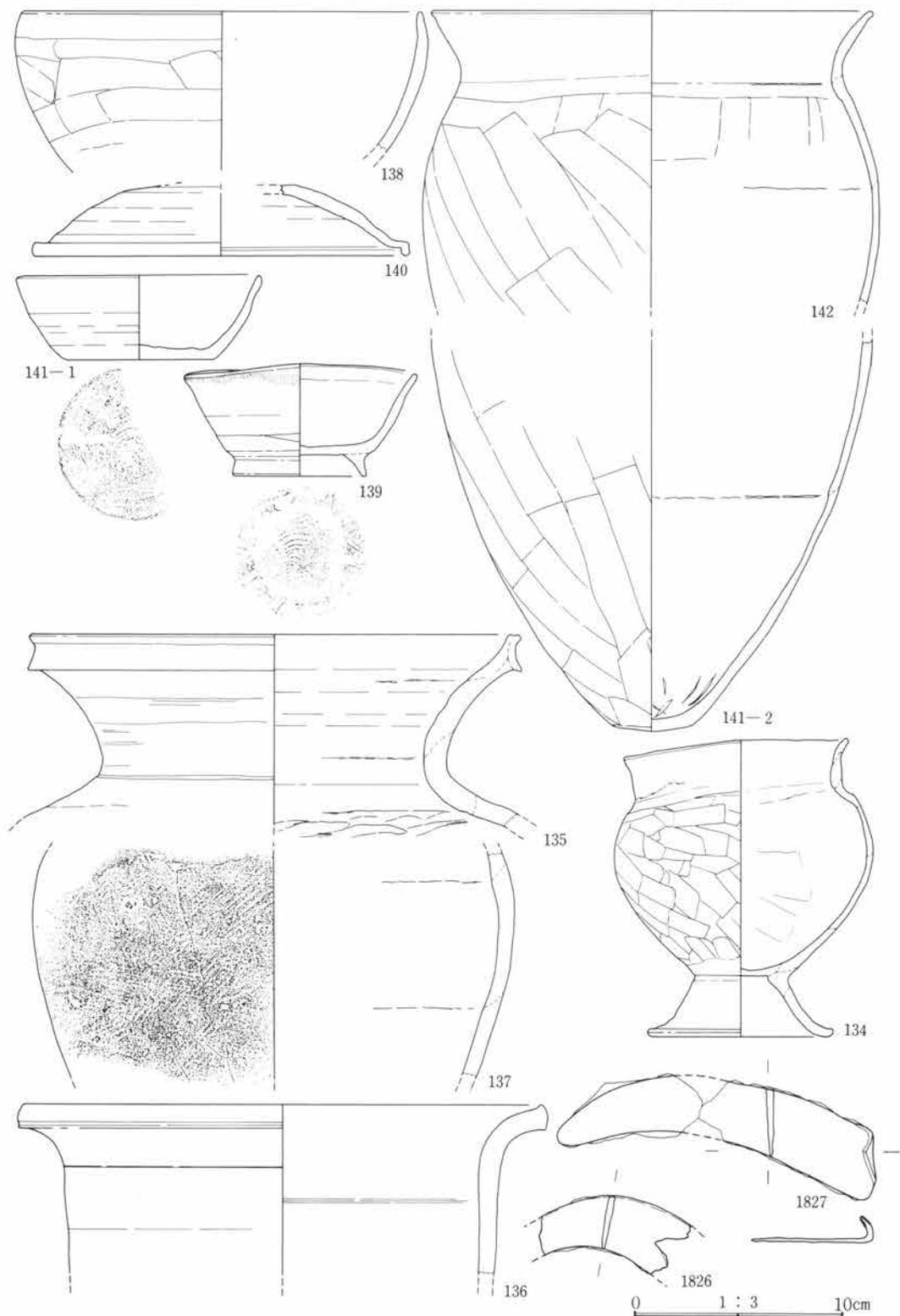
4区34号住居跡 (第244・245図、第63表、図版104)

基本土層第4層で確認された。規模は東辺3.2m、西辺3.15m、南辺3.3m、北辺3.5mのほぼ正方形プランを持つ整った形状を示す。北辺の方位はN-75°-Eである。覆土は黒褐色土を主体とした粘性のある土で自然に流れ込んだ状態を示している。壁面は、ローム層の確認高で20~25cmあり、やや外傾斜する。床面は暗褐色土の貼床が数cm施されている。柱穴はないが周溝がめぐり。東辺やや南寄りに設けられたカマド左方から北・西壁をめぐり、南辺中央まで至る。幅15cm、床面からの深さ10cm程である。東辺のカマド右方から南辺東半にかけては周溝を欠く。これは南辺東寄りに設けられた出入口様施設と関係するかも知れない。この施設は幅50cmで、壁の現認高26cmの中程に踏み段があり、その内側は袋状に挟れぎみである。カマドは壁外に突出した形状で、袖には角閃石安山岩削石が使用されている。長方形に面取した石材を両袖に立て、その両方壁に更に一石ずつ凝灰岩切石が配される。焚口幅は37cm、奥行75cmで半円形を呈す。床面には10数cmの焼土が堆積し、その上に更に灰層がのる。カマドからかき出された焼土及び灰は焚口手前1m、幅1.5mの範囲に広がる。遺物は比較的多く、その殆どはカマドのある東辺から出土している。カマド内からは土師器長甕2个体分、カマド右方の東南隅からは須恵器大甕、坏、蓋、甗、土師器台付甕が一括出土している。東北隅からは鉄鎌2丁と高台付碗が、住居中央やや西北寄りには長径40cm、短径23cmの扁平河原石が置かれ、工作台として使用された形跡が認められる。遺構の時期は出土遺物から9世紀初頭頃である。

(下城)



第244図 4区34号住居跡遺構図

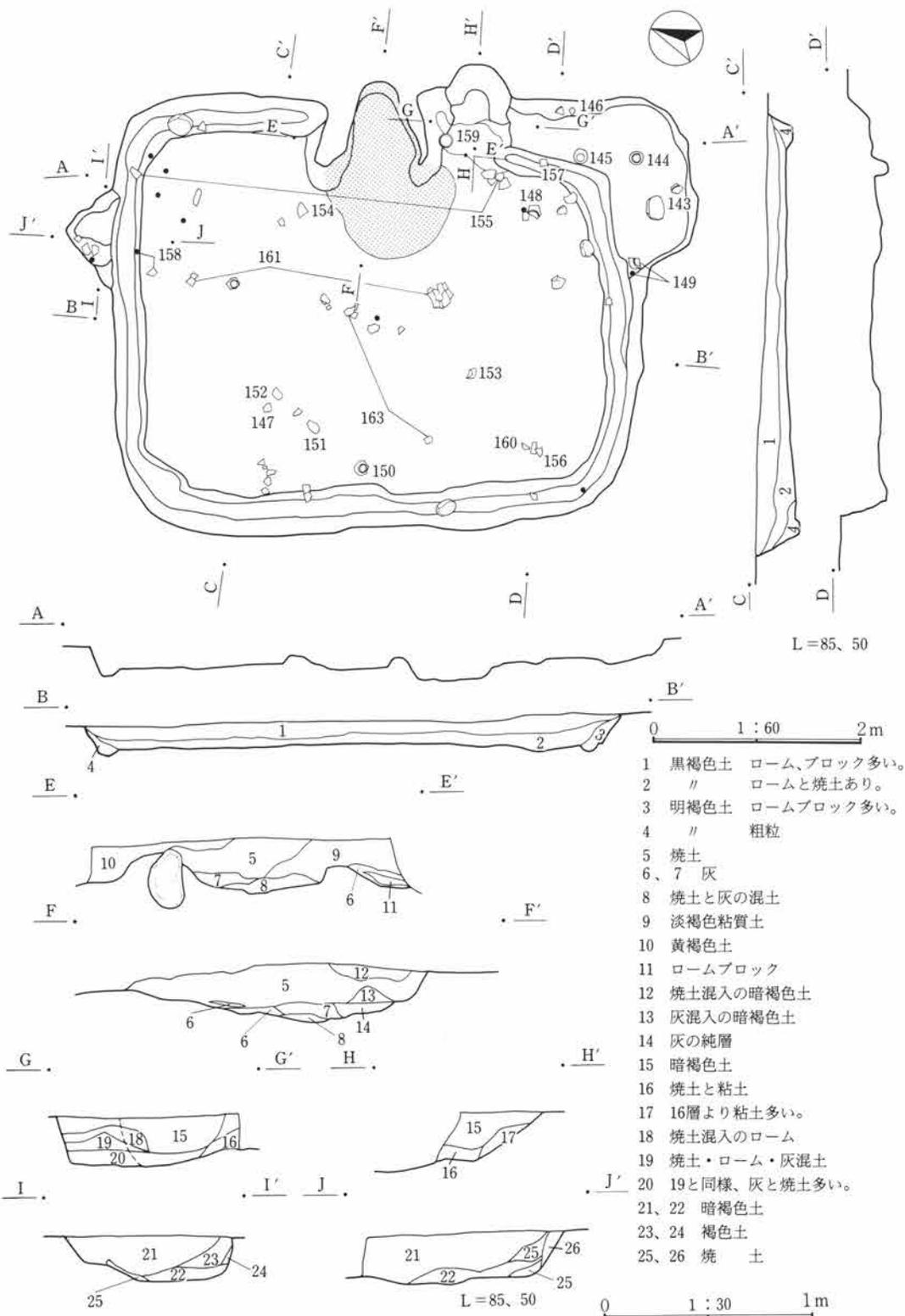


第245図 4区34号住居跡遺物図

第 63 表 4区34号住居跡出土遺物観察表

(第245図、図版 104)

番 号	土 器 種 類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
134	甕 土 師 器	口-[10.7]、底-4.9、脚裾径-8.8、高-14.1 $\frac{1}{2}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色	小型台付甕。体部中位で最大径をもち、頸部しまつてたちあがる。口縁部わずかに外反、端部丸味あり。脚部ハの字にひらき、裾部で外反、端部丸味もつ。体部ヨコ、ナナメヘラケズリ。器肉、薄手、均質	内外、スス付着
135	甕 須 恵 器	口-23.4、高-(8.5) $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒多く含む。粗。還元、硬質。灰色	口〜頸部のみ残る、大型の甕。頸部しまつて、くの字に外反。口縁部外稜をもつ。粘土積痕残り、口頸部ヨコナデ、体部内面無文のタタキ目	貯蔵穴出土 体部打ち欠きか
136	甕 須 恵 器	口-[25.0]、高-(8.0) $\frac{1}{2}$	砂粒を含む、細かい。還元、やや硬質。灰色	体部、直行し、口縁部大きく外反。口縁端部外稜あり。ロクロナデ調整	床直
137	甕 須 恵 器	胴-[23.0]、高-(10.6) $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰色	体上部で最大径をもつ甕。体外面、平行タタキ目、内面無文アテ具痕あり。粘土積痕残る	
138	鉢 土 師 器	口-[19.0]、高-(6.7) $\frac{1}{4}$	砂粒多く、黒色輝石を含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色	碗状大型の鉢。体部ゆるやかに内湾、口縁端部丸味をもつ。体部外面、ヘラケズリ、内面、口縁部、ナデ	床直
139	碗 須 恵 器	口-[11.2]、底-6.4、高-5.3 $\frac{1}{2}$	砂粒含むが、細密。還元、硬質。灰色	高台付小型碗。体部内湾しながらひろがり、口縁部わずかに外反。底部回転糸切り後、縁辺回転ヘラケズリ、貼付高台。ロクロ右回転	
140	蓋 須 恵 器	口-[18.0]、高-(3.3) $\frac{1}{2}$	砂粒含み、黒色斑文あり。還元、硬質。灰色	肩部で張りをもち、口縁部で強く外反、端部直角にたちあがる。端部丸味をもつが、全体にシャープ。天井部回転ヘラケズリ。ロクロ右回転	秋間産か
141-1	坏 須 恵 器	口-[11.5]、底-[7.0]、高-4.0 $\frac{1}{2}$	砂粒含むが、細かい。還元、やや硬質。灰白色	体部ほぼ直行する、平底の坏。底部回転糸切り後、回転ヘラケズリ調整ロクロ左回転	床直 重ね焼き痕あり
141-2	甕 土 師 器	胴-[21.0]、底-3.8、高-(18.5) $\frac{1}{2}$	砂粒、輝石を多く含む。酸化、軟質。褐色	底部小さく、体部卵形の甕。体下部タテヘラケズリ、底部ヘラケズリ、粘土積痕、顕著	内外、スス付着
142	甕 土 師 器	口-[21.0]、胴-[21.8]、高-(14.0) $\frac{1}{2}$	砂粒多く、輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	肩部で丸く、頸部ややしまり、ゆるく、くの字に外反する。口縁端部丸味をもち、外側にうすく沈線めぐる。体上部ヨコ、下部タテヘラケズリ	床直
1826	鉄 製 鎌	長-(7.0)、巾-(2.7)、厚-0.3~0.1、身の中央部分か、残片			
1827	鉄 製 鎌	長-[15.0]、巾-3.2、厚-0.4~0.1、刃部やや内反りで、着柄角度-118°			



第246図 4区35号、36号住居跡遺構図

## 4区35号、36号住居跡（第246～248図、第64表、図版105・106）

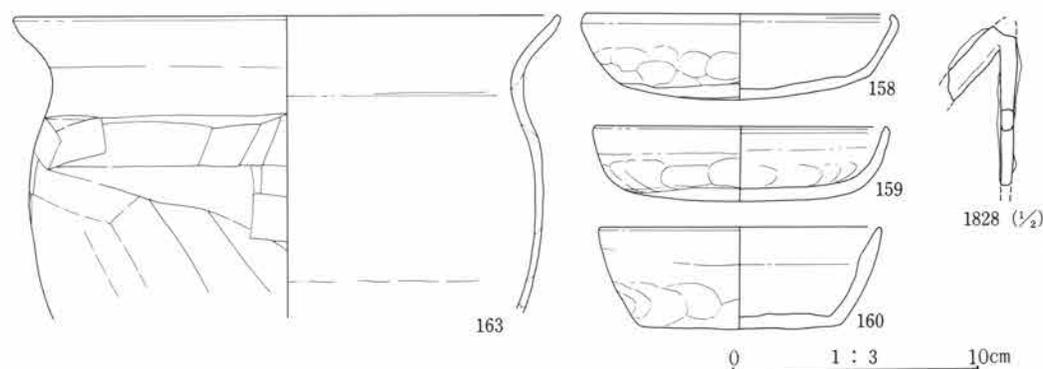
基本土層第4層で確認された。カマドが3ヶ所検出されたことや、住居跡の平面形からして重複の可能性がある。ただし、調査時に重複関係が認められなかったことからみて、住居の改変、拡張、カマドの改廃等とも考えられる。本稿では重複住居としての根拠を持ち合せないため、住居として扱っておく。規模は北辺で4.10m、西辺で4.80m、南北中央幅5mの隅丸方形プランの東南部に南方へ55cm程のびる張出し部が付く。北辺の方位はN-69°-Eである。覆土は黒褐色土を主体として自然埋没した状態を示す。張り出し部と住居本体との切り合い関係は認められない。壁面はローム層の現認高で約25cmあり、外方へやや傾きを持つもののしっかりした状況が見られた。床面は多少の凹凸があるものの黒色土とローム土が数cmの厚さで互層をなす貼床が施されている。住居本体と張り出し部との高低差は殆どない。柱穴は認められない。周溝は住居本体に設けられたカマド部を除いて住居跡本体壁下を一周する。従って張り出し部とはこの周溝で画される。その南辺の長さは北辺の3.75mに比べて3.20mと短かく、周溝プランはゆがんだ隅丸方形を呈す。埋没土をみると、壁端にはローム土ブロックが埋まっている。本住居が機能していた時壁端を補強する部材の一部であった可能性がある。

カマドは3基ある。東辺中央の1基と張り出し部東辺の1基が並列しており、更に北辺の東寄りに1基ある。東辺中央のカマドはローム土を袖材として住居内に張り出し、焼土と灰の分布が手前1.3m程まで広がる。左裾の芯には角閃石安山岩の転石が1個用いられている。カマド内壁は良く焼き締められている。本住居廃絶時まで使用されていたカマドであろう。

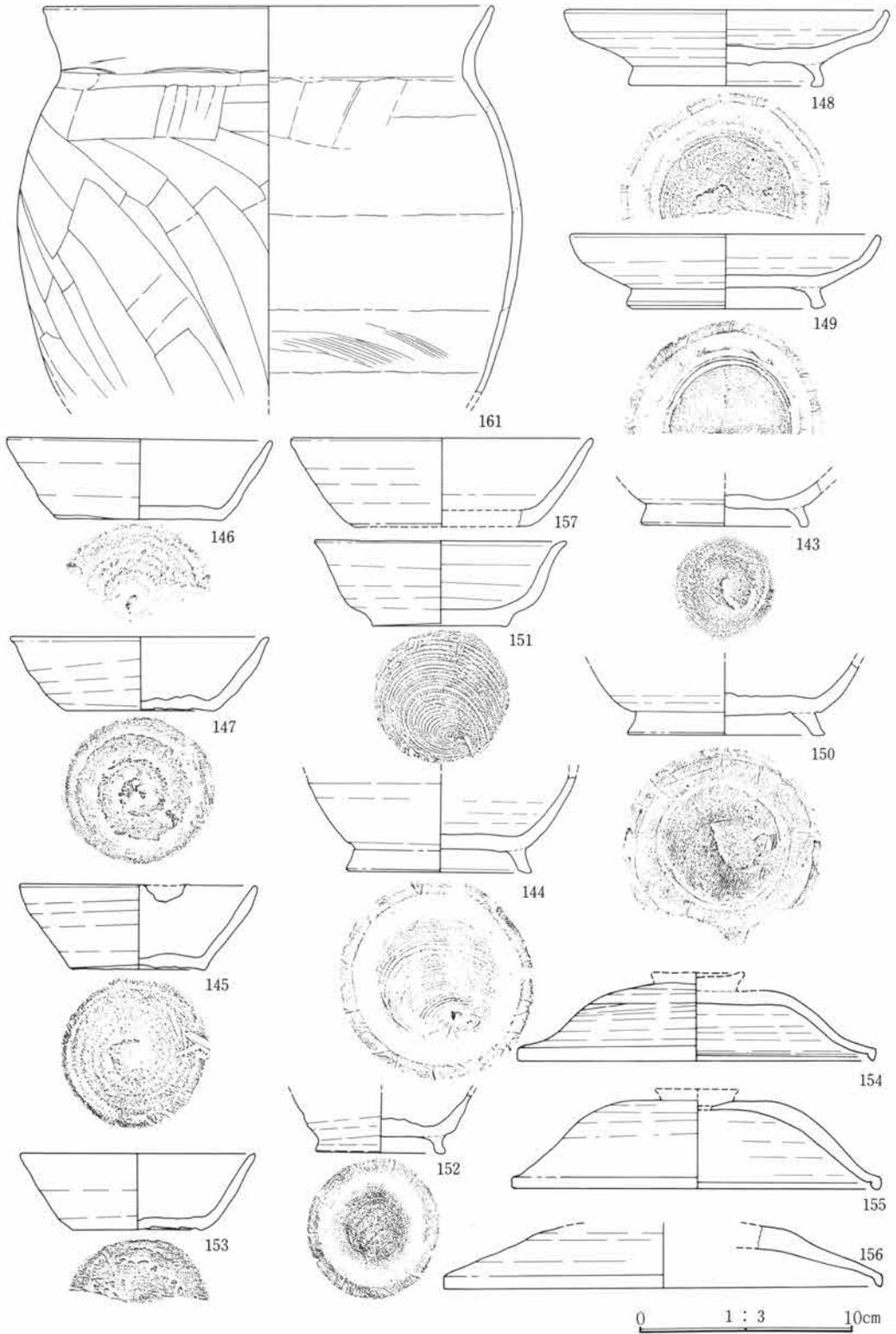
北辺のカマドは壁下の周溝で袖部を切断されており、周溝構設前の使用と考えられる。カマド内はよく焼けており、焼土や灰が数cmの厚さで堆積していた。

張り出し部東辺に構設されたカマドも手前を周溝で切られている。焼土の分布は認められるが、さほどの使用を認めがたい状態である。機能的には左のカマドと同時に機能していたとは考えられず、住居本体カマドの構設時乃至はそれ以前に機能を失ったものと考えられる。

遺物は住居全面から出土している。器種としては坏、碗類が多く、底部切り離しはヘラ切り技法が主体を占める。ほかに盃、蓋、土師器甕などがある。時期は9世紀初頭である。（桜場）



第247図 4区35号、36号住居跡遺物図（1）



第248図 4区35号、36号住居跡遺物図(2)

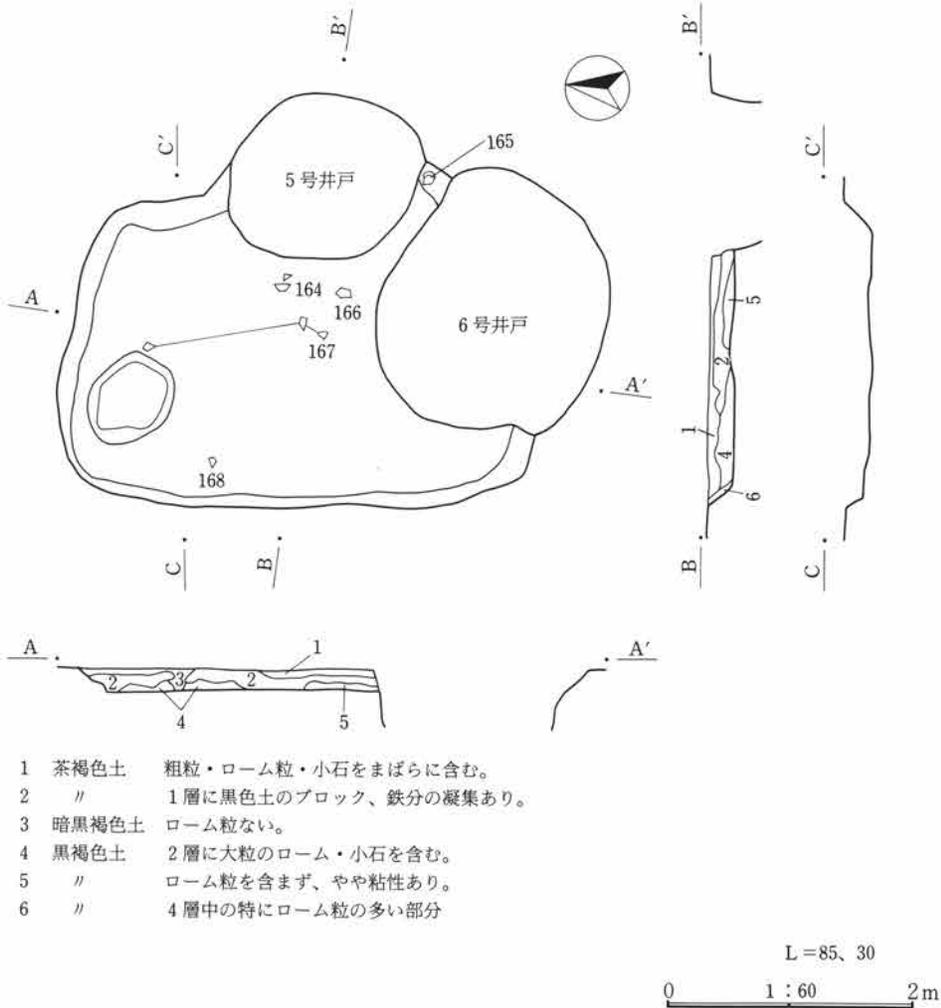
第 64 表 4区35号、36号住居跡出土遺物観察表

(第247・248図、図版 105・106)

番 号	土 器 種 類	法量 (口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
143	埴 須恵器	底-[7.8]、高一 (1.7) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒を含む、黒色斑文あり。還元、硬質、良好。灰色	体部内湾する大振りの埴。底部、回転ヘラ切り、貼付高台、高台断面、台形	内面、重ね焼き痕あり
144	埴 須恵器	底-[8.7]、高一 (4.5) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒を含むが、細密。還元、硬質、良好。灰白色	体部、やや内湾する大振りの埴。鉢とすべきか。底部回転糸切り。貼付高台、断面外開きの台形、ロクロ右回転。体部ロクロナデ調整	床直。内底面、スレあり
145	坏 須恵器	口-11.1、底-6.3、高一3.9 $\circ$ 完存	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰白色	平底、体部直線的にひらき、口縁部わずかにたちあがる。底部回転ヘラ切り。ロクロ右回転	床直 口縁部一部欠損し、炭化物付着
146	坏 須恵器	口-[12.4]、底-[7.8]、高一(3.8) $\circ\frac{1}{2}$	砂粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	平底、体部直線的にひらき、口縁端部、薄手の仕上げ。底部、回転ヘラ切り。ロクロ右回転	重ね焼き痕あり
147	坏 須恵器	口-[12.0]、底-7.0、高一3.4 $\circ\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	平底、腰部でやや張りをもち、体部直線的にひらく。底部、回転ヘラ切り。ロクロ右回転	床直
148	盤 須恵器	口-[15.2]、底-[9.2]、高一3.5 $\circ\frac{1}{2}$	砂粒を含む、黒色斑文あり。還元、硬質。灰色	体部、直線的にひらき、中位で折れて口縁部たちあがる。底部、回転ヘラ切り、貼付高台、高台断面、外びらきの台形、端部内側にかえりあり	重ね焼き痕あり
149	盤 須恵器	口-[14.5]、底-[9.3]、高一3.4 $\circ\frac{1}{2}$	砂粒を含むが、細密。還元、やや硬質。灰白色	体部、わずかに内湾しながらひらき、口縁部へ折れてたちあがる。底部回転ヘラケズリ調整。貼付高台、高台断面、外びらきの台形	重ね焼き痕あり
150	埴 須恵器	底-[9.2]、高一(3.2) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰色～褐灰色	体部内湾する大振りの高台付埴。底部回転ヘラ切り、貼付高台、断面、外びらきの台形。ロクロ右回転	内底面、スレあり。墨、付着
151	坏 須恵器	口-[11.8]、底-6.2、高一3.9 $\circ\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰色	腰部で稜をもって、体部直線的にひろがる。口縁部わずかに外反、端部薄手の仕上げ。底部回転糸切り。ロクロ右回転	
152	埴 須恵器	底-6.3、高一(3.0) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒を含む。還元、硬質。灰色	高台付、小型埴。腰部で稜をもち、体部、内湾しながらたちあがる。底部回転糸切り、貼付高台、断面丸味のある台形	
153	坏 須恵器	口-[11.0]、底-[6.0]、高一3.5 $\circ\frac{1}{3}$	砂粒を含み、黒色斑文あり。還元、硬質。灰色	平底、体部わずかに内湾してひろがる。底部、回転ヘラケズリ。ロクロ右回転	

第6章 検出された遺構と遺物

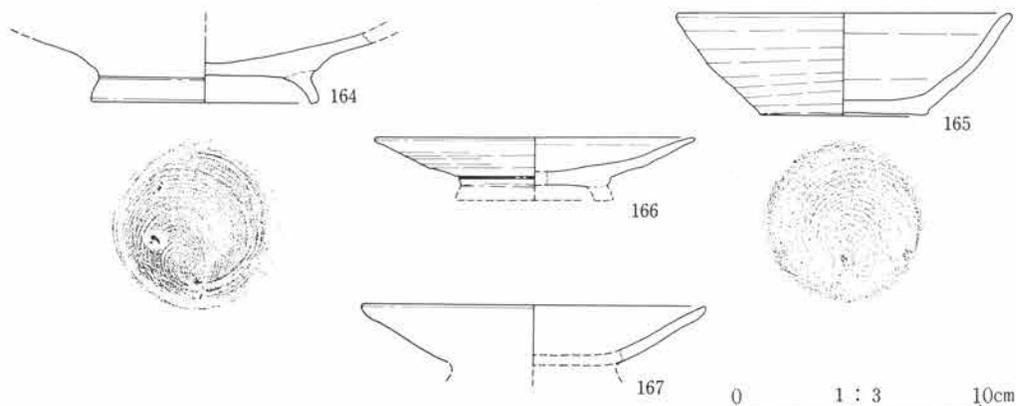
154 4区35・ 36号住	蓋 須恵器	口-[16.5]、高- (3.2) $\circ\frac{1}{8}$	砂粒含むが、細密、良好。 還元、やや硬質。灰白色	身、やや深め、天井部丸味をもつ。 体部外反し、口縁部強く開く。口縁 端部直角に折れてたちあがり、内側 にかえりをもつ。天井部回転ヘラケ ズリ。ロクロ右回転	
155	蓋 須恵器	口-[17.0]、高- (3.2)、つまみ 径-[3.4] $\circ\frac{1}{8}$	砂粒含むが、細密。還元、 やや軟質。灰白色～黄灰 色	身、深く、天井部丸味をもつ。体部 八の字にひらき、口縁部直角にたち あがる。口縁端部丸味のあるかえり あり	重ね焼きの痕あ り
156	蓋 須恵器	口-[20.2]、高- (2.8) $\circ\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を含む、粗。 還元、やや硬質。灰白色	身、浅めの蓋。天井部平坦で、体部 直線的にひらく。口縁部直角に折れ、 端部薄手。天井部回転ヘラケズリ	
157	坏 須恵器	口-[14.2]、底- [8.4]、高-4.1 $\circ\frac{1}{8}$	砂粒を含む、粗。還元、 やや硬質。灰色	平底の坏。体部ほぼ直行してひらく。 口縁端部薄手。底部回転糸切り	
158	坏 土師器	口-12.4、底-10. 6、高-3.4 $\circ\frac{1}{8}$	砂粒多く含む。酸化、軟 質。明褐色	凸状の平底。体部、内湾してひろが り、口縁内湾して端部、内側に丸く かえりをもつ。底部手持ちヘラケズ リ、体下部ナデ、口縁部ヨコナデ	
159	坏 土師器	口-12.0、底-9. 4、高-3.0 $\circ$ 略完 存	砂粒多く含む。酸化、軟 質。にぶい橙色	平底。体部内湾しながらたちあがり 口縁部、ほぼ直行。底部手持ちヘラ ケズリ、体下部、ナデ、口縁部ヨコ ナデ	
160	坏 土師器	口-[11.4]、底- [8.0]、高-4.1 $\circ\frac{1}{3}$	砂粒多く含む。酸化、軟 質。橙～にぶい褐色	平底。体部直線的にひろがる坏。口 縁端部薄手。体部内面中位、肥厚し て稜をもつ。底部回転ヘラケズリ。 体下部ナデ、口縁部ヨコナデ	
161	甕 土師器	口-[21.2]、胴- [23.5]、高-(18. 0) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒多く、黒色輝石を含 む。酸化、軟質。赤褐色	体部丸味をもち、頸部くびれて、く の字に外反する。口縁端部、丸味を もち、外側に沈線めぐる。体上部ヨ コ、下部ナナメ、タテヘラケズリ	
163	甕 土師器	口-[22.2]、胴- [20.7]、高-(11. 8) $\circ\frac{1}{8}$	砂粒、黒色輝石を含む。 酸化、軟質。明赤褐色	体部、丸味をもち、頸部くびれて、 くの字に外反する。口縁部わずかに 内湾のカーブをもつ。体上部ヨコ、 下部ナナメ、タテヘラケズリ	
1828	鉄製品	長-(6.3)、縦-5.5、横-3.5、断面長方形、片端より片端へ細くなる。釘状のものと思われる			



第249図 4区37号住居跡遺構図

## 4区37号住居跡 (第249・250図、第65表、図版106・107)

基本土層の第4層で確認された。東辺側は5号、6号井戸に切られる。規模は北辺2.40m、西辺3.75mで、平面形は不整隅丸長方形を呈し、方位は北辺でN-84°-Eを示す。覆土は自然に埋没した様相を示し、重複する2基の井戸の覆土中には浅間山B軽石の二次堆積が厚く見られた。壁高は平均18cmで、斜めに立ち上がる。床面は平坦で、中央周辺が特に固く、全面が厚さ2cm程貼床されている。床面下には周壁に沿って、不整形の落ち込みが重複してめぐる。柱穴、周溝はなく、カマドの痕跡が東辺の5号井戸脇にある。貯蔵穴状の不整形を呈するピットが西北隅にある。遺物は、中央床面周辺に碗、皿等の小破片が集中していた。本住居跡の時期は、出土遺物により平安時代(9世紀後葉)である。 (下城)



第250図 4区37号住居跡遺物図

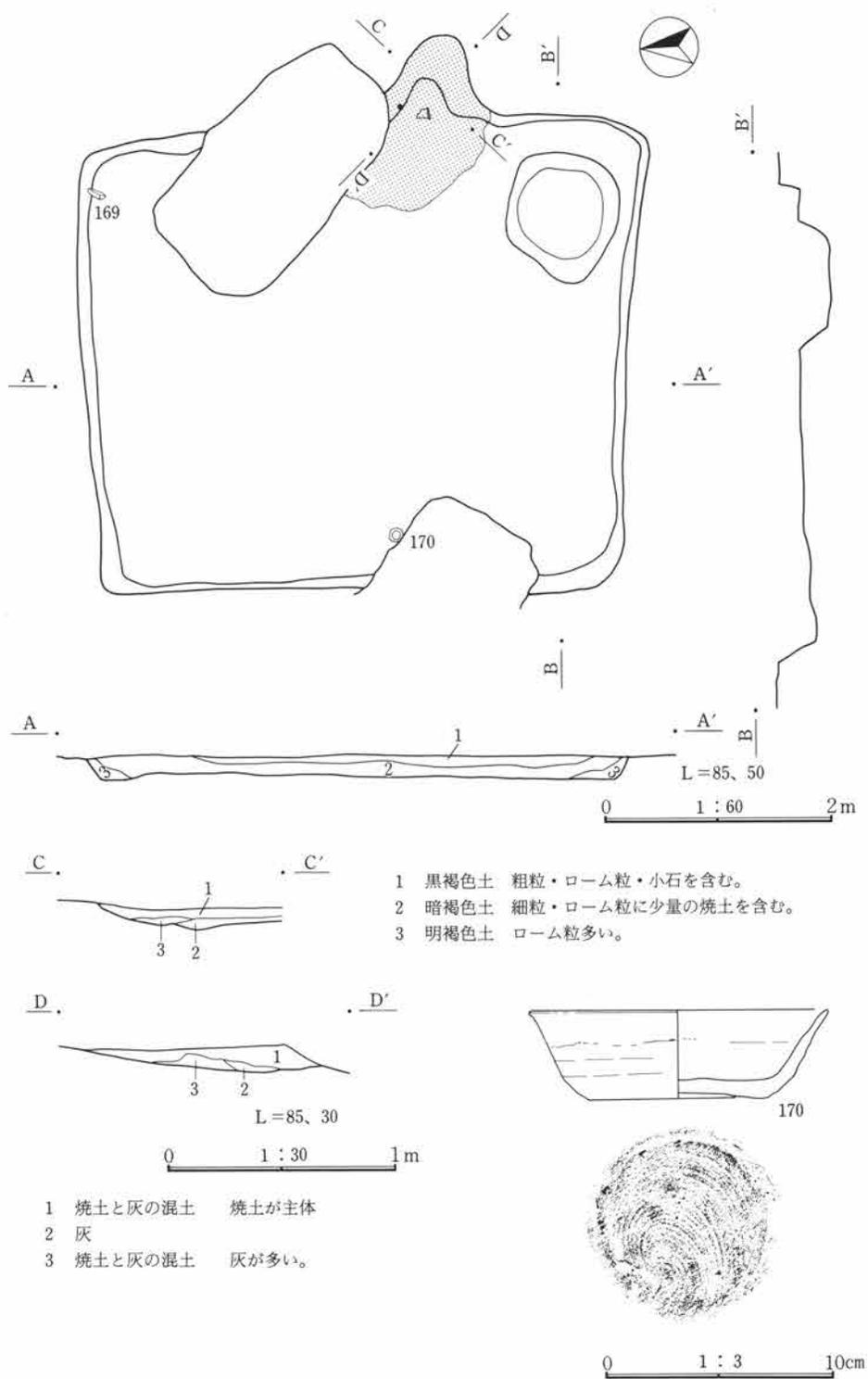
第65表 4区37号住居跡出土遺物観察表

(第250図、図版 106)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
164	盤 須恵器	底-9.2、高-(2.5) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒多く、粗。還元、やや硬質。灰白色	体部直線的にひろく。高台付盤。底部回転糸切り、貼付高台、高台断面、端部の丸い台形。ロクロ右回転	重ね焼き痕あり
165	坏 須恵器	口-[13.6]、底-6.8、高-4.1 $\circ\frac{3}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。灰白色	平底。体部中位でわずかにふくらみひろがる。口縁端部丸味あり。底部回転糸切り。ロクロ右回転	重ね焼き痕あり
166	皿 須恵器	口-[13.0]、底-[5.8]、高-(2.0) $\circ\frac{1}{2}$	砂粒を含む。還元、やや軟質。灰白～褐灰色	高台部欠損。底部より一段、段がついて、直線的にひろがる。口縁部外反し、端部薄手の仕上げ。底部回転糸切り、貼付高台、体部ロクロ目細かい。ロクロ右回転	
167	皿 須恵器	口-[14.0]、底-[7.0]、高-(2.3) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙～褐灰色	体下部でわずかに丸味をもって、ひろがる。口縁部直行、端部丸味をもつ。ロクロナデ調整	

4区38号住居跡(第251図、第66表、図版106)

本住居跡は、基本土層の第4層で66号住居跡と重複して確認された。重複関係は、本住居跡が新しい。東辺と西辺の各一部に攪乱を受ける。規模は、東辺で4.85m、北辺で3.85mを測り、方位は北辺でE-5°-Sである。平面形は、やや台形に近い方形を呈する。床面は、ロームを踏み固め堅緻である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の少し南寄り確認された。壁外に大きくロームを掘り込み、主にロームブロックを含む黒色土を用いて袖材としている。焼土、灰層の量は多く、カマド内から住居内にも分布する。貯蔵穴は、住居東南隅で直径約1m、床面からの深さ約20cmの円形土壇が確認された。遺物は、須恵器碗等があるが、少量である。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代(9世紀前葉)とする。(女屋)

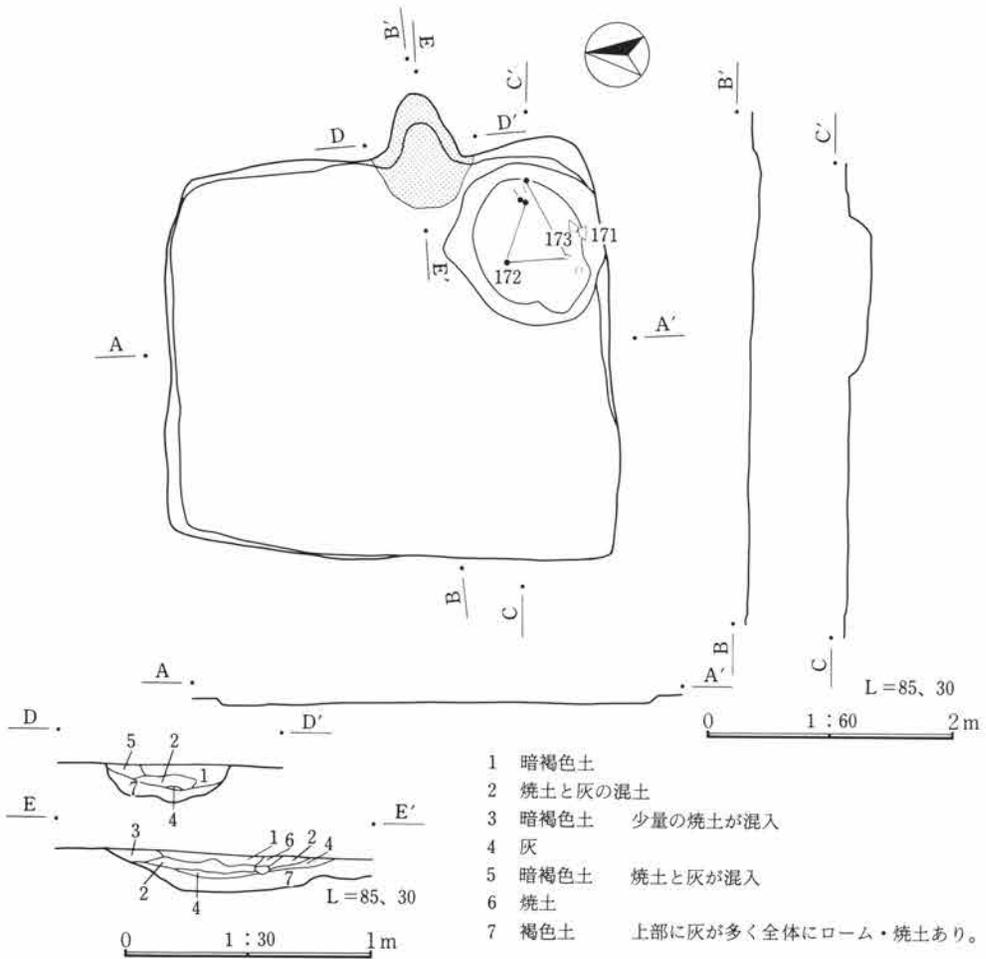


第251図 4区38号住居跡遺構、遺物図

第 66 表 4区38号住居跡出土遺物観察表

(第251図、図版 106)

番 号	土 器 種 類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
170	坏 須恵器	口-[13.0]、底-8.0、高-3.8○%	砂粒、石粒を多く含む。 還元、やや硬質。灰白色	平底。体下部で内湾し、口縁部へ直線的にひろがる。口縁部わずかに外反、端部薄手。底部回転糸切り。ロクロ右回転	重ね焼き痕あり

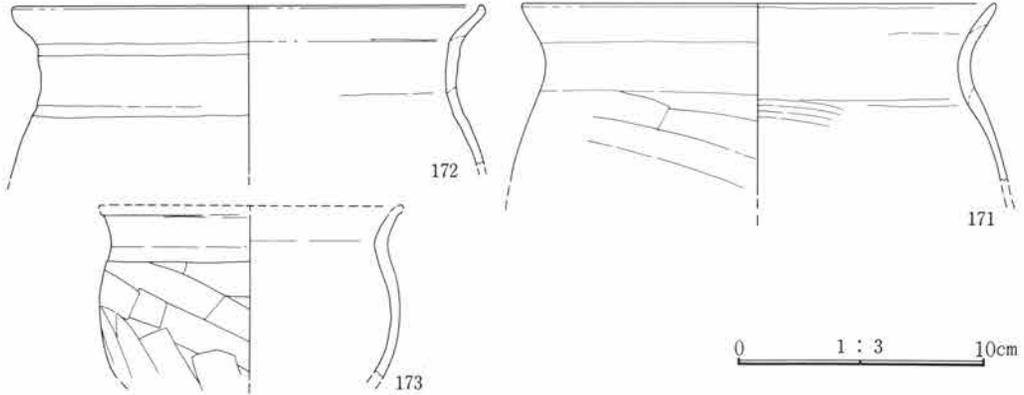


第252図 4区39号住居跡遺構図

4区39号住居跡 (第252・253図、第67表、図版106)

本住居跡は、基本土層の第4層で67号土坑と重複して確認された。確認時、床面の一部が露呈し、住居西南隅付近は推定による。重複関係は、67号土坑より古い。規模は、東辺で3.54m、北辺で3.16mを測り、方位は北辺でN-85°-Eである。平面形は、南北に長い長方形を呈する。床面は、ロームを踏み固め、やや堅緻である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の少し南

寄りで確認された。壁外に舌状にロームを掘り込み、褐色土を用いて袖とし、袖石の一部も残っている。焼土、灰層は、厚く堆積し、一部は住居内にも広がる。貯蔵穴は、東南隅全体を占め、直径約1.20m、床面からの深さ20cmの円形土坑が確認された。遺物は、貯蔵穴からのみでカマド内及び床面上からは小破片が少量出土した。土師器甕、坏がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代（9世紀中葉）とする。 (女屋)

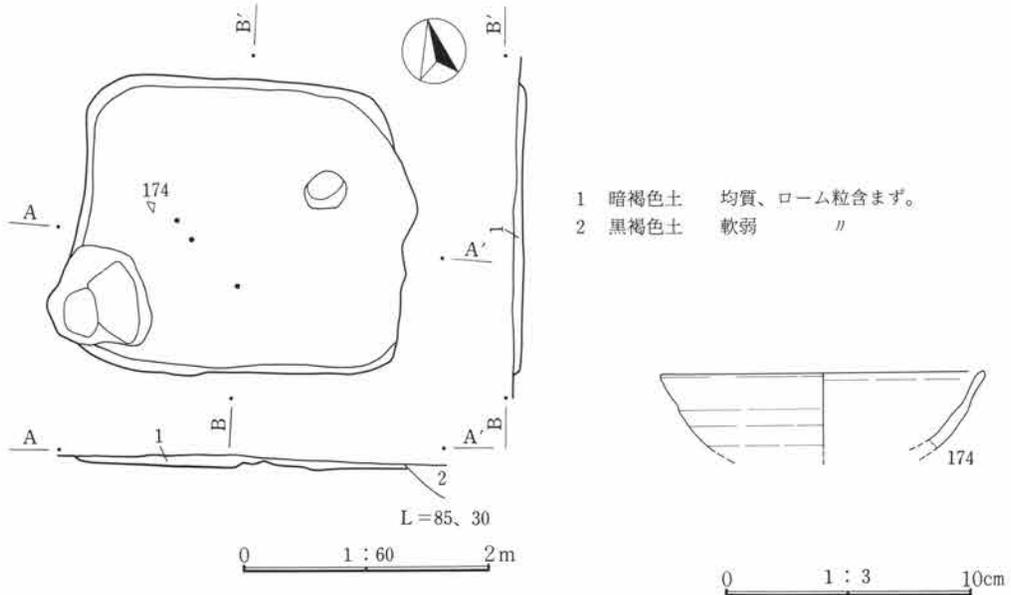


第253図 4区39号住居跡遺物図

第 67 表 4区39号住居跡出土遺物観察表

(第253図、図版 106)

番号	土器種類	法量（口径・底径・器高） 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
171	甕 土師器	口-[19.2]、高-(7.1) ○ $\frac{1}{8}$	砂粒、黒色輝石を含む。 酸化、軟質。赤褐色	頸部～口縁部ゆるく、くの字に外反する甕。口縁端部薄手。体上部ヨコヘラケズリ	
172	甕 土師器	口-[19.2]、高-(6.3) ○ $\frac{1}{8}$	砂粒、黒色輝石を含む。 酸化、軟質。明赤褐色	コの字状口縁の甕。頸部しまってたちあがり、口縁部強く外反する。口縁端部内側にかえりあり。内側稜二段もつ。体上部ヨコヘラケズリ、頸部、口縁部の間、凹線めぐらす	
173	甕 土師器	口-[12.3]、胴-[12.1]、高-(6.5) ○ $\frac{1}{8}$	砂粒を多く含む。酸化、軟質。褐色	小型甕。体部丸く、頸部ややしまり、口縁部外反する。体部上位ヨコ、下位タテ、ナナメヘラケズリ	



第254図 4区40号住居跡遺構、遺物図

4区40号住居跡 (第254図、第68表)

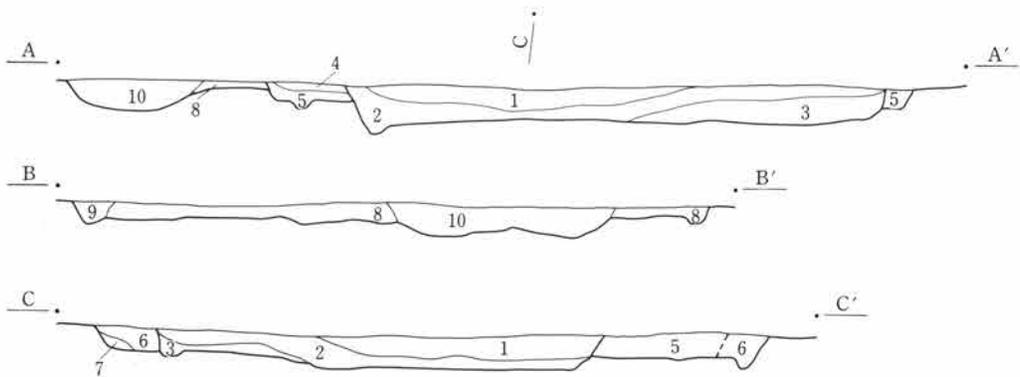
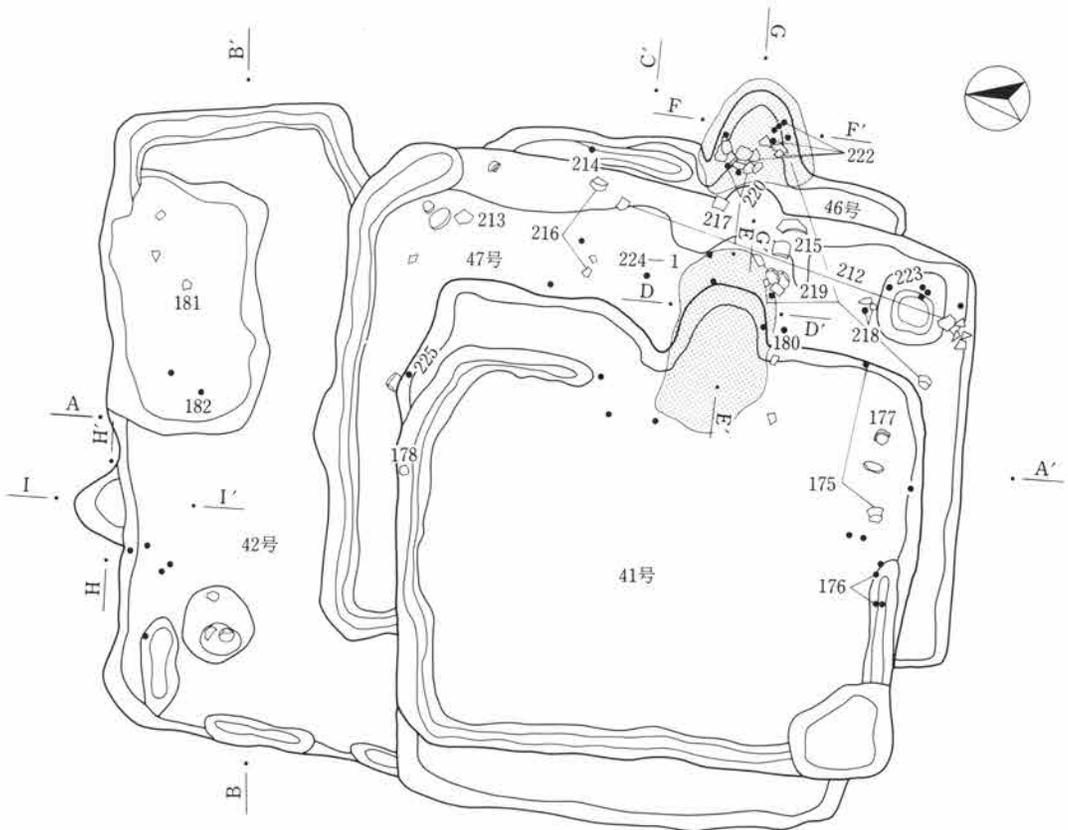
本住居跡は、基本土層の第4層暗褐色土で確認された。規模は、北辺で2.68m、東辺で2.37mを測り、方位は北辺でE-13°-Sを示す。平面形は、東西に少し長い方形を呈するが、東辺側に風倒木痕があり、一部不明瞭となっている。覆土は、暗褐色土の単純層で、周辺の住居跡の様に焼土、炭化物を含んでいない。床面は、第4層を踏み固めているが、壁際は軟弱で、全体に東への傾斜を持つ。中央を外れた東北隅寄りで径約30cmの柱穴様のものが確認されたが、判然としない。カマドは、覆土全体に見られる様子とも合せて当初から設けられなかったか。西南隅に接して、不整円形の土壇状のものが確認されたが、これも貯蔵穴と断定するに至らなかった。遺物の分布は中央部付近でいくつか見られたが、破片状態のものが少量で須恵器碗がある。遺構の時期は、伴出遺物の特徴から平安時代とする。遺構の性格は、カマドを持たない小竪穴状のものか。同様にカマドを持たない例としては4区28号、29号、45号があるが、規模の点からして28号に類例が求められるか。

(女屋)

第68表 4区40号住居跡出土遺物観察表

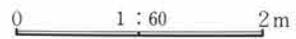
(第254図)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
174	須恵器 碗	口-[13.0]、高-(3.1) ○ $\frac{1}{8}$	砂粒を含み、黒色斑文あり。還元、硬質。灰白色	体下部で内湾する、平底の碗。身の浅いタイプ。ロクロナデ調整	



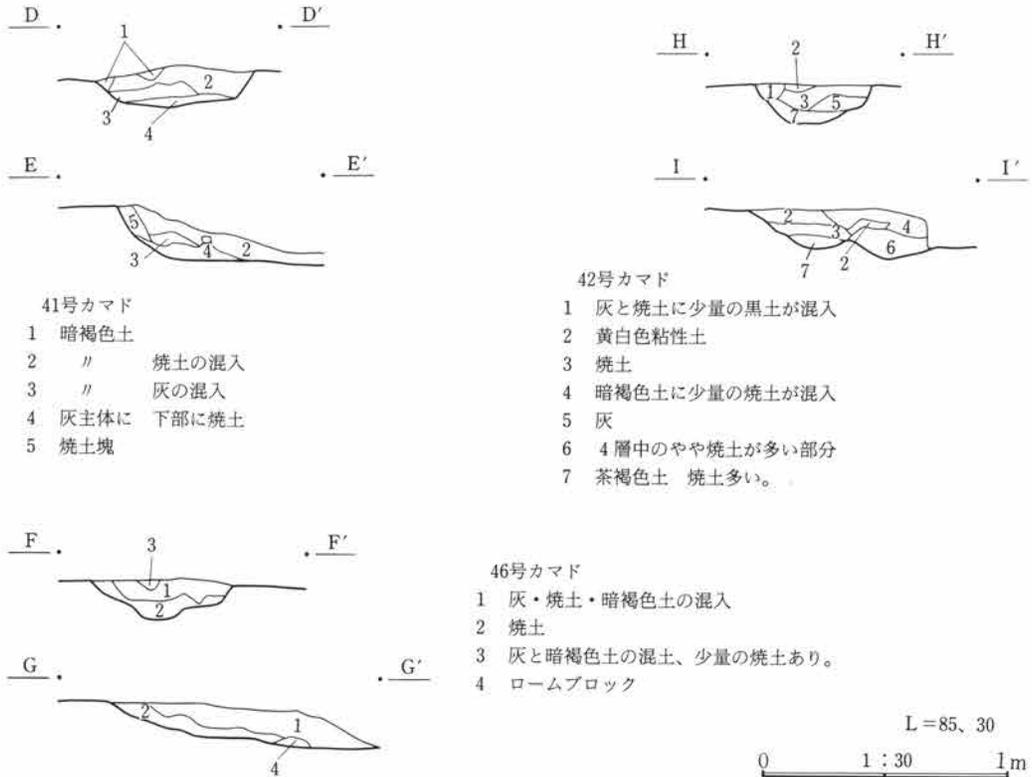
- 1 褐色土 粗粒・ロームブロック・小石やや多く含む。
- 2 暗褐色土 やや粗粒、ロームの大小ブロックあり。
- 3 " 2層に少量の焼土あり。
- 4 明褐色土 粗粒・ローム小ブロックをやや多く含む。
- 5 褐色土 やや粗粒、ロームの大小ブロック少量あり。
- 6 黒褐色土 細粒・ローム小ブロックを含み、粘性あり。
- 7 暗褐色土 やや粗粒、ローム・焼土のブロックあり。
- 8 暗褐色土 粗粒・ローム小ブロック多い。
- 9 黒褐色土 " ローム粒少量あり。
- 10 " " "

L=85、30



第255図 4区41号、42号、46号、47号住居跡遺構図(1)

第6章 検出された遺構と遺物



第256図 4区41号、42号、46号住居跡遺構図(2)

4区41号、42号、46号、47号住居跡(第255~258図、第69表、図版107・108)

4住居跡とも基本土層第4層上面で確認された。41号、46号、47号住居跡は棟方向を同じくして重複しているのに対し、42号住居跡は壁方向は一致させるもののカマド位置からみて、棟を90度ずらして構築されたものようである。構築の順序は切り合い状態から42号、47号、46号、41号住居跡の順に構築されたものと判断された。

42号住居跡は、長辺を東西にとる不整四角形の平面プランになるものと考えられる。規模は北辺4.9m、東辺1.9mであるのに対し、西辺は2.4mまで延びて46号住居に切断されている。また南辺は東辺から鈍角に開き0.5mほどで47号住居跡に切断されている。方位は東辺でN-84°-Eをとる。覆土は確認面が床面に近いこともあって床面直上の明褐色土が1層認められるだけである。壁高は10cm内外が認められた。床面は平坦であるが、5cmほどの貼床がある。柱穴は認められない。周溝は東壁から南壁にかけては幅10~15cm、深さ10cmの規模でめぐるが、北壁には認められない。西壁には長さ40cmと90cmほどの不連続の溝があり、周溝と同じ性格をもつものと思われる。カマドは北壁のやや西方に構築される。壁外に張り出しており、幅60cm、奥行40cmを測る。張り出し部分は火床に灰が堆積し、良く焼けているが、壁内については切断されており、カマドの痕跡は認められない。このことから、カマドは住居の存続中のある段階で機能を失っていたものと

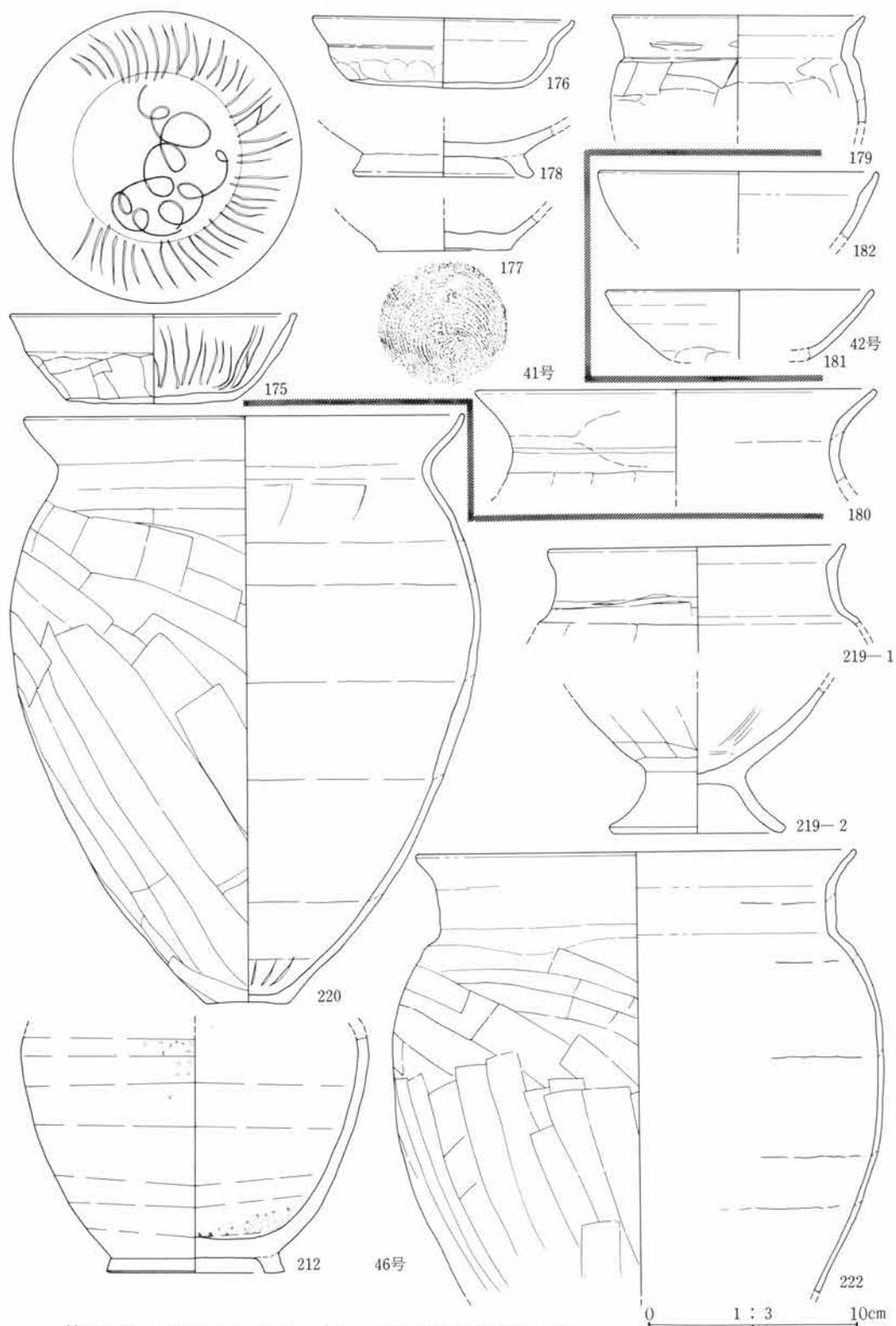
みられる。貯蔵穴はカマドに向って左方の北西隅に設けられている。径60cm、深さ23cmの円形でなかには円礫と土師器甕片があった。全体に遺物の出土量は少なく、北壁寄りに土師器甕片が点在していた。42号住居内に、長辺2.0m、短辺1.3mの長方形土壇が掘り込まれている。やや不整形であるが、黒褐色土を主体とする覆土中には42号住居跡と同時期の土師器片が数片含まれている。

47号住居は46号住居に先行する。このことは46号住居によってカマドが破壊されていることと掘り方および住居覆土の断面の観察から確められた。規模は東壁5.0m、西壁5.1m、北壁4.0m、南壁3.4mで、平面形は南北に長軸をとる隅丸長台形プランである。北辺の方位はE-5°-Sである。壁周辺に残された覆土は明褐色ないしは褐色土をしている。壁体は床面から16~21cmの高さが残っており北壁には周溝がめぐる。幅15cm、深さ5cmほどである。西壁下にもまわっていた可能性があるが、41号住に壊されていて不明である。床面は46号住と同じ深さにあるが、堀方下面は20cmほど下位にあり、その間は黄褐色土が敷き込まれている。柱穴は認められない。カマドは堀方の調査によって、その痕跡を東壁やや南寄りに検出した。火床部は幅50cmで半円形に削り出し、両端は袖部として削り残している。貯蔵穴はカマドの右方、東南隅にある。上端は方形で北辺60cm、東辺50cm、深さは50cmである。下半は円形に近い形状となる。出土遺物は重複が著しいため、本住居に特定できるものは少ないが、堀方内から土師器甕、坏類、須恵器坏、蓋、碗が出土している。

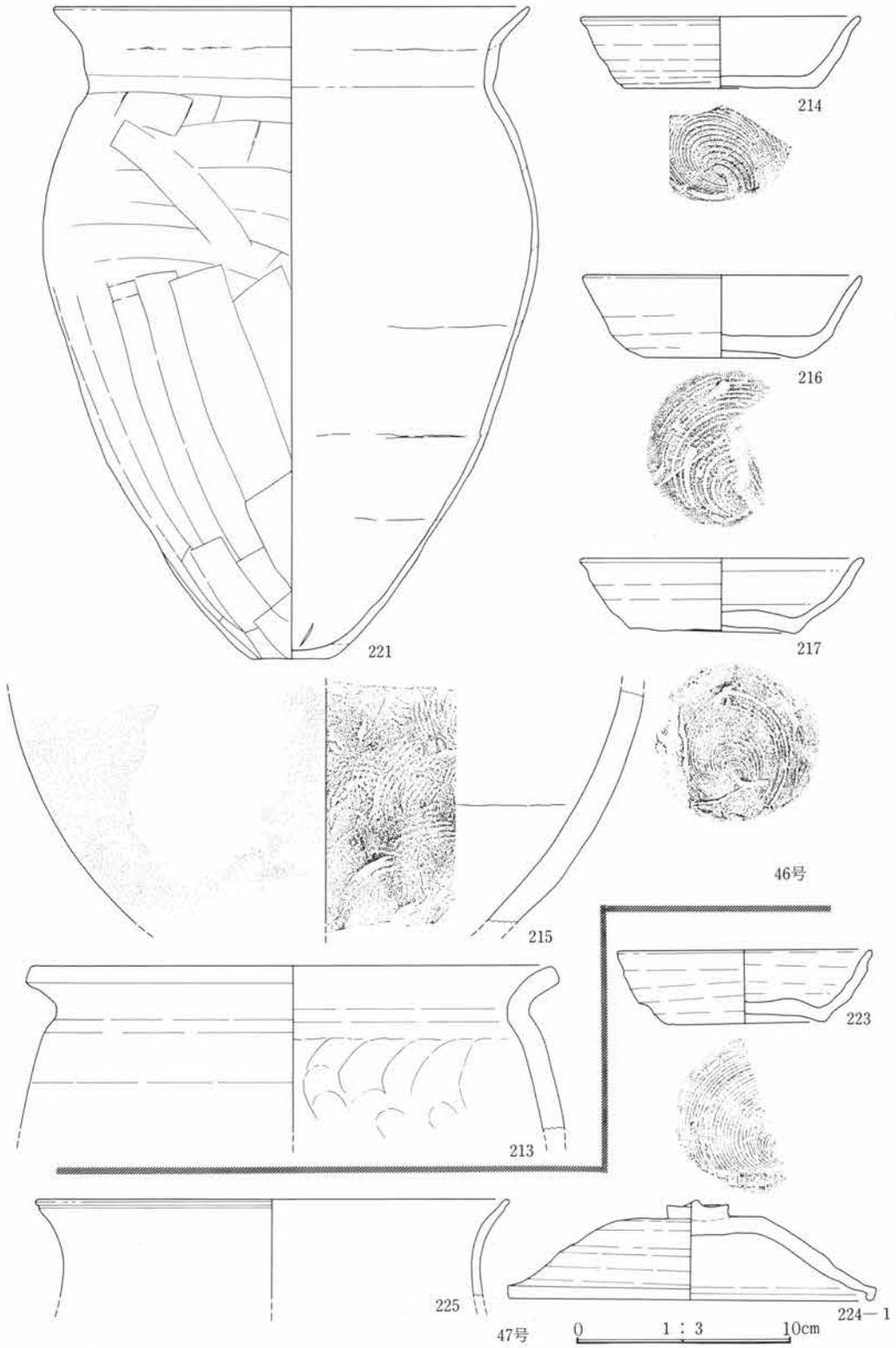
46号住居は47号住居の上に建て替えられた長方形の住居であり、中央部を41号住居によって破壊されている。北壁5.4m、南壁4.9m、東壁3.4m、西壁4.2mをはかる。北壁の方位はE-5°-Sである。15cmほどに残っていた覆土は2層に分かれる。上層は明褐色土、下層は暗褐色土で、いずれもロームブロックを含み特に下層は焼土粒を多く含む。壁高は確認面からで15~36cmをはかる。床面は平坦であるが、平均5cmほどの貼床が施されている。柱穴や周溝は認められないが、堀方の調査によって南壁下に50~70cmの等間隔で並ぶ壁柱穴を検した。径はいずれも10cm内外深さも10cmほどのものである。上屋構造に関するものと思われる。カマドは東壁の南寄りに地山を掘り凹めて構築されている。火床面は住居床からなだらかな登り勾配をもち、焼土の分布が顕著である。焚き口幅50cm、長さ80cmである。遺物はカマドから2個の土師器甕のほか、台付甕、坏、須恵器甕、碗などが出土している。

41号住居は4軒の重複のなかでは最も新しく建てられたものである。北壁3.7m、南壁3.4m、東壁3.9m、西壁4.0mの規模で、ほぼ正方形のプランをもつ。北壁の方位はE-3°-Sである。本住居覆土は確認面から25cmほどの厚さで残っており、4層に分かれる。上層が褐色土、下層は暗褐色土である。壁体はややなめに掘り込まれ、現状で20cmほどの高さが残っていた。床面は厚さ10cmほどの貼床となっている。周溝は住居を全周しない。南壁の西半から西壁と北壁をめぐり、東辺は壁から50cmほど内側をめぐる。幅15cm、深さ10cm内外である。

カマドは東壁中央に築かれる。左袖をわずかに削り出す。カマド本体は半円形に壁体を掘り込む。焚口幅55cm、長さ70cmで、火床部は良く焼け、カマド手前60cmほどまで灰が散布する。



第257図 4区41号、42号、46号、47号住居跡遺物図(1)



第258図 4区41号、42号、46号、47号住居跡遺物図（2）

第6章 検出された遺構と遺物

貯蔵穴はカマドのつく壁面と反対の西壁の南隅につくられている。平面形は三角形状をしており、二辺を壁コーナーと一致させる。一辺80cmほど、深さ32cmをはかる。

遺物はカマドから土師器の小型甕、南壁よりから暗文の施された坏が出土しているほか、須恵質の高台付碗などが出土している。

42号住居の特異な平面形を除いて、他の三棟は棟方向を同じくし、カマドの位置が一直線上にならぶなど、その持続性が看取される。最終の41号住の時期は9世紀中葉と考えられる。

(桜場)

第 69 表 4区41号、42号、46号、47号住居跡出土遺物観察表 (第257・258図、図版 108)

番 号	土 器 種 類	法量 (口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
175 4区41号 住	坏 土 師 器	口-[13.6]、底-8.3、高-4.3 $\frac{3}{8}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質、良好。橙色	平底。体部中位で稜をもち、口縁、たちあがりぎみにひろがる。口縁端部丸味をもつ。底部手持ちヘラケズリ、体下部、外面、ヨコヘラケズリ、体上部ヨコナデ。内面、篋研磨による、底面一らせん文、側面一縦位暗文あり	
176	坏 土 師 器	口-[12.6]、底-[8.5]、高-3.3 $\frac{1}{2}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。橙色	平底。体部下位で稜をもち、屈曲してたちあがり、ゆるいS字状に外反する。口縁端部内側にかえりあり。体下部ナデ、上部ヨコナデ、底部、手持ちヘラケズリ	
177	坏 須 恵 器	底-6.4、高-(1.3) $\frac{1}{6}$	砂粒多く含む。還元、やや硬質。灰色	平底。体部内湾するか？底部回転糸切り、ロクロ右回転	
178	碗 須 恵 器	底-[8.6]、高-(2.1) $\frac{1}{6}$	砂粒を含む。還元、硬質。灰色	体部、大きくひろがる。盤か？底部回転糸切り、貼付高台、高台断面外行する台形、端部内斜する	
179	甕 土 師 器	口-[12.0]、胴-[12.2]、高-(5.0) $\frac{1}{4}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	小型甕。体部丸く、頸部くびれてたちあがり、口縁部わずかに外反。口頸部内側、稜二段あり、口縁端部、薄手、体上部ヨコヘラケズリ	カマド内一括出土 内外、スス付着
180	甕 土 師 器	口-[19.0]、高-(4.2) $\frac{1}{6}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。橙色	頸部よりたちあがり、口縁部外反する甕。口縁端部丸味をもち、内側にかえりあり。ヨコナデ調整	
181 4区42号 住	坏 土 師 器	口-[12.8]、底-[7.5]、高-3.3 $\frac{1}{8}$	砂粒多く含む。酸化、軟質。灰黄色	体部わずかに内湾してひろがる。口縁部やや内湾、端部丸味をもつ。底部、縁辺、ヘラケズリ調整	
182	坏 土 師 器	口-[13.4]、高-(3.2) $\frac{1}{6}$	砂粒多く含むが、細かい。酸化、軟質。橙色	体部内湾して口縁部へひらく。口縁端部丸味あり。内面、口縁部肥厚し稜をもつ	

212 4区46号 住	瓶 須恵器	底-8.4、胴-[16.6]、高-(11.1) ○ $\frac{1}{3}$	砂粒、石粒を含む。還元、硬質、良好。灰赤色	高台付、長頸瓶になるか。体上部で最大径をもつ。底部回転糸切り、体下部、回転ヘラケズリ調整。貼付高台、高台断面、外行する方形。ロクロ右回転	内底面、及び肩部に自然釉あり
213	甕 須恵器	口-[24.2]、高-(7.5) ○ $\frac{1}{6}$	砂粒を含む。還元、やや硬質。灰色	口頸部短かく、くの字に外反する。体部のふくらみ少ない。粘土積痕残り、内面、無文のタキ目。外面ヨコナデ、口頸部ロクロナデ	
214	坏 須恵器	口-[13.0]、底-[9.0]、高-3.3 ○ $\frac{1}{6}$	砂粒を含む。還元、硬質。灰色	平底。体部直線的にひらき、口縁部わずかに外反。底部回転糸切り。ロクロ右回転	
215	甕 須恵器	胴-(29.5)、高-(11.5) ○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰色	胴のはる中型の甕。内面、粘土積痕残り、同心円のタキ目あり、外面ナデ。器肉、厚手	外面自然釉あり
216	坏 須恵器	口-[13.0]、底-[7.2]、高-3.8 ○ $\frac{2}{3}$	砂粒を含む。還元、やや硬質。淡黄色	平底。体下部で稜をもってたちあがり、直線的にひろがる。口縁部直行。底部回転糸切り。ロクロ右回転	口縁部の一部分内外、スス付着
217	坏 須恵器	口-[13.2]、底-[7.7]、高-3.5 ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。粗。還元、やや硬質。灰白色	平底。体部やわらかく内湾してひろがる。口縁部わずかに外反。底部回転糸切り。ロクロ右回転	
219-1	甕 土師器	口-[14.2]、高-(3.7) ○ $\frac{1}{6}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色	小型台付甕の口へ上胴部。体部丸味強く、頸部しまつてたちあがり、口縁部わずかに外反する。口縁部内側薄手に仕上げ、稜をもつ。体上部ヨコヘラケズリ、口へ頸部ヨコナデ	
219-2	甕 土師器	底-4.8、脚裾径-[8.8] ○ $\frac{1}{6}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色	219-1の下部。体部丸く、脚台部短かく、八の字にひらく。体下部タテヘラケズリ、脚台部ヨコナデ	219-1と同一個体
220	甕 土師器	口-[21.0]、底-[4.0]、高-27.8、胴-[22.4] ○ $\frac{1}{2}$	白色、黒色砂粒多く含む。黒色輝石あり。酸化、軟質。浅黄橙へにぶい橙色	体上部に丸味をもつ、卵形を呈す。頸部しまつてくの字に外反。口縁部わずかに内湾する。底部ヘラケズリ、体部ナナメ、タテ、ヘラケズリ、内面、粘土積痕残り、ヨコナデ	
221	甕 土師器	口-[22.2]、底-3.4、高-30.0、胴-[23.1] ○ $\frac{1}{3}$	白色、黒色砂粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい橙色	底部小さく、体上部に張りをもって卵形を呈する。頸部しまつてたちあがり、口縁部外反する。内面にも丸い稜をもつ、コの字状口縁。体上部ヨコ、中部へ下部、ナナメ、タテヘラケズリ。内面粘土積痕残る	
222	甕 土師器	口-[21.0]、高-(21.0)、胴-[23.3] ○ $\frac{1}{4}$	白色砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。赤褐色	体上部に張りをもち、頸部しまつてたちあがり、口縁部外反する、コの字状口縁の甕。口縁端部外側、たちあがり、薄手の仕上げ。口頸部内面にも丸味のある稜をもつ。体上部ヨコ、下部ナナメ、タテヘラケズリ	

第6章 検出された遺構と遺物

223 4区47号 住	坏 須恵器	口-[10.8]、底-[7.5]、高-3.3 ○ $\frac{1}{2}$	白色砂粒を含む。還元、硬質。灰色	平底で、中央ややもちあがる。体下部で張りもち、たちあがる。底部回転糸切り。ロクロ右回転	
224-1	蓋 須恵器	口-[17.0]、つまみ径-2.8、高-4.6 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含み、粗。還元、やや硬質。灰黄色	天井部平坦部もち、身が深め。体部ひらき、口縁部で強く外反してたちあがる。端部丸味あり。天井部回転糸切り、肩部ヘラケズリ、中央部凸状にもちあがるボタン状つまみ貼付。ロクロ右回転	
225	甕 土師器	口-[22.0]、高-(4.5) ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	ゆるく外反する口縁の甕。口縁端部外側に、凹線めぐる。器肉、均質で薄手	

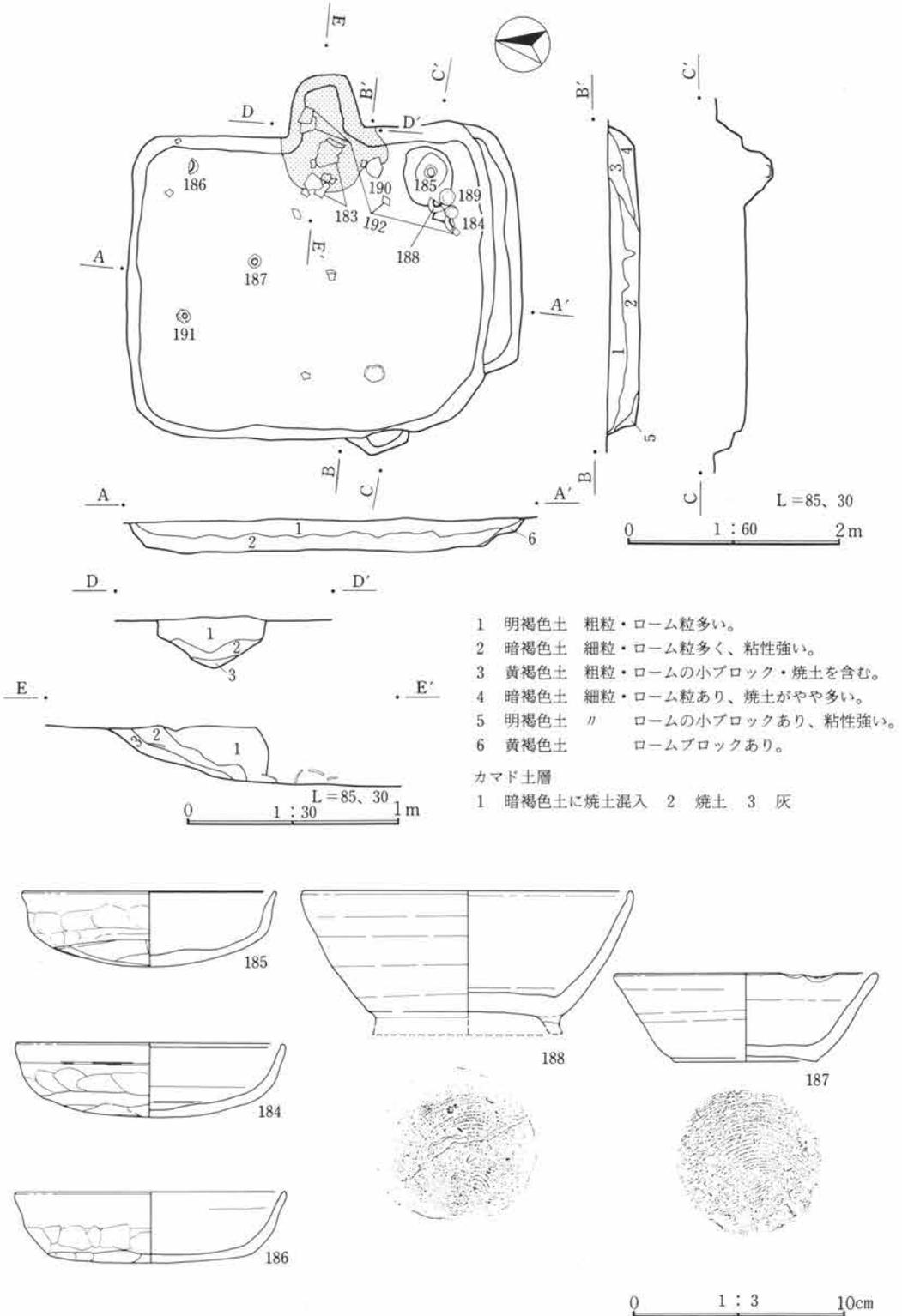
4区43号住居跡（第259・260図、第70表、図版109・110）

本住居跡は、基本土層第4層中で確認された。44号に接しているが、重複はなく、遺存状態のよい住居である。北壁2.75m、南壁2.8m、東壁3.65m、西壁3.3mの小型の部類に属す住居で、南北にやや長いプランを示す。南壁には40cmほどの幅で張り出し部が付設される。北壁はN-82°-Eである。覆土は2層に分かれる。上層は明褐色、下層は暗褐色を呈す。安定した埋没状態を示している。壁体は床面からややゆるやかに立ち上がる傾向を示す。現高30cmである。南壁の張り出しは床面より13cmほど高く、棚状の施設と考えられる。柱穴、周溝はないが、床面は10cm以上におよぶ貼床がおこなわれている。

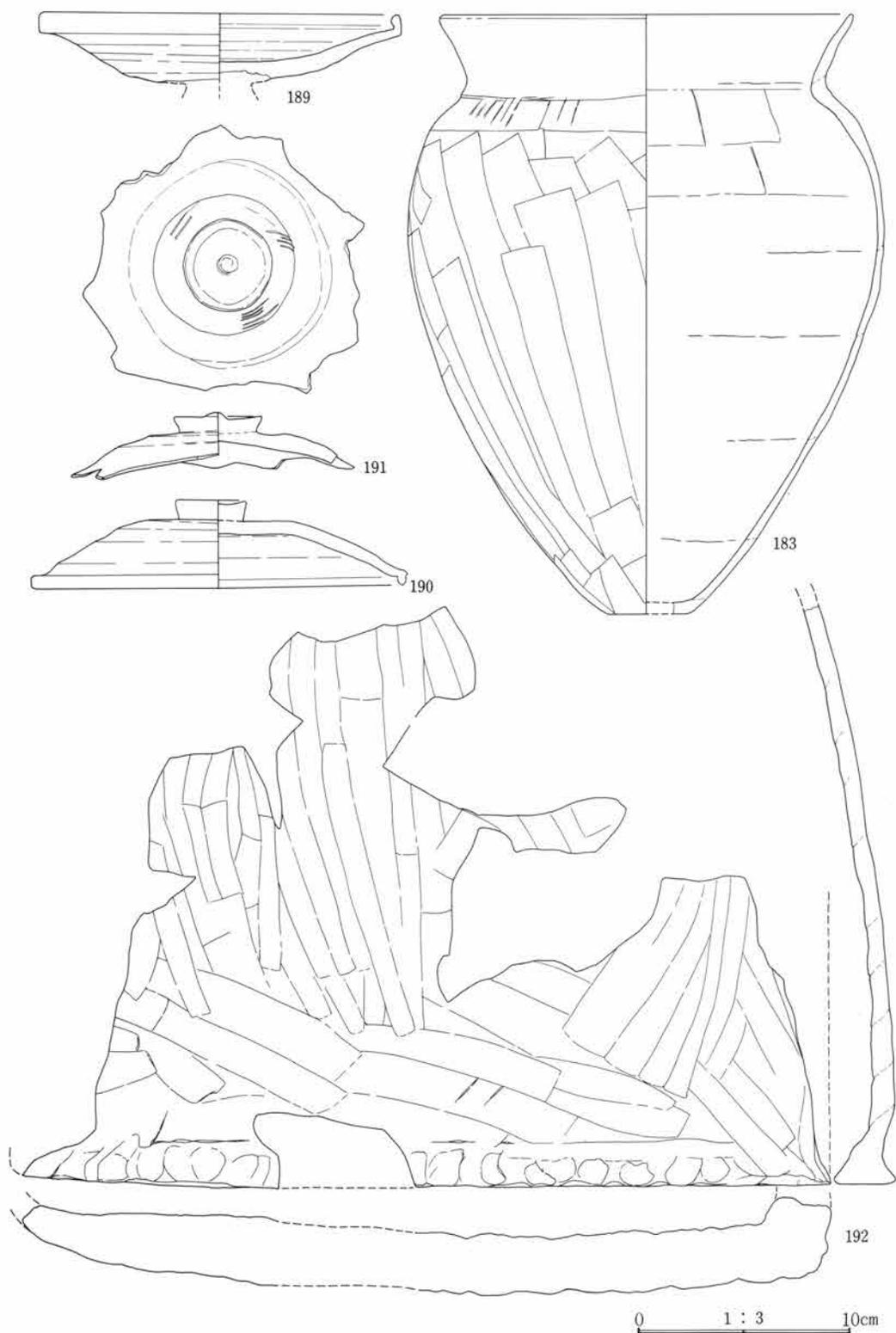
カマドは東壁中央に張り出して構築される。焚口幅70cm、長さ60cmである。灰が火床面に5cmの厚さで堆積し、その上に焼土がのる。カマドからは甕、183と土製カマド、192が出土している。貯蔵穴はカマドの右方、東南隅にあり、径50cm、深さ25cmほどである。なかから土師器の坏、185が出土している。

遺物はほかに高台付埴、坏、蓋などがある。特に土製カマドの出土は造り付けカマドから出土しておりその構成上、注目されるものである。出土遺物から9世紀初頭のものと考えられる。

(桜場)



第259図 4区43号住居跡遺構、遺物図

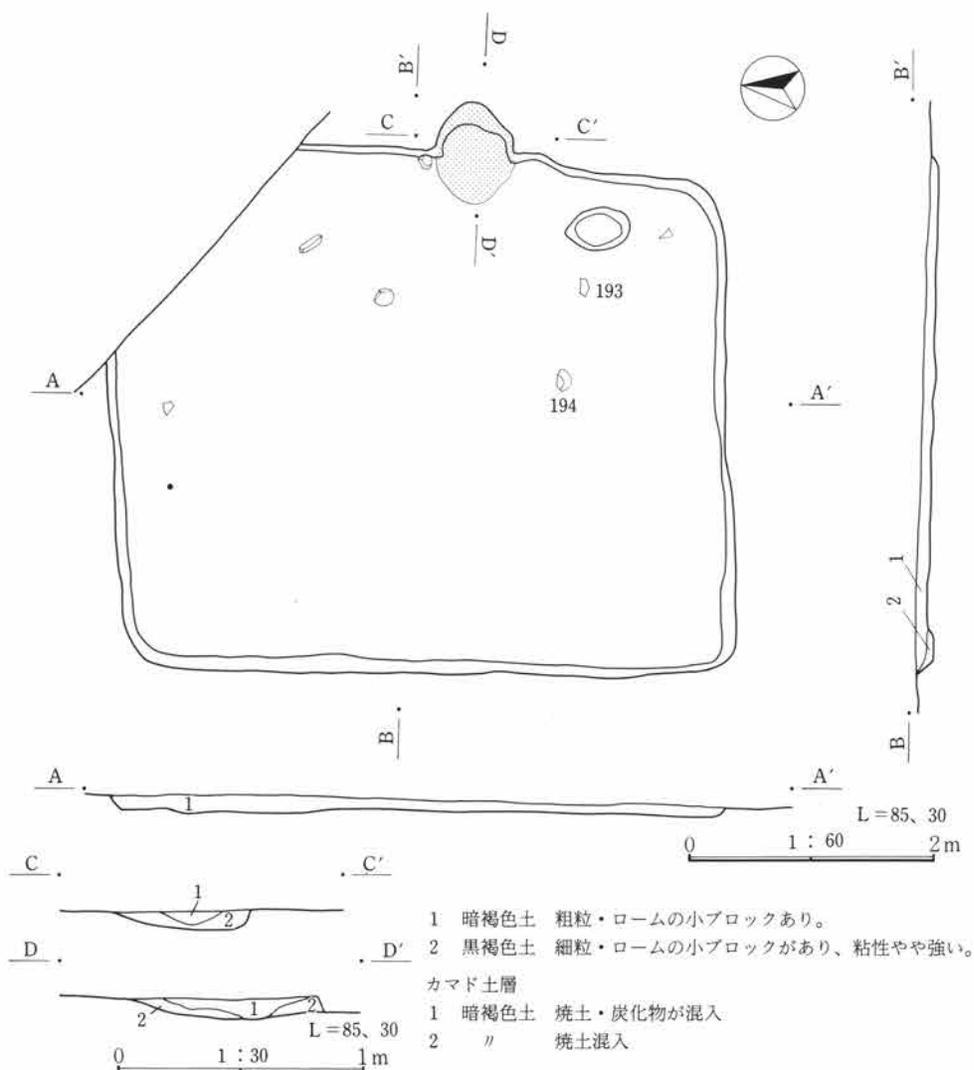


第260図 4区43号住居跡遺物図(2)

第70表 4区43号住居跡出土遺物観察表

(第259・260図、図版 109・110)

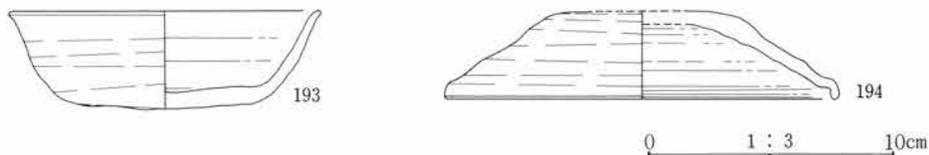
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
183	甕土師器	□-19.4、底-[3.7]、高-27.9、胴-22.3○ $\frac{1}{2}$	砂粒多く、黒色輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	体上部に最大径をもち、頸部くびれて、たちあがり口縁部外反する甕。口頸部内側、二段の稜あり。底部小さく、体部、卵形。体部上位ヨコ、中〜下位タテヘラケズリ	
184	坏土師器	□-12.7、底-10.3、高-3.5○完存	砂粒多く、黒色輝石を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	凸状の底。体部下位で内湾してたちあがり、口縁部わずかに外反。口縁端部薄手。底部手持ちヘラケズリ。体下部ナデ、口縁部ヨコナデ	
185	坏土師器	□-12.0、底-9.4、高-3.5○略完存	砂粒を含み、黒色輝石あり。酸化、軟質。にぶい褐色	凸状の底。体部下位で内湾してたちあがる。口縁部わずかに外反。底部手持ちヘラケズリ	
186	坏土師器	□-[12.8]、底-[9.6]、高-3.3○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含み、黒色輝石あり。酸化、軟質。にぶい橙色	凸状の底部。体部中位で内湾してたちあがる。口縁わずかに外反する。底部手持ちヘラケズリ、体下部ナデ	
187	坏須恵器	□-12.4、底-6.8、高-4.1○完存	砂粒を含む、粗。還元、やや硬質。黄灰色	平底。体部わずかに内湾しながらひろがる。口縁端部丸味あり。器肉、厚手。底部回転糸切り。ロクロ右回転	
188	碗須恵器	□-15.6、底-8.6、高-(6.3)○ $\frac{1}{2}$	砂粒を多く含む、粗。還元、硬質。灰白色	体部わずかに内湾してひろがる大振りの高台付碗。口縁部やや内湾し、端部丸味をもつ。底部回転糸切り、ロクロ右回転。貼付高台	
189	高坏須恵器	□-17.0、脚付根径-[4.0]、高-(3.0)○ $\frac{1}{3}$	砂粒を多く含む、粗。還元、硬質。灰白色	長脚付高坏、脚部を欠く。底部より水平にひらき、折れ曲って逆八の字にひらく。口縁、立ちあがり、内面に折りかえしあり。底部、回転糸切り後、渦巻状のきざみあり	
190	蓋須恵器	□-[17.5]、高-4.1、つまみ径-3.3○ $\frac{1}{2}$	砂粒を多く含む、粗。還元、やや硬質。灰白色	天井部平坦。体部ゆるやかに内湾し、口縁部外反、端部たちあがって、丸味あり。天井部、回転糸切り、ボタン状つまみ貼付。ロクロ右回転	
191	蓋須恵器	つまみ径-4.1、高-(2.4)○ $\frac{1}{2}$	砂粒を多く含む、粗。還元、やや硬質。オリーブ灰色	天井部平坦。体部丸味をもってひろく。天井部回転糸切り、ボタン状つまみ貼付。ロクロ右回転	体部、打ち欠きと思われる
192	置きカマド	奥行き-(38.0) 底厚-2.7、器厚-0.8、高-(26.8)○ $\frac{1}{2}$	砂粒多く含む、粗。酸化、軟質。にぶい褐色〜褐色	方形を形どるカマドの側辺と思われる。底部ふ厚く、体部内傾し、粘土積痕顕著、外面、ナデ(ナナメヨコ)、底辺、指おさえ	カマド出土内側、加熱痕あり



第261図 4区44号住居跡遺構図

4区44号住居跡 (第261・262図、第71表、図版110・111)

基本土層第4層中で確認された。重複関係はないが路線外に一部のびるため未掘部がある。また43号住が接して存在する。西壁4.9m、南壁3.95mの整った方形住居である。確認面から床面まで3~10cmと浅く底面に堆積する黒褐色土を一層認めたのみである。床面はあまり踏みかためたような痕跡が認められない。カマドは東壁のやや南よりにある。円形の堀方をもつ造作であるが、焼けた痕跡があまりみられない。柱穴、周溝等は認められない。貯蔵穴はカマド右方にあり、径50cm×35cm、深さ20cmほどである。遺物としては土師器甕、須恵器坏、坏蓋などがあるが量は少ない。時期は平安時代(9世紀前葉)とする。(桜場)

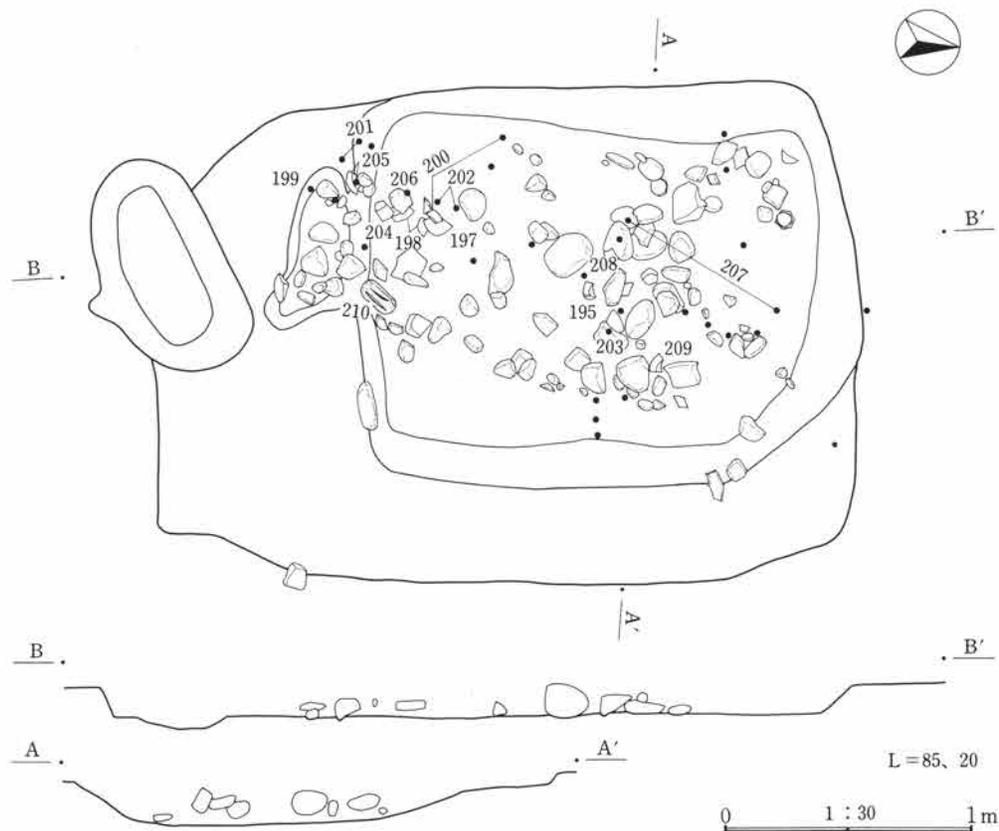


第262図 4区44号住居跡遺物図

第 71 表 4区44号住居跡出土遺物観察表

(第262図、図版 110)

番 号	土器 種 種	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
193	坏 須恵器	口-[12.6]、底-[7.3]、高-3.9 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒多く含む。還元、やや硬質。灰白色	平底。体部わずかに内湾してひらき口縁、やや外反する。口縁端部薄手の仕上げ。底部回転糸切り	
194	蓋 須恵器	口-[16.0]、高-(3.5) ○ $\frac{1}{2}$	砂粒含む。還元、硬質。灰色	天井部丸味をもつ。体部直線的にひろがり、口縁部たちあがる。端部薄手。天井部回転糸切り、肩部回転ヘラケズリ。ロクロ右回転	



第263図 4区45号住居跡遺構図

4区45号住居跡（第263・264図、第72表、図版110～112）

基本土層第4層中で確認された。本遺構は住居として分類されるが、後述するようにほかの性格をもつ遺構として考えたいものである。遺構は二段に掘り凹められている。浅い掘り方は短辺2m、長辺2.75m、深さ15cmほどである。底面にはかなりの凹凸がある。長軸の方位はE-5°-Sを呈す。南辺に接して不整形のピットが2ヶ所ある。遺物は深い堀方内とピットに限定して出土している。底面に接するか、やや浮いて多くの礫が出土している。円礫から亜角礫状のものまであるが、ばらばらな出土状態を示している。この礫に混在して15個体以上の坏と砥石が出土している。坏には墨書土器が2個体含まれている。

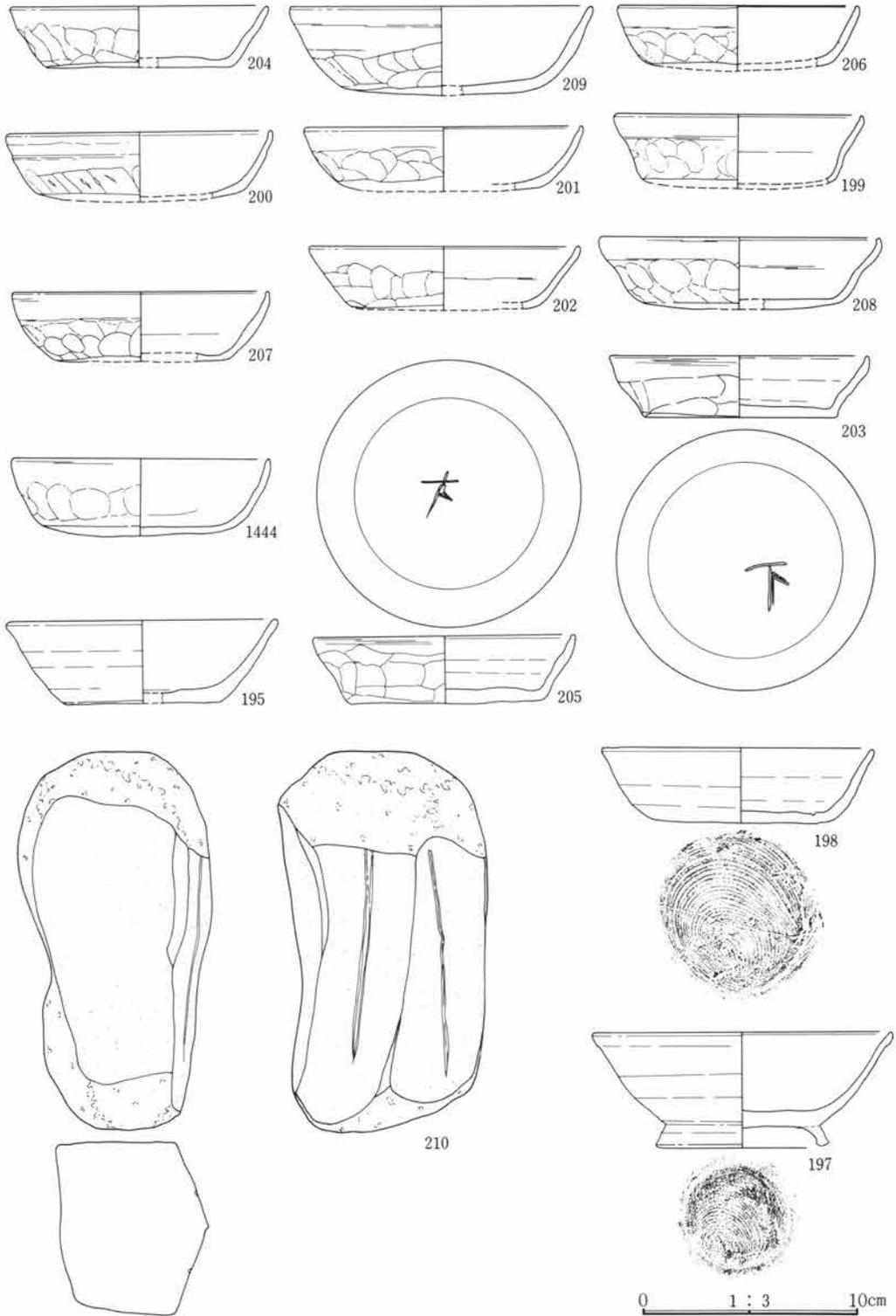
遺物の示年代は9世紀中～後半代のものと考えられる。

本地域の当該住居からの出土土器には墨書土器が少ない傾向が認められる。そうしたなかで本遺構は坏類のみを出土し、その中から2個体の刻字土器を出土しているという特異性がある。また長方形の堀方とそこに散布する礫類が何を示すか不明であるが、少なくとも住居としては認められないものである。（桜場）

第72表 4区45号住居跡出土遺物観察表

（第264図、図版 110・112）

番号	土器種類	法量（口径・底径・器高） 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
195	坏 須恵器	□-[12.6]、底-[7.2]、高-3.8 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	平底。体部わずかに内湾してひろがる。口縁もやや外反、端部丸味あり。底部回転糸切り	底部外縁、スレあり
197	碗 須恵器	□-[14.0]、底-[8.0]、高-5.3 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。粗。還元、やや硬質。灰白色	体部内湾してひろがり、口縁部わずかに外反して、外側に肥厚する。底部回転糸切り、貼付高台。ロクロ右回転。高台断面、外開きの長方形。器肉、薄手、均質	灰釉うつしのプロポジション
198	坏 須恵器	□-12.6、底-7.3、高-3.5○完存	砂粒、石粒を含む。粗。還元、やや硬質。灰白色	平底。体部下位で内湾してたちあがり、口縁わずかに外反。口縁端部丸味をもつ。底部回転糸切り。ロクロ右回転	
199	坏 土師器	□-[11.4]、底-[9.0]、高-3.2 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。橙色	平底。体部、ゆるいS字状に外反し口縁端部、内側にかえりをもつ。体下部ナデ、口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ	
200	坏 土師器	□-[12.2]、底-[9.6]、高-3.1 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。橙～にぶい赤褐色	平底。体部中位で稜をもち、口縁内湾しきみ。口縁端部内側にかえりあり。体下部、ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。底部手持ちヘラケズリ	

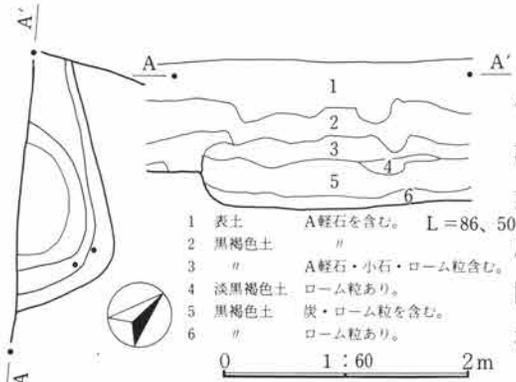


第264図 4区45号住居跡遺物図

第6章 検出された遺構と遺物

201 4区45号 住	坏 土師器	□-[13.0]、底-[9.9]、高-2.9 ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	平底。体部わずかに内湾してたちあがる。口縁部内湾し、端部内側に丸いかえりあり。体下部ナデ、粗雑。口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	
202	坏 土師器	□-[12.6]、底-[8.8]、高-2.8 ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色	平底。体部わずかに外反し、口縁部内湾ぎみにたちあがる。口縁部丸味のあるかえり、内側にあり。体下部ナデ、口縁部ヨコナデ	
203	坏 土師器	□-[12.0]、底-[9.0]、高-2.8 ○ $\frac{1}{3}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。赤褐色	平底。体部わずかに外反し、口縁部内湾してたちあがる。口縁部丸味あり。体下部ナデ、口縁部ヨコナデ。底部手持ちヘラケズリ	底部、ヘラによる刻字あり-「下」字
204	坏 土師器	□-[12.0]、底-[8.7]、高-2.8 ○ $\frac{1}{3}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	平底。体部わずかに外反し、口縁部内湾ぎみにたちあがってひろがる。体下部ナデ、粗雑。口縁部ヨコナデ。底部手持ちヘラケズリ	
205	坏 土師器	□-[12.1]、底-[8.7]、高-3.0 ○ $\frac{1}{3}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	平底。体部わずかに外反し、口縁部内湾してたちあがる。口縁部丸味をもつ。体下部ナデ。口縁部ヨコナデ。底部手持ちヘラケズリ	内底面、ヘラ刻字あり-「大」か「太」か不明
206	坏 土師器	□-[11.2]、底-[8.8]、高-2.8 ○ $\frac{1}{6}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	平底。体部やわらかく内湾してたちあがる。口縁部丸味あり。体下部ナデ、口縁部ヨコナデ、底部、ヘラケズリ	
207	坏 土師器	□-[12.0]、底-[8.1]、高-3.2 ○ $\frac{1}{5}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	平底。体部中位で丸味をもつてたちあがる。口縁部わずかに内湾し、端部、丸味をもつ。体下部ナデ、口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ	
208	坏 土師器	□-[13.0]、底-[9.0]、高-3.3 ○ $\frac{1}{3}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	平底。体部、ゆるいS字状のカーブをもつ。口縁部内湾し、端部、内側に丸いかえりもつ。体下部ナデ、口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	
209	坏 土師器	□-[14.0]、底-[9.4]、高-4.1 ○ $\frac{1}{4}$	砂粒多く、黒色輝石を含む。酸化、軟質。橙色	やや凸状の平底。大振りの坏。体部下位で内湾し、口縁部直行する。口縁部丸味をもち、内側にかえりあり。体下部ヨコヘラケズリ、口縁部ナデ。底部手持ちヘラケズリ	
1444 参	坏 土師器	□-[12.0]、底-[9.0]、高-3.0 ○ $\frac{1}{3}$	砂粒多く含む。酸化、軟質。にぶい褐色	やや凸状の平底。体部中位で、内湾してたちあがる。口縁部薄手でわずかに内側にかえりもつ。体下部ナデ、底部ヘラケズリ	
210	砥石	縦-17.3、横-6.9、厚-8.0	材質、多孔質安山岩	楕円自然石の側面を砥面として使用。断面五角形で四面使用、うち二面は筋砥	

4区61号住居跡（第265図）

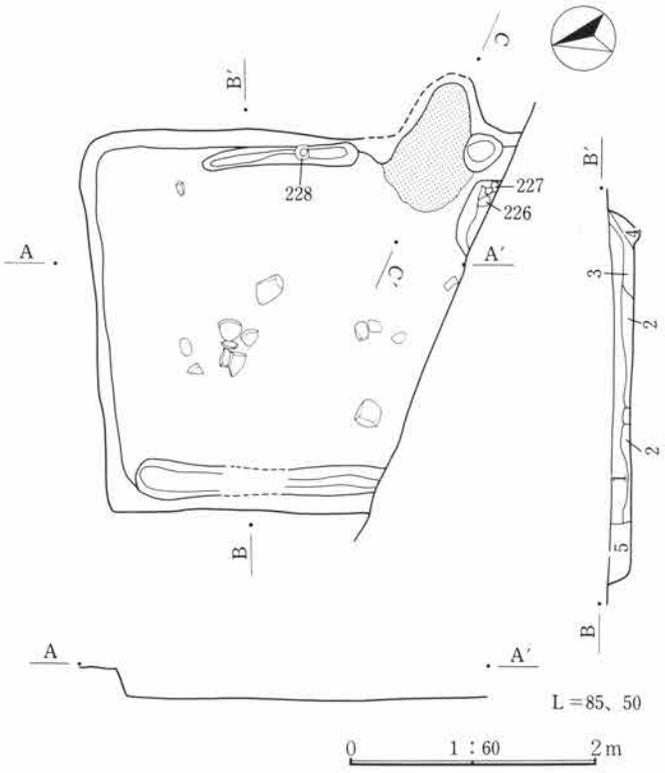


- 1 表土 A軽石を含む。 L=86、50
- 2 黒褐色土 //
- 3 // A軽石・小石・ローム粒含む。
- 4 淡黒褐色土 ローム粒あり。
- 5 黒褐色土 炭・ローム粒を含む。
- 6 // ローム粒あり。

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。住居の殆どは調査区外に広がり、東南隅付近を調査したにすぎない。確認した範囲での規模は、東辺0.9m、北辺1.98mで、壁高は約20cmである。床面は、第4層を踏み固めており、平坦である。隅近くで半分程と推定されるが、円形状の土壇が確認された。径は約1.05m、床面からの深さ約10cm、しっかりした堀方を持つが、貯蔵穴に相当する

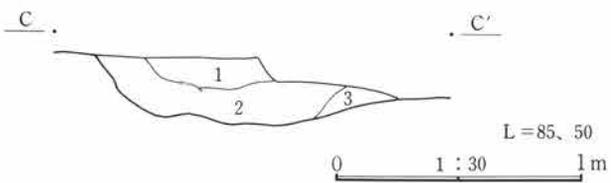
第265図 4区61号住居跡遺構図

るかは不明である。遺物は、土師器甕、坏の小破片が少量出土し、覆土での特徴等を合わせて、遺構の時期を平安時代（10世紀）とする。（井川）



- 1 黒褐色土 ローム粒を含む。
- 2 // 1層にロームの小ブロックを含む。
- 3 // 褐色土の斑点状ブロック、ローム粒を含む。
- 4 // ローム粒が特に多い。
- 5 かく乱

L=85、50



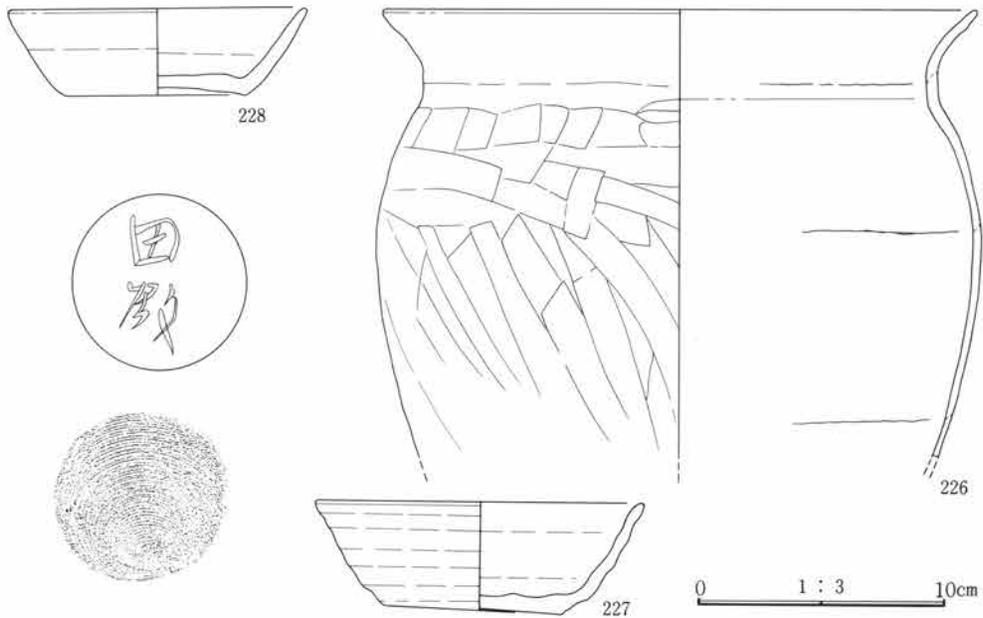
- 1 暗褐色土 焼土を少量含む。
- 2 焼土
- 3 暗褐色土 焼土・炭化物を少量含む。

L=85、50

第266図 4区62号住居跡遺構図

4区62号住居跡 (第266・267図、第73表、図版113)

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。南辺側は調査区外に広がり、カマドから西辺にかけて帯状に攪乱を受けている。規模は、東辺で3.45m以上、北辺で3.02mを測り、方位は北辺でE-12°-Sである。平面形は、南北に長い方形を呈すると推定される。床面は、暗褐色土を踏み固めており、平坦でやや堅緻である。周溝が、東西両辺で確認された。幅約20cm、深さ約12cmである。カマドは、東辺で確認されたが、中央部を攪乱されている。住居内に大小の礫が見られるが、袖石の一部か。貯蔵穴は、カマド手前で土壇状の一部が確認されている。長径で約70cm、深さは11cmである。遺物は、土師器甕、埴、須恵器坏があり、坏には「田殿」の墨書がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代(9世紀前葉)とする。(井川)



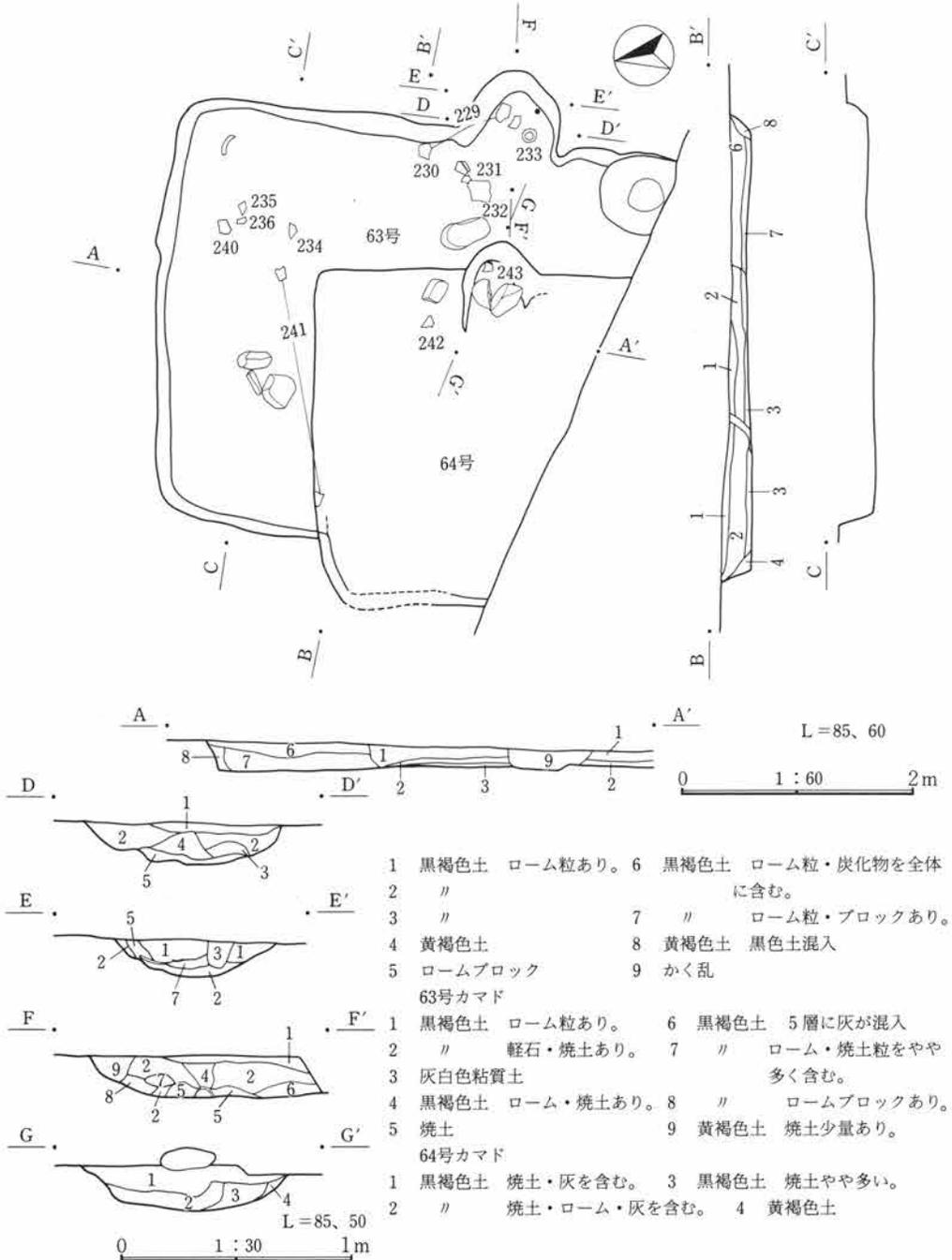
第267図 4区62号住居跡遺物図

第73表 4区62号住居跡出土遺物観察表

(第267図、図版 113)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
226	甕 土師器	口-[24.0]、高- (17.9)○ $\frac{1}{3}$	砂粒多く、黒色輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	体上部で丸味をもち、頸部ゆるくしまり、たちあがって、口縁部外反する。体上部ヨコ、下部タテヘラケズリ。口頸部ヨコナデ	
227	坏 須恵器	口-[13.2]、底- 7.1、高-4.5○ $\frac{1}{5}$	砂粒、石粒を多く含む。還元、やや硬質。灰白色	平底。体下部で稜をもって、直線的にひろがる。口縁部直行、端部丸味あり。身の深めの坏。底部回転糸切り。ロクロ右回転	

228 4区62号 住	坏 須恵器	口-12.0、底-7.0、高-3.5○略完 存	砂粒、石粒多く黒色斑文 あり。還元、硬質。灰色	平底。体下部で内湾してたちあがる。 底部回転糸切り、ロクロ右回転。器 肉、均質、やや厚手	秋間産か 底部外面、墨書 「田殿」
-------------------	----------	----------------------------	----------------------------	----------------------------------------------------	-------------------------



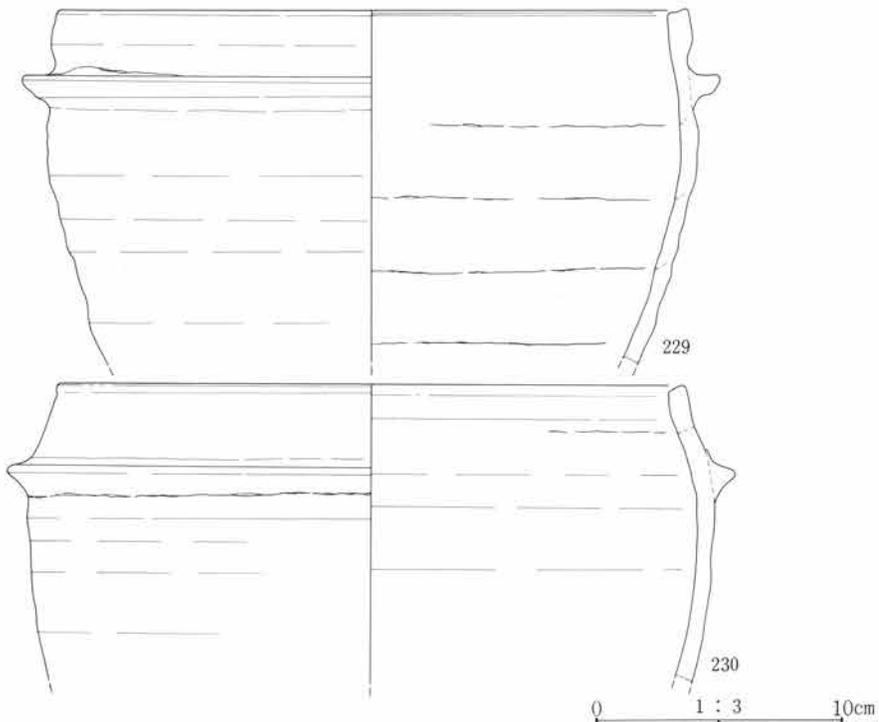
第268図 4区63号、64号住居跡遺構図

4区63号住居跡（第268～270図、第74表、図版113・114）

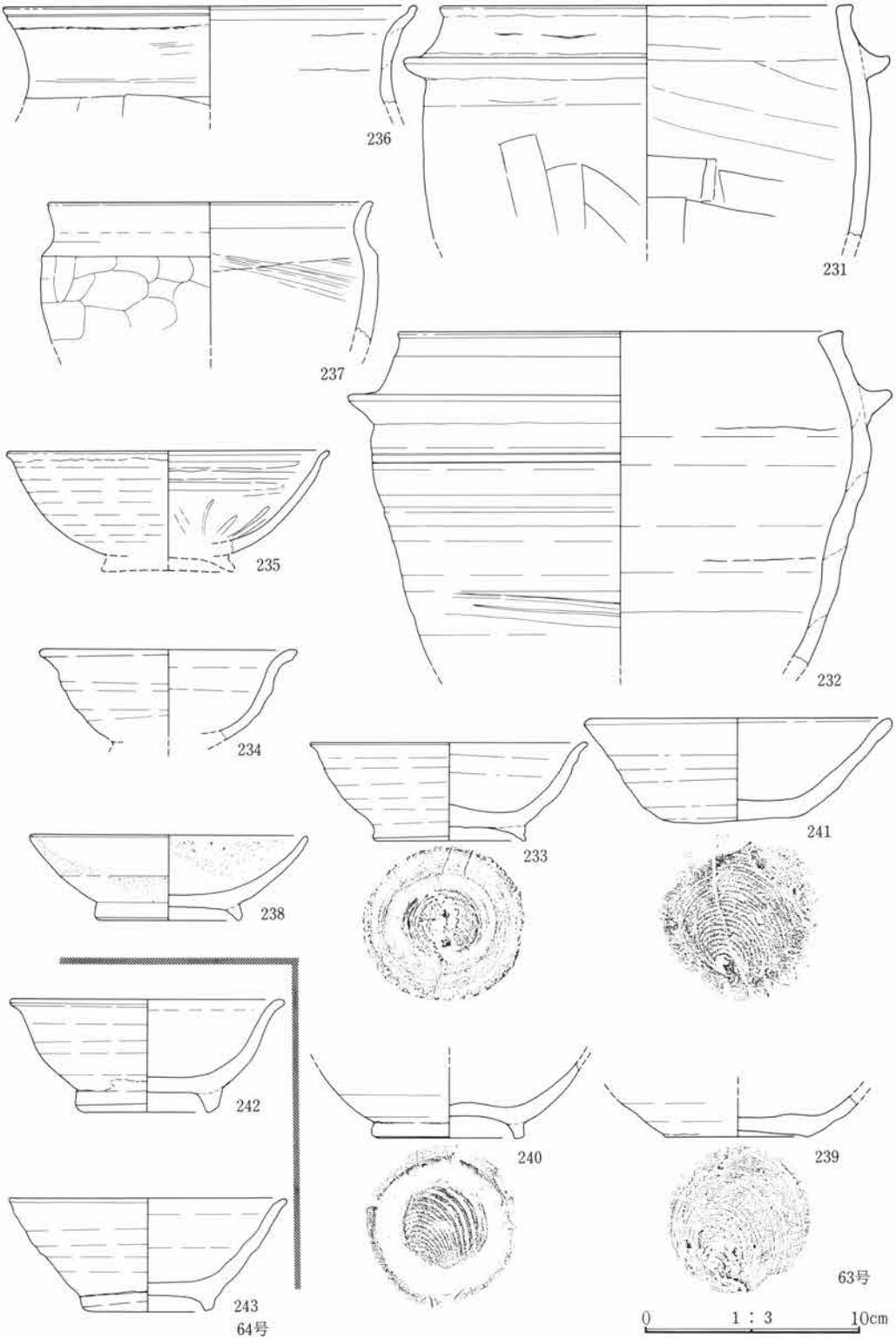
本住居跡は、基本土層の第4層で64号住居跡、6号溝と重複して確認された。重複関係は、本住居跡が最も古い。南辺側は調査区外に広がる。規模は、東辺で4.30m以上、北辺で3.63mを測り、方位は北辺でE-20°-Sである。平面形は、南北に長い方形を呈すると推定される。床面は、暗褐色土を踏み固めており、平坦で堅緻である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺で確認された。袖石等は、住居内に広く散在する。貯蔵穴は、カマド右の住居東南隅と推定される位置で、径約65cmの円形土壇が確認された。遺物は、住居内に散在しており、羽釜を始めとして土師器甕、碗、須恵器甕、碗、灰釉陶器皿、鉄鎌がある。遺構の時期は、出土遺物により平安時代（11世紀初頭）とする。（井川）

4区64号住居跡（第268～270図、第74表、図版113・114）

本住居跡は、63号住居跡内に大きく重複して確認された。本住居跡が新しい。南辺側は調査区外に広がり、重複部分については一部推定による。規模は、東辺で2.70m以上、北辺で2.90mを測り、方位は北辺でE-12°-Sである。平面形は、南北に長い方形を呈すると推定される。床面は、暗褐色土を踏み固めており、平坦で堅緻である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺で一部攪乱を受けて確認された。全体の遺存状態は悪いが、壁外に伸びる円形の堀方を持ち、袖石と思われるものが周辺に散在する。遺物は、須恵器高台付碗があり、全体に少ない。遺構の時期は、出土遺物により平安時代（11世紀中葉）とする。（井川）



第269図 4区63号、64号住居跡遺物図（1）



第270図 4区63号、64号住居跡遺物図（2）

第74表 4区63号、64号住居跡出土遺物観察表

(第269・270図、図版 113・114)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
229	羽釜	口-[25.4]、高-(14.2) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰黄褐〜にぶい黄橙色	体上部で丸味をもち、鐙〜口縁部やや内傾、口縁端部平坦面を持ち、中央部凹線あり。鐙断面丸味あり。ロクロナデ調整	
230	羽釜	口-[25.4]、高-(11.8) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、硬質、良好。橙色〜明褐色	体部丸味をもち、口縁部内傾する。口縁端部平坦面あり。鐙断面、三角。ロクロナデ調整	
231	羽釜	口-[19.2]、高-(10.6) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰色	体部丸味少なく、口縁部やや内傾する。口縁端部平坦で外側に突出する。鐙断面、上むきの三日月状。体部ヨコナデ後タテヘラケズリが体上部までおよぶ	
232	羽釜	口-[20.8]、高-(15.3) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒、石粒多く含み、粗。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色〜褐灰色	体上部で丸味をもち、口縁部内傾する。口縁端部平坦、外側につまみナデあり。鐙断面、端部の丸い三角形。体部ロクロナデ、体下部タテヘラケズリ	
233	碗須恵器	口-[12.7]、底-7.1、高-4.5 $\circ\frac{1}{4}$	砂粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい褐色	体部内湾してひろがり、口縁部わずかに外反する。口縁端部薄手の作り。底部回転糸切り。貼付高台、高台断面、三角形	
234	碗須恵器	口-[12.0]、高-(4.2) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒を多く含む。酸化、やや硬質。にぶい褐色	体部丸く内湾してひろがり、口縁部外反する。口縁端部外側に丸い稜をもつ。体部ロクロナデ調整	
235	碗土師器	口-[15.0]、高-(4.7) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒を含むが、細密。酸化、軟質。にぶい黄橙色、内黒	体部丸く内湾してひろがり、口縁部短かく強い外反。体部ロクロナデ調整。内面、ヘラ研磨、黒色処理。器肉、薄手、均質	
236	甕土師器	口-[19.2]、高-(5.6) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒、黒色輝石を含む。酸化、軟質。橙色	頸部たちあがり長く、口縁部短かく外反する。口縁端部、丸味をもち、外側に沈線めぐる。ヨコナデ	
237	甕須恵器	口-[15.0]、高-(6.3) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰色	小型甕。体部内湾してたちあがり、頸部くびれて、口縁部わずかに外反する。口頸部内側に丸い稜をもつ。体部、ヨコヘラケズリ、口頸部ヨコナデ	
238	碗灰釉陶器	口-[13.0]、底-[7.0]、高-3.9 $\circ\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰白色、釉-灰色	身の浅い碗。体部内湾してたちあがる。口縁端部丸味あり。底部回転糸切り。貼付高台、断面丸味のある台形。釉、つけかけ	

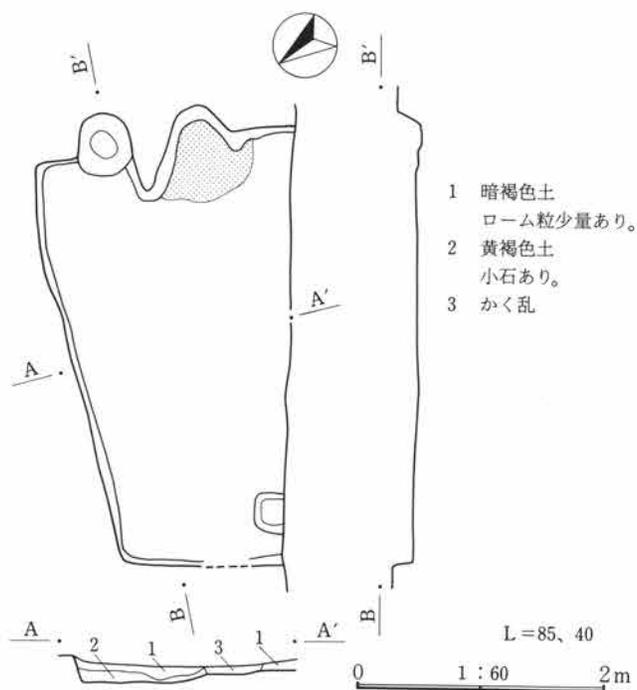
239 4区63号住	埴(?) 須恵器	底-6.6、高-(1.6) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒多く含む。還元、硬質。灰色	平底、大振りの器。底部回転糸切り、ロクロ右回転、体部ロクロナデ調整	
240	埴	底-7.0、高-(3.1) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒多く、輝石も含む。還元、燻し、やや硬質。黒色	体下部より丸く内湾してたちあがる。底部回転糸切り。貼付高台、断面丸味のある台形。体部ロクロナデ調整、ていねいな作り	
241	坏 須恵器	口-[14.3]、底-6.0、高-4.9 $\circ\frac{3}{4}$	砂粒、石粒多く含む、粗。酸化、やや硬質。灰黄色	平底。体部直線的にひろがり、口縁部わずかに外反。端部肥厚ぎみで丸味あり。底部回転糸切り、ロクロ右回転。底部内側、粘土補修痕あり。全体にゆがみあり	
242 4区64号住	埴 須恵器	口-[12.8]、底-[6.0]、高-5.2 $\circ\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰色	体部中位で丸味をもってたちあがり口縁部外反する。口縁端部外側に稜をもって丸味あり。底部、貼付高台、断面、丸い台形。体部ロクロナデ調整	
243	埴 須恵器	口-[12.8]、底-[6.0]、高-5.2 $\circ\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。浅黄色	体部直線的にひろがり、口縁部わずかに外反する。口縁端部、薄手の作り。底部、貼付高台、断面台形。体部ロクロナデ調整	

## 4区65号住居跡(第271図、図版

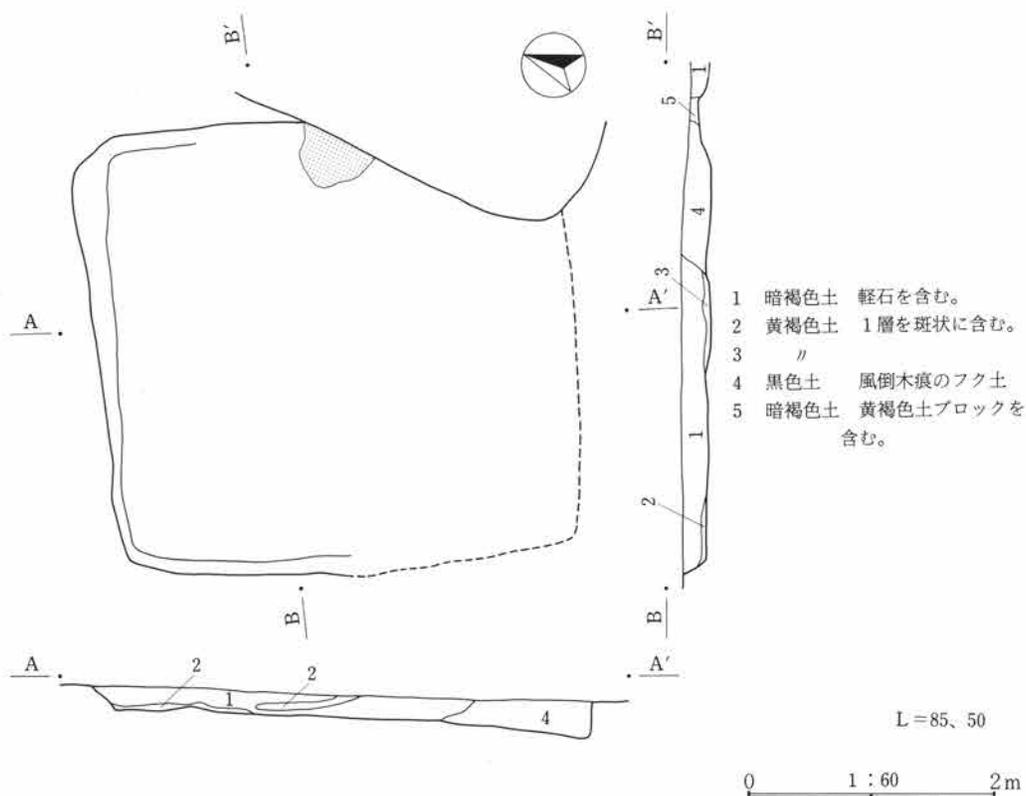
114)

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。南半分は調査区域外に広がる。方位は北辺でE-29°-Sを示す。平面形は、方形を呈すると推定される。床面は、暗褐色土を踏み固め、平坦でやや堅緻である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺で確認されたが、焼土、炭化物の量は少ない。左袖は、地山を掘り残している。遺物は、僅少で土師器甕がある。遺構の時期は、出土遺物から平安時代(9世紀)とする。

(井川)



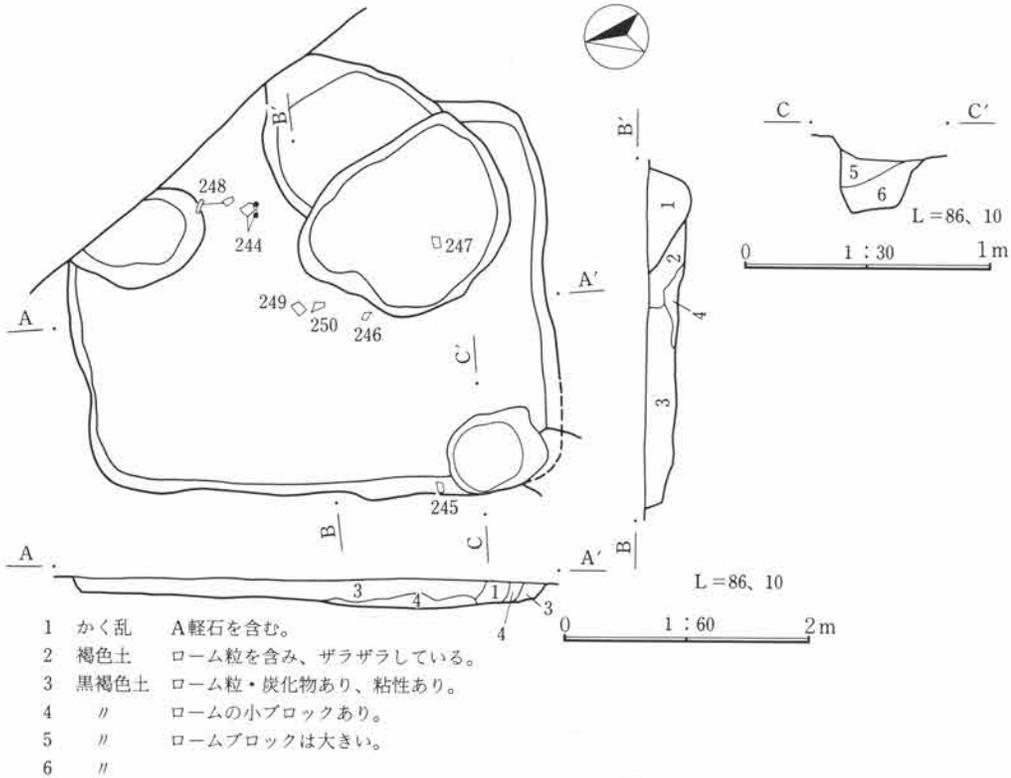
第271図 4区65号住居跡遺構図



第272図 4区66号住居跡遺構図

4区66号住居跡（第272図）

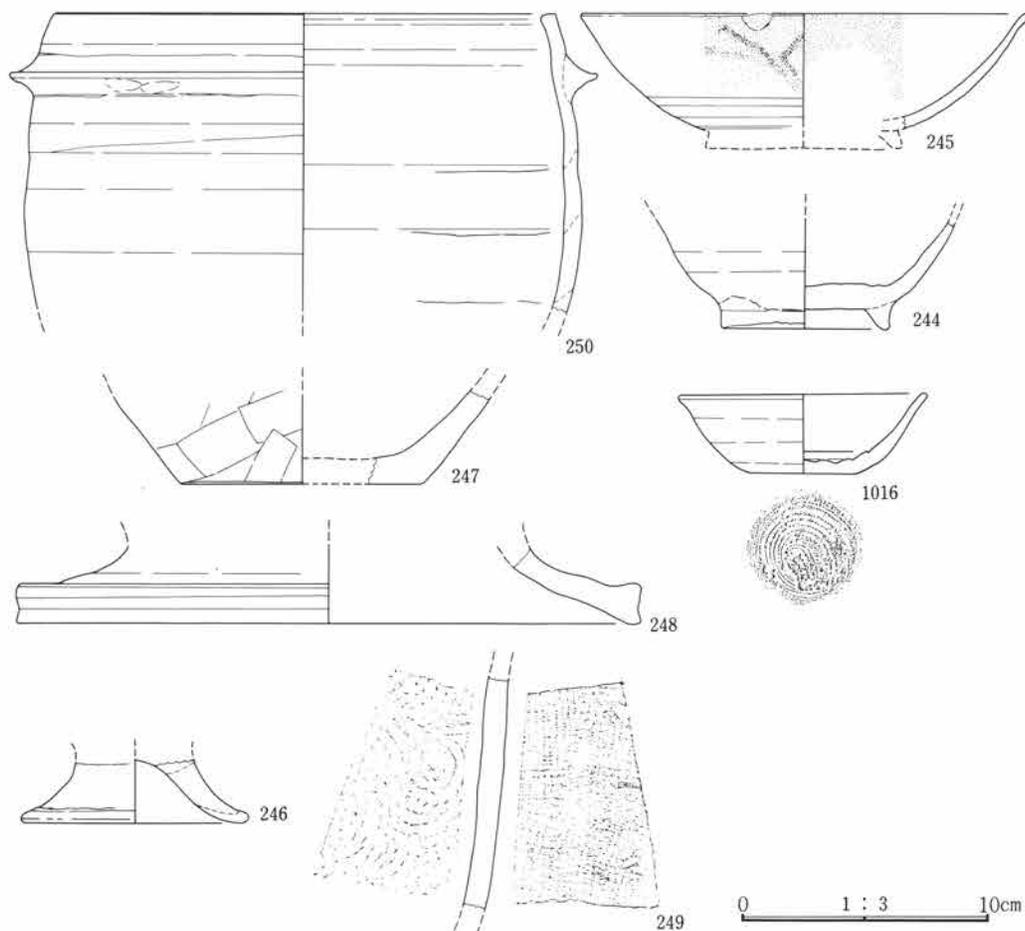
本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。東辺側に38号住居跡が重複し、本住居跡が古い。南半分については、床面下に風倒木痕があるため、床面、壁の状態について判然としない。規模は、西辺で推定3.85m、北辺で3.56mを測り、南北が少し長い方形を呈する。方位は、北辺でN-67°-Eである。床面は、北半分については暗褐色土を踏み固めており、南半分は風倒木痕に伴う黒色土であるが軟弱である。カマドは、東辺の中央部で焼土分布が見られたが、重複等により痕跡となっている。遺物は、土師器甕、須恵器碗、蓋があるが、全体に少ない。遺構の時期は、出土遺物により平安時代（9世紀前葉）とする。（井川）



第273図 5区1号住居跡遺構図

## 5区1号住居跡(第273・274図、第75表、図版115)

本住居跡は、基本土層第4層で確認された。住居跡北東隅部が調査区外であり、又、北東辺に、大型の5区1号土壇、5区2号土壇が重複しているため、正確な規模は不明である。推定規模は、西辺3.15m、南辺3.85mで、壁高23cmである。平面形は、横(南北辺)の若干長い方形である。方位は、E-6°-S(南辺)を示す。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺南寄りに位置するものと考えられるが、土壇によって不明である。貯蔵穴は、西南隅にあり、長径80cm×短径63cm×深さ45cmの円形を呈する。遺物は、羽釜、土師器小型台付甕、埴、坏、灰釉陶器埴、須恵器甗、甕、壺等である。出土状況は、北辺に土器が多く、南辺には、礫が多くみうけられた。時期は、遺物から、平安時代(11世紀初頭)と考えられよう。(長谷部)



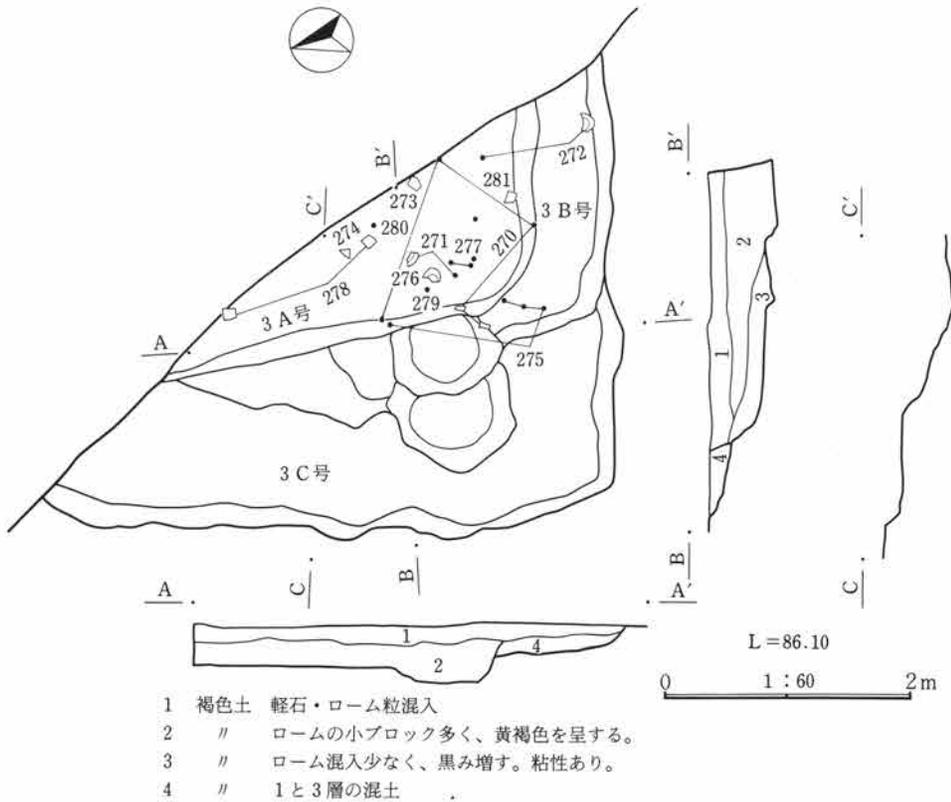
第274図 5区1号住居跡遺物図

第75表 5区1号住居跡出土遺物観察表

(第274図、図版 115)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
244	碗 須恵器	底-6.8、高-(4.3) $\circ\frac{1}{2}$	砂粒、輝石を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	体部、丸く内湾する高台付碗。底部回転糸切り、貼付高台、高台断面、がっしりした台形で粗雑。体部ロクロナデ調整。器肉、体部のみ薄手	
245	碗 灰釉陶器	口-[18.0]、高-(4.6) $\circ\frac{1}{10}$	砂粒含むが、細密。還元、硬質。灰白色、釉-灰オリーブ色	体部内湾してひろく、大振りの碗。口縁部わずかに外反し、端部丸味をもつ。体下部回転ヘラケズリ。釉、つけがけ	
246	甕 土師器	底-[4.8]、脚台-[9.2]、高-(2.4) $\circ\frac{1}{10}$	砂粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色	八の字形にひろく脚台付小型甕。貼付脚台。脚裾端部めくれて丸味あり。ヨコナデ。器肉、厚手	

247 5区1号 住	羽釜	底-[9.8]、高-(3.5) $\circ\frac{1}{2}$	砂粒を多く含む。酸化、やや軟質。にぶい橙色	羽釜底部。底部ヘラケズリ調整。体下部、タテ方向のヘラケズリ調整	
248	甗 須恵器	脚裾-[25.2]、脚くびれ-[16.2]、高-(3.1) $\circ\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を多く含む。還元、やや硬質。灰色~灰白色	裾部、大きく、水平に近くひらき、端部肥厚して、外側に稜をもつ。有鐙の鉢形甗と思われる	
249	甗 須恵器	$\circ$ 破片、胴部	白色砂粒を含む。還元、硬質。灰色	大型甗。体外面、平行タタキ目(木目残)、内面、同心円タタキ目	
250	羽釜	口-[20.2]、高-(11.8) $\circ\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を含み、粗。還元、やや硬質。灰色	体部、ゆるい内湾、口縁部もゆるく内傾する。口縁端部平坦面あり。鐙断面三角。器肉、薄手。粘土積痕残り、ロクロナデ調整	
1016 参	埴 須恵器	口-10.0、底-4.3、高-3.2 $\circ$ 完存	砂粒、黒色輝石を含む。還元、やや硬質。灰白色	平底、小型埴。体下部で丸く内湾してひろがり、口縁部外反する。底部回転糸切り、ロクロ右回転	重ね焼き痕あり



第275図 5区3A号、3B号、3C号住居跡遺構図

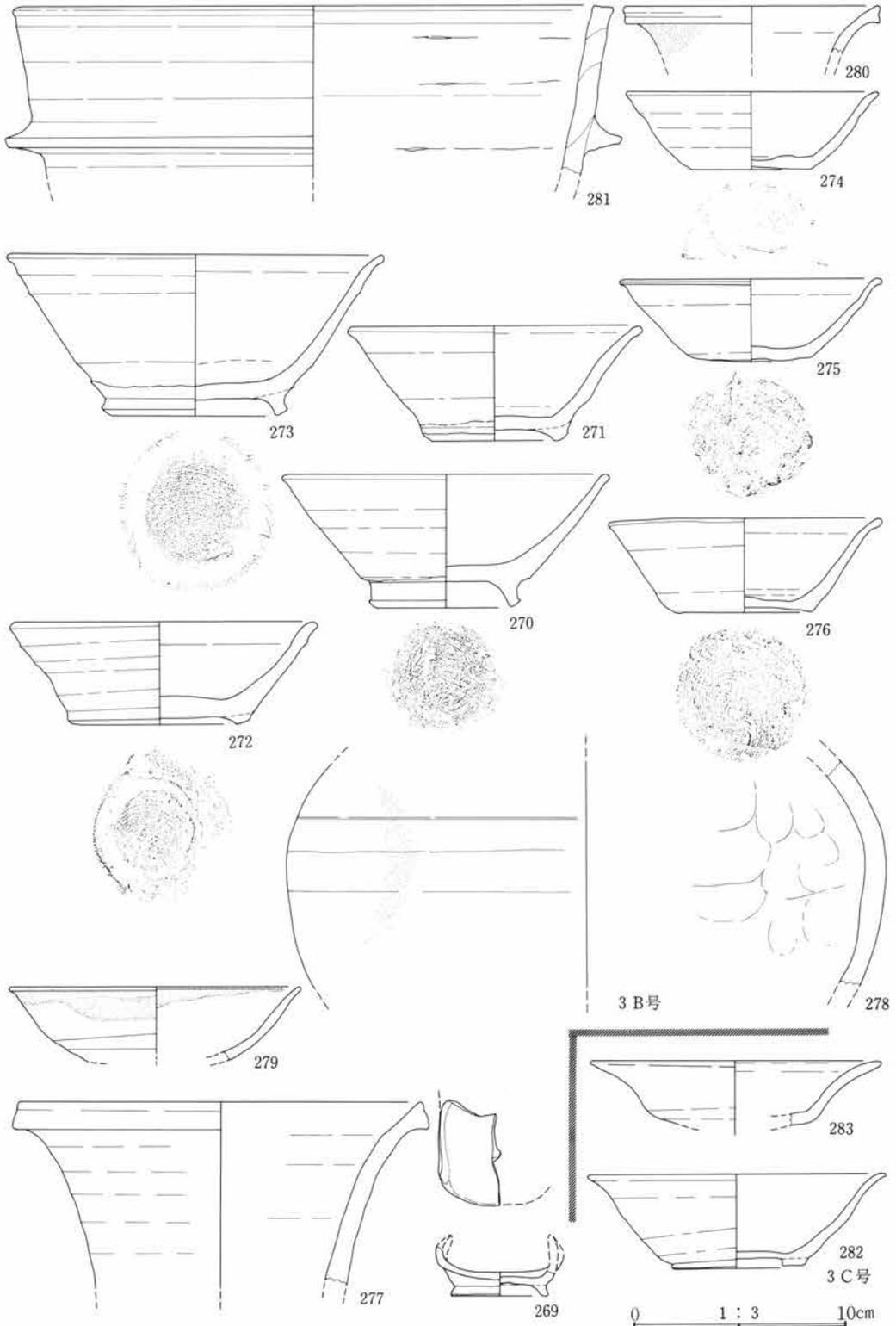
## 5区3A号、3B号、3C号住居跡（第275・276図、第76表、図版115・116）

本住居跡は、基本土層第4層で確認された。住居跡の東南から西北にかけて、斜めに道路が走り、半分以上が未調査となった為、不明な点が多い。調査段階では、認識できなかったが、3軒重複であったと思われる。内側より3A号、3B号、3C号とした。3A号は、3B号の掘り方として検出された。3B号より古い住居跡である。西辺3.0m×南辺1.20mの西南部分で、方形を呈すると見られる。方位は、E-11°-Sを示す。床面は、凹凸があり良好でない。周溝、柱穴は、確認されなかった。遺物も少なく、時期は決定し難いが、3B号との関係より、平安時代（9世紀中葉）と考えたい。3B号は、3C号の床面を掘り込んで作られたもので、3軒のうちで一番新しい住居である。3A号と同様、西南部、西辺3.60m×南辺2.0mが検出された。西辺南寄りに落ち込み状土壇が2基重なり、西辺が西側に飛び出して、西南隅の壁たちあがり整合しないが、ほぼ方形を呈しながら、一部に張出し部を持つ住居の仲間と考えている。床面は良好でない。柱穴、周溝は確認できなかった。遺物は、鏝付甗、須恵器高台付碗、坏、甕、耳皿、灰釉碗、瓶等である。覆土中より土師器甕も出土している。時期は平安時代（10世紀前葉）であろう。3C号は、一番外側に認められた。西辺4.60m×南辺1.40mで方形の住居跡である。壁高は10cm程で、ゆるやかに傾斜をもったたちあがる。床面は3B号によって大部分失なわれ、良好でない。柱穴、周溝は認められなかった。遺物は少ないが、西壁際より須恵器皿、高台付碗が出土している。時期は、3B号よりやや古い様相があり、平安時代（9世紀後葉）と考えている。（長谷部）

第76表 5区3B、3C号住居跡出土遺物観察表

（第276図、図版 115・116）

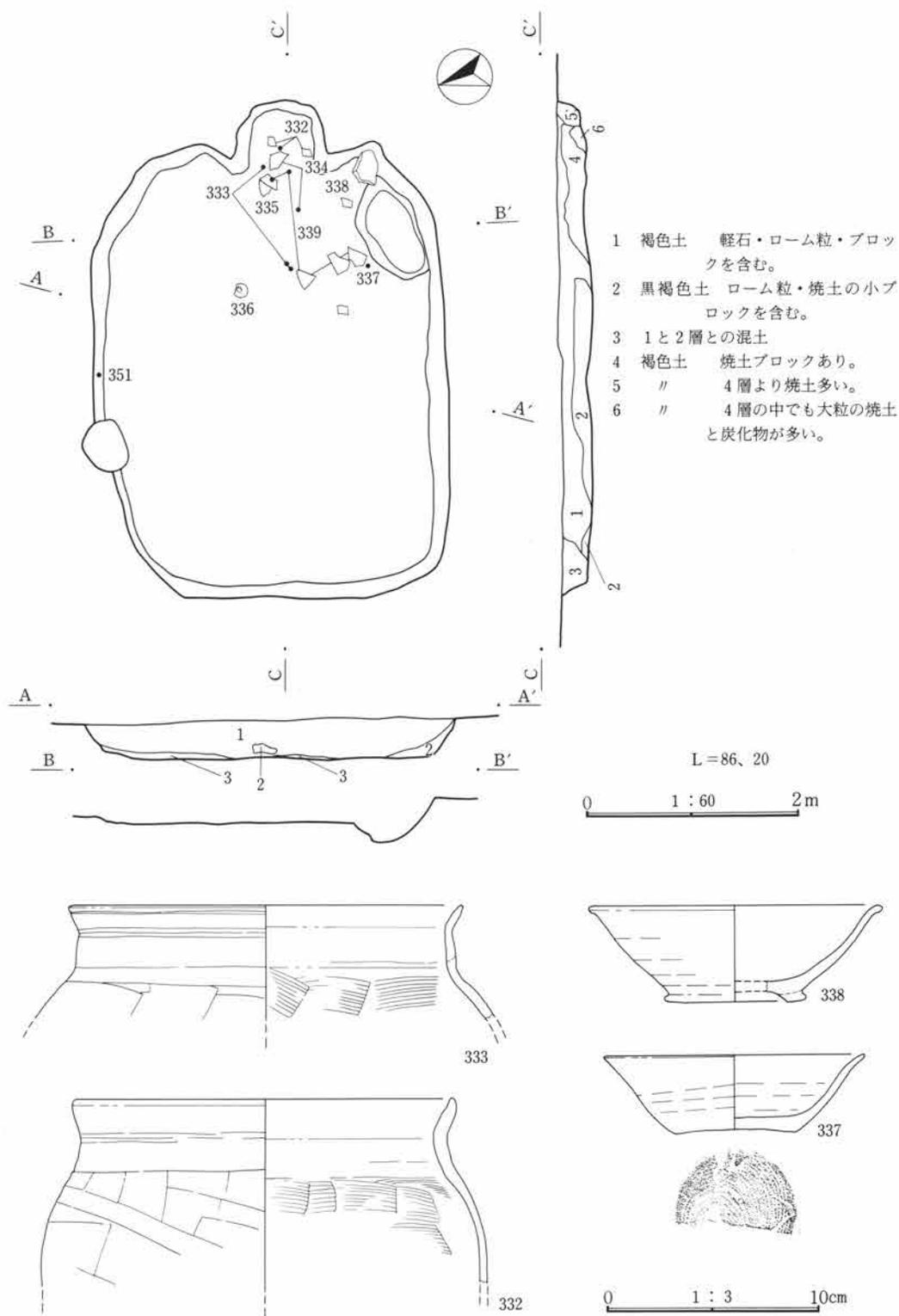
番号	土器種類	法量（口径・底径・器高） 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
269 5区3B号住	耳皿	底-[4.6]、高-(2.2)○ $\frac{1}{2}$	砂粒多く含む。還元、やや軟質。灰色	小型、高台付耳皿。身部、深い折りまげ。口縁端部、丸味あり。高台貼付、高台断面長方形。粗雑な作り	
270	碗 須恵器	口-[15.4]、底-7.0、高-6.2○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰白色。	体下部で一段、稜をもち、体部ほぼ直線的にひろがる、大振りの高台付碗。口縁部わずかに外反、端部丸味をもつ。底部、回転糸切り、貼付高台。断面、外側直行する台形。ロクロ右回転	内底面、スレあり。
271	碗 須恵器	口-[13.7]、底-5.9、高-5.3○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。粗。還元、やや硬質。灰白色	体部、ほぼ直線的にひろがり、口縁部外反する。口縁端部丸味をもつ。底印回転糸切り、貼付高台、高台断面台形。ロクロ右回転	底部円盤別作り(?)
272	碗 須恵器	口-[14.4]、底[7.5]、高-4.8○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰色	体部直線的にひろがり、口縁部内湾してさらに、外反する。底部回転糸切り、貼付高台。高台断面、低い台形。ロクロ右回転	重ね焼き痕あり



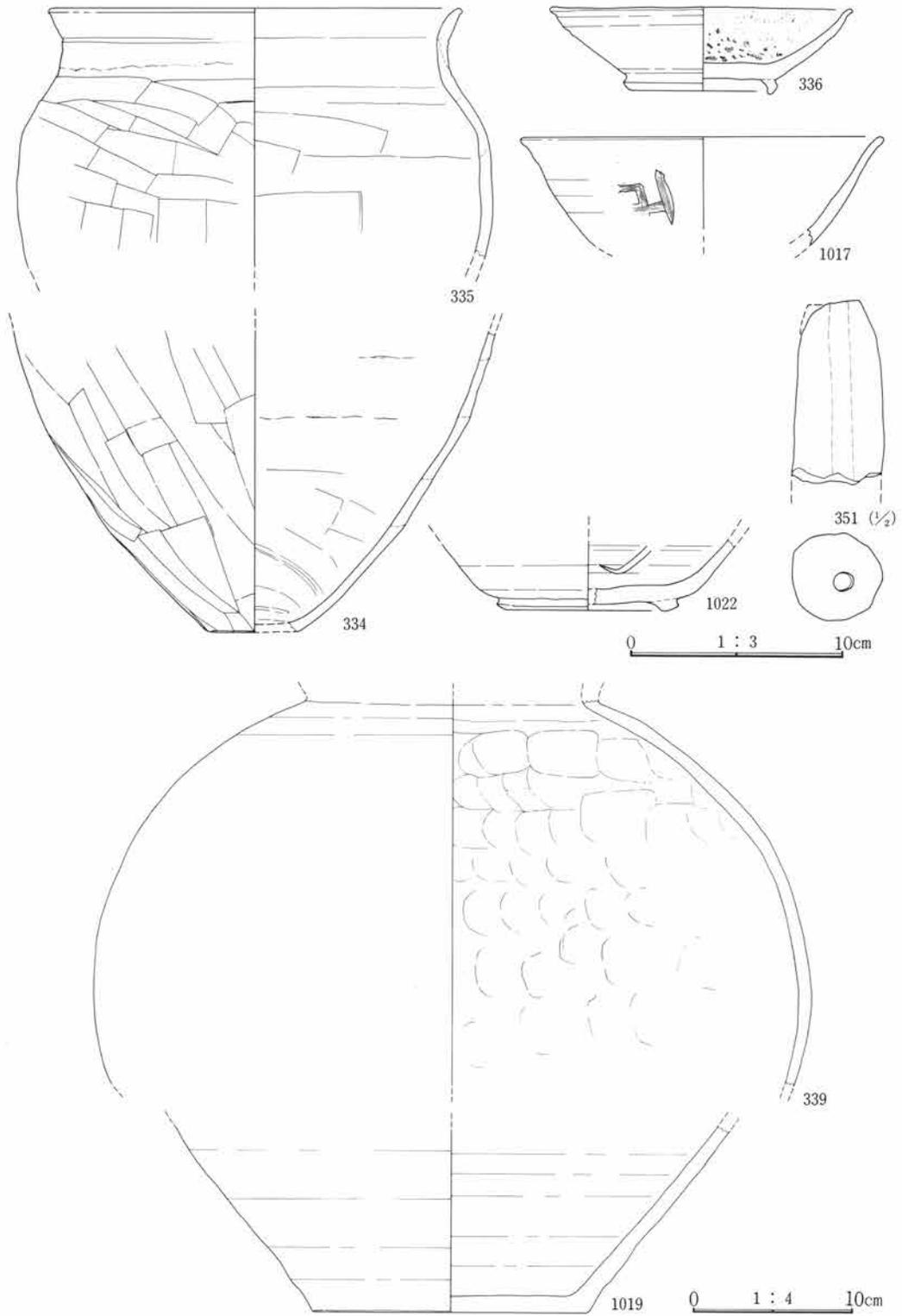
第276図 5区3 B号、3 C号住居跡遺物図

第6章 検出された遺構と遺物

273 5区3B 号住	埴 須恵器	口-[17.6]、底 -8.5、高-7.5 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒、輝石を含む。 酸化、やや硬質。にぶい 黄橙色	体部直線的にひろがり、口縁部たち あがり、外反する。大振りの高台付 埴。鉢と言うべきか。底部回転糸切 り、貼付高台。ロクロ右回転	重ね焼き痕あり
274	坏	口-[11.8]、底 -[5.6]、高-3.6 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、輝石を多く含み細 かい。還元、軟質、燻し。 黒色	平底。体部わずかに内湾してひろが り、体部中位で凹線めぐり、口縁部 外反さみ。口縁端部丸味あり、底部 回転糸切り、ロクロ右回転	
275	坏 須恵器	口-[12.3]、底 -5.7、高-3.8 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、輝石を含む。酸化、 やや硬質。橙色	平底、体下部で丸くたちあがり、口 縁部へひろがる。口縁部外反し、端 部、丸く外側へつまみ出す。底部回 転糸切り。ロクロ右回転	底部円盤別作り (?)
276	坏 須恵器	口-[12.8]、底 -6.5、高-4.4 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、輝石を含む。還元、 やや硬質。灰褐色	平底、身の深めの坏。体部直行して ひらき、口縁外反する。底部回転糸 切り。ロクロ右回転	底部円盤別作り (?) 重ね焼き痕あり
277	瓶 須恵器	口-[19.0]、高 -(8.5)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、 やや硬質。灰色	頸部くびれて、ゆるやかに外反し、 口縁部強く外反する。口縁端部肥厚 して外側に稜をもつ。ロクロナデ調 整	
278	甕 須恵器	胴-[28.0]、高 -(10.5)○ $\frac{1}{2}$	白色砂粒、石粒多く含む。 還元、硬質。灰色	体部丸味のある器形。粘土積痕あり、 内面無文のアテ具痕、外面回転ヘラ ナデ	外面、自然釉か かる
279	埴 灰釉陶器	口-[13.6]、高 -(3.4)○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。還元、硬質。 灰色、釉-灰色	体下部で内湾してひろがる、身の浅 い埴。口縁部わずかに外反。口縁端 部つまみ出し。体下部、回転ヘラケ ズリ調整	
280	瓶 灰釉陶器	口-[12.0]、高 -(2.3)○小片	白色砂粒を含む。還元、 硬質。灰白色、釉-灰色	大きく外反する口頸部をもつ、小型 長頸瓶。口縁端部肥厚して外側に稜 をもつ。頸部に釉。器肉、薄手	
281	甗	口-[28.0]、高 -(7.9)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒、輝石を含む。 酸化、やや硬質。橙色	口縁部~罅の間隔、広く直線的にひ ろがる。口縁端部平坦面あり。罅断 面、シャープな台形。粘土積痕あり。 ロクロナデ調整。	
282 5区3C 号住	埴 須恵器	口-[14.0]、底 -6.2、高-4.4 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒多く含む。粗。 還元、やや硬質。灰白色	体部わずかに内湾してひろがる。口 縁部外反し、端部丸味あり。底部回 転糸切り、貼付高台。高台つぶれて 粗雑な作り。ロクロ右回転	
283	皿 須恵器	口-[13.6]、底 -[7.0]、高-2.8 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒多く含む。還 元、やや硬質。灰色	体下部で稜をもってたちあがり大き く外反する、高台付皿。底部、回転 糸切り、高台貼付痕あり。器肉厚手	



第277図 5区5A号住居跡遺構、遺物図



第278図 5区5A号住居跡遺物図(2)

## 5区5A号住居跡（第277・278図、第77表、図版116）

本住居跡は、基本土層第4層で確認された。北側で5B号、5C号と重複する。5A号は、5B号、5C号の床面を切って、構築されている。規模は、横3.30m×縦4.03mで、方位はE-19°-Sを示す。平面形は、縦長の隅丸長方形である。壁高は28cmで、緩傾斜をもつ。床面は、中央部平坦でほぼ良好である。柱穴、周溝は確認できなかった。カマドは、東辺中央部に、壁外に突出して設置されており、平面形は、方形状を呈する。焚口底面、及び、燃焼部底面は、ほぼ同レベルである。貯蔵穴は、東南隅に位置し、長径98cm×短径55cm×深さ18cmを測る、楕円形である。また、住居跡東北隅にも、径1.2m×深さ20cmを測る、円形の土壇が検出されている。堀方土壇と思われる。遺物は、須恵器、甕、碗、坏、灰釉碗、土師器の甕、土錘が出土している。時期は、住居形態及び遺物より見て、平安時代（10世紀初頭）と考えている。また本住居跡の東辺カマド北側に遺物が集中して出土した。須恵器甕（平底）碗（墨書）等で、遺構としてとらえきれなかったが、本住居に、位置的にも近似するとして図示した。〔参考資料〕（長谷部）

第77表 5区5A号住居跡出土遺物観察表

（第277・278図、図版116）

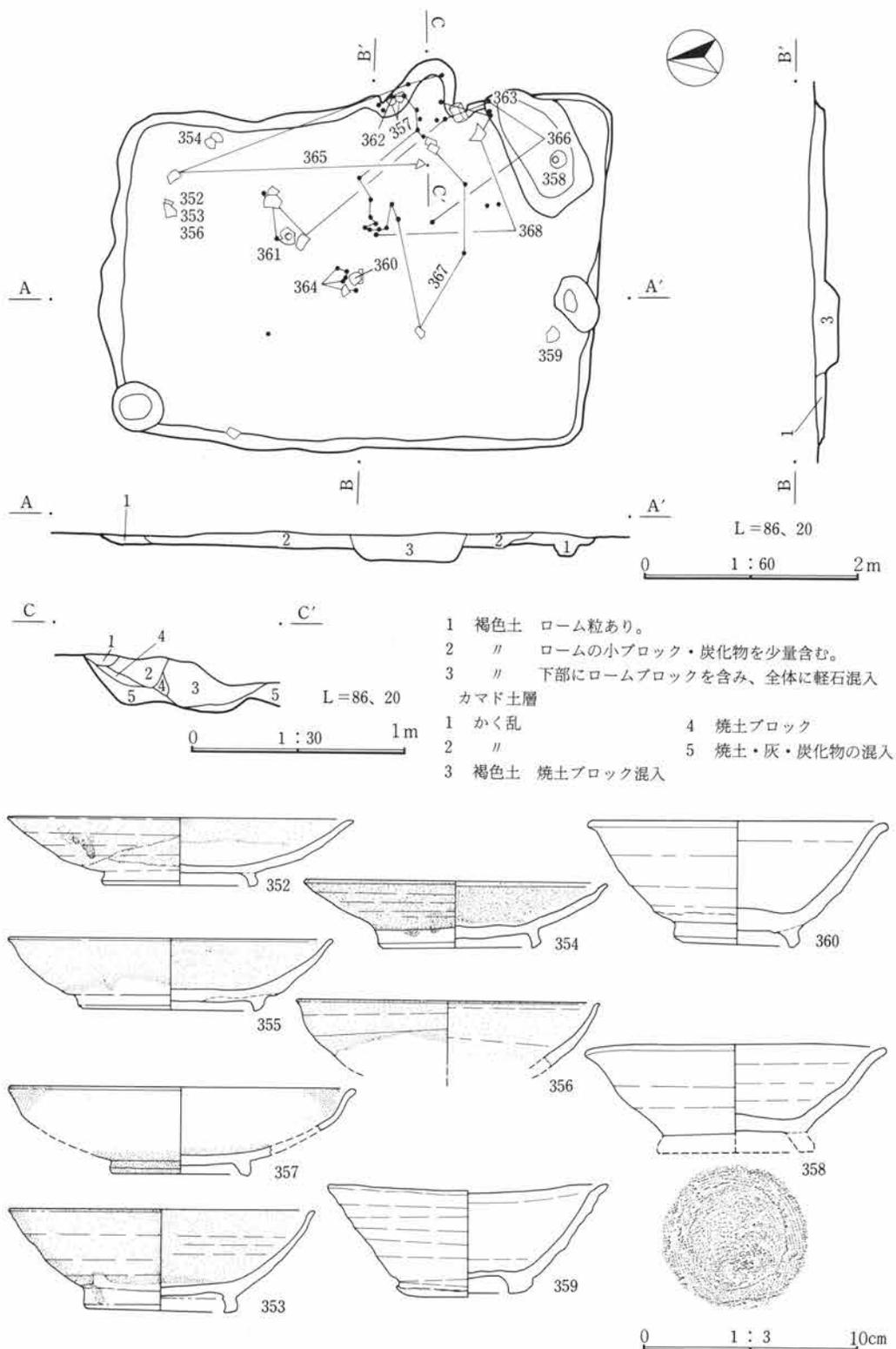
番号	土器種類	法量（口径・底径・器高）遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
332	甕 土師器	口-[18.0]、高-(8.6)○ $\frac{1}{4}$	砂粒多く、黒色輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	コの字状口縁の甕。口縁部の外反弱く、口縁端部内側につまみなデ。体上部ヨコヘラケズリ、内面ハケナデ。器肉、厚手	
333	甕 土師器	口-[18.6]、高-(6.1)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、褐色石粒多く含む。酸化、軟質。明赤褐色	コの字状口縁の甕。体部丸く、頸部くびれてたちあがる。口縁部、短かく、強い外反、内面稜をもつ。体上部ヨコヘラケズリ。内面ハケナデ	
334	甕 土師器	底-[4.0]、胴-[22.5]、高-(14.0)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、軟質。赤褐色	卵形の体部をもつ甕。底部小さく、ヘラケズリ、体下部タテヘラケズリ。内面粘土積痕残り、ナデ調整	
335	甕 土師器	口-[19.2]、高-(11.6)、胴-[22.2]○ $\frac{1}{4}$	砂粒を多く含む。酸化、軟質。明赤褐色	コの字状口縁の甕。体上部で丸く、頸部ゆるくしまつてたちあがる。口縁部、強く外反、口縁端部丸く外側につまみなデ。体上部ヨコ、下部タテヘラケズリ。内面ナデ調整	
336	碗 灰釉陶器	口-[14.1]、底-6.4、高-3.9○ $\frac{1}{4}$	白色砂粒多く含む、細密。還元、硬質。灰色、釉-オリブ灰色	体部ゆるやかに内湾してひろがり、口縁部でやや立ちあがり、わずかに外反する。身の浅めの高台付碗。口縁端部丸く外側につまみなで。貼付高台、断面がっしりした三日月状	

第6章 検出された遺構と遺物

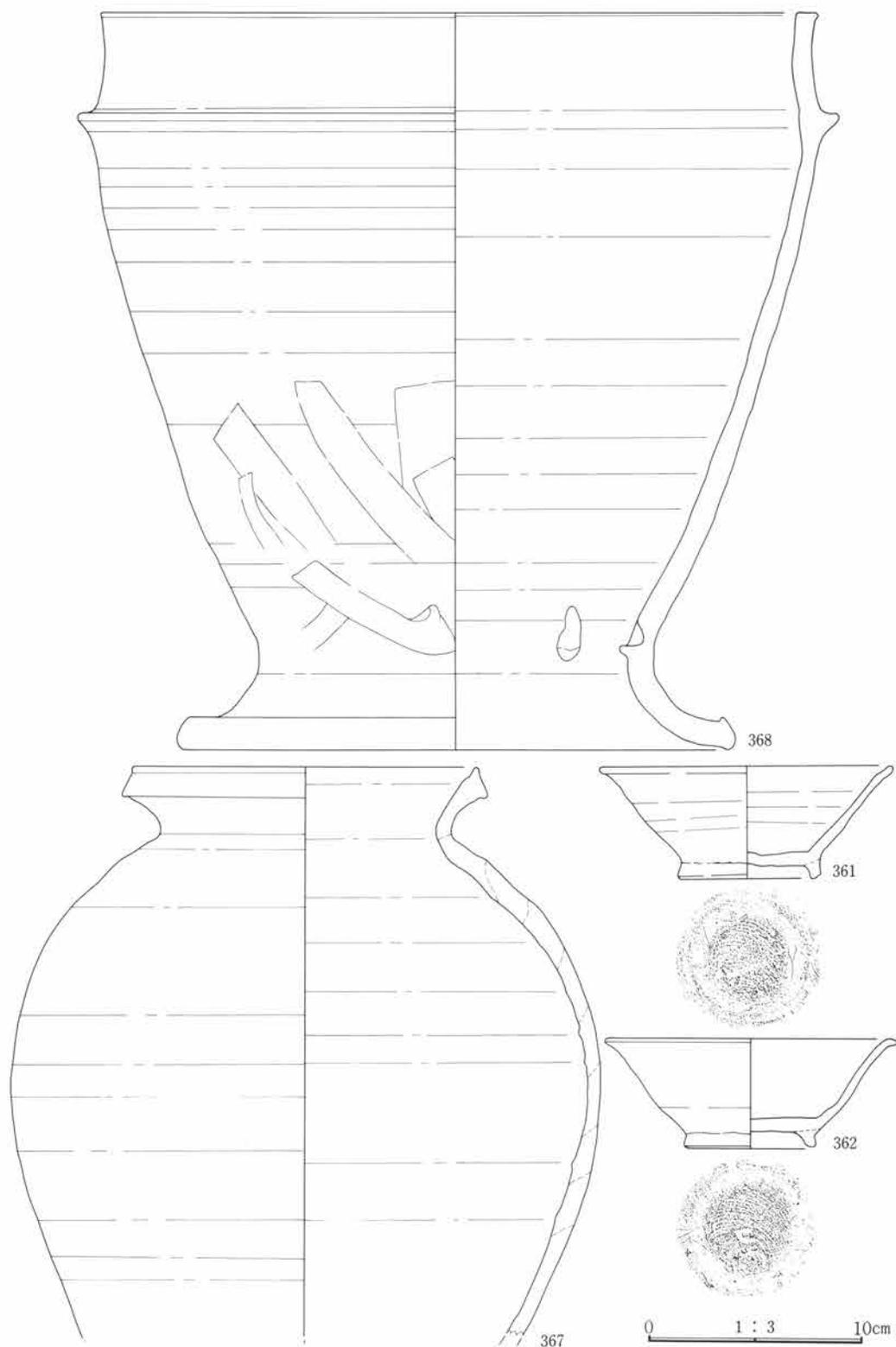
337 5区5A 号住	坏 須恵器	口-[12.2]、底-[5.8]、高-3.6 ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒、輝石を含む。酸化、やや硬質。橙色	平底。体部わずかに内湾して、ひろがり、口縁部やわらかく外反する。口縁端部深手。底部回転糸切り、ロクロ右回転	
338	碗 須恵器	口-[13.8]、底-[6.6]、高-4.5 ○ $\frac{1}{4}$	砂粒を多く含む。還元、やや軟質。灰色	体部ゆるやかに内湾してひろがり、口縁部外反する。口縁端部、丸味をもつ。底部回転糸切り、貼付高台、方形の断面。ロクロ右回転。器肉、薄手、均質	「灰釉うつし」の器形
339	甕 須恵器	頸-[18.2]、胴-[44.6]、高-(24.0) ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰色	体部、丸く張る、大型の甕。体部外面、平行タタキ目、ナデ消し。内面無文のアテ具痕。頸部粘土接合痕顯著、ヨコナデ	
1017 参	碗 須恵器	口-[17.2]、高-(5.0) ○ $\frac{1}{8}$	砂粒を含む。還元、やや硬質。灰黄色	体部内湾してひろがり、口縁部ゆるやかに外反する、大振りの碗。口縁端部丸味をもつ。体部ロクロナデ	体部外面、墨書あり「甲」か
1019 参	甕 須恵器	底-[17.3]、高-(11.6) ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰色	平底。大型の甕。体下部直線的にひろがる。体部ロクロナデ調整、底部ヘラケズリ調整	
1022 参	碗 須恵器	底-[8.6]、高-(3.0) ○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。にぶい黄橙色	体下部で、丸く内湾してひろがる。大振りの高台付碗。貼付高台、高台断面、台形、粗雑な作り	体内面、墨書あり「 $\checkmark$ 」不明
351	土 錘	長-(5.7)、径-(1.8) ○ $\frac{1}{2}$	砂粒多く、粗。酸化、軟質。橙色	大型で粗雑な作り。中心に径0.6cmの孔、貫通	

5区6号住居跡（第279～281図、第78表、図版117・118）

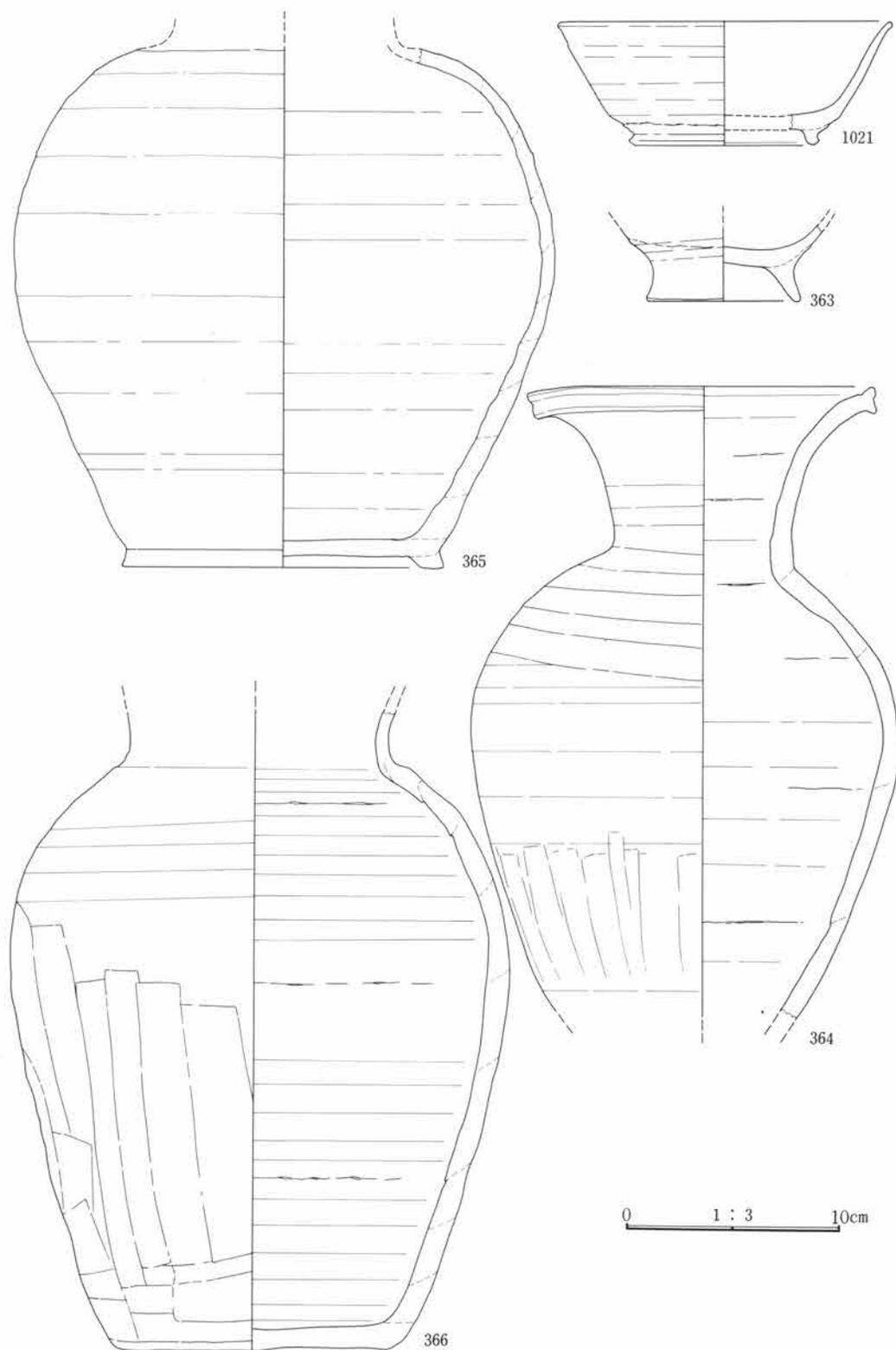
本住居跡は、基本土層第4層で確認された。住居跡中央部分に、中近世期と思われる、長方形土壇が、床面を切って、重複していた。又、東側には、5区10号住が接近する。確認面から、床面までが浅く、東南隅の部分で、平面形が、不明瞭になるが規模は、横4.52m×縦3.25mで、平面形は横長の方形を呈する。方位は、南辺で、E-11°-Sを示す。壁は縦傾斜でたちあがり、深さ5～10cmである。床面は、ほぼ平坦で良好である。柱穴、周溝は、不明確であるが、住居跡西北隅と、南辺中央部、壁中に、それぞれ、深さ20～30cmの小ピットが検出されている。カマドは、東辺中央部より南寄りに設置され、燃烧部は、壁外に造り出されている。右袖にあたる部分には、調整を施した角礫が設置してあった。貯蔵穴は、カマド南脇、住居跡東南隅に位置し、長辺123cm×短辺65cm×深さ7～8cmの不整楕円形の浅いものである。遺物は、カマド及び、カマド周辺と、住居中央部に多く散布した。須恵器甕、長頸瓶、鋳付甕、碗、灰釉陶器碗、皿、鉄滓が出土している。特に、他住居跡出土遺物に比べて、灰釉陶器の出土量が多く、No.364～367にみられる甕と長頸瓶の類も注目される。No.364の長頸瓶は白瓷系陶器の形をうつしたものと思われる。時期は、平安時代（10世紀前葉）と思われる。（長谷部）



第279図 5区6号住居跡遺構、遺物図



第280図 5区6号住居跡遺物図(2)



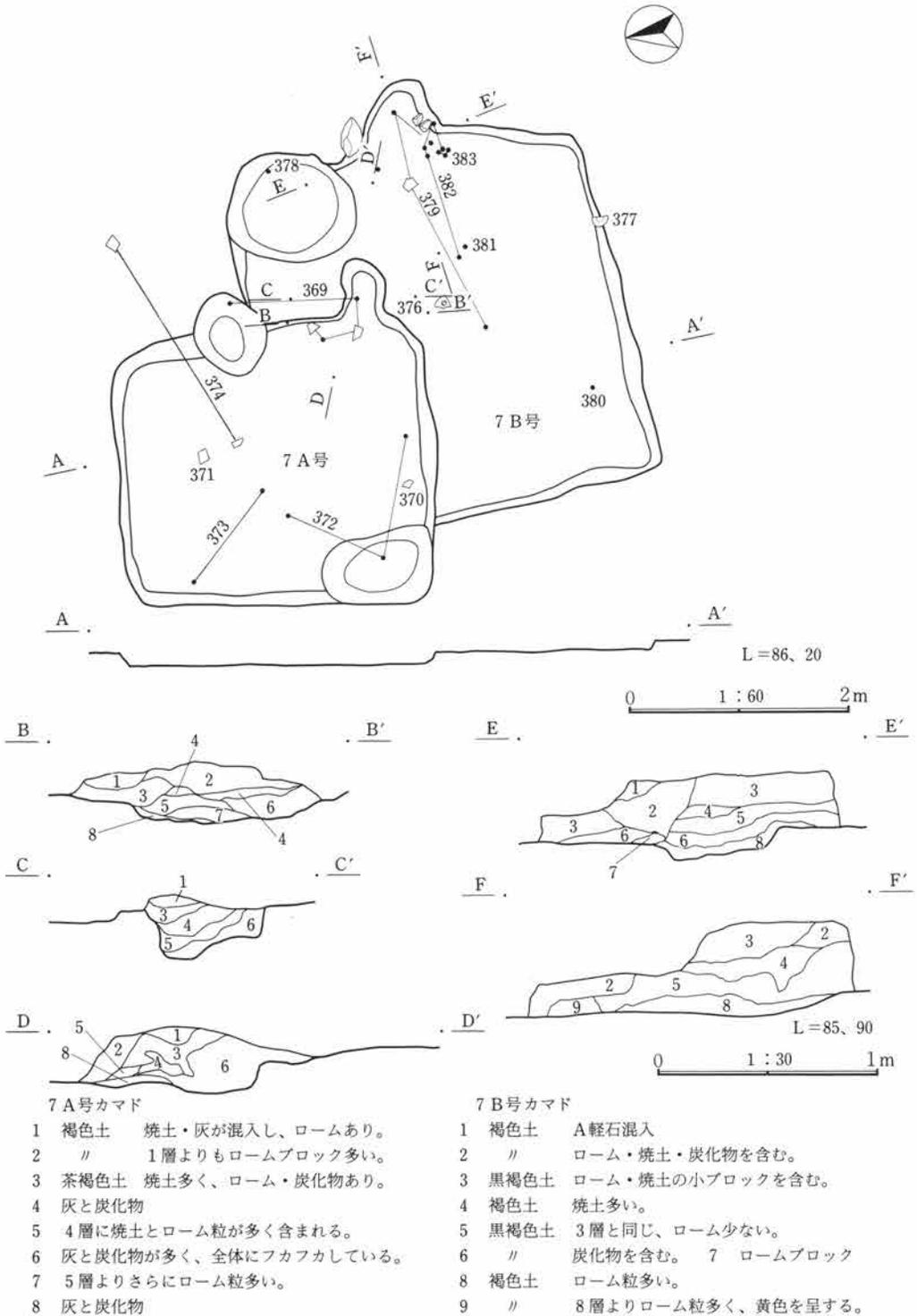
第281図 5区6号住居跡遺物図(3)

第78表 5区6号住居跡出土遺物観察表

(第279~281図、図版 117・118)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
352	皿 灰釉陶器	口-[16.0]、底-[7.0]、高-3.1 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む、細密。還元、硬質。淡灰色、釉-オリーブ黄色	体部、ゆるく内湾してひろがり、口縁端部丸く外側つまみナデ。底部へ体下部回転ヘラケズリ調整、貼付高台、高台断面、外側に丸味のある長方形。釉、刷毛がけ。ロクロ右回転	釉、煮立ったように泡だつ
353	碗 灰釉陶器	口-[14.2]、底-7.2、高-4.7○ $\frac{3}{4}$	砂粒を含む、細密。還元、硬質。灰色、釉-灰オリーブ色	体下部で丸く内湾してひろがる。口縁端部つまみナデによるわずかな外反。底部、弱い調整後、貼付高台、高台断面、内湾する台形。釉、刷毛がけ	重ね焼き痕あり
354	皿 灰釉陶器	口-[14.0]、底-7.4、高-3.0○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む、細密。還元、硬質。灰色、釉-灰オリーブ色	体部直線的にひろき、口縁部でわずかに内湾する。口縁端部つまみナデにより、外側へかえりあり。底部、回転ヘラケズリ、貼付高台、断面、端部外側に傾斜する長方形。釉、刷毛がけ	No.353とほぼ同一の様相をもつ。 ○釉の発色○釉がけ方○底部の調整重ね焼痕あり
355	皿 灰釉陶器	口-[15.0]、底-[8.6]、高-3.3 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む、細密。還元、硬質。灰色、釉-緑灰色	体部、わずかに内湾してひろがる。口縁部、端部つまみナデによるゆるい外反。貼付高台、断面、端部外側に傾斜する台形。釉、刷毛がけ、内底面まで全体に、釉をかけている	
356	碗 灰釉陶器	口-[14.0]、高-(3.0)○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む、細密。還元、硬質。灰色、釉-緑灰色	体部内湾してひろがり、口縁部でわずかにたちあがり、口縁端部つまみナデによる外反。ロクロナデ調整、釉、刷毛がけ	
357	碗 灰釉陶器	口-[16.0]、底-6.4、高-[4.0] ○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含む、細密。還元、硬質。灰色、釉-淡灰色、黒色	体部、大きくひろがり、口縁部、丸い稜をもってたちあがり、端部外反する。底部回転糸切り後、回転ヘラケズリ。貼付高台。高台、回転ヘラケズリ調整、断面、台形。釉、底部を除いて全面かかる	不完全な接合であるが、同一個体。釉の黒色変化→緑釉であったか？二次酸化の為
358	碗 須恵器	口-14.0、底-6.6、高-(4.1)○ 高台部を欠く	砂粒、石粒を含む、粗。酸化、やや硬質。明赤褐色	底部よりたちあがって、内湾しながらひろがり、口縁部外反する。口縁端部やや肥厚して丸味をもつ。底部回転糸切り、ロクロ右回転	貼付高台、痕跡残る。 底部円盤別作り
359	碗 須恵器	口-13.0、底-6.3、高-5.2○略完存	砂粒、石粒を含む、粗。還元、やや硬質。灰褐色～灰色	体部直線的にひろく。口縁端部、肥厚し、内側に稜をもつ。底部、回転糸切り。高台貼付、断面、台形、粗雑な作り、ゆがみあり。ロクロ右回転	

360 5区6号 住	埴 須恵器	口-[14.0]、底- 5.2、高-5.8○ $\frac{3}{4}$	砂粒、石粒、輝石を含む。 還元、やや硬質。浅黄色	体下部で張りをもってたちあがり、 口縁部強く外反。口縁端部、丸味を もつ。底部、回転糸切り、貼付高台、 高台断面、端部外側の丸い台形。ゆ がみあり。調整粗雑	
361	埴 須恵器	口-[13.7]、底- 7.7、高-5.2	砂粒、石粒を含む、粗。 還元、やや硬質。灰色	体部直線的にひらき、口縁部外反す る。口縁端部、やや肥厚して、丸味 あり。底部回転糸切り、貼付高台、 高台断面、台形。ロクロ右回転	底部円盤別作り
362	埴 須恵器	口-[13.6]、底- 6.2、高-5.1○ $\frac{3}{4}$	砂粒、石粒を多く含む、 粗。還元、やや硬質。灰 色	体下部で張りをもってひろがり、口 縁部外反する。底部回転糸切り、貼 付高台、断面台形、端部丸味あり。 ロクロ右回転	カマド脇出土
363	埴	底-7.2、高-(3. 3) ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒、輝石を含む。 酸化、やや硬質。淡褐色	体部丸く内湾する。高足高台付の埴。 体部ロクロナデ調整	
364	長頸瓶 須恵器	口-[15.7]、頸- [8.5]、胴-20.0 ○ $\frac{3}{4}$	砂粒、石粒多く含む。酸 化、やや硬質。橙色	体上部で丸味をもち、頸部しまり、 口縁部ヘラツバ状にひらく。卵形の 胴と口頸部の比3:1。口縁端部大 きく外反し、縁帯をもつ、縁帯中央、 凹線めぐる。ロクロナデ調整、肩部、 回転ヘラケズリ、体下部タテヘラナ デ。ロクロ右回転	
365	瓶 須恵器	胴-[25.2]、底- [15.0]、高-(24. 0) ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、やや軟質。明赤褐 色	体中部で最大径をもつ、丸胴の高台 付瓶。体部ロクロナデ調整、底部〜 下部回転ヘラケズリ調整後、貼付高 台。高台断面、外行する台形	体上部外面、剝 落
366	広口瓶 須恵器	頸-[12.0]、胴- [23.2]、高-(29. 5)、底-[12.8] ○ $\frac{3}{4}$	砂粒、石粒、輝石を含む。 酸化、やや硬質。灰赤色	平底。体部細長く、丸味少ない。粘 土積残残る。ロクロナデ調整。体下 部タテヘラナデ、底部ヘラケズリ調 整	体上部、加熱過 剰か、表面アレ あり
367	甕 須恵器	口-[16.2]、胴- [27.4]、高-(26. 4) ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 やや硬質。にぶい褐色 〜暗赤褐色	平底。体中部で最大径をもつ、丸胴 の甕。頸部しまって、口縁部短かく 強い外反。口縁端部、縁帯をもつ。 縁帯、内傾ぎみで、端部つまみナデ。 体部ロクロナデ調整。加熱過剰か、 表面変質、ゆがみあり	底部の破片あり (細片の為、図 示せず) No366と焼きぐ あいがよく似る
368	甕	口-[33.5]、底- [18.4]、裾-[26. 2]、高-34.0○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、やや硬質。にぶい 黄橙色	脚部八の字にひらき、体部ゆるやか に内湾してたちあがる。口縁部直行 し、端部平坦面をもち、外端部外側 へつまみ出す。罽、上むきの三角形。 脚裾端部、内湾ぎみの縁帯をもつ。 体部内外、ロクロナデ調整。体下部 タテヘラナデ。内底部、くびれ部分 に、すの子受けの為と思われる小孔、 対の位置であり	受けの小孔、残 存、3個、うち、 2個は、近接、 対の位置にある ものは、十字で はなく×字に位 置する
1021 参	埴 須恵器	口-[15.6]、底- [8.8]、高-5.7 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、輝石を含む。還元、 やや硬質、燻し。黒色	体下部で稜をもってたちあがり、口 縁部へひらく。口縁部わずかに外反。 端部薄手。貼付高台、断面台形	フク土出土



第282図 5区7A号、7B号住居跡遺構図

## 5区7A号、7B号住居跡（第282～284図、第79表、図版119）

7A号住居跡は、基本土層第4層で確認された。3軒重複のうちの1軒で、全体の約 $\frac{1}{2}$ が調査区外であったが、拡張して全堀した。7C号住居跡の中央部床面を切りこんで、7A号、7B号が構築されている。7A号は、7B号の西北部を切っており、従って、この3軒のうち、一番新しい時期の住居跡と言える。また、東辺中央に、新土壇が重複している。規模は、横2.85m×縦2.55mで、平面形は、方形を呈する。方位は、E-6°-Sを示す。壁高は、20cmを測り、傾斜をもって立ちあがる。床面は、カマド前部のみ良好であった。柱穴、周溝は、認められない。カマドは東南隅に位置し、燃烧部は、東辺外に突出して造り出されている。カマド奥壁部分の平面形は丸く、堀方は楕円形である。貯蔵穴は、カマドに対峙して、西南隅に位置し、長径101cm×短径57cm×深さ20cmの楕円形である。遺物は、カマド及び周辺に多く出土した。羽釜、須恵器大甕、碗、浅鉢、砥石があり、刀子及び釘かと思われる断面方形で一部に木片の付着した鉄製品も出土している。時期は、平安時代（10世紀後葉）であろう。7B号住居跡は、7A号の東南に位置する。規模は、横3.30m×縦3.45mで、平面形は、方形を呈する。方位は、N-86°-Eを示す。壁は、深さ20cmで、緩傾斜を持つ。床面は、カマド前を中心に良好であった。柱穴、周溝は認められなかった。カマドは、東辺中央部より若干北寄りに位置する。燃烧部は、壁外に造り出しており、左袖にあたる部分に河原石を使って、袖石としている。また、右袖側にも、河原石が認められることから、石組みの補強材として石を多用したカマドであったと思われる。平面形は、半円形状となるか。貯蔵穴は、明確ではないが、東北隅に、長径115cm×短径95cm×深さ15cmの円形土壇がみられる。堀方では、中央部に、径1m×深さ15cmの円形土壇が認められた。遺物は、土師器、コの字状口縁の甕、須恵器、碗、皿、釘様の鉄製品が出土している。時期は、平安時代（9世紀後葉）と考えている。また、7C号西北覆土中より、灰釉陶器碗、皿が出土している。7A号、7B号との関連で図示した。（1023、1026）

（長谷部）

第79表 5区7A号、7B号住居跡出土遺物観察表

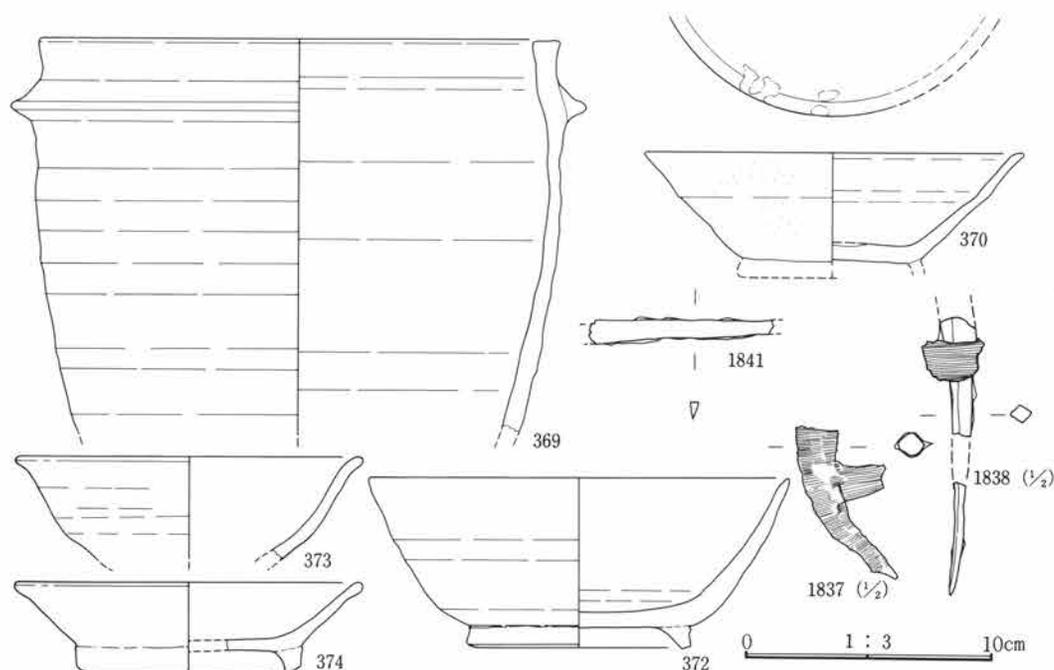
（第283・284図、図版 119）

番号	土器種類	法量（口径・底径・器高） 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
369 5区7A号住	羽釜	口-[21.0]、高-(15.7) $\circ\frac{1}{3}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。明赤褐色	体部わずかに内湾する。口縁部、直行し、端部平坦面あり。断面、三角形。体部ロクロナデ調整。器肉、薄手	
370	碗 須恵器	口-[15.2]、底-[7.2]、高-(4.4) $\circ\frac{1}{3}$	砂粒を多く含む。還元、やや軟質。灰色～黒色	体部直線的にひろがり、口縁端部内側に丸い稜をもつ。底部回転糸切り、貼付高台	口縁部タール状付着物あり。 灯明皿
371	甕 須恵器	口-[30.0]、高-(4.3) $\circ$ 小片	砂粒、白色石粒多く含む。還元、硬質。灰赤色	頸部から大きく外反する大型の甕。口縁端部、外側にたれ下がる縁帯をもつ。ロクロナデ調整	

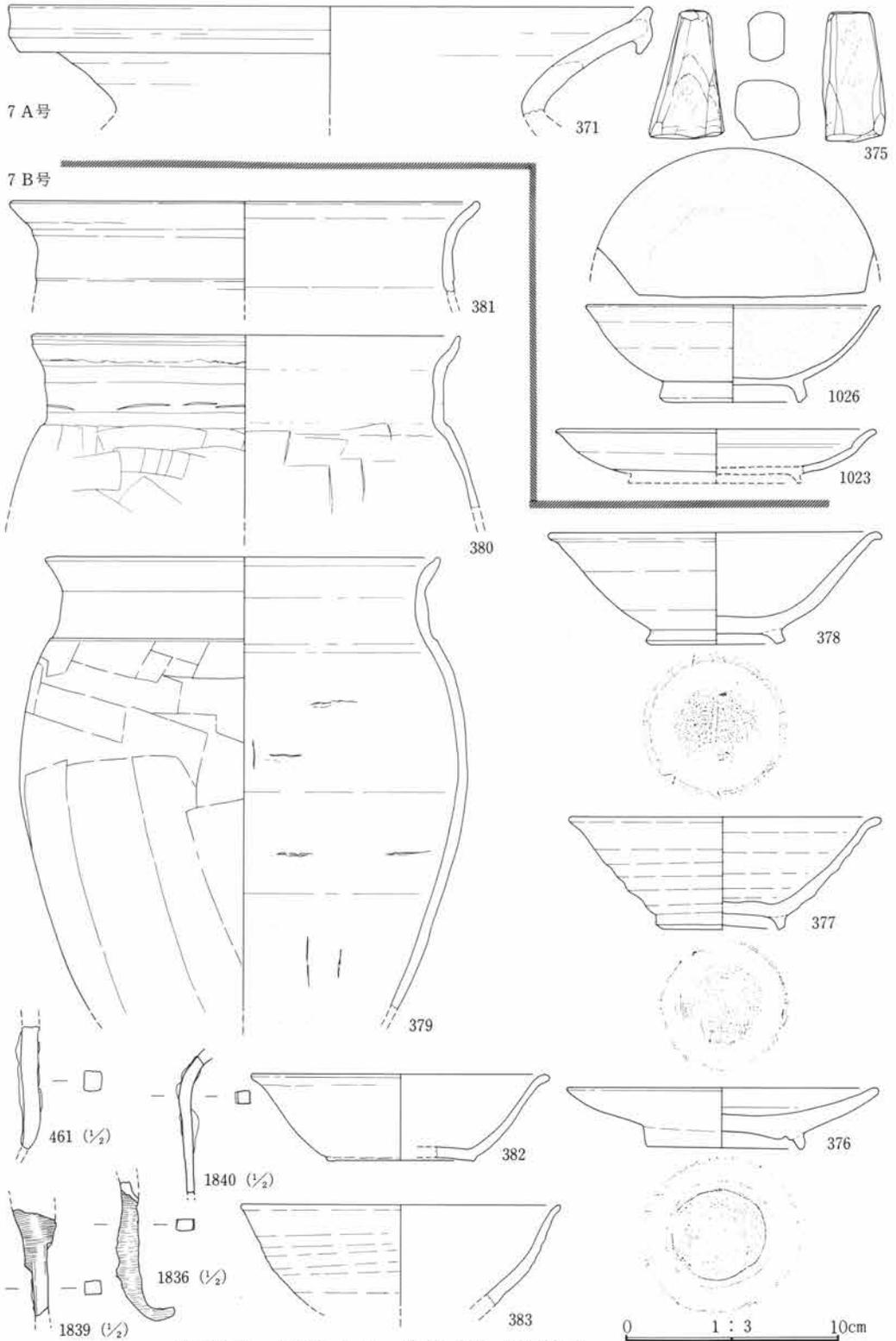
第6章 検出された遺構と遺物

372 5区7A 号住	碗 須恵器	□-[17.0]、底-[8.8]、高-6.8 ○ $\frac{1}{4}$	褐色砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや硬質。淡褐色	体部ゆるやかに内湾してたちあがる大振り碗。底部回転糸切り、貼付高台、断面、端部シャープな台形	重ね焼きの痕あり
373	碗 須恵器	□-[14.0]、高-(4.1)	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	体下部でゆるい稜をもってたちあがり、口縁部、外反する。口縁部内側肥厚し、丸味をもつ	
374	皿 須恵器	□-[14.0]、底-[9.0]、高-3.6 ○ $\frac{1}{3}$	砂粒を多く含む。還元、やや硬質。灰色	体部直線的にひろがる。身、やや深めの高台付皿。口縁端部、わずかに外反、丸味をおびる。底部回転糸切り、貼付高台。断面、台形	
1023 参	皿 施釉陶器	□-[14.9]、高-(2.5) ○ $\frac{1}{4}$	砂粒含むが細密。還元、硬質。灰色、釉一暗赤～緑灰色	口縁部折れてたちあがり外反する折縁の皿。口縁端部外側にかえりあり。口縁部内側、折りかえしの沈線あり。体下部外、回転ヘラケズリ調整	釉は、緑釉の可能性大である。緑釉の還元化による発色変化
1026 参	碗 灰釉陶器	□-[13.8]、底-[6.8]、高-4.5 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒含むが細密。還元、硬質。灰白色、釉一灰オリーブ色	体部やわらかく内湾してひろがる、やや浅めの高台付碗。口縁端部、内側にふくらみあり。底部回転ヘラケズリ調整。貼付高台、断面、内湾のカーブをもつ台形	釉、つけかけ、1023、1026とも出土地点、及び時期により、7A住に近い
375	砥石	長-6.0、巾-1.7・3.0、厚-2.7	材質一変質安山岩	撥形の四角柱。中央部使用によって折れ、再び、使用。両端、調整	
1837	釘 鉄製品	長-(4.7) 巾、厚-0.6×0.6	断面、ほぼ四角形の鉄製品、先端、細く尖がる。木質、表面に、付着。釘と木質は直行。片端、折れあり		
1838	釘 鉄製品	長-(3.2+2.9) 巾、厚-0.4×0.4	断面、ほぼ四角形の鉄製品、先端細く尖がる。木質、釘に直行して、表面に付着。片端、中間部、折れあり		
1841	刀子 鉄製品	長-(7.5)、巾-0.7、厚-0.3	鋒、刃部、わずかに残る細身の刀子。両端折れ、柄よりの部分が、残存		
376 5区7B 号住	皿 須恵器	□-14.6、底-7.5、高-2.9 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒を多く含む。還元、硬質。灰色	体部大きくひろがり、わずかに内湾のカーブをもつ。口縁端部丸味あり。底部回転糸切り、貼付高台、断面外側が内湾する端部の丸い台形。器肉、厚手	灰釉うつしの器形 重ね焼きの痕跡あり
377	碗 須恵器	□-14.6、底-4.9、高-5.2 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。還元、やや硬質、燻し。黒色	底部小さく、体部わずかに内湾して大きくひろがる。口縁部外反、端部肥厚して丸味おびる。底部回転糸切り、貼付高台、断面、端部外斜する平坦面をもつ台形。器肉、薄手。ロクロ右回転	灰釉うつしの器形
378	碗 須恵器	□-[15.6]、底-6.5、高-5.2 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。還元、やや硬質、燻し。黒色～黄灰色	底部小さく、体下部で内湾して大きくひろがる。口縁部外反し、端部丸味をもって、外側にめくれる。底部回転糸切り、貼付高台、断面外行の長方形。器肉均質。ロクロ右回転	

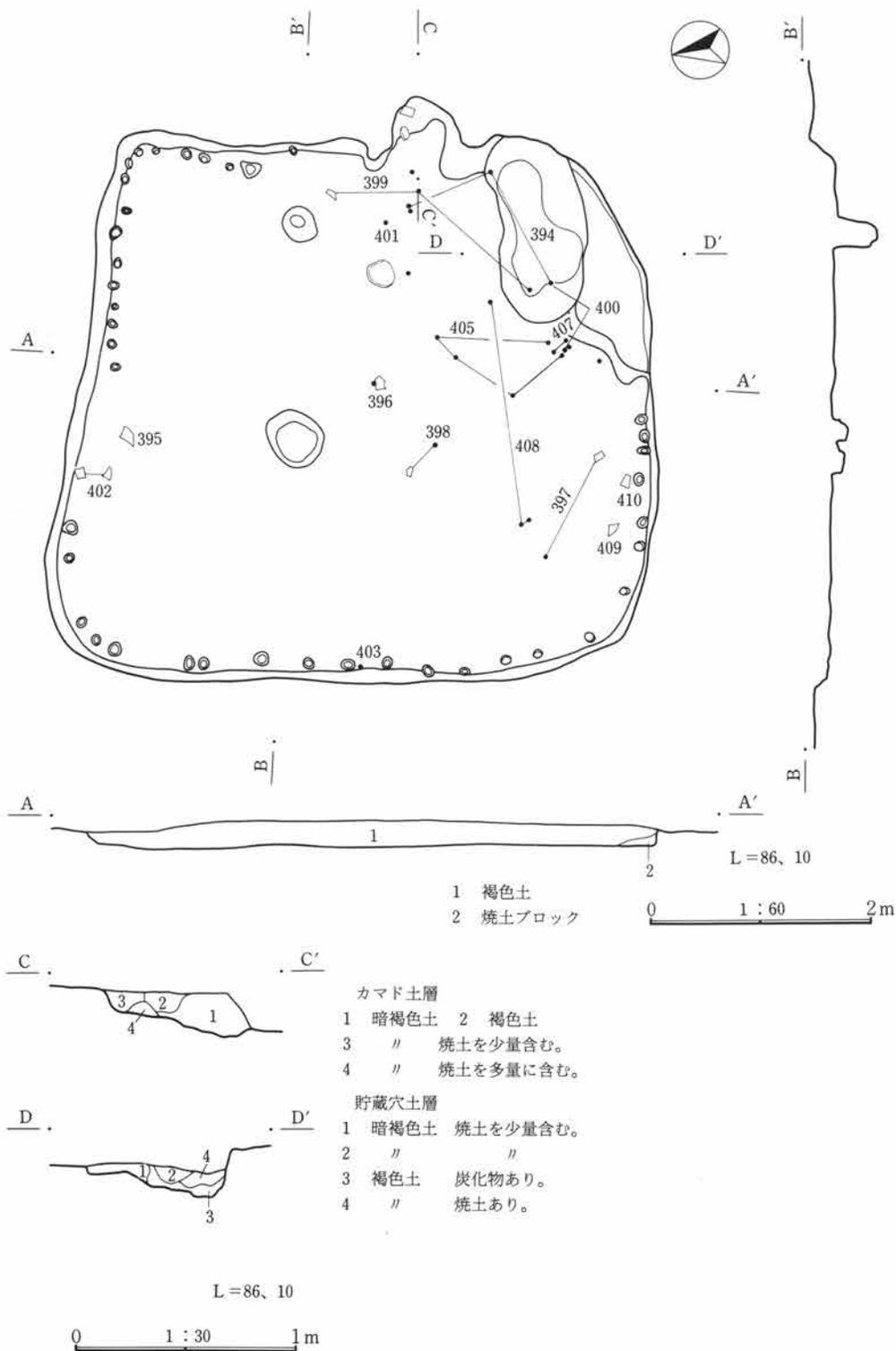
379 5区7B 号住	甕 土師器	口-[18.4]、高- (21.0) $\circ\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、軟質。明褐色	コの字状口縁の甕。卵形の体部、頸部、凹線めぐり、内傾ぎみにたちあがり、口縁部外反する。口縁端部内側にかえりをもつ。体上部ヨコ、下部タテヘラケズリ。器肉、薄手	
380	甕 土師器	口-[20.2]、高- (8.0) $\circ\frac{1}{6}$	砂粒、輝石を含む。酸化、 軟質。橙色	コの字状口縁の甕。体部丸味強く、口縁部短かく外反し、端部肥厚してわずかにたちあがる。端部外側、沈線めぐり。器肉、薄手	
381	甕 土師器	口-[22.0]、高- (4.2) $\circ\frac{1}{2}$	砂粒、黒色輝石を含む。 酸化、軟質。橙色	コの字状口縁の甕。口縁部外反、端部内側に丸いかえりをもつ	
382	碗 須恵器	口-[14.0]、底-[ 6.8]、高-4.0 $\circ\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、 やや軟質。黄灰色	平底。体下部でやわらかく内湾してひろがり、口縁部外反、端部、肥厚して丸い。底部回転糸切り	
383	碗 須恵器	口-[14.9]、高- (4.6) $\circ\frac{1}{6}$	砂粒、石粒多く含む。還元、 やや硬質。灰色	体部内湾してひろがり、口縁部わずかに外反。ロクロ調整	
461	鉄製釘	長-(3.7)、巾-0.5、厚-0.5、断面、四角形、片端、細くなる。両端折れ			
1836	鉄製釘	長-(4.4)、巾-0.5、厚-0.3、断面、扁平な四角形、先端、細く尖る。			木質附着
1839	鉄製釘	長-(3.3)、巾-0.5、厚-0.4、断面、やや扁平な四角形、片端、細くなる。			木質附着
1840	鉄製釘	長-(4.2)、巾-0.4、厚-0.4、断面、四角形、片端、細くなる			



第283図 5区7A号住居跡遺物図



第284図 5区7A号、7B号住居跡遺物図

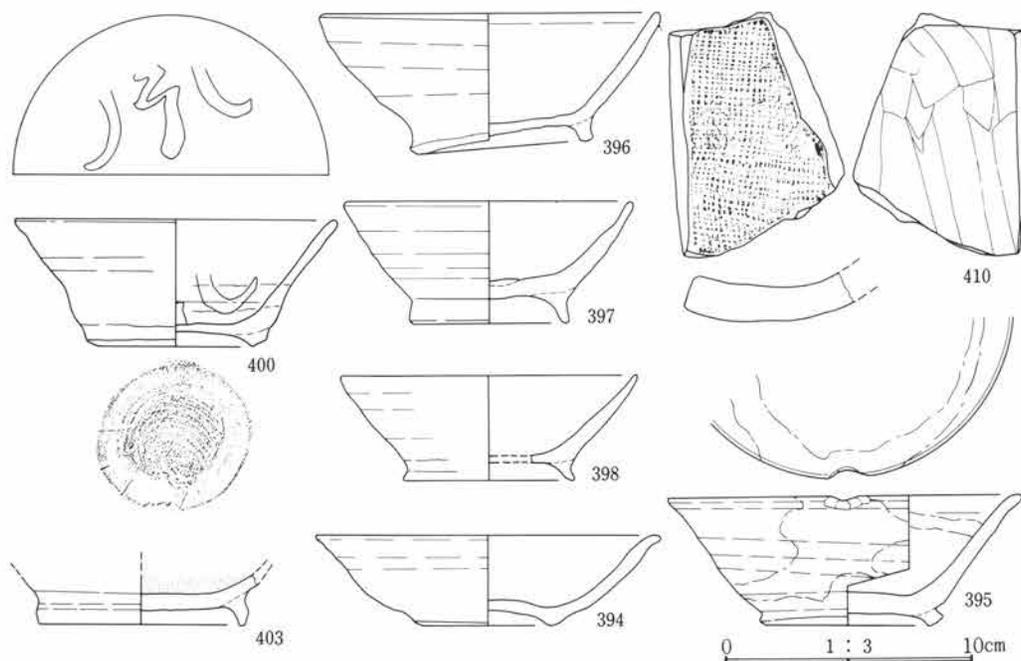


第285図 5区8号住居跡遺構図

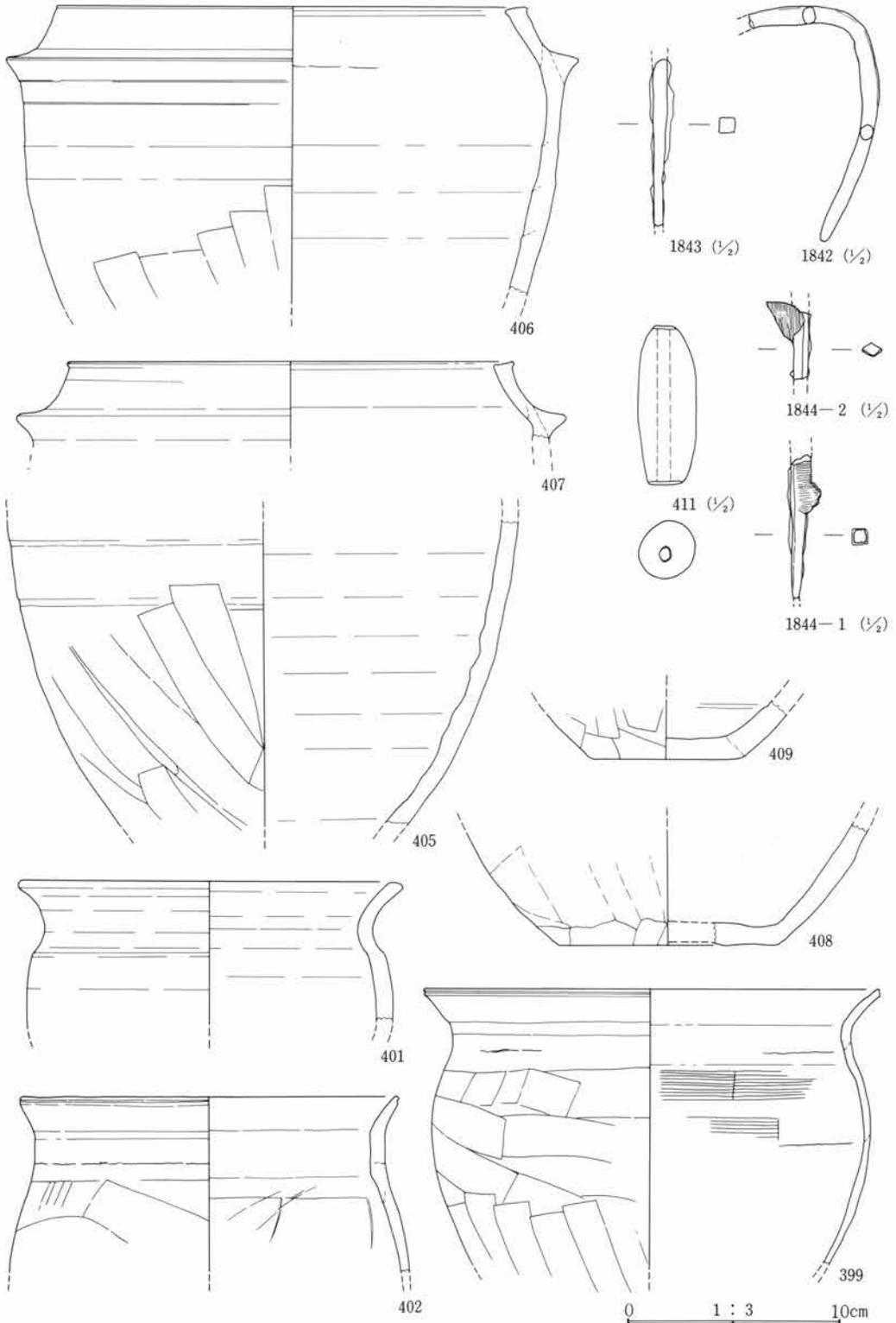
5区8号住居跡（第285～287図、第80表、図版120・121）

本住居跡は、基本土層第4層で確認された。規模は、横5.10m×縦4.75mで、平面形は、東南隅が丸味をもち、東辺が巾狭く、西辺が広めの、台状方形である。方位は、E-7°-Sを示す。壁高は22cmあり、緩やかに外側へひろがる。床面はカマド前部を中心に堅く、周辺は軟弱であった。柱穴は、確認できなかったが、住居中央より、やや北寄りに、二つのピットがみられた。性格は不明である。周溝は、明確でなく、壁際の床面が、やや低い。カマドから貯蔵穴までの部分と、北辺の一部分を除いて、径7cm～10cmの小ピットが、15cm～25cmの間隔で、壁際をめぐる。北辺の列は、中央でとぎれ、東寄りと西寄りでは、整合しない。壁の土留用の小柱列痕跡と思われる。カマドは、東辺中央、やや南寄りで、袖部分は、壁より内側に、燃烧部は、壁外に造り出している。燃烧部奥壁部分に、河原石がみられることから、補強材として石を使用したものであろう。貯蔵穴は、カマド右脇、住居東南隅にあり、長径165cm×短径75cm×深さ30cmの隅丸長方形で、南辺との間は、床面が一段高く、棚状になっている。遺物は、カマドと貯蔵穴を中心に散見する。土師器甕、羽釜、ロクロ調整の甕、須恵器坏、埴、灰釉埴、土錘、布目瓦片が出土しており、床面から、少し浮いた状態ではあるが、銅製品、断面方形の釘様鉄製品も出土している。時期は、出土遺物より、平安時代（10世紀中葉）と思われる。なお、本住居跡出土の、土師器甕（器肉の厚いコの字状口縁、399、402）羽釜（405、406、407）ロクロ調整の甕（401）高台付埴（396、397、398）体内湾、口縁直行、浅い身を持ち、高台高めめの類）の組合わせは、10世紀中ばの頃の指標になるかと思われる。

（長谷部）



第286図 5区8号住居跡遺物図（1）



第287図 5区8号住居跡遺物図(2)

第80表 5区8号住居跡出土遺物観察表

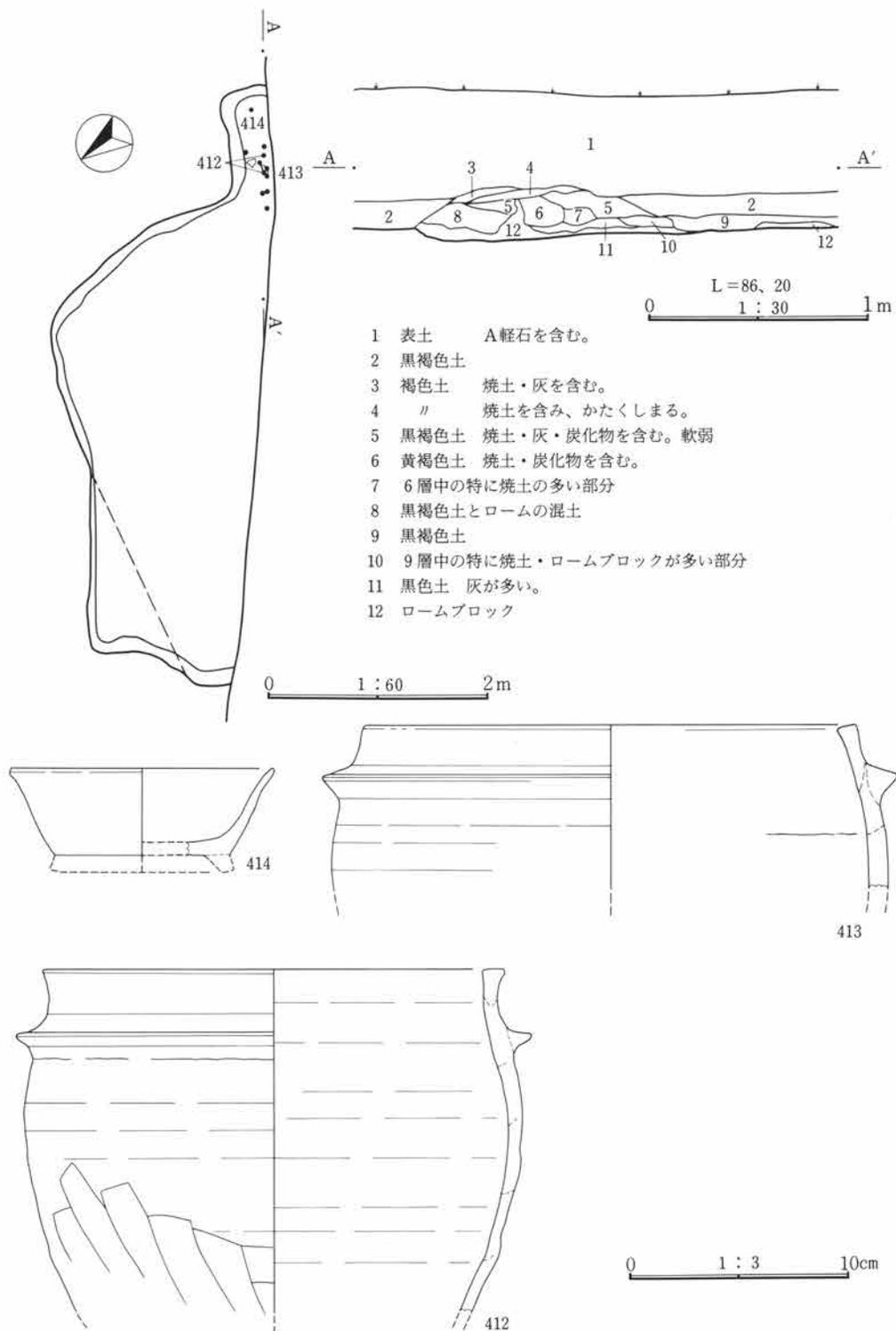
(第286・287図、図版 120・121)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
394	坏須恵器	口-[13.9]、底-[5.5]、高一3.6 $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒多く含む。還元、やや硬質。灰白色	平底。体部わずかに内湾して大きく広がる。口縁部外反。底部回転糸切り。器肉、均質薄手。ロクロ右回転	
395	碗須恵器	口-[14.3]、底-6.6、高一5.2 $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒多く含む。還元、やや硬質。灰色	体部直線的にひろがり、口縁部外反する。口縁端部、やや肥厚し丸味をおびる。底部回転糸切り、貼付高台、断面、外行する台形。ロクロ右回転	口縁部一部分欠けあり、内面、リング状にスス付着。——灯明皿
396	碗須恵器	口-[13.7]、底-7.4、高一5.6 $\frac{1}{4}$	砂粒、赤色石粒、輝石を含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色	体部、内湾し、口縁直行する高台付碗。底部回転糸切り、貼付高台、断面台形、端部外行する	
397	碗須恵器	口-[11.6]、底-6.5、高一4.9 $\frac{1}{2}$	砂粒、輝石を含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色	体部、わずかに内湾して、ひろがる。口縁部直行、身の浅い碗。底部回転糸切り、貼付高台。断面、外側直行する三角形	内底面、粘土補修痕あり
398	碗須恵器	口-[12.0]、底-[6.8]、高一4.2 $\frac{1}{4}$	砂粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい褐色	体部、わずかに内湾して、ひろがる。口縁部直行、身の浅い碗。底部回転糸切り、貼付高台、断面、外側にめくられる三角形	№396～№398は、同一器種の大小か
399	甕土師器	口-[21.4]、高一12.7 $\frac{1}{4}$	砂粒、輝石を含む。酸化、軟質。褐色	コの字状口縁の甕。体部丸く、頸部しまり、内傾してたちあがる。口縁部外反、端部外側に稜をもち、中に沈線めぐる。体部ヘラケズリ調整	
400	碗須恵器	口-[13.0]、底-7.4、高一5.1 $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。粗。還元、やや硬質。灰色	体部ほぼ直線的にひろがる。口縁部わずかに外反。底部回転糸切り、貼付高台、断面台形、粗雑。ロクロ右回転。体部粘土積痕あり	底部円盤別作り、体内面、墨書あり「水」不明
401	甕	口-[18.0]、高一(6.9) $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒、多く含む。酸化、やや硬質。橙色	体部丸味をもち、頸部からゆるく、くの字に外反して口縁部へ至る。口縁端部、内側、丸味強い。体部ロクロナデ調整	
402	甕土師器	口-[17.6]、高一(8.1) $\frac{1}{4}$	砂粒、輝石を含む。酸化、軟質。橙色	コの字状口縁の甕。頸部～口縁部ゆるいコの字、口縁端部外側、沈線めぐる。体部ヘラケズリ	
403	碗灰釉陶器	底-8.2、高一(1.6) $\frac{1}{4}$	砂粒含む。還元、硬質。灰色、釉-灰白色	大振りの高台付碗。底部、回転ヘラケズリ調整後、貼付高台、断面、外側に丸い稜をもつ三角形	重ね焼き痕あり
405	羽釜	胴-[23.8]、高一(14.1) $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒多く含む。酸化、やや硬質。橙色	体部ロクロナデ後、体下部タテヘラケズリ	

406 5区8号 住	羽 釜	口—[22.0]、高—(13.3)○%	砂粒、白色石粒多く粗。還元、やや硬質。暗灰黄色	体部丸味あり、口縁部内傾する。端部、平坦。鏝断面、三角。体部ロクロナデ調整後体下部ヘラケズリ調整	外面、スス付着
407	羽 釜	口—[21.0]、高—(3.5)○%	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色	口縁部、内傾して、たちあがる。端部、平坦。鏝断面、端部の丸い三角形。ロクロナデ調整	
408	羽 釜	底—[9.0]、高—(5.4)○%	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。暗灰黄色	平底。底部、ヘラおこしか? 体下部ヘラケズリ、ヘラナデ調整	底部外面、スス付着
409	羽 釜	底—[7.2]、高—(2.1)○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。灰褐色	平底。底部、ヘラケズリ調整。体下部ヘラナデ、ヘラケズリ調整	底部外面、スス付着
410	布目瓦	縦—(9.0)、横(6.7)、厚—1.5	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰色	平瓦。布目あり、側部、ヘラケズリ	
411	土 錘	長—4.9、径—1.9 孔径—0.4○完存	砂粒を含む。酸化、軟質。浅黄橙色	中央部がふくらみ、両端、すぼまる。中心に、貫通孔あり	
1842	銅 製品	長—(9.9)、径—0.5、全体に緑青がふく、断面、楕円形の針金状銅製品、片端細くなる。片端折れ、L字状に屈曲			
1843	鉄 製 釘	長—(5.2)、幅—0.5、厚—0.4、断面、やや扁平な四角形。片端細くなる。両端、折れ			
1844-1	鉄 製 釘	長—(4.4)、幅—0.4、厚—0.4、断面、四角形、片端、細くなる。木質付着			
1844-2	鉄 製 釘	長—(2.4)、幅—0.4、厚—0.4、断面、ゆがんで菱形。木質付着			

## 5区9号住居跡 (第288図、第81表、図版121)

本住居跡は、基本土層第4層で確認された。南側%程が調査区外である。規模は、横(1.48m)×縦4.38mで、平面形は方形で、北辺の突出部分は掘りすぎである。方位は、北辺で、E-8°-Sを示す。壁は、確認面から床面までが浅く、6cm程で、緩く外側に立ちあがるのみである。床面は、カマド部分のみ堅い部分が認められたが、周辺部は、軟弱である。柱穴、周溝は、確認できなかった。カマドは東辺にあり、おそらく中央部分にあたるであろう。燃烧部は、壁外に造り出している。半分は、調査区外で、全容は不明である。遺物は、カマド付近にのみ見られ、羽釜、高台付坏がある。時期は平安時代(10世紀後葉)である。(長谷部)



第288図 5区9号住居跡遺構、遺物図

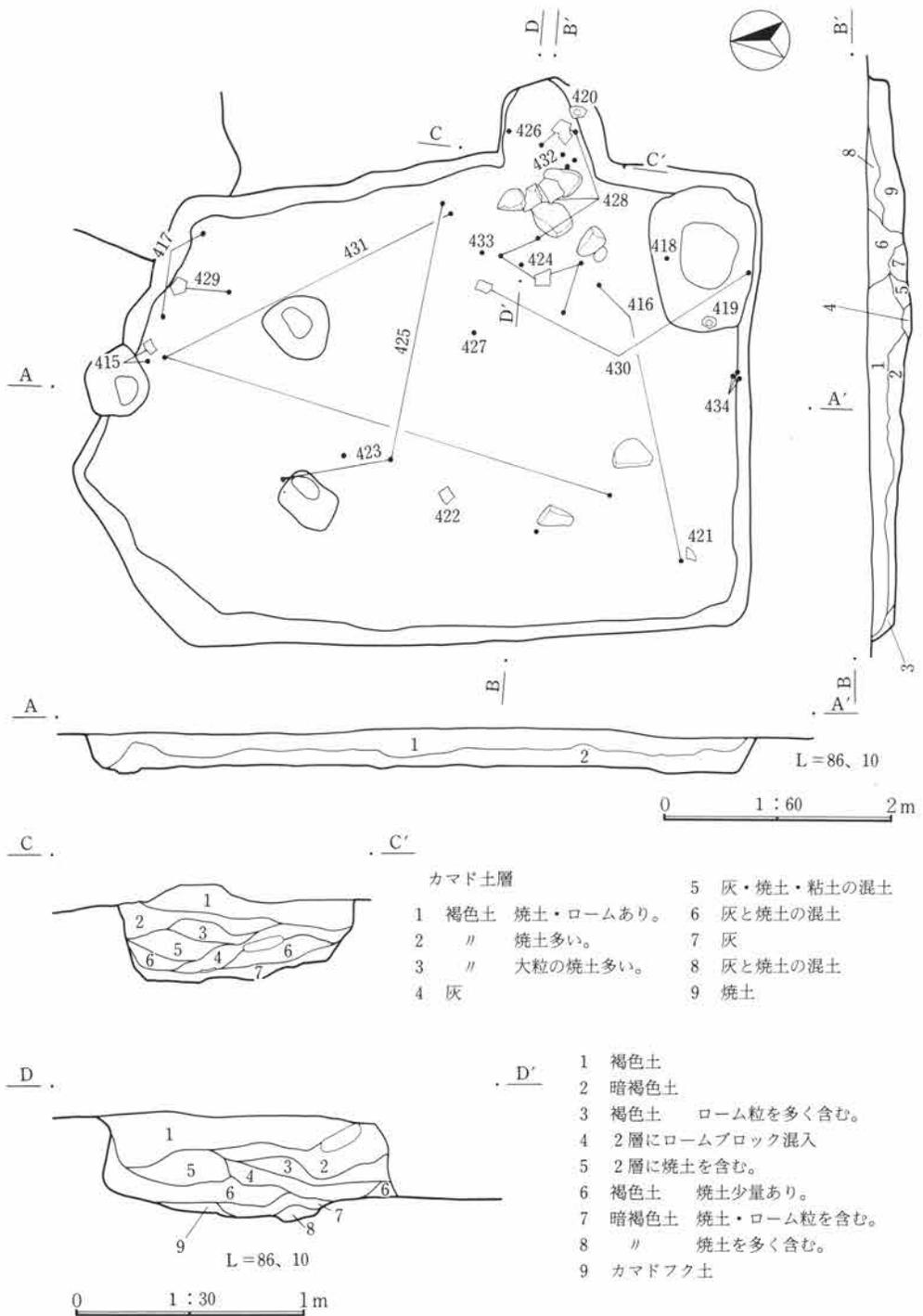
第 81 表 5 区 9 号住居跡出土遺物観察表

(第288図、図版 121)

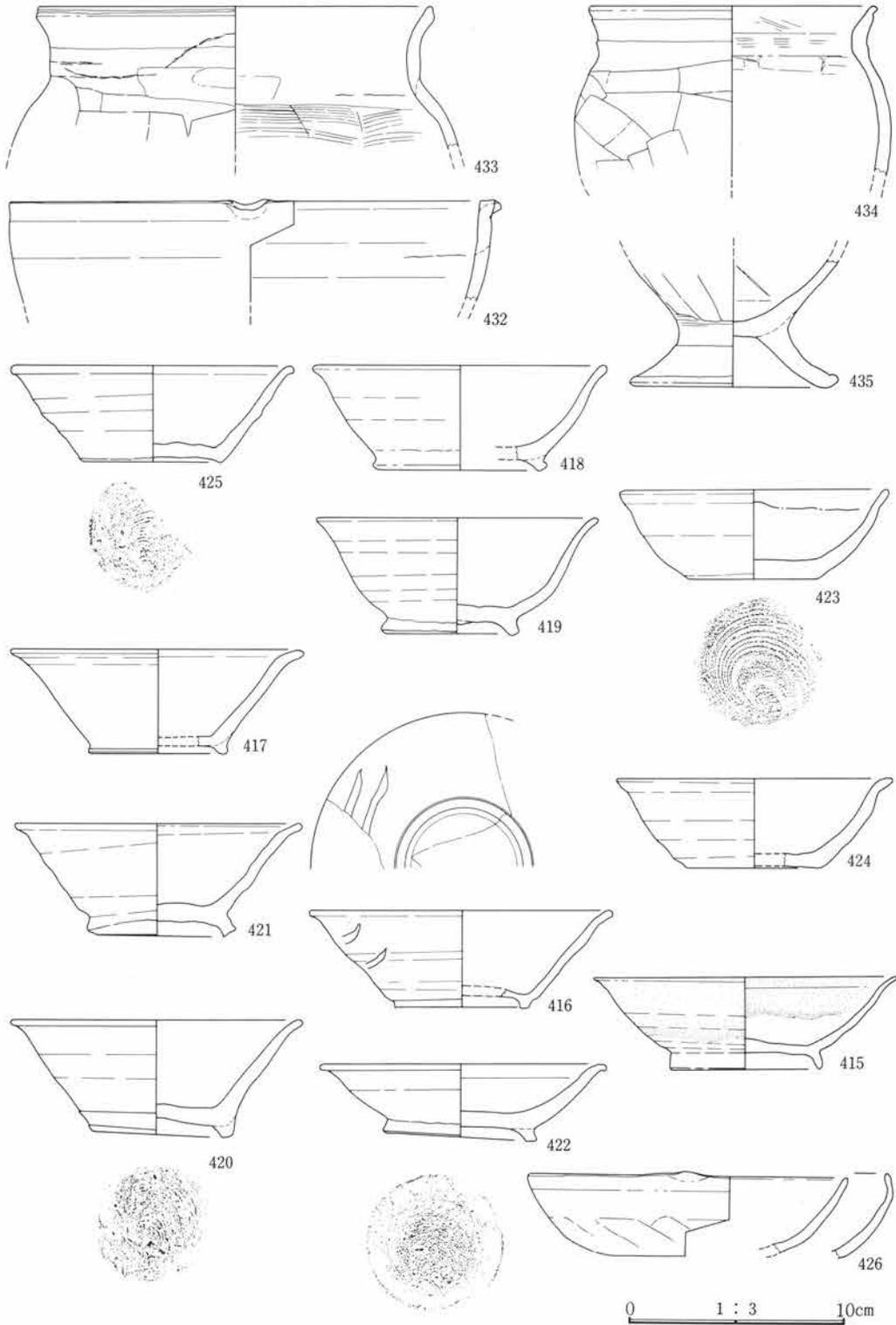
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
412	羽釜	口-[21.0]、高一(15.4)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒多く含む。酸化、やや硬質。灰褐色	体部、内湾し、口縁部、内傾して、端部で外反する。口縁端部平坦面あり。鑿断面、丸味のある三角形、下側、中程に沈線めぐり。体部ロクロナデ調整、下部タテヘラケズリ	内外、炭化物付着
413	羽釜	口-[22.2]、高一(7.3)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや硬質。にぶい褐色	体部、内湾。口縁部、内傾し、端部、平坦面あり。鑿断面、幅太の三角形 体部ロクロナデ調整	
414	坏須恵器	口-[12.0]、底-[8.0]、高一(3.9)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、輝石を含む。酸化、軟質。灰白色	体部、直線的にひろがり、口縁部わずかに外反する、身の浅い坏。底部回転糸切り、高台貼付痕あり	口縁部内外、スス付着

## 5 区10号住居跡 (第289~292図、第82表、図版122・123)

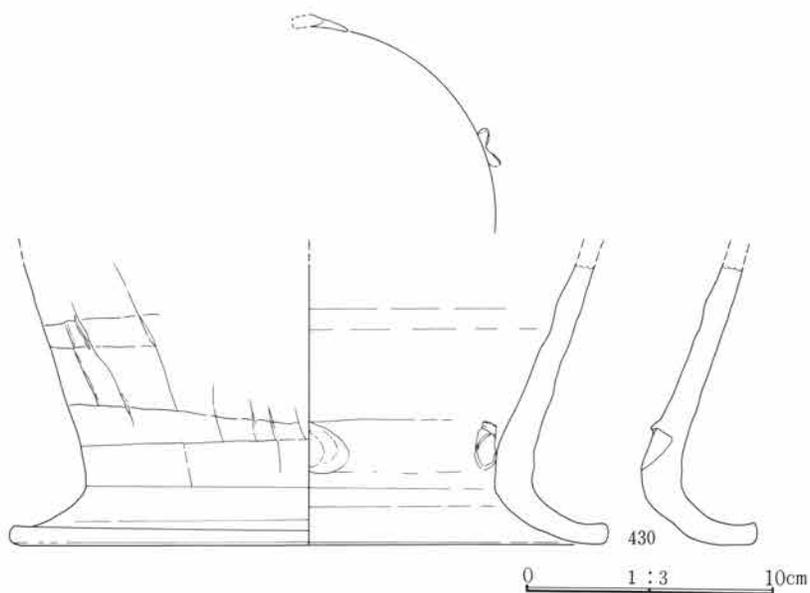
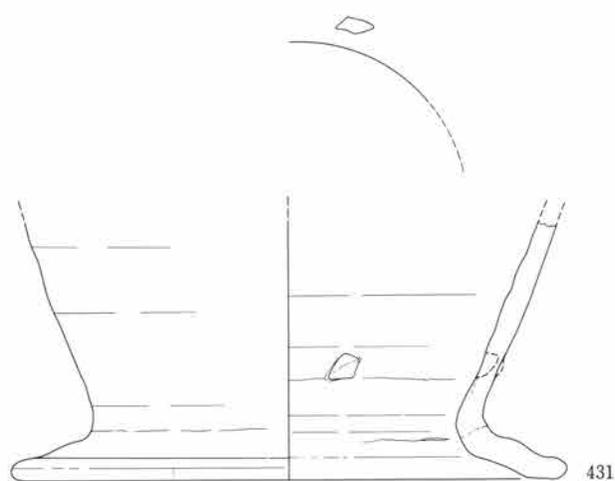
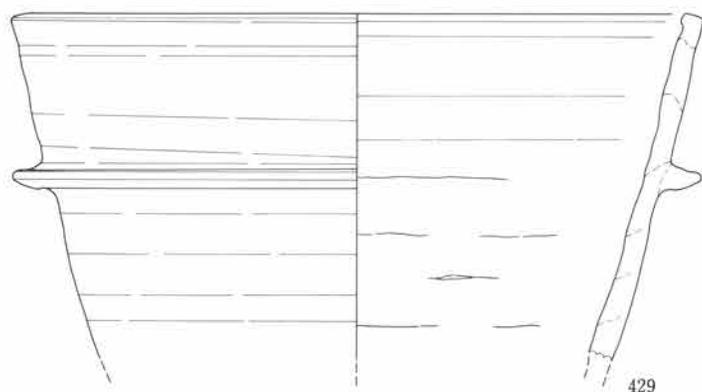
本住居跡は、基本土層第4層で確認された。東北隅に、5区4号土壇(新)が重複し、西側には、近接して、6号住居跡がある。切り合い関係は、微妙であるが、調査時点では、6号住が新しいという認識であった。規模は、南北4.90m×東西4.02mで、北辺は、張り出して、平面形は五角形である。住居跡北側の部分に、ピットが6個確認されているが、別遺構がからんでいるとは、とらえられなかった。方位は、N-0°-Eを示す。壁高は、32cmを測り、緩傾斜をもつ。周溝は、西辺の一部で、わずかに低い部分が認められている。柱穴については、不明確ではあるが、北側のピットと、北辺中央のピットとあわせて、他の構造施設が考えられよう。(7区16住参照)カマドは、東辺中央部、南寄りに位置し、燃焼部を壁外に丸く造り出している。袖部は、壁より内側に入る。カマド前部に、角閃石安山岩の円石、河原石が数個みられ、本来は、石を多用したカマドであったと考えられよう。貯蔵穴は、東南隅にあり、長径125cm×短径87cm×深さ20cmの、隅丸方形である。堀方では、カマド前部と、住居西南隅に、土壇がみられた。遺物は、カマド、貯蔵穴周辺に多く出土した。土師器甕、台付甕、坏、羽釜状の甑、胴部に鏝を持つ大甕、瓶、片口の鉢、坏、高台付坏、埴、灰釉陶器埴がある。墨書土器(416)も出土した。本住居跡出土土器は、器種の変化、特に甑のあること、No428の甕の存在、坏、埴類の豊富なこと等、注目される。時期は、平安時代(10世紀初頭)であろう。(長谷部)



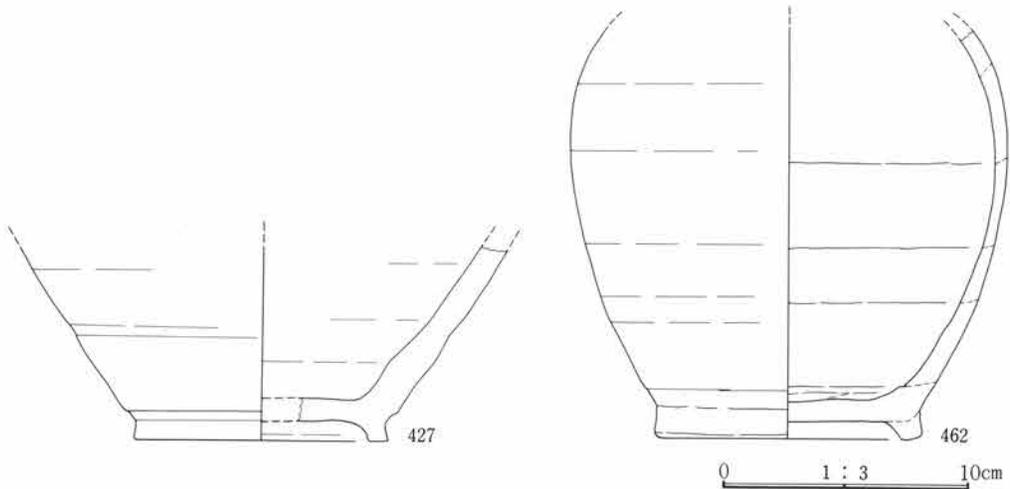
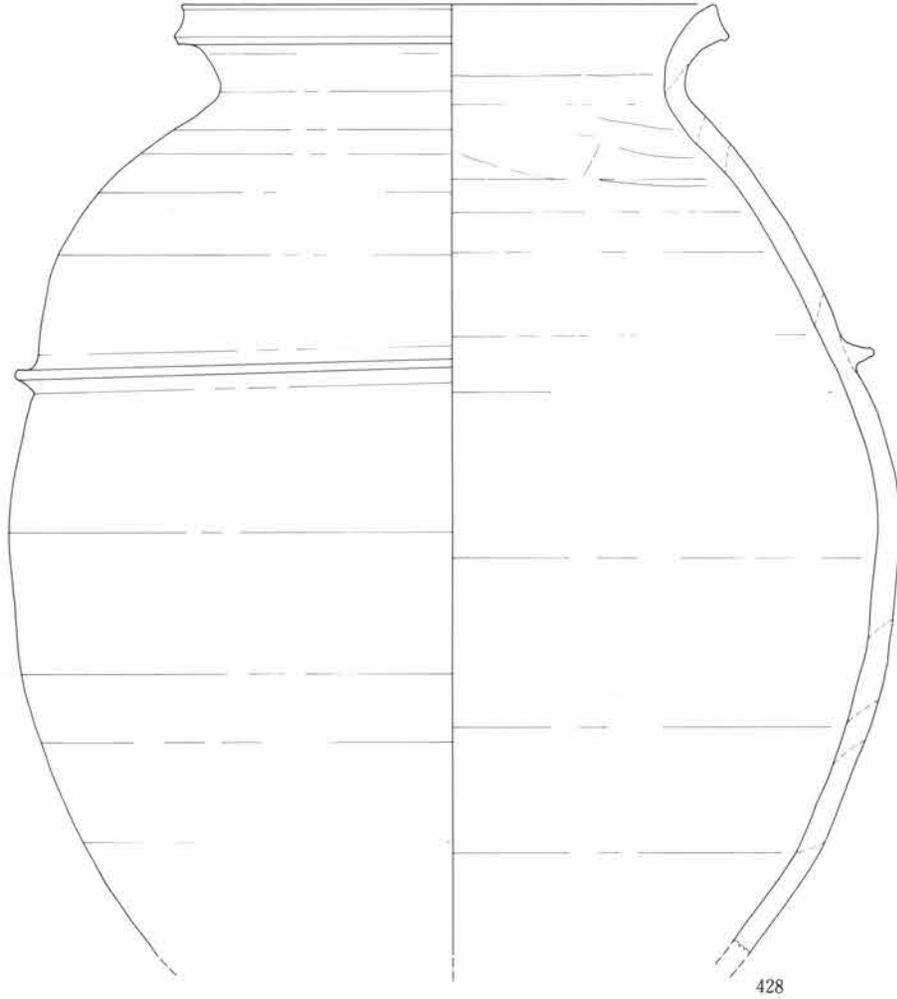
第289図 5区10号住居跡遺構図



第290図 5区10号住居跡遺物図（1）



第291図 5区10号住居跡遺物図(2)



第292図 5区10号住居跡遺物図（3）

第82表 5区10号住居跡出土遺物観察表

(第290~292図、図版 122・123)

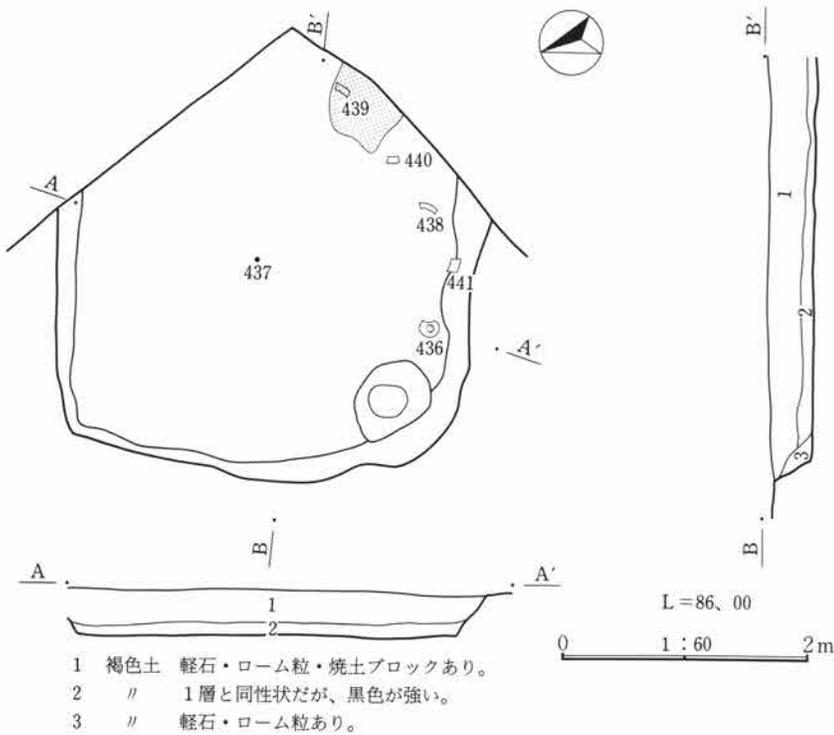
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
415	埴 灰釉陶器	口一[14.0]、底一7.0、高一4.2 $\circ$ $\frac{1}{4}$	砂粒を含むが、細密。還元、硬質。灰色、釉一乳白色～緑灰色	体部内湾してひろがり、口縁部わずかに外反、端部丸味もつ。底部～体部中位、回転ヘラケズリ調整。貼付高台、断面、外側、端部丸い三角形	床直出土
416	埴 須恵器	口一[14.0]、底一[6.2]、高一4.4 $\circ$ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。灰黄色	体部、わずかに内湾してひろがり、口縁部外反、端部丸味あり。底部貼付高台、断面低い台形。器肉、薄手	体部外面に墨書あり。文字不明
417	埴 須恵器	口一[13.6]、底一[6.3]、高一4.8 $\circ$ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒、輝石を含む。酸化、やや硬質。明赤褐色	体部、直線的にひろがり、口縁部強く外反する。内底部～体部へ、はっきりした区切りをもってたちあがり口縁部は内稜をもつ。口縁部肥厚して、ゆるい外稜あり。底部、貼付高台、低く外開きの台形	床直出土
418	埴 須恵器	口一[13.6]、底一[8.0]、高一4.8 $\circ$ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒、輝石を含む。酸化、やや硬質。明赤褐色	体部、なめらかに内湾してひろがり口縁部外反、端部丸味あり。底部、貼付高台、断面外開きの長方形、端部外側にめくれる	貯蔵穴出土 No417と焼成近似
419	埴 須恵器	口一[13.0]、底一6.4、高一5.4 $\circ$ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰黄色	体下部でふくらみをもち、ひろがる。口縁部わずかに外反。底部回転糸切り後、貼付高台、断面、しっかりした台形、端部外側にめくれる	床直出土 体部、粘土積痕あり No416と近似
420	埴 須恵器	口一[13.5]、底一6.7、高一5.3 $\circ$ $\frac{3}{4}$	砂粒、石粒、輝石を含む。酸化、やや硬質。明赤褐色	体部、直線的にひろがり口縁部外反する。口縁部肥厚して丸味あり。底部回転糸切り、貼付高台、断面、低い台形。ロクロ右回転	No417と焼成、器形、近似
421	埴 須恵器	口一[13.3]、底一6.8、高一5.2 $\circ$ 略完存	砂粒、石粒を含む、粗。還元、やや硬質。灰色	体部、直線的にひろがり、口縁部強く外反。口縁部内稜をもち、端部丸味あり。底部、がっしりした長方形の貼付高台。外行する	床直出土 No417と器形近似
422	皿 須恵器	口一13.3、底一7.1、高一3.5 $\circ$ 完存	砂粒、石粒、輝石を含む。還元、やや硬質。暗灰黄色	体部、わずかに内湾して大きくひろがる。口縁部強い外反、丸い内稜をもつ。端部、丸く外側にめくれ玉縁状。底部回転糸切り、貼付高台、断面外行する台形。ロクロ右回転	床直出土 重ね焼き痕あり No417と同種
423	埴 須恵器	口一[12.4]、底一5.8、高一4.1 $\circ$ $\frac{1}{2}$	砂粒を多く含む。酸化、やや硬質。灰色	平底。体部内湾して、口縁部外反、端部丸味あり。底部、回転糸切り、ロクロ右回転	口縁一部欠けあり、内面、炭化物一面に付着
424	埴 須恵器	口一[12.7]、底一[6.2]、高一5.0 $\circ$ $\frac{1}{4}$	砂粒を含むが、細。還元、やや硬質。灰白色	高台欠損。体部内湾してひろがり、口縁部外反。端部丸味あり。底部回転糸切り、貼付高台、ロクロ右回転	重ね焼き痕あり

## 2 14地区の調査 (平安時代)

425 5区10号 住	埴 須恵器	口-[13.0]、底 -[6.2]、高一(4. 6)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒、輝石を含む。 還元、やや硬質。灰色	高台部欠損。体部直線的にひろがり、 口縁部外反、内稜をもつ。口縁端部 外側にめくれる。底部回転糸切り、 貼付高台。ロクロ右回転	No417と同種 底部円盤別作り
426	坏 土師器	口-[14.8]、底 -[10.8]、高一(3. 5)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、輝石を含む。酸化、 軟質。にぶい橙色	平底で身の浅い坏。体部内湾してひ ろがる、口縁端部薄手、一部分、内 側へつまみ込み。口縁部と内面ヨコ ナデ、体下部ナデ	カマド内出土
427	甕 須恵器	底-[10.2]、高 -(7.8)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、 やや硬質。灰色	体下部のみ残。底部より直線的に開 く。体部ロクロナデ、底部貼付高台、 断面、直行する台形	瓶か?
428	甕 須恵器	口-[21.6]、胴 -[36.0]、高一(38. 0)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 やや硬質。橙色〜明赤褐 色	体部中位に最大径をもつ、丸胴の広 口甕。肩部丸く張りをもち、頸部し まって、口縁部へくの字に外反する 口縁端部、肥厚して、縁帯をもつ。 縁帯中央凹む。体部上から三分の一 程の胸部に、鏝、貼付、断面、端部 の丸い三角形。粘土積痕残り、体部 ロクロナデ。下部タテヘラナデ	
429	甕 須恵器	口-[27.8]、高 -(13.9)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。粗。 還元、やや硬質。灰色	鉢形に開く、有鏝の甕。体部直線的、 口縁端部平坦面あり、内側に凹縁め ぐる。鏝断面、上むきの台形。ロク ロナデ調整	
430	甕 須恵器	底-[16.4]、脚裾 -[24.0]、高一(11. 2)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。粗。 還元、やや硬質。灰オリーブ 色	大きく、くの字に外反する脚をもつ 甕。体部、直線的に鉢形にひろく。 底部くびれ部分肥厚し、裾端部丸味 あり。底部内側に、小孔2個あり。 粘土積痕残り、ロクロナデ調整。体 下部タテヘラナデ	
431	甕 須恵器	底-[15.6]、脚裾 -[22.4]、高一(10. 3)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。粗。 酸化、やや硬質。にぶい 橙色	大きく、くの字に外反する脚をもつ 甕。体部、直線的に鉢形にひろく。 底部くびれ部分肥厚し、裾端部丸味 あり。裾内側、平坦面あり。底部内 面、小孔あり。ロクロナデ調整	
432	甕 須恵器	口-[21.6]、高一 (4.4)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 やや硬質。橙色	体部わずかに内湾する。口縁部直行、 端部、平坦面をもつ。口縁部一部分、 外側へつまみ出す、片口状。鉢とす べきか。体部ロクロナデ調整	カマド内出土 内面、付着物あ り
433	甕 土師器	口-[18.2]、高一 (6.4)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、黒色輝石を含む。 酸化、軟質。にぶい赤褐 色	コの字状口縁の甕。コの字の形状ゆ るい。口縁端部外側、沈線めぐる。 体部ヘラケズリ。器肉、厚手	
434	甕 土師器	口-[13.4]、高一 (7.8)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒、黒色輝石を 含む。酸化、軟質。にぶ い赤褐色	体部丸く、コの字状口縁の小型甕。 口縁、二段の内稜をもち、口縁端部 外側に丸くめくれる。体部ヨコ、タ テヘラケズリ	内面、炭化物付 着

第6章 検出された遺構と遺物

435 5区10号 住	甕 土師器	底-5.0、脚裾-9.6、高-(5.8)○脚部のみ	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐	体部丸く、脚部大きく八の字にひろく、小型台付甕。裾端部、外側に丸くめくれる。体部ヘラケズリ、脚、ヨコナデ	
462	瓶 須恵器	胴-17.1、底-10.8、高-(16.0)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。にぶい黄橙色～灰色	高台付、肩部やや下部で張りをもつ長頸瓶。底部、貼付高台、断面、がっしりした、台形、粗雑。体部、ロクロナデ調整。器肉やや厚手、重い	

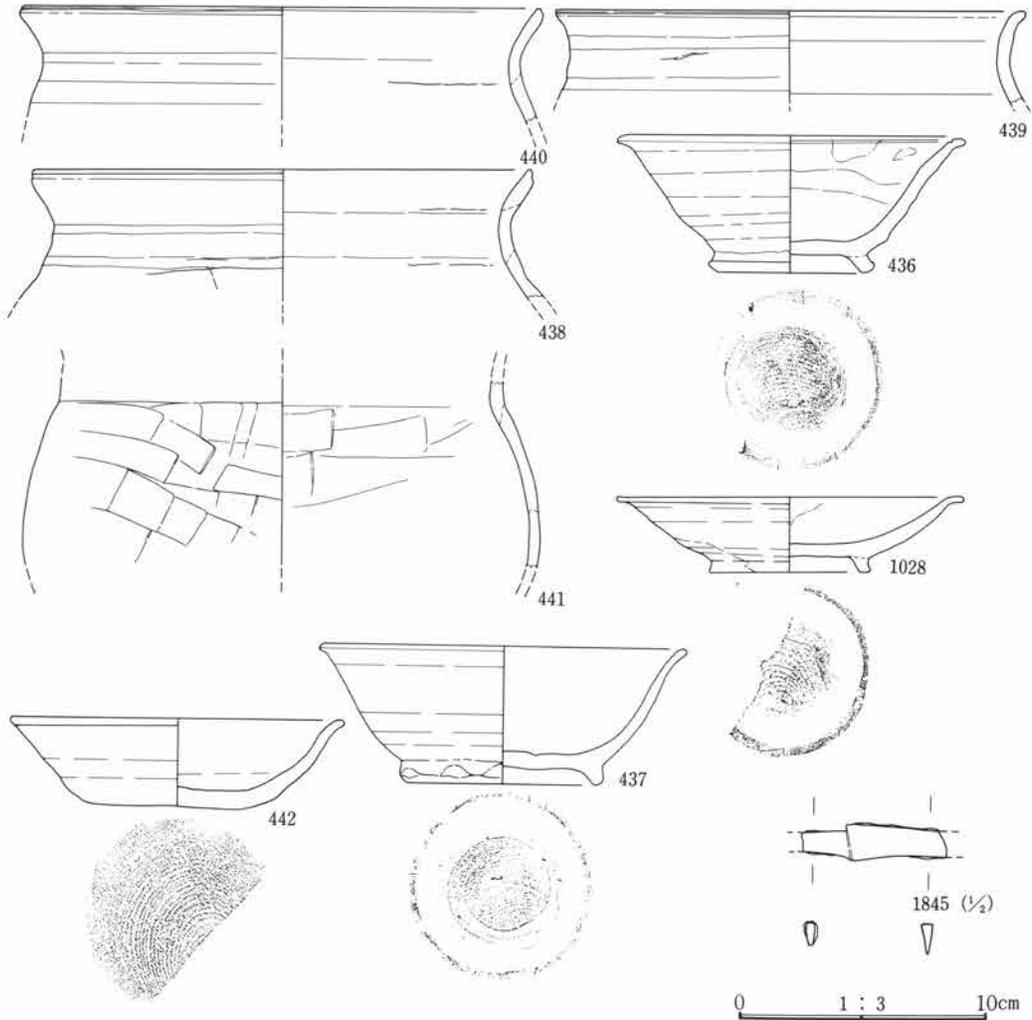


第293図 5区11号住居跡遺構図

5区11号住居跡 (第293・294図、第83表、図版124)

本住居跡は、基本土層第4層で確認された。東北隅から東南隅にかけて、L字形に $\frac{1}{2}$ 程が調査区域外で、不明な点が多い。規模は、南北3.35m×東西3.61mで、平面形は、縦長の方形であろう。方位は、E-19°-Sを示す。住居覆土は、大きく上下二層に分けられ、下層は黒色味がつよい。壁は、37cmを測り、外側に緩やかな傾斜をもって立ちあがる。床面は、全体に軟弱であった。柱穴、周溝は確認できなかった。カマドは、不明であるが、住居東側に、灰の散布が認められてい

るため、東辺やや南寄りに、その位置が推定できる。住居西南隅には、長径68cm×短径19cm×深さ19cmの円形土壇があり、貯蔵穴であると思われる。掘方は、南辺壁際に、小土壇が並ぶ。遺物は、土師器甕、須恵器甕(内面、無文のタタキ目、外面、平行タタキ目、スリ消し)、還元焰焼成の坏、埴類が多量に出土している。坏、埴類は、灰白色で、器肉薄手、口縁端部外側につまみ出してナデており、灰釉陶器の形を模倣したものと考えている。こうした坏、埴類に伴出する煮沸具は、コの字状口縁の甕で、羽釜の出現直前と考えられることから、時期は、平安時代の9世紀末頃に位置づけられる。従って本遺構の時期も平安時代（9世紀後葉）である。（長谷部）

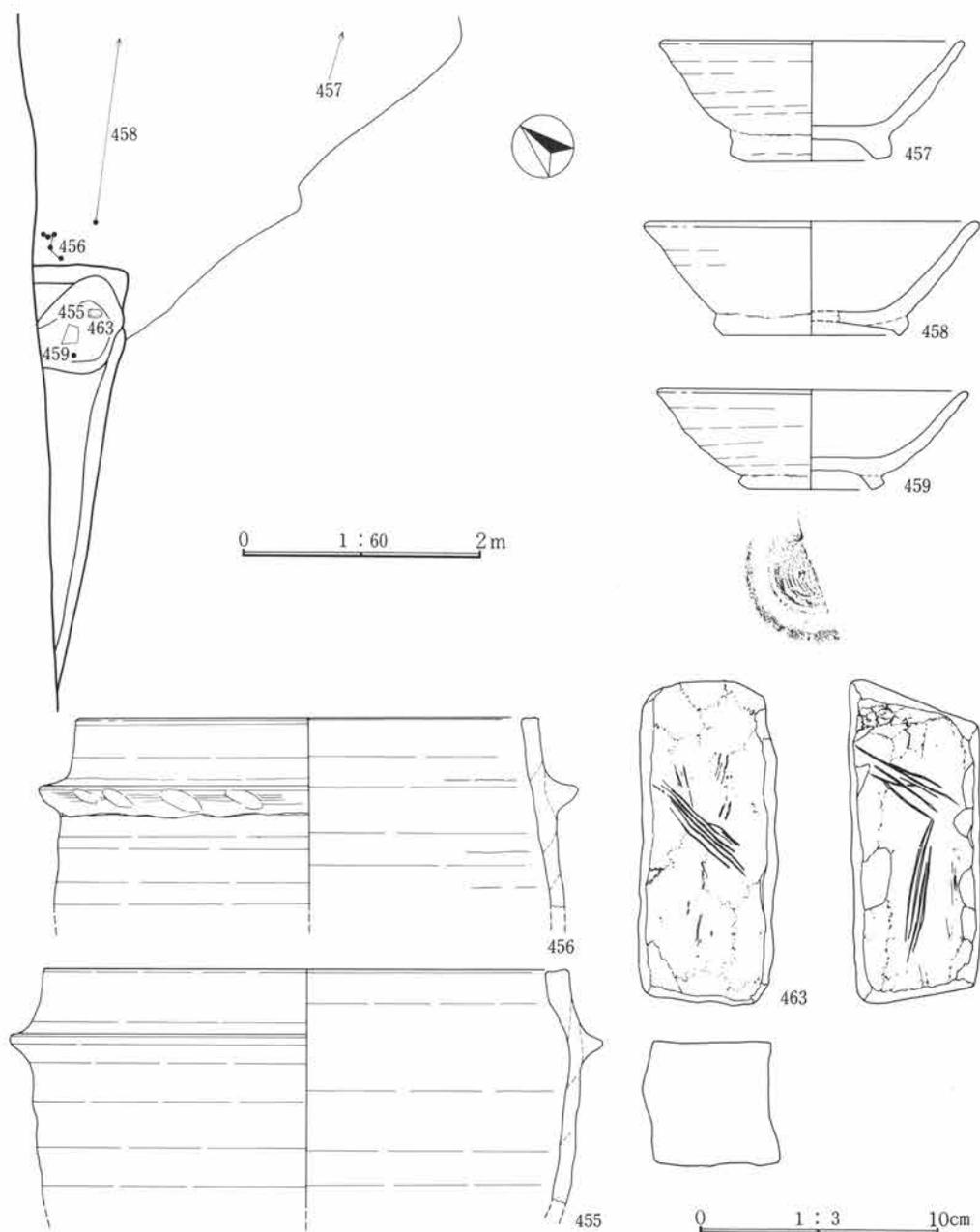


第294図 5区11号住居跡遺物図

第83表 5区11号住居跡出土遺物観察表

(第294図、図版 124)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高)遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
436	碗 須恵器	口-14.0、底-6.3、高-5.5○略完存	砂粒、輝石を含む。還元、やや硬質。にぶい黄橙色～黒色	体下部で張りをもち、体部、わずかに内湾してひろがる。口縁部外反。端部丸味をもつ。底部、しぼり込んで、回転糸切り、貼付高台、断面、外側にめくれる長方形	内面、スス付着。リング状に特に濃い部分あり ——灯明皿
437	碗 須恵器	口-[14.9]、底-8.3、高-5.5○ $\frac{1}{2}$	砂粒、輝石を多く含む。還元、やや軟質。灰黄色	体部、丸く内湾してひろがり、口縁部外反する。口縁端部、外側にめくれる。底部回転糸切り、貼付高台、断面、台形、粗雑。器肉、薄手均質	
438	甕 土師器	口-[20.2]、高-(5.1)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒、輝石を含む。酸化、軟質。暗赤褐色	コの字状口縁の甕。口縁端部外側にふくらみ、沈線めぐる。体部ヘラケズリ	
439	甕 土師器	口-[19.0]、高-(3.6)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、輝石を含む。酸化、軟質。赤褐色	コの字状口縁の甕。内面に二段の稜はもつが、外側はゆるいコの字。口縁端部外側、沈線めぐる。器肉、やや厚手。体部ヘラケズリ	
440	甕 土師器	口-[21.0]、高-(4.4)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	コの字状口縁の甕。口縁部の外反、ゆるい。口縁端部、外側に沈線めぐり、器肉、やや厚手	
441	甕 土師器	胴-(20.8)、高-(7.5)○胴部のみ	砂粒、石粒、輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	体部、丸味をもつ、コの字状口縁の甕。体上部ヨコ、下部タテヘラケズリ。器肉、やや厚手	
442	坏 須恵器	口-[13.3]、底-[7.4]、高-3.6○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	体部、直線的にひらいて、口縁部外反。身の浅い器、底部回転糸切り、外縁部、スレあり、高台貼付痕か?	
1028 参	皿 須恵器	口-[14.0]、底-[6.4]、高-3.0○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒、輝石を含む。還元、やや硬質。灰白色	体部、内湾しながら大きく開き、口縁部外反する。口縁端部丸味あり。底部回転糸切り、貼付高台、断面、外側は直行する台形	床下出土
1845	刀子 鉄製品	長-(5.8)、幅-1.2、厚-0.4、中子、幅-0.9、厚-0.4、刀子、刃部のもとと柄着装部分のみの残片			



第295図 5区71号住居跡遺構、遺物図

## 5区71号住居跡（第295図、第84表、図版133）

本住居跡は、5区2号住居跡の南辺西寄り、道路敷際に、円形土壇と落ち込みが、認められており、調査時点では、5区2号住居として処理をしていた。整理作業を進めてゆくなかで、別住居が重複していたと考えられた為、遺物、図面とも、分離、独立させたものである。大半が、道路敷下に入り、住居跡東南隅と、貯蔵穴のみが、顔を出している状態である。貯蔵穴は、長径80

第6章 検出された遺構と遺物

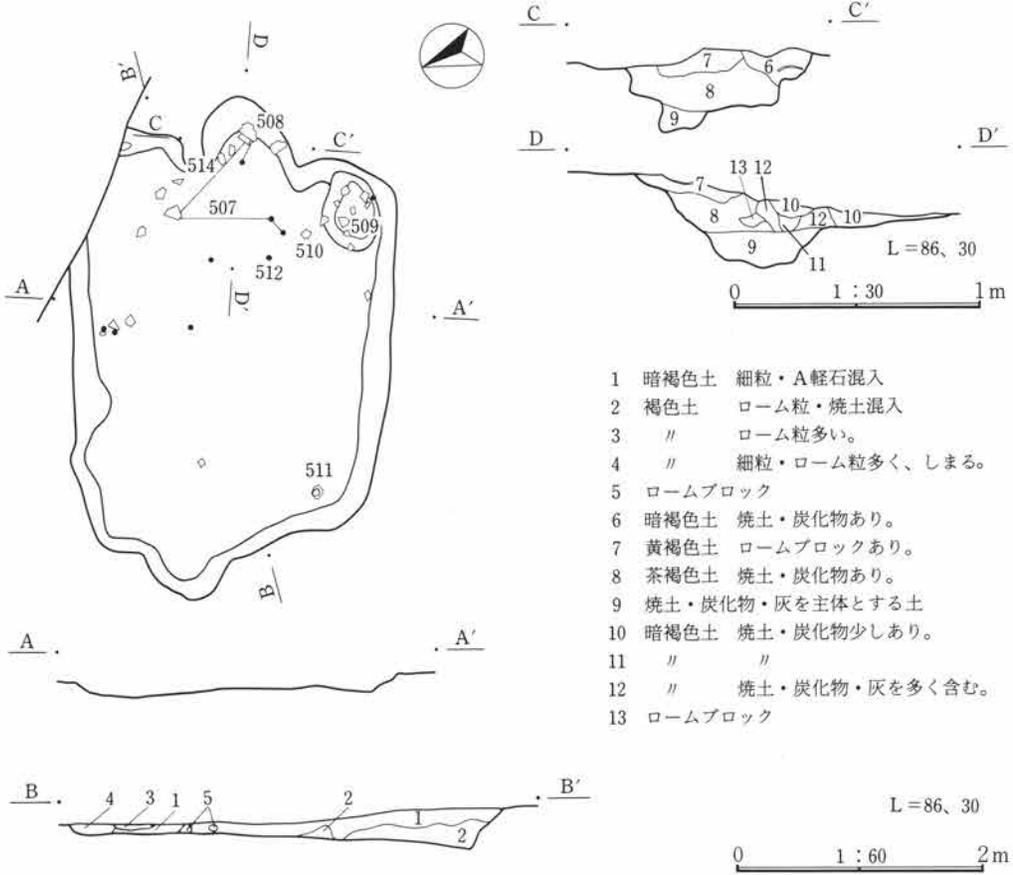
cm×短径(60cm)×深さ10cmの円形で、住居の方位は、南辺で、N-61°-Eを示す。平面形は、方形であろう。遺物は、羽釜、高台付坏、埴で、平安時代(10世紀後葉)のものであろう。

(外山)

第84表 5区71号住居跡出土遺物観察表

(第295図、図版133)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
455	羽釜	口-[19.2]、高-[8.0]○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒、輝石を含む。還元、やや硬質。にぶい橙色	口縁部、わずかに内傾する。口縁端部平坦面あり。鏝断面、上向きの三角形、厚手。体部ロクロナデ調整。器肉、薄手	外面、スス付着
456	羽釜	口-[22.0]、高-[9.8]○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。橙色	口縁部、内傾し、口縁端部、肥厚して平坦面をもつ。鏝断面、端部の丸い三角形。体部ロクロナデ調整	
457	埴須恵器	口-[12.7]、底-[6.7]、高-[5.0]○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。粗。還元、やや軟質。灰白色	体下部で張りをもち、直線的にひろがる。口縁部、直行し端部丸味あり。底部貼付高台、断面、がっしりした台形、内側の端部丸味あり	
458	埴須恵器	口-[14.0]、底-[8.2]、高-[4.7]○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい橙色	体部、ほぼ直線的にひろがり、口縁部わずかに外反。端部丸味あり。底部、外縁部に、貼付高台。断面、外行する、低い台形	
459	埴須恵器	口-[13.0]、底-[6.0]、高-[4.1]○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。還元、やや軟質。灰黄色	身の浅い埴。体下部で張りをもって、内湾しひろがる。口縁部わずかに外反。底部回転糸切り、貼付高台、断面、やや外行する四角形	
463	砥石	長-13.4、幅-5.3、厚-5.0、材質-輝石安山岩	四角柱、重量感あり。二面を砥面として使用、縦方向に使用痕あり。斜めに交叉する線条痕、複数あり		

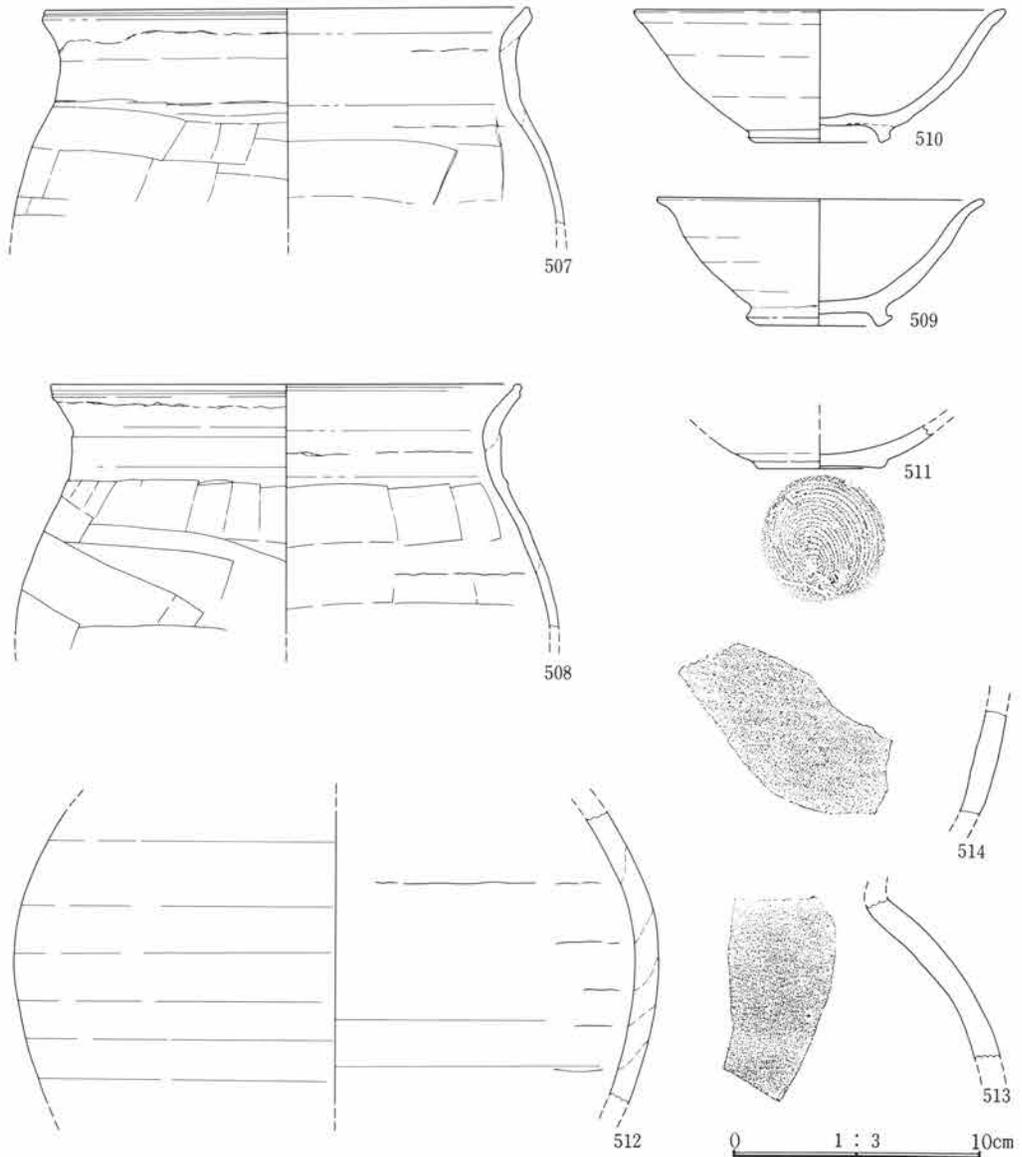


第296図 5区48号住居跡遺構図

5区48号住居跡（第296・297図、第85表、図版124・125）

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。東北隅は調査区外に広がり、49号住居跡とは西辺で約20cmの距離をもって位置する。規模は、西辺で2.46m、南辺側で2.95mを測り、方位は南辺でE-21°-Sである。平面形は、東西に長い方形を呈するが、西辺には壁外に約30cm張り出す小張出部がある。床面は、ローム上に薄く暗褐色土を踏み固めているが、やや軟弱である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の中央部で確認された。両袖は、第4層を掘り残し、袖材には乳白色粘質土を一部に用いている。中央部では、よく焼けた状態が見られた。貯蔵穴は、住居東南隅に接して長径63cm、短径54cm、床面からの深さ23cmの円形土壇が確認された。遺物は、東辺寄りに多く見られ、土師器甕、坏、須恵質甕、埴がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴により平安時代（9世紀後葉）とする。（新井）

第6章 検出された遺構と遺物



第297図 5区48号住居跡遺物図

第 85 表 5区48号住居跡出土遺物観察表

(第297図、図版 124)

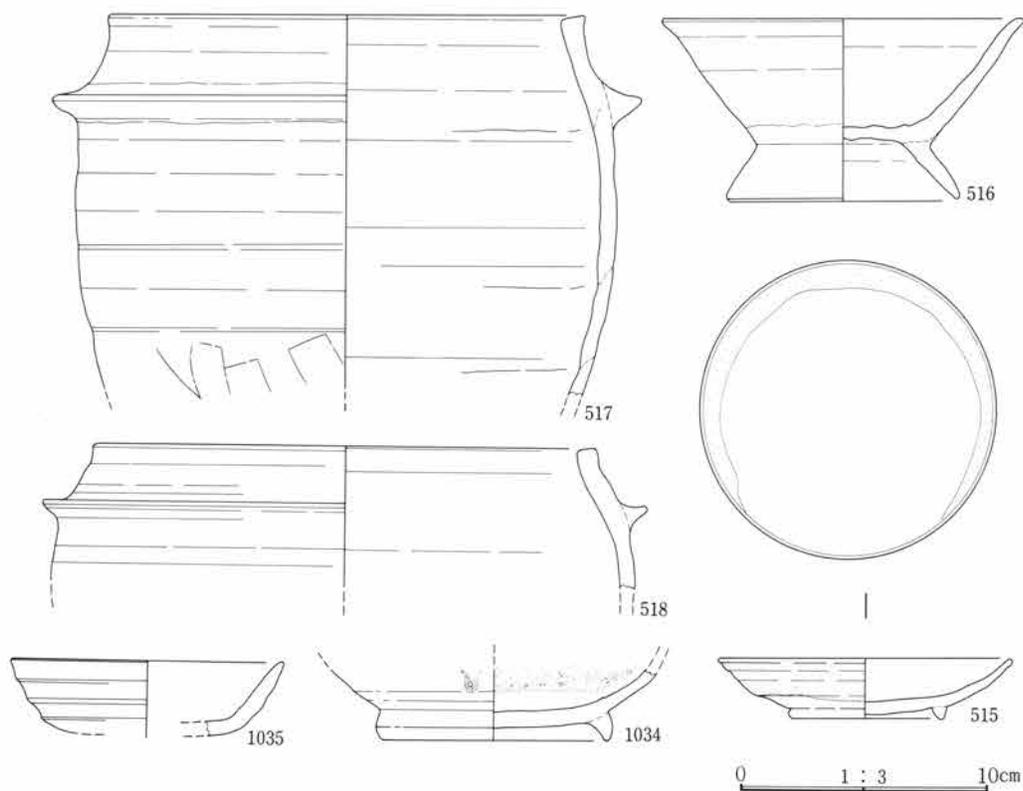
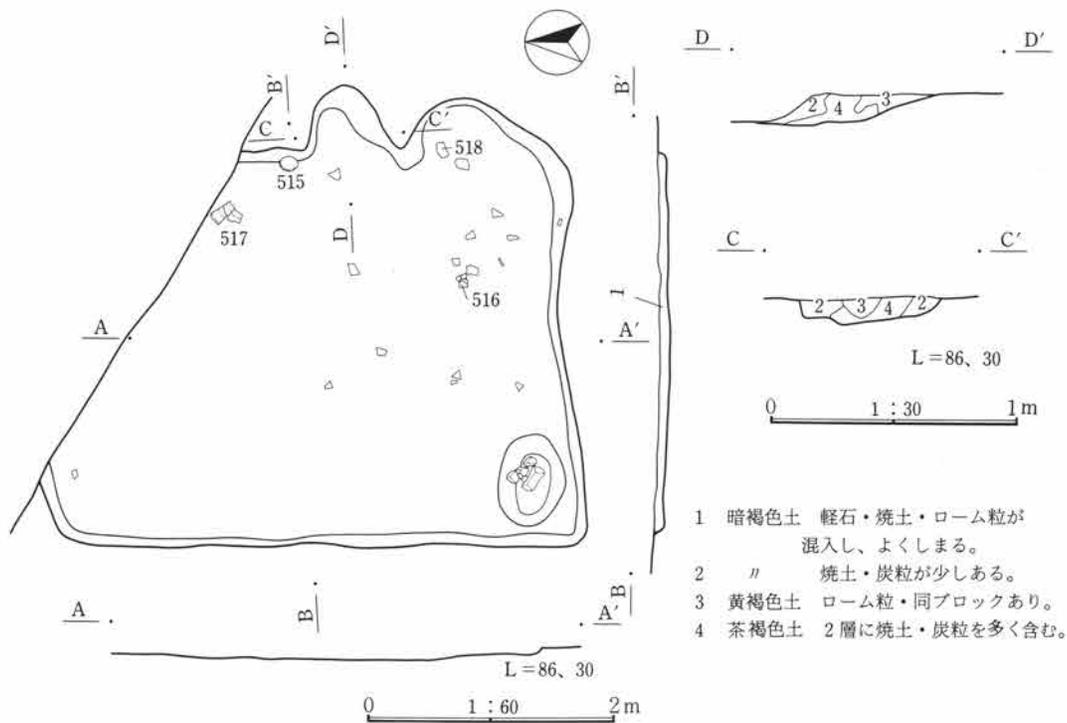
番 号	土 器 種 類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
507	甕 土 師 器	口-[19.6]、高 一(8.7)○ $\frac{1}{5}$	砂粒、輝石を含む。酸化、軟質。暗赤褐色	コの字口縁の甕。体部丸く、頸部、内傾ぎみにたちあがる。口縁部、短かく、外反する。端部外側に沈線あり。器肉厚手。体部ヘラケズリ調整	

508 5区48号 住	甕 土師器	口-[19.0]、高 -(9.9)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒、輝石を含む。 酸化、やや軟質。赤褐色	コの字状口縁の甕。体部丸く、頸部 内傾してたちあがり、口縁部外反す る。口頸部、丸い内稜あり。口縁端 部外側に沈線あり。体部、ヘラケズ リ調整。器肉、厚手	
509	碗 須恵器	口-[13.2]、底 -[5.8]、高一5. 1○ $\frac{1}{3}$	砂粒、石粒を含む。還元、 やや硬質。灰オリーブ色	体部内湾してひろがり、口縁部外反 する。端部丸味あり。底部回転糸切 り、貼付高台、断面、外行する長方 形、端部外側にめくれる	灰釉うつしの器 形
510	碗 須恵器	口-[15.0]、底 -[5.7]、高一5. 3○ $\frac{1}{3}$	砂粒、石粒を含む。還元、 やや軟質。灰白色	体部、内湾して大きくひらき、口縁 部外反する、大振りの碗。口縁端部 外側、やや肥厚する。底部回転糸切 り、貼付高台、高台断面、やや外行 する長方形。ロクロ右回転	灰釉うつしの器 形
511	碗 須恵器	底-5.0、高一(1. 3)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を多く含む。 還元、やや軟質。褐灰色	平底。小さく、体部大きくひらく。 底部回転糸切り。ロクロ右回転	
512	瓶 須恵器	胴-[26.0]、高 -(11.7)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を含む。還元、 やや軟質。にぶい橙色	体部丸く、頸部細くなる。長頸瓶の 胴部。ロクロナデ調整。器肉、均質	
513	甕 須恵器	○頸部～胴部にか けての小破片	砂粒、石粒を多く含む。 還元、硬質。灰色	体部丸く、頸部しまる、大型の甕。 体部、粘土積痕あり、タタキシメ後 内外、ナデ調整	
514	甕 須恵器	○胴部小破片	砂粒、黒色斑文あり。還 元、硬質。灰色	体部外面、平行タタキ目、内面無文 のアテ具使用の痕跡	

## 5区49号住居跡（第298図、第86表、図版124・125）

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。北辺側は調査区外に広がり、東辺側に48号住居跡、南辺に50号住居跡が相接近した位置にある。規模は、西辺で4.37m、南辺で3.16mを測り、方位は南辺でN-87°-Eである。平面形は、南北に長い方形を呈するが、東南隅は楕円形袋状に突出する。床面は、ローム上に第4層を踏み固めているが、床面下土壌が多く貼床が見られる。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の中央部で確認された。両袖部分は、地山を掘り残し、暗褐色土を用いて袖材としている。焼土、炭化物の量は少ない。貯蔵穴は、西南隅で長径71cm、短径52cm、床面からの深さ25cmの円形土壌が確認された。底面に、大小5個の円礫があるが石組みの状態ではない。遺物は、南辺寄りが多く、羽釜を始めとして土師器碗、須恵器甕、灰釉陶器皿、鉢がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴により平安時代（11世紀初頭）とする。

(新井)



第298図 5区49号住居跡遺構、遺物図

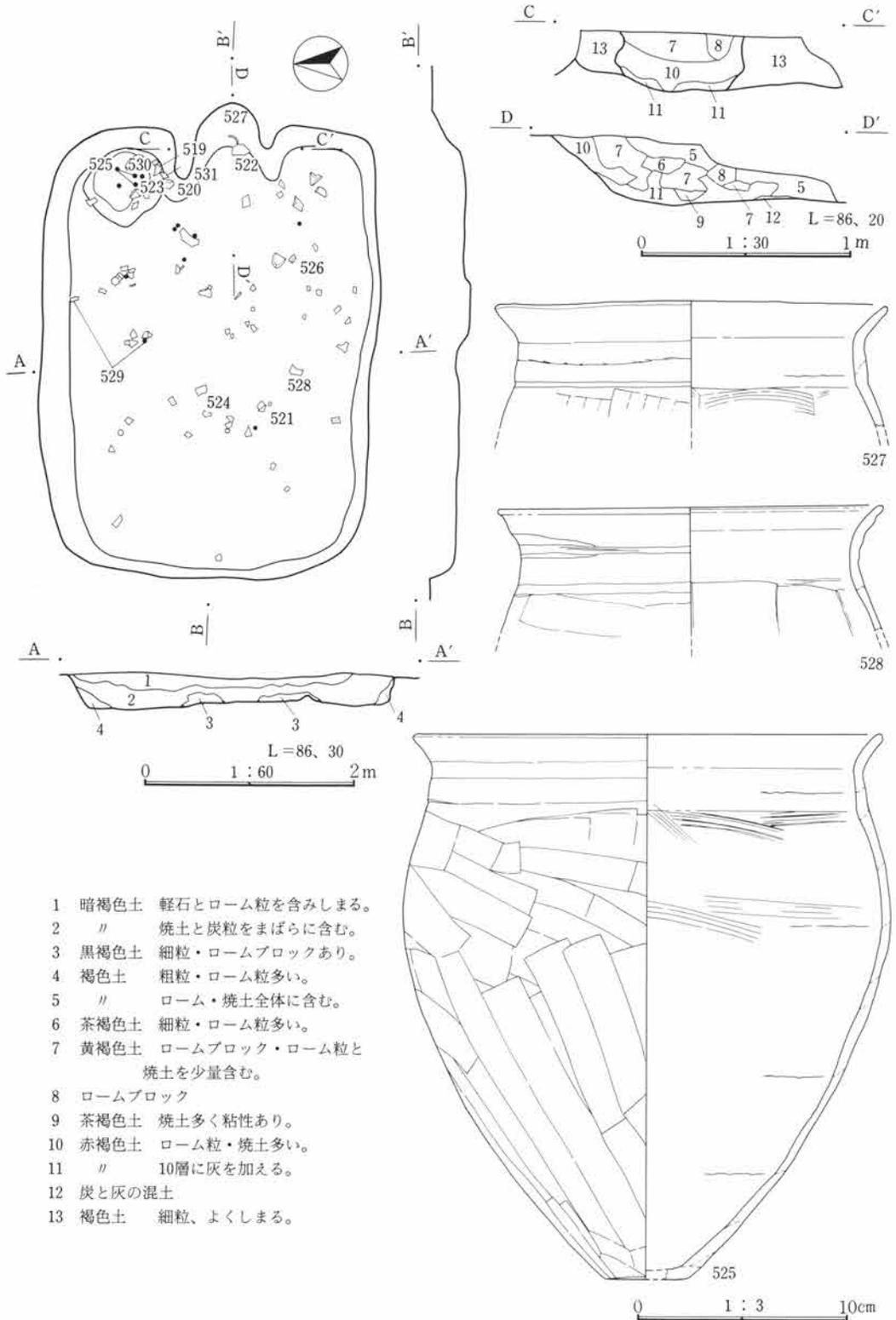
第 86 表 5 区49号住居跡出土遺物観察表

(第298図、図版 124)

番 号	土 器 種 類	法量 (口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
515	皿 灰釉陶器	口-11.8、底-6.1、高-2.4○完存	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰色、釉-オリーブ灰色	体下部に張りをもち、口縁部へひらく。口縁端部外側に丸く玉縁状を呈する。底部貼付高台、断面、外側に丸味のある三角形。釉、漬けがけ	重ね焼き痕あり
516	碗 須恵器	口-[14.6]、底-[7.4]、高台-[9.4]、高-7.3○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。灰黄色	体部直線的にひろがり、口縁部わずかに外反する。底部、貼付高台、断面、高足の外行する三角形、底部内側、粘土補修痕あり。ロクロナデ	
517	羽 釜	口-[19.2]、高-(15.2)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒、輝石を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	体部丸味を帯び、口縁部内傾する。口縁端部肥厚して、平坦面をもつ。鏝断面、端部の丸い三角形。体部ロクロナデ調整、体下部タテヘラナデ	
518	羽 釜	口-[20.2]、高-(5.6)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色	口縁部内傾し、端部、平坦面をもつ。鏝断面、端部が丸く上むきの三角形。ロクロナデ調整	
1034 参	碗 灰釉陶器	底-9.2、高-(2.8)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰白色、釉-オリーブ灰色	大振りの高台付碗。底部へ体下部、回転ヘラケズリ、貼付高台、断面、外側と端部の丸い三角形	堀方出土 重ね焼き痕あり
1035 参	碗 須恵器	口-[13.0]、高-(2.9)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい橙色	体下部で内湾してたちあがり、ややひらく、浅い、小型の碗。ロクロナデ調整。器肉、厚手。高台付か?	堀方出土

## 5 区50号住居跡 (第299・300図、第87表、図版126・127)

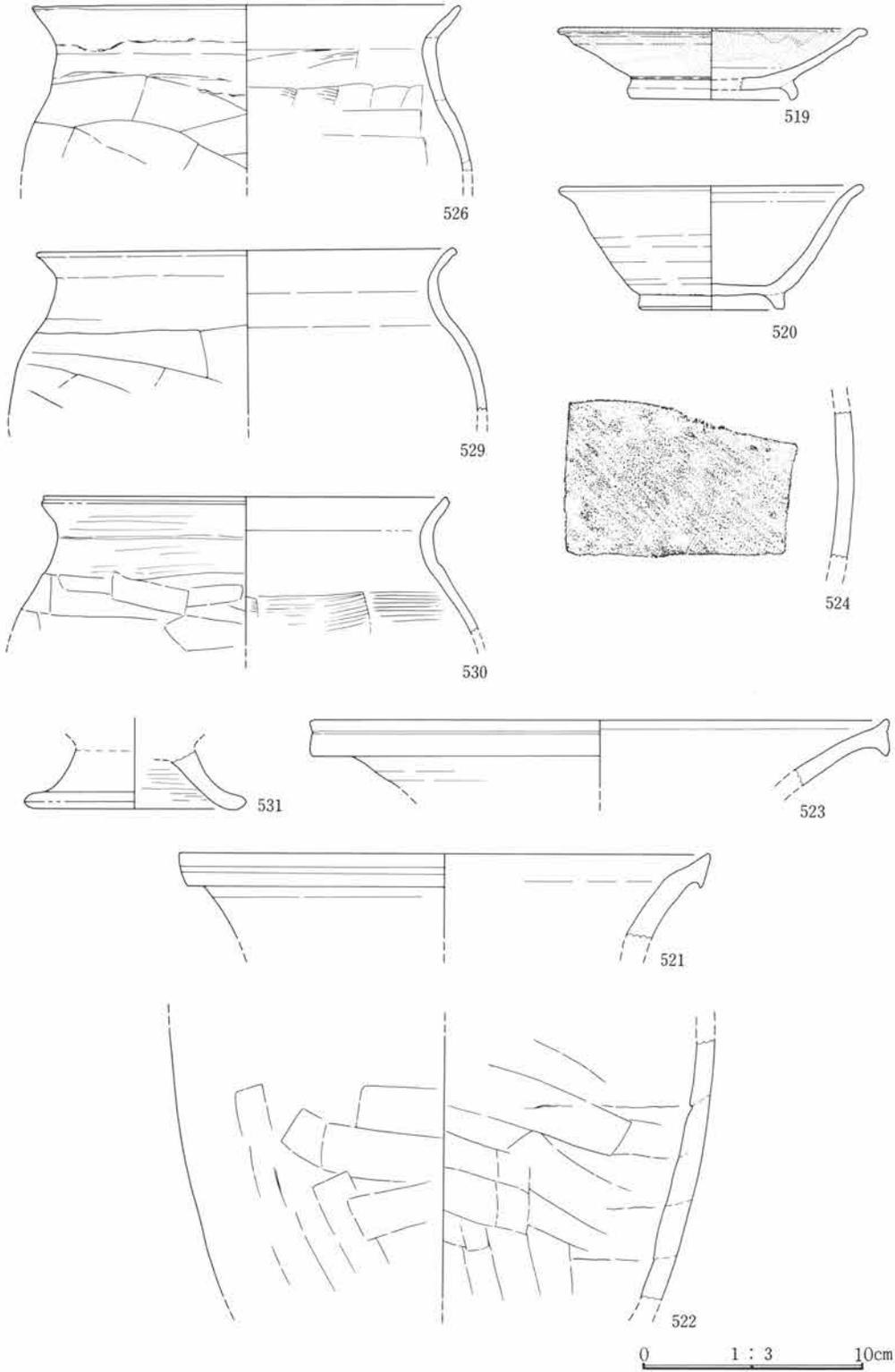
本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。周囲には、48号、49号、53号住居跡、48号、49号土壇があり、それらとは約2mの距離で位置する。規模は、東辺で3.20m、南辺で4.25mを測り、方位は南辺でE-3°-Sである。平面形は、東西が長い方形を呈し、各隅が丸い。床面は、暗褐色土を踏み固めており、壁際がわずかに低い。床面下には多数の土壇が重複して確認され、貼床をしている。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の中央部で確認された。壁外に煙道部がわずかに伸びる位で、両袖部分を始めとして、全体的に地山を掘り残している。袖には、褐色土を用い、袖石と思われるものが貯蔵穴側に崩落している。カマド内には、焼土、炭化物、灰の互層が見られ、周辺にも広く分布する。貯蔵穴は、東北隅で長径75cm、短径65cm、床面からの深さ34cmの円形土壇が確認された。遺物は、住居内全体に多く見られ、土師器甕、台付甕、坏、須恵器甕、碗、灰釉陶器皿がある。遺構の時期は、出土遺物により平安時代(9世紀後葉)とする。(新井)



- 1 暗褐色土 軽石とローム粒を含みしる。
- 2 // 焼土と炭粒をまばらに含む。
- 3 黒褐色土 細粒・ロームブロックあり。
- 4 褐色土 粗粒・ローム粒多い。
- 5 // ローム・焼土全体に含む。
- 6 茶褐色土 細粒・ローム粒多い。
- 7 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒と  
焼土を少量含む。
- 8 ロームブロック
- 9 茶褐色土 焼土多く粘性あり。
- 10 赤褐色土 ローム粒・焼土多い。
- 11 // 10層に灰を加える。
- 12 炭と灰の混土
- 13 褐色土 細粒、よくしまる。

第299図 5区50号住居跡遺構、遺物図

2 14地区の調査（平安時代）



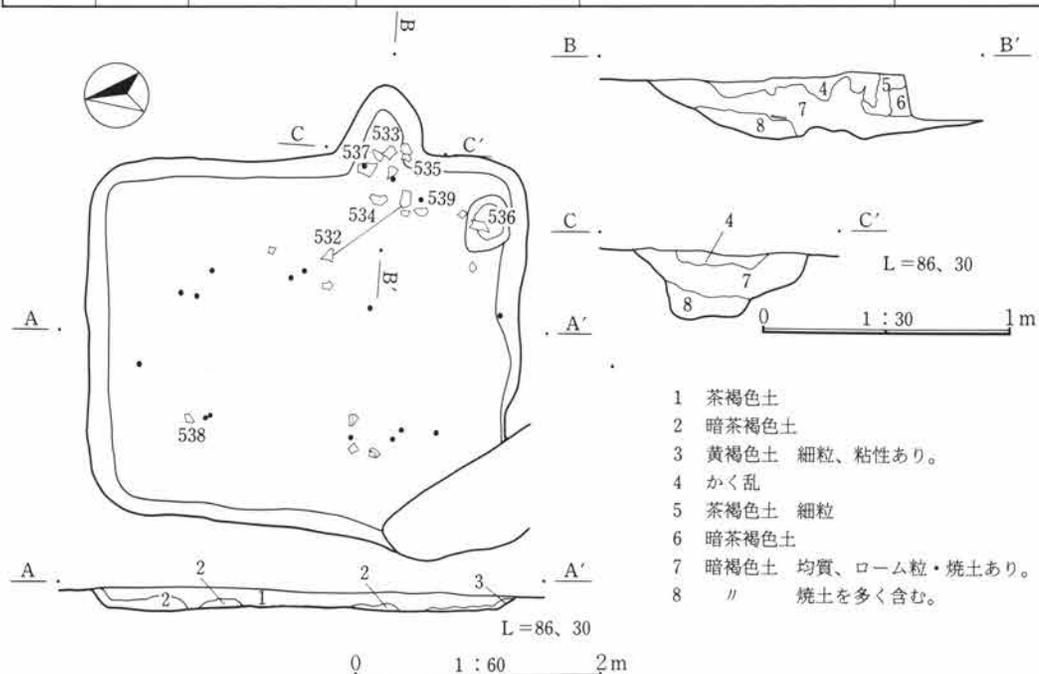
第300図 5区50号住居跡遺物図（2）

第 87 表 5区50号住居跡出土遺物観察表

(第299・300図、図版 126・127)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
519	皿 灰釉陶器	口-[14.0]、底-[7.7]、高-3.2 $\frac{1}{2}$	砂粒を含む、細密。還元、硬質。灰白色、釉-オリーブ灰色	体部、直線的にひらき、口縁部直下で、ゆるい稜をもって外反。口縁端部丸く外側にめくれて、玉縁状を呈す。底部～体下部回転ヘラケズリ調整。貼付高台、断面外側に丸く張り出す、くずれた三日月状。釉、刷けかけ	
520	碗 須恵器	口-[13.8]、底-[6.6]、高-5.6 $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒、輝石を含む。還元、やや硬質。灰色	体下部で張り出し、たちあがってひろがる。口縁部外反、端部、肥厚し丸味あり。底部、貼付高台、断面、外側直行する台形	
521	甕 須恵器	口-[24.0]、高-(3.8)○小片	砂粒を多く含む。還元、やや軟質。にぶい黄橙色	口縁部、外反し、端部、外縁帯をもつ。口縁部内側、わずかに凹む。ロクロナデ調整	
522	甕 須恵器	胴-[24.5]、高-(11.6)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。還元、やや硬質。にぶい黄橙色	体下部。内面、粘土積痕あり。内外ヘラナデ調整	
523	甕 須恵器	口-[26.0]、高-(3.0)○小片	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰色	口縁部大きく外反し、口縁端部、外縁帯をもつ。縁帯中央凹み、口縁端部内側、たちあがる。ロクロナデ調整	
524	甕 須恵器	○胴部破片のみ	砂粒、石粒を多く含む。還元、硬質。灰色	やや大きめの甕。体外面、平行タタキ目、ナデ。体内面、無文のアテ具痕あり	
525	甕 土師器	口-[22.2]、胴-[23.1]、底-[4.2]○ $\frac{1}{2}$	砂粒、輝石を多く含む。酸化、軟質。灰褐色	コの字状口縁の甕。底部小さく、体上部に最大径をもつ、卵形。頸部、内傾してたちあがり、口縁部、短かめ、外反する。口頸部、内稜あり。体上部、ヨコ、下部タテヘラケズリ、内面、ヘラナデ調整。器肉、厚手	貯蔵穴出土
526	甕 土師器	口-[19.4]、高-(7.5)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、輝石を多く含む。酸化、軟質。褐色	コの字状口縁の甕。体部丸味をもち口縁部、強く外反するが、ゆがみがあり、粗雑な作り。体部ヘラケズリ	
527	甕 土師器	口-[18.6]、高-(5.9)○ $\frac{1}{2}$	砂粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色	コの字状口縁の甕。頸部のしまりも口縁部の外反もゆるい。口縁端部外側、小さな稜をもつ。器肉、厚手	
528	甕 土師器	口-[18.3]、高-(5.8)○口～頸 $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒、輝石を含む。酸化、軟質。黒色～褐色	コの字状口縁の甕。粗雑な作り、口頸部、ゆるく外反するのみ、2本のナデ線で区切る。口縁端部外稜あり。体部ヘラケズリ調整。器肉、厚手	

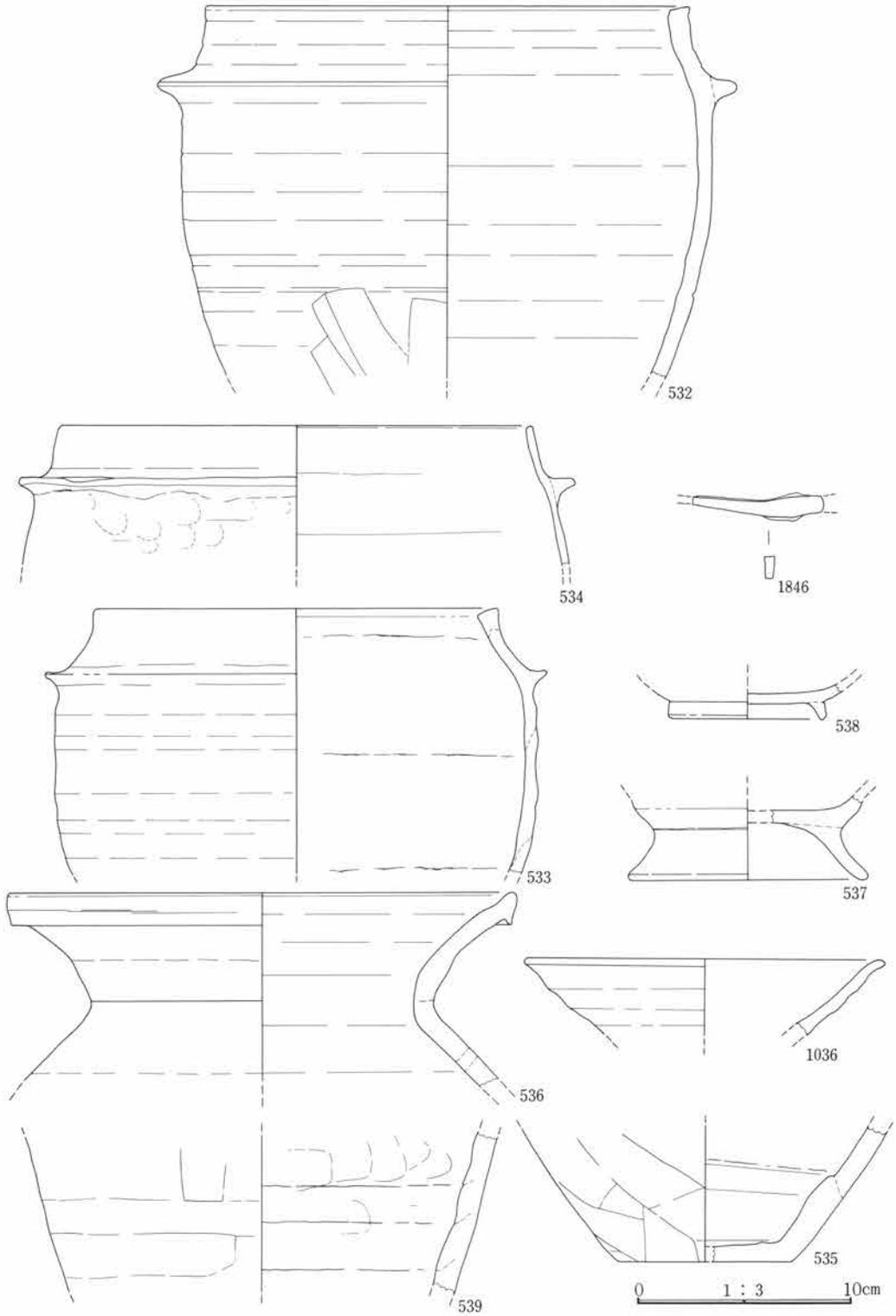
529 5区50号 住	甕 土師器	口-[19.0]、高 -(7.2)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、軟質。橙色	コの字状口縁の甕。体部、丸く、頸 部、ゆるく内傾し、口縁部強く外反 する。口縁端部丸く外側にめくれる 体部ヘラケズリ調整。器肉、厚手	内外面、スス付 着
530	甕 土師器	口-[18.2]、高 -(6.0)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒、輝石を含む。 酸化、軟質。赤褐色	コの字状口縁の甕。体部丸く、頸部 のしまり弱い。口縁部、短かく、外 反し、端部、外稜をもち、沈線めぐ る。体部ヘラケズリ調整。器肉厚手	
531	甕 土師器	脚裾-[10.0]○脚 部のみ	砂粒、輝石を含む。酸化、 軟質。黒褐色	台付甕。脚部、ハの字形にひらき、 端部、丸く、外側にめくれる。ヨコ ナデ調整	



第301図 5区51号住居跡遺構図

## 5区51号住居跡 (第301・302図、第88表、図版127・128)

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。西南隅に近世の土壇状のものが重複している。規模は、東辺3.54m、北辺2.85mを測り、方位は北辺でE-7°-Sである。平面形は、やや台形に近い方形を呈する。床面は、暗褐色土を踏み固めているが、カマド前付近を除いてやや軟弱である。柱穴、周溝は確認されなかったが、壁際が周溝様に軟弱でわずかにくぼむ状態を示す。カマドは、東辺の少し南寄り確認された。地山を壁外で半円状に掘り込み、暗褐色土を用いて袖としているが、焼土等を少量見る程度で遺存状態は悪い。貯蔵穴は、東南隅で長径41cm、短径33cm、床面からの深さ20cmの円形土壇が確認された。遺物は、住居内全体に多く見られ、カマド及び貯蔵穴にも多い。羽釜、甑を始めとして、埴、須恵器甕、灰釉陶器皿がある。遺構の時期として、出土遺物から平安時代(10世紀後葉)とする。(女屋)

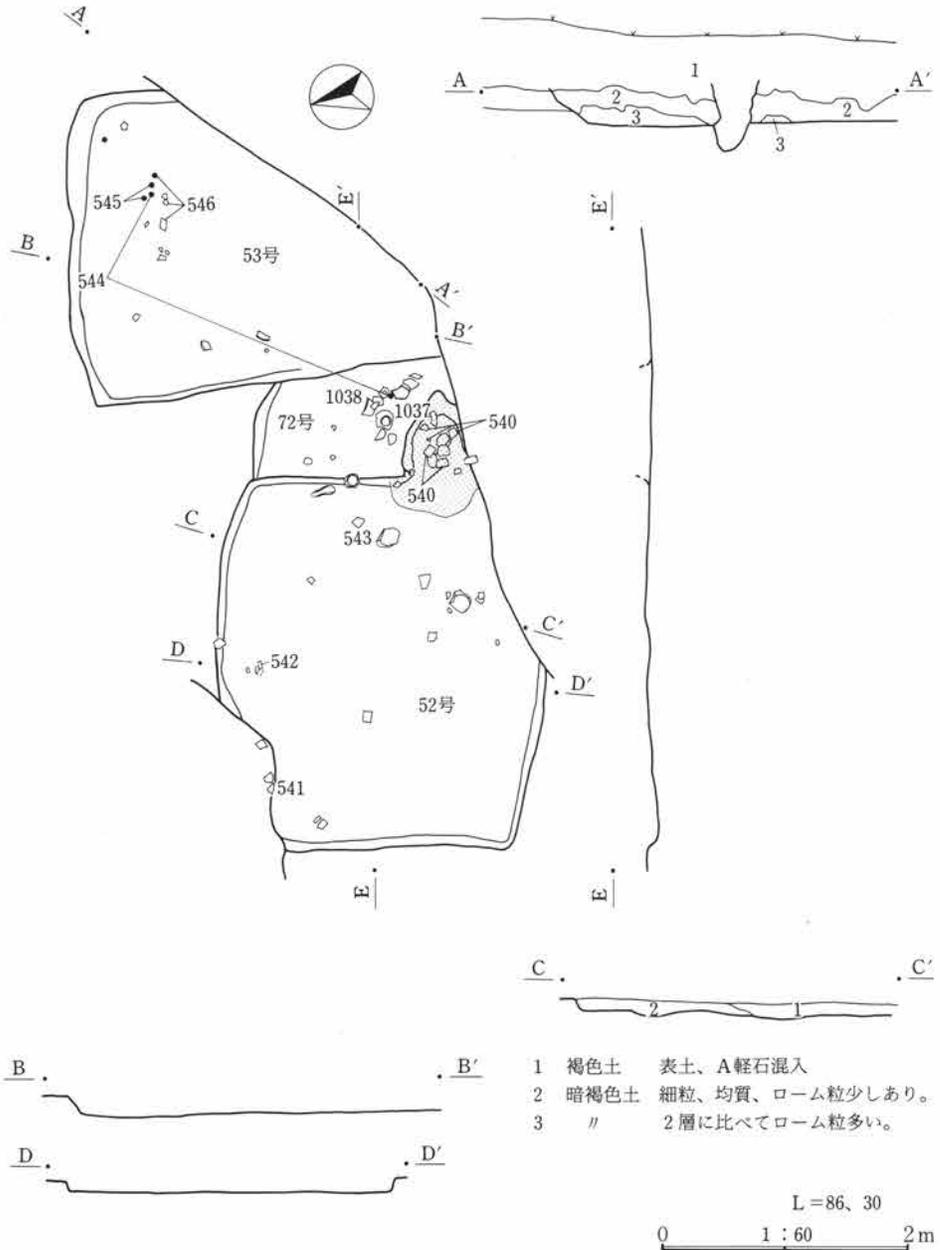


第302図 5区51号住居跡遺物図

第88表 5区51号住居跡出土遺物観察表

(第302図、図版 127)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高)遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
532	羽釜	口-[22.6]、高一(17.0)○ $\frac{1}{5}$	砂粒、石粒、輝石を含む。酸化、やや硬質。赤褐色	体部丸味をもち、口縁、たちあがる。口縁端部平坦面あり。ロクロナデ調整。体下部タテヘラケズリ調整	
533	羽釜	口-[18.8]、高一(12.0)○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒、輝石を含む。酸化、やや硬質。橙色～褐色	体部丸く、口縁部内傾してたちあがる。口縁端部平坦、鈔断面、端部のとがる三角形。体部ロクロナデ調整	
534	羽釜	口-[22.0]、高一(6.4)○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒、輝石を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	口縁部内傾する。器内、ごく薄手。体部、指ナデ、鈔、端部丸く、ゆがみあり。成整形、粗。ロクロ不使用と思われる	
535	羽釜	底-[8.0]、高一(6.1)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい褐色	体部、粘土積痕あり、ロクロナデ調整後、体下部、ヘラケズリ、ヘラナデ調整	
536	甕須恵器	口-[23.6]、頸径-[16.0]、高一(9.0)○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。橙色	頸部、たちあがりぎみにひらき、口縁部、大きく外反する甕。頸部、内稜をもつ。口縁端部、肥厚して外縁帯をもつ。ロクロナデ調整	甕の可能性、大
537	埴須恵器	底-[8.7]、高台径-[11.2]○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや軟質。にぶい黄橙色	大振りの高足高台付埴。貼付高台、断面、ハの字形にひらき、端部丸味あり。ロクロナデ調整	
538	皿灰釉陶器	底-[7.4]、高一(1.3)○ $\frac{1}{6}$	砂粒を含むが細密。還元、硬質。灰白色、釉-灰オリーブ色	体部大きくひらく。底部、貼付高台、断面、外側端部丸い稜をもち、内湾ぎみの台形。内底面、釉がかりあり	
539	甕須恵器	胴-[19.9]、高一(7.3)○小片	白色砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰色	甕。下胴部、体内面、粘土積痕あり。内外ヨコナデ調整	
1036 参	埴須恵器	口-[16.8]、高一(3.5)○ $\frac{1}{5}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい褐色	体部、直線的にひろがり、口縁部外反する、大振りの埴。口縁端部丸味をもつ。ロクロナデ調整	堀方出土
1846	鉄製刀子	長-(4.0)、幅-0.6、厚-0.3、刀子、中子、残片			



第303図 5区52号、53号、72号住居跡遺構図

5区52号、53号、72号住居跡 (第303・304図、第89表、図版127・128)

この2軒の住居跡は、基本土層の第4層で重複関係をもって確認されたが、ともに南側は調査区外のため未調査である。

52号住居跡は、53号とは約1mの距離をおいて位置し、西北隅で8号井戸と重複する。規模は、北辺で推定2.85m、西辺で2.27m以上あり、方位は北辺でE-7°-Sである。平面形は東西に長い方形と推定される。残存する壁は緩傾斜で、高さ11cmを測る。床面は第4層を踏み固め、平坦

だがやや軟弱である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは東辺で焼土と炭化物を伴って確認されたが、遺存状態は悪い。堀方は、壁外に突出して円形状の土壇があり、袖石と推定される河原石が住居内に散在していた。遺物は、カマド内外と北辺で少量見られ、羽釜、土師器小型甕、埴がある。遺構の時期は、出土遺物により平安時代(10世紀後葉)とされる。

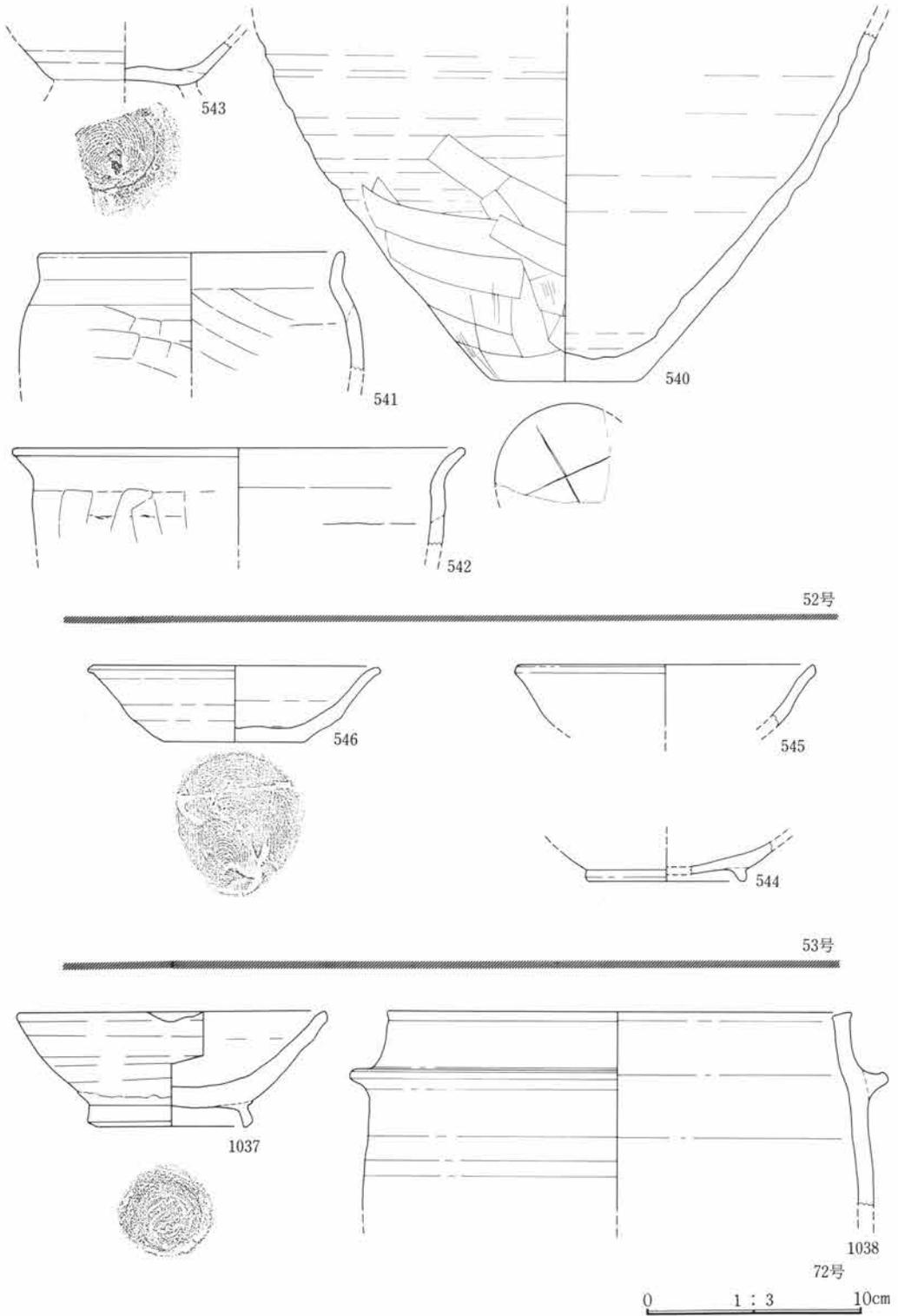
53号は、北辺2.63m、西辺2.95m以上あり、方位は北辺でE-5°-Sである。平面形は南北に長い方形と推定される。壁は、東壁断面によると高さ30cmを測る。床面は第4層を踏み固め、平坦だがやや軟弱である。柱穴、周溝は確認されず、カマド及び貯蔵穴は調査区外に推定される。遺物は、土師器坏、埴、灰釉陶器埴があるが少量である。遺構の時期は、遺物の特徴により平安時代(10世紀後葉)である。尚、52号と53号との間には住居跡と推定される遺構があり、72号住とした。重複する中では最も古く、52号、53号、8号井戸の新旧である。(小安)

第 89 表 5区52号、53号、72号住居跡出土遺物観察表

(第304図、図版 127)

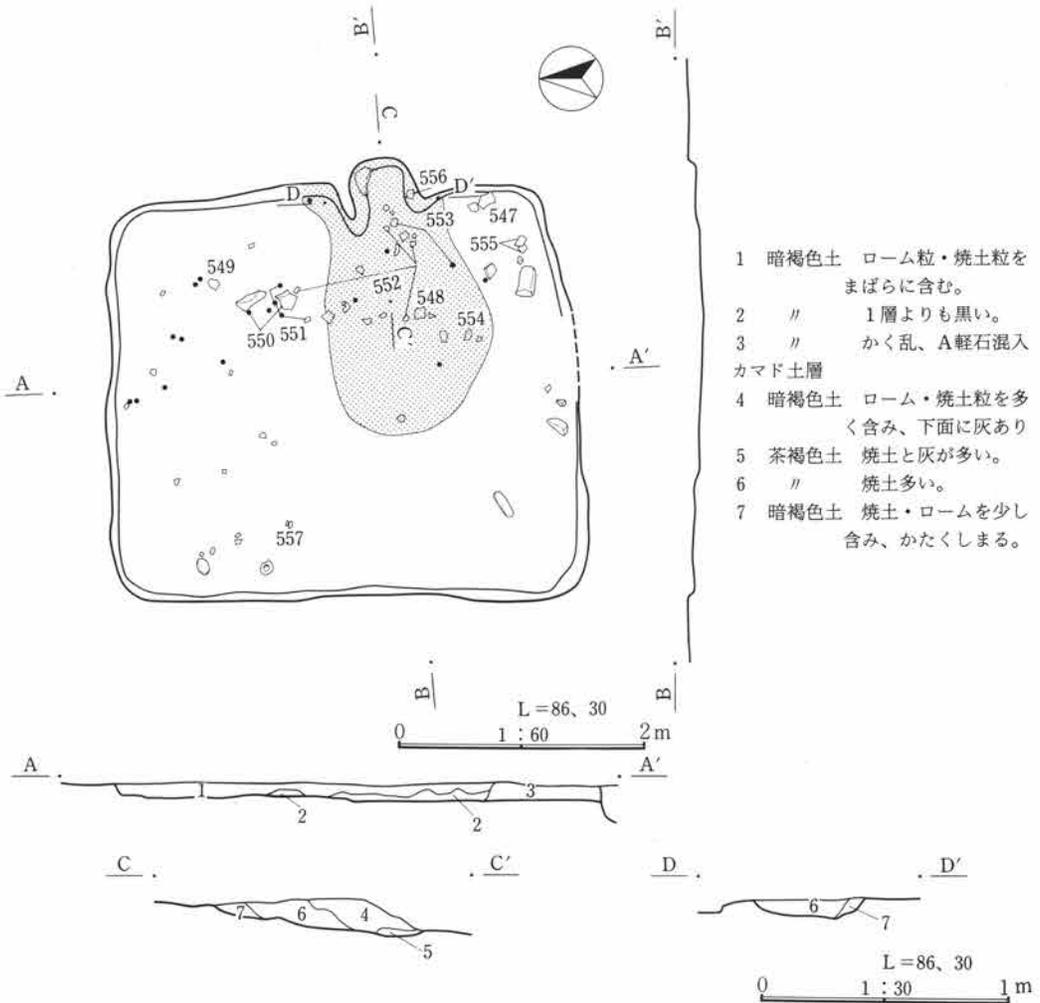
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
540 5区52号住	羽釜	底-[7.0]、高一(17.1)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、白色石粒多く含む、粗。還元、やや硬質。灰色	体部、直線的にひろがって、体中部でやや内湾する。体部、粘土積痕あり。ロクロナデ調整。底部～体下部ヘラケズリ調整	内外、スス、炭化物、付着 底部外面、「十」字のヘラ記号あり
541	甕 土師器	口-[14.0]、高一(5.4)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。褐色	体部丸く、口縁部短かくたちあがる小型甕。口縁端部、丸味あり。体部ヘラケズリ、内面ヘラケズリ調整	
542	甕 土師器	口-[21.0]、高一(4.5)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。褐灰色	体部、丸味をもたず、口縁部短かく強い外反。端部丸味あり。体部ヘラナデ、小型甕の類と思われる	
543	埴 須恵器	底-[6.6]、高一(1.8)○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。橙色	高台部を欠くが、高台付埴。底部回転糸切り、ロクロ右回転。器肉薄手	
544 5区53号住	埴 灰釉陶器	底-[7.4]、高一(1.4)○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含むが、細密。還元、硬質。灰白色、釉-オリブ灰色	底部、回転ヘラケズリ調整。貼付高台、断面、端部の丸い台形	
545	埴 須恵器	口-[14.0]、高一(2.5)○ $\frac{1}{6}$	砂粒を含む。還元、やや軟質。褐灰色～灰色	体部丸味をもってひろがり、口縁部外反する。口縁端部、外側に丸い稜をもつ。ロクロナデ調整	
546	埴 須恵器	口-[13.6]、底-6.4、高一3.5○ $\frac{1}{3}$	砂粒、石粒を多く含む。還元、やや軟質。灰黄色○ $\frac{1}{3}$	平底。体部やや下部で張りをもってひろがり、口縁部外反する。口縁端部丸味あり。底部回転糸切り、ロクロ右回転	
1037 5区72号住	埴 須恵器	口-14.4、底-7.7、高一5.3○ $\frac{1}{6}$	砂粒を含む。還元、やや硬質。灰黄色	体部、直線的にひろがり、口縁端部丸味あり。底部、回転糸切り、貼付高台、断面外行する長方形	体部、粘土積痕あり 床下土壇出土

第6章 検出された遺構と遺物



第304図 5区52号、53号、72号住居跡遺物図

1038 5区72号 住	羽 釜	口—[21.5]、高—(9.0)○ $\frac{1}{10}$	砂粒、白色石粒多く含む。還元、やや硬質。灰色	口縁部、やや内傾して、たちあがる。口縁端部、平坦面をもち、わずかに内斜。鏝断面、端部の丸い土むきの台形。体部ロクロナデ調整	床下土壇出土
--------------------	-----	----------------------------------	------------------------	---------------------------------------------------------------	--------



第305図 5区54号住居跡遺構図

5区54号住居跡（第305・306図、第90表、図版129・130）

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。南辺側に54、56号土壇がある。規模は、西辺で3.85m、北辺3.30mを測り、方位は北辺でN-90°-Eである。平面形は、南北に長い方形を呈する。床面は、ロームを踏み固めているが、一部は貼床である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の少し南寄り確認された。左袖は、住居内に痕跡を残し、左壁には火熱を受けてもろくなった礫が貼付してある。焼土、炭化物、灰の量は多く、住居内中央部にまで広く分布する。貯蔵穴は、堀方調査でも確認されず、当初から設けられなかったものか。遺物は、住居内

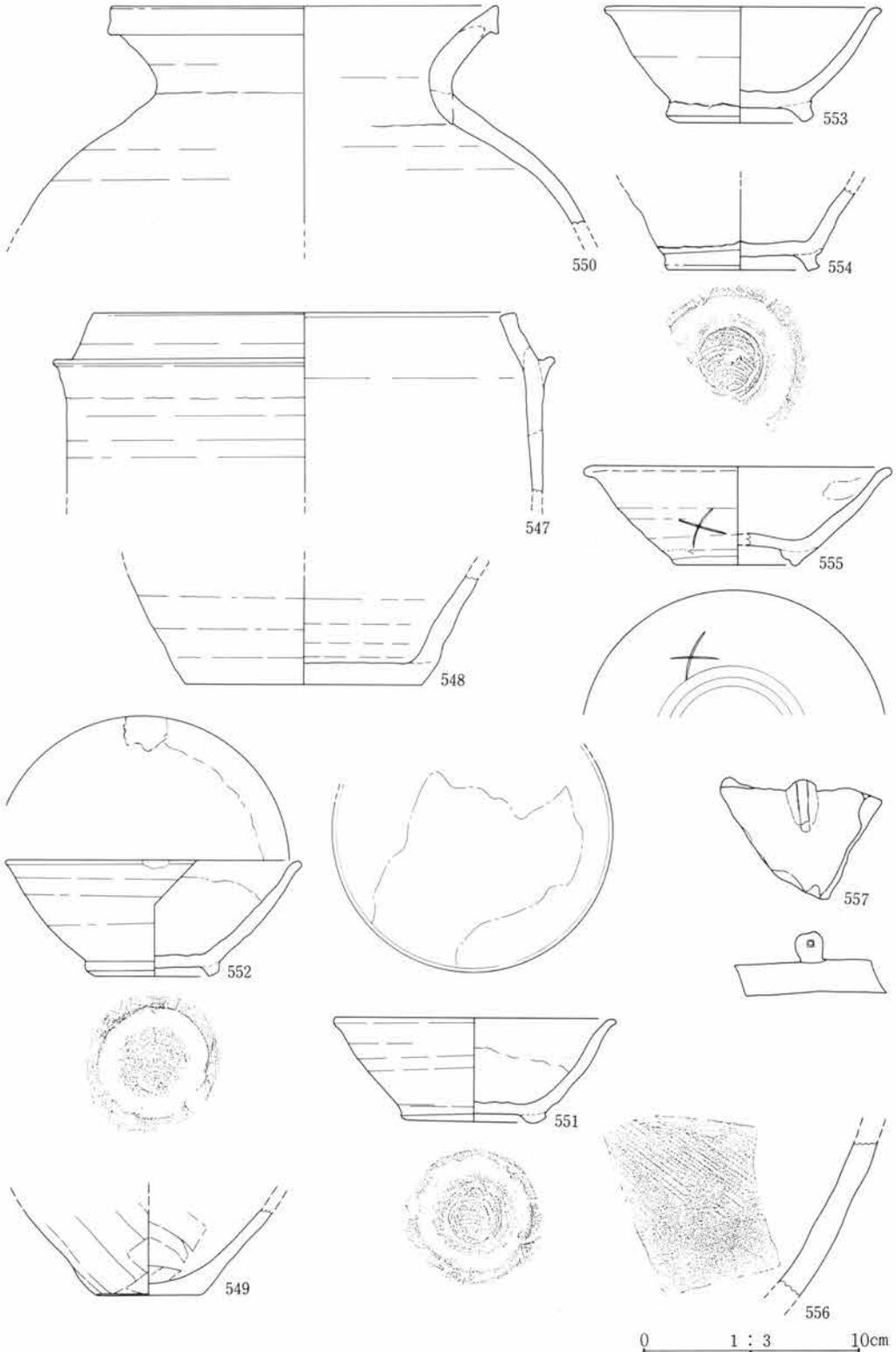
第6章 検出された遺構と遺物

全体に多く見られ、土師器甕、羽釜、埴、須恵器甕、灰釉陶器、鉄製品がある。東辺寄りに、大小の礫が見られるが、カマド袖石の流出したものか。遺構の時期は、出土遺物から平安時代（10世紀前葉）とする。(小安)

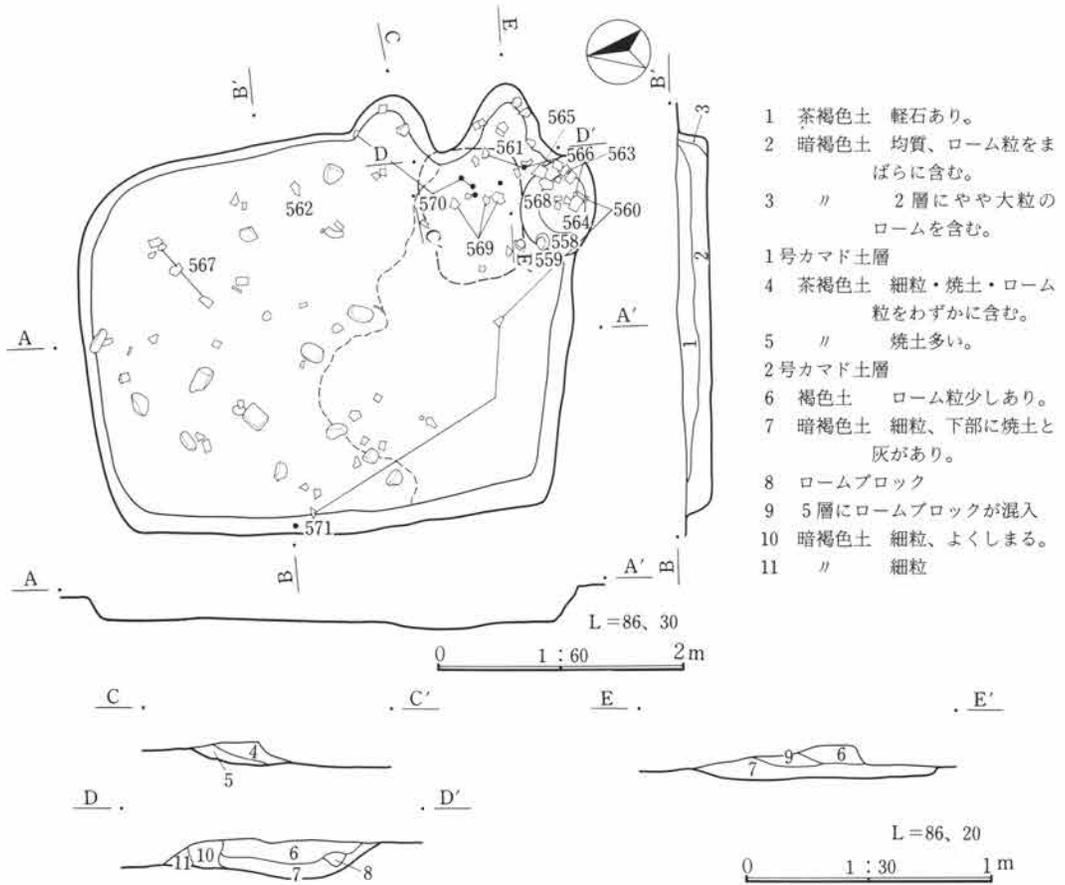
第90表 5区54号住居跡出土遺物観察表

(第306図、図版 129)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
547	羽釜	口-[19.4]、高-[8.2]○ $\frac{1}{6}$	白色砂粒を多く含む。還元、硬質。暗赤灰色	口縁部、短かく内傾する。口縁端部平坦面あり。わずかに内斜する。鋸断面、上向きの三角形	
548	甕 須恵器	底-[11.0]、高-[5.0]○ $\frac{1}{12}$	黒色、褐色砂粒を多く含む。還元、やや硬質。灰オリーブ色	平底。体部直線的にひろく。粘土積後、内外、回転ナデ調整	
549	甕 土師器	底-4.8×3.8、高-[3.8]○底部のみ	砂粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色	平底。底部〜体部、ヘラケズリ調整。器肉、やや厚手	
550	甕 須恵器	口-[18.0]、頸-[13.6]、高-[10.0]○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を多く含む。還元、やや硬質。灰色	体上部で丸く張りをもち、頸部しまつて、口縁部外反する。口縁端部肥厚して外縁帯をもつ。粘土積後、ロクロナデ調整	
551	埴 須恵器	口-13.0、底-5.9、高-4.8○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや軟質。橙色	体部ゆるやかに内湾してひろがり、口縁部わずかに外反。回転糸切り、貼付高台、断面、低い台形	内面、一面にスス、炭化物付着。灯明皿
552	埴 須恵器	口-13.6、底-6.1、高-5.3○ $\frac{1}{6}$	砂粒、褐色石粒を含む。酸化、やや軟質。橙色	体部、ゆるやかに内湾し、口縁部わずかに外反する。底部〜体部のつくり、内部で区切れて粗雑。底部回転糸切り、貼付高台、断面、低い台形	口縁部一部分と内面リング状にスス、炭化物付着。灯明皿
553	埴 須恵器	口-[12.7]、底-6.8、高-5.3○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒、輝石を含む。粗。酸化、やや硬質。橙色	体部、ゆるやかに内湾し、口縁部わずかに外反する。口縁端部丸味あり。底部回転糸切り、貼付高台、断面外行する台形。粗雑な作り	
554	埴 須恵器	底-[7.1]、高-[3.5]○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや硬質。明赤褐色	体部直行してひろく。底部回転糸切り、貼付高台、断面、外行する台形。ロクロ右回転	
555	埴 須恵器	口-[14.2]、底-[5.6]、高-4.5○ $\frac{1}{6}$	砂粒・石粒を多く含む。還元、やや軟質。灰色	体部内湾してひろがり、口縁部外反、端部丸味あり。底部回転糸切り、貼付高台、断面、低い台形	内底面、赤色顔料付着。体外面ヘラ記号「X」
556	甕 須恵器	○小片	白色砂粒多く含む。還元、硬質。灰色	体外面、平行タタキ目、内面、無文のアテ具痕残る。外面、ヘラナデ	
557	鉄製品 須恵器甕	長-(2.2)、幅-0.2、厚-0.2、断面、四角形、中空、釘か？ 須恵器、甕の胴部片に付着。白色砂粒を多く含む。還元、やや硬質。灰色。内外、	ヨコナデ調整		



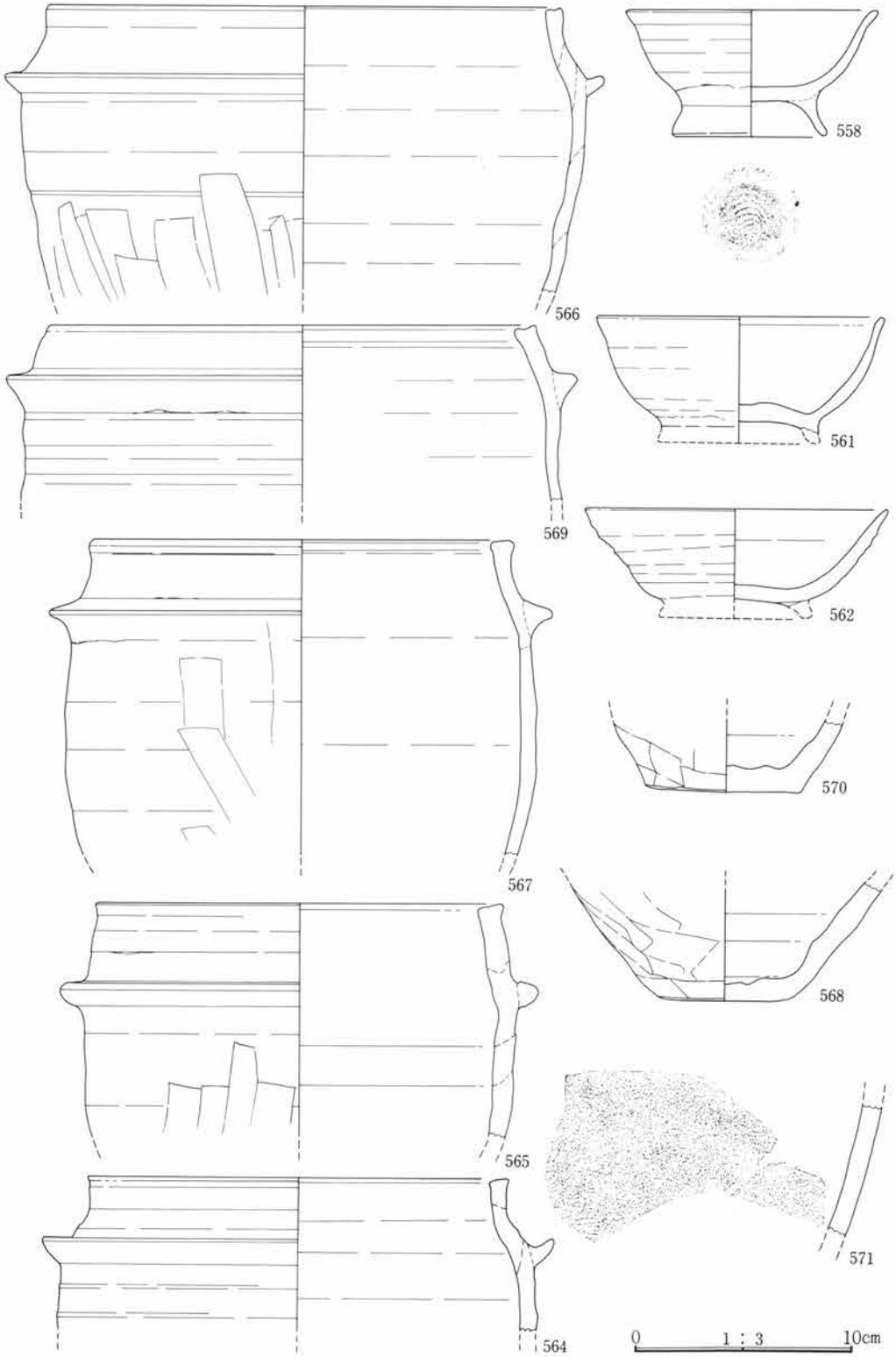
第306図 5区54号住居跡遺物図



第307図 5区55号住居跡遺構図

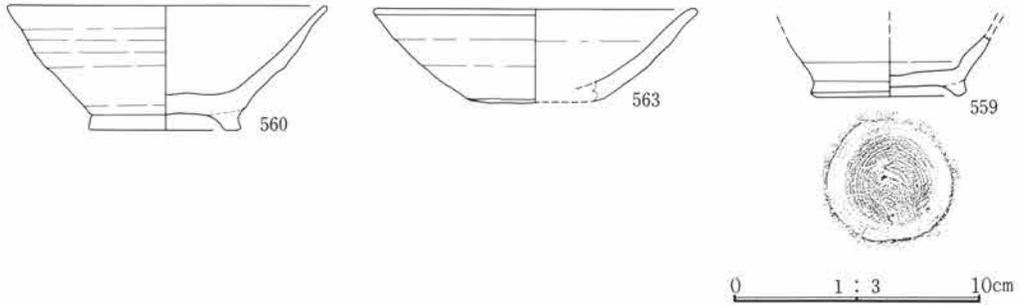
5区55号住居跡（第307～309図、第91表、図版129・130）

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。56号住居跡とは、北辺側で約20cmの位置にある。規模は、東辺で3.95m、北辺で3.15mを測り、方位は北辺でE-1°-Sである。平面形は、南北に長い方形を呈する。床面は、東辺のカマド付近を境界にして北半分がロームを踏み固めて堅緻、南は、暗褐色土を用いて貼床をしており、やや軟弱である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺で2基確認され、中央部寄りのものが古い。共に角閃石安山岩の袖石を持ち、東南隅寄りのカマドには、砂岩質8面体ケズリの支石が据えられている。貯蔵穴は、カマドに対応して、東南隅側で、2基が確認された。古いものは、長径1.03m、短径0.82m、床面よりの深さ25cmの不整形方形を呈し、多量の遺物を伴う。新しいものは、長径90cm、短径65cm、床面からの深さ18cmの円形土壇で、壁外に少し突出する。遺物は、住居内全体に多く見られ、北半分では大小の礫が目立つ。羽釜を始めとして、土師器碗、坏、須恵器甕がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代（11世紀中葉）とする。本住居跡は、カマド、貯蔵穴のあり方から、南辺側に拡張された重複住居である。（女屋）



第308図 5区55号住居跡遺物図(1)

第6章 検出された遺構と遺物



第309図 5区55号住居跡遺物図(2)

第91表 5区55号住居跡出土遺物観察表

(第308・309図、図版 129)

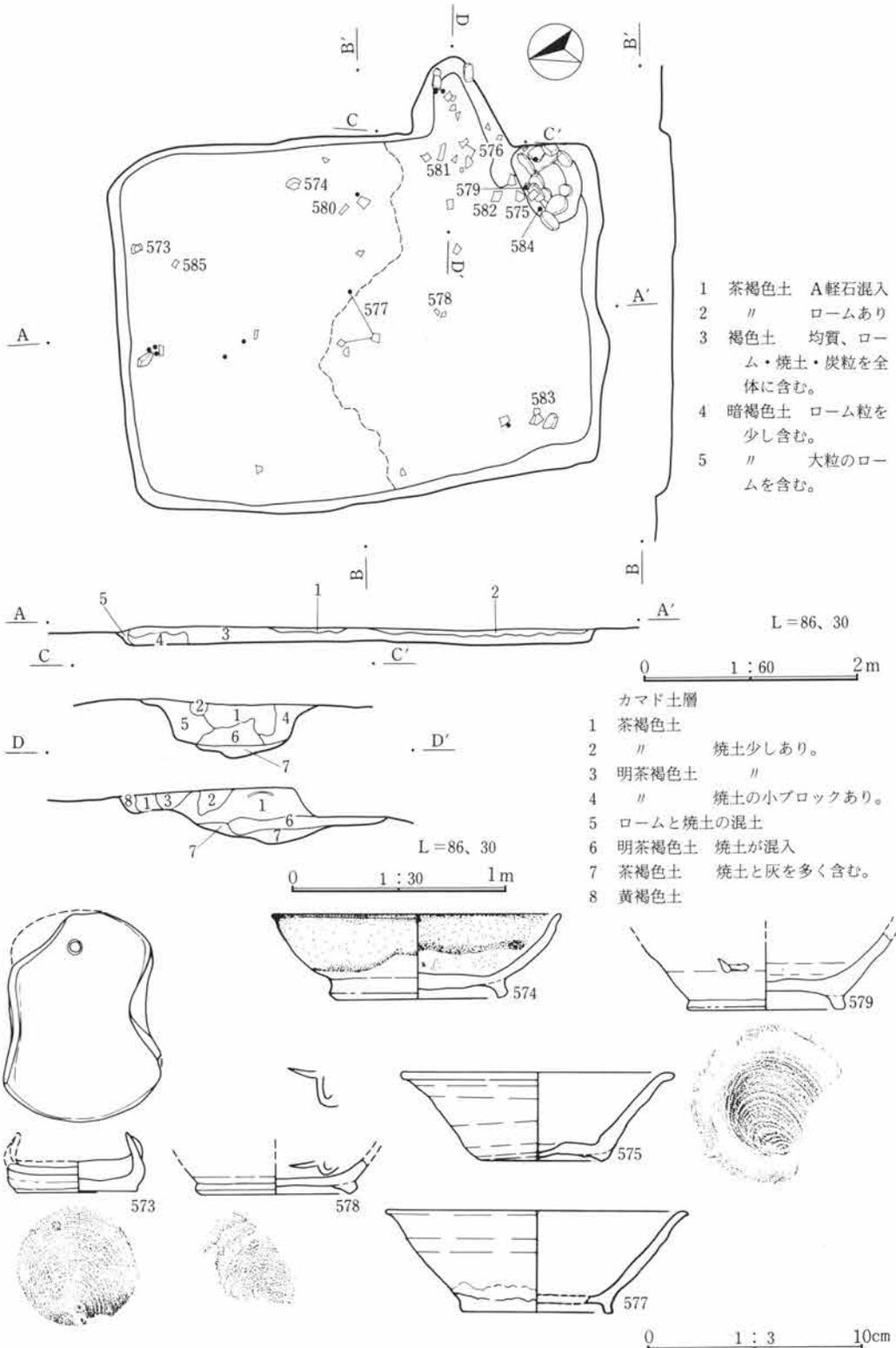
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
558	埴須恵器	口-11.6、底-6.3、高台-7.0○完存	砂粒、白色、褐色石粒多く含む。酸化、やや硬質。橙色	体部内湾してひろがり、口縁部わずかに外反、端部丸味あり。底部回転糸切り、貼付高台、断面、高足、八の字にひろく台形。ロクロ右回転	
559	埴須恵器	底-6.2、高一(2.3)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、白色石粒を含む。酸化、やや軟質。灰褐色	底部～体部の区切りを明確にもつ。底部、回転糸切り、貼付高台、断面外行する四角形。ロクロ右回転	底部円盤別作り
560	埴須恵器	口-[12.9]、底-[6.1]、高一5.0○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含むが、細。還元、軟質。灰白色	体部、直線的にひろがり、中位で稜をもち、口縁部わずかに外反。口縁端部、薄手の仕上がり。底部、貼付高台、外行する台形	
561	埴須恵器	口-[13.2]、底-[7.2]、高一(5.4)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。橙色	体下部で丸く内湾して、わずかにひろがる。口縁端部内側に肥厚して、丸い稜をもつ。底部回転糸切り、貼付高台	
562	埴須恵器	口-[14.0]、底-[6.8]、高一4.1○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、軟質。灰白色	体下部で丸く内湾して、ひろがる。口縁端部、薄手。底部、回転糸切り、貼付高台、身の浅い、高台付埴	
563	坏	口-[13.5]、底-[5.6]○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。橙色	体部、やわらかく内湾してひろがり口縁部わずかに外反。底部、平底、回転糸切り	
564	羽釜	口-[19.4]、高一(7.0)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。赤褐色	体部、丸く、口縁部直下でくびれて、口縁部たちあがる。口縁端部平坦面あり。鐳断面、上向きの三角形。体部、ロクロナデ調整	
565	羽釜	口-[18.5]、高一(10.8)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、白色石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色	体部、丸味少ない。口縁部わずかに内傾する。口縁端部平坦面をもつ。鐳断面、端部の丸い三角形。体部ロクロナデ、体下部ヘラケズリ調整	

566 5区55号 住	羽 釜	口-[23.6]、高 -(13.0)○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、やや硬質。にぶい 黄橙色	体部、丸味をもち、口縁部、内傾し てたちあがる。口縁端部、平坦面を もつが、中央に凹線めぐる。鏝断面、 端部の丸い上向きの三角形。体部ロ クロナデ、体下部タテヘラケズリ調 整
567	羽 釜	口-[19.2]、高 -(14.4)○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を多く含む。 還元、やや硬質。灰色	身の細目の羽釜。体部内湾し、口縁 部、内傾して、たちあがる。口縁端 部、肥厚し、内外端とも丸く張り出 す平坦面をもつ。鏝断面、端部下向 きの台形、体部ロクロナデ、体下部 タテヘラケズリ調整
568	羽 釜	底-[6.0]、高 -(5.3)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、やや軟質。にぶい 黄橙色	羽釜。体下部～底部、ロクロナデ、 ヘラケズリ調整
569	羽 釜	口-[22.4]、高 -(8.0)○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、やや硬質。淡黄色	口縁部、短かく、内傾する。口縁端 部、やや肥厚して、中央に、凹線め ぐる。鏝断面、端部の丸い三角形。 体部ロクロナデ調整
570	羽 釜	底-[7.2]、高 -(4.7)○小片	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、軟質。にぶい黄橙 色	底部、ヘラケズリ、体下部ヘラケズ リ調整、内面、ロクロナデ調整
571	甕 須恵器	○小片	白色砂粒を多く含む。還 元、硬質。灰色	外面、平行タタキ目、ナデ、内面、 無文のアテ具痕残る。大型甕胴部片

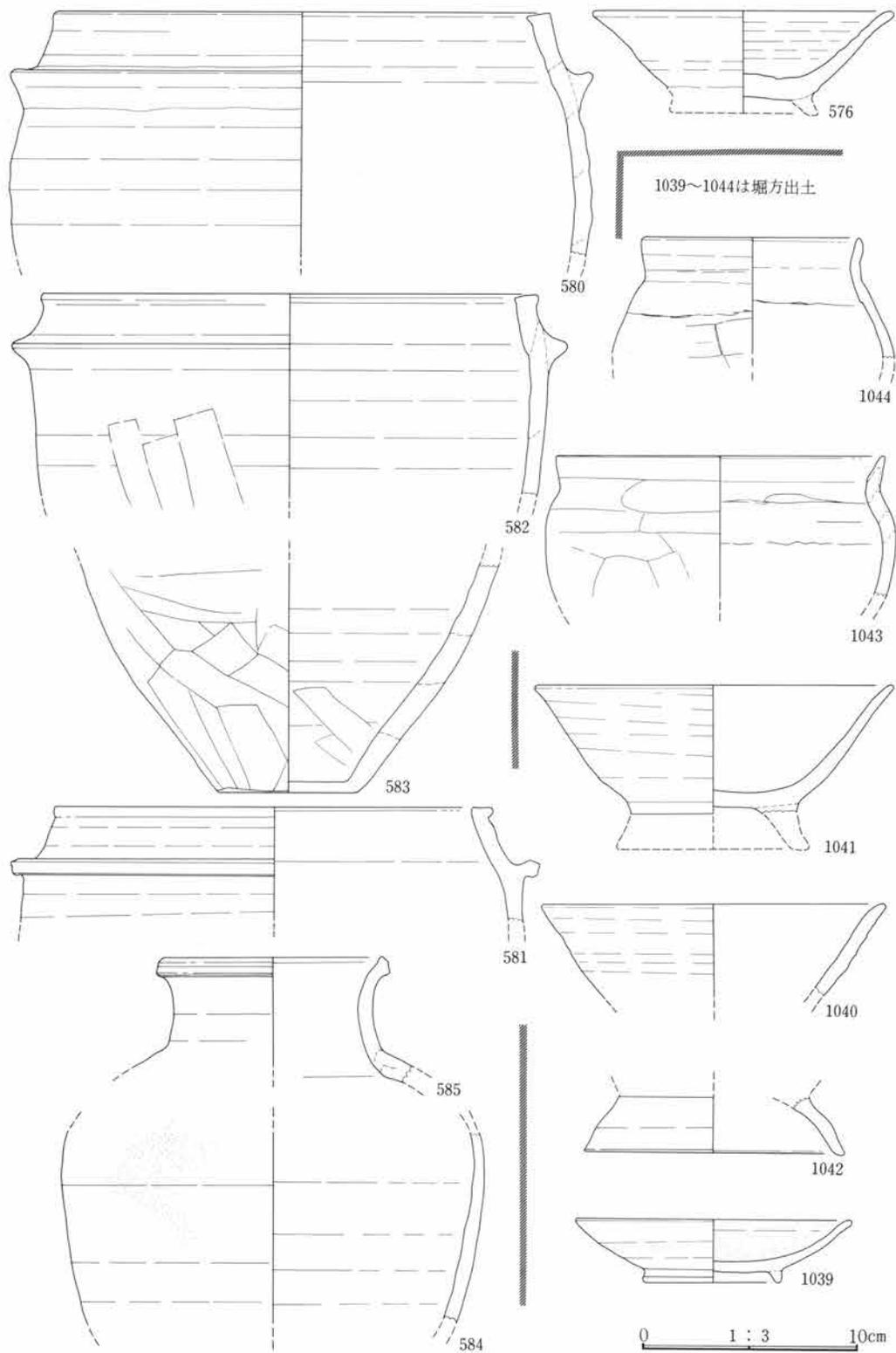
## 5区56号住居跡（第310・311図、第92表、図版131）

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。規模は、東辺4.50m、北辺3.40mを測り、方位は、北辺でE-6°-Sである。平面形は、南北に長い方形を呈する。床面は、55号住居跡同様に東辺のカマド付近を境界として、北半分がロームを踏み固めて堅緻なのに対して、南は暗褐色土を用いた貼床である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の少し南寄りで確認された右袖の痕跡を残す程度で遺存状態は悪いが、煙道付近に凝灰岩質の切石が対の位置で残る。貯蔵穴は、東南隅で長径78cm、短径65cm、床面からの深さ25cmの円形土壇が確認された。内部は、河原石、角閃石安山岩の転石等を用いて、縁取り様の石組みが見られた。遺物は、住居内全体に散漫な状態で見られ、羽釜のほか土師器坏、碗、耳皿、須恵器甕、灰釉陶器がある。碗の中に墨書（判読不可）2点が含まれる。遺構の時期は、出土遺物により平安時代（10世紀前葉）とする。

(女屋)



第310図 5区56号住居跡遺構、遺物図



第311図 5区56号住居跡遺物図（2）

第92表 5区56号住居跡出土遺物観察表

(第310・311図、図版 131)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
573	耳皿 須恵器	口-[9.6]×6.3、 底-5.6、高-2.7 ○ $\frac{1}{5}$	砂粒、白色石粒を多く含む。酸化、やや硬質。暗赤褐色	平底。底部より、一度たちあがって大きく水平にひらく。端部丸味あり。両端つまみ折りあげ。体部、片側に、内面よりの、小孔貫通。焼成前の穿孔。底部回転糸切り、右回転	
574	埴 灰釉陶器	口-[13.1]、底 -[8.1]、高-3.8 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含むが、細密。還元、硬質。灰白色、釉-灰緑色	体下部でやや張りをもって、内湾しひろがる。口縁部、つまみナデで外反。端部丸味あり。底部、やや凸状、回転ヘラケズリ調整。貼付高台、断面、外側に丸い稜をもつ台形。釉漬けかけ	
575	埴 須恵器	口-[12.4]、底 -[5.9]、高-4.0 ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、白色石粒を多く含む。還元、やや軟質。灰色	体部直線的にひろがり、口縁部外反。端部丸味あり。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、低く粗雑な台形	
576	埴 須恵器	口-[14.0]、底 -[6.0]、高-(4.1) ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、褐色石粒を多く含む。酸化、やや軟質。にぶい黄褐色	体下部で、やや張りをもち、大きくひろがる、口縁部やや外反。底部、回転糸切り、貼付高台	高台部を欠く
577	埴 須恵器	口-[13.7]、底 -[6.9]、高-4.7 ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい灰黄褐色	体部、ゆるく内湾してひろがり、口縁部、外反。口縁端部、外側にゆるい稜をもつ。底部、貼付高台、断面、外側に端部がめくれる長方形	
578	埴 須恵器	底-[6.9]、高 -(1.3)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、褐色石粒を多く含む。酸化、軟質。黄灰色～にぶい橙色	底部、回転糸切り、貼付高台、断面外行する、低い台形。ロクロ右回転	体部内面、墨書あり、「甲」字
579	埴 須恵器	底-[7.2]、高 -(3.1)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい黄褐色、内面、黒色	体部、直線的にひろがる。底部回転糸切り、貼付高台、断面、外行する台形。ロクロ右回転	体部外面、墨書あり、文字不明
580	羽 釜	口-[23.0]、高 -(11.2)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色	体部丸味をもち、口縁部内傾する。口縁端部、平坦でわずかに内斜。鋳断面、上向きの三角形。端部丸味あり。体部ロクロナデ調整	
581	羽 釜	口-[22.0]、高 -(5.2)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、褐色石粒を含む。還元、やや硬質。灰色	口縁部、内傾する。口縁端部、平坦、外側、つまみ出しあり。鋳断面、上下に強いつまみ込による台形。体部、ロクロナデ調整	
582	羽 釜	口-[23.0]、高 -(9.2)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや硬質。橙色	体部、内湾し、口縁部わずかに内傾する。口縁端部、平坦で、やや内斜する。鋳断面、端部の丸い三角形。体部、ロクロナデ調整、体下部、タテヘラケズリ調整	

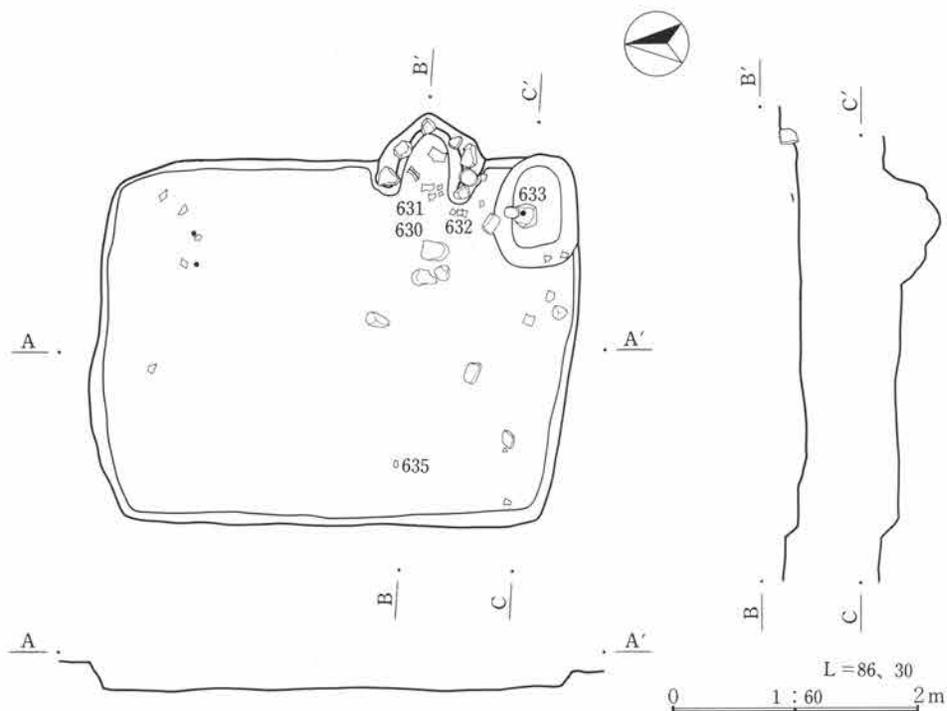
583 5区56号 住	羽 金	底-[6.4]、高 -(10.5)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、やや軟質。浅黄橙 色	平底。ヘラケズリ。体部、タテ、ナ ナメヘラケズリ調整。内面、粘土積 痕あり、ロクロナデ調整	
584	瓶 須 恵 器	胴-[19.4]、高 -(8.8)○胴部片 のみ	砂粒、白色石粒を多く含 む。還元、硬質。にぶい 赤褐色～灰色	肩部で張りをもつ、瓶と思われる。 器肉、薄手、均質。内外、ロクロナ デ調整。肩部自然釉かかる	
585	瓶 須 恵 器	口-[10.0]、高 -(4.9)○口頸部 のみ	砂粒、石粒、黒色斑文あ り。還元、硬質。灰色	頸部しまってたちあがり、口縁部、 やや外反する。口縁端部、角の丸い 外縁帯をもち、内側に凹線めぐる。 頸部で粘土接合、ロクロナデ調整	
1039 参	皿 灰釉陶器	口-[12.8]、底 -[6.3]、高-2. 9○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含むが、細密。還 元、硬質。灰白色、釉-浅 黄色	体下部で、張りをもち、ひろがる。 口縁端部丸味をもつ。底部、回転糸 切り痕残す。貼付高台、断面、外側 に丸い稜をもつ台形	堀方出土
1040 参	碗 須 恵 器	口-[15.9]、高 -(4.3)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、褐色石粒を多く含 む。酸化、軟質。にぶい 橙色	体部、直線的にひろく、大振りの碗。 口縁部、わずかに外反。体部ロクロ ナデ調整	堀方出土
1041 参	碗 須 恵 器	口-[16.6]、底 -[7.2]、高-(5. 9)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。にぶい橙色	底部より一度、たちあがり、ゆるい 稜をもって、ひろがる。口縁部やや 外反する。底部、回転糸切り、貼付 高台、高足高台か、ロクロ右回転	堀方出土 高台を欠く
1042 参	碗 須 恵 器	底-[8.8]、高台 -[12.0]、高-(2. 6)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、褐色石粒を含む。 酸化、軟質。淡橙色	高足高台の碗。高台部のみ残存。裾 外側で、丸い稜をもって、ハの字に ひろく。ロクロナデ調整	堀方出土
1043 参	甕 土師器	口-[15.2]、高 -(6.3)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、軟質。灰黄褐色	口縁部、短かく、たちあがり、体部 丸味のある、小型甕。頸部、内側に 肥厚して、稜をもつ。口縁端部、薄 手。体部、粘土積痕あり、体外面、 ヘラケズリ調整。口頸部ヨコナデ	堀方出土 内外、スス、炭 化物付着
1044 参	甕 土師器	口-[10.2]、高 -(5.4)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、軟質。褐灰色	口縁部、短かくたちあがり、体部丸 味をもつ、小型甕。体部、粘土積痕 残る。体部ヘラケズリ調整。口頸部 ヨコナデ	堀方出土 内外、スス、炭 化物付着

## 5区59号住居跡 (第312・313図、第93表、図版132)

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。4号溝と重複し、本住居跡が新しい。規模は、西辺で3.85m、北辺で2.90mを測り、方位は北辺でE-4°-Sである。平面形は、南北に長い方形を呈する。床面は、暗褐色土を用いて、貼床をしており、平坦だがやや軟弱である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の南寄りで確認された。両袖を始めとして、半円状に円礫をめぐらし、袖材の芯としている。焼土、炭化物の量は多く、炭化物の一部は住居内に分布する。貯蔵穴は、住居東南隅に接して、長径89cm、短径66cm、床面からの深さ32cmの隅丸方形の土

第6章 検出された遺構と遺物

壇が確認された。遺物は、カマド周辺を除いて少なく、羽釜を始めとして土師器坏、埴、灰釉陶器埴等がある。カマド周辺及び貯蔵穴内の礫は、カマドからの流出と思われる。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代（11世紀初頭）とする。 (宮下)



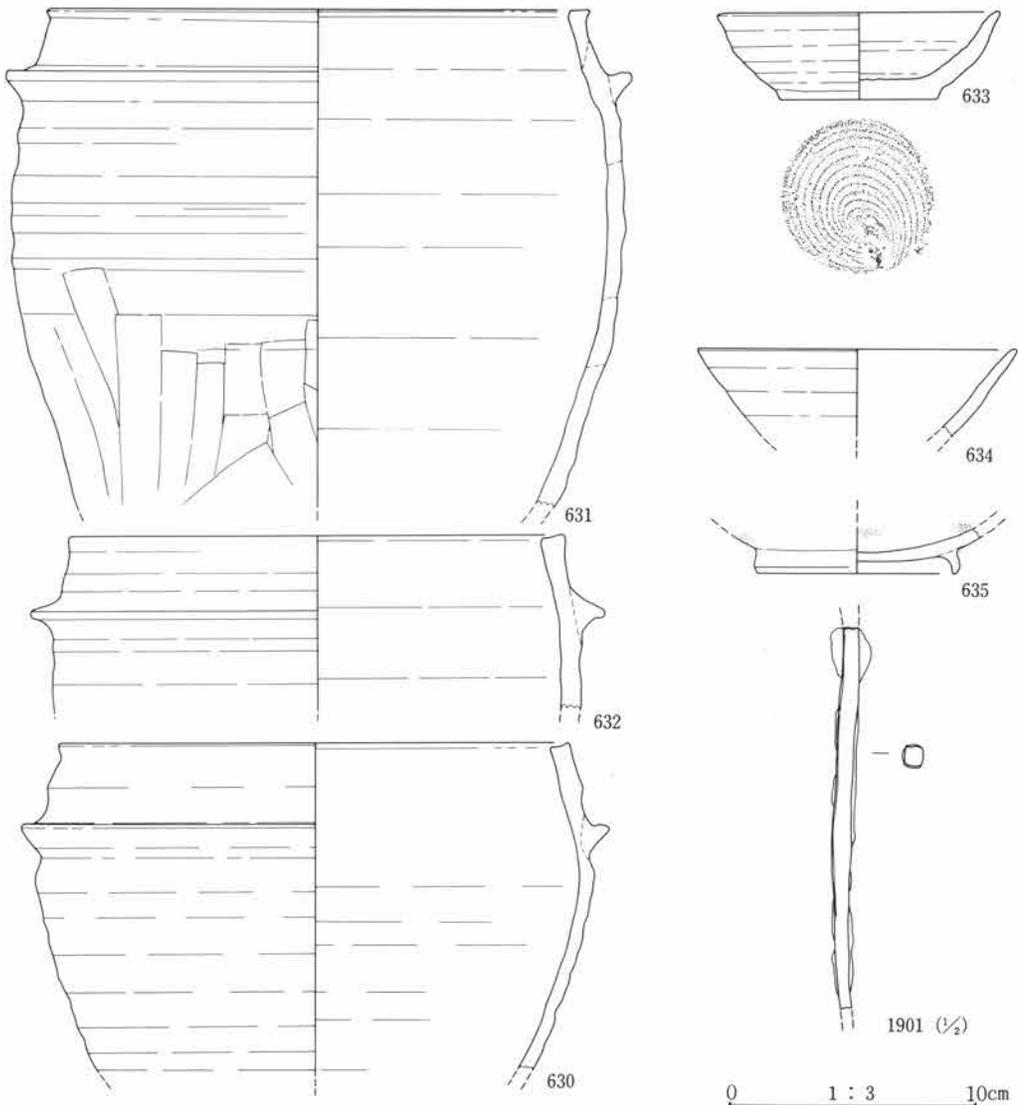
第312図 5区59号住居跡遺構図

第 93 表 5区59号住居跡出土遺物観察表

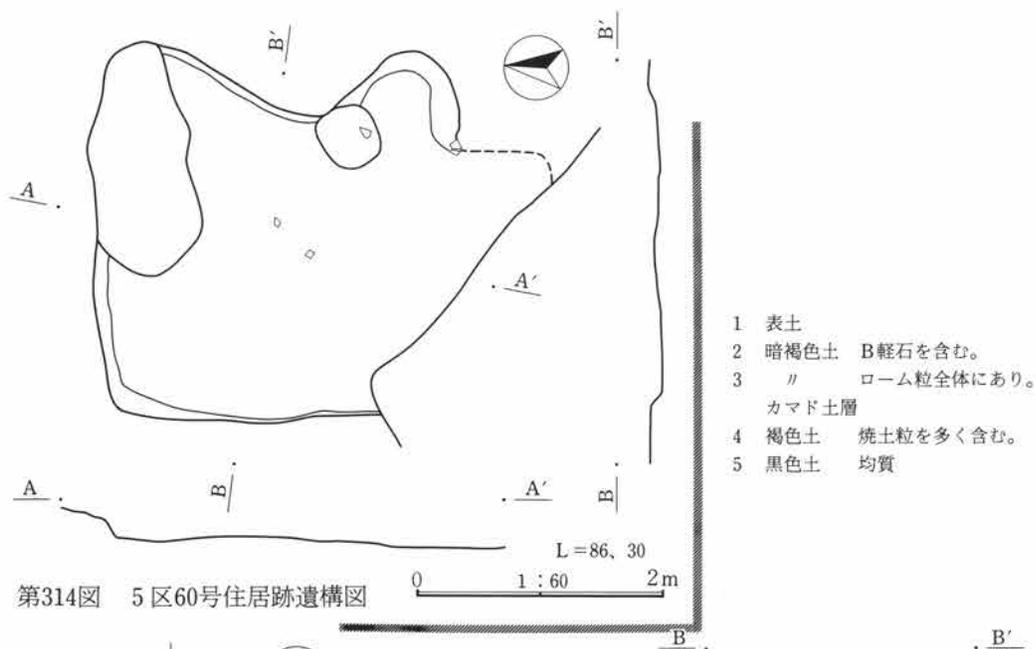
(第313図、図版 132)

番 号	土 器 種 類	法量（口径・底径・器高）遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
630	羽 釜	□-[20.6]、高 -(13.1)○%	砂粒、褐色、白色砂粒を含む。還元、やや硬質。灰色	体上部に最大径をもち、体部は、卵形を呈する。口縁部内傾し口縁端部、中央に凹線めぐり、やや内斜。鏝断面、端部の丸い三角。体部、ロクロナデ調整	
631	羽 釜	□-[22.0]、高 -(19.8)○%	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	体部中央で丸味をもち、口縁部内傾する。口縁端部、平坦で、外側につまみ出す。鏝断面、端部丸味のある上向きの三角形。ロクロナデ、体下部、タテヘラケズリ調整	
632	羽 釜	□-[20.0]、高 -(7.0)○%	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。橙色	口縁部内傾し、端部平坦、やや内斜、鏝断面、下向きの三角形	

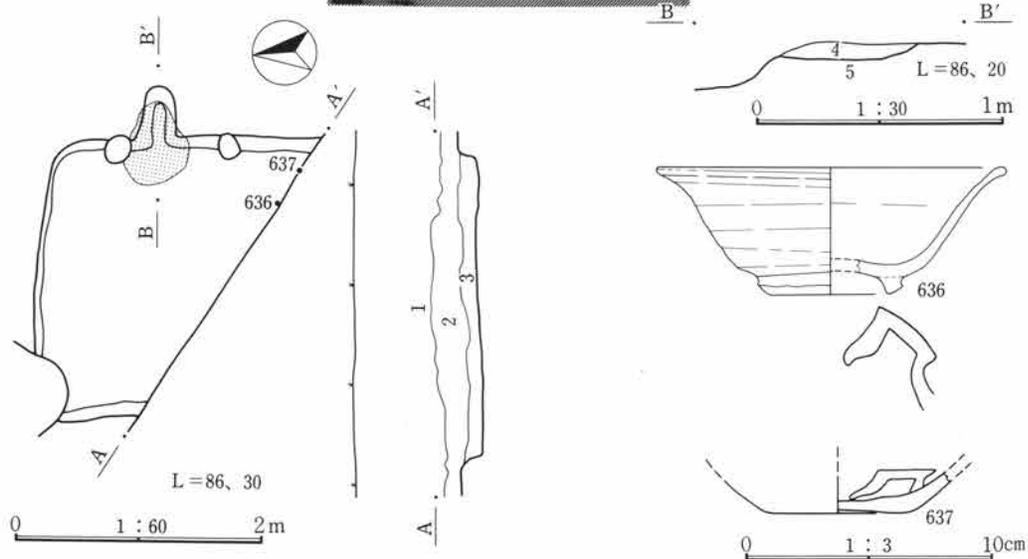
633 5区59号住	埴須恵器	口-[11.5]、底-6.3、高-3.5。略完存	砂粒を多く含む。還元、やや硬質。灰黄色	体部内湾してたちあがる。平底、小さく、身の浅い埴。底部しぼり込で、回転糸切り、ロクロ右回転	重ね焼き痕あり
634	埴須恵器	口-[12.8]、高-(3.5)○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。灰黄色	体部直線的にひらいて、口縁端部やや薄手。体部ロクロナデ調整	
635	埴灰釉陶器	底-[8.0]、高-(1.6)○ $\frac{1}{6}$	白色砂粒含むが、細密。還元、硬質。釉-灰緑色	底部、回転ヘラケズリ調整、貼付高台。高台断面、内湾する三日月状。やや大振りの埴	
1901	鉄製品	長-(10.2)、幅-0.5、厚-0.5、釘か、断面、四角形、片端、細くなる			



第313図 5区59号住居跡遺物図



第314図 5区60号住居跡遺構図



第315図 5区67号住居跡遺構、遺物図

5区60号住居跡 (第314図)

本住居跡は、基本土層第4層で確認された。確認時、床面の殆どが露呈し、掘方に近い状態で、特に東辺側については不明部分がある。南辺側で58号住居跡と重複するが、本住居跡が新しい。規模は、東辺側で推定3.73m、北辺側で2.95m、方位は北辺でN-86°-Eである。平面形は、南北に長い方形を呈すると推定されるが、東北隅は突出している。カマドは、東辺の南寄りで、壁外にロームを掘り込み、若干の焼土が見られたが痕跡に近い状態である。床面は、ロームを踏み固めているが、全体の様子は不明である。遺物は、土師器甕等の小破片が見られ、遺構の時期は、これにより平安時代とされる。

(宮下)

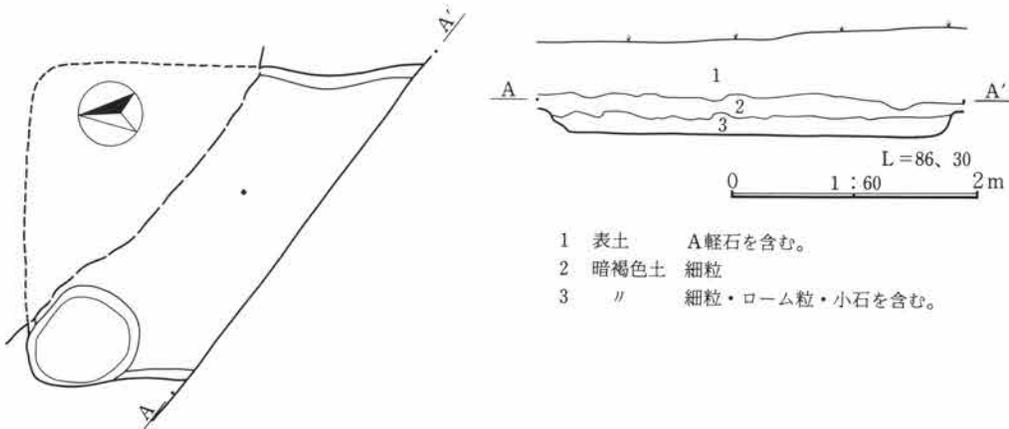
## 5区67号住居跡 (第315図、第94表、図版133)

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。70号住居跡、75号土塚に重複し、古い方から75号土塚→70号住居跡→67号住居跡である。南辺側は、調査区外に広がる。規模は、北辺2.23m、東辺2.20m以上を測り、平面形は南北に長い方形を呈すると推定される。方位は、北辺でE-4°-Sである。床面は、ロームを踏み固めており、平坦で堅緻である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の北寄りで確認された。壁外に小さく舌状に突出するが、焼土、炭化物の量は少なく、焼け方も弱い。遺物は、僅少で土師器坏、須恵器碗があり、坏には、墨書(判読不可)がある。遺構の時期は、出土遺物により平安時代(10世紀前葉)とする。(女屋)

第94表 5区67号住居跡出土遺物観察表

(第315図、図版 133)

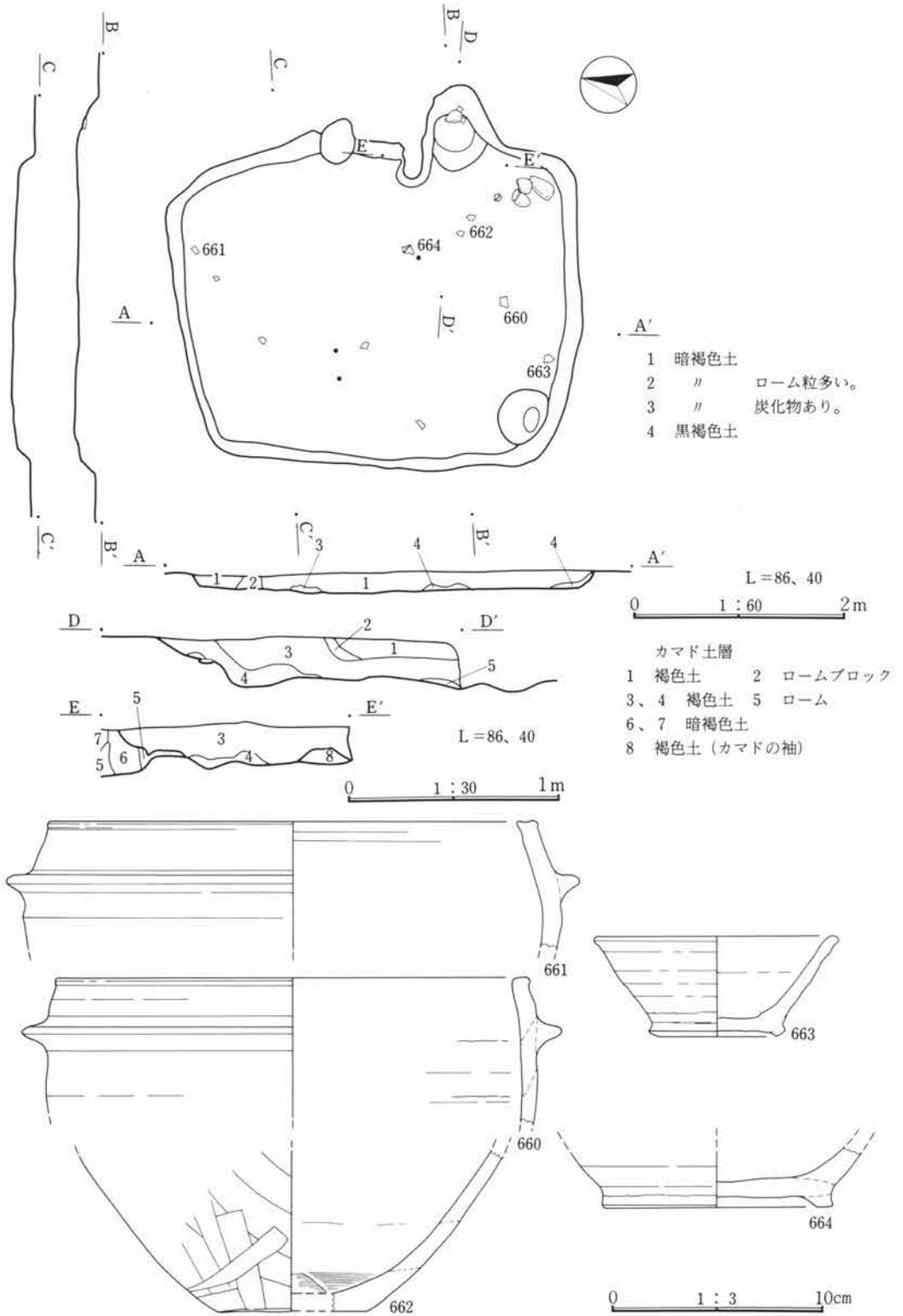
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
636	碗 須恵器	口-[14.0]、底-[5.8]○%	砂粒、白色石粒を多く含む。還元、やや硬質。灰色	体下部で張りをもって、ひろがり、口縁部外反する。口縁端部肥厚して丸味をもつ。底部貼付高台、台形	
637	碗 須恵器	底-[5.8]、高-[1.2]○%	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	平底。底部回転糸切り。体部ロクロナデ、右回転	体内面、墨書あり「几」「大」字か



第316図 5区68号住居跡遺構図

## 5区68号住居跡 (第316図)

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。南辺側は調査区外に広がり、東北隅は大きく攪乱を受けている。規模は、東辺で2.98m以上、北辺で推定2.50mを測り、方位は北辺でE-8°-Sである。平面形は、南北に長い方形を呈すると推定される。床面は、ロームを踏み固めて、平坦で堅緻である。貯蔵穴は、西北隅に径約90cmの円形土塚が確認されたが、確定できない。遺物は、土師器甕、坏の細片が少量見られた。(女屋)



第317図 6区1号住居跡遺構、遺物図

## 6区1号住居跡(第317図、第95表、図版133・134)

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。東辺側は一部攪乱を受ける。規模は、東辺で3.82m、南辺で3.02mを測り、方位は南辺でN-84°-Eである。平面形は、南北に長い方形を呈するが、東北隅が少し突出している。床面は、第4層を踏み固め、平坦だがやや軟弱である。柱穴周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の南寄りの位置で確認された。左袖にわずかに地山を残し、燃烧部は壁外に大きく突出する。カマド右脇の住居東南隅で大小5個の礫が見られたが、袖石かは不明である。貯蔵穴は、西南隅に接して長径55cm、短径44cm、床面からの深さ20cmの円形土壇が確認されたが、遺物の伴出はなかった。遺物は、少量ながら全体で見られた。羽釜、瓶土師器碗がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代(10世紀中葉)とする。(宮下)

第95表 6区1号住居跡出土遺物観察表

(第317図、図版 133)

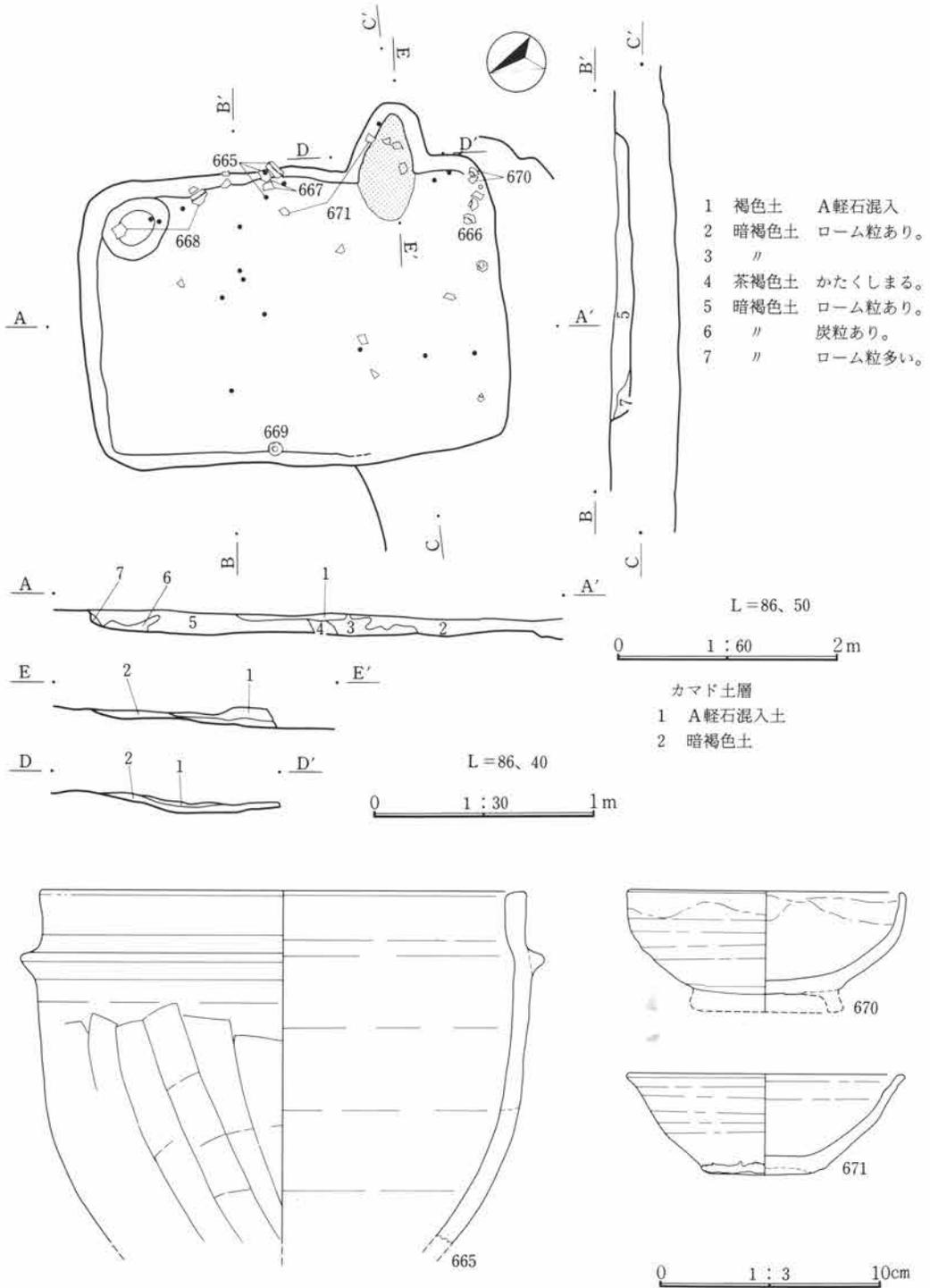
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
660	羽釜	口-[22.4]、高-(6.9)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、白色石粒を多く含む。還元、やや硬質。灰白色	口縁部、やや内傾し、口縁端部平坦面あり。鋳断面、端部の丸い三角形。体部ロクロナデ調整。器肉、薄手	
661	羽釜	口-[23.0]、高-(5.9)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒、黒色輝石を含む。酸化、やや硬質。灰褐色	口縁部、内傾する。口縁端部中央に凹線めぐる。鋳断面、端部の丸い三角形。体部ロクロナデ調整	
662	羽釜	底-[7.0]、高-(7.3)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや軟質。にぶい黄橙色	底部のみ残存。底部、体下部、ヘラケズリ調整。内底部、ヘラナデによるクシ目状痕残る。体内面ヨコナデ	
663	須恵器碗	口-[11.6]、底-[6.4]、高-4.7○ $\frac{1}{3}$	砂粒、白色、褐色石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色	体部、直線的にひろがり、口縁部外反する。端部丸味をもつ。底部回転糸切り、底部外縁に、低い台形の貼付高台	内面、重ね焼き痕あり
664	瓶土師器	底-[10.8]、高-(2.6)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、白色石粒を多く含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	底部、ヘラケズリ調整、貼付高台、高台断面、外行する、低い台形。体部ロクロナデ調整。粗雑。器肉厚手	

## 6区2号住居跡(第318・319図、第96表、図版133~135)

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。南辺側で3号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。規模は、東辺で3.80m、北辺で2.56mを測り、方位は北辺でE-13°-Sである。平面形は、南北に長い方形を呈する。床面は、ローム上に第4層を用いて踏み固めている。3号住居跡との重複部分には貼床が見られた。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の南寄りで確認されたが、遺存状態は悪い。地山のロームを舌状に掘り込み、壁外に突出している。焼土、炭化物が、カマド前に少量分布する。貯蔵穴は、東北隅に接して長径73cm、短径50cm、床面からの深さ8cmの円形土壇が確認された。遺物は、住居内全体に見られ、壁際に特に多い。羽釜を始めと

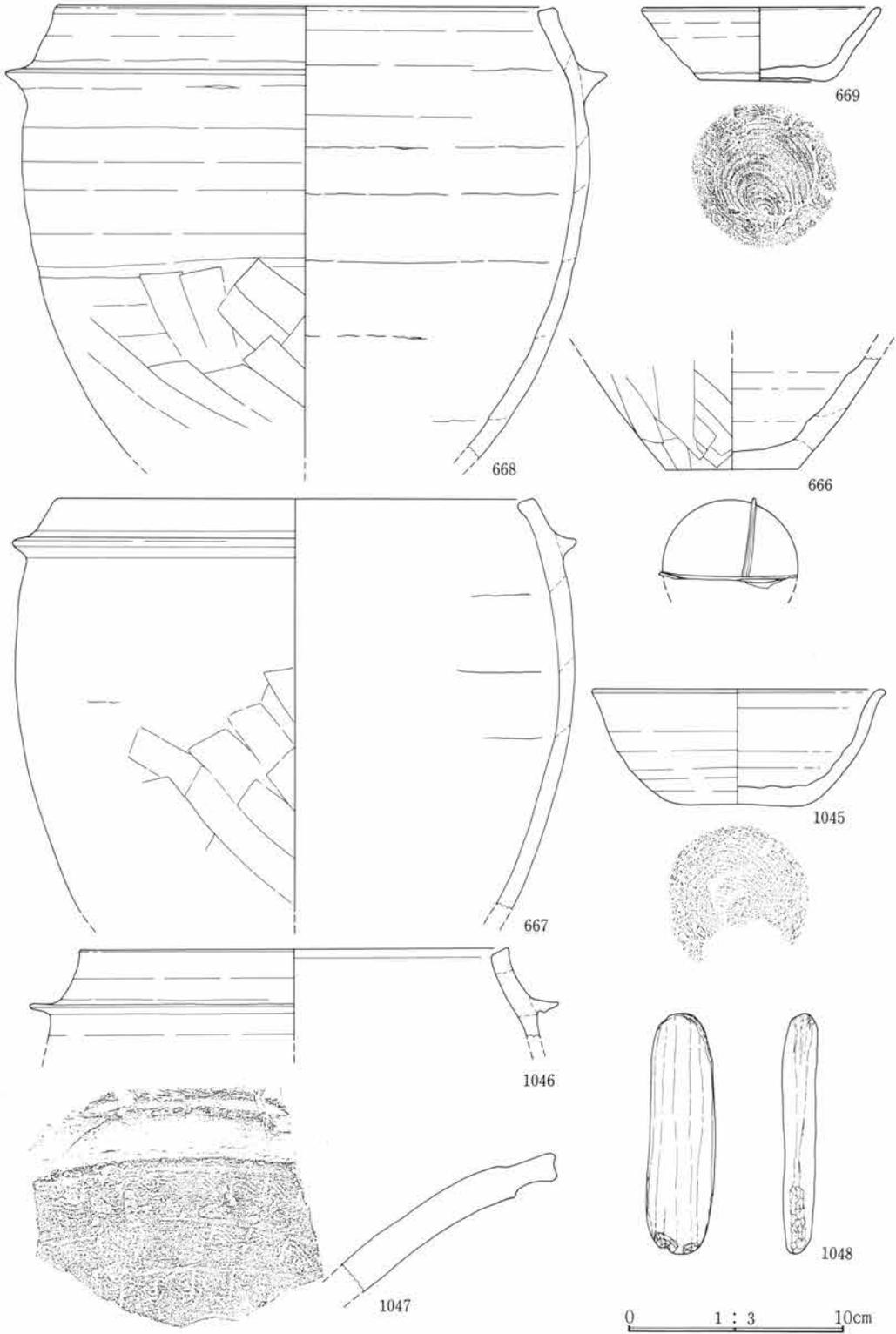
第6章 検出された遺構と遺物

して、土師器碗、坏がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代（11世紀初頭）とされる。  
 (女屋)



第318図 6区2号住居跡遺構、遺物図

2 14地区の調査（平安時代）

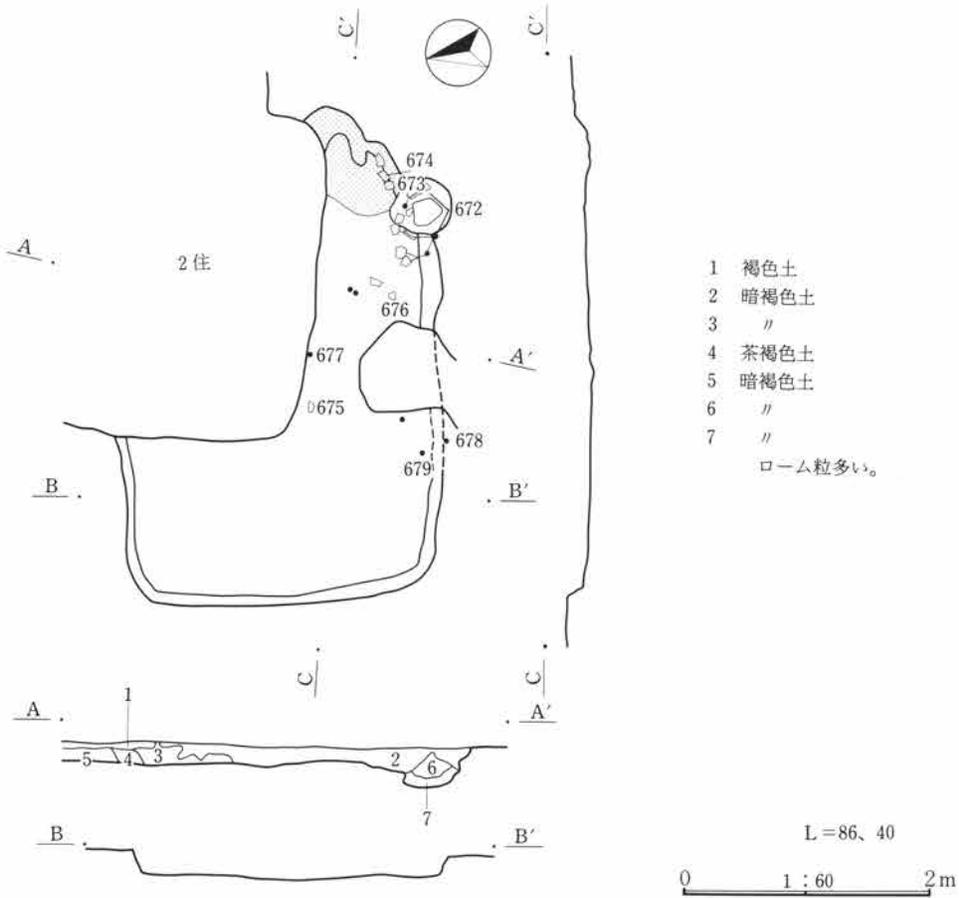


第319図 6区2号住居跡遺物図(2)

第96表 6区2号住居跡出土遺物観察表

(第318・319図、図版 133・135)

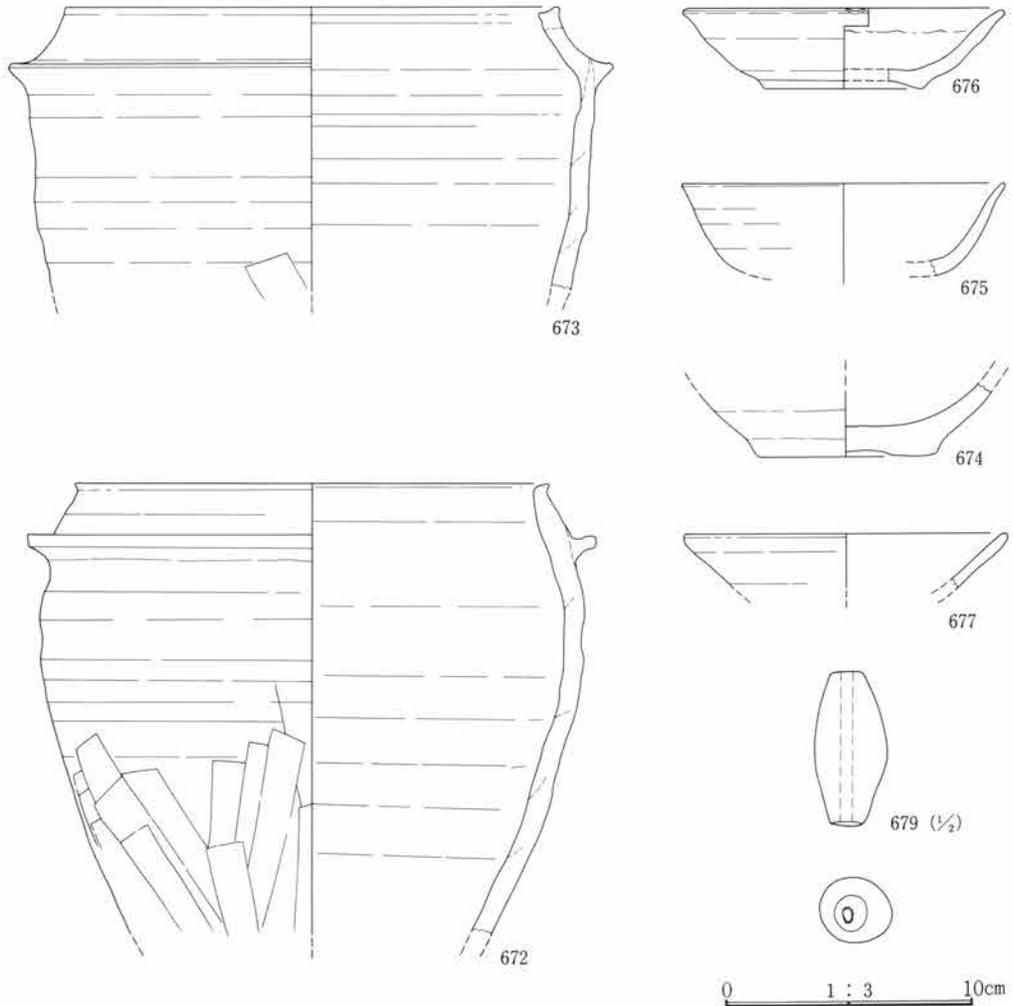
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
665	羽釜	口-[22.0]、高-(16.6)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒、輝石を含む。酸化、やや軟質。にぶい橙色	体部、丸味つよく、体下部で急速にすぼみ、体上部～口縁部は直行する。口縁部、内側に肥厚し、端部、内側の丸い平坦面をもつ。鏝断面、端部丸く、小さな三角形。体部ロクロナデ調整、鏝部、直下から、タテヘラケズリ調整	外面、強いスス付着
666	羽釜	底-[6.1]、高-(5.1)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや硬質。にぶい褐色	平底。体部、直線的にたちあがる。底部、体下部ともに、ヘラケズリ調整、内面ヨコナデ	底部外面に、ヘラ記号あり「十」か
667	羽釜	口-[22.0]、高-(19.0)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや軟質。にぶい黄橙色	体部丸く、口縁部内傾する。鏝までの距離、短かめ。鏝断面、端部の丸い、小さい三角形。体部ロクロナデ、体下部ヘラケズリ調整。器肉、薄手	外面、スス付着
668	羽釜	口-[23.0]、高-(20.8)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや硬質。灰黄褐色	体部丸く、口縁部、内傾する。口縁端部、平坦で内斜。鏝断面三角形。体部ロクロナデ調整。体下部、ヘラケズリ調整	内外、スス、炭化物付着
669	坏須恵器	口-11.1、底-5.9、高-3.4○完存	砂粒、白色石粒を多く含む。還元、やや硬質。灰白色	体下部で張りをもって、ひろがる。底部回転糸切り、平底。ロクロ右回転	重ね焼き痕あり
670	碗須恵器	口-[12.6]、底-[6.6]、高-(4.5)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。明褐色	体部、内湾して、口縁部たちあがる。口縁端部、平坦面をもつ。身の浅い、高台付碗。底部回転糸切り、貼付高台、体部ロクロナデ調整	高台部欠く。体内面、リング状にスス付着 灯明皿
671	碗須恵器	口-[12.6]、底-[5.3]、高-4.6○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。灰黄色	平底。底部より一度、立ちあがり、体部、内湾のカーブをもってひろがる。口縁端部、やや角ばる。底部、補修用粘土、接合か	
1045参	碗須恵器	口-[13.5]、底-6.6、高-5.5○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。明褐色	平底。体下部で張りをもち、内湾、口縁直下でくびれて、口縁部外反。端部丸味あり、底部回転糸切り、ロクロ右回転	堀方出土 底部、外縁、スレあり
1046参	羽釜	口-[19.8]、高-(4.1)○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。細。還元、やや硬質。灰色	口縁部内傾し、端部平坦面あり、内斜。鏝断面、端部上向きの三日月状。体部ロクロナデ調整	堀方出土
1047参	甕須恵器	○小片	砂粒、白色石粒を含む。酸化、軟質。赤褐色	大きく外反する口縁の大型甕。口縁部外側に稜あり。口頸部外、波状文	堀方出土
1048一参	棒状礫器	長-11.0、幅-3.1、厚-1.4、緑色片岩、下半部の両側面に、敲打面をもつ			堀方出土



第320図 6区3号住居跡遺構図

## 6区3号住居跡（第320・321図、第97表、図版134・135）

本住居跡は、基本土層の第4層で2号住居跡と重複して確認された。重複関係は、本住居跡が2号より古い。規模は、西辺で2.50m、南辺で3.50mを測り、方位は南辺でE-9°-Sである。平面形は、東西に長い方形を呈する。床面は、ローム上にわずかに第4層を用いて踏み固めているが、東半分は不定である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の南寄り確認されたが、重複と攪乱を受けたため残存状態は悪い。地山をわずかに掘り込み、壁外に半円状に伸びる。焼土、炭化物は、住居内右側手前に多く分布する。貯蔵穴は、東南隅を少し外れた南辺で直径約48cm、床面からの深さ18cmの円形土壇が確認された。遺物は、貯蔵穴付近に多く分布する。羽釜を始めとして、土師器坏、須恵器甕、坏、土錘がある。遺構の時期は、出土遺物から平安時代（10世紀後葉）とされる。（女屋）



第321図 6区3号住居跡遺物図

第97表 6区3号住居跡出土遺物観察表

(第321図、図版 135)

番号	土器種	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
672	羽釜	口-[19.2]、高-(19.0)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色	体上部で張りをもつ、卵形の体部。口縁部内傾し、端部、内帯の丸い平坦面をもつ。鑿断面、細身の台形。体部ロクロナデ。下部ヘラケズリ	外面、スス付着
673	羽釜	口-[20.0]、高-(10.4)○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。橙色	体部、丸味少なく、口縁部内傾。口縁端部平坦面をもち、内斜。鑿断面端部をつまみ出した三角形。体部ロクロナデ、下部、ヘラケズリ、体内部、鑿接合の際の強いおさえあり	

674 6区3号 住	埴 須恵器	底-[7.0]、高 -(2.5)○%	砂粒、白色砂粒を多く含む。酸化、やや硬質。明灰褐色	器肉、厚手で、大振りの器。内外ロクロナデ調整、底部、高台貼付の痕跡	
675	埴 須恵器	口-[13.0]、高 -(3.7)○%	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	身の浅い高台付埴。体下部で、張りをもって内湾し、口縁部わずかに外反。口縁端部、薄手の仕上げ、体部ロクロナデ調整	
676	坏 須恵器	口-[13.0]、底 -[6.5]、高-3. 0○%	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	平底。底部より一度たちあがって、内湾しながら大きくひろく。口縁端部、やや外反。底部回転糸切り	口縁部小さな欠けあり。内面スス付着一灯明皿
677	坏 須恵器	口-[13.0]、高 -(2.2)○%	砂粒を含む。酸化、やや硬質。橙色	口縁部、直行してひろく、身の浅い器。ロクロナデ調整	
679	土 鍾	長-4.9、径-1.9、孔-0.3×0.4、完存。中央、そろばん玉状にふくらむ。両端部、平ら、中心に小孔、貫通			

## 6区4A号、4B号住居跡（第322～324図、第98表、図版136・137）

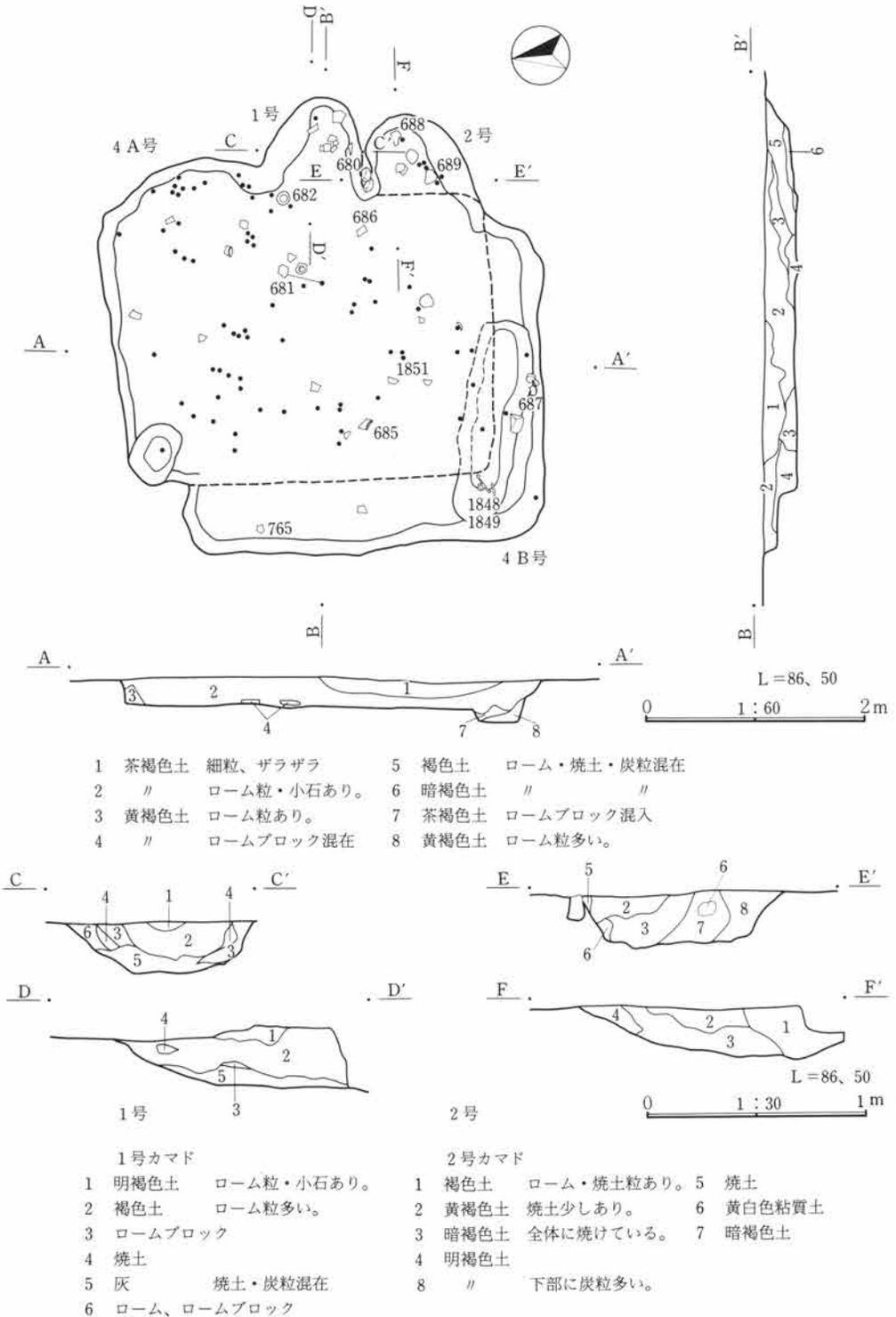
本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。同様な規模で、わずかに軸線をずらしてのA、B2軒が重複し、Bの方が古い。

4A号は、東辺で3.46m、北辺で2.90mを測り、方位は北辺でE-3°-Sを示す。平面形は、南北方向が少し長い方形を呈する。床面は暗褐色土による貼床で、床面下には4B号と明確に区別しにくい多くの堀方土塚がある。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の中央部で確認された。地山を壁外に半円状に掘り込み、暗褐色土を用いて袖材としている。両袖には、河原石を用いた袖石が見られた。カマド内は一様に焼けており、焼土も純層の状態やブロック状となって残っていた。貯蔵穴は、西北隅に接して60×39cm、床面からの深さ約60cmの円筒状土塚が確認されている。遺物は、全体に破片状態ながら多く、羽釜を始めとして、土師器埴、須恵器甕等がある。

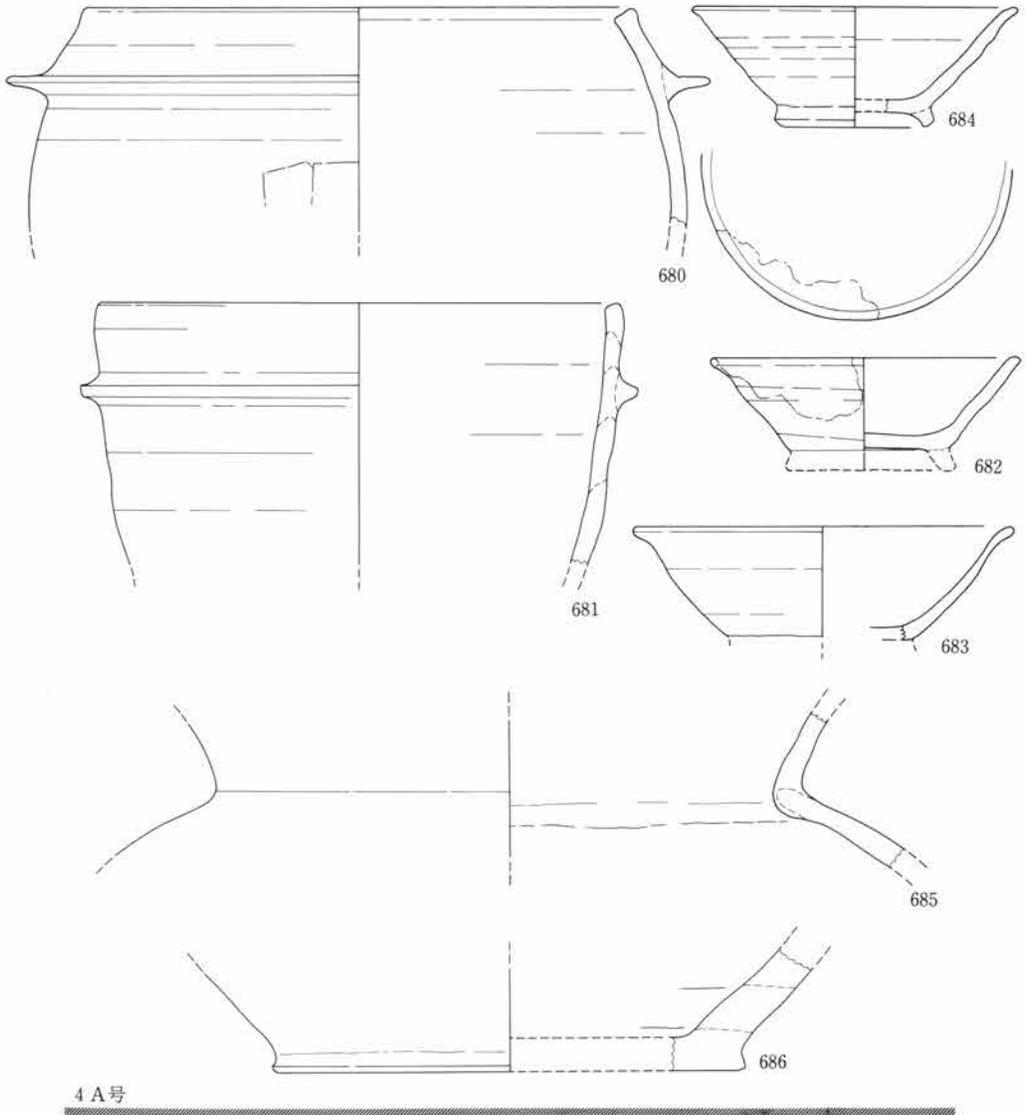
4B号は、4A号を西北方向に約60cmずらした位置で、規模も西辺で3.35m、南辺で2.90m、方位も南辺でE-5°-Sと大差がない。平面形も方形を呈する。床面は、ローム上にわずかに暗褐色土を用いて踏み固めており、段差約15cmある。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の南寄りにある。地山を大きく半円状に掘り込み、暗褐色土を用いて袖材とし、一部に袖石が残っていた。全体が一様に焼け、焼土、炭化物も多い。貯蔵穴は、西南隅で南辺に平行して長軸が1.84m、短軸0.50mの長方形土塚が確認されたが、例のない大きさと形状の上に轡を始めとする馬具の一部が出土し、断定するに至らない。遺物は、土師器坏、埴、須恵器甕、埴が壁際で少量見られた。

遺構の時期は出土遺物の特徴から、4A号は10世紀前葉、4B号は10世紀初頭と考えられる。

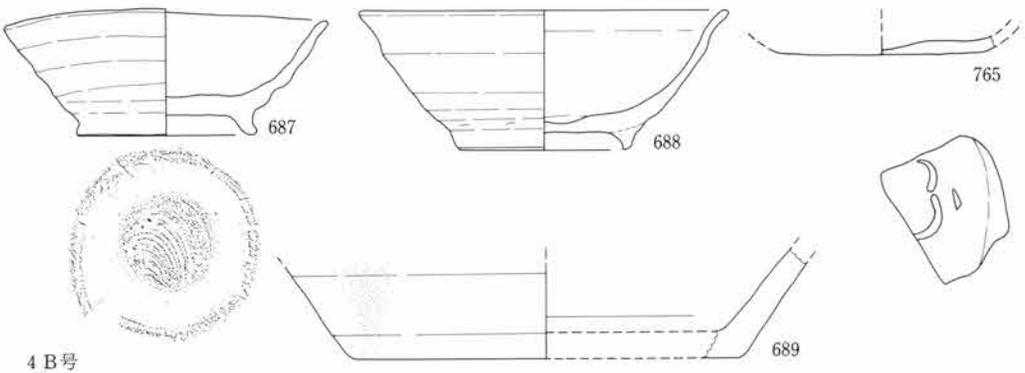
（新井）



第322図 6区4A号、4B号住居跡遺構図



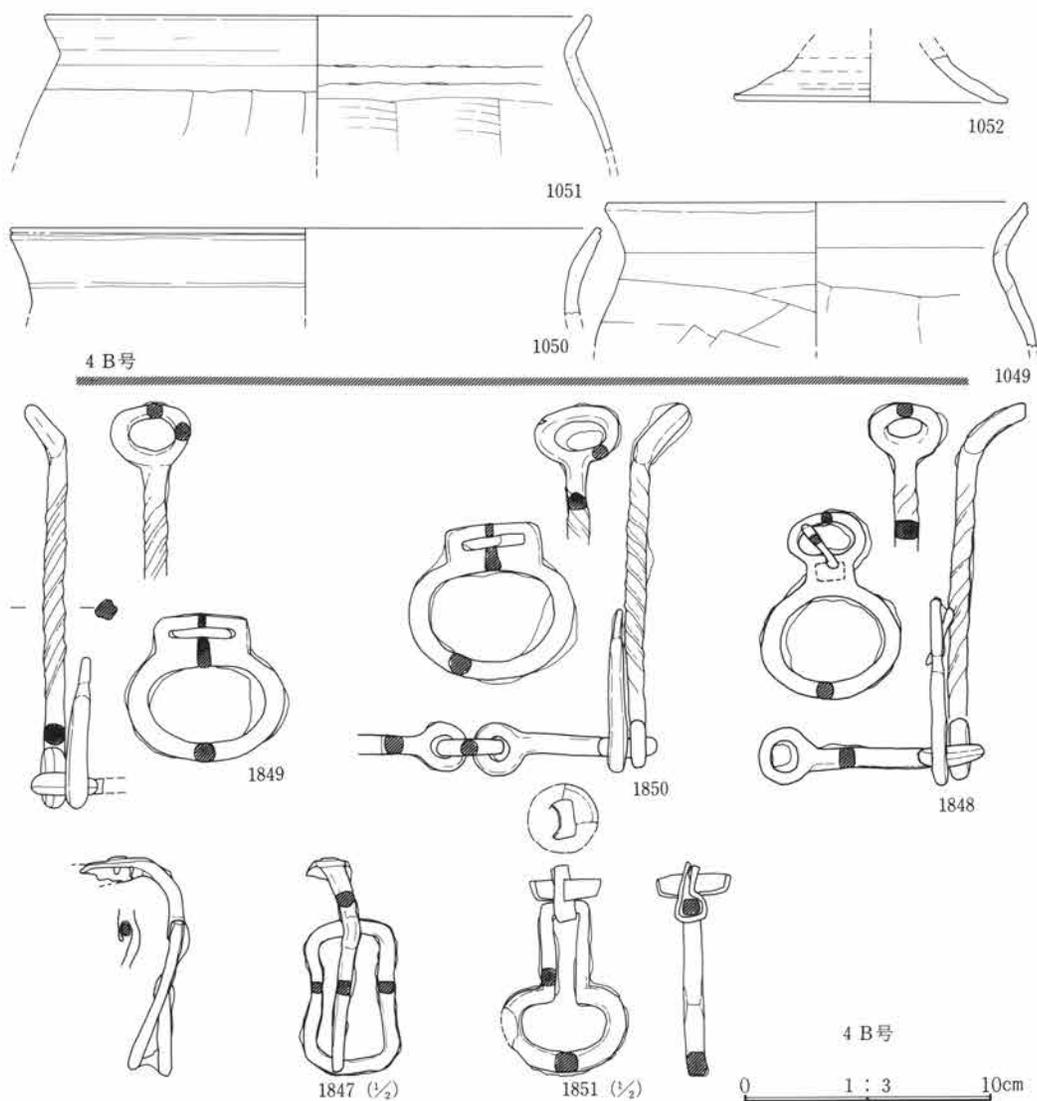
4 A号



4 B号

第323図 6区4A号、4B号住居跡遺物図（1）

0 1 : 3 10cm



第324図 6区4A号、4B号住居跡遺物図(2)

第98表 6区4A号、4B号住居跡出土遺物観察表

(第323・324図、図版 136・137)

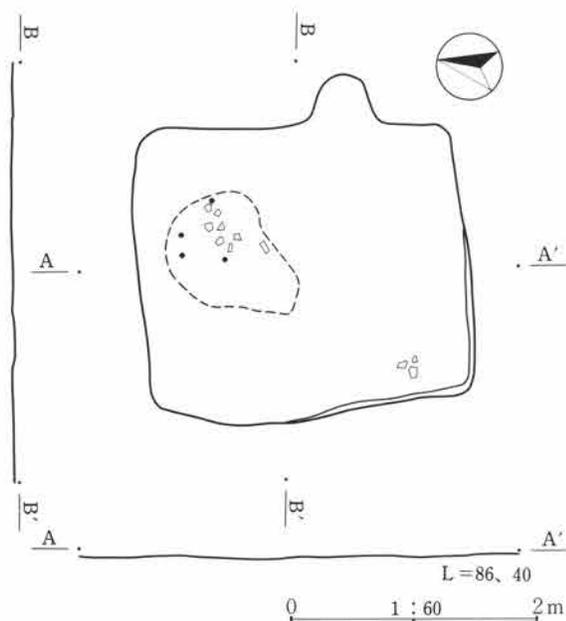
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
680 6区4A 号住	羽釜	口-[22.0]、高-(8.9)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや硬質。橙色	体部、丸く、口縁部、内傾する。口縁端部、平坦面あり。鋳断面、端部丸く、細長い三角形、ロクロナデ	内面、炭化物付着
681	羽釜	口-[21.0]、高-(10.2)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化。にぶい黄橙色	体部、丸味少なく、口縁部、端部近くでわずかに内湾。口縁端部、丸味あり。体部ロクロナデ、器肉、薄手	

## 2 14地区の調査 (平安時代)

682 6区4A 号住	埴 須恵器	口-12.5、底-6.1、高-(3.7)○高台部欠損	砂粒、石粒を多く含む。還元、やや軟質。灰色～灰白色	体部、ほぼ直線的にひろがり、口縁部外反。口縁端部丸味あり。底部回転糸切り、貼付高台、ロクロ右回転	重ね焼き痕あり 口縁部内外スス 付着一灯明皿
683	埴 須恵器	口-[15.4]、高-(4.3)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒、輝石を含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色	体部、わずかに内湾してひろがり、口縁部外反。口縁端部、肥厚して丸味あり。体部ロクロナデ調整	
684	埴 須恵器	口-[13.1]、底-[6.4]、高-4.8○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。橙色	体部、やわらかく内湾してひろがり口縁部わずかに外反。底部貼付高台、断面、やや外行する方形	
685	甕 須恵器	頸-[23.6]、高-(6.4)○小片	砂粒、白色石粒を含む。還元、硬質。灰色	体部、丸く、頸部しまって、くの字状にたちあがる甕。体外面、ヨコナデ、内面、無文のアテ具痕あり	
686	甕 須恵器	底-[19.0]、高-(4.1)○小片	砂粒、白色石粒を多く含む。還元、やや硬質。灰白色	器肉、ぶ厚く、大振りの器。粘土積痕あり。内外、ロクロナデ調整	
687 6区4B 号住	埴 須恵器	口-[13.1]、底-7.2、高-5.1○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。粗。還元、やや軟質。灰色	体下部で、一度稜をもち、直線的にひろがる。口縁部わずかに外反。底部回転糸切り、貼付高台、断面、端部の丸い方形。ロクロ右回転	
688	埴 須恵器	口-[15.0]、底-[6.6]、高-5.6○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒、輝石を含む。酸化、やや軟質。灰褐色	体部、内湾してひろがり、口縁部外反。内外に、ゆるい稜をもつ。口縁端部丸味あり。底部回転糸切り、貼付高台、断面、端部の狭い台形	
689	甕 須恵器	底-[15.6]、高-(3.8)○小片	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰色	平底。体部、直線的にひろがる。体部、ヨコナデ調整	自然釉かかる
765	坏 土師器	○底部のみ	石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	平底。ヘラケズリ調整。内面、ナデ	底外面、墨書あり。文字不明
1049 参	甕 土師器	口-[16.8]、高-(5.8)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、褐色石粒を多く含む。酸化、軟質。明赤褐色	コの字状口縁。頸部しまり弱く、内傾してたちあがる。口縁部外反。端部、外稜あり。体部、ヘラケズリ	
1050 参	甕 土師器	口-[23.8]、高-(3.4)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、白色石粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい褐色	コの字状口縁。口縁端部、外側に沈線めぐる。器肉、厚手	
1051 参	甕 土師器	口-[22.0]、高-(5.4)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、軟質。明赤褐色	コの字状口縁。頸部しまり弱く、口縁部短かく強い外反。端部、外稜あり。体部ヘラケズリ調整	
1052 参	甕 土師器	脚裾-[12.0]、高-(1.9)○小片	砂粒を含む。酸化、軟質。明褐色	台付甕。脚部、大きくハの字にひろく。裾端部、つまみナデによる、丸味あり。上にめくれる。ヨコナデ	

第6章 検出された遺構と遺物

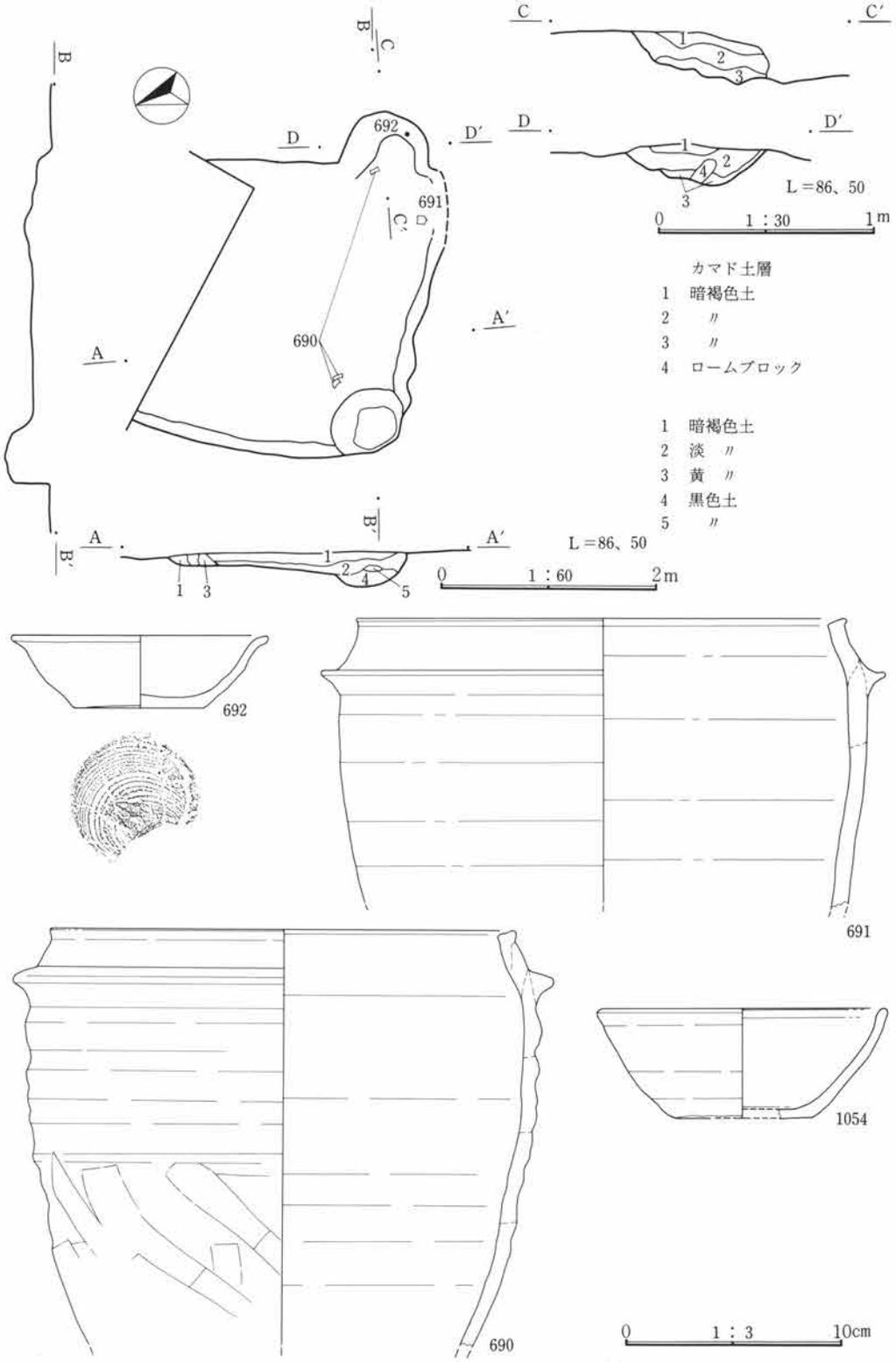
1847 6区4B 号住	鉸 具 鉄製馬具	基部、扁平で、木質部に、紙で着装の痕跡あり、基部より、刺金部までが、単一地金。鉸具枠は、隅丸の軍配形を呈するが、刺金との接合は、刺金の裏側より、扁平な舌状の打ち出しが、枠をくるんで、動作を可能にしている。各断面、四角	註・計測値は表参照
1848	轡 鉄製馬具	鉸具付、素環鏡板の轡。銜は、二連式、鏡板、引手、伴に銜先の環で結ばれる。引手、鏡板の外側にとりつき、左振りのついた、一本引手。引手壺、外側に55°開く。鏡板、楕円の素環、上端に、窓付の方形及び、楕円鉸具のある立間が付く。各断面は、ほぼ四角形、鏡板、立間部は、円形である	//
1849	轡 鉄製馬具	長方形の板状立間の付く、素環鏡板の、轡。銜先の環に、鏡板、引手、伴にとりつく。引手は、鏡板の外側で、左振りのついた、一本引手。引手壺、外側に35°開く。鏡板は、楕円の素環、上端に、長方形の窓をもつ、立間。環部と立間の板部同時に、打ち出しが、断面、環部、楕円に対し、立間との接合部、上端の細くなる台形	//
1850	轡 鉄製馬具	No1849と、同型式、長方形の板状立間の付く、素環鏡板。銜、二連式、中央に遊環をはさむ。銜先の環には、鏡板、引手、伴にとりつく。引手は、鏡板の外側で、右振りのついた、一本引手。引手壺は、外側に46°ひらく。鏡板は、楕円の素環、上端に、長方形の窓付の立間をもつ。各断面、隅丸の四角形	//
1851	しりぞ 鞍 鉄製馬具	鞍の後輪と、尻繫とをつなぐ、金具。円形の座金に、手鏡状の枠を、両頭釘でつなぎ、打ち込んだとみられる。断面、方形	//



第325図 6区5号住居跡遺構図

6区5号住居跡（第325図）

本住居跡は、基本土層第4層で確認された。確認時、床面が殆ど露呈した状態のため、カマド等については不明部分が多い。規模は、北辺2.65×西辺2.85mを測り、平面形は方形を呈する。方位はN-77°-Eを測る。床面は、ローム面を踏み固め平坦堅緻、柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺中央部に円形の掘り方を持って確認されたが遺存状態は悪い。貯蔵穴は、堀方調査に於いても確認されなかった。遺物は、土師器コの字状口縁甕がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代とする。（女屋）



第326図 6区6号住居跡遺構、遺物図

## 6区6号住居跡（第326図、第99表、図版138）

本住居跡は、基本土層第4層で確認された。北辺側は大きく攪乱を受けている。規模は、西辺で2.50m以上、南辺で2.70mを測り、方位は南辺でE-25°-Sである。平面形は、南北に長い方形を呈すると推定されるが、西辺は少し弧を描く。床面は、第4層を踏み固めているが、やや不定である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東南隅で確認された。壁外に突出して、地山を大きく半円状に掘り込み、左袖に角閃石安山岩の袖石を残すが、遺存状態は悪い。貯蔵穴は、西南隅に接して長径68cm、短径56cm、床面からの深さ27cmの円形土坑が確認された。遺物は、羽釜、土師器坏がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代（10世紀前葉）とする。（女屋）

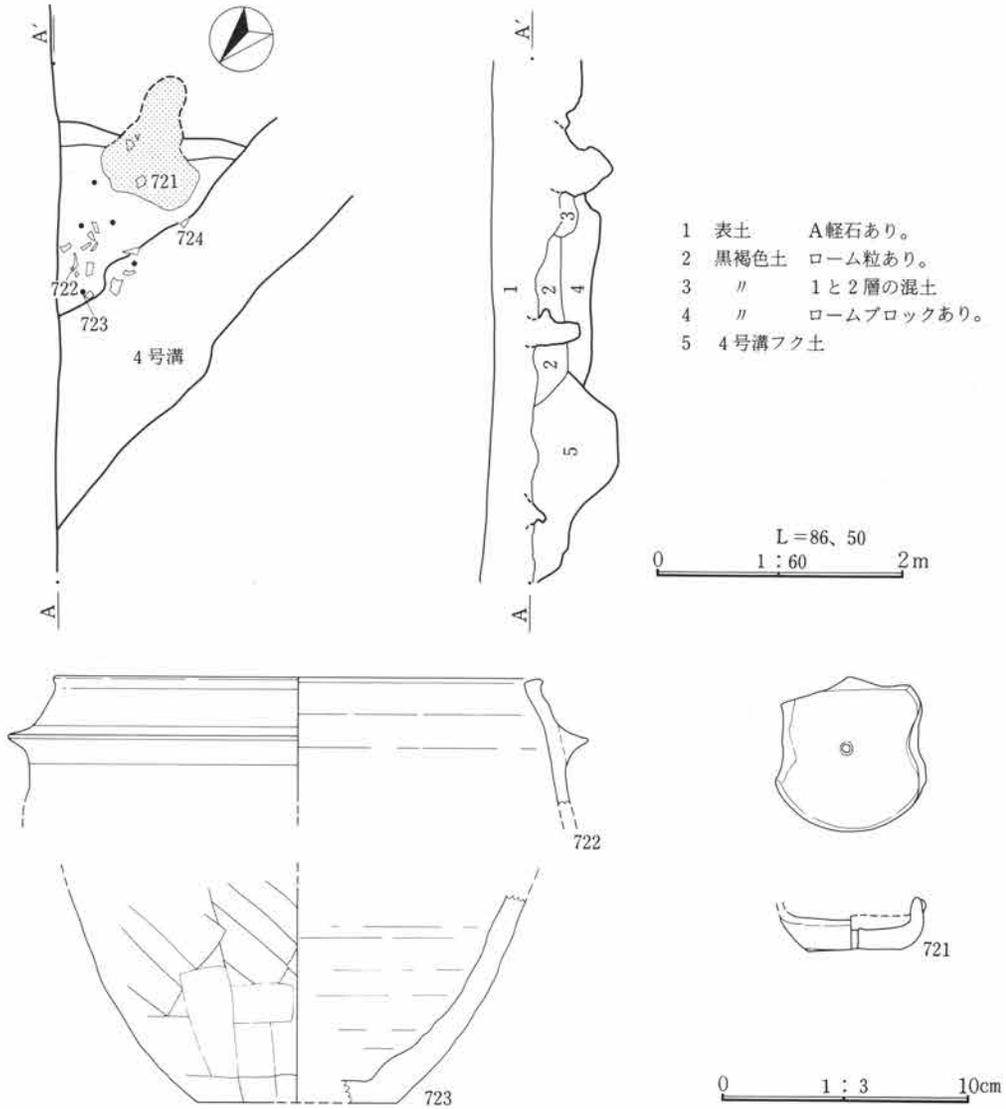
第99表 6区6号住居跡出土遺物観察表

(第326図、図版 138)

番号	土器種類	法量（口径・底径・器高） 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
690	羽釜	口-[21.4]、高一(19.0)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。赤褐色	体部、ふくらみの少ない細身の胴。口縁部内傾、端部、中央わずかに凹む、平坦面あり、外側につまみ出しあり。鑿断面、端部の丸い、台形。体部ロクロナデ、下部ヘラケズリ	
691	羽釜	口-[22.5]、高一(13.0)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい赤褐色	体部、ふくらみ少なく、口縁部内傾。口縁端部、平坦面あり、外側につまみ出す。鑿断面、上向きの三角形。体部ロクロナデ。器肉、薄手	
692	坏須恵器	口-[11.8]、底-6.0、高一3.2○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。灰黄色	体部、わずかに内湾してひろがり、口縁部外反する。口縁端部肥厚して丸味あり。底部、回転糸切り、ロクロ右回転	重ね焼き痕あり
1054 参	碗須恵器	口-[13.3]、底-[6.3]、高一5.0○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。灰白色	平底。体部、丸く内湾し、口縁端部内側に肥厚して、丸味をもつ。身の浅い碗。底部、回転糸切り	重ね焼き痕あり 堀方出土

## 6区8号住居跡（第327図、第100表、図版138）

本住居跡は、基本土層の第4層で、4号溝に重複して確認された。重複関係は、本住居跡が溝より新しい。確認されたのは、カマドを含む東辺の一部で、他は重複部分及び調査区外に広がる。確認した範囲での規模は、東辺1.54m以上、北辺側1.67m以上である。方位はE-58°-Sである。床面は、第4層を踏み固めているが軟弱である。カマドは、地山をわずかに掘り込み、壁外に伸びる様子が窺えるが詳細は不明である。遺物は、羽釜、耳皿、須恵器甕がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代（10世紀中葉）とする。（宮下）



第327図 6区8号住居跡遺構、遺物図

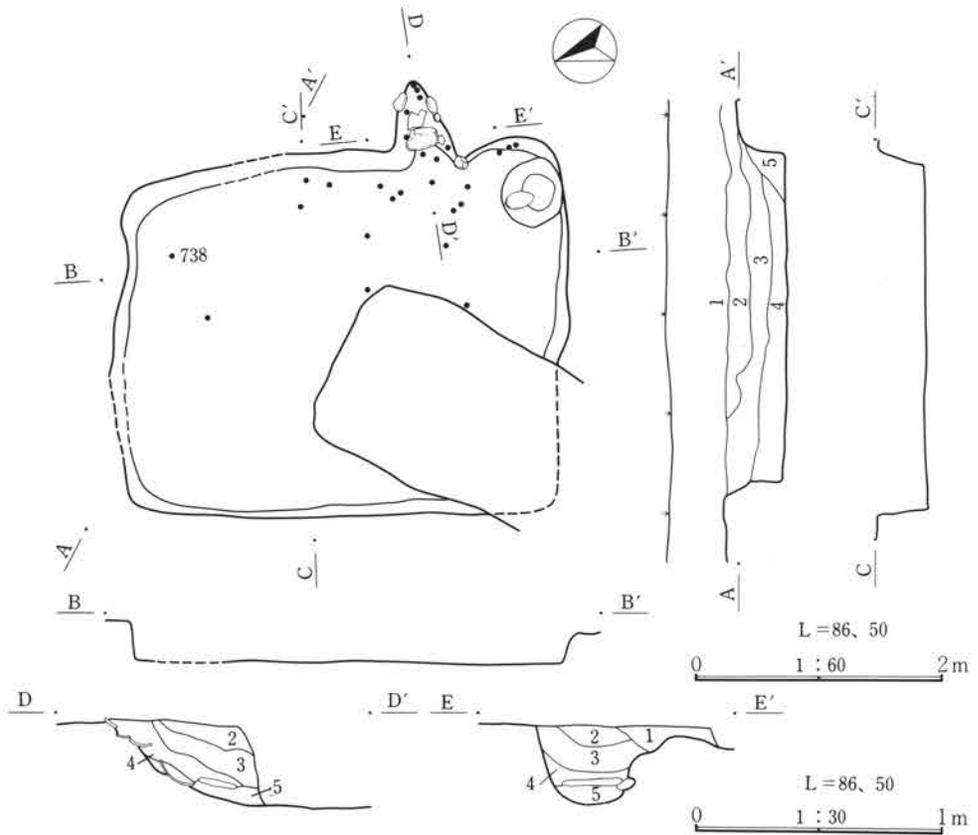
第100表 6区8号住居跡出土遺物観察表

(第327図、図版 138)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
721	耳皿 須恵器	口-[6.9]、底-3.8、高-2.1 $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色	平底。底部、厚手。口縁両側端、折り曲げ、底部中央、焼成前穿孔の小孔あり。底部ヘラ切り、ヘラケズリ	
722	羽釜	口-[19.6]、高-(5.0) $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。灰白色	口縁部内傾、端部、平坦、外側につまみ出し。鑄断面、三角。ヨコナデ	

第6章 検出された遺構と遺物

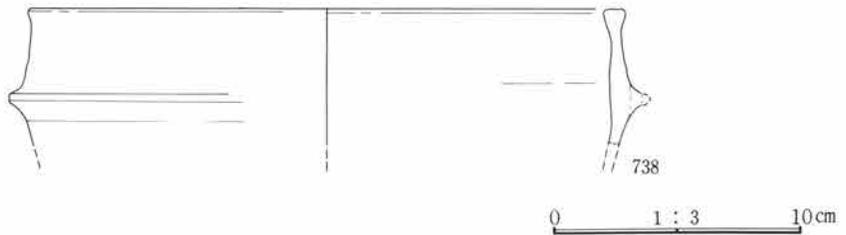
723 6区8号 住	羽 釜	底-[8.1]、高 -(8.5)〇 $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、やや硬質。明赤褐色	体下部で、やや丸味をもったちあ がる。底部ヘラケズリ。体下部、ヘ ラケズリ調整。内面、ヨコナデ
------------------	-----	------------------------------------	-----------------------------	-------------------------------------------------------



- 1 盛土、表土
- 2 暗褐色土 焼土・灰あり。
- 3 //
- 4 // 焼土・炭粒多い。
- 5 黄褐色土 ローム多い。

カマド土層

- 1 暗褐色土 B軽石・ローム粒あり。
- 2 // ローム・焼土・炭粒あり。
- 3 // 焼土・炭粒多い。
- 4 茶褐色土 粘土のブロックあり。
- 5 // 粘土の焼土の混土



第328図 6区10号住居跡遺構、遺物図

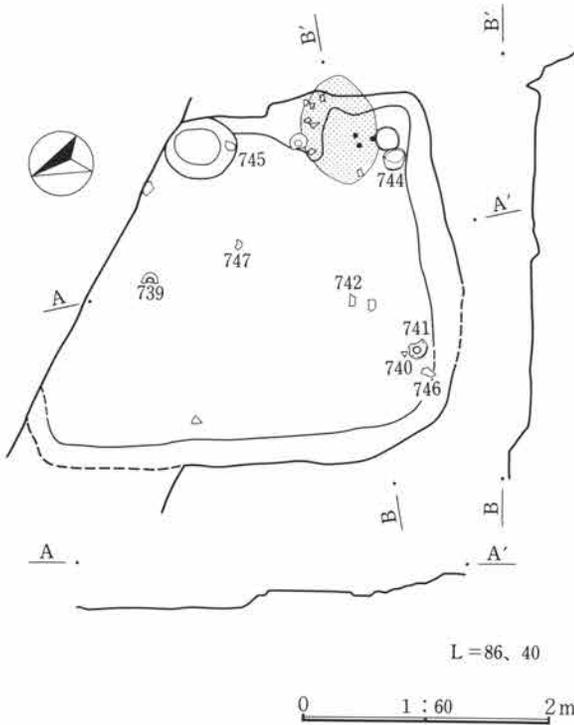
## 6区10号住居跡 (第328図、第101表、図版139)

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。南辺側で20号住居跡、46号土壇と重複している。重複関係は、20号住居跡より新しく、46号土壇より古い。規模は、西辺で3.55m、南辺で2.92mを測り、方位は南辺でE-13°-Sである。平面形は、南北に長い方形を呈する。壁は、わずかに傾斜を持つ位で、高さ約46cmである。床面は、第4層を踏み固め、平坦で堅緻である。カマドは、東辺の南寄りで確認された。地山を舌状に大きく掘り込み、両袖及び煙道にかかる位置には河原石がほぼ対をなして貼付されている。焼土、炭化物の量は多く、住居内にも分布する。貯蔵穴は、東南隅で径約50cm、床面からの深さ8cmの円形土壇が確認された。遺物は、カマド内から羽釜が出土している。遺構の時期は、出土遺物から平安時代(10世紀後葉)とする。(新井)

第101表 6区10号住居跡出土遺物観察表

(第328図)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
738	羽釜	口-[24.0]、高-(5.5) 小片	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰色	口縁部、わずかに内傾する。口縁端部、中央に凹線めぐる、平坦面あり。器肉、薄手、ロクロナデ調整	内外、スス、炭化物付着

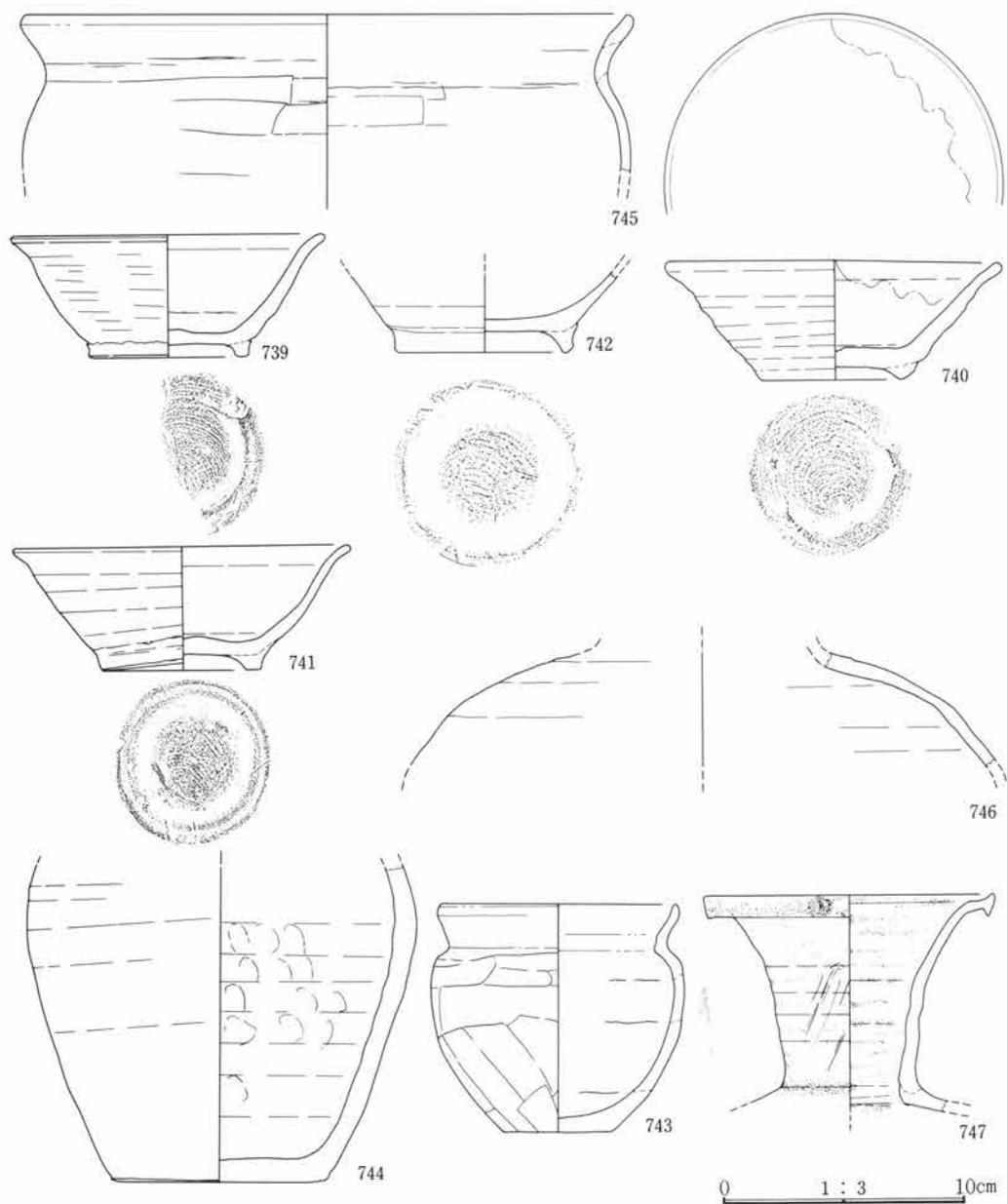


第329図 6区11号住居跡遺構図

## 6区11号住居跡 (第329・330図、第102表、図版140)

本住居跡は、基本土層の第4層で2号溝と重複して確認された。本住居跡が溝を切る。北辺側は調査区外である。規模は、西辺で推定3.50m、南辺2.78mを測り、方位は南辺でE-16°-Sである。平面形は、南北に長い方形を呈すると推定される。床面は第4層を踏み固めており、平坦である。溝にかかる部分は、掘方も起伏に富み、貼床を施している。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは東辺の南寄りで焼土と炭化物の分布があり、痕跡を残す。左袖部分は、わずかに地山が掘り残されている。貯蔵穴は、カマドの東側で東辺に接して径約55cm、床面からの深さ40

cmの円形土壇がある。遺物は、カマド周辺に集中し、全体からは散漫な状態で見られた。土師器甕、小型甕、碗、須恵器碗、広口瓶、灰釉陶器広口瓶がある。遺構の時期は、出土遺物により平安時代（10世紀前葉）とする。（新井）

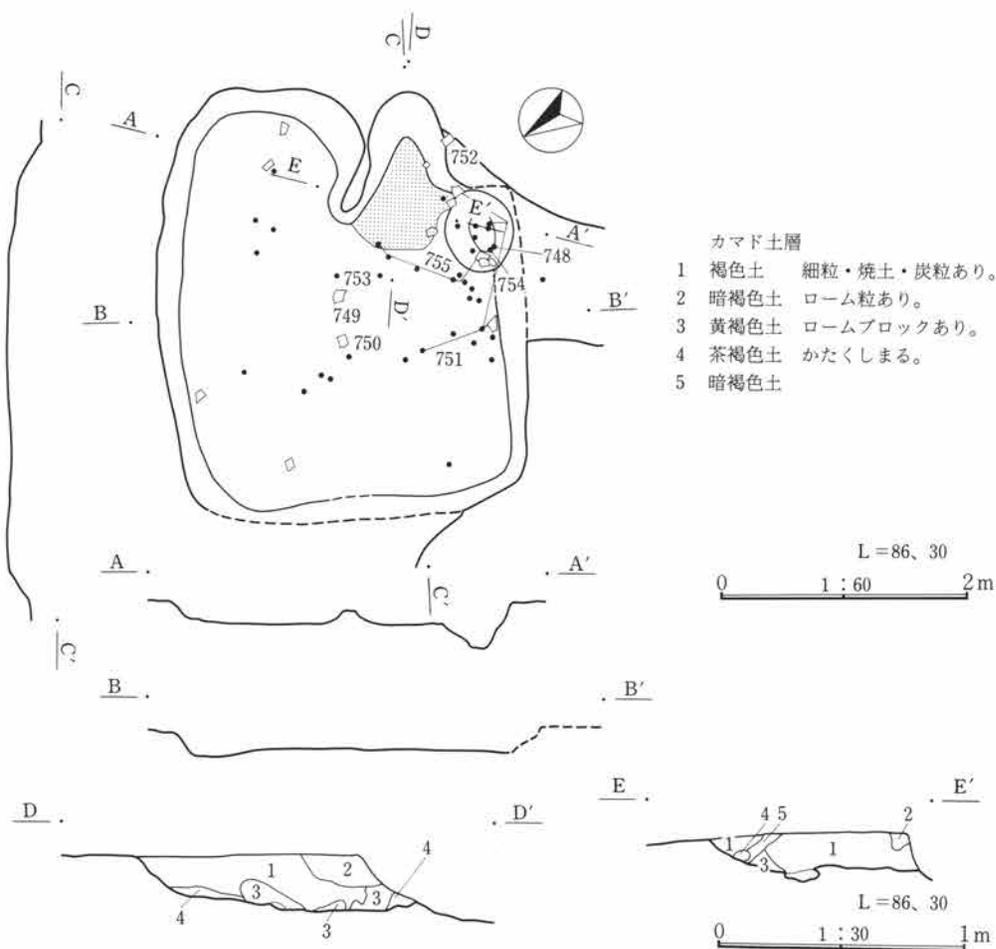


第330図 6区11号住居跡遺物図

第102表 6区11号住居跡出土遺物観察表

(第330図、図版 140)

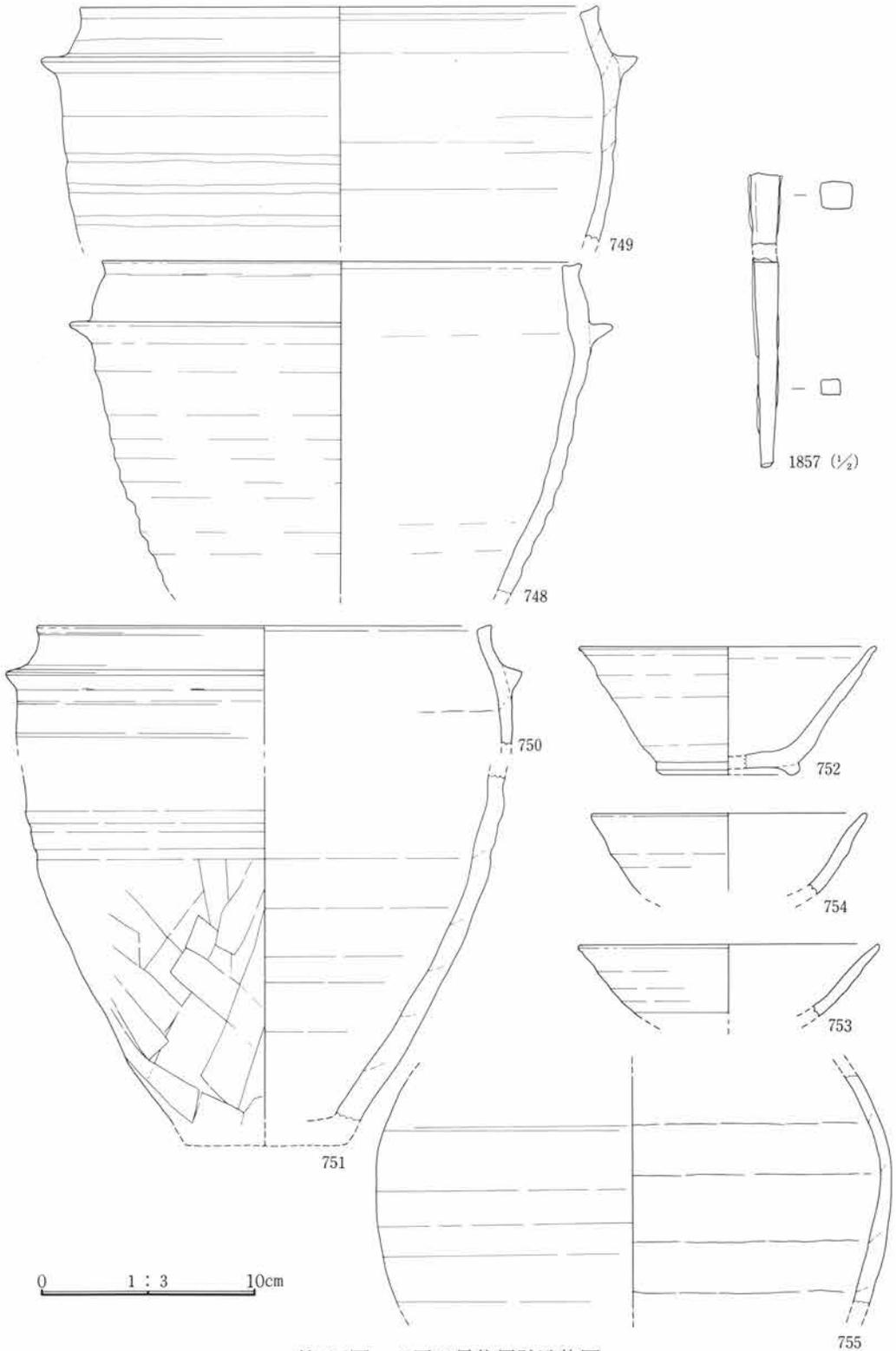
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
739	埴須恵器	口-[12.9]、底-[6.6]、高-5.0 $\frac{1}{2}$	砂粒、褐色石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい橙色~灰黄色	体部、内湾してひろがり、口縁部外反。端部丸味あり。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、方形	
740	埴須恵器	口-[13.9]、底-[5.9]、高-4.9 $\frac{1}{5}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい黄橙色	体下部で、やや張りをもってひろがり、口縁部、外反。口縁端部肥厚して丸味あり。底部、回転糸切り、貼付高台、外行する低い台形	内面、スス付着、灯明用
741	埴須恵器	口-14.0、底-6.5、高-5.1 $\circ$ 略完存	砂粒、石粒を含む、粗。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	体下部で、張りをもって、内湾し、ひろがる。口縁部外反。口縁端部、外側にゆるい稜をもつ。底部、回転糸切り、底部外縁に、断面、台形の貼付高台。器肉、薄手、均質	重ね焼きの痕跡あり
742	埴須恵器	底-6.9、高-(3.1) $\circ$ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰色	体部、内湾する。底部回転糸切り、貼付高台、断面、外行ぎみの台形。底部、厚手、体部は薄手	
743	甕土師器	口-[10.0]、底-[4.4]、胴-[10.4]、高-9.4 $\circ$ $\frac{3}{5}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい褐色	体中部で最大径をもつ、平底、小型甕。コの字状口縁、内側、2段のゆるい稜をもつ。体上部、ヨコ、下部、タテヘラケズリ	
744	瓶須恵器	胴-[16.1]、底-8.9、高-(14.2) $\circ$ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。灰色	平底。体上部で最大径をもつ、瓶。内面、粘土積痕あり、指ナデ、指おさえの後、ロクロナデ	
745	甕土師器	口-[25.4]、高-(6.5) $\circ$ 小片	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色	体上部で丸味をもち、頸部ゆるくしまり、口縁部外反、端部、ゆるい外稜をもつ。器肉、やや厚手。体部、ヘラケズリ調整	
746	瓶須恵器	頸-[10.0]、高-(4.9) $\circ$ 小片	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。橙色	体上部で丸く張りをもち、頸部しまる。器肉、薄手、均質。ロクロナデ調整	
747	長頸瓶灰釉陶器	口-[12.0]、頸-[5.4]、高-(8.5) $\circ$ $\frac{1}{5}$	石粒を含む、細密。還元、硬質。灰白色、釉-灰オリーブ色	体上部で張りをもち、頸部、強くしまる。長くたちあがり、口縁部外反。口縁端部、外縁帯をもち、内側に凹線めぐる。ロクロナデ調整。頸部外面、ハケナデ、内面、窯滓付着	



第331図 6区13号住居跡遺構図

6区13号住居跡 (第331・332図、第103表、図版141)

本住居跡は、基本土層の第4層で、1号、4号溝と重複して確認された。重複関係は、本住居跡が溝より新しい。規模は、西辺で2.75m、北辺で3.46m、南辺で2.50mを測り、方位は南辺でE-31°-Sである。平面形は、東西に長い方形を呈するが、南辺に比して東北隅が突出する北辺が長い。床面は、ローム上に薄く第4層を踏み固めている。壁際が一様に軟弱である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の南寄り確認された。左袖は、地山を掘り残り住居内に長く伸び、住居東北隅を仕切る位置にある。燃焼部全体は、地山を大きく半円状に掘り込み、壁外に突出する。壁に袖石と思われるものが数個残存している。焼土、炭化物の量は多く、住居内にも分布する。貯蔵穴は、東南隅に接して長径65cm、短径54cm、床面からの深さ20cmの円形土坑が確認された。中には、大小の礫4個があり、石組を推定させる。遺物は、住居内全体に見られ大小の礫が多い。羽釜を始めとして、土師器碗、須恵器碗、瓶がある。遺構の時期は、出土遺物により平安時代(10世紀後葉)とする。(新井)



第332図 6区13号住居跡遺物図

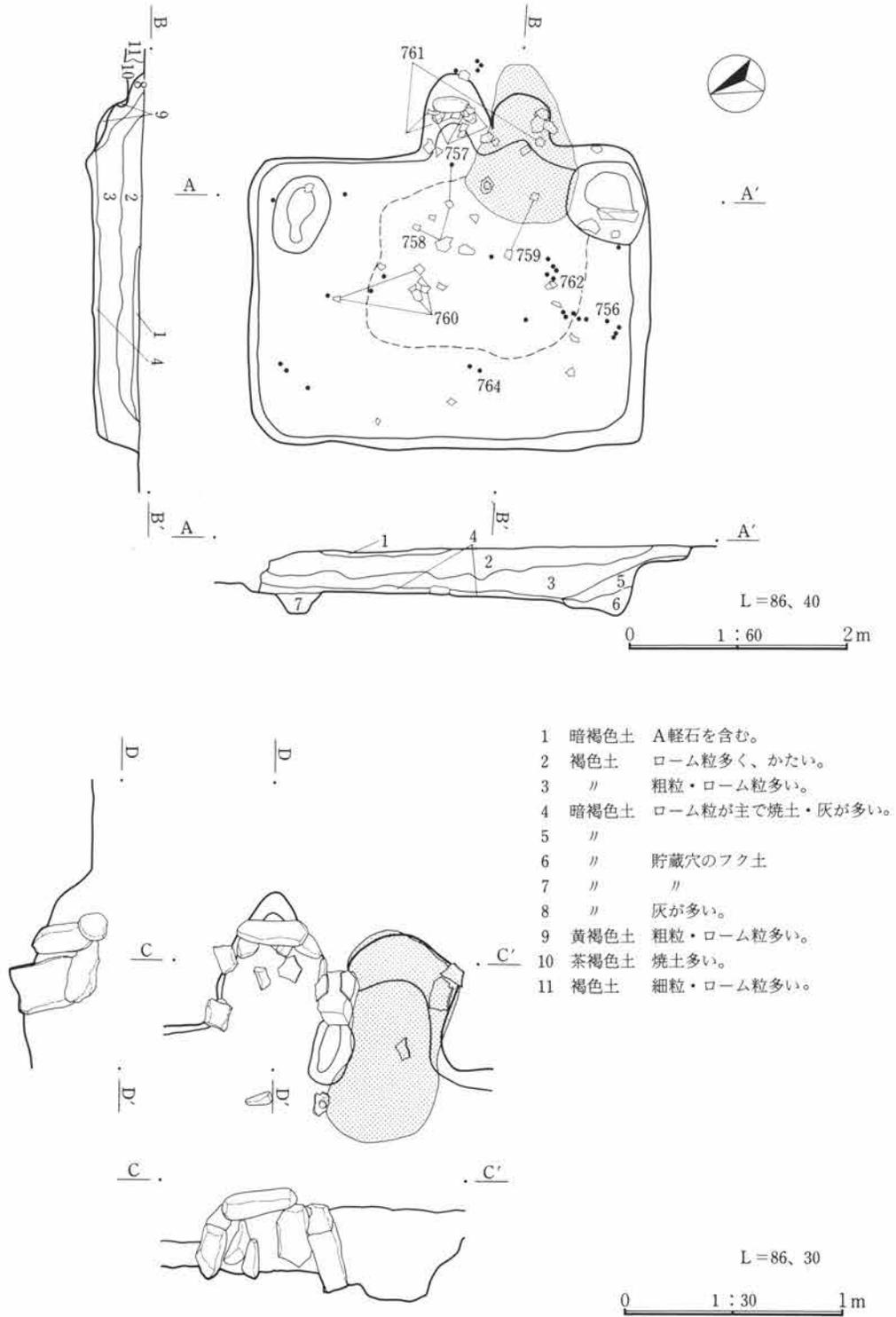
第103表 6区13号住居跡出土遺物観察表

(第332図、図版 141)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
748	羽釜	口-[22.2]、高一(15.2)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰色。内面、黒色	体部、ふくらみ少なく細身。口縁部内傾し、端部でたちあがる。口縁端部、中央凹み、外側につまみ出しあり。鑿断面、上むきの三角形。体部、ロクロナデ調整	
749	羽釜	口-[24.0]、高一(10.8)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	体部、やや丸く、口縁部内傾。口縁端部、中央に凹みをもち、内斜。鑿断面、上向きの三角形。器肉、薄手。体部、ロクロナデ調整	
750	羽釜	口-[21.0]、高一(5.5)○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。橙色	体部丸く、口縁部内傾して、たちあがる。口縁端部、平坦。鑿断面、三角形。体部ロクロナデ、器肉、薄手	
751	羽釜	胴-[22.3]、高一(15.8)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。浅黄橙色	底部より、直線的にたちあがり、体中部で内湾する。粘土積痕あり。ロクロナデ、体下部、ヘラケズリ調整	
752	埴須恵器	口-[13.8]、底-[6.7]、高一(5.9)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。灰色	体部、直線的にひろがり、口縁部、薄手で、わずかに外反。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外行する四角形。ロクロ右回転	
753	埴須恵器	口-[14.0]、高一(3.3)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい黄橙色	体下部で内湾してひろがり、口縁部わずかに外反する。身の浅い埴と思われる。体部ロクロナデ調整	
754	埴須恵器	口-[12.8]、高一(3.7)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	体下部で内湾してひろがる。口縁端部薄手。身の浅い埴。体部ロクロナデ調整	
755	瓶須恵器	胴-[24.0]、高一(10.5)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を多く含む。還元、軟質。灰白色	体中～上部で張りをもつ。粘土積痕あり、ロクロナデ調整	
1857	釘か鉄製品	長-(2.2) (6.4)、幅-0.9・0.6、厚-0.7・0.5、断面、四角形の鉄製品、片端、太く、片端、細い。2点あり。同一個体と思われる			

## 6区14号住居跡(第333・334図、第104表、図版142)

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。東辺で1号溝と重複し、本住居跡が新しい。東辺に新旧2基のカマドを持ち、貯蔵穴のあり方も合せて、本住居跡は建替えを伴う拡張住居と推定される。拡張前の規模は、西辺で推定3.20m、北辺2.60mを測り、方位は南辺でE-24°-Sである。平面形は、南北に長い方形を呈する。壁は、緩い立ち上がりを持ち、高さ約40cmである。床面は、ロームを踏み固めており、平坦で堅緻である。カマドは、東辺の南寄り確認された。地山を壁外に掘り込み、甕の破片を芯にして黄白色粘質土を貼付している。焼土、炭化物の量は



第333図 6区14号住居跡遺構図

第6章 検出された遺構と遺物

多く、全体に焼けているが、袖石等は抜き取られている。貯蔵穴は、東北隅で長径70cm、短径47cm、床面からの深さ19cmの円形土坑が確認された。明確な伴出遺物は、カマド内須恵器甕がある。

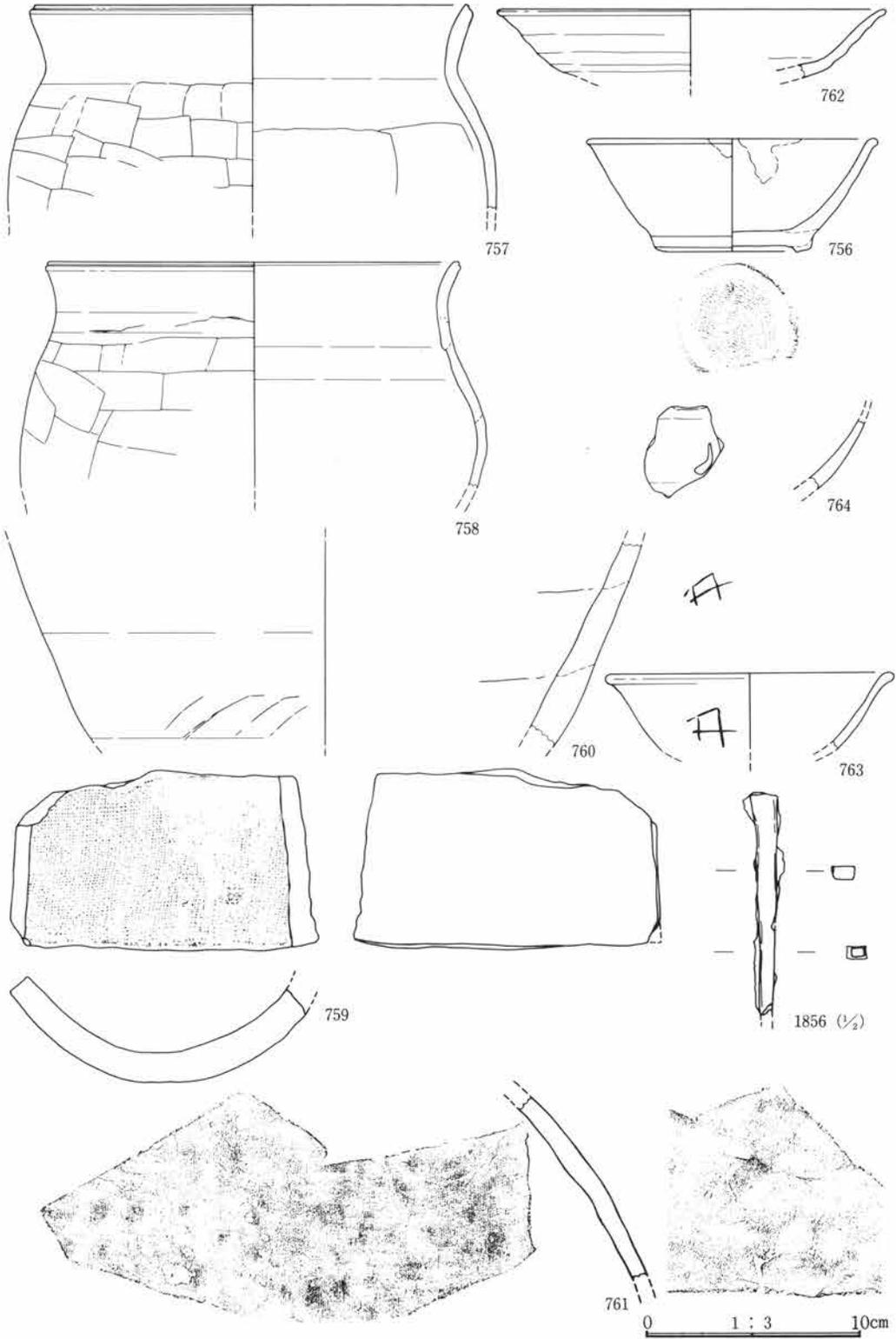
拡張は南辺側に行なわれている。西辺で3.60m、南辺で2.70mの規模があり、平面形、床面、壁の状態は拡張前と同じである。カマドは東辺の中央部にある。右袖は拡張前のカマドを壊している。両袖口には、砂岩質の面取りされた削石を対に据え、同じく煙道にかかる位置では角閃石安山岩の転石を鳥居状に架している。燃烧部中央寄りには支石がある。貯蔵穴は、東南隅に接して径約70cm、床面からの深さ16cmの円形土坑がある。遺物は、住居内全体から土師器甕、碗、須恵器甕があり、碗の中に墨書、刻書2点がある。遺構の時期は、平安時代（10世紀前葉）とする。

(新井)

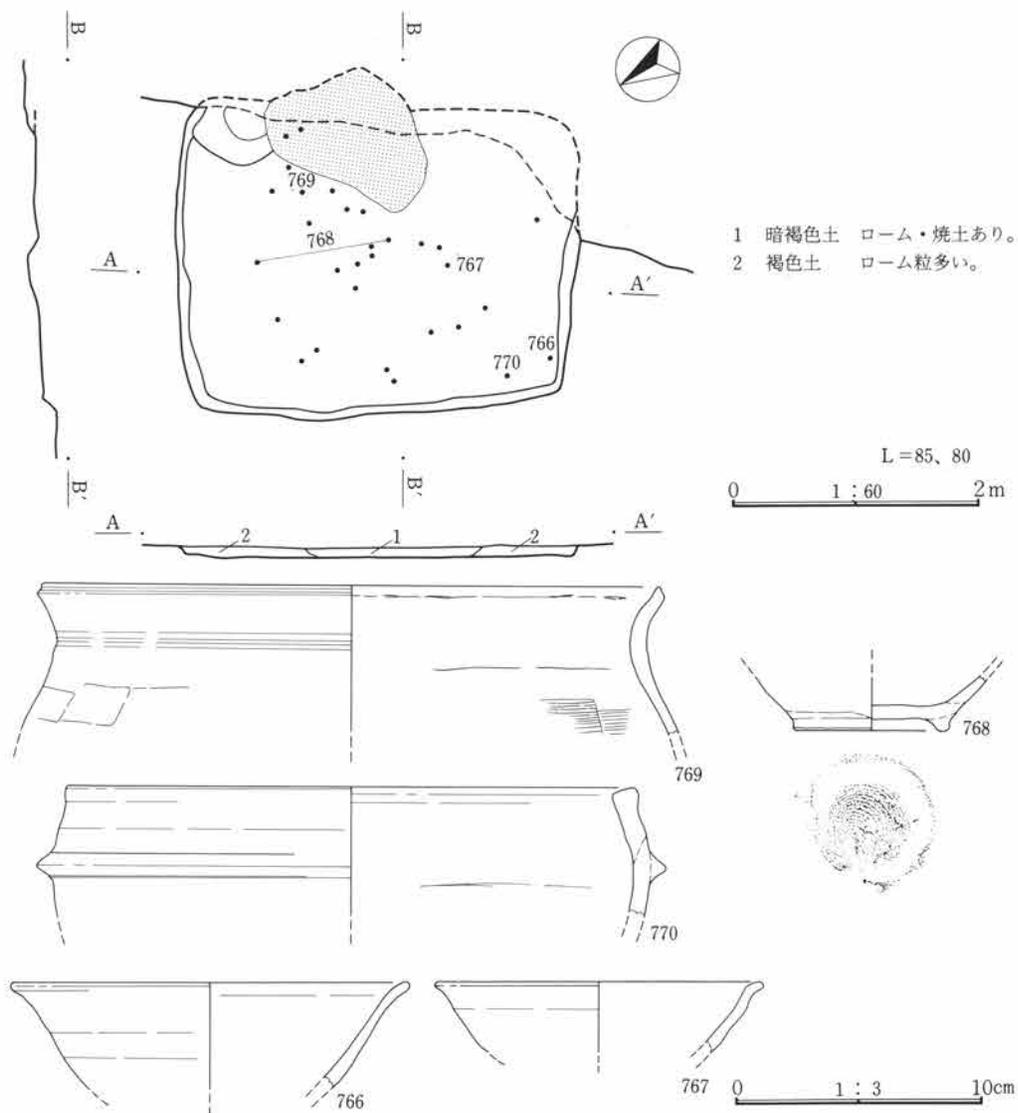
第104表 6区14号住居跡出土遺物観察表

(第334図、図版 142)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
756	碗 須恵器	口-[13.5]、底-[7.4]、高-5.2 $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、軟質。灰色	体部内湾してひろがり、口縁部外反。口縁端部丸く、外側に稜あり。底部回転糸切り、低い台形の高台貼付	口縁部内外、スス付着一灯明用
757	甕 土師器	口-[20.0]、高-(9.4) $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒、輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	わずかにコの字状口縁の形骸をとどめる口縁部。口縁端部、肥厚し、外側に沈線めぐる。体部、ヘラケズリ調整。器肉、厚手	
758	甕 土師器	口-[19.0]、高-(10.4) $\frac{1}{4}$ 口~胴 $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	コの字状口縁の形をとどめる口縁部。口縁端部肥厚し、外側に沈線めぐる。体部ヘラケズリ。器肉、厚手	
759	瓦	長-(8.0)、幅-(13.6) $\frac{1}{4}$ 小片	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質	丸瓦、布目あり、側端及び片端、ヘラケズリ	
760	甕	○小片のみ	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。橙色	器肉、厚手、大型の器形。粘土積痕残り、ヨコナデ。大型の甕か	
761	甕 須恵器	○小片のみ	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	平行タタキ目、ナデ、内面、無文のアテ具痕あり	
762	碗 須恵器	口-[18.0]、高-(3.1) $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	体下部で張りをもち内湾してひろく、口縁部わずかに外反。端部丸味あり体部ロクロナデ調整、身の浅い碗	
763	碗 須恵器	口-[13.4]、高-(3.5) $\frac{1}{4}$	砂粒、白色石粒を含む。還元、やや軟質。灰白色	体部丸く内湾してひろがり、口縁部外反。口縁端部肥厚して、丸味あり。体部ロクロナデ調整	フク土出土 体外面、刻字あり「井」字か
764	碗 須恵器	○小片のみ	砂粒を含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	体部内湾してひろがる。ロクロナデ調整	体外面、墨書あり。文字不明
1856	釘 鉄製品	長-(6.8)、幅-0.7・0.4、厚-0.4・0.3、断面、やや扁平な四角形、片端に向かって細くなる。両端、折れ			



第334図 6区14号住居跡遺物図



第335図 6区17号住居跡遺構、遺物図

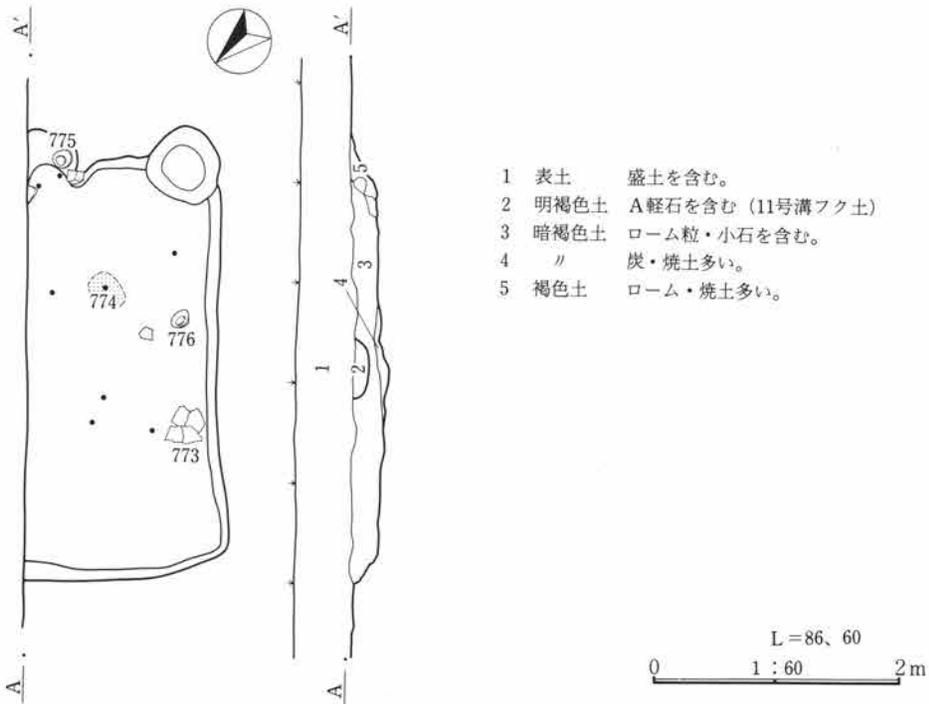
6区17号住居跡 (第335図、第105表、図版142・143)

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。東辺側で7号溝と重複し、本住居跡が新しい。規模は、西辺で3.26m、北辺で推定2.45mを測り、方位は北辺でE-40°-Sである。平面形は、南北に長い方形を呈する。床面は、ロームを踏み固め、平坦で堅緻である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の中央部に広い焼土と炭化物の分布があり、痕跡と思われ、袖石は貯蔵穴内に崩落している。貯蔵穴は、東北隅に接して長径70cm、短径45cm、床面からの深さ7cmの円形土壇が確認された。遺物は、少量ながら全体に見られた。羽釜を始めとし、土師器甕、埴がある。遺構の時期は、出土遺物により平安時代(10世紀前葉)とする。(女屋)

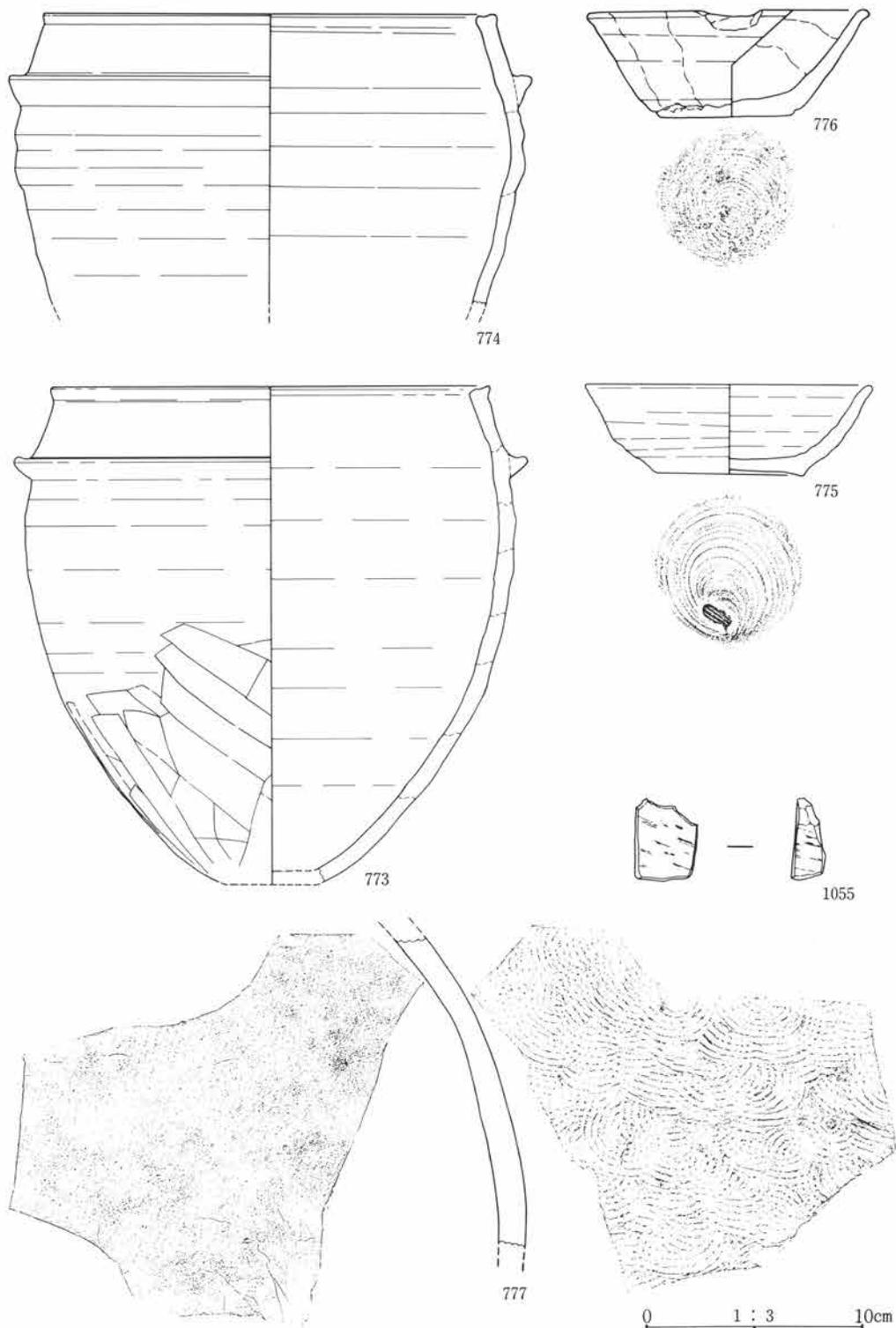
第105表 6区17号住居跡出土遺物観察表

(第335図、図版 142)

番 号	土 器 種 類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
766	碗 須恵器	口—[16.0]、高—(4.2)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒、輝石を含む。酸化、やや軟質。橙色	体下部で内湾してひろがる。口縁部外反。口縁端部丸味あり。体部ロクロナデ調整	
767	碗 須恵器	口—[11.0]、高—(2.8)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。灰黄色	体部内湾してひろがる。口縁部外反、端部、外側に稜をもつ。体部ロクロナデ調整	
768	碗 須恵器	底—6.2、高—2.0○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を多く含む、粗。還元、やや軟質。灰色	底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外行きみの低い台形。ロクロ右回転	
769	甃 土師器	口—[25.0]、高—(5.8)○小片	砂粒、白色石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	コの字の形をわずかに残す甃。頸部のくびれ弱く、口縁部外反する。口縁端部、外側に肥厚し、沈線めぐる。体部ヘラケズリ調整。器肉、厚手	
770	羽 釜	口—[23.0]、高—(5.1)○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。褐灰色	口縁部、短かく、内傾する。口縁端部内斜する。平坦面あり、鋳断面、三角形。ロクロナデ調整	



第336図 6区19号住居跡遺構図



第337図 6区19号住居跡遺物図

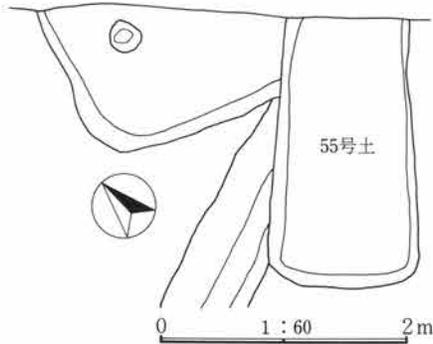
## 6区19号住居跡（第336・337図、第106表、図版142・143）

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。北半分は、本線敷用地と側道敷用地とに分けた調査による確認面のちがいがから、確認できなかった。中央部を近世の11号溝、西辺際に45号土坑が重複し、本住居跡が古い。確認をした規模は、南辺3.38m、西辺1.55mを測り、平面形は方形を呈すると推定される。方位は南辺でE-40°-Sを示す。床面は、暗褐色土を踏み固め、平坦で堅緻である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の中央寄りにある。両袖口部分は地山を掘り残し、右袖には河原石の割石を据えている。カマド内に残る焼土と炭化物の量は多く、住居内中央寄りにも3ヶ所の炭化物のまとまりが見られた。貯蔵穴は東南隅を占め、半分程壁外に突出する。径約50cmの円形で、深さは12cmある。遺物は、住居内にまばらに分布し、カマド内からは土師器坏があり、南辺側に半ば1個体分のつぶれた状態の羽釜のほかに甕、坏の破片がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴により平安時代（10世紀中葉）とする。（女屋）

第106表 6区19号住居跡出土遺物観察表

（第337図、図版 142）

番号	土器種類	法量（口径・底径・器高）遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
773	羽釜	口-[20.2]、底-[4.8]、高-(22.5)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	体上部に張りをもつ、卵形。口縁部内傾してたちあがる。口縁端部、中央に凹線めぐり、外側につまみ出す。鏝断面、端部の丸い三角形。体上部ロクロナデ、下部ヘラケズリ調整	内外、スス、炭化物付着
774	羽釜	口-[20.8]、高-(13.3)○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を多く含む。粗。還元、やや硬質。灰白色	体上部で張りをもつ。口縁部内傾し、口縁端部、中央部やや凹み、外側につまみ出す。鏝断面、端部丸味あり。体部ロクロナデ調整	
775	埴須恵器	口-13.2、底-6.9、高-4.1○完存	砂粒、石粒を含むが細密。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	平底。体下部で稜をもってたちあがりひろがる。口縁部、わずかに外反。口縁端部丸味あり。器肉、厚手、底部回転糸切り、ロクロ右回転	
776	埴須恵器	口-13.0、底-6.9、高-4.8○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を多く含む。粗。還元、やや硬質。灰白色	平底。体部、わずかに内湾してひろがり、口縁部外反、端部丸味あり。底部回転糸切り、ロクロ右回転、底部切り直し、補修痕あり。器肉、厚手	内面、リング状にスス付着、口縁部一部欠けあり一灯明用
777	甕須恵器	○小片	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰白色	大型の甕。外面、平行タタキ目、ナデ、内面、同心円のアテ具痕あり	混入か
1055	砥石	長-(3.7)、幅-2.9、厚-1.4、流紋岩。四面に砥面を持つ、中央、薄く、片端、厚い。片折れ			



第338図 6区21号住居跡遺構図

#### 6区21号住居跡 (第338図)

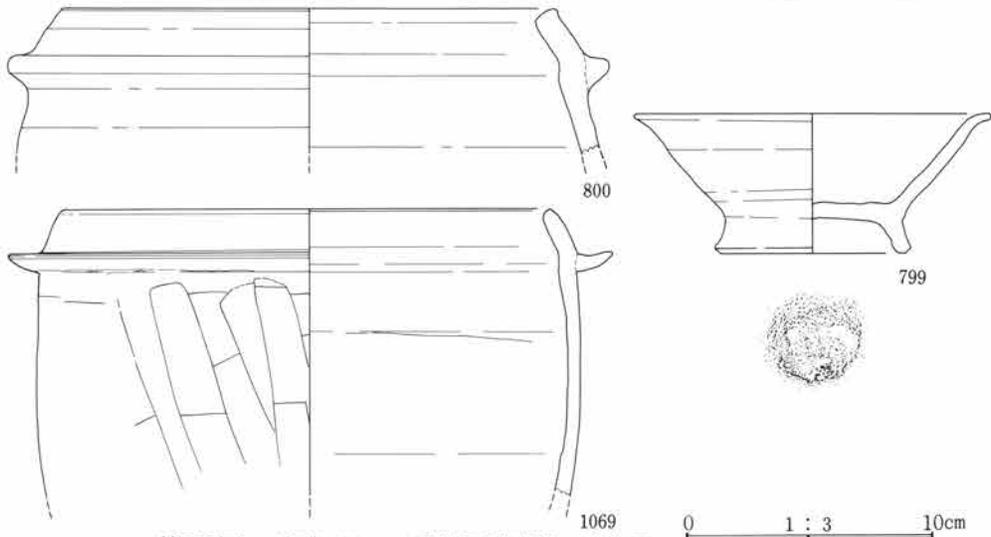
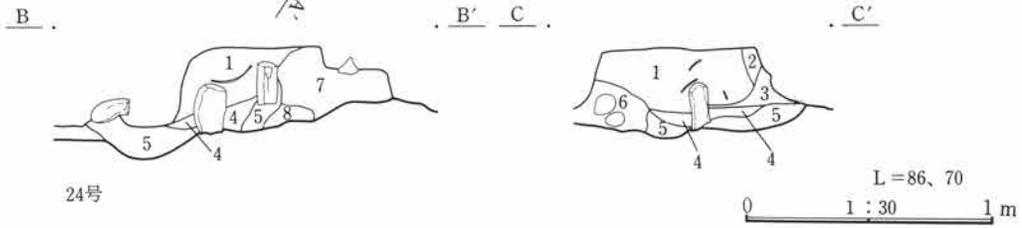
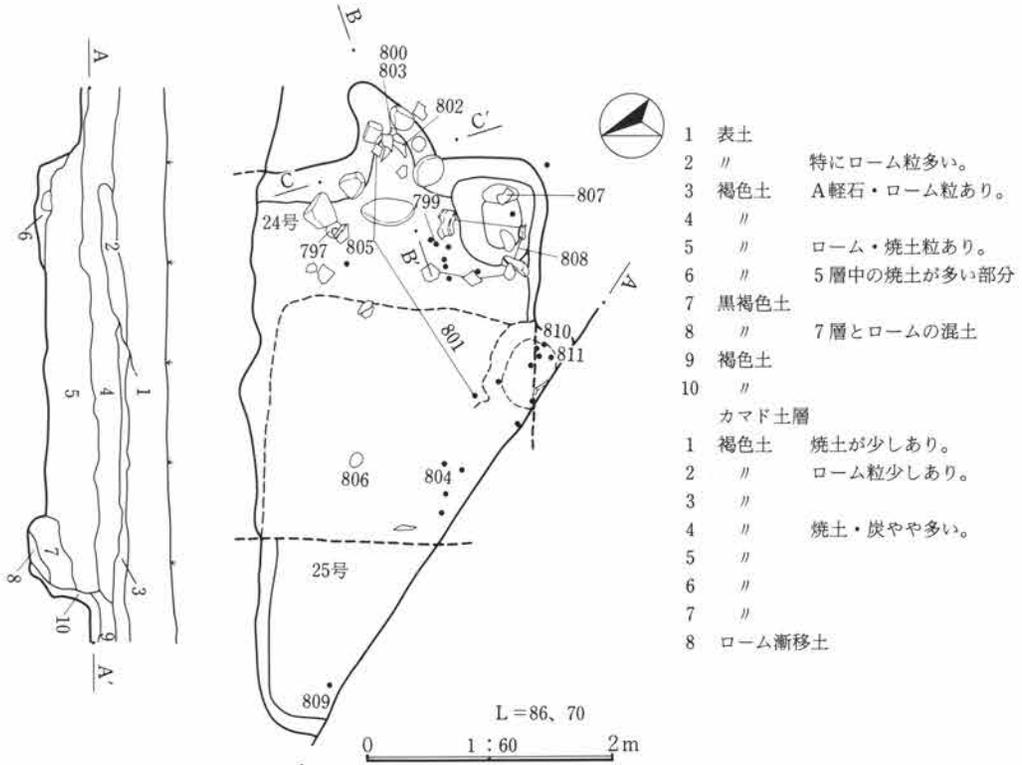
本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。側道部調査で南西隅を確認したのみである。南辺で、55号土壇、1号溝と重複するが、土壇より古く溝より新しい。確認した範囲での規模は、西辺で1.27m、南辺で1.60m、壁高は7cmである。床面は、第4層を踏み固めている。平面形は方形を呈すると推定できる。遺物は、土師器甕、坏の小破片が少量ある。遺構の時期は、平安時代とされる。(女屋)

#### 6区24号住居跡 (第339～341図、第107表、図版144・145)

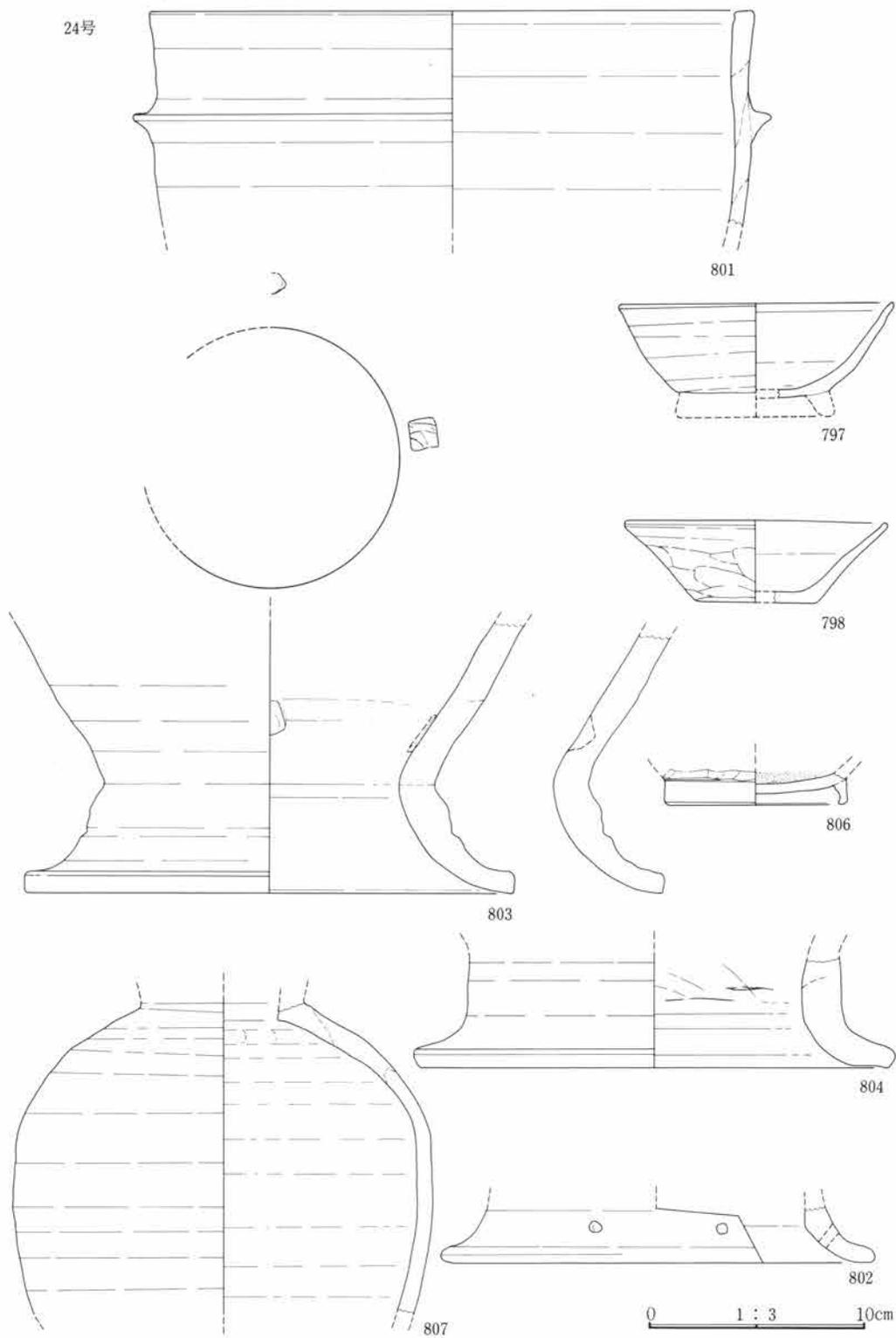
本住居跡は、25号住居跡と重複して江戸時代後期頃の民家の盛土下で確認された。北辺側には民家に伴う6号溝、西辺では25号住居跡が重複する。重複関係は、本住居跡が25号住居跡より新しい。規模は、東辺で2.30m以上、南辺で推定3.07mを測り、方位は南辺でE-21°-Sである。平面形は、東西に長い方形を呈すると推定される。床面は、暗褐色土を踏み固め、平坦だがやや軟弱である。壁は、断面によると緩い立ち上がりを持ち、高さ25cmである。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺中央部で確認できた。全体は壁外に突出し、一部は崩落しているが、焚口部を始めとして比較的大きな河原石を多く用いている。焚口は、石を鳥居状に渡したと思われる、中央部には凝灰岩質の切石が支石として据えられている。焼土、炭化物は、カマド内で少なく、むしろ住居内に多くかき出されたものか。貯蔵穴は、東南隅に接して長径66cm、短径61cm、床面からの深さ14cmの円形土壇が確認された。遺物は、大小の礫を含んでカマド周辺に多く見られた。羽釜、甕を始めとして、土師器甕、坏、高台付碗、須恵器甕、瓶、灰釉陶器碗がある。遺構の時期は、出土遺物により平安時代(10世紀前葉)とする。

#### 6区25号住居跡 (第339～341図、第107表、図版145)

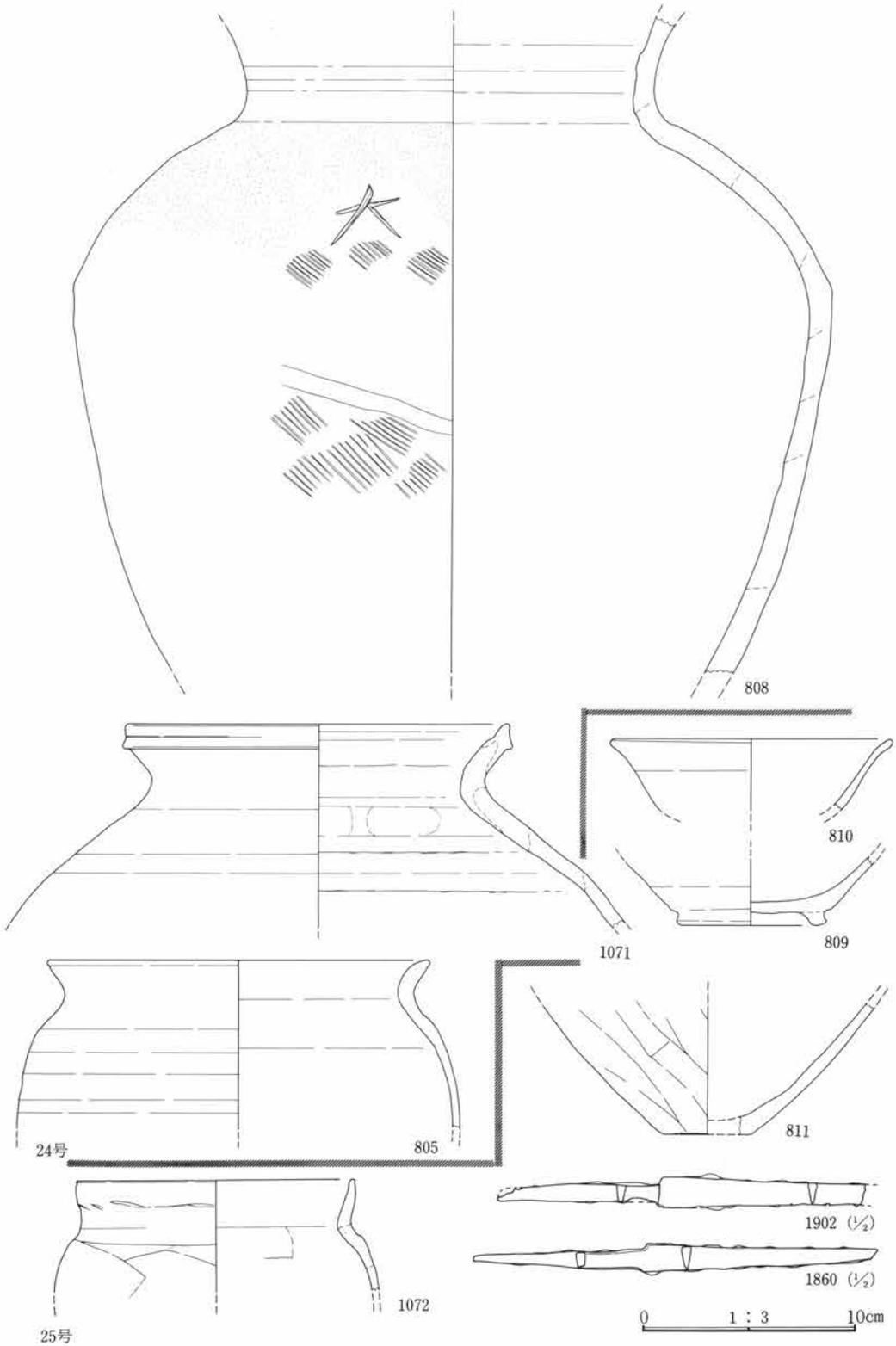
本住居跡は、24号住居跡と重複して確認された。確認されたうちの東半分は、24号住居跡の床面下であり、詳細を欠く。規模は、東辺で2.30m以上、北辺で推定3.05mを測り、方位は北辺でE-25°-Sである。平面形は、南北に長い方形と推定される。床面は、重複部分を除く西辺側で黒褐色土の貼床が見られ、やや軟弱である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺側の掘方に、多量の焼土と炭化物を伴った不整円形の土壇があり、痕跡と推定される。遺物は、カマド痕跡部分を除くと少ない。土師器甕、高台付碗がある。遺構の時期は、出土遺物から平安時代(10世紀前葉)とされる。(女屋)



第339図 6区24号、25号住居跡遺構、遺物図



第340図 6区24号、25号住居跡遺物図(2)



第341図 6区24号、25号住居跡遺物図（3）

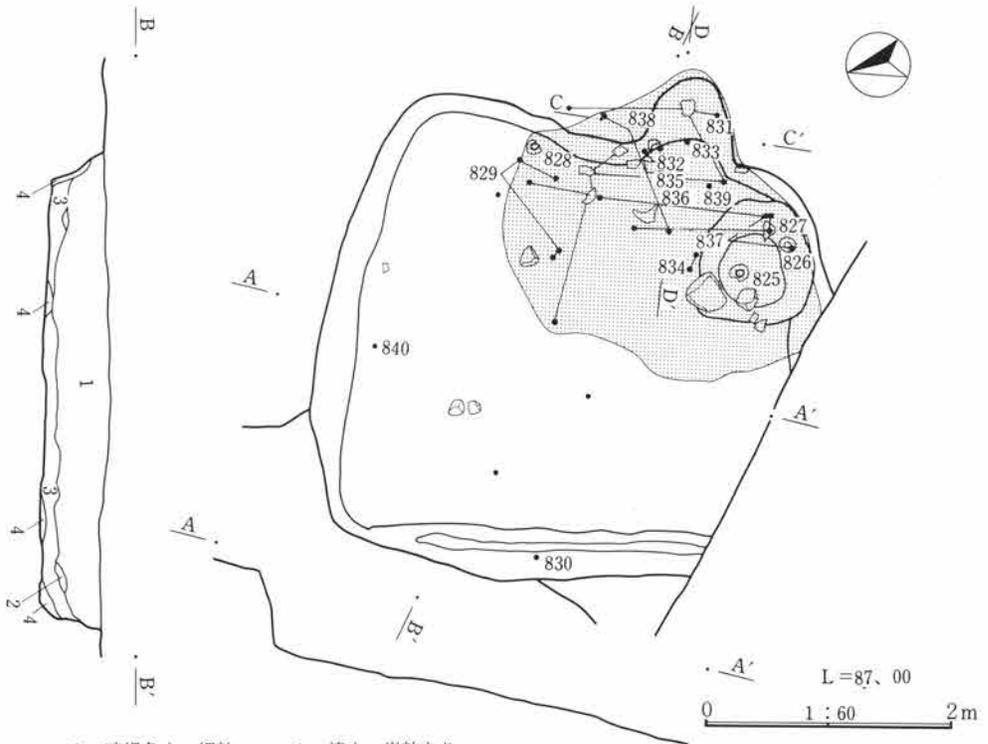
第107表 6区24号、25号住居跡出土遺物観察表

(第339~341図、図版 144・145)

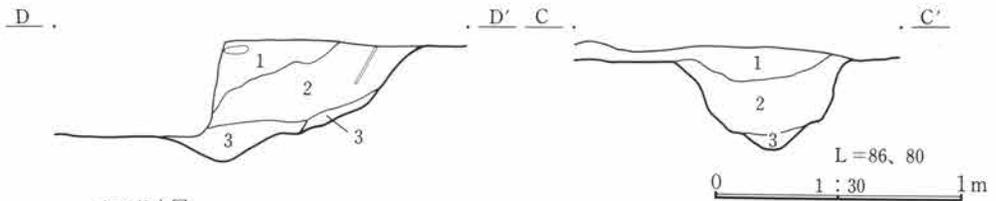
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
797 6区24号住	坩 須恵器	口-12.7、底-7.0、高一(4.3)○高台部を欠く	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰色	体下部で張りをもち、わずかに内湾してひろがる。口縁部外反。底部回転糸切り。ロクロ右回転。器肉、薄手	底部、切り直し補修痕あり。ゆがみあり
798	坏 土師器	口-[12.1]、底-[5.5]、高一3.6○ $\frac{3}{4}$	砂粒、褐色石粒を含む。酸化、軟質。にぶい褐色	平底。体中部でゆるく外反し、口縁部、わずかに内湾する。粘土積痕残り、体部、指ナデ調整。口縁部、内面、ヨコナデ	
799	坩 須恵器	口-[14.5]、底-[7.8]、高一5.6○ $\frac{3}{4}$	砂粒、石粒を含む、粗。還元、やや硬質。灰白色	体下部でやや張りをもち、口縁部外反する。口縁端部、丸味あり。底部回転糸切り、貼付高台。ハの字にひらく、高足高台	
800	羽 釜	口-[20.0]、高一(5.8)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、白色石粒を含む。酸化、やや軟質。浅黄色	口縁部内傾し、端部、内斜する。鋸断面、端部の丸い三角形。体部ロクロナデ調整	
801	甗	口-[28.0]、高一(9.8)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色	鋸~口縁部、長く、ほぼ直行する。口縁端部、平坦、鋸断面、上むきの三角形。体部ロクロナデ調整	
802	甗	脚裾-[19.7]、高一(2.6)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。灰黄色	裾部、内稜をもって、ハの字にひらく。端部、丸味あり。裾中に、1対の小孔あり。焼成後穿孔	
803	甗	脚裾-[22.6]、底部内-[12.0]、高一(12.5)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、白色石粒を含む。還元、やや硬質。灰色	体部、わずかに内湾してひろがり、裾部、大きく外反する。裾端部、外稜をもつ。底部内側に、受けの為の小孔あり(2個現存)。ロクロナデ調整	
804	甗	脚裾-[21.6]、高一(5.2)○小片	砂粒、白色石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい褐色	底部のくびれ部分、器肉、厚手、裾部、くの字にひらく。裾端部、外側に稜をもつ。ロクロナデ調整	
805	甗	口-[18.0]、高一(7.8)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。橙色	体部、丸味をもち、肩部で張りをもつ。頸部、しまり、口縁部くの字に外反する。体部ロクロナデ調整	
806	坩 灰釉陶器	底-8.4、高一(1.4)○底部のみ	砂粒を含む、細密。還元、硬質。灰白色、釉-明オリブ灰色	底部、回転ヘラケズリ調整、貼付高台、断面、直行する長方形、端部、内側につまみ出しあり。釉、内面全体と思われる	体部、外側より打ち欠きあり
807	瓶 須恵器	頸-[7.6] 胴-[19.4]○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。オリブ黒色	体部やや上位で張りをもつ、瓶。粘土積痕あり、ロクロナデ調整	

## 2 14地区の調査 (平安時代)

808 6区24号 住	甕 須恵器	頸一[19.1]、胴 一[35.4]、高 一(30.0)○ $\frac{1}{4}$	砂粒含むが細密。還元、 硬質。灰色	体中部よりやや上位で最大径をも ち、肩部、丸く張りをもつ。頸部し まって、たちあがる。体部外面、平 行タタキ目、ヘラナデ、内面、無文 のアテ具痕残り、ヘラナデ。頸部、 ロクロによる調整。器肉、均質	肩部「大」字刻 字あり。肩部、 自然釉かかる。 東海地方の産か
1069 参	羽 釜	口一[19.8]、高 一(11.5)	砂粒、石粒、輝石を多く 含む。還元、やや硬質。 灰白色	体部、丸味をもたず、細身。口縁部 内傾し、短かい。口縁端部、丸味あ り。鏝断面、上向きの日月状。体 部、鏝直下までタテヘラケズリ。体 部内面、ヨコナデ。器肉、薄手	
1071 参	甕 須恵器	口一[18.0]、胴 一[29.0]、高一(9. 5)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、白色石粒を多く含 む。還元、やや硬質。灰 色	体部丸味をもち、頸部しまり、短か くたちあがり、口縁部外反する。口 縁端部外縁帯をもち、中央に凹線め ぐる。粘土積後、ロクロナデ調整	
809 6区25号 住	碗 須恵器	底一[6.3]、高 一(2.9)○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含むが、細密。還 元、やや軟質。灰黄色	体部、内湾してひろがる。底部回転 糸切り、貼付高台、高台断面、端部 外側にめくれる、四角形	
810	碗 須恵器	口一[13.2]、高 一(3.4)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。粗。 酸化、やや軟質。にぶい 黄橙色	体部、内湾してひろがり、口縁部外 反する。口縁端部、丸味あり。体部 ロクロナデ調整。器肉、薄手	
811	甕 土師器	底一[4.0]、高 一(6.0)○小片	砂粒、輝石を含む。酸化、 軟質。明赤褐色	平底。卵形の体部をもつ甕。体部、 ヘラケズリ調整	
1072 参	甕 土師器	口一[13.0]、高 一(5.2)○ $\frac{1}{4}$	砂粒を多く含む。酸化、 軟質。にぶい赤褐色	体部の丸い、小型甕。頸部、ややし まり、口縁部たちあがって、わずか に内湾する。口縁端部丸味あり。体 部ヘラケズリ調整。器肉、厚手	
1860	刀 鉄製品	全長一18.9(刃部長一11.0、中子長一7.9)、刃部(幅一1.1、厚一0.4)、中子(幅一0.8、厚一0.4)、略完存			
1902	刀 鉄製品	全長一(17.2)(刃部一(9.5)中子一7.5)、刃部一(幅一1.1、厚一0.4)、中子一(幅一0.8、厚一0.4)、刃部、先端を欠く、No1860とほぼ同じ大きさ			

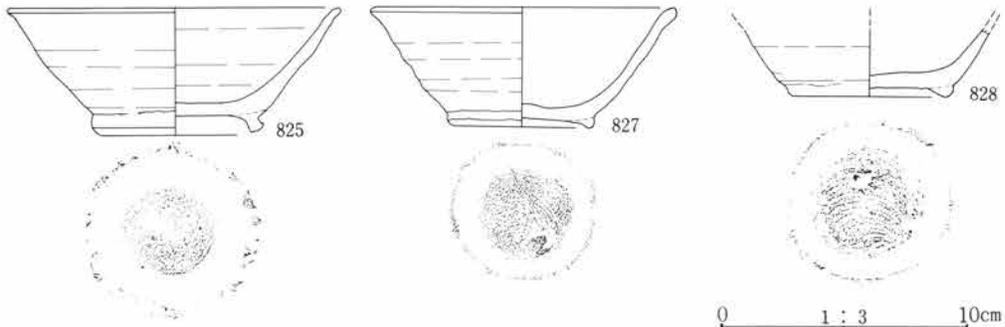


- 1 暗褐色土 細粒・ローム・焼土・炭粒あり。
- 2 焼土
- 3 褐色土 ローム・焼土・炭粒多い。
- 4 // ロームブロック多い。

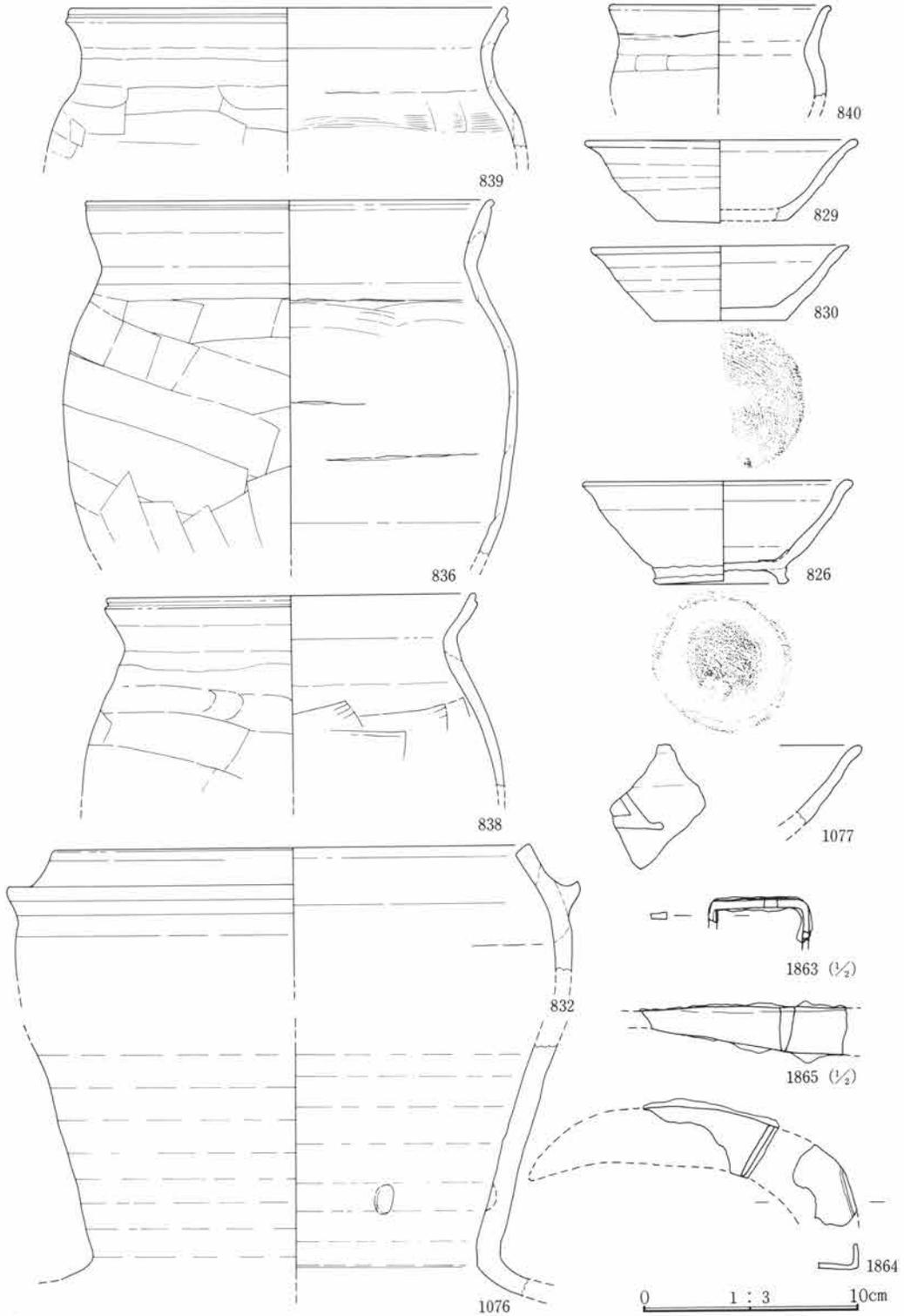


カマド土層

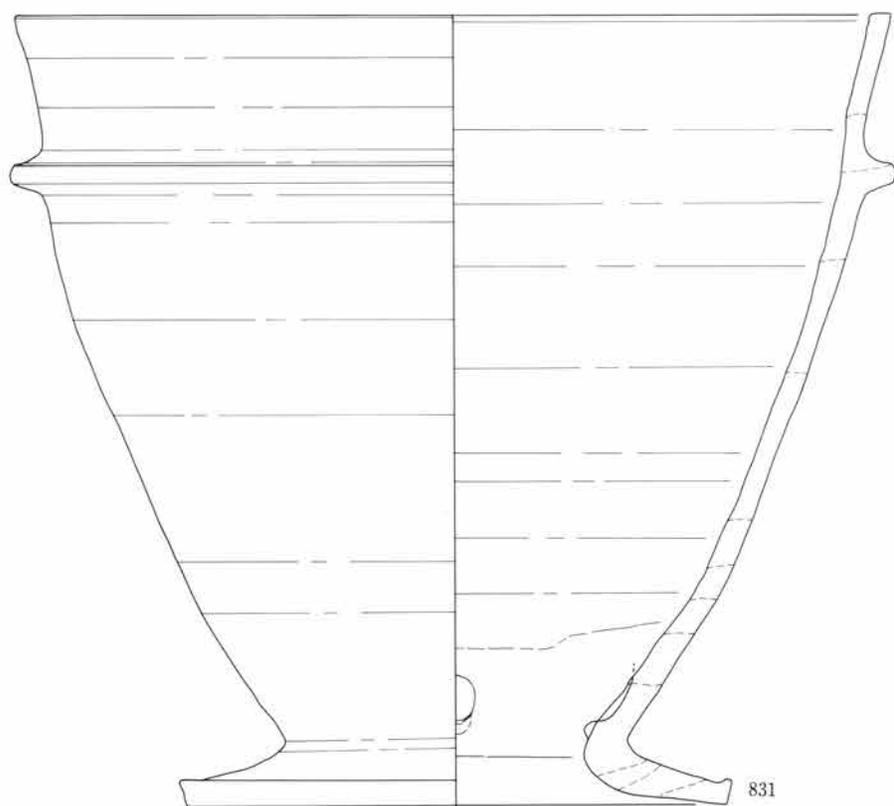
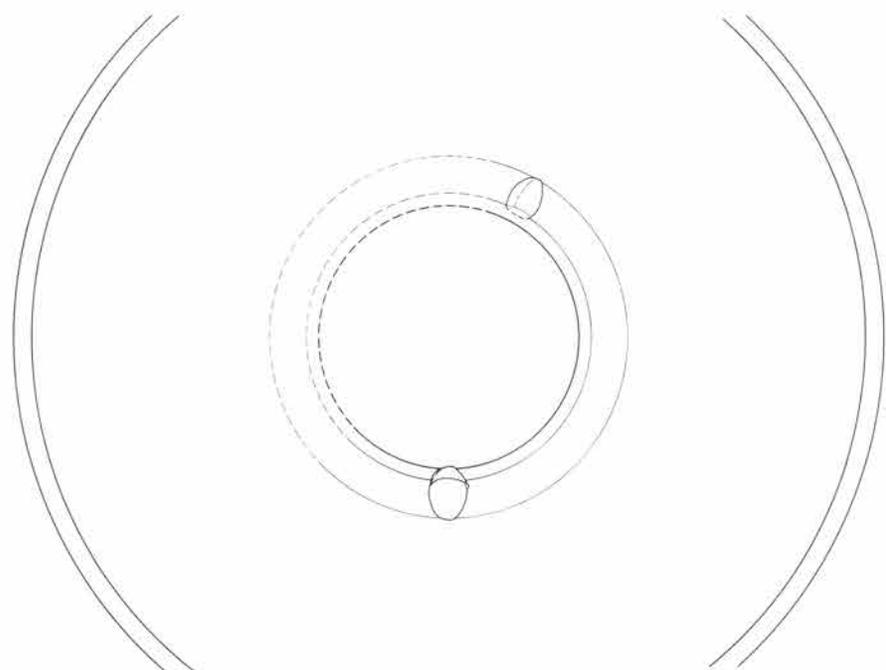
- 1 暗褐色土 ローム・焼土・炭粒あり。
- 2 // 粗粒・ローム・焼土・炭粒多い。
- 3 // 焼土・炭粒多い。



第342図 7区1号住居跡遺構、遺物図

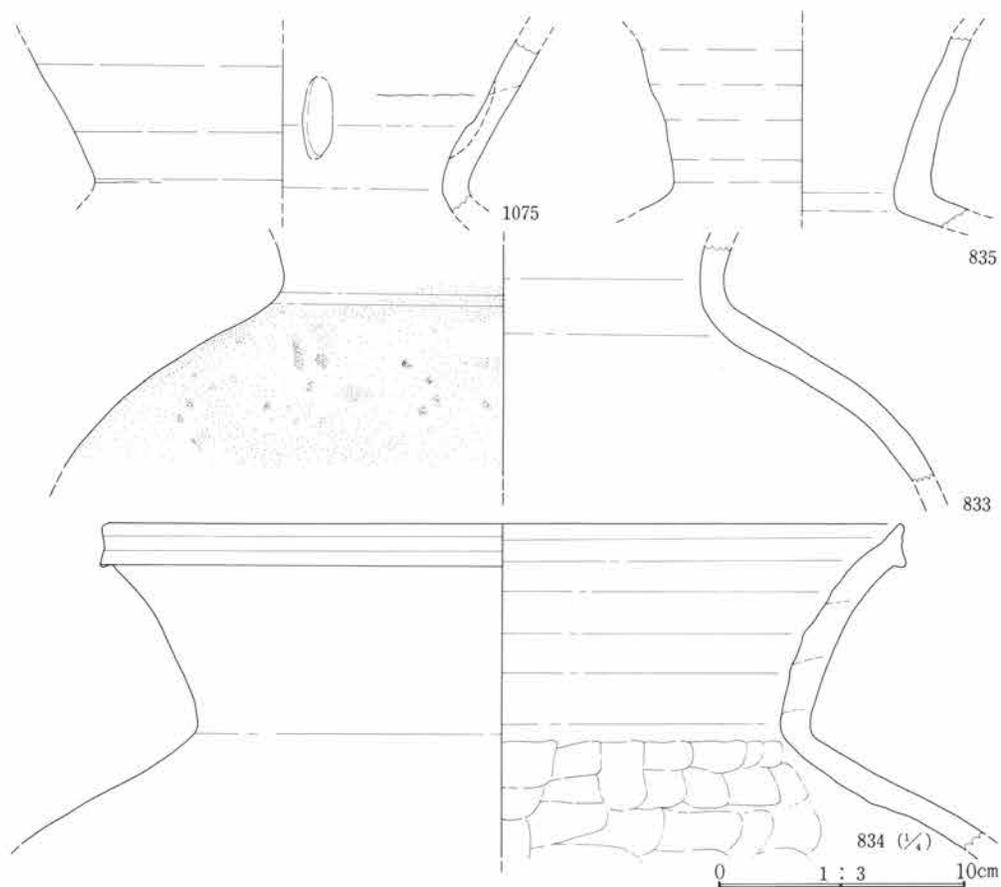


第343図 7区1号住居跡遺物図（2）



0 1 : 3 10cm

第344図 7区1号住居跡遺物図(3)



第345図 7区1号住居跡遺物図（4）

## 7区1号住居跡（第342～345図、第108表、図版145・146）

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。西辺で1号古墳周堀と重複し、本住居跡が新しい。西南隅は調査区外である。隣接して2号、4号、6区17号等があり、1号古墳東南側の住居群としてとらえられる。

規模は、東辺3.61m、西辺3.10m以上、北辺3.60mを測り、南辺は北辺に比べて短く、平面形は隅丸の台形である。方位は北辺でE-26°-Sである。床面は、暗褐色土を用いて、ほぼ全面に貼床を施している。中央部は堅緻だが、壁際になるとやや軟弱である。床面下の堀方では、各隅寄りに径1m前後の円形土壇があり、南辺では複数ある。このうち、カマド周辺のものに遺物が伴う。柱穴は確認されなかったが、西辺で周溝がみられた。幅25cm、床面からの深さ8cmで、堀方でも東北隅にのみ、短いながら確認されている。壁は、垂直に近い立ち上がりで、高さ約50cmある。北辺や東辺の壁中段では、径15cm前後、深さ10cm位の小ピットが斜め方向に掘られ、周溝の位置や壁際の土止め施設等、その関連を考えたが性格を明らかにできなかった。貯蔵穴は、住居東南隅に接して94×90cm、床面からの深さ18cmの円形土壇がある。カマドは、東辺の南寄りにある。壁際に袖口を持ち、茶褐色土を袖材としている。袖石は貯蔵穴付近にまで崩落し、これと一致す

第6章 検出された遺構と遺物

る様に焼土、炭化物、灰が多量に分布している。遺物は、床面から覆土中位まで住居全体から多量に見られた。羽釜、甕を始めとして埴、瓶、坏、鉄器、甕があり、埴には判読不可の墨書がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代（10世紀前葉）である。（新井）

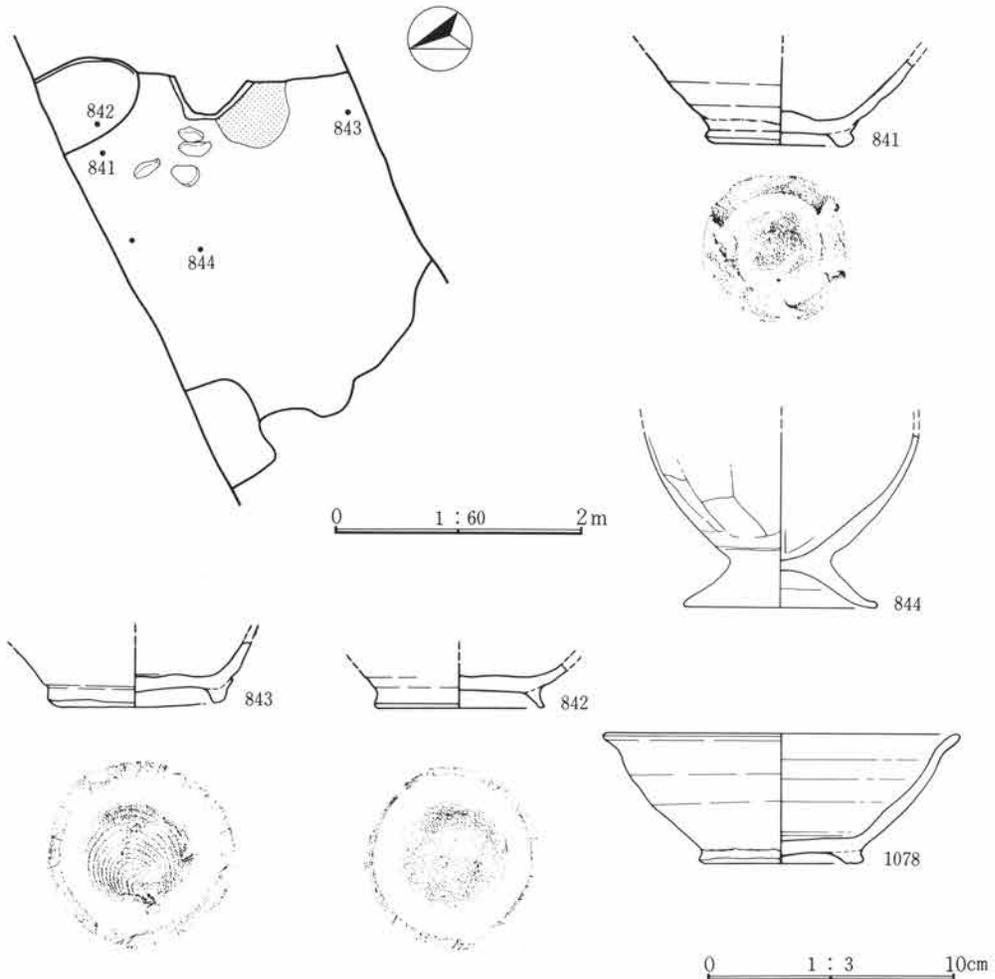
第108表 7区1号住居跡出土遺物観察表

(第342~345図、図版 145・146)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
825	埴 須恵器	口-13.4、底-6.9、高-5.1○略完存	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや軟質。灰黄色	体部わずかに内湾してひろがり、口縁部、外反。口縁部丸味をおびる。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外行する四角形、粗雑。ロクロ右回転	
826	埴 須恵器	口-12.5、底-6.3、高-4.8○完存	砂粒、白色石粒を多く含む。酸化、やや軟質。褐色	体部、内湾してひろがる。口縁部外反し、端部丸味をもつ。底部回転糸切り、貼付高台、断面、端部外側にめくれる、長方形。ロクロ右回転	
827	埴 須恵器	口-12.4、底-5.9、高-4.8○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。灰色	体部わずかに内湾してひろがり、口縁部、外反。外縁部、丸味あり、底部回転糸切り、外縁部低く小さい台形高台貼付、ロクロ右回転	口縁部、一部分欠けあり。内外スス付着一灯明用か
828	埴 須恵器	底-6.4、高-(2.6)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい橙色	体部、内湾する。底部、回転糸切り、底部外縁に、低く小さい台形の貼付高台、底部の器内、薄手、体下部厚手。ロクロ右回転	内底面に、尻引きの糸と思われる糸圧痕あり
829	坏 須恵器	口-[12.7]、底-[6.0]、高-3.7○ $\frac{2}{3}$	砂粒、白色石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	平底。体中位で稜をもち、ひろがる。口縁部外反、端部丸味あり。底部、回転糸切り、ヘラケズリ調整?	
830	坏 須恵器	口-[12.0]、底-[6.2]、高-3.4○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。浅黄色	平底。体中部で稜をもち、ひろがる。口縁部外反、端部丸味をもつ。底部回転糸切り、ロクロ右回転	
831	甕	口-[35.4]、底-[13.8]、脚裾-[22.2]、高-31.7○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	体部、ゆるく内湾して、鉢形にひろく。口縁部、直行し、端部平坦。鏝断面、端部の丸い、台形。脚部、大きく、くの字に外反、裾端部、外縁帯をもつ。ロクロナデ、体下部、ヘラケズリ。体内面、ヨコナデ、底部ヨコヘラケズリ。底板受けの小孔-(指頭によるつまみ出し)2個あり	
832	羽釜	口-[22.2]、高-(5.9)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、白色石粒を含む。酸化、やや硬質。橙色	口縁部、内傾する。端部平坦、内斜。鏝断面、上向きの三角形	
833	甕 須恵器	頸-[17.8]、高-9.2○小片	砂粒含むが細密。還元、硬質。灰色	頸部しまってたちあがり、体部、肩部で丸い張りをもつ。ロクロナデ調整、肩部、自然釉かかる	No808「大」字の甕と胎土、焼成、器形近似

## 2 14地区の調査 (平安時代)

834 7区1号 住	甕 須恵器	口-[32.4]、頸 -[24.7]、高 -(12.9)○小片	砂粒、石粒を含むが、細 密。還元、硬質。灰色	体部、肩部で張りをもち、頸部しま り、口縁部外反する、大型の甕。口 縁端部、外縁帯をもち、中央凹む。 口縁内面も凹線めぐる。体部外面、 平行タタキ目、内面、無文のアテ具 痕あり。口頸部、ヨコナデ調整	秋間産か
835	瓶 須恵器	頸-10.4、高-(7. 8)○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含むが、細。還元、 やや軟質。浅黄色	頸部、しまつて、直線的にたちあが り、口縁部でひらく、瓶。ロクロナ デ調整	
836	甕 土師器	口-[19.0]、高 -(16.3)、胴 -[21.0]○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒、輝石を含む。 酸化、軟質。橙色	体部丸味をもち、口縁部コの字の形 状をわずかに残す。口縁部、やや肥 厚し、端部外側、沈線めぐる。体部 外面、ヨコ、タテヘラケズリ調整	
838	甕 土師器	口-[17.1]、高 -(9.0)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒、輝石を含む。 酸化、軟質。明赤褐色	コの字状口縁の形をわずかに残す 甕。頸部のしまり弱く、口縁部外反。 端部外側に沈線めぐる。体部ヘラケ ズリ調整。器肉、厚手	
839	甕 土師器	口-[20.2]、高 -(6.5)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒、輝石を含む。 酸化、軟質。にぶい褐色	コの字状口縁の形をわずかに残す 甕。頸部のしまり弱く、口縁部外反。 端部外側に沈線めぐる。体部ヘラケ ズリ調整。器肉、厚手	
840	甕 土師器	口-[10.2]、高 -(4.1)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。橙色	くの字に外反する口縁をもつ小型甕 頸部内側に肥厚し、体部丸味あり。 口縁端部丸味あり。体部ヘラケズリ	
1075 参	甕	底-[15.0]、高 -(5.8)○小片	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、やや軟質。にぶい 橙色	体部、鉢形にひらき、脚部くの字に ひらく甕。内面、底板受けの小孔あ り。体部ロクロナデ調整	
1076 参	甕	底-[18.8]、高 -(10.8)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、やや軟質。橙色	体部、鉢形にひらき、脚部くの字に ひらく甕。内面、底板受けの小孔あ り。体部、ロクロナデ調整	
1077 参	埴 須恵器	○小片	砂粒、石粒を多く含む。 還元、やや硬質。灰白色	体部、内湾してひろがり、口縁部や や外反する。体部ロクロナデ調整	体外面、墨書あ り。文字不明
1863	コの字形 鉄製品	長-3.2+(1.3)+(0.7)、幅-0.3、厚-0.4、断面、四角形、両端、ほぼ直角に折り 曲げ、両端部、断面扁平			
1864	鉄製鎌	小片2片、接合しない。長-(6.5)+(3.7)、幅-2.6、厚-1.7、柄着装部折りかえ しあり			
1865	鉄製刀子	長-(6.3)、幅-(1.4)、厚-(0.4)、刃部の一部分			



第346図 7区2号住居跡遺構、遺物図

7区2号住居跡 (第346図、第109表、図版148)

本住居跡は、1号古墳周堀確認を目的としたトレンチ内で、カマド付近の住居中央部だけが確認された。東辺側に7号溝が重複し、西辺側は一樣に攪乱されている。溝の性格、住居跡との重複関係は不明である。

確認できた範囲での規模は、東辺2.62m以上、東西方向2.63m以上である。平面形は南北に長い方形を呈すると推定される。床面はロームを掘り下げ、平坦に踏み固め堅緻である。カマドは、東辺で焼土を伴う痕跡が確認された。壁外の状態は不明だが、左袖はロームを掘り残し、近くには袖石と推定される河原石が4点ある。焼土量は多く、壁の一部は焼土化していた。貯蔵穴と推定される円形の土壇が、カマド左側に若干の痕跡として確認された。遺物は少なく、カマド周辺から土師器台付甕、高台付碗が出土している。遺構の時期は、出土遺物から平安時代(10世紀前葉)とされる。

(小安)

第109表 7区2号住居跡出土遺物観察表

(第346図、図版 148)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
841	碗 須恵器	底—5.4、高一(3.4)○ $\frac{1}{5}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい橙色	体下部で張りをもち、内湾する。底部回転糸切り、貼付高台、断面、外行する四角形。ロクロ右回転	
842	碗 須恵器	底—6.7、高一(1.5)○ $\frac{1}{5}$	砂粒、石粒、輝石を含む。酸化、やや軟質。にぶい黄橙色	体下部で張りをもち、底部回転糸切り、貼付高台、断面、八の字にひらく長方形	
843	碗 須恵器	底—7.0、高一(2.7)○ $\frac{1}{5}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい橙色	体下部で張りをもち、底部回転糸切り、貼付高台、断面、四角形、ロクロ右回転	
844	甕 土師器	底—4.1、脚裾—[7.8]、高一7.0○ $\frac{1}{5}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。褐色	体部丸味のある台付小型甕。脚部ハの字に大きくひらく。体部ヘラケズリ調整、脚部、貼付、ヨコナデ	
1078 参	碗 須恵器	口—[14.4]、底—6.5、高一5.2○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。還元、やや硬質。灰色	体部内湾してひろがり、口縁部外反、端部丸味あり。底部回転糸切り、貼付高台、断面、外行する四角形。ロクロ右回転	ブク土出土

## 7区3号住居跡（第347図、第110表、図版147・148）

本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。西南隅で52号住居跡と重複し、本住居跡が52号より新しく、33号、52号、53号、55号ともに1号古墳西北側をめぐる住居群の一つである。

規模は、東辺側3.05m、北辺側2.30mを測り、方位は北辺でE—15°—Sである。平面形は南北方向が少し長い方形で、西辺が広い。壁高は16cmである。床面は、ロームを踏み固めているがやや軟弱で、52号とは約5cmの段差を持つ。カマド正面に径35cm内外のピット2ヶ所があるが、柱穴と断定するに至らなかった。カマドは、東辺の南寄りにある。地山を壁外に掘り込み、わずかに焼土、炭化物が見られた。このカマド右袖口を切って、東南隅から壁外に半分程張り出して、楕円形の貯蔵穴が確認された。108×75cm、床面からの深さ31cmで、東北隅と並んで遺物が出土している。羽釜、碗がある。遺構の時期は、出土遺物から平安時代（11世紀初頭）である。(新井)

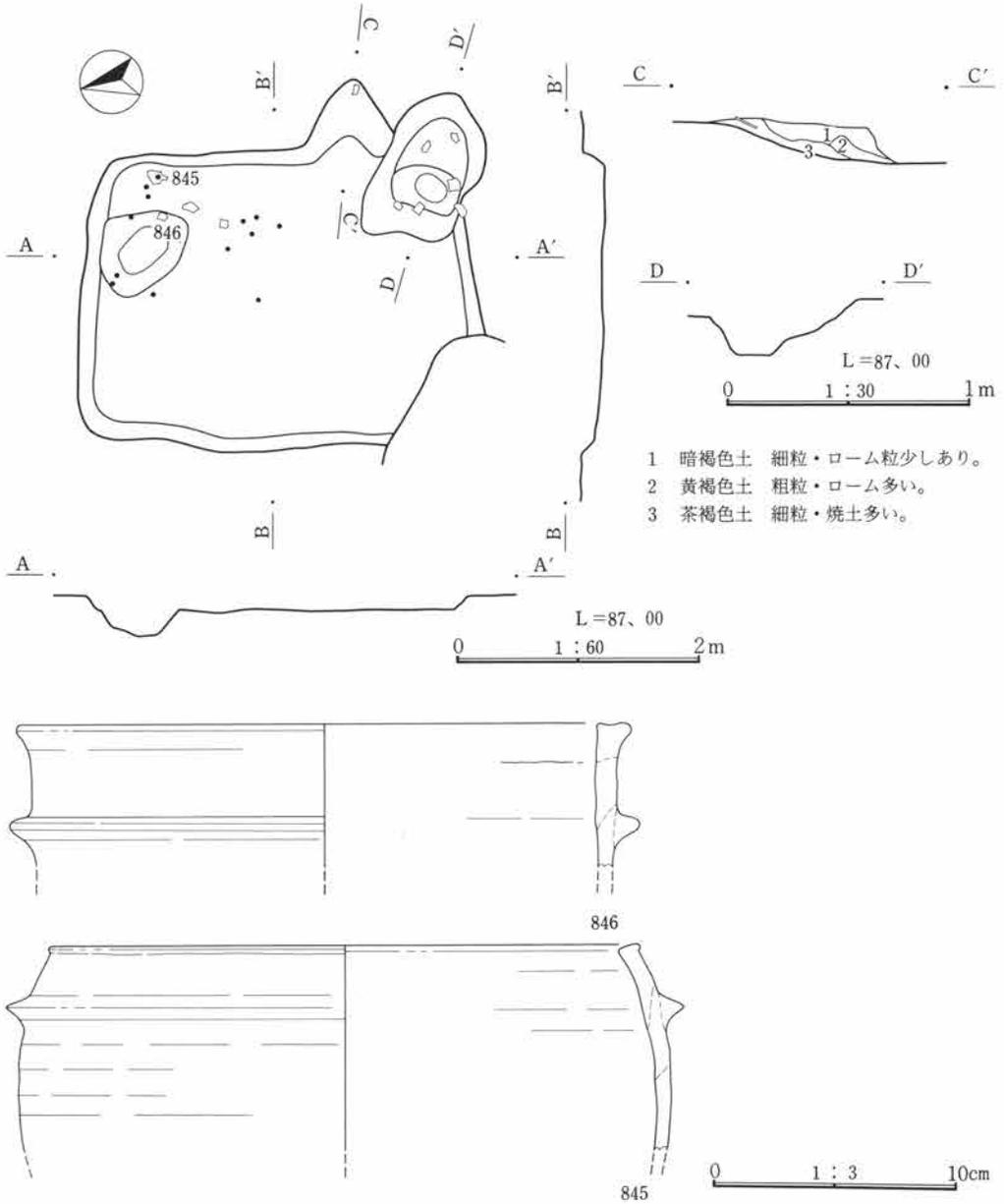
第110表 7区3号住居跡出土遺物観察表

(第347図、図版 148)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
845	羽釜	口—[24.0]、高一(8.4)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、白色石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色	体部丸味をもち、口縁部内傾する。口縁端部、平坦で、内斜、外側に丸いつまみ出しあり。鋳断面、三角形。体部ロクロナデ調整	

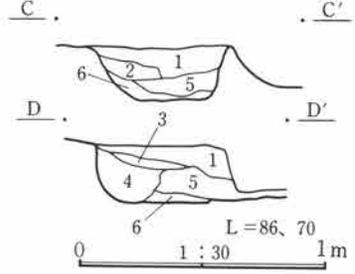
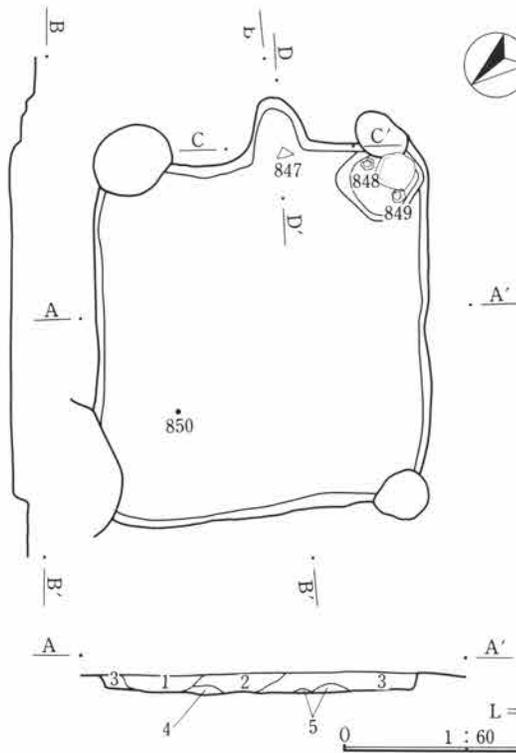
第6章 検出された遺構と遺物

846 7区3号 住	羽 釜	口-[25.2]、高 -(5.9)○小片	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、やや硬質。灰褐色	口縁部、直行し、端部、中央部やや 凹む平坦面、外側に肥厚する。鋸断 面、端部丸味のある三角形	内外、スス附着
------------------	-----	-------------------------	----------------------------	------------------------------------------------------	---------

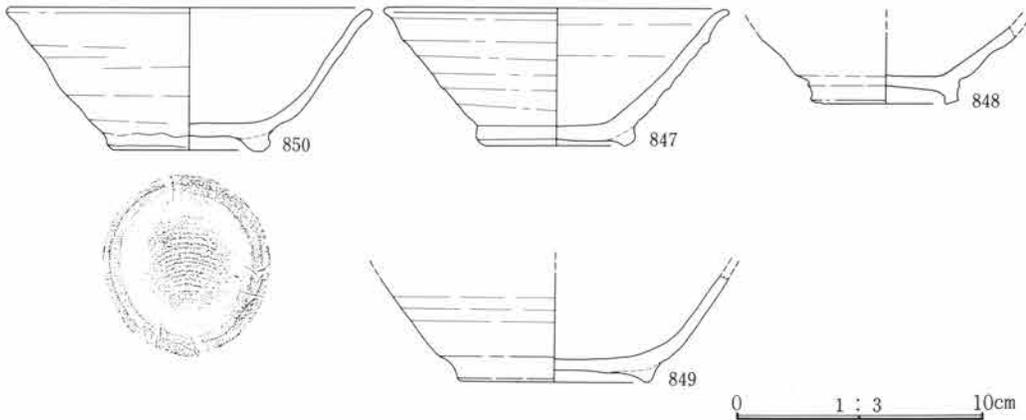


第347図 7区3号住居跡遺構、遺物図

2 14地区の調査（平安時代）



- カマド土層
- 1 茶褐色土 細粒、サクサクしている。
  - 2 // ローム粒多く、粘性あり。
  - 3 黒褐色土 細粒・ローム粒・灰混入
  - 4 ロームの焼けた部分
  - 5 ローム・焼土・炭の混土
  - 6 ロームの焼けた部分 焼土・灰あり。
- 
- 1 暗褐色土 細粒・B軽石混入
  - 2 灰褐色土 //
  - 3 褐色土 細粒・ローム粒あり。
  - 4 // ローム粒特に多い。
  - 5 ロームブロック



第348図 7区6号住居跡遺構、遺物図

7区6号住居跡（第348図、第111表、図版147・148）

本住居跡は、基本土層の第5層上面で確認された。11号掘立柱建物跡、31号、61号土壇と重複しその関係は古い方から11号掘立柱建物跡、61号土壇、6号住居跡、31号土壇である。規模は、東辺で2.70m、南辺側で2.90mを測り、方位は南辺でE-36°-Sである。平面形は、東西に長い方形を呈する。床面は、ロームを踏み固め、平坦で堅緻である。壁際が四辺とも一様に軟らかく、帯状になることから周溝様の痕跡か。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の南寄り

第6章 検出された遺構と遺物

で確認された。堀方は、壁外にロームを方形に掘り込み、黄褐色土を用いて袖材としている。カマド内の焼土、灰層のあり方から、造り替えも推定される。貯蔵穴は、東南隅に接して径約60cmの円形土壇が確認された。床面からの深さは9cmで、中に工作台様の平石がある。遺物は、カマド、貯蔵穴から少量ある程度で、高台付碗、高台付鉢がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴により平安時代（10世紀初頭）である。（女屋）

第111表 7区6号住居跡出土遺物観察表

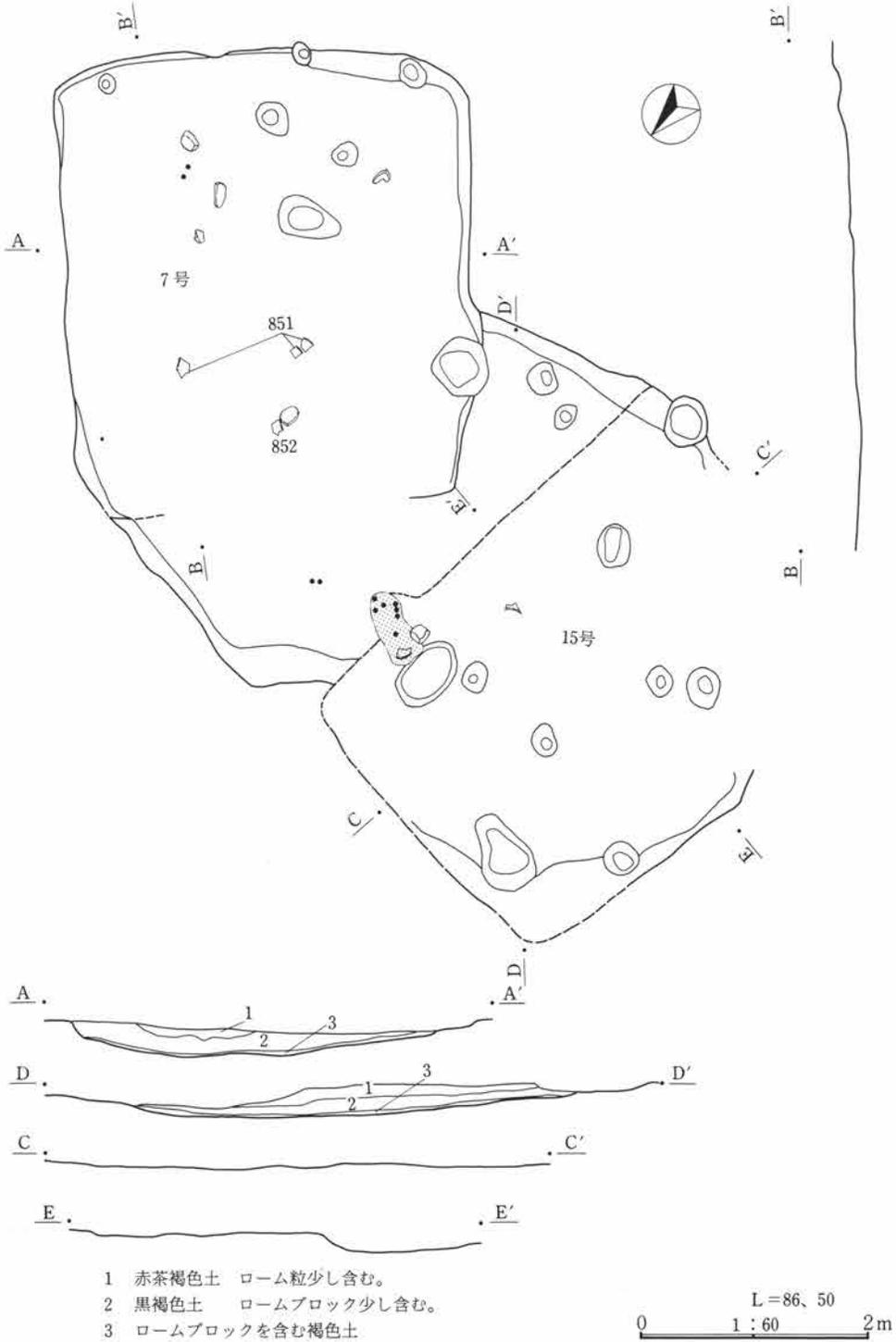
(第348図、図版 148)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
847	碗 須恵器	口—[14.0]、底—[6.4]、高一5.5 $\frac{2}{3}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質(燻し)。オリブ黒色	体部直線的にひらき、口縁部外反する。口縁端部丸味あり。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外行する四角形。体部ロクロ目強い	
848	碗 須恵器	底—5.9、高一(2.7) $\frac{1}{3}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい黄橙色	底部より、内面区切りをもってたちあがる。底部回転糸切り、貼付高台、断面、直行する四角形	
849	碗 須恵器	底—7.6、高一(4.2) $\frac{1}{3}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰黄色	体部、内湾して大きくひらく、大振りの器。底部回転糸切り、貼付高台、端部外側にめくれる台形。ロクロ右回転	
850	碗 須恵器	口—[14.8]、底—6.6、高一5.7 $\frac{2}{3}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰色	体下部で、張りをもって、ひろがり口縁部外反、口縁端部丸味あり。底部回転糸切り、貼付高台。わずかに外行する台形。ロクロ右回転	重ね焼き痕あり

7区7号、15号住居跡（第349・350図、第112表、図版148）

この2軒の住居跡は、2号古墳の南側で8号、9号住居跡の東側約1mに隣接し、古墳周縁をめぐる住居跡群の一面を占める。基本土層の第5層上面で、黒色土を主とする落ち込みが確認されたが、その当初から堀方に近い状態で、平面形等は推定によるところが大きい。

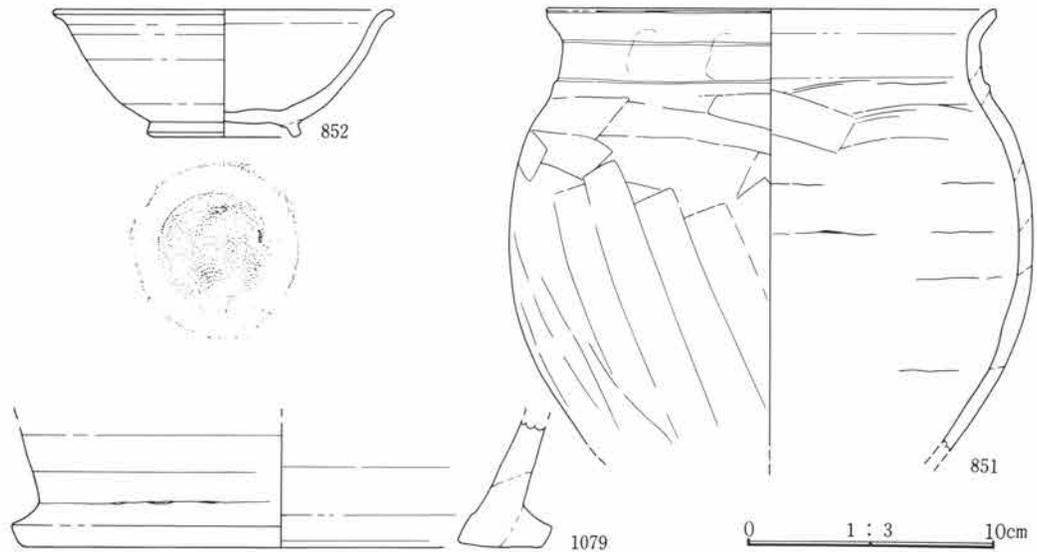
7号住居跡は、15号と連続する帯状の落ち込みの東半分を範囲とする。住居跡に見られる焼土分布及びカマドの痕跡もなく、遺物の分布とそれに伴う河原石のあり方をもって遺構として扱った。平面形は、南北方向で推定3.90m、東西方向3.50mを測り、南北方向が少し長い方形を呈する。床面下には、土壇等が見られず、中央部を最深部とする皿状の断面形である。壁際には、径15～50cm、深さ5～25cmの円形ピット数基があるが、柱穴とは断定できない。遺物は少ないが、中央部に土師器コの字状口縁の甕がある。これに混在して割石を含む河原石5点があるが、焼土を伴うものはない。住居跡としての要素に乏しいが、遺構としての時期は、出土遺物により平安時代（10世紀初頭）である。



第349図 7区7号、15号住居跡遺構図

第6章 検出された遺構と遺物

15号住居跡は、殆ど痕跡に近い状態で床面、壁は削平されていた。平面形は、東辺推定4.10m、東西方向3.18mを測り、南北方向が長い方形を呈する。東辺北寄りに舌状に残った焼土分布があり、カマドの痕跡と思われ、15cm角の河原石が据えられており支石である。不整列な状態で大小9基のピットがあるが、西北隅のものは貯蔵穴か。遺物は、焼土分布内にコの字状口縁の甕が破片状態で出土したが少量である。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代（9世紀末頃）だが、7号より新しい。（女屋）

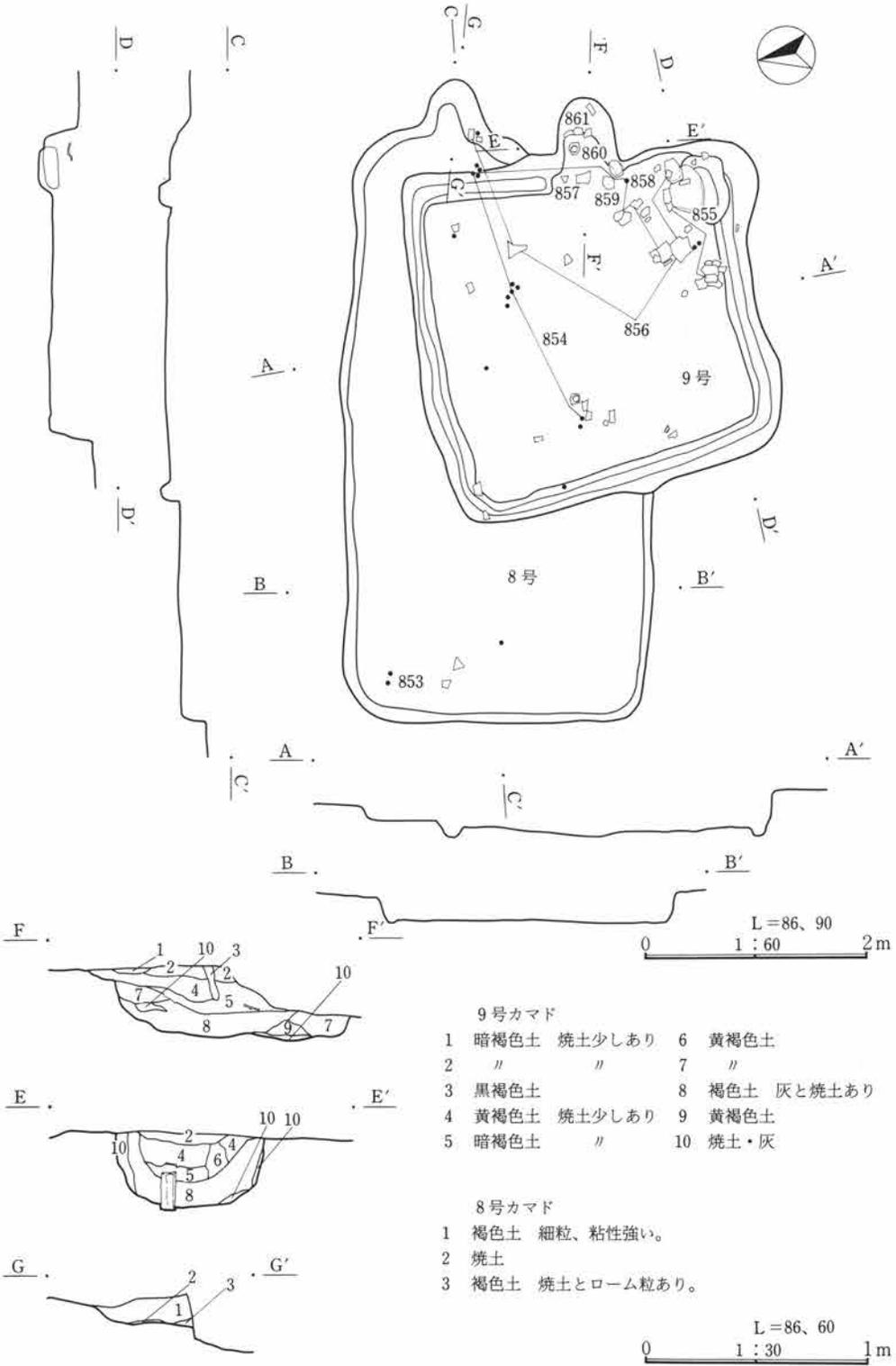


第350図 7区7号住居跡遺物図

第112表 7区7号住居跡出土遺物観察表

(第350図、図版 148)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
851	甕 土師器	口-[18.2]、胴-[21.1]、高-[17.7]○ $\frac{1}{6}$	砂粒、白色石粒、輝石を含む。酸化、軟質。にぶい褐色	体部、丸く、口縁部コの字状の甕。口縁端部、外側に沈線めぐり。体部ヨコ、タテヘラケズリ調整。器肉、やや厚手	
852	碗 須恵器	口-[13.7]、底-6.2、高-5.0○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。淡黄色	体下部で張りをもち、内湾してひろがる。口縁部外反。端部丸味あり。底部回転糸切り、貼付高台、断面、やや外行する長方形。ロクロ右回転	
1079 参	甕	底-[19.4]、脚幅-[21.8]、高-[4.7]○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい赤褐色	体部、鉢形にひらき、底部、内稜をもち、脚部、くの字形にひらき、幅せまく、平坦。端部は外稜をもつ。脚内面、スレあり。体部ロクロナデ	フク土中



第351図 7区8号、9号住居跡遺構図

7区8号、9号住居跡（第351～353図、第113表、図版148・149）

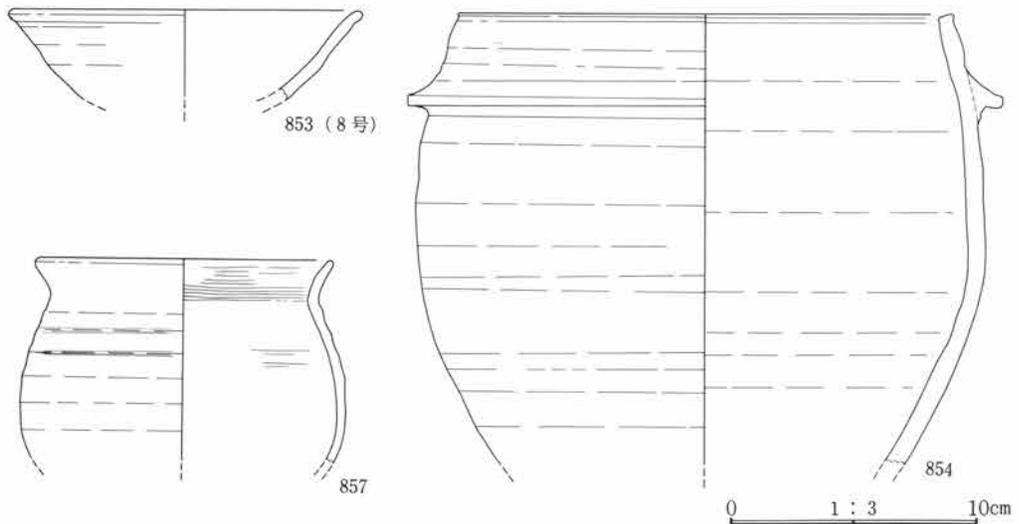
この2軒の住居跡は、2号古墳南側、基本土層の第5層上面で重複して確認された。重複関係は8号が古く、隣接して7号、15号住居跡が東側にある。

8号住居跡は、西辺で2.65m、北辺で5.25mを測り、方位は北辺でE-12°-Sである。平面形は東西方向が長い長方形を呈する。壁は緩傾斜で、高さ約30cmを測る。床面はロームを踏み固めており、平坦で堅緻である。カマドは、東辺北寄りに付設され、堀方は地山を浅く土壇状に掘り込み、褐色土を用いて袖としているが遺存状態は悪い。柱穴、周溝はなく、貯蔵穴は確認できなかった。遺物は、西辺側で土師器碗、羽釜の破片が少量あるにすぎない。遺構の時期は、少量ながら出土遺物により平安時代（10世紀初頭）とされる。

9号は、西辺で3.07m、北辺で3.13mを測り、方位は北辺でE-4°-Sである。床面は、堀方土壇が密にあるため、ロームを踏み固めた以外は暗褐色土を用いて貼床をしている。周溝は、東辺のカマドから貯蔵穴の間を除いた四辺で確認され、上幅約15cm、床面からの深さ約7cmを測る。カマドは、東辺の中央部で確認された。堀方は地山を壁外に方形に掘り込み、暗褐色土を用いて袖材としている。右袖には河原石使用の袖石が残り、燃烧部中央部左寄りには、凝灰岩質四面体の棒状削石が支石としてある。カマド内は厚さ1～3cmで焼け、カリカリしている。貯蔵穴は東南隅に接して、長径60cm、短径38cm、床面からの深さ23cm程の円形土壇が確認された。その北縁にかかって35×30cm、厚さ約15cmの扁平な河原石が、半ば据えた状態で出土している。6号住居跡にも同様な例が見られるが、敲打痕等明瞭でないが工作台としての用途があるのか。

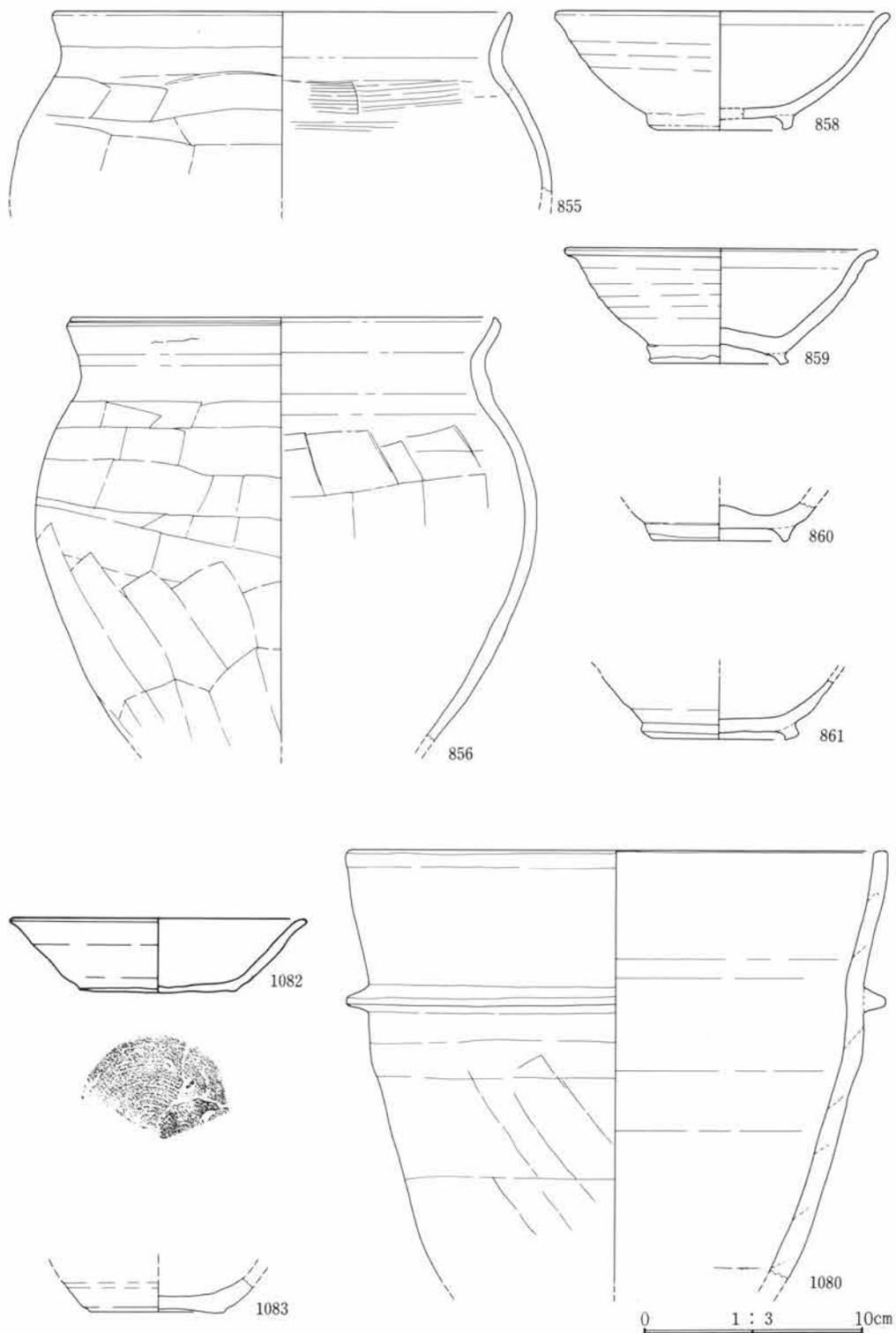
遺物は、住居内全体に見られたが、中でもカマド内から貯蔵穴にかけて集中している。羽釜を始めとして、土師器甕、高台付碗がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴により平安時代（10世紀前葉）とされる。

（小安）



第352図 7区8号、9号住居跡遺物図（1）

2 14地区の調査（平安時代）



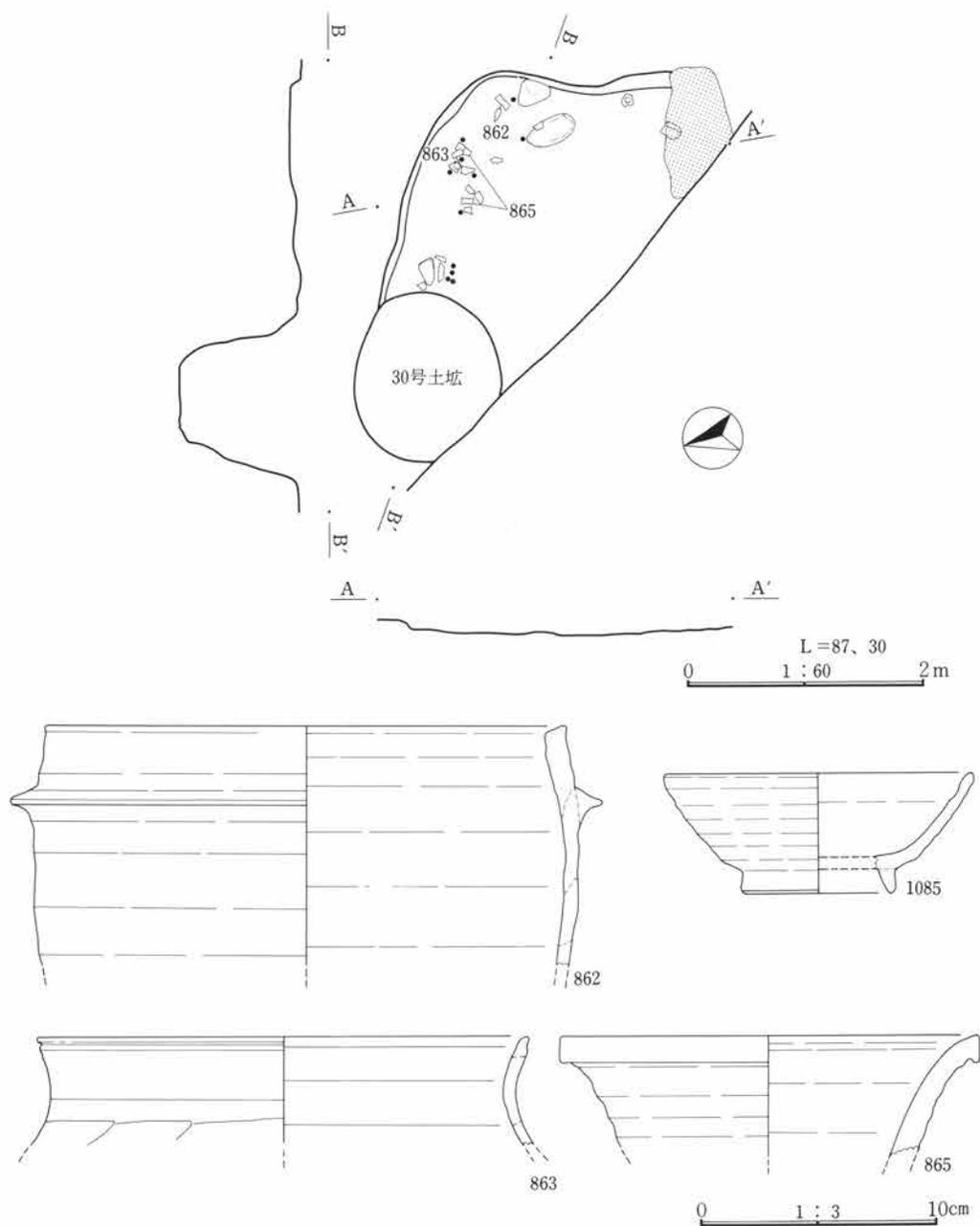
第353図 7区8号、9号住居跡遺物図（2）

第113表 7区8号、9号住居跡出土遺物観察表

(第352・353図、図版 148・149)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
853 7区8号住	埴須恵器	口-[14.2]、高一(3.6)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、白色石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい黄橙色	体部内湾してひろがる。口縁部やや外反、端部丸味あり。体部ロクロナデ調整	
854 7区9号住	羽釜	口-20.0、胴-22.9、高一(18.0)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。橙色	体中部で丸く張りを持ち、口縁部内傾し、端部、平坦面をもつ。鋸断面、下向きの台形、端部丸味をもつ。体部ロクロナデ調整。器肉、薄手	
855	甕土師器	口-[21.0]、高一(8.2)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。暗赤褐色	体部丸味をもつ、頸部のしまり弱く、やや立ちあがり口縁部外反する。口縁端部丸味あり。体部ヘラケズリ調整。器肉、厚手	
856	甕土師器	口-19.3、胴-22.9、高一(19.2)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、褐色石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	体中部やや上よりで、丸く張りを持ち、頸部しまって内傾しながらたちあがり、口縁部外反する。口縁端部外側に稜を持ち、内側につまみなどあり。体部ヨコ、タテヘラケズリ調整。器肉、やや厚手	
857	甕	口-[12.0]、胴-[13.0]、高一(8.0)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい橙色	体中部で、丸くふくらみを持ち、頸部、ゆるくしまり、口縁部くの字に外反する。体部、ロクロナデ調整。頸部内面、ハケ目調整	内外、スス、炭化物付着
858	埴須恵器	口-[15.2]、底-[6.6]、高一5.4○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。還元、やや軟質。浅黄色	体部、内湾してひろがり、口縁部外反し、端部丸味を持つ。底部、貼付高台、断面、四角形。器肉薄手均質	
859	埴須恵器	口-[14.3]、底-[6.3]、高一5.2○ $\frac{1}{2}$	砂粒、輝石を含む。還元、やや軟質。浅黄色	体部ゆるやかに内湾してひろがり、口縁部外反し、端部丸味をもつ。底部回転糸切り、貼付高台、断面、外行する長方形。底部中央もちあがる	
860	埴須恵器	底-6.2、高一(1.6)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。橙色	底部、回転糸切り、貼付高台、断面端部、丸味のある三角形。底部器肉、厚手。ロクロ右回転	
861	埴須恵器	底-7.2、高一(2.6)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒、輝石を含む。酸化、やや軟質。にぶい黄橙色	底部より区切りをもってたちあがる。体部、内湾する。底部、回転糸切り、貼付高台、低く端部のめくれる台形	
1080 参	甕	口-[24.8]、高一(19.5)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。灰色	体部、鉢形にひらき、口縁部直行。端部、内側に丸味をもつ。鋸断面、端部の丸い三角形。体部、ヨコナデ、下部、わずかにヘラケズリの痕跡あり	堀方出土

1082 7区9号 住 参	坏 須惠器	口-[13.5]、底 -[7.2]、高一3. 4 $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 やや軟質。にぶい黄色	体部、直線的にひらき、口縁部外反 する。底部、回転糸切り。無調整。 底部、縁辺、スレあり	
1083 参	坏 須惠器	底-6.0、高一(1. 5) $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、 硬質。灰色	体下部で張りをもつ。底部、回転糸 切り、無調整。ロクロ右回転	



第354図 7区10号住居跡遺構、遺物図

## 7区10号住居跡（第354図、第114表、図版150・151）

本住居跡は、基本土層の第5層上面で、2号古墳周堀、30号土坑と重複して確認された。重複関係は、古い方から2号古墳、10号住居跡、30号土坑の順である。カマド部分には攪乱を受け、西南側は道路敷のため未確認である。8号、9号住居跡等とともに、2号古墳の周囲にめぐる住居跡群中の一つである。

規模は、東辺側で2.40m以上、北辺で推定2.65mを測り、方位は北辺でE-29°-Sである。平面形は、南北方向が長い方形か。床面は、ロームを踏み固めて平坦で堅緻だが、古墳周堀にかかる部分は暗褐色土を用いて貼床としている。壁は緩傾斜で、高さ約20cmを測る。カマドは、東辺で焼土の分布と袖石の一部と推定される河原石があるが、全体に攪乱を受けているため遺存状態は悪い。左袖と推定される位置にはローム塊が見られた。

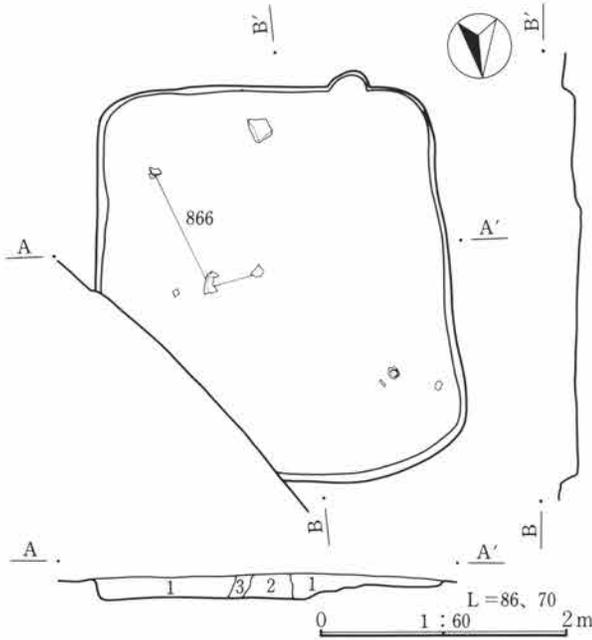
遺物は、北辺側で少量見られただけで、羽釜を始めとして土師器甕、甑がある。これらに混在して角閃石安山岩を含む河原石が帯状に見られたが、古墳から崩落した葺石である。遺構の時期は、出土遺物の特徴により平安時代（10世紀中葉）である。西北隅に重複する30号土坑は、上半部が浅間山B軽石の二次堆積で埋没しており、本住居跡もこの頃までには埋没していたことがわかる。

(女屋)

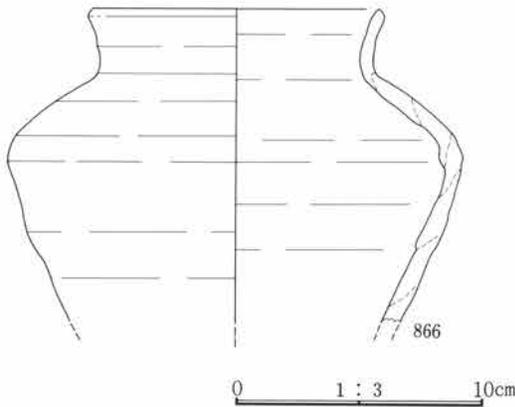
第114表 7区10号住居跡出土遺物観察表

(第354図、図版 151)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
862	羽釜	口-[22.0]、高一(10.0)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	口縁部、ゆるい内傾、口縁端部、平坦で、やや内斜。鑄断面、下向きの三角形。体部ロクロナデ調整	
863	甕 土師器	口-[20.6]、高一(4.5)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	コの字の形をわずかにのこす甕。口縁部、ゆるい外反、口縁端部外側に沈線めぐる。体部ヘラケズリ調整	
865	甕 須恵器	口-[17.7]、高一(5.3)○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	頸部より、口縁部たちあがり、外反する。口縁端部、外縁帯をもつ。ロクロナデ調整	
1085 参	碗 須恵器	口-[13.0]、底-[6.2]、高一(5.0)○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含む。還元、やや軟質。灰色	体部、やわらかく内湾してひろがる、身の浅い碗。口縁部直行、口縁端部肥厚して丸味あり。貼付高台、体部ロクロナデ調整	堀方出土



- 1 暗褐色土 細粒・黒色土の小ブロックあり。
- 2 茶褐色土 // 鉄分のしみこみあり。
- 3 暗褐色土 1層に灰がレンズ状に混入



第355図 7区12号住居跡遺構、遺物図

7区12号住居跡（第355図、第115表、  
図版150・151）

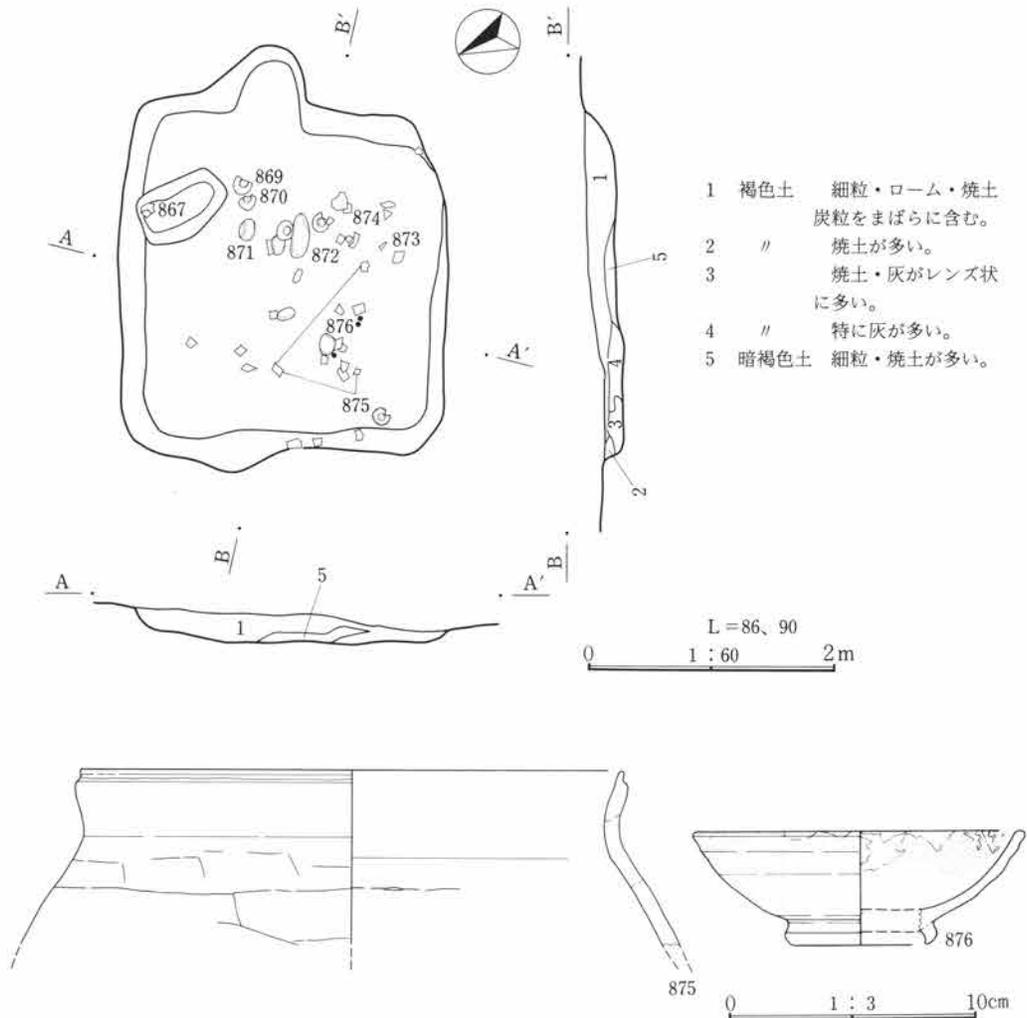
本住居跡は、基本土層の第5層上面で確認された。東北隅は調査区外にあり、遺構の上面は大分削平されている。12号、13号掘立柱建物跡と重複しているが、本住居跡が新しい。6号、7号等が隣接し、2号古墳南側の住居跡群としてとらえられる。規模は、西辺側3.12m、南辺2.85mを測り、方位は南辺でE-13°-Sである。平面形は、南北に少し長い方形を呈する。床面は、ルームまで掘り下げ、平坦に踏み固めているが、南辺と西辺側が一段高く軟弱で、床面下には、堀方土坑等を全く持たない。カマドは、南辺の一部が堀方様に半円状に突出するが、焼土等を伴わず、覆土中に焼土、炭化物も極端に少なく、本来的にカマドを持たないか。貯蔵穴、柱穴もない。遺物は、散漫な状態で見られたがいずれも破片状態で、須恵器瓶があるにすぎない。南辺際中央部に30×25cm、厚さ12cmの扁平な河原石があるが、6号、9号の例と同様に工作台の用途を持つものか。遺構の時期は、出土遺物により平安時代（11世紀初頭）とされるが、カマドを持つ形跡がないことから竪穴状遺構の性格を持つか。

（女屋）

第115表 7区12号住居跡出土遺物観察表

（第355図、図版 151）

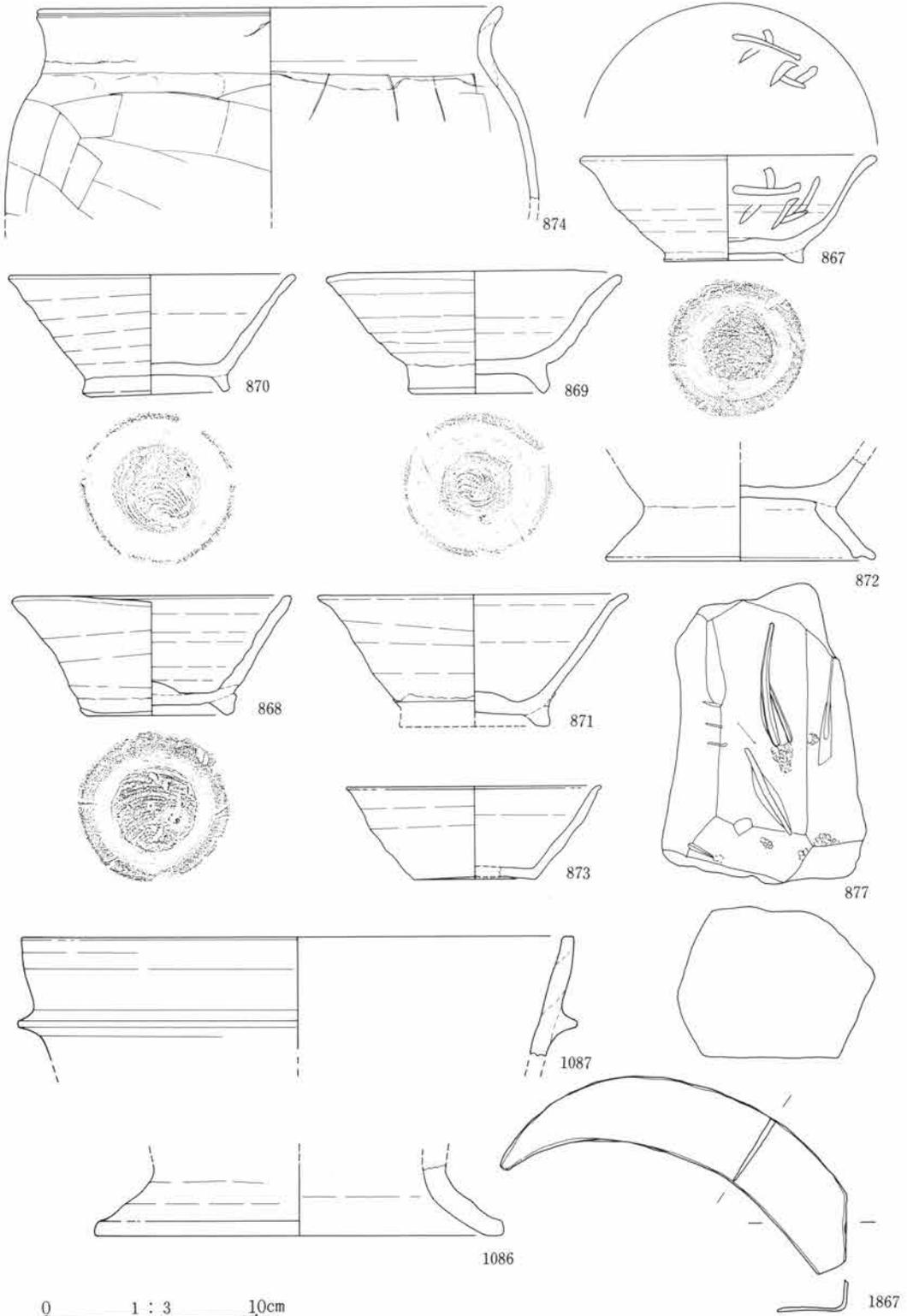
番号	土器種類	法量（口径・底径・器高） 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
866	瓶 須恵器	口-[11.6]、胴-[18.4]、高-[12.5]○1/2	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰色	肩部で、張りをもつ、広口瓶。頸部しまり、口縁たちあがり、わずかに外反。口縁端部、外側に稜をもつ。体部クロナデ調整	



第356図 7区13号住居跡遺構、遺物図

7区13号住居跡 (第356・357図、第116表、図版151・152)

本住居跡は、基本土層の第5層上面で2号古墳周堀、8区4号溝と重複して確認された。重複関係は、本住居跡が新しい。規模は、西辺で2.63m、北辺側で2.90mを測り、方位は北辺でE-27°-Sである。平面形は、東西に長い方形を呈する。床面は、ロームを踏み固めているが、一部は貼床である。床面上には、カマドから中央部にかけて薄く灰層が見られた。カマドは、東辺側の北寄りに確認されたが、古墳周堀調査時に削平をし詳細は不明である。貯蔵穴は、北辺の東寄りで長径75cm、短径48cm、床面からの深さ10cmの長円形土壇が確認された。遺物は、住居内中央部に多く見られた。土師器甕、坏、埴、灰釉陶器浅鉢、砥石があり、高台付埴の中に墨書1点(判読不可)がある。遺構の時期は、出土遺物により平安時代(10世紀前葉)とする。(新井)



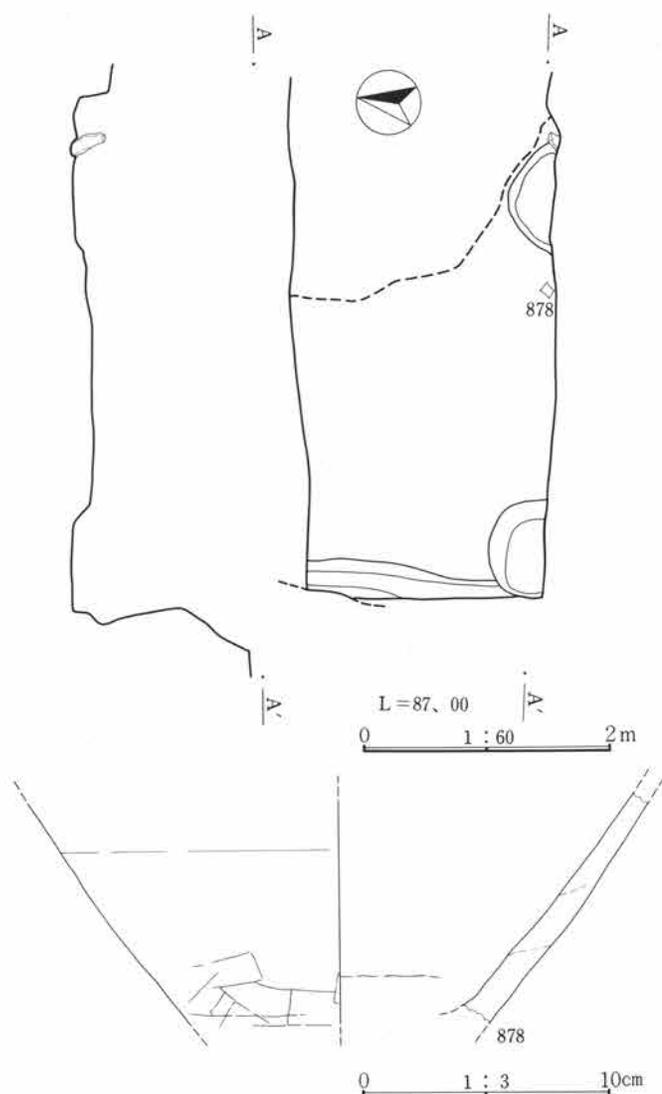
第357図 7区13号住居跡遺物図（2）

第116表 7区13号住居跡出土遺物観察表

(第356・357図、図版 151)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
867	埴須恵器	口—[14.0]、底—7.5、高—5.0 ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	体下部で張りをもって内湾し、ひろがる。口縁部外反し、口縁端部、肥厚して丸味をもつ。底部回転糸切り、貼付高台、低い台形の断面	体内面に墨書あり。文字不明
868	埴須恵器	口—13.2、底—6.5、高—5.6○完存	砂粒、白色石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	体部、直線的にひろがる。口縁部直行、端部、丸味あり。底部、回転糸切り、貼付高台、外側直行する三角形の断面。粗雑な作り。器肉、厚手	底部円盤、別作りか
869	埴須恵器	口—13.9、底—6.7、高—5.7○略完存	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。灰黄色	体下部で張りをもって、内湾しひろがる。口縁部外反し、端部丸味あり。底部回転糸切り、貼付高台、外側直行する、台形の断面。ゆがみあり	内面、スス附着灯明用か
870	埴須恵器	口—13.5、底—6.9、高—5.5○完存	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。浅黄橙色	体部、ほぼ直線的にひろがる。口縁部わずかに外反。口縁端部、外側に丸い稜をもつ。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外行する長方形。ロクロ右回転。器肉、薄手	内面、スス附着、口縁部一部分欠けあり—灯明用
871	埴須恵器	口—[14.6]、底—[6.8]、高—(5.6)○ $\frac{3}{8}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。浅黄橙色	高台部を欠く。体部、わずかに内湾してひろがり、口縁部外反する。底部回転糸切り、貼付高台、ロクロ右回転。器肉、薄手	
872	埴須恵器	底—[9.0]、脚裾—[12.6]、高—(4.5)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、褐色石粒を含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色	高足高台付、大振りの埴。底部、回転糸切り、貼付高台、高台端部、中央に凹線めぐる。ロクロナデ調整	
873	埴須恵器	口—[12.0]、底—[5.8]、高—4.2○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含む。還元、やや硬質。灰色	平底。体部、やや内湾して、ひろがる。口縁部、わずかに外反する。底部、回転糸切り。器肉、薄手	
874	甕土師器	口—[22.0]、高—(9.0)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色	体部、丸味をもち、頸部～口縁部、ゆるく、くの字に外反する。口縁端部外側に、沈線めぐる。体部、ヘラケズリ調整。器肉、厚手	
875	甕土師器	口—[21.8]、高—(7.0)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色	体部、丸く、口縁部、外反弱い。口縁端部、外側に沈線めぐる。体部ヘラケズリ調整。器肉、厚手	
876	埴灰釉陶器	口—[13.2]、底—[6.0]○ $\frac{1}{4}$	砂粒を含むが、細密。還元、硬質。灰色、釉—灰緑色	体部、ゆるやかにひろがり、上部で内湾してたちあがる。口縁端部、丸味あり。貼付高台、三日月状の断面。体部ロクロナデ。釉がかり、うすい	体部内面、タール状付着物あり

1086 7区13号住 参	甗	底-[13.7]、脚裾 -[19.2]、高一(3. 4)○小片	砂粒、石粒を含む。還元、 やや硬質。灰色	八の字にひらく、脚をもつ。脚端部 外側に稜をもつ。ロクロナデ調整	出土レベル、や や高い
1087 参	甗	口-[26.0]、高 一(5.6)○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、 やや軟質。橙色	鉢形にひらく甗。口縁部、薄い仕上 げ、鈔断面、台形。ロクロナデ調整	
877	砥石	長-(14.0)、幅-(9.0)、厚-(7.0)、片端、折れあり。安山岩。六面体、柱状。縦 方向に使用。2面に、深い線条痕あり、筋砥か			
1867	鉄製鎌	長-16.3、幅-3.4、厚-0.3、ほぼ完存、柄、着装部分、片端、折りまげ。柄、刃部 の角度、鈍角(110°)			



第358図 7区14号住居跡遺構、遺物図

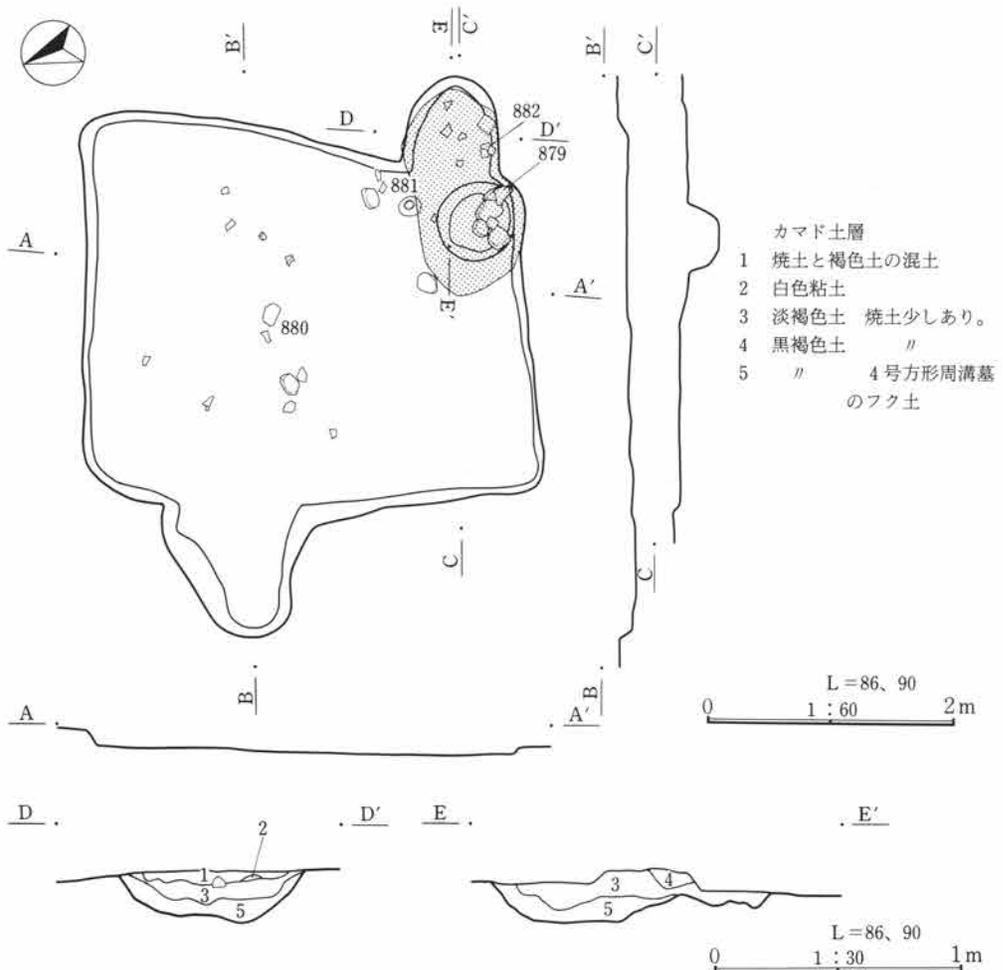
## 7区14号住居跡 (第358図、第117表)

本住居跡は、2号住居跡と共に1号古墳周堀確認トレンチ内で確認された。確認をしたのは住居中央部付近だが、東辺側は攪乱を受け、西辺は周溝を見る程度である。東西方向の長さは、推定で3.30m、平面形は方形を呈するか。床面は、ローンを踏み固め、平坦で堅緻であるが、一部は貼床である。周溝は、西辺で確認され、幅16cm、床面からの深さ約5cmである。カマドは、東辺側で堀方が確認された。円形状の堀方を持ち、袖石と推定されるものがあるが、詳細は不明である。貯蔵穴は、トレンチ隅で径約80cmの円形土壇が確認された。遺物は、僅少で須恵器甕がある。遺構の時期は、出土遺物から平安時代(10世紀)とする。(小安)

第117表 7区14号住居跡出土遺物観察表

(第358図)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
878	甕 須恵器	底-[11.0]、高一(9.0)○小片	砂粒、白色石粒を多く含む。還元、やや硬質。灰色	鉢形にひらく体部の甕。無文のアテ具痕、内面に残る。体部ヨコナデ、底部外縁部、ヘラケズリ調整	

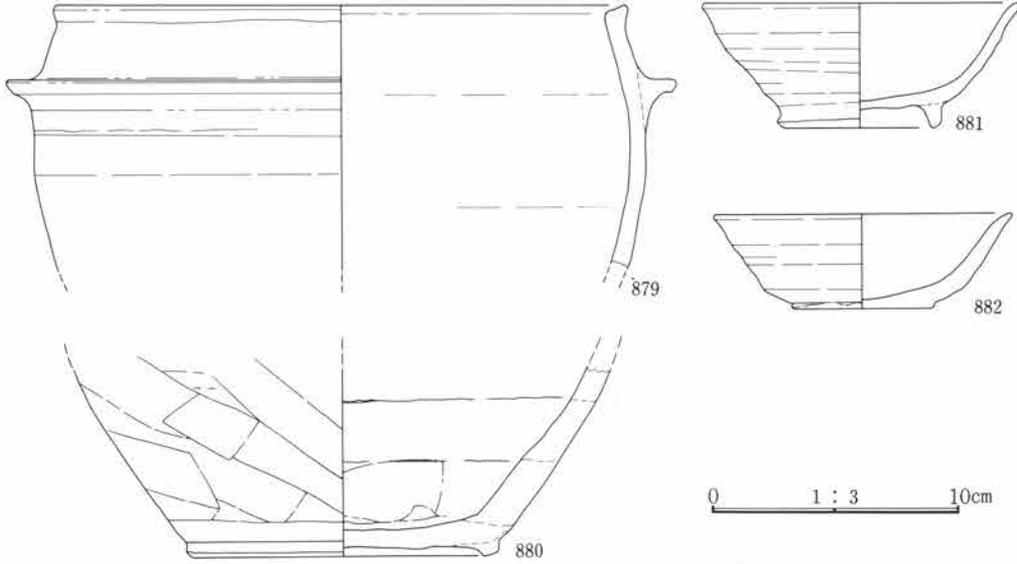


第359図 7区16号住居跡遺構図

7区16号住居跡 (第359・360図、第118表、図版152・153)

本住居跡は、基本土層第5層上面で確認された。カマド部分が、4号方形周溝墓に重複する。規模は、東辺3.55m、西辺3.68m、北辺3.08m、南辺2.50mを測り、方位は南辺でE-18°-Sである。平面形は、台形に近い方形を呈し、西辺には舌状の張出部を持つ。張出部は、壁外に約90cm張り出し、幅は1.23m、床面と同一のレベルである。床面は、ローンを踏み固め、平坦で堅緻であ

る。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺の南隅近くで確認された。遺存状態が悪く、壁外に半円状に伸びる堀方を残す程度である。焼土、炭化物は、煙道部と推定される付近で見られ、袖石の一部も住居内に散乱する。貯蔵穴は、住居東南隅に接し、半ばカマドの手前で径約60cm、床面からの深さ30cmの円筒状土坑が確認された。内部は、河原石を立てかけた石組みがあり、更に間仕切りの様子が窺える。遺物は、僅少で羽釜を始めとして、広口瓶、坏、碗がある。遺構の時期は、出土遺物により平安時代（10世紀後葉）とする。（新井）

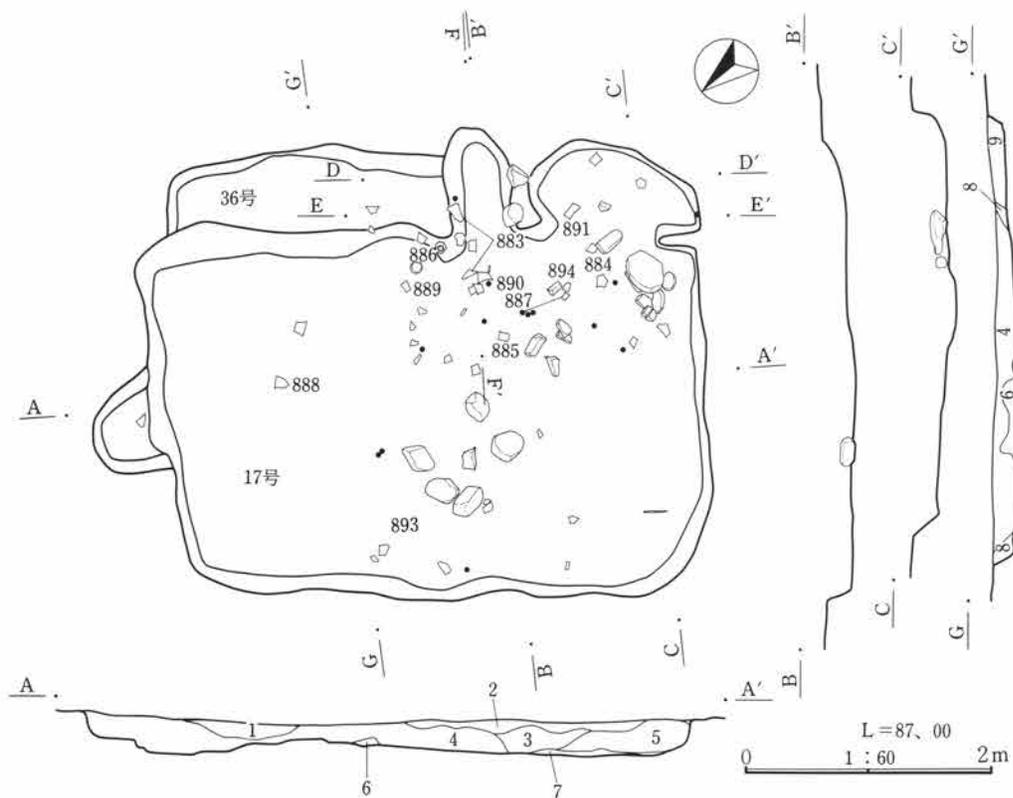


第360図 7区16号住居跡遺物図

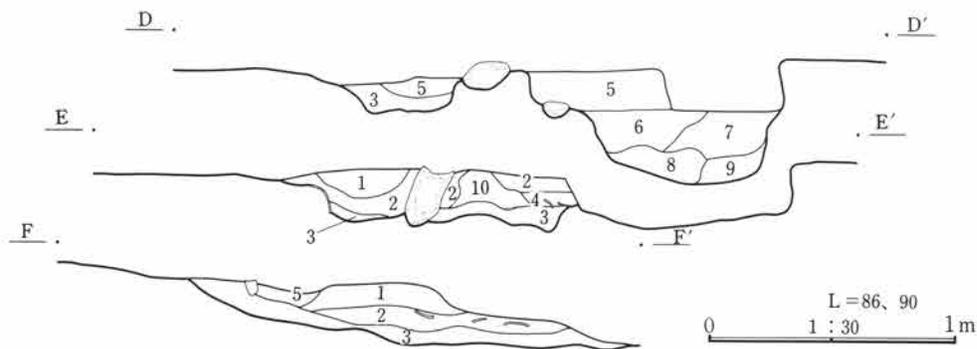
第118表 7区16号住居跡出土遺物観察表

(第360図、図版 153)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
879	羽釜	口—[23.2]、高—(10.5)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや硬質。橙色	体部丸味をもち、口縁部内傾する。口縁端部凹線めぐる。鏝断面、端部の丸い台形。体部ロクロナデ調整	
880	甕	底—[12.2]、高—(7.5)○ $\frac{1}{6}$	砂粒、白色石粒を多く含む。酸化、やや軟質。にぶい黄橙色	体部やわらかく内湾してたちあがる。体内部ヨコナデ、外、ヘラケズリ。貼付高台、外行する台形の断面	広口瓶か？
881	碗 須恵器	口—12.8、底—6.0、高—5.0○略完存	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい黄橙色	体部、内湾してひろがり、口縁部わずかに外反。底部回転糸切り、貼付高台、断面、外側に直行する台形	内外、スス付着
882	坏 須恵器	口—[12.0]、底—[5.6]、高—3.8○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい橙色	体下部で張りをもって、たちあがる。口縁部、わずかに外反する。底部回転糸切り、貼付高台。ロクロ右回転。器肉、やや厚手	



- |                         |                     |
|-------------------------|---------------------|
| 1 黒褐色土 軽石を含みサラサラ        | 6 ロームブロック           |
| 2 暗褐色土 細粒・ローム・焼土・炭粒あり。  | 7 褐色土 焼土・灰が混入し、かたい。 |
| 3 褐色土 ローム・焼土・炭がブロック状    | 8 // ローム粒多い。        |
| 4 黒褐色土 ローム・焼土があり、よくしまる。 | 9 暗褐色土 ローム・焼土少しあり。  |
| 5 褐色土 ローム少ない。           |                     |



カマド土層

- |                      |                           |
|----------------------|---------------------------|
| 1 黄褐色土 ローム粒多く、焼土等混入  | 6 褐色土 ローム・焼土・炭粒が多い。       |
| 2 茶褐色土 ローム・焼土・炭が多い。  | 7 //                      |
| 3 灰                  | 8 黒褐色土 ローム・焼土・炭粒あり。       |
| 4 黄褐色土 かたくしまり粘性あり。   | 9 褐色土 6層と同性状、粘性強い。        |
| 5 茶褐色土 大きなロームブロックあり。 | 10 黄褐色土 ローム・粘土の純ブロック (袖材) |

第361図 7区17号、36号住居跡遺構図

## 7区17号、36号住居跡（第361～363図、第119表、図版153・154）

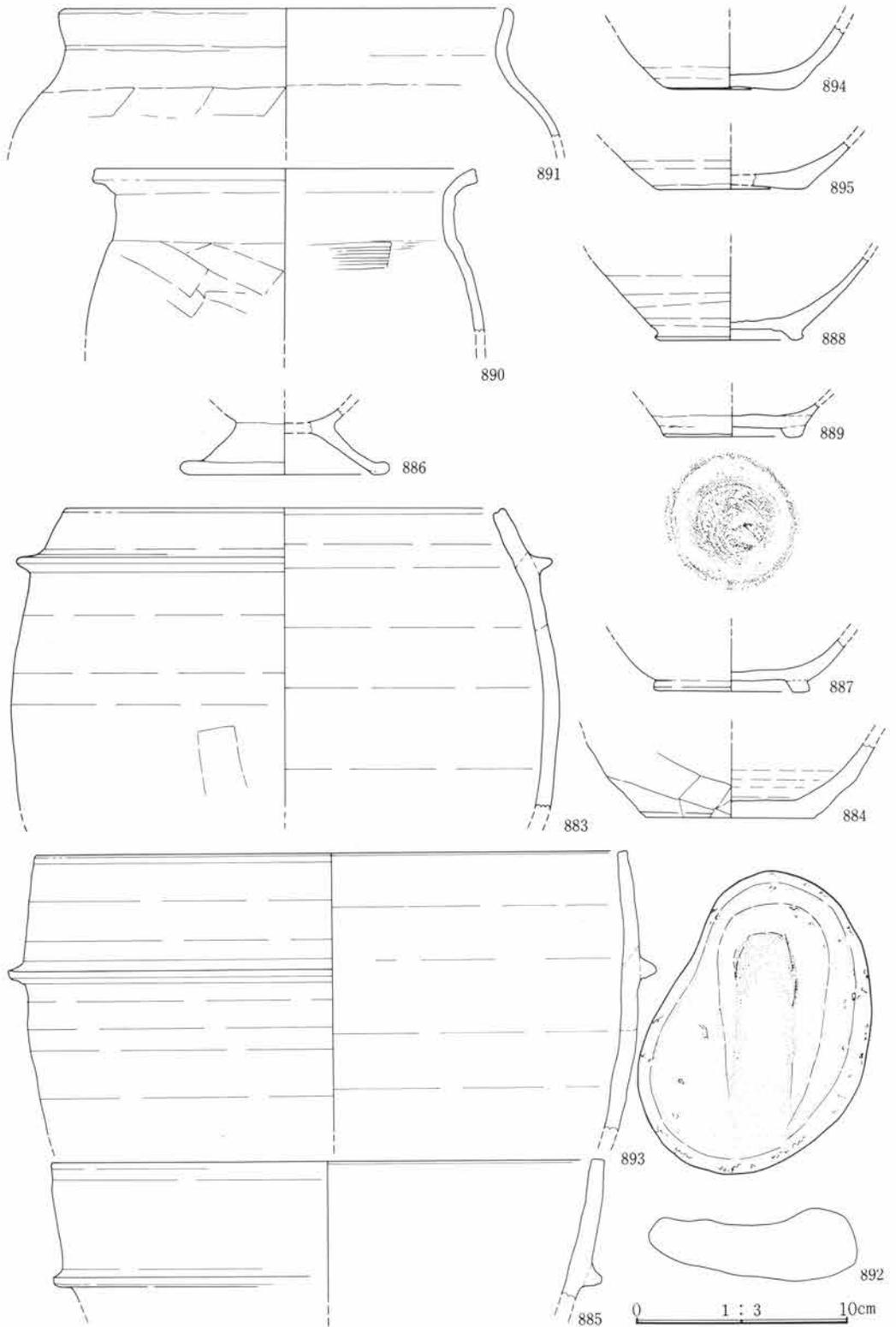
この2軒の住居跡は、同一プラン内で重複し、基本土層の第4層で確認された。重複関係は17号が新しい。西側に16号、18号があるが、1号古墳南側の住居群としてとらえられる。

17号住居跡は、東辺4.45m、北辺2.90mを測り、方位は北辺でE-38°-Sである。平面形は南北方向に長い方形を呈し、北辺の中央部に間口約80cm、奥行65cm、床面との段差約10cmの小張出部を持つ。この小張出部は、特に踏み固まった様子はないが、位置、形状から見て隣接する16号、18号と同様に入口の施設か。床面は、暗褐色土を用いて、ほぼ全面に貼床としている。このうち東北隅全体は、円形状に周囲より約10cm低く、やや軟弱である。床面下の堀方は、ほぼ全体に円形状の土壇が密に重複し、北寄りのいくつかは棒状の礫や土器を伴う。また、壁際のいくつかは挟れ込んだ状態を持ち、当初確認した住居プラン外に突出している。この堀方での土壇は、一様にロームブロックを含んだ暗褐色土を覆土とするが、規模の点で柱穴状の径30cm前後のものから1mを越すものまであり、概して大形のものが多い。カマドは東辺の南寄りにある。壁際に袖口を持ち、壁外に約80cmのび、長い煙道である。両袖には、長さ20cmを越す角閃石安山岩の転石を芯として、茶褐色土が袖材として用いられている。右袖にその状態を残すが、本来は石組カマドか。住居内中央部には角閃石安山岩等の転石が多く見られるが、このカマドから抜き取ったものか。また、カマドから流出した焼土、炭化物がカマド周辺から貯蔵穴付近まで広く分布する。貯蔵穴は、カマド右側の住居東南隅全体が東辺側に張り出し、袋状の土壇となっている。長径1.4m、短径0.7mで、破片状態だが遺物が多い。この貯蔵穴手前に工作台と思われる河原石がある。36×26cm、厚さ12cmで、上の平坦面を意識して据えたものか。周囲に割石等が集石されているが、中に平砥1点が含まれる。

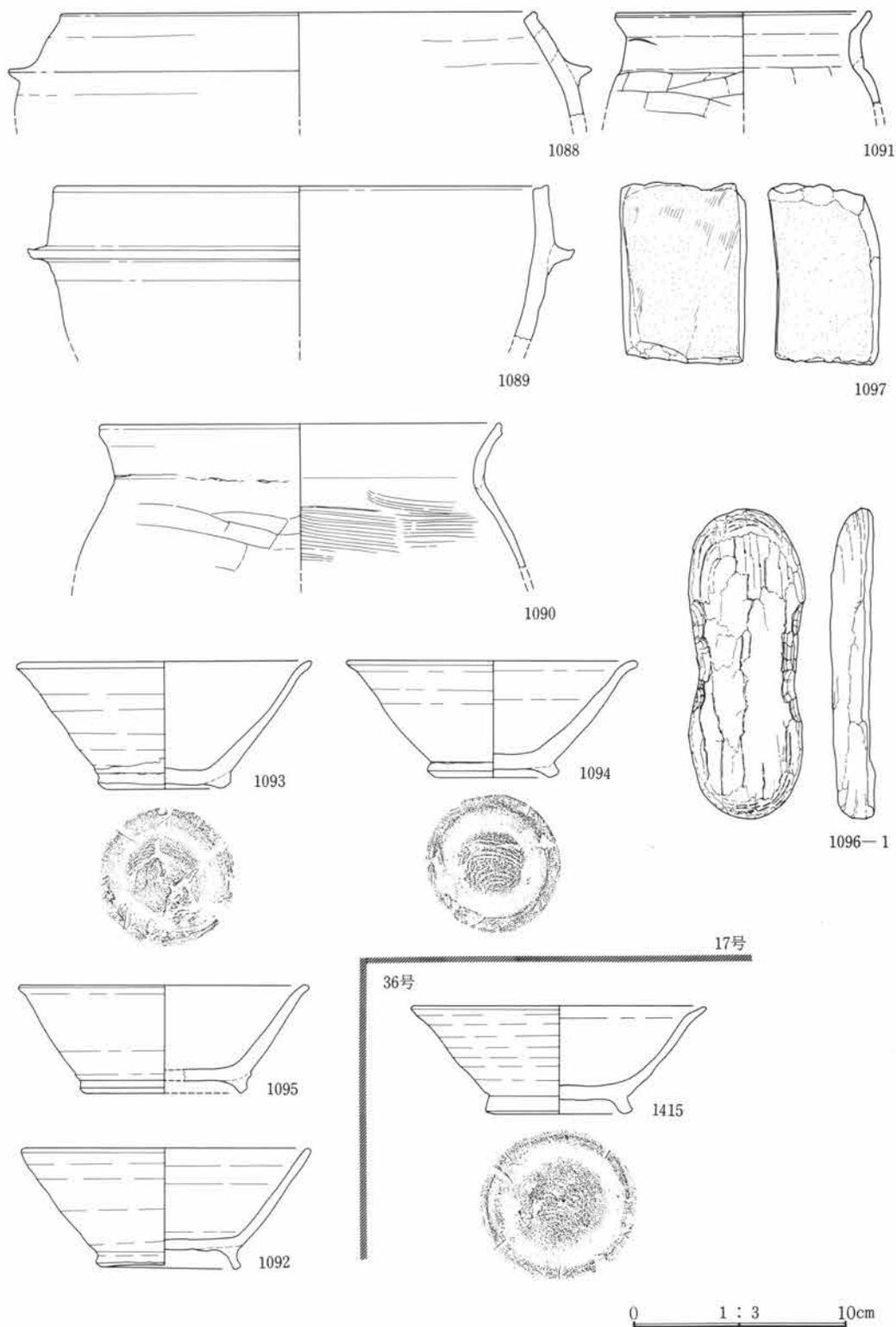
遺物は、カマド内外及び貯蔵穴周辺で多く見られたが、殆ど破片状態である。羽釜、甗を始めとして、土師器甕、台付甕、高台付碗、坏、砥石がある。

36号住居跡は、17号の東辺側と床面下で、大半堀方の状態で確認された。規模は、東辺長4.25mを測れるが東西方向は堀方での識別がむづかしく不明である。平面形では、17号と同様で南北方向に長い方形か。方位は北辺でE-40°-Sである。床面は、17号と同様で暗褐色土を用いた貼床を施し、床面下にも大小の土壇状のものが重複している。床面は17号より約20cm高い。カマドは東辺の南寄りに堀方を残す。ロームを円形に掘り込んでいるが、煙道部が壁外にのびる様子がなく、袖口は壁際から少し内側に位置するものか。焼土量は多く、堀方でも一様に焼けていた。カマド右側、17号の貯蔵穴の下面の位置に80×63cmの円形土壇があり、貯蔵穴と推定した。以上の様に、本住居の様相はカマド位置、構造に差異があるものの、17号のあり方と極めて一致する。遺物は、床面をはさんだ上下合せても少なく、土師器甕、高台付碗、鉄滓があげられるにすぎない。しかし、17号堀方遺物に混入している可能性を持つが、ここでは区別できなかった。

17号、36号の時期は、出土遺物によりともに平安時代（10世紀中葉）とする。（新井）



第362図 7区17号、36号住居跡遺物図(1)



第363図 7区17号、36号住居跡遺物図(2)

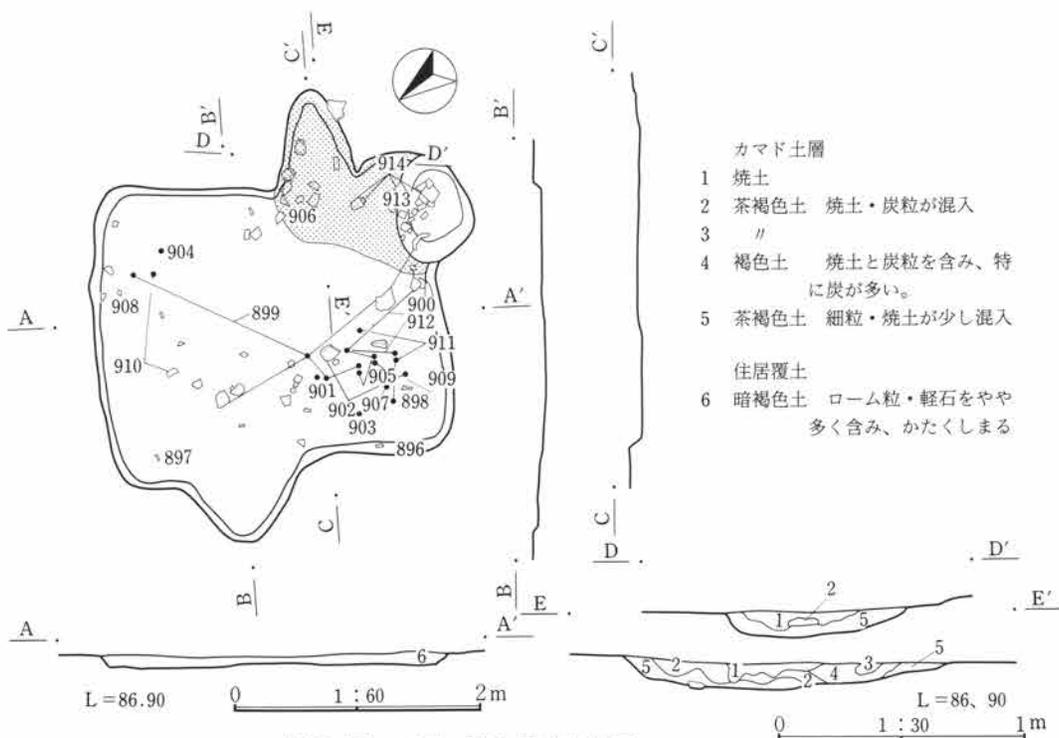
第119表 7区17号、36号住居跡出土遺物観察表

(第362・363図、図版 153)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
883 7区17号住	羽釜	口-[20.6]、高一(14.0)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。橙色	体部丸味をもち、口縁部内傾する。口縁端部凹線めぐり、やや薄手。鏝断面、端部の丸い三角形。体部ヨコナデ、下部、ヘラケズリ調整	
884	羽釜	底-[8.0]、高一(3.5)○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。黄褐色	平底。ヘラケズリ。体部、内湾してひろく。内面、ヨコナデ。外面ヘラケズリ調整	
885	甌	口-[26.0]、高一(6.5)○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい黄橙色	鉢形にひろく甌。口縁部直行し、端部、平坦面あり。鏝断面、端部の角ばる台形。体部ロクロナデ調整	
886	甕土師器	底-[4.6]、脚裾-[9.8]、高一(2.9)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、輝石を含む。酸化、軟質。明赤褐色	脚部大きく八の字にひろがる、小型台付甕。裾端部、丸く肥厚して、外側にめくれる。ヨコナデ調整	
887	埴須恵器	底-[7.0]、高一(2.2)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、輝石を含む。酸化、やや軟質。にぶい黄橙色	体部、内湾する。底部、回転糸切り、貼付高台、外行する低い台形。体下部、器肉、厚手。底部、薄手	内面、スス付着
888	埴須恵器	底-[6.6]、高一(3.7)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、輝石を含む。酸化、やや軟質。にぶい黄橙色	体部、内湾してひろがる。底部回転糸切り、貼付高台、外行する、小さな四角形。器肉、薄手、均質	
889	埴須恵器	底-6.6、高一(1.4)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。明赤褐色	底部、回転糸切り、貼付高台、断面低い台形。体部、器肉、薄手。ロクロ右回転	
890	甕土師器	口-[18.0]、高一(7.6)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、軟質。明赤褐色	体部丸味をもち、頸部しまつてたちあがり、口縁部、強く外反する、コの字状口縁の甕。口頸部内面、2段の稜をもつ。口縁端部、外稜をもち沈線めぐり。体部ヘラケズリ調整	
891	甕土師器	口-[21.0]、高一(6.0)○小片	砂粒、石粒を多く含む。酸化、軟質。橙色	体部、丸味をもち、頸部しまり、口縁部たちあがる。体部、ヘラケズリ調整。口縁部調整、粗雑。ゆがみあり。器肉、厚手	
893	甌	口-[27.8]、高一(13.0)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰色	体部丸く、口縁部ほぼ直行する。口縁端部、薄手の平坦面あり。鏝断面、台形。体部ロクロナデ調整	
894	埴須恵器	底-[5.8]、高一(2.5)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	平底。体部、直線的にひろがる。底部、回転糸切り、無調整	
895	埴須恵器	底-[7.0]、高一(1.9)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	平底。体部、直線的にひろがる。底部、回転糸切り、無調整	

## 2 14地区の調査 (平安時代)

1088 7区17号 住 参	羽 釜	口-[22.0]、高- (4.8)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、 やや硬質。にぶい黄橙色	体部、丸く、口縁部内傾する。口縁 端部、平坦面あり。鏝断面、三角形。 体部、ロクロナデ調整	出土レベル高い
1089 参	羽 釜	口-[23.2]、高- (7.2)○小片	砂粒、石粒、輝石を含む。 酸化、やや硬質。にぶい 黄橙色	口縁部、やや内傾する。口縁端部、 薄手の平坦面あり。鏝断面、上むき の三角形。体部、ロクロナデ調整	
1090 参	甕 土 師 器	口-[18.8]、高- (6.7)○小片	砂粒、褐色石粒を含む。 酸化、軟質。にぶい褐色	体部、丸く、頸部しまって、わずか にたちあがる。口縁外反し、端部外 側に、沈線めぐる。体部ヘラケズリ 調整。内面、ハケナデ	
1091 参	甕 土 師 器	口-[12.0]、高- (4.4)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒、輝石を含む。 酸化、軟質。明赤褐色	体部、丸く、頸部、明瞭に区切って たちあがり、口縁部外反する、コの 字状口縁の、小型甕。体部ヘラケズ リ調整	
1092 参	碗 須 恵 器	口-[13.4]、底- 6.7、高-5.6○ $\frac{1}{5}$	砂粒、石粒を含む。還元、 やや硬質。灰色	体部、わずかに内湾して、ひろがる。 口縁部直行する。底部、回転糸切り、 貼付高台、外行する長方形	
1093 参	碗 須 恵 器	口-[13.8]、底- 6.2、高-5.9○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 やや軟質。にぶい黄橙色	体部、直線的にひろがる。口縁部外 反し、端部、丸味をもつ。底部回転 糸切り、貼付高台、断面、外行する 台形。ロクロ右回転	
1094 参	碗 須 恵 器	口-[13.7]、底- 6.2、高-5.4○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒、輝石を含む。 酸化、やや軟質。にぶい 黄橙色	体部、ほぼ直線的にひろがる。口縁 部外反し、端部丸味をもつ。底部回 転糸切り、貼付高台、断面、外行す る台形	
1095 参	碗 須 恵 器	口-[13.5]、底- 7.0]、高-5. 0○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 やや軟質。にぶい橙色	体部、ほぼ直線的にひろがる。口縁 部、外反。端部丸味をもつ。底部、 回転糸切り、貼付高台、小さめの、 外行する台形。身の浅い碗	内外、スス付着
892	礫 器	長-14.0、幅-10.5、厚-3.4、輝石安山岩。扁平な礫の片面に、砥面様の浅い凹部あり			
1096-1 参	礫 器	長-14.3、幅-5.3、厚-1.9、200g、黒色片岩。棒状礫の片面を剝離し、両側面に打痕による、調整あり			
1097 参	砥 石	長-(8.4)、幅-5.9、厚-4.8、砂岩。荒砥。四面に砥面を持つ。片折れ			堀方土壇出土
1415 7区36号 住 参	碗 須 恵 器	口-[13.8]、底- 6.8、高-5.0○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。 還元、硬質。灰色	体下部で張りをもって、内湾しひろ がる。口縁部外反する。端部丸味あ り。底部、回転糸切り、貼付高台、 外行する、長方形の断面	堀方土壇出土



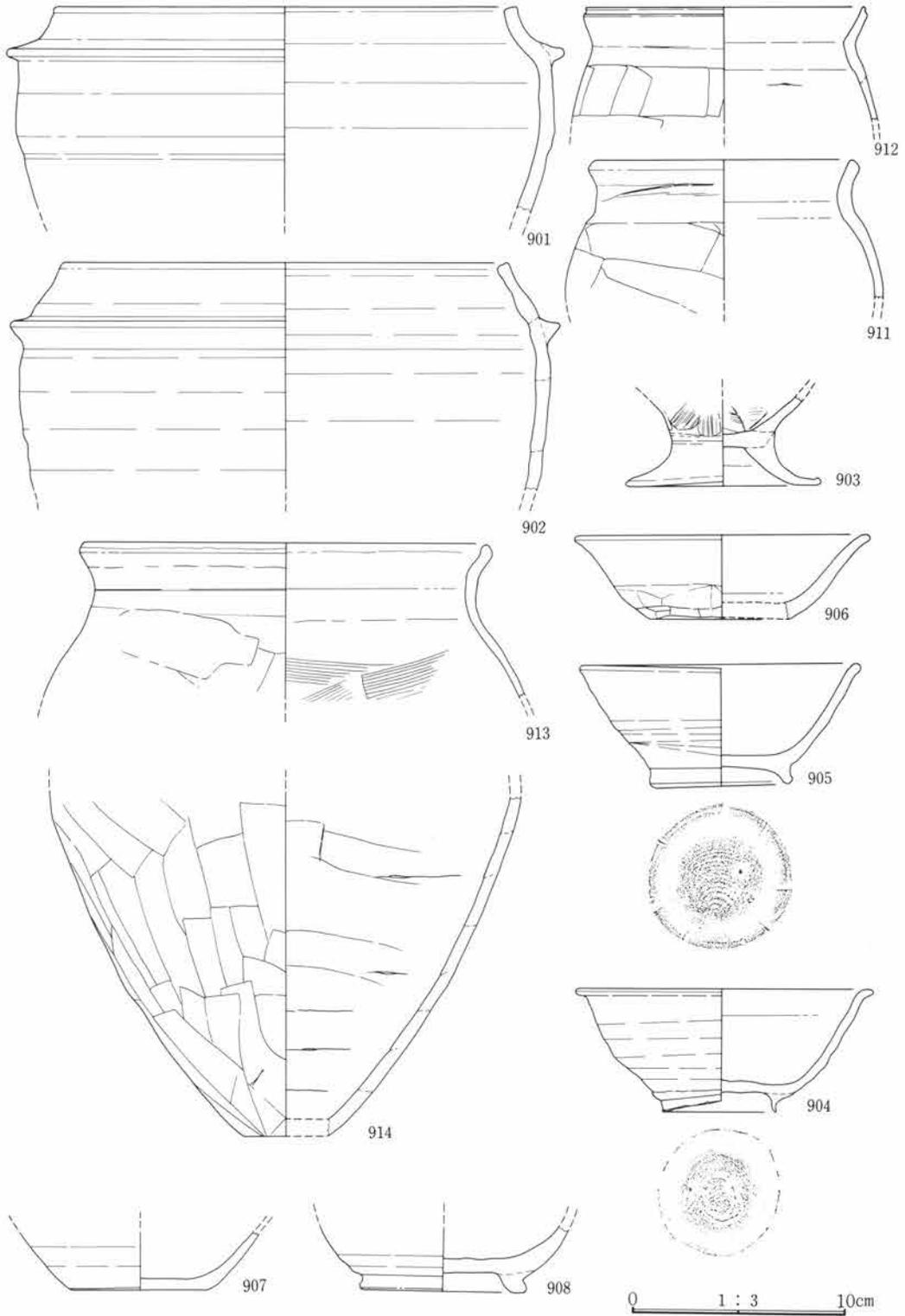
第364図 7区18号住居跡遺構図

7区18号住居跡 (第364～366図、第120表、図版154・155)

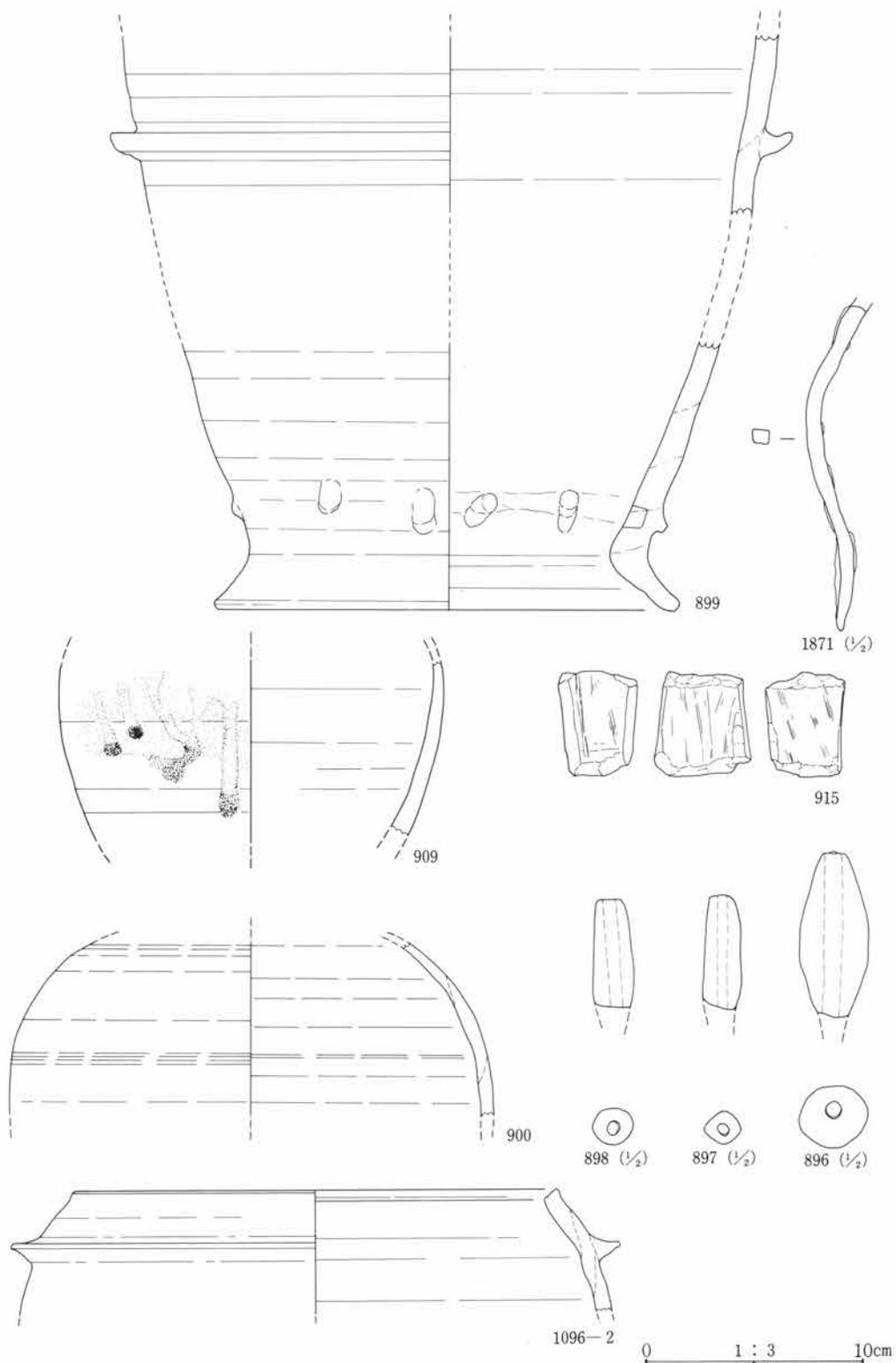
本住居跡は、基本土層の第4層で確認された。周囲には16号を始めとする14軒の住居跡があり、本住居跡を含めて東西方向で重複し、1号古墳南側の住居群としてのまとまりを持つ。

規模は、西辺2.80m、北辺2.40mを測り、方位は北辺でE-35°-Sである。平面形は方形で、西辺の北寄りに舌状の張出部を持つ。この張出部は、間口が約1m、床面との段差はなく、壁外に約50cm張り出している。これに伴うピットはないが入口施設か。床面は、暗褐色土を平坦に踏み固め堅緻である。カマドは、東辺の南寄りで確認されたが、その遺存状態は上面を削平され悪い。地山の第4層を壁外に掘り込み、右壁には角閃石安山岩の割石があり、中央には棒状の河原石による支石が据えられている。炭化物を含む焼土が、カマド手前から貯蔵穴付近まで広く分布し、カマドからのかき出しによるか。貯蔵穴は、住居東南隅にかかり、壁外に半分程張り出している。85×60cm、床面からの深さ8cmの円形土壇で、土師器甕、甕が出土している。遺物は上記のほか、羽釜、高台付埴、坏、須恵器甕、灰釉陶器壺、土錘、砥石等がある。このほかに床面下の堀方土壇が5基あり、うち2基に破片状態が主だが多量の遺物が出土している。床面をはさんだ上下で遺物の接合例はないが、土器の様相に差異はない。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代(10世紀初頭)とされるが、1号古墳南側の住居群の中では器種が豊富である。また、舌状の張出部は、隣接する16号と共通するものだが、同じ入口施設としても段差を持つ33号とは構造が少し異なるか。

(新井)



第365図 7区18号住居跡遺物図(1)



第366図 7区18号住居跡遺物図(2)

第120表 7区18号住居跡出土遺物観察表

(第365・366図、図版 155)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高)遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
899	甌	胴-[30.0]、底-[18.2]、脚裾-[21.2]○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色	体部、鉢形にひらく、甌。鈔貼付、断面、端部の丸い、上向きの台形。底部くびれて、脚部くの字にひらく。脚部短かく、端部丸味あり。内底部、底板受けのための小孔、3個あり。ロクロナデ調整	上、下、不完全な接合だが、同一個体
900	瓶 須恵器	胴-[22.1]、高-(7.8)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰色	体上部、丸く張りをもつ。体部、ロクロナデ調整。器肉、薄手	
901	羽釜	口-[21.6]、高-(9.5)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	体部、丸味をもち、口縁部内傾し、中程でたちあがる。口縁端部、内斜する平坦面あり。鈔断面、端部の丸い三角形。体部ロクロナデ調整	
902	羽釜	口-[20.8]、高-(10.5)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色	体部、丸味をもち、口縁部内傾する。口縁端部中央凹線めぐる。鈔断面、端部の丸い、三角形。ロクロナデ調整。器肉、薄手	
903	甕 土師器	底-[4.8]、脚裾-[9.2]、高-(4.0)○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	体部、丸味のある、小型台付甕。脚部、八の字にひらく。裾部ほぼ水平にひらき、端部丸味あり。体部ヘラケズリ調整、脚部ヨコナデ	
904	埴 須恵器	口-[13.9]、底-5.3、高-5.7○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。灰白色	体部、丸く内湾してひらき、口縁部外反する。口縁端部、丸味あり。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、端部のめくれる三角形。器肉、薄手	
905	埴 須恵器	口-[13.1]、底-6.6、高-5.6○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰色	体部、わずかに内湾してひらき、口縁部わずかに外反する。端部丸味あり。底部、回転糸切り。貼付高台、断面、外側直行する台形	重ね焼きの痕跡あり
906	坏 須恵器	口-[13.7]、底-[9.6]、高-3.9○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰色	体下部で張りをもち、ひろがる。口縁部外反する。底部ヘラナデ、底部外縁部、ナデあり	底部、切りなおしの補修痕か?
907	埴 須恵器	底-[6.6]、高-(2.7)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	平底。体部、内湾してたちあがる。底部回転糸切り、無調整	
908	埴 須恵器	底-[7.6]、高-(2.9)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、白色石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい橙色	体下部で張りをもち内湾する。底部回転糸切り、貼付高台、断面、外行する四角形。器肉、やや厚手	
909	瓶 灰釉陶器	胴-[17.3]、高-(8.0)○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含むが、細密。還元、硬質。灰色、釉-オリーブ灰色	体上部で最大径をもつ、瓶。体部ロクロナデ調整、体下部、回転ヘラケズリ調整。体上部、釉がかりあり	

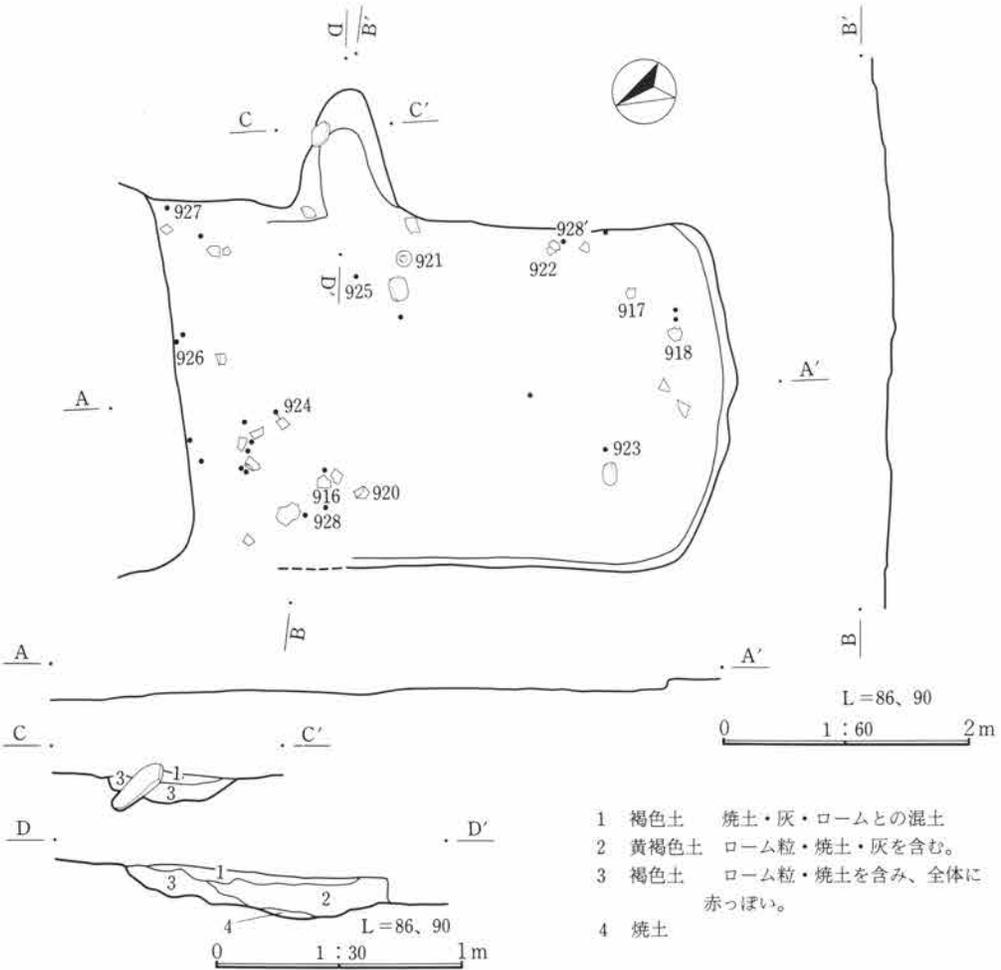
第6章 検出された遺構と遺物

911 7区18号 住	甕 土師器	口-[12.0]、高 -(6.5)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、軟質。にぶい赤褐色	体部、丸味をもつ、小型甕。頸部、 区切りをもってたちあがり、口縁部 外反する。口縁端部、外側に肥厚し 丸い稜をもつ。体部ヘラケズリ調整。 器肉、厚手
912	甕 土師器	口-[13.0]、高 -(5.2)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、軟質。にぶい橙色	体部、やや丸味をもち、口縁部、く の字に外反する。口縁端部、外側に 沈線めぐる。体部ヘラケズリ調整
913	甕 土師器	口-[19.2]、高 -(7.0)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、軟質。にぶい赤褐色	体部、丸味をもち、口縁部、くの字 を呈する。口縁端部、外側に肥厚し、 沈線めぐる。内側にも凹線めぐる。 体部ヘラケズリ調整。器肉、厚手
914	甕 土師器	底-[4.0]、高 -(15.7)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、軟質。橙色	小さい平底。卵形の体部をもつ。体 部外面、ヘラケズリ調整。内面ヨコ ナデ
1096-2 参	羽 釜	口-[22.2]、高 -(5.6)○小片	砂粒、石粒を多く含む。 還元、やや硬質。灰白色	体部、丸味をもち、口縁部内傾する。 口縁端部、内斜する平坦面あり。鏝 断面、端部が狭くなる台形。体部ロ クロナデ調整
915	砥 石	長-(4.7)、幅-4.3、厚-3.6、流紋岩。両端、折山あり。四角柱状の砥石。4面の 砥面を持つ。線条痕あり		
896	土 錘	長-(5.1)、径-2.1×1.9、孔径-0.5、中央、ふくらみ、両端すぼまる		
897	土 錘	長-(3.5)、径-1.2×1.0、孔径-0.3、棒状。片端、折れ		
898	土 錘	長-(3.3)、径、1.2、孔径-0.4、棒状。片端、折れ		
1871	釘 鉄製品	長-(9.8)、幅-0.5、厚-0.5、断面、四角形、片端、細く突る。釘と思われる。片 端、折れ		

7区19号住居跡（第367・368図、第121表、図版156）

本住居跡は、20号、26号、31号、32号、37号、39号、40号と8軒重複の一つで、北に31号、37号、西辺に39号がある。重複関係は、37号、39号より新しく、31号より古い。

規模は、東辺側で4.45m以上、南辺で2.75mを測り、上面を大分削平されているが、南北方向に長い長方形を呈する。方位は南辺側でE-25°-Sである。壁高は5cmである。床面は、暗褐色土を踏み固めた貼床で、全体に堅緻で北側がやや深くなる。カマドは東辺側で確認された。上面を削平されているが、左袖には河原石を半ば直立状態で2石残し、底面には焼土層が厚さ3cm程レンズ状に残っていた。壁際に袖石を持ち、大きく壁外に煙道を持つのが特徴である。遺物は、住居内中央部を除いた壁際に多く見られ、羽釜、埴、坏、小型甕、土錘、灰釉陶器皿がある。羽釜、埴の個体数が多い。遺構の時期は、出土遺物から平安時代（10世紀後葉）である。（女屋）

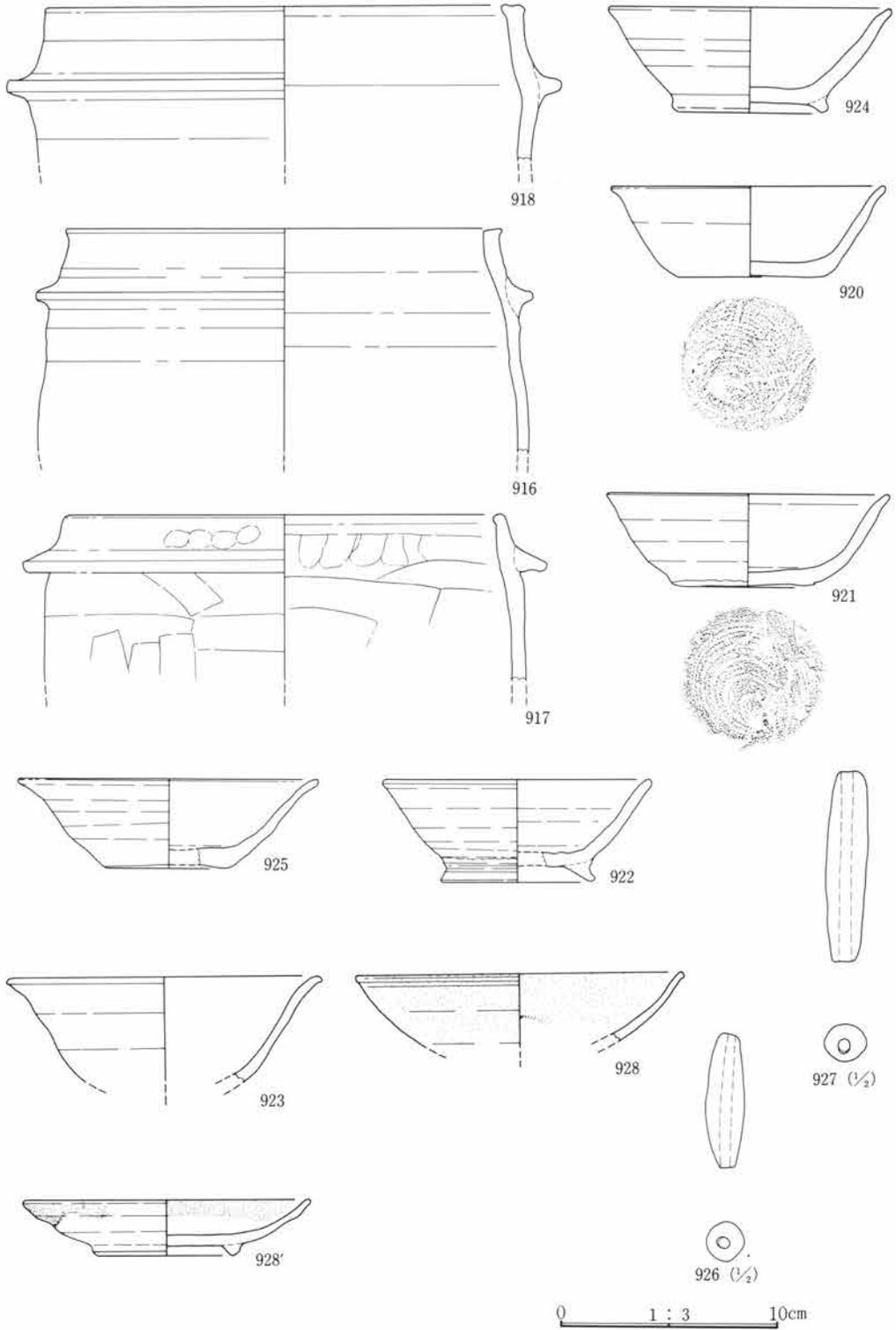


第367図 7区19号住居跡遺構図

第121表 7区19号住居跡出土遺物観察表

(第368図、図版 156)

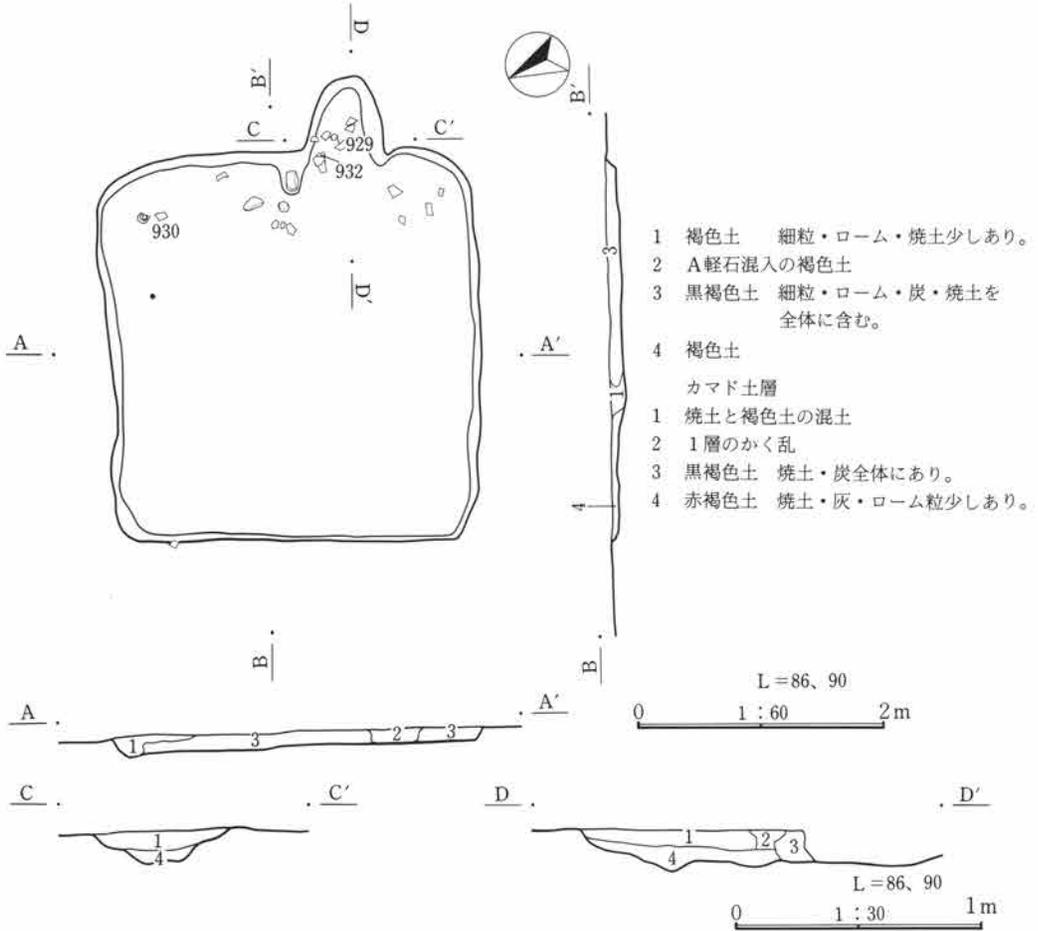
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
916	羽釜	口-[20.0]、高一(10.0)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、白色石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	体部、丸味をもち、口縁部、たちあがる。口縁端部、平坦面あり。鐮断面、台形。体部、ロクロナデ調整。器肉、薄手	
917	羽釜	口-[20.0]、高一(7.5)○小片	砂粒、石粒、輝石を含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	口縁部、短かく、口縁端部内側に丸味あり。鐮断面、端部の丸い、下向きの台形。体部、指頭痕あり、鐮下までヨコヘラケズリ調整、内面、ヘラナデ、調整粗雑	



第368図 7区19号住居跡遺物図

## 2 14地区の調査 (平安時代)

918 7区19号 住	羽 釜	口-[21.7]、高- -(7.0)○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、 やや硬質。にぶい黄橙色	口縁部、たちあがり、口縁端部、平 坦で、内側に丸味あり。鈎断面、端 部の丸い、台形。体部、ロクロナデ 調整	
920	坏 須 惠 器	口-[12.5]、底 -6.6○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 やや軟質。灰白色	平底。底部外縁部で丸く張りをもち、 ひろがる。口縁部外反し、端部丸味 をもつ。底部、回転糸切り、底部縁 辺、スレあり	重ね焼きの痕跡 あり
921	坏 須 惠 器	口-[12.9]、底 -6.6○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 やや硬質。にぶい褐色	平底。底部より、一度たちあがり、 張りをもって、わずかに内湾しひろ がる。口縁部外反さみ。底部回転糸 切り、無調整。ロクロ右回転。底部 器肉、厚手	重ね焼き痕あり 口縁部一部欠け あり。スス付着 ——灯明用か
922	埴 須 惠 器	口-[12.3]、底 -[7.0]、高-4. 6○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 やや硬質。灰黄色	体下部で、張りをもち、ひろがる。 身の浅い埴。口縁部、直行する。底 部回転糸切り、貼付高台。断面、外 行する三角形	
923	埴 須 惠 器	口-[14.0]、高 -(4.7)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 やや硬質。浅黄橙色	体下部で張りをもち、内湾し、口縁 部、大きく、ゆるやかに外反する。 体部ロクロナデ調整。器肉、薄手	
924	埴 須 惠 器	口-[13.0]、底 -[7.2]、高-4. 8○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 やや軟質。灰黄褐色	体部、わずかに内湾し、ひろがる。 口縁部、わずかに外反。底部、回転 糸切り。貼付高台、断面、外行する 四角形	内面、スス、強 く付着——灯明 用
925	坏 須 惠 器	口-[13.8]、底 -[6.1]、高-4. 0○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。灰黄褐色	平底。体部、直線的にひろがり、口 縁部、外反。端部、丸味をもつ。底 部、回転糸切り。無調整	
928	埴 灰釉陶器	口-[14.8]、高 -(3.5)○ $\frac{1}{2}$	砂粒含むが、細密。還元、 硬質。灰白色、釉—淡黄 色	体下部で張りをもち、ひろがる。口 縁部、外側にめくれて、稜をもつ。 身の浅い埴。体部ロクロナデ調整。 釉、つけがけ	
928'	皿 灰釉陶器	口-[13.0]、底 -[6.0]、高-2.5 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒含むが、細密。還元、 硬質。灰白色、釉—白～ 浅黄色	底部より一度、しぼって、ゆるい張 りをもちひろがる。底部、ナデ調整 後、貼付高台。断面、端部の丸い台 形。釉、つけがけ	重ね焼きの痕跡 あり
926	土 鍾	長-4.1、径-1.2、孔径-0.4、完存。両端、細く、中央、ふくらむ			
927	土 鍾	長-5.8、径-1.3×1.1、孔径-0.3×0.4、完存。棒状で長い。両端、ややすぼむ			



第369図 7区20号住居跡遺構図

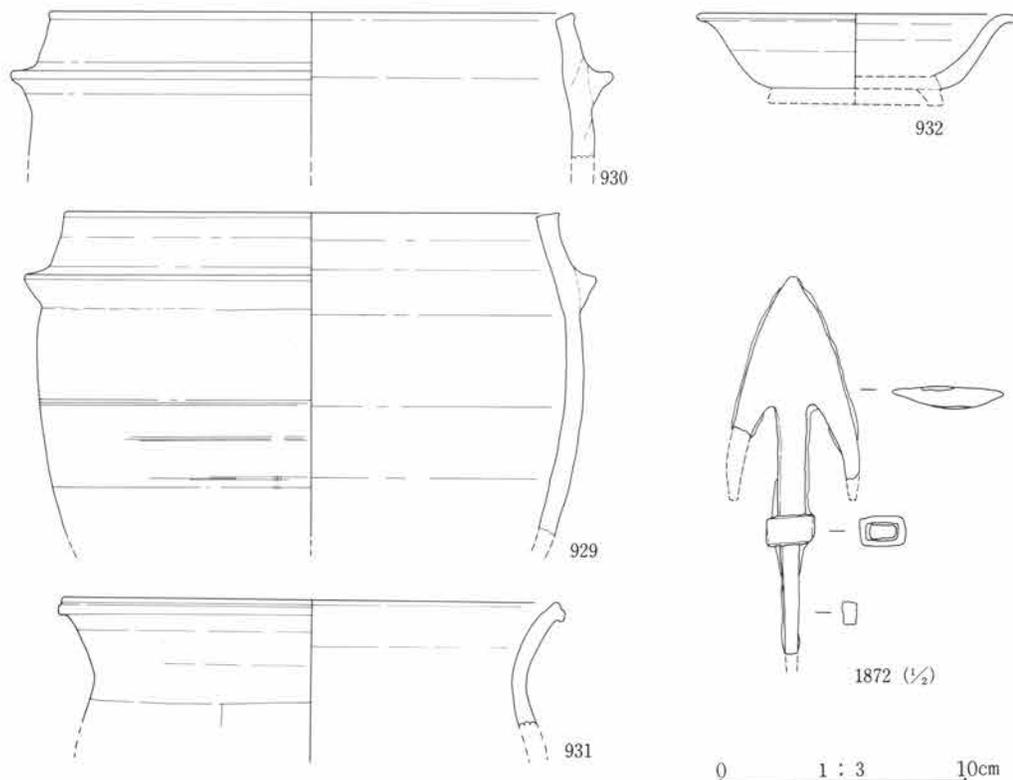
7区20号住居跡 (第369・370図、第122表、図版157)

本住居跡は、基本土層の第4層で19号を始めとする8軒重複の一つとして確認された。全体が3号方形周溝墓上にあり、東辺側で40号を切っている。8軒の中では、26号とともに最も新しいもので、確認時床面近くまで削平されていた。

規模は、北辺で3.10m、東辺で3mを測り、方位は南辺でE-27°-Sである。平面形は東西方向が少し長い方形である。床面は西南側が残るだけで、ロームを踏み固めているのに対して重複する周溝上は貼床である。柱穴、周溝は確認されず、床面下の堀方でも円形土壇が1基あるにすぎない。カマドは東辺の南寄りにあるが、焼けた様子は少ない。左袖口には柱状の河原石が据えられ、袖石の一部はカマド手前に散乱している。貯蔵穴はカマド右脇にあったと推定されるが、確認できなかった。遺物は、カマド内と東辺寄りにのみ見られるが少量である。土器を主とする分布から少し離れた北辺に鉄鏃1点がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴により平安時代(10世紀後葉)とされる。

(新井)

2 14地区の調査（平安時代）

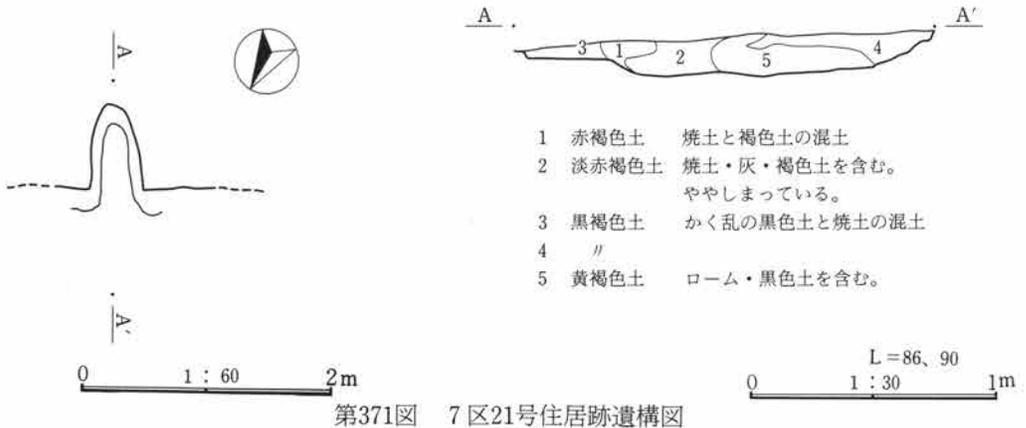


第370図 7区20号住居跡遺物図

第122表 7区20号住居跡出土遺物観察表

(第370図、図版 157)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
929	羽釜	口-[20.0]、高-[13.0]○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。橙色	体部、丸味をもち、口縁部内傾し、端部、平坦面あり。鈔断面、端部の丸い三角形。体部ロクロナデ調整	
930	羽釜	口-[21.0]、高-[5.9]○小片	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	口縁部、短かく、やや内傾する。口縁端部平坦で内斜、鈔断面、上向きの三角形。体部ロクロナデ調整	
931	甕土師器	口-[20.5]、高-[4.9]○ $\frac{1}{2}$	砂粒を多く含む。酸化、軟質。にぶい橙色	ゆるく外反する口縁部、端部外側に丸く肥厚し、沈線めぐる。器内厚手	
932	埴須恵器	口-[12.7]、底-[6.8]、高-[3.0]○ $\frac{1}{5}$	砂粒を含むが、細。酸化、軟質。にぶい黄橙色	体下部で張りをもち、口縁部大きく外反する。口縁端部外稜をもつ身の浅い埴。高台付と思われる	
1872	鉄製鉄	長-[10.1-1]鉄身部、5.6、篋被部、0.9、茎部、3.0)、鉄部-(2.8、厚-0.5)、篋被部(幅-0.7、厚-0.5)、棘部(1.3×0.8)、茎部-(0.4×0.6)、鉄身部幅広く、断面、レンズ状、腹扶、深く、かえり長い。棘篋被式、茎部断面方形			混入か



7区21号住居跡 (第371図)

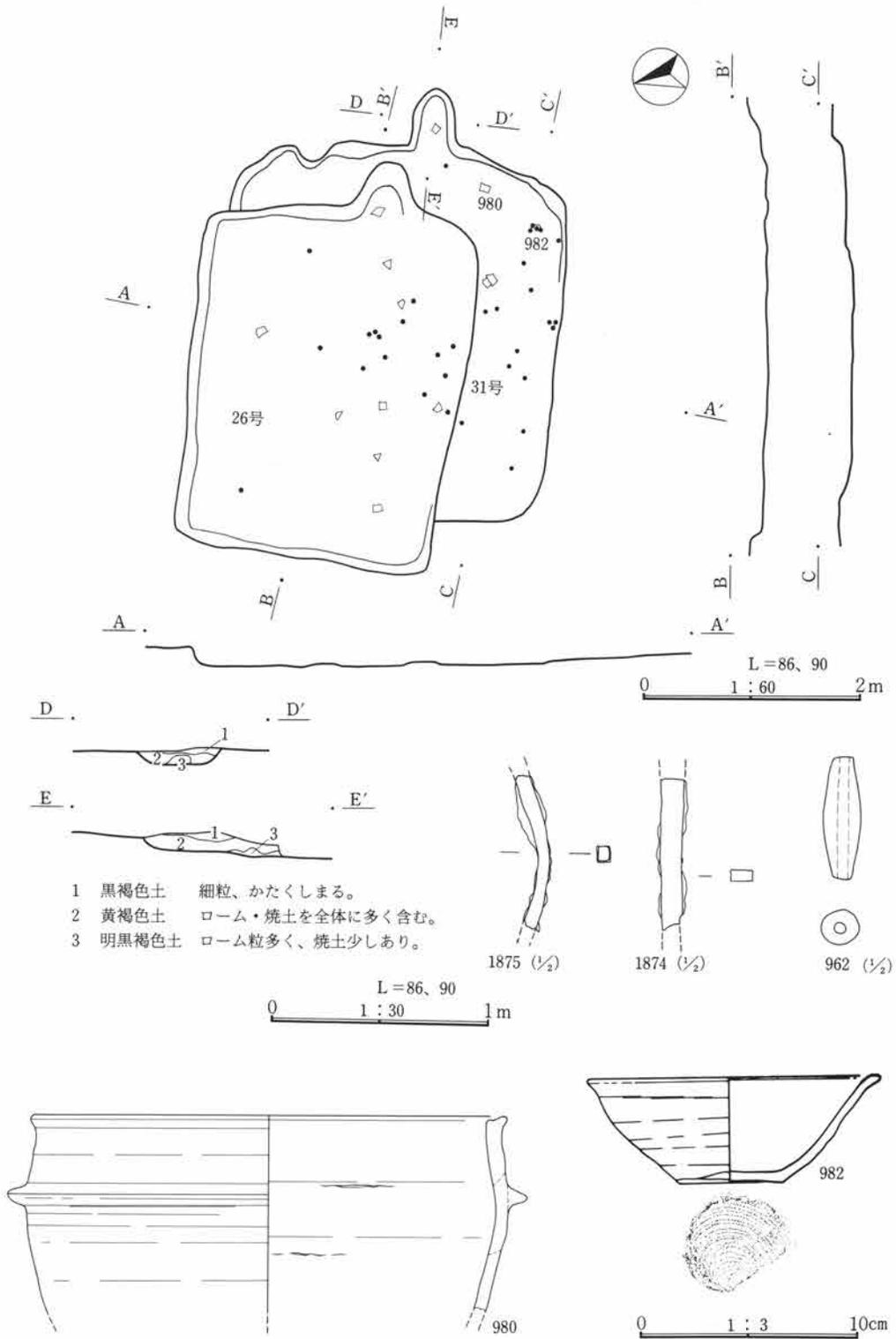
本住居跡は、基本土層の第5層上面、3号方形周溝墓方台部東南隅で確認された。確認時、床面の殆どは消失し、わずかにカマド痕跡とそれに続く東辺側の一部を残す程度であった。規模、方位、平面形については不明で、遺物もカマド内から土師器甕の破片を見る。カマドは、東辺の中央寄りの位置と推定され、ロームを壁外に掘り込み、煙道にかけて赤く焼けている。床面は、暗褐色土を用いて貼床をしているらしく、一部が残る。遺構の時期は、僅少ながら出土遺物の特徴により平安時代(10世紀)とされる。(宮下)

7区26号、31号住居跡 (第372図、第123表、図版156・157)

この2軒は、19号を始めとする8軒重複のうち、東北側の2軒である。基本土層の第4層で確認されたが、上面は大半が削平されている。床面下に37号と39号があり、西辺側に32号、40号、20号と続き、31号の南辺側に19号、37号が重複する。26号と31号の重複では26号が新しく、8軒の中では20号とともに最も新しい住居である。

26号は、東辺2.50m、南辺3mを測り、方位は南辺でE-20°-Sである。平面形は東西に長い方形であるが、南辺側は31号との重複のため、壁の位置は堀方からの推定による。壁高は16cmである。床面は暗褐色土を踏み固め、平坦で堅い。堀方には円形土壇が2基ある位で、遺物も少ない。カマドは東辺にあるが遺存状態は悪く、内部に少量の焼土分布と袖石の一部が周辺にかけて散在していた。貯蔵穴は堀方調査でも確認できなかった。遺物は、羽釜、坏、土錘、鉄釘、刀子がある。遺構の時期は、出土遺物から平安時代(11世紀)である。

31号は、東辺3.08m、南辺3.16mを測り、方位は南辺でE-18°-Sである。平面形は東西に長い方形だが、北辺側は26号との重複のため不明である。壁高は8cmである。床面は暗褐色土を踏み固めている。カマドは東辺中央部にある。焼土を少量残すのみで遺存状態は悪い。遺物はカマド内から南辺側にかけて残り、羽釜、碗、土錘がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代(11世紀初頭)である。(女屋)



第372図 7区26号、31号住居跡遺構、遺物図

第123表 7区26号、31号住居跡出土遺物観察表

(第372図、図版 157)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
980 7区31号 住	羽釜	口-[21.6]、高- -(9.0)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 やや硬質。橙色	体部、内湾してたちあがり、口縁部 内傾ぎみ。口縁端部、外反し、中央 に凹線めぐる。鈎断面、端部の丸い 三角形。体部ロクロナデ調整	
982	埴 須恵器	口-[13.2]、底 -[4.5]、高-4. 7○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒、輝石を含む。 酸化、やや軟質。明褐色	平底。体部中位で内湾してひろがり、 口縁部外反。口縁端部肥厚し、丸味 あり。底部回転糸切り、無調整。ロ クロ右回転	
26住 962	土 錘	長-3.7、径-1.2、孔径-0.35、完存。中央ふくらみ、両端、細い小型品			
1874	鉄製刀子	長-(4.6)、幅-0.6、厚-0.35、刀子中子部分のみ残存			
1875	鉄製釘	長-(4.6)、幅-0.4、厚-0.5、一部分残存。断面方形の釘			

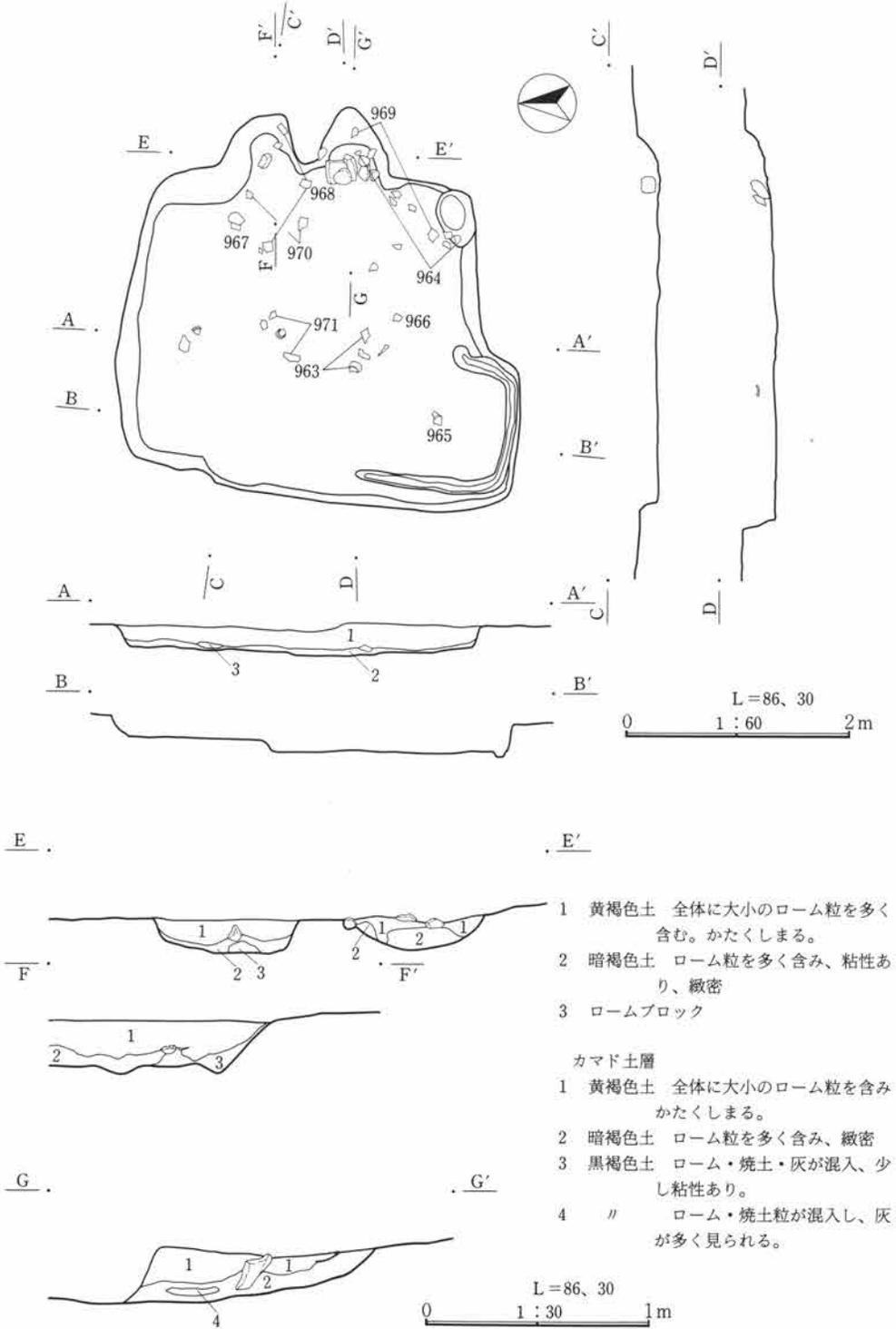
## 7区27号、29号住居跡(第373~375図、第124表、図版158)

この2軒の住居跡は、重複して3号古墳南側周堀内で確認された。隣接して周堀外縁にかかって50号住居跡があるが、両者の間には75cmの床面レベル差がある。東辺には新旧2基のカマドがあり、同一の床面上での29号から27号への拡張による重複住居である。

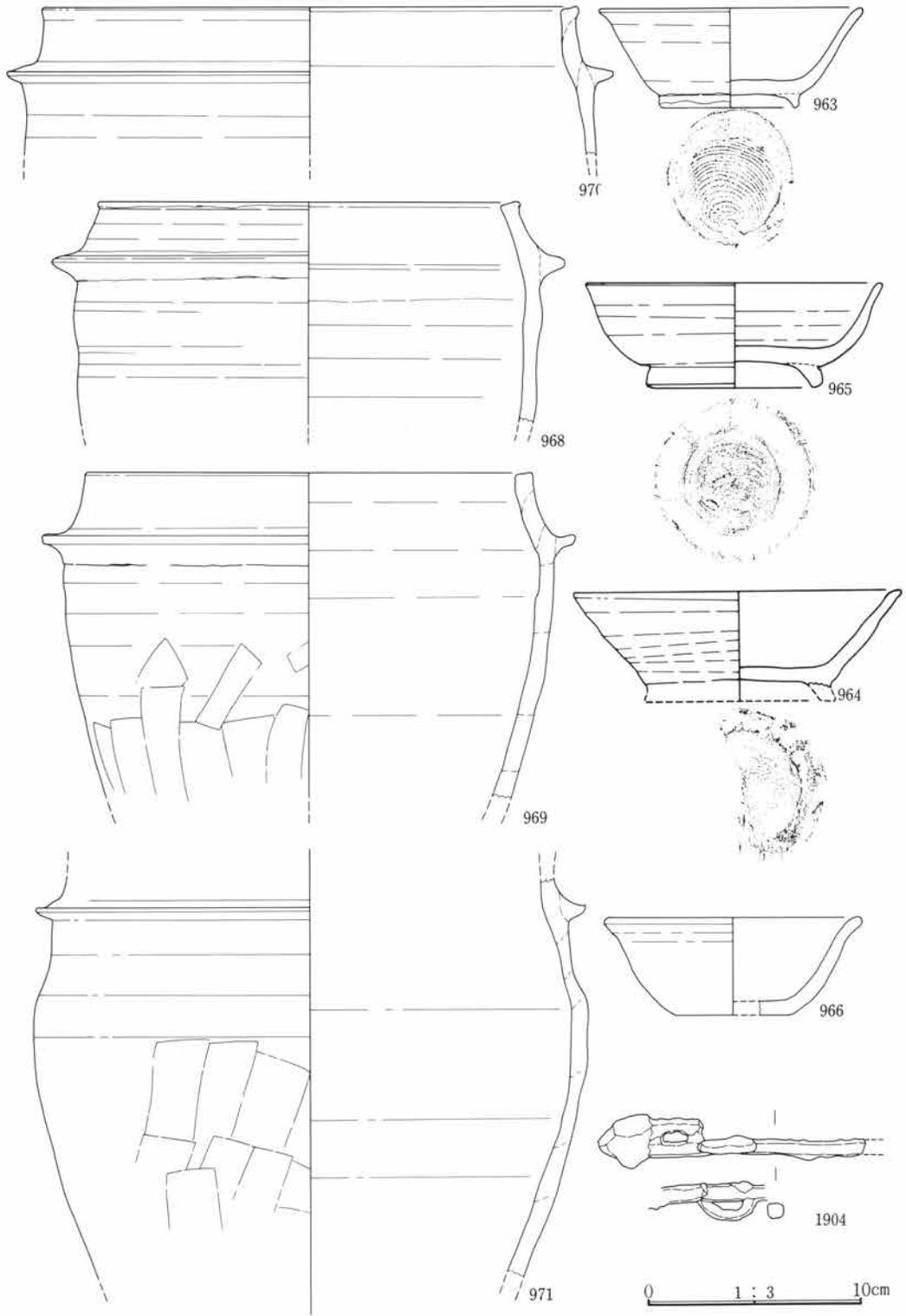
29号住居跡は、東辺で推定2.50m、北辺で2.66mを測り、方位は北辺でE-4°-Sである。平面形は方形を呈する。床面はロームを踏み固めてあり、平坦で比較的堅緻である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは東辺の中央部にあり、壁外に地山を掘り込み、右壁には河原石を貼付し、中央には角礫の支石が据えられている。古墳の葺石も混在しているが、カマド用石には角礫、割石が多い。貯蔵穴は、住居東南隅、27号床面下で確認された。35×30cm、深さ15cmのほぼ円形を呈する。遺物は、27号と混在しているが明確なものとして、北辺寄りとカマド内のものがある。少量で、羽釜、土師器高台付埴がある。

27号は、東辺で推定2.35m、北辺で2.94mを測り、方位は北辺でE-4°-Sである。平面形は方形を呈し、29号と規模の点で大差ないが南辺側に張出部を持つ。間口約1.30mで、壁外に約30cm張り出し、この部分の壁際のみ幅10cm、深さ10cmの周溝がめぐる。床面は29号と同一面で、堅緻な様子が見られた。カマドは東辺中央部にある。29号と同様な規模だが、崩落しているものの焚口に河原石を鳥居状に架した様子が窺える。焚口付近に薄い焼土分布が見られた。貯蔵穴は、住居東南隅に接して49×32cm、深さ20cmの円形土壇がある。遺物は、張出部付近を除く住居内全体に見られ、羽釜を始めとして土師器甕、高台付埴、坏が出土している。

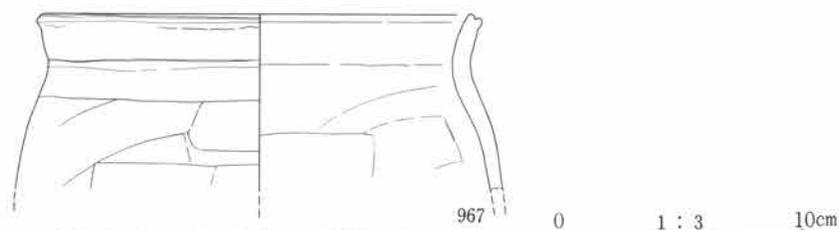
2軒の住居跡の時期は、重複関係では29号が古いが出土遺物の点では大差なく、その特徴から平安時代(10世紀後葉)である。(小安)



第373図 7区27号、29号住居跡遺構図



第374図 7区27号、29号住居跡遺物図(1)

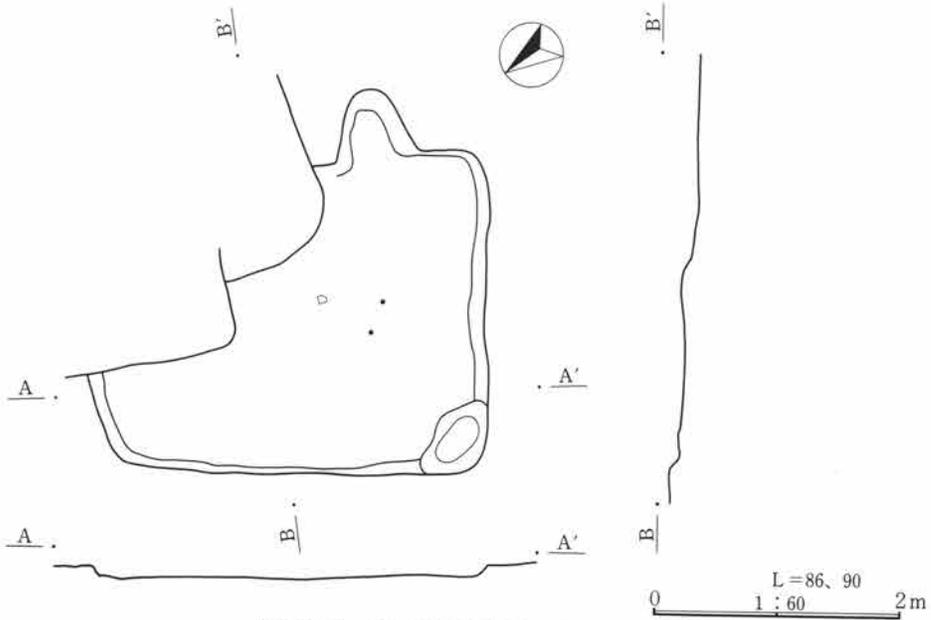


第375図 7区27号、29号住居跡遺物図（2）

第124表 7区27号、29号住居跡出土遺物観察表

(第374・375図、図版 158)

番号	土器種類	法量（口径・底径・器高）遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
963 7区27号住	碗 須恵器	口—[12.3]、底—6.5、高—4.7 $\circ \frac{3}{4}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	体下部で、丸く張りをもち、ひろがる。口縁部外反する。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外行する、台形。ロクロ右回転	重ね焼きの痕跡あり
964	碗 須恵器	口—[15.0]、底—[8.4]、高—(4.5) $\circ \frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。還元、やや軟質。灰色	体部、直線的にひろがる。底部回転糸切り、貼付高台	高台部分を欠く
965	碗 須恵器	口—[13.6]、底—8.0、高—4.7 $\circ \frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	体下部で、丸く張りをもち、ひろがる。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、端部丸味のある台形。身の浅い碗	
966	碗 須恵器	口—[12.0]、底—[5.5]、高—4.5 $\circ \frac{1}{3}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。灰褐色	平底。体部内湾してひろがり、口縁部外反する。口縁端部丸味あり。底部、回転糸切り、無調整	
967	壺 土師器	口—[18.0]、高—(7.0) $\circ \frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。褐色	体部、やや丸く、頸部わずかにくびれてたちあがる。口縁部、外反、端部、肥厚し、中央に沈線めぐる。体部ヘラケズリ調整。器内、厚手	
968	羽 釜	口—[19.8]、高—(10.3) $\circ \frac{1}{6}$	砂粒を含む。酸化、やや硬質。灰黄色	口縁部、内傾し、口縁端部、平坦面をもつ。鋸断面、三角形。体部、ヨコナデ調整	内外、スス、炭化物付着
969	羽 釜	口—[20.8]、高—(15.0) $\circ \frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。浅黄橙色	体部、内湾し、口縁部内傾する。口縁端部、平坦で、中央わずかに凹む。鋸断面、台形。体部ロクロナデ、体下部、タテヘラケズリ調整	
970	羽 釜	口—[25.0]、高—(6.8) $\circ$ 小片	砂粒を多く含む。酸化、やや硬質。浅黄橙色	口縁部内傾し、端部中央凹線めぐる。鋸断面、台形。体部ロクロナデ	
971	羽 釜	胴—[25.8]、高—(18.6) $\circ \frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。橙色	体中部で張りをもつ。体部ロクロナデ、体下部、ヘラケズリ調整	
1904	鉄製品	長—(12.5)、幅—0.7、厚—0.7、片端折れ。断面方形、片端、折り曲げあり			



第376図 7区32号住居跡遺構図

7区32号住居跡 (第376図、図版156)

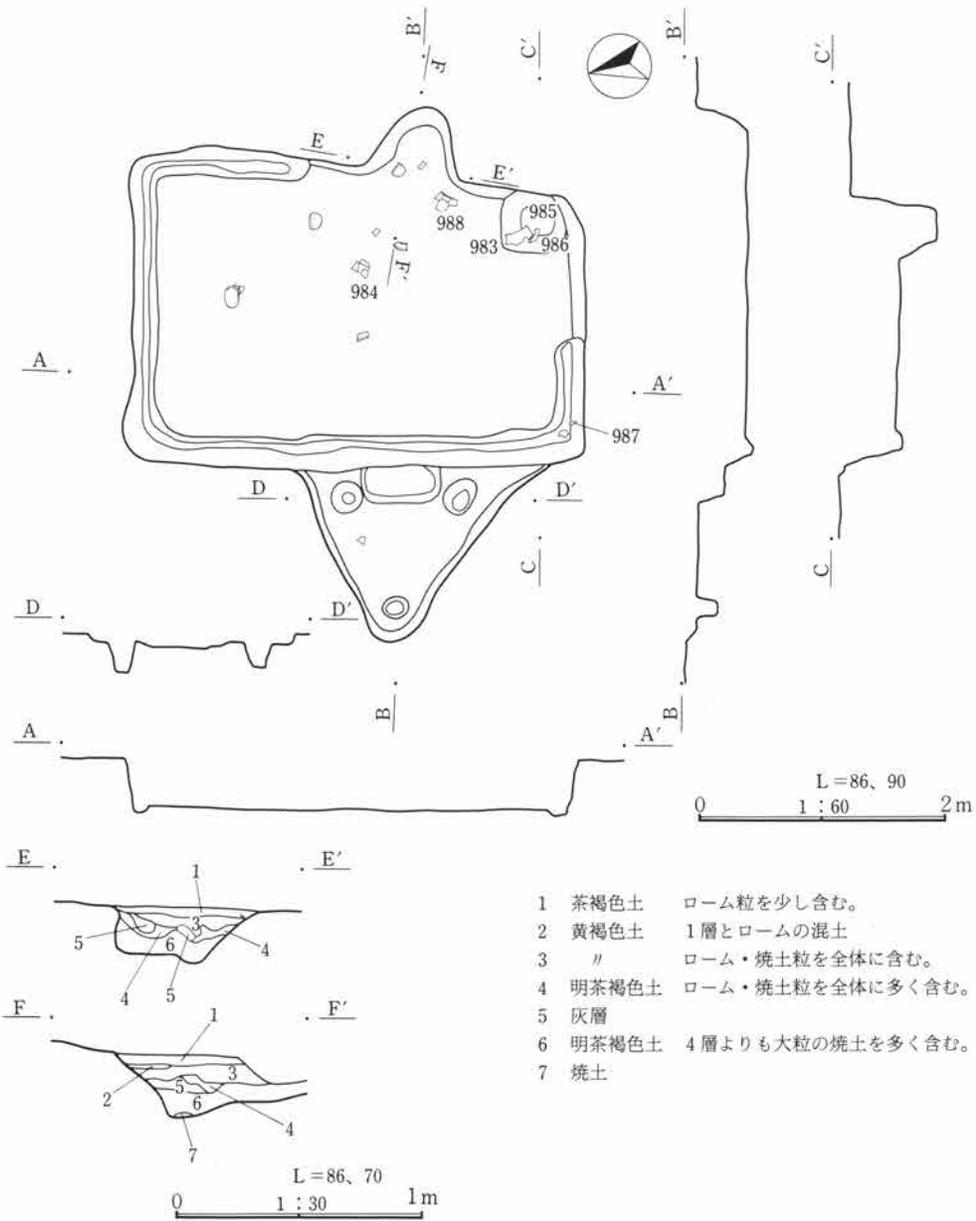
本住居跡は、19号を始めとする8軒重複の1つである。東半分は、19号、26号、31号と重複し、カマドを始めとする範囲は堀方調査で確認された。重複関係は、19号、26号、40号より古く、37号より新しい。

規模は、西辺で3.23m、南辺で2.58mを測り、方位は南辺でE-32°-Sである。平面形は、南北方向に長い方形と推定される。壁高は12cmである。床面は暗褐色土を平坦に踏み固めており、重複する東半分は貼床である。貯蔵穴は、西南隅に接して72×42cm、床面からの深さ7cmの円形土坑がある。カマドは東辺の南寄りにあるが、堀方形状と焼土分布から見て、壁際に袖口を持ち、壁外に煙道がのびるものか。遺物は、個体数がなく、羽釜、コの字状口縁の甕が見られる位である。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代(10世紀中葉)である。(小安)

7区33号住居跡 (第377・378図、第125表、図版159)

本住居跡は、1号古墳周堀内で確認された。西辺で74号土坑と重複し、古い方から74号土坑、1号古墳、33号住居跡の順である。3号、53号、55号住居跡等とともに1号古墳の北側をめぐる住居群の中の一つである。

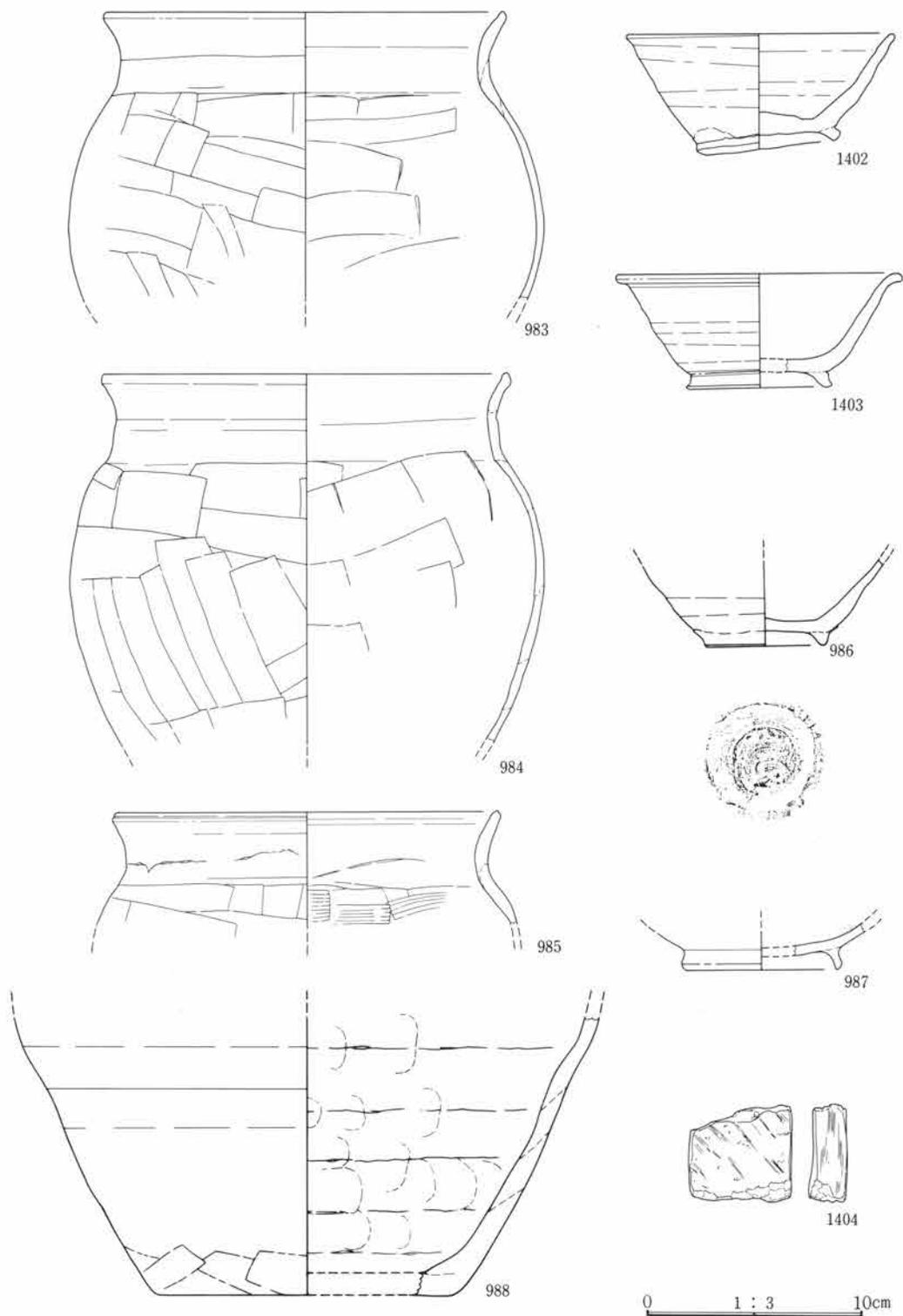
規模は、東辺で3.65m、北辺で2.46mを測り、方位は北辺でE-15°-Sである。平面形は南北に長い方形を呈し、西辺に三角状の張出部を持つ。この張出部は、東辺のカマドと対の位置にあり、間口約2m、壁外に1.40m張り出している。壁際近くに1対と、張出部先端近くに1ヶ所の小ピットがあり、直径、深さを揃え柱穴と推定される。張出部と住居床面との地高差は約45cmあるが、壁際には階段状に一段低い部分がある。構造から見て入口部分と推定される。床面は、ロー



第377図 7区33号住居跡遺構図

ムを平坦に踏み固めており堅緻である。周溝は、カマドと東南隅付近を除いて全周し、幅約20cm、床面からの深さ約5cmを測る。壁は四辺とも垂直に近い立ち上がりを示し、高さ約50cmある。

カマドは東辺の中央部にあり、遺存状態は良好である。ロームを壁外に掘り込み、茶褐色土を用いて袖としている。焼土、炭化物、灰が多く両壁は赤く焼けていた。貯蔵穴は、東南隅に接して53×55cm、深さ39cmの隅丸方形土壇がある。遺物はカマド周辺に多く、土師器甕、高台付碗、灰釉陶器皿がある。遺構の時期は、出土遺物から平安時代(10世紀初頭)とされる。(小安)

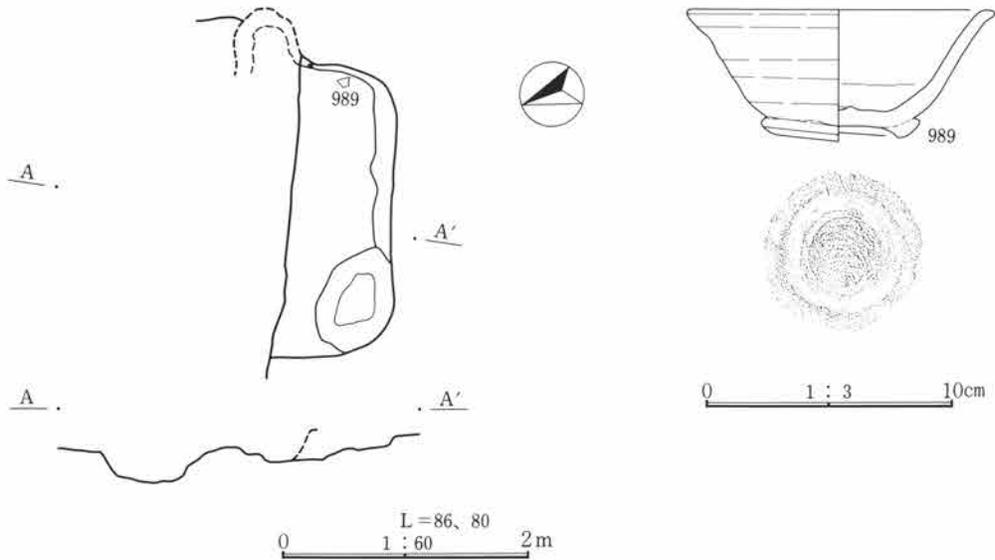


第378図 7区33号住居跡遺物図

第125表 7区33号住居跡出土遺物観察表

(第378図、図版 159)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
983	甕 土師器	口-[18.4]、胴-[22.0]、高一(13.2)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	体中部で丸く張りをもち、頸部明瞭にしまつてたちあがり、口縁部外反する、コの字状口縁の甕。口縁端部肥厚して外側にゆるい稜をもつ。体部ヘラケズリ調整。器肉、やや厚手	
984	甕 土師器	口-[19.0]、胴-[22.0]、高一(16.8)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	コの字状口縁の甕。体部中位で丸く張りをもつ。口縁端部、やや肥厚。体部、ヘラケズリ調整。器肉、厚手	
985	甕 土師器	口-[18.0]、高一(5.2)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	体部丸く、頸部のくびれ弱い。口縁部外反、口縁端部外側に肥厚し沈線めぐる。体部ヘラケズリ調整。器肉、厚手	
986	埴 須恵器	底-5.4、高一(3.7)○ $\frac{1}{3}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。橙色	体下部で丸く張りをもち、一度くびれて、ひろがる。底部、回転糸切り、貼付高台。断面、台形。器肉、体下部で、厚く、体上部で薄手	重ね焼きの痕跡あり
987	埴 灰釉陶器	底-[7.0]、高一(1.7)○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含むが、細密。還元。灰白色、釉-灰白色	底部、ナデ調整。貼付高台、断面、三日月状。釉がかりあり	
988	甕 須恵器	底-[13.3]、高一(12.6)○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰色	体部、直線的にひろがり、体中部でたちあがる。底部、平底、ヘラケズリ調整。底部外縁ヘラケズリ調整。体内面、粘土積痕残り、アテ具痕あり。体部ヨコナデ	
1402 参	埴 須恵器	口-[12.5]、底-6.6、高一5.4○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。暗灰黄色	体部、直線的にひろがり、口縁部、わずかに外反する。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外行する四角形。粗雑な作り。内底面、凸状にもりあがる	底部円盤、別作りか
1403 参	埴 須恵器	口-[13.2]、底-[6.5]、高一5.2○ $\frac{1}{3}$	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰色	体下部で、張りをもって内湾し、ひろがる。口縁部、外反、端部、外側に稜をもつ。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外行する台形	
1404	砥石	長-[4.5]、幅-4.7、厚-1.4、両端欠損。断面扁平な四角形の砥石。四面使用痕あり、一部に線条痕あり			



第379図 7区37号住居跡遺構、遺物図

7区37号住居跡 (第379図、第126表、図版156・157)

本住居跡は、19号を始めとする8軒重複の1軒である。19号、26号、31号、32号と重複するが、4軒の堀方調査で確認されたもので、上記4軒より古く、8軒の中で最も古い可能性がある。遺構としては、カマド部分に明瞭な痕跡を残すが、全て堀方に相当する。

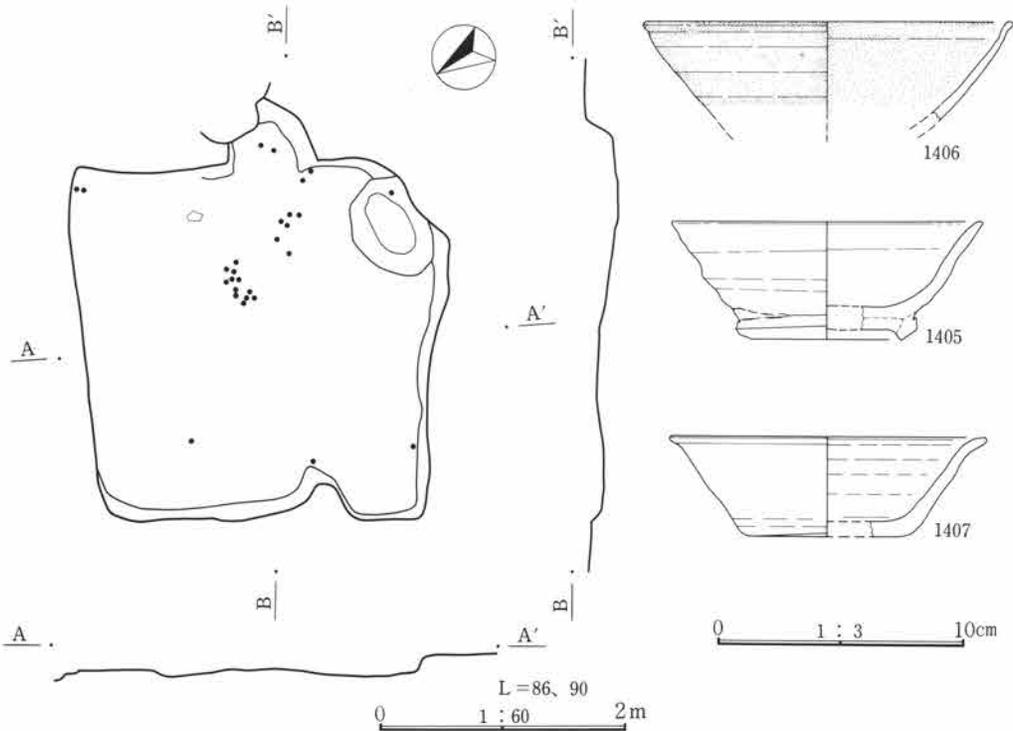
規模は、南辺側が明らかで、北半分以上は26号の重複で堀方まで消失している。東辺で1.80mまで推定でき、南辺では2.34mを測る。方位は南辺でE-20°-Sである。平面形は、南辺長から見て、南北方向がやや長い方形と推定されるが小型な住居である。床面の様子は不明だが、堀方では大小4基の土壇が確認され、西南隅にある84×59cm、深さ15cmのものは位置からして貯蔵穴か。カマドは東辺にある。堀方のみだが、32号等と同様に壁際に袖口を持つと推定される。遺物は、東辺寄りに羽釜、碗、坏が少量ある。遺構の時期は、平安時代(10世紀中葉)である。

(女屋)

第126表 7区37号住居跡出土遺物観察表

(第379図、図版157)

番 号	土 器 種 類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
989	碗 須恵器	口-[12.4]、底-5.0、高-5.3 ○%	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。灰白色	体下部で、丸く張りをもち、ひろがり、口縁部、わずかに外反する。口縁端部丸味あり。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外行する低い台形、ロクロ右回転	内面、スス付着



第380図 7区39号住居跡遺構、遺物図

## 7区39号住居跡（第380図、第127表、図版155・156・157）

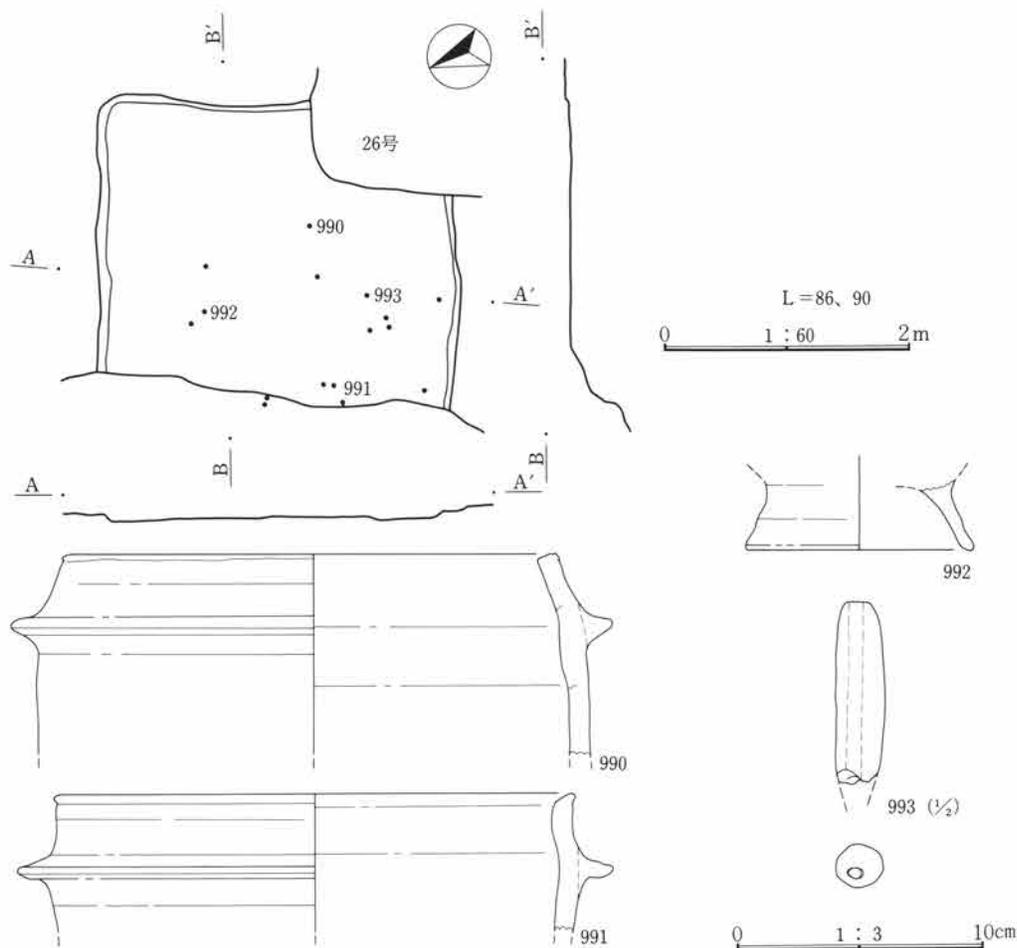
本住居跡は、19号を始めとする8軒重複の1軒である。37号と同様に、西辺を除く殆どが19号の堀方調査で確認されたものである。重複関係は、19号より古く、19号と他との関係からして37号に次ぐ古さか。

規模は、東辺側3.04m、南辺側2.97mを測り、方位は北辺側でE-28°-Sである。平面形は、ほぼ方形を呈するが、東南隅が丸く、対の位置にある西南隅は地山が一部掘り残されていて16号、18号の様に舌状に張り出す可能性がある。壁高は西辺で12cmを測る。床面は19号と同様に暗褐色土を用いて踏み固めており、堀方には40cm～1mを越す円形の土壇が5基見られた。カマド手前の1基には20片を越す土器が伴い、人為的に埋め戻されたか。東南隅にあるものは遺物出土がないが、71×48cm、深さ12cmあり、位置から見て貯蔵穴に相当するか。カマドは東辺の中央にあり、住居内に広がる堀方には多量の焼土と炭化物、羽釜等の遺物が見られた。このほかの遺物には、坏、碗がある。遺構の時期は、出土遺物から平安時代（10世紀前葉）である。（女屋）

第127表 7区39号住居跡出土遺物観察表

(第380図、図版 157)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
1405 参	埴 須恵器	口-[12.6]、底 -[7.2]、高-5. 2 $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。還元、やや 軟質。灰白色	体下部で、一度、稜をもち、ほぼ、 直線的にひろがる、身の浅い器。底 部、二重に作られている。底部、外 縁に外行する台形の断面をもつ高 台、貼付	底部円盤別作り か
1406 参	埴 灰釉陶器	口-[15.0]、高 -(3.9) $\frac{1}{2}$	砂粒を含むが、細密。還元、硬質。灰白色、釉-淡 黄色	体部内湾してひろがる。口縁部、わ ずかに外反し、口縁端部、丸味をも つ。体部、ロクロナデ調整	
1407 参	埴 須恵器	口-[12.8]、底 -[6.4]、高-3. 9 $\frac{1}{5}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 やや硬質。橙色	平底。体部、直線的にひろがり、口 縁部、外反する。底部、回転糸切り、 無調整	



第381図 7区40号住居跡遺構、遺物図

## 7区40号住居跡（第381図、第128表）

本住居跡は、19号を始めとする8軒重複のうちの1軒である。その中でも東西方向に重複するもので、東辺側に、26号、32号、西辺側に20号があり、4軒の中では最も古い。20号との重複部分には、3号方形周溝墓が下面にあり、本住居に関しては、周溝の調査が先行したため、西辺については推定による。

規模は、東辺側2.90m、北辺側2.25m以上を測り、推定では20号住居跡のカマド付近までとすると3m前後の辺長である。平面形は、ほぼ方形を呈し、方位は北辺でE-20°-Sである。床面は、暗褐色土を踏み固めているが、北側への若干の傾きを持つ。この床面は、重複する中で新しくなるに従って浅くなる傾向がある。カマドは、東南側に推定されるが明瞭な痕跡はない。遺物は、中央部に散在して羽釜、甕、碗、坏、土錘がある。遺構の時期は出土遺物により、平安時代（10世紀後葉）である。

(女屋)

第128表 7区40号住居跡出土遺物観察表

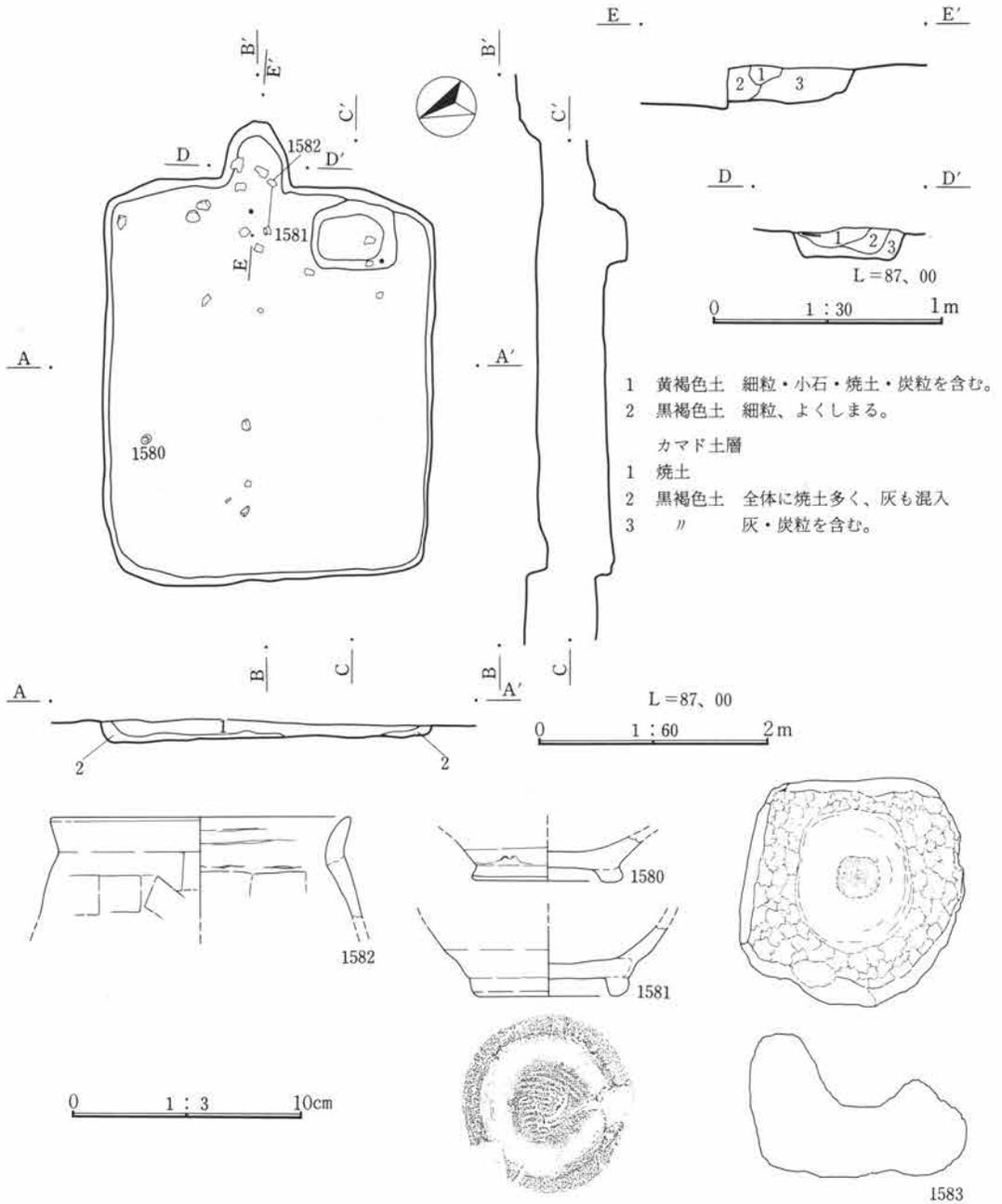
(第381図)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
990	羽釜	口-[20.2]、高-(8.0)○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	口縁部、ゆるやかに内湾する。口縁端部、内斜する平坦面あり。鏝断面端部の丸い台形。体部ヨコナデ調整	
991	羽釜	口-[21.0]、高-(5.5)○小片	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。灰白色	口縁部、たちあがる。口縁端部、内側に丸く、外側、めくれる。鏝断面、台形	
992	碗 須恵器	底-[7.2]、高-(2.7)○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい褐色	高足高台付の碗。高台部片のみ。ハの字状にひらき、端部丸味あり。ロクロナデ調整	
993	土錘	長-(4.9)、径-1.3、孔径-0.4×0.3、片端、欠損。棒状で、端部、やや細くなる。中心に、貫通孔あり			

## 7区46号住居跡（第382図、第129表、図版160）

本住居跡は、基本土層の第4層で確認され、西辺下に54号が重複している。54号と重複する1号古墳と合せて、古い方から1号古墳、54号、46号の順となる。6区17号、24号、25号、7区1号等と合せて1号古墳東南側の住居群を構成する。

規模は、東辺2.85m、北辺で3.45mを測り、方位は北辺でE-22°-Sである。平面形は東西に長い、隅丸長方形を呈する。壁は緩傾斜で、高さ14cmを測る。床面は、暗褐色土を貼床として用いており、平坦だがやや軟弱である。柱穴、周溝は確認されなかった。カマドは、東辺中央より少し北寄りにあり、壁外に地山を掘り込み、主に黒褐色土を用いて袖としている。袖石の一部は住居内に散在している。貯蔵穴は、カマド右側の東辺に接して位置し、74×59cm、床面からの深さ20cmの方形土壇である。遺物は、カマド内とその周辺で少量見られる位で、土師器甕、高台付



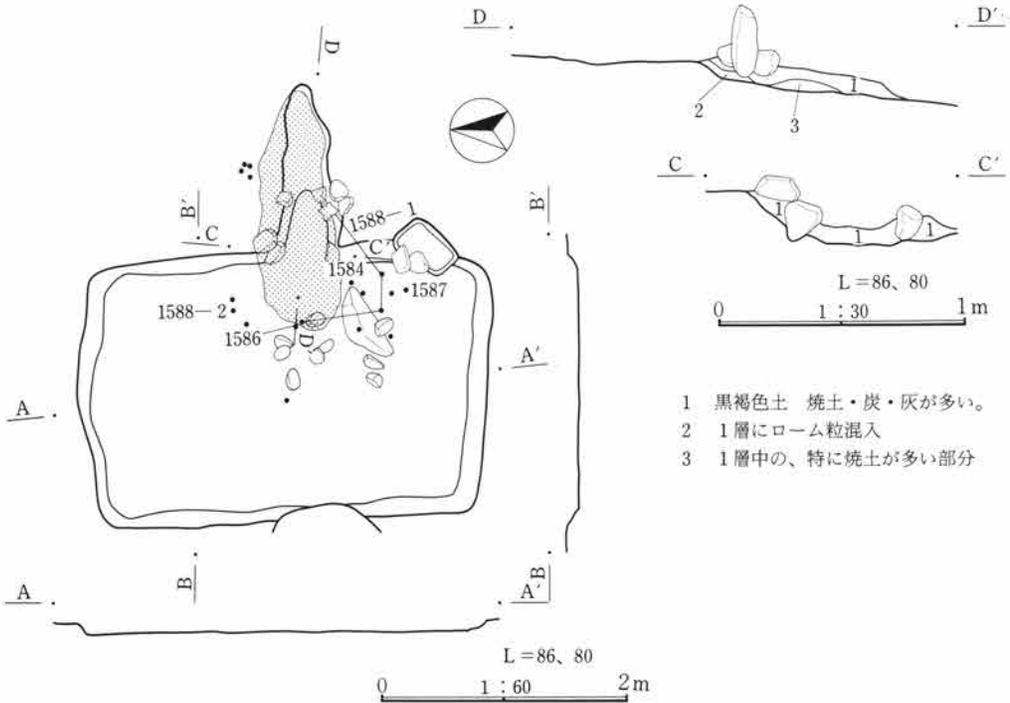
第382図 7区46号住居跡遺構、遺物図

碗、角閃石安山岩を用いた用途不明石製品等がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代（10世紀中葉）である。  
 （小安）

第129表 7区46号住居跡出土遺物観察表

(第382図)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
1580	碗 須恵器	底-6.2、高-(1.8)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	底部、回転糸切り、貼付高台、断面外行する四角形。端部、丸味あり	
1581	碗 須恵器	底-6.2、高-(3.0)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外行する四角形。端部、丸味あり。器肉、厚手	No1580と作り方、よく似る
1582	甕 土師器	口-[13.0]、高-(4.4)○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	体部、丸味をもち、頸部、ゆるくしまり、内稜をもって、ゆるいくの字状に外反する、小型の甕。体部、ヨコヘラケズリ調整。器肉、厚手	内外、炭化物、スス付着
1583	凹石	長-9.6、幅-9.6、厚-5.9、角閃石安山岩、完存と思われる。厚味のある円礫の側面の2面を面取り、その中央部に、円形の凹部を持つ			

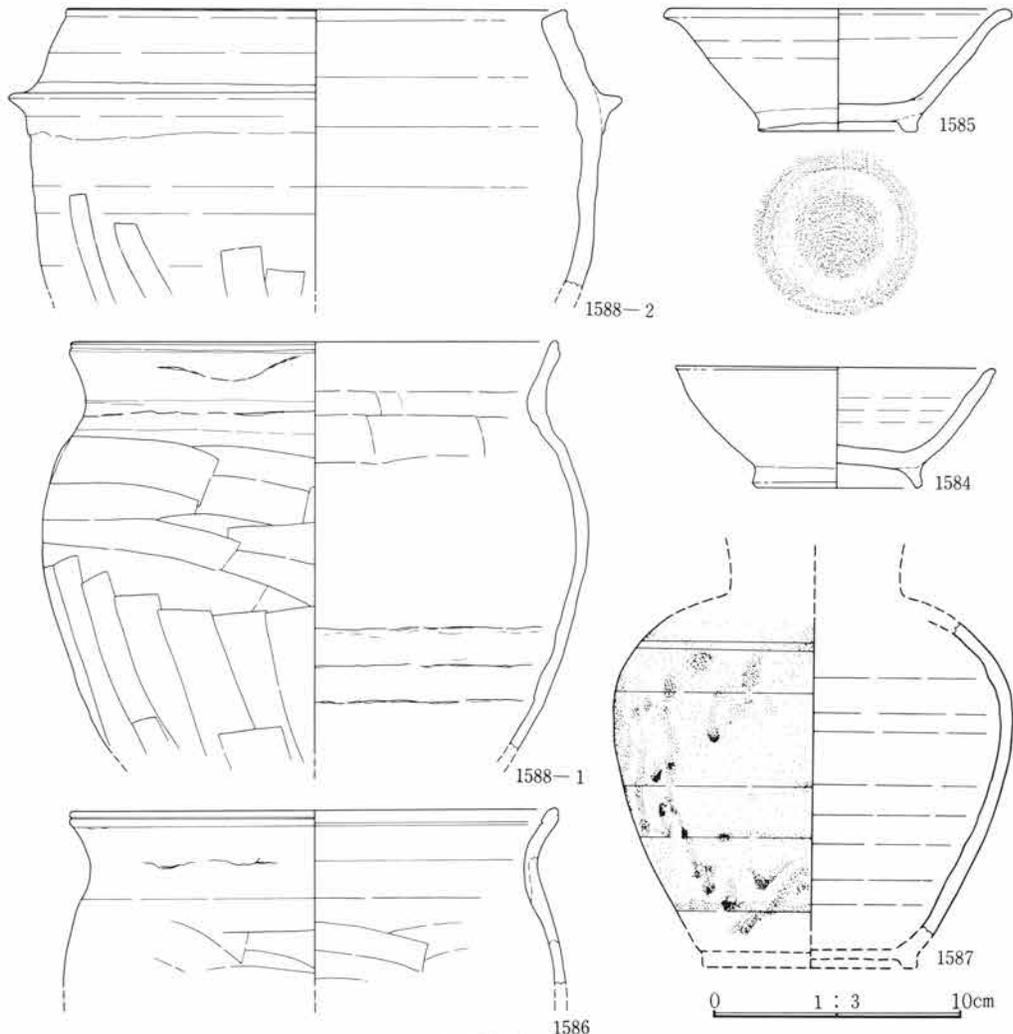


第383図 7区47号住居跡遺構図

7区47号住居跡（第383・384図、第130表、図版161）

本住居跡は、4号古墳、48号住居跡、8号井戸と重複して確認された。重複は古い方から48号、4号古墳、47号、8号井戸の順である。

規模は、東辺3.30m、北辺2.10mを測り、方位は北辺でN-88°-Eである。平面形は南北に長い方形である。床面は、暗褐色土を用いた薄い貼床を施し、全体に平坦で特に中央部は堅緻である。カマドは東辺の中央部にある。壁際に袖口を持つ石組カマドで、壁外に長く煙道が続く。焚口の天井石は崩落していたが、両袖口を始めとして角閃石安山岩の転石が多く使用され、燃烧部先端には削石の支石が据えられている。焼土の量は多く、煙道部から焚口にかけて広く分布する。貯蔵穴は、東辺にあり、47×27cm、深さ5cmの隅丸方形である。壁外に半分程突出し、住居内側の縁に石2個がある。遺物は、住居内全体に見られたが東辺側に多く、土師器甕、高台付碗、灰釉陶器壺がある。遺構の時期は、出土遺物から平安時代（10世紀中葉）である。（女屋）



第384図 7区47号住居跡遺物図

第130表 7区47号住居跡出土遺物観察表

(第384図、図版 161)

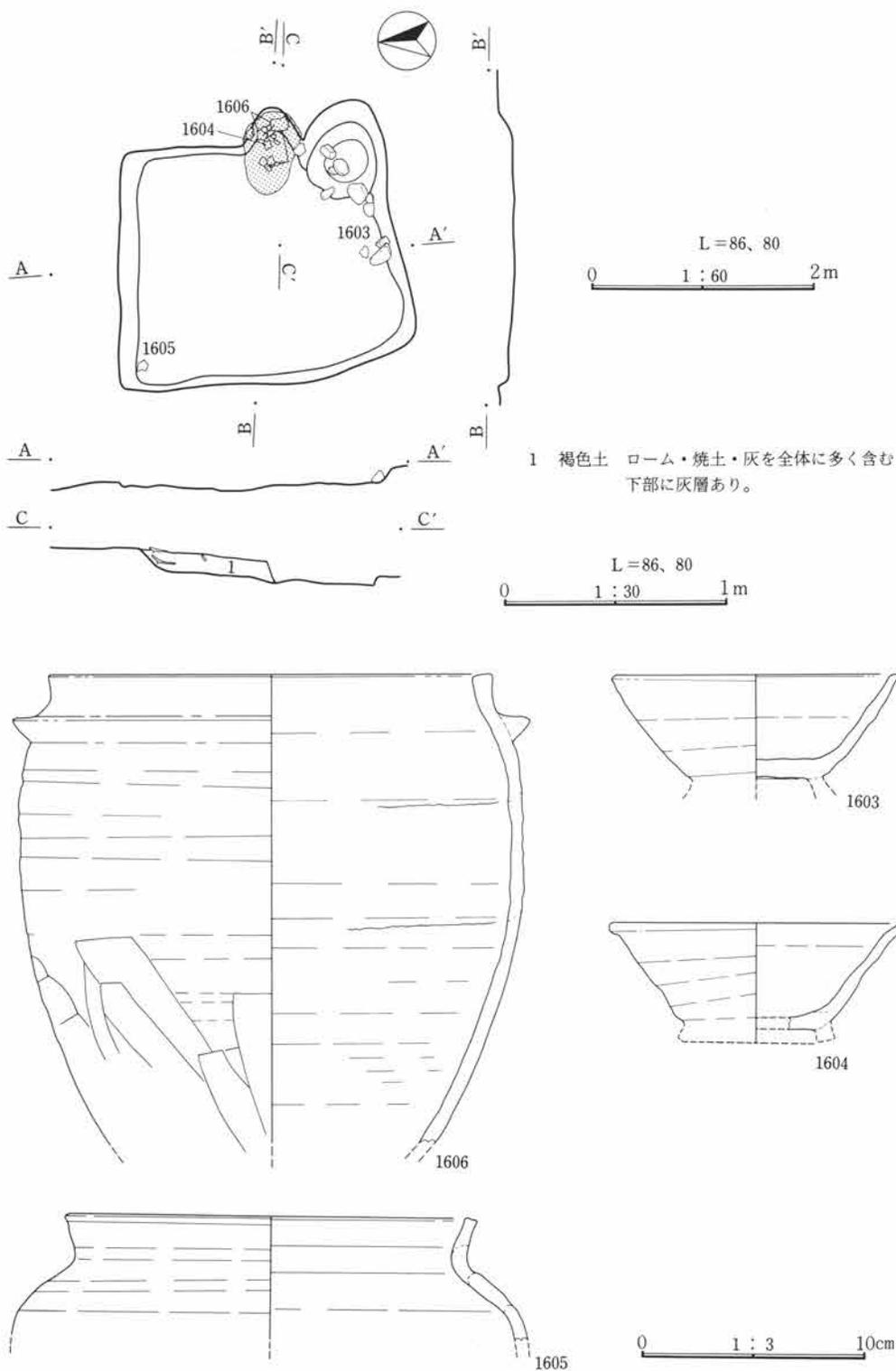
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
1584	埴須恵器	□-[12.8]、底-6.8、高-4.8 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい褐色	体下部で、張りをもって内湾し、ひろがる。口縁、直行し、端部、丸味をもつ。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、端部の丸い、長方形、身の浅い埴	
1585	埴須恵器	□-[14.0]、底-6.4、高-4.9 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄褐色	体部、直線的にひろがり、口縁部、外反し、端部、やや肥厚し、丸味をもつ。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、低い、四角形	
1586	甕土師器	□-[19.6]、高-(7.0)○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	体部、丸く、頸部ゆるく、くびれてたちあがり、口縁部外反する。口縁端部、外側へ肥厚し、沈線めぐる。体部、ヘラケズリ調整。器肉、厚手	外面、スス付着
1587	瓶灰釉陶器	胴-[15.8]、高-(12.5)○ $\frac{1}{3}$	砂粒を含むが、細密。還元、硬質。灰白色、釉-オリブ灰色	肩部で張りをもつ、長頸瓶と思われる。ロクロナデ調整、体下部、回転ヘラケズリ調整	
1588-1	甕土師器	□-19.8、胴-[22.0]、高-(16.5)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	体上部で、丸く張りをもち、頸部ゆるく、くびれてたちあがる。口縁部なだらかに外反。口縁端部、外側に肥厚し、沈線めぐる。体部、ヘラケズリ調整。器肉、厚手	
1588-2	羽釜	□-[23.0]、高-(11.3)○ $\frac{1}{3}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。にぶい黄褐色	体部内湾し、口縁部、内傾する。口縁端部、平坦で内斜する。鐙断面、三角形。体部ロクロナデ調整、体中部~下部、ヘラケズリ調整。器肉、厚手	鐙下部まで、スス付着

## 7区50号住居跡 (第385図、第131表、図版160・161)

本住居跡は、基本土層の第5層上面で確認された。51号の西南隅に重複し、その一画を切る。規模は、東辺側2.40m、北辺2.15mを測り、方位は北辺でE-4°-Sである。平面形は、西辺が少し広い方形を呈する。規模としては、周辺の中でも小形である。床面は、暗褐色土を用いた貼床で、平坦に踏み固められている。住居中央のカマド寄りて38×32cm、深さ18cmの不整円形のピットが確認されたが、柱穴か否かは不明である。カマドは、東辺の中央部にある。壁際に袖口を持ち、わずかに左壁に平石が貼付されていた。焼土、炭化物は、カマド手前まで少量分布する程度で焼け方も弱い。中からつぶれた状態で羽釜が出土した。貯蔵穴は、住居東南隅全体を占め、プラン全体までゆがめている。86×75cm、浅い皿状の堀方で、カマドから崩落した河原石が5石流入していた。遺物は、カマド内外から上記の羽釜のほか、甕、高台付埴がある。遺構の時期は、出土遺物により平安時代(10世紀中葉)とする。

(新井)

第6章 検出された遺構と遺物

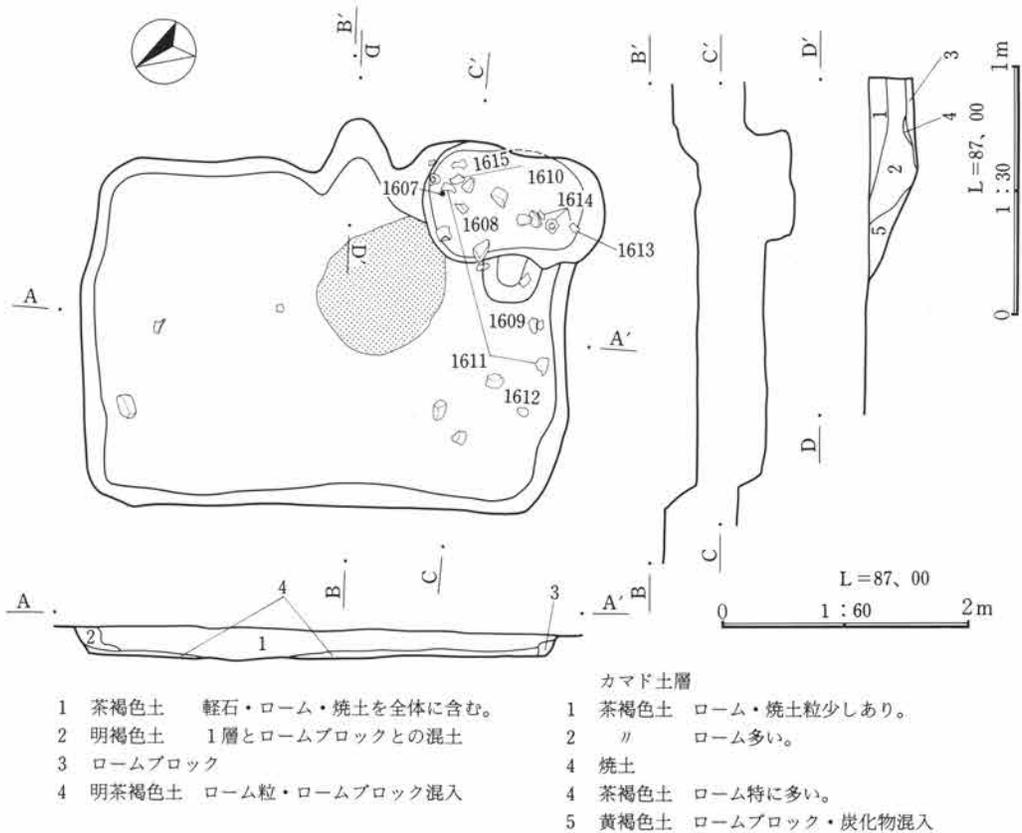


第385図 7区50号住居跡遺構、遺物図

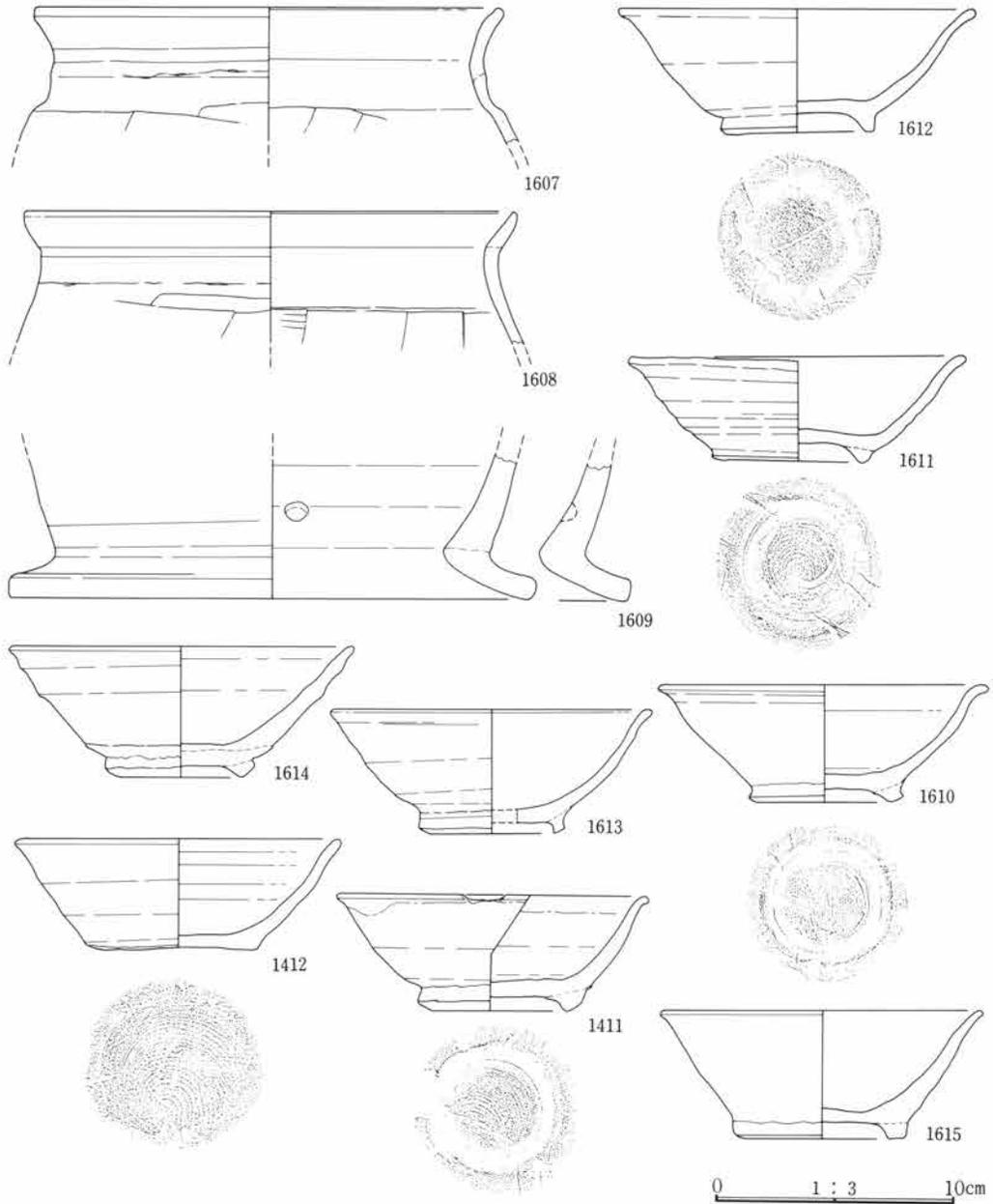
第131表 7区50号住居跡出土遺物観察表

(第385図、図版 161)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
1603	埴須恵器	口-[12.7]、底-[6.0]、高-(4.5)○ $\frac{1}{2}$	砂粒を多く含む。酸化、軟質。におい黄橙色	体部、直線的にひらく。口縁端部、外側に丸味をもつ。底部回転糸切り、貼付高台、ロクロ右回転	
1604	埴須恵器	口-[13.2]、底-[6.6]、高-(4.8)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒、輝石を含む。酸化、やや硬質。におい黄橙色	体部、直線的にひらき、口縁部、わずかに外反する。底部、回転糸切り、貼付高台	内面、スス付着
1605	甕	口-[18.4]、高-(5.4)○小片	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや硬質。におい黄橙色	体上部で、大きく張りをもち、頸部くびれて、口縁部立ちあがり、わずかに外反する、広口の甕。口縁端部平坦で外斜。体部ロクロナデ調整	
1606	羽釜	口-[19.9]、胴-[22.5]、高-(20.7)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。橙色	体中部で丸味をもち、口縁部内傾して、たちあがる。口縁端部、平坦。鋳断面、上向きの三角形。体部、ロクロナデ調整、体下部、タテハラケズリ調整	内面、炭化物付着



第386図 7区52号住居跡遺構図



第387図 7区52号住居跡遺物図

7区52号住居跡 (第386・387図、第132表、図版161・162)

本住居跡は、基本土層の第4層で、3号と重複して確認された。本住居跡が新しい。規模は、西辺側3.81m、北辺2.77mを測り、方位は北辺でE-19°-Sである。平面形は、南北に長い方形である。床面は、暗褐色土を用いて貼床を施し、中央部は平坦で堅緻である。床面下の堀方では径80cm前後の円形土壇が東北隅を除いて見られた。カマドは、東辺の中央部で確認された。壁際に袖口を持ち、壁外にわずかに煙道がのびる。袖石と推定される河原石が貯蔵穴内に崩落し、か

き出された焼土が住居中央部付近にまで分布する。貯蔵穴は、東南隅全体を占め、壁外に少し突出する17号と同様な例である。1.47×0.97m、床面からの深さ24cmの隅丸方形で、崩落しているが本来は袋状か。遺物は、貯蔵穴内と南辺側に多い。土師器甕、甔、高台付碗がある。遺構の時期は、出土遺物により平安時代(10世紀初頭)である。(新井)

第132表 7区52号住居跡出土遺物観察表

(第387図、図版 161・162)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
1607	甕 土師器	口-[19.6]、高-[5.5]○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	ゆるいコの字状を呈する口縁の甕。口縁端部、外側に肥厚し、丸い稜をもつ。体部、ヘラケズリ調整。器肉、厚手	
1608	甕 土師器	口-[20.6]、高-[5.5]○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい橙色	ゆるいコの字状口縁の甕。口縁端部外側に丸い稜をもつ。体部、ヘラケズリ調整。器肉、厚手	
1609	甔	底-[18.2]、脚裾-[21.7]、高-[5.8]○小片	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。浅黄色	体部、鉢型で、脚部、くの字に外反する甔。脚裾端部、外側に稜をもつ、内底部、底板受けの小孔あり。ロクロナデ調整	
1610	碗 須恵器	口-[13.7]、底-[6.4]、高-[4.9]○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。浅黄色	体中部で、丸く張りをもち、口縁部強く外反する。口縁端部、外側に丸くめくれる。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外行する台形。器肉薄手、均質	
1611	碗 須恵器	口-[14.2]、底-[6.3]、高-[4.4]○ $\frac{1}{3}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。浅黄色	体部、内湾してひろがり、口縁部外反する、身の浅い碗。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、端部外側にめくれる台形。体下部、ロクロナデのアテ具痕細かい	
1612	碗 須恵器	口-[15.0]、底-[6.4]、高-[5.0]○ $\frac{2}{3}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。灰白色	体部、わずかに内湾してひろがり、口縁部外反する。口縁端部、外側に稜をもつ。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外側に直行する台形	
1613	碗 須恵器	口-[13.5]、底-[6.0]、高-[5.1]○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。灰白色	体中部で、丸く張りをもち、口縁部外反する。口縁端部、丸く、外側に丸い稜をもつ。底部、回転糸切り、底部外縁に貼付高台、断面、四角形。器肉、薄手、均質	貯蔵穴出土
1614	碗 須恵器	口-[14.5]、底-[6.1]、高-[5.4]○ $\frac{2}{3}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい褐色	体下部で、一度、段をもち、直線的にひろがる。口縁端部、外側にふくらみをもつ。底部、回転糸切り痕あり、貼付高台、断面、外行する低い台形。器肉、厚手	貯蔵穴出土 底部、円盤別作り。

第6章 検出された遺構と遺物

1615 7区52号 住	埴 須恵器	口-[13.5]、底 -[7.1]、高-5. 2○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、 やや軟質。灰白色	体部、わずかに内湾してひろがる。 口縁部もわずかに外反する。底部、 回転糸切り、貼付高台、断面、四角 形。器肉、薄手	
1411 参	埴 須恵器	口-[13.0]、底 -6.7、高-4.7 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 やや軟質。にぶい黄橙色	体下部で、稜をもってたちあがり、 わずかに、内湾して、口縁部外反す る。底部、回転糸切り、貼付高台、 断面、外行する台形	堀方出土 口縁、一部欠損 あり。内外、リ ング状にスス付 着——灯明用
1412 参	坏 須恵器	口-[13.6]、底 -7.2、高-4.6 ○ $\frac{1}{5}$	砂粒、石粒を含む。還元、 やや硬質。灰白色	平底。体部、ほぼ直線的にひろがる。 口縁部、わずかに外反し、端部丸味 をもつ。底部、回転糸切り痕あり、 底部外面、ヘラおこしと思われる痕 跡、三カ所あり	重ね焼き痕あり 底部、円盤別作 り

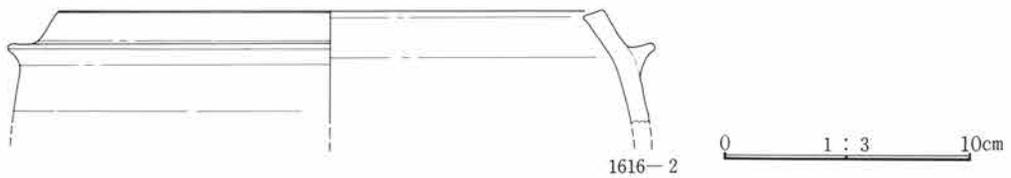
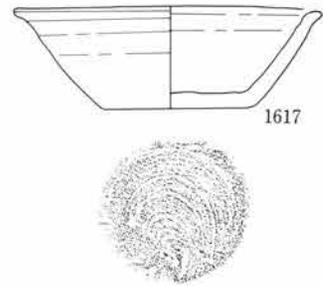
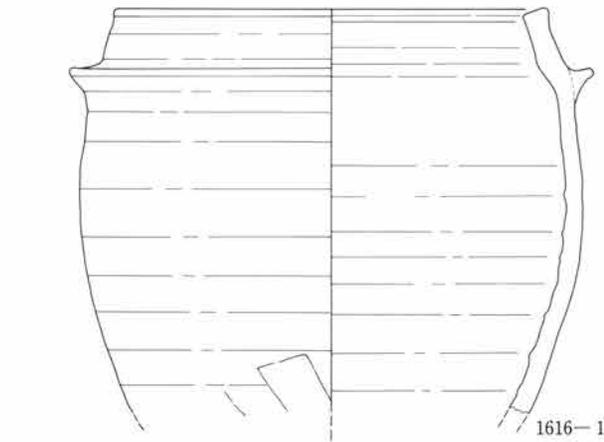
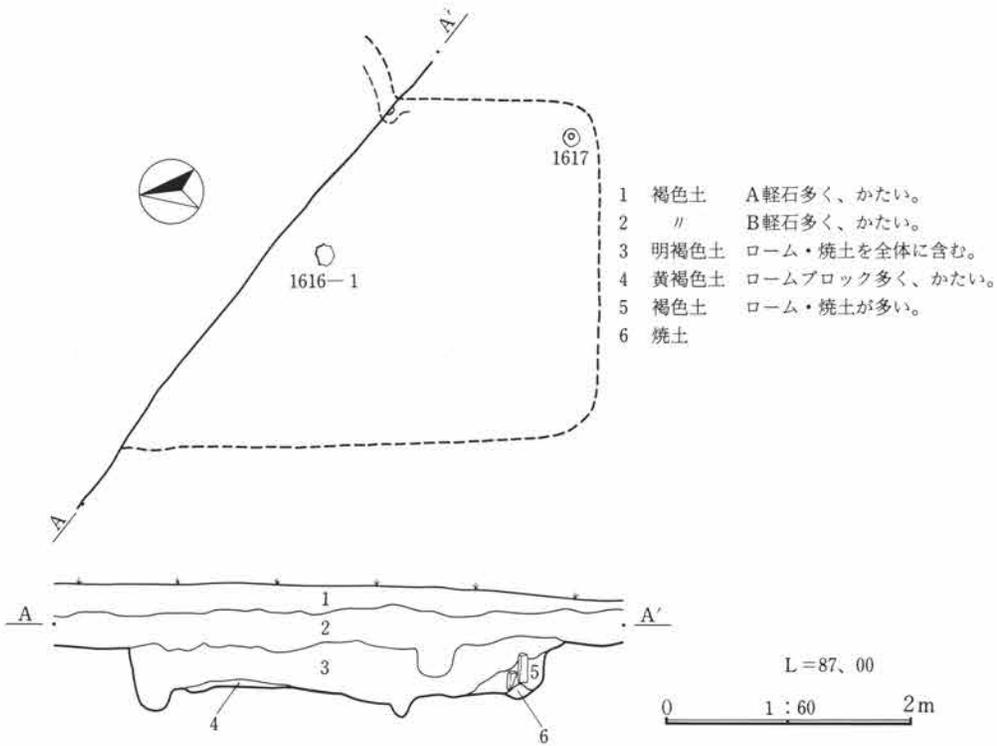
7区53号住居跡（第388図、第133表、図版163）

本住居跡は、3号古墳周堀内から堀方痕跡状態で確認された。平面形等は推定による。規模は東辺で3.90m、南辺2.75mと推定され、南北に長い方形か。床面は、周堀断面によると黒褐色土を用いた貼床で、壁は垂直に近い立ち上がりで高さ約45cmである。周溝が西辺側に痕跡を残す。カマドは東辺側にある。断面によると、焚口部分は浅い堀方を持ち、煙道は垂直に近く立ち上がる。壁際の位置には袖石を持ち、中央寄りの削石は支石の可能性がある。焼土、炭化物の量は多く、互層状態で見られた。遺物は、羽釜を始めとして須恵器坏がある。遺構の時期は、出土遺物により平安時代（10世紀中葉）である。（新井）

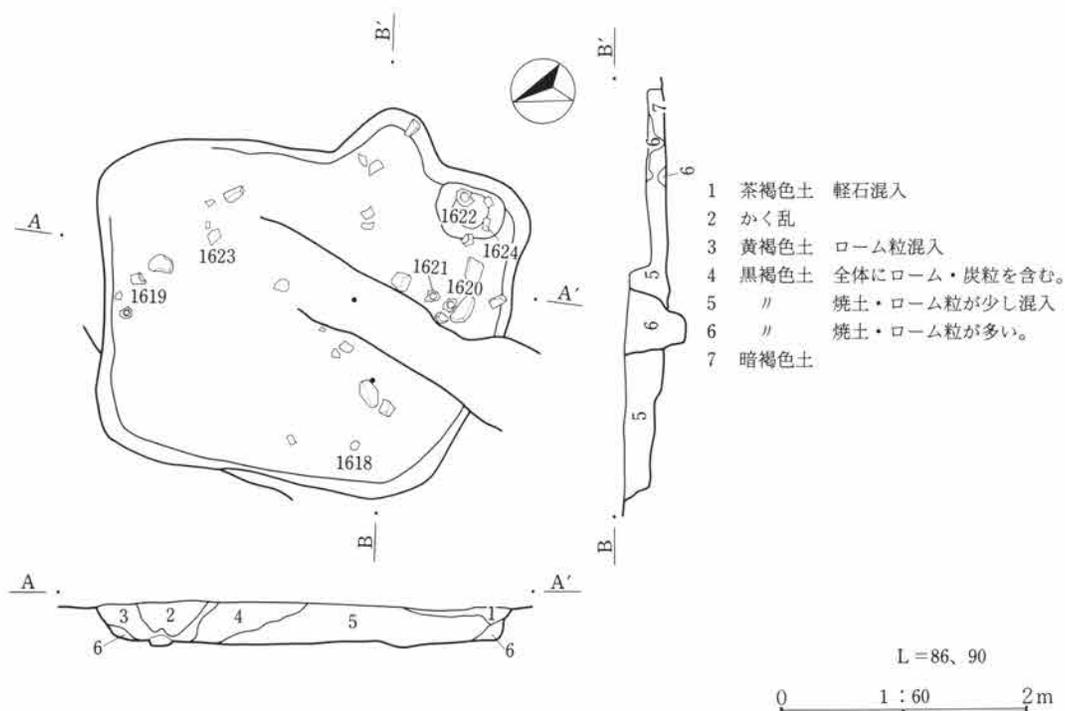
第133表 7区53号住居跡出土遺物観察表

（第388図、図版 163）

番 号	土器種 器 種	法量（口径・底径・ 器高）遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備 考
1616-1	羽 釜	口-[17.4]、胴 -[20.3]、高 -(16.1)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、 やや硬質。灰白色	体部、丸味をもち、口縁部内傾する。 口縁端部、平坦面をもち、やや内斜 する。罫断面、上向きの三角形、端 部が丸味をもつ。体部、ロクロナデ 調整、体下部、ヘラケズリ調整	
1616-2	羽 釜	口-[22.0]、高 -(4.5)○小片	砂粒、石粒を含む。還元、 やや軟質。黒色	口縁部、内傾し、端部、平坦でやや 内斜する。罫断面、端部の丸い台形。 体部、ロクロナデ調整	
1617	坏 須恵器	口-12.5、底-6. 1、高-4.1○略完 存	砂粒、石粒を含む。粗。 酸化、やや硬質。灰白色	平底。体部、底部より直線的に、ひ ろがり、口縁部、わずかに外反する。 口縁端部、丸味あり。底部、回転糸 切り痕あり。ロクロ右回転、底部、 外縁部分に、ヘラおこしと思われる 痕跡あり	底部、円盤別作 りか



第388図 7区53号住居跡遺構、遺物図

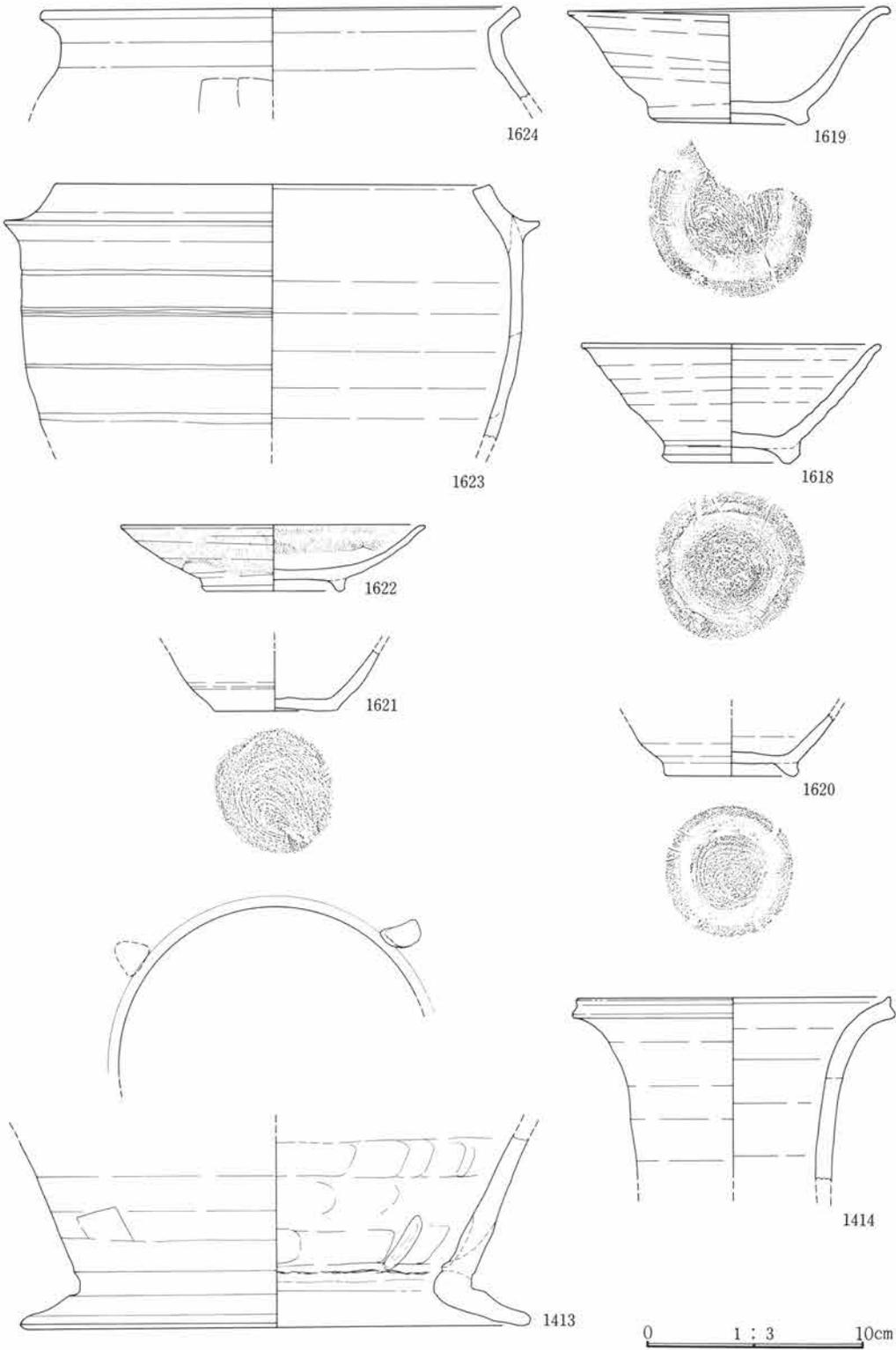


第389図 7区54号住居跡遺構図

7区54号住居跡（第389・390図、第134表、図版163）

本住居跡は、1号古墳周堀、46号、10号、12号溝と重複して、基本土層の第4層で確認された。重複関係は、古い方から1号古墳、54号、46号、10号、12号溝の順である。

規模は、東辺3.30m、北辺で2.50mを測り、方位は北辺でE-29°-Sである。平面形は南北方向が長い、西辺側の短い台形状である。壁は緩傾斜で、高さ35cmを測る。床面は、重複等により一部しか残っていないが、暗褐色土を踏み固めて貼床としている。柱穴、周溝は不明だが、床面下の掘方では全体に不整形土塚がある。カマドは東辺の南寄りにあり、上面を削平されているが、焼土と袖石の一部が残っている。住居内には袖石らしい大小の河原石が散在している。貯蔵穴は、カマドの右側、東辺に接して55×32cm、床面からの深さ12cmの円形土塚がある。遺物は、住居内全体に見られたが少量で、羽釜、甑を始めとして、土師器甕、高台付碗、坏、灰釉陶器皿がある。遺構の時期は、出土遺物の特徴から平安時代（10世紀前葉）である。（小安）

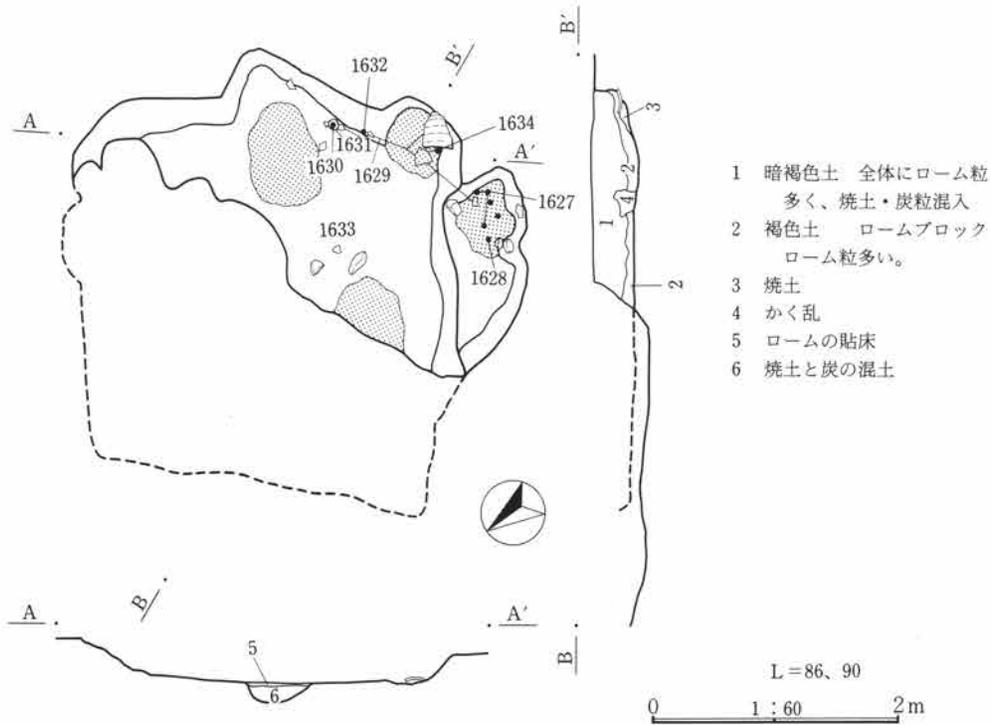


第390図 7区54号住居跡遺物図

第134表 7区54号住居跡出土遺物観察表

(第390図、図版 163)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
1618	碗 須恵器	口-[13.8]、底-6.3、高-5.4 ○ $\frac{3}{4}$	砂粒、白色、褐色石粒を多く含み、粗。還元、やや硬質。灰オリーブ色	体部、わずかに内湾して、ひろがる。口縁部外反し、端部丸味あり。底部回転糸切り、貼付高台、断面、外行する台形	
1619	碗 須恵器	口-[14.8]、底-[7.4]、高-5.3 ○ $\frac{3}{4}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや硬質。にぶい褐色	体下部で張りをもち、ひろがる。口縁部外反し、口縁端部、丸味をもつ。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外行する低い台形	
1620	碗 須恵器	底-6.0、高-(2.6) ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	内底部に区切りをもって、たちあがり、体部内湾する。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外側が直行する台形	
1621	碗 須恵器	底-5.6、高-(2.6) ○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	平底。体下部で、張りををもってたちあがる。底部、回転糸切り、無調整、ロクロ右回転	
1622	皿 灰釉陶器	口-[14.0]、底-6.2、高-3.0 ○ $\frac{1}{2}$	砂粒を含むが、細密。還元、硬質。灰白色、釉-明緑灰色	体部、内湾して大きくひらく。口縁部、わずかに外反し、端部、丸味をもつ。貼付高台、断面、丸味のある台形。釉、つけかけ	
1623	羽 釜	口-[20.0]、高-(11.5) ○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	体部、丸味をもち、口縁部内傾し、端部わずかに内斜する、平坦面あり。罫断面、三角形。ロクロナデ調整	
1624	甕 土師器	口-[22.0]、高-(4.0) ○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。橙色	コの字状口縁の甕。口縁部、短かく、強い外反、口縁端部、外稜をもつ。体部、ヘラケズリ調整。器肉、厚手	
1413 参	甕	底-[18.0]、脚裾-[23.4]、高-(8.5) ○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。淡橙色	体部、直線的にひらき、脚部、くの字に大きくひらく。脚裾端部丸味あり。体部、ロクロ、ヘラナデ調整、内面調整、粗。内底部、底板受けの小孔あり	フク土出土
1414 参	瓶	口-[14.4]、高-(8.3) ○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。明褐色	頸部、しまってたちあがり、口縁部外反する。口縁端部、外縁帯をもち凹線めぐる。長頸瓶と思われる	7-46住に所属の可能性あり



第391図 7区55号住居跡遺構図

## 7区55号住居跡（第391～393図、第135表、図版163・164）

本住居跡は、3号古墳周堀にかかって確認された。周堀の調査が先行したため、東辺側を主として堀方に近いものとして、更に堀方の調査が進んでA～Dまでの5軒が重複するものと判明した。Aが最も新しく、順序に従いDが最も古いだが、ここでは一括して扱う。また、平面形、法量等は堀方からの推定による。

Aは、カマドの遺存状態が良好で、床面の状態から最も新しいと判断した。規模は、東辺2.90m、北辺側2.56mで、ほぼ方形を呈する。壁高は21cmである。床面はカマド前に残存するが、暗褐色土の貼床である。カマドは東南隅にある。壁際に袖石を据え、焼土、炭化物が多量に伴う。遺物は、カマド内から甕、高台付壺があり、壺の1点には体部外面に「足」が墨書されている。

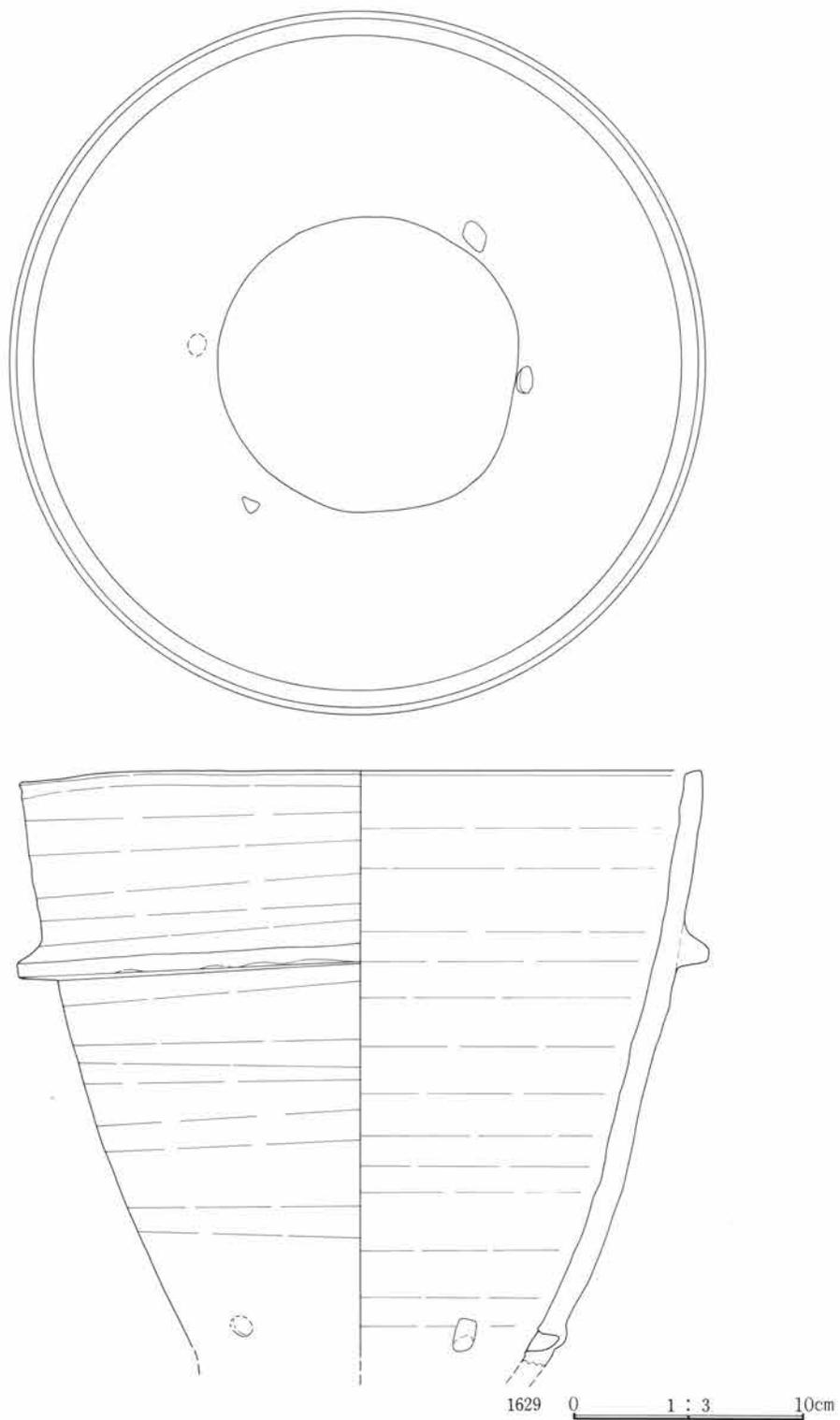
Bは、Aと同様な規模を持ち、カマド付近が良好な状態であった。東辺長は3.10m、南辺長は1.90m以上である。カマドは東南隅にある。カマド自身新旧2基あり、右側のものが新しい。右側のものには、煙道に甕が転用されている。遺物は、このほかに壺、坏、皿がある。

Cは、東南隅付近とカマド部分が堀方状態で確認された。このカマドは、東辺の中央部に位置すると推定され、楕円形の深い堀方を持ち、厚く堆積した焼土と河原石の支石があった。

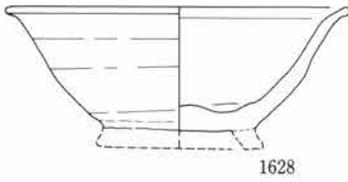
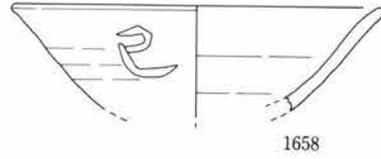
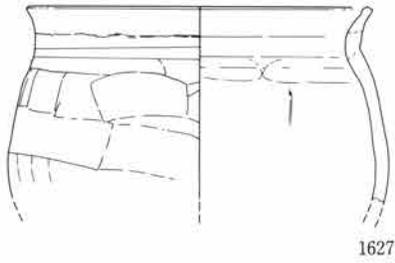
Dは、カマド堀方だけが確認されたがCの住居形状に近い。

この4軒は同一プラン内で変遷しているが、伴出遺物から平安時代（10世紀初頭）とされる。

（女屋）

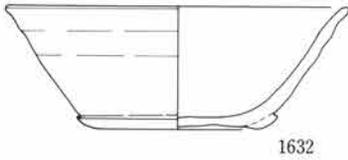
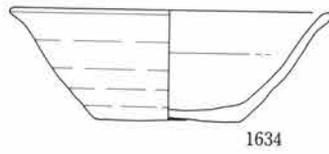
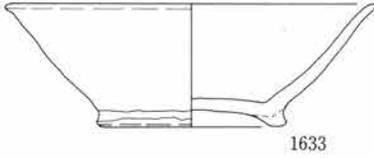
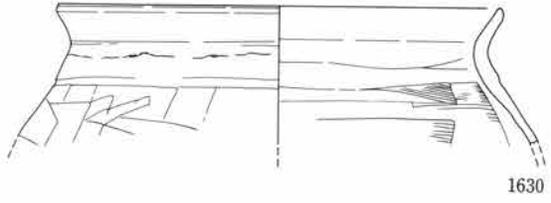
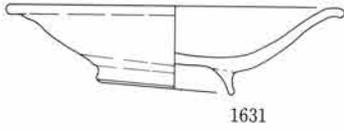


第392図 7区55B号住居跡遺物図

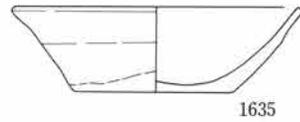
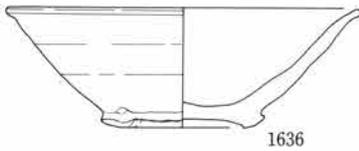


55A号

55B号



55C号



0 1 : 3 10cm

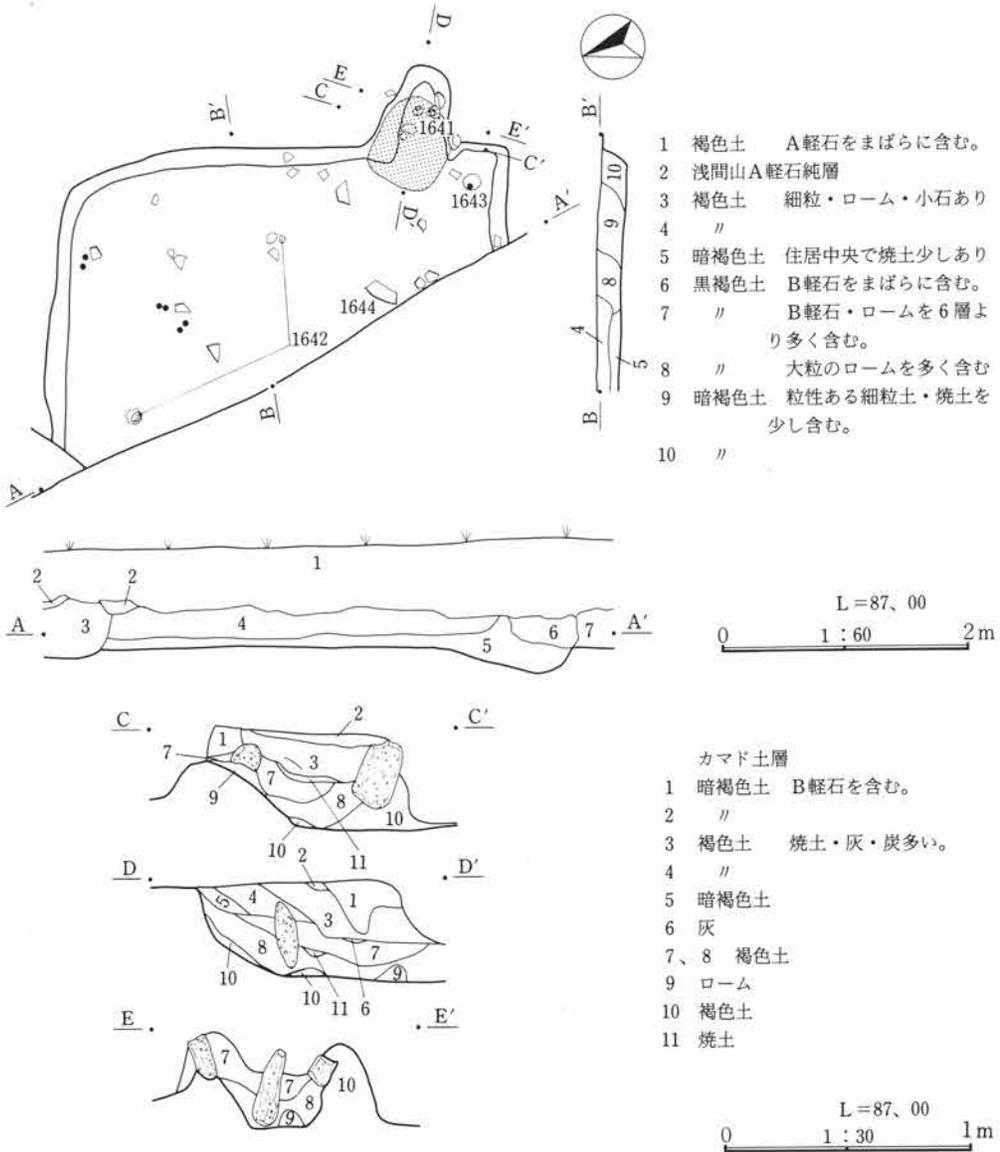
第393図 7区55A号、55B号、55C号住居跡遺物図

第135表 7区55A、B、C号住居跡出土遺物観察表

(第392・393図、図版 163・164)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
1627 7区55A 号住	甕 土師器	□-14.0、高-(7.7)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	体部、丸味をもち、頸部、ややくびれて、たちあがり、口縁部、ゆるく外反し、内側に稜をもつ。体部ヘラケズリ調整	内外、スス、炭化物付着
1628	碗 須恵器	□-[13.9]、底-[6.2]○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色	体部、丸く内湾し、口縁部、外反する。口縁端部、丸味あり。底部、回転糸切り、貼付高台、ロクロ右回転	底部、円盤別作り
1658	碗 須恵器	□-[15.0]、高-(4.1)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰色	体部、丸味をもってひろがり、口縁部、わずかに外反。口縁端部、丸味あり。体部ロクロナデ調整	カマド内出土 体外面、墨書あり、「巳」字
1629 7区55B 号住	甕	□-[29.4]、底-[15.0]、高-(25.3)○ $\frac{1}{4}$ 脚部を欠く	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい黄橙色、黒色	体部、直線的に、鉢形にひらく。口縁部、わずかに内傾、口縁端部、平坦面あり。罎、口縁部よりの、距離長く、断面、下向きの台形。体部、ロクロナデ調整、体内面、下部、ヨコヘラケズリ調整、底板受けの、小孔、対の位置にあり。現存3個	内面、炭化物、厚く付着
1630	甕 土師器	□-[18.0]、高-(5.3)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。明赤褐色	コの字状口縁の甕。体部、丸く張りをもち、頸部、内傾してたちあがる。口縁部、外反、端部、外側に丸い稜をもつ。体部、ヘラケズリ調整。器肉、厚手	
1631	皿 須恵器	□-13.6、底-5.5、高-3.5○完存	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。浅黄色	体下部で、丸く張りをもち、大きくひろがる。口縁部、強く外反する。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、端部の丸い三角形。器肉、薄手	
1632	碗 須恵器	□-[14.4]、底-[6.6]、高-4.8○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質(燻し)。オリーブ黒色	体部、ゆるやかに内湾してひろがり口縁部、外反し、端部、外側に、丸く稜をもつ。底部、回転糸切り、底部外縁に、丈の低い台形の貼付高台	
1633	碗 須恵器	□-[15.0]、底-[7.6]、高-4.9○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。灰白色	体下部でわずかに張りをもちひろがる。口縁部、外反。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外行する台形。器肉、薄手、均質	
1634	碗 須恵器	□-[13.0]、底-[6.0]、高-4.5○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい黄橙色	平底。体下部で張りをもち、ひろがり、口縁部、外反する。口縁端部、肥厚し、丸味あり。底部、回転糸切り、無調整。底部、縁端部、スレあり。器肉、薄手、均質	

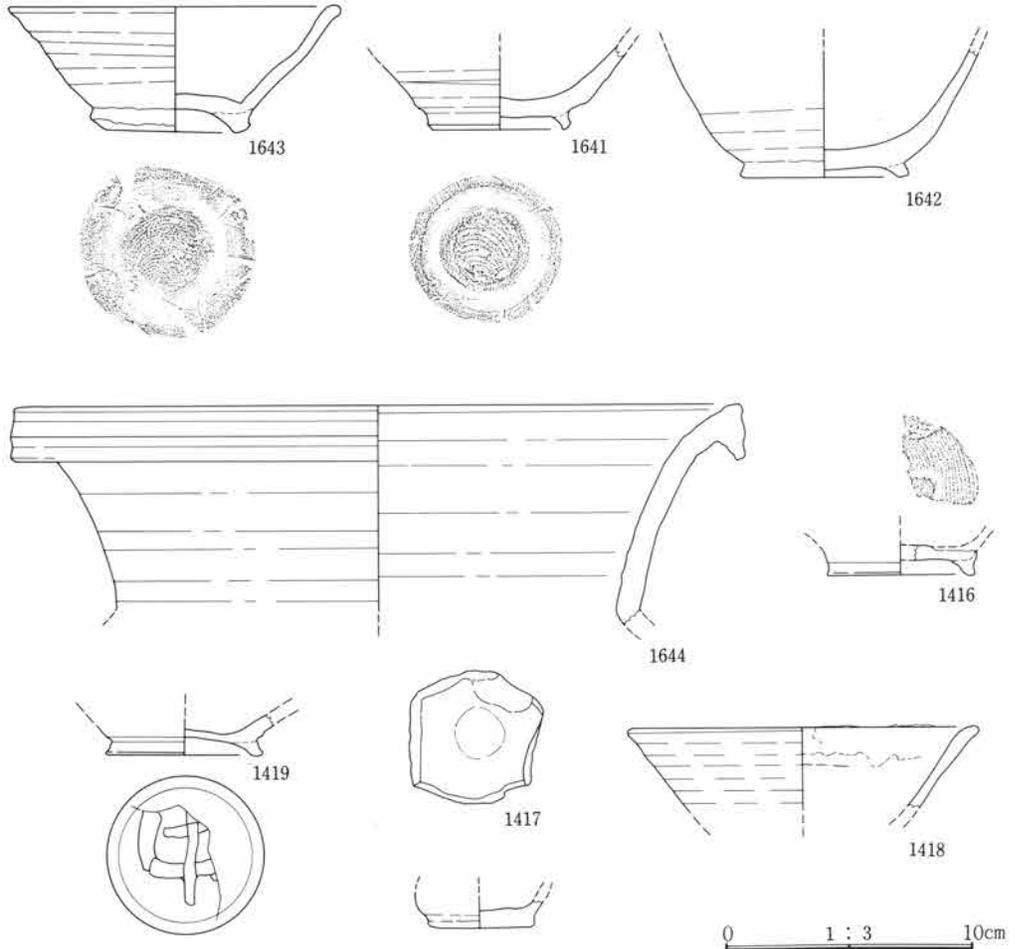
1635 7区55C 号住	坏 須恵器	口-[11.7]、底 -[6.4]、高-3. 4○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。 還元、硬質。灰色	平底。体部、直線的にひろがる。口 縁端部、丸味あり。底部、ヘラケズ リ調整、不定方向。体部、ロクロナ デ、体下部、ヘラケズリ調整。器肉、 不均等	重ね焼き痕あり
1636	碗 須恵器	口-[13.9]、底 -[8.0]、高-4. 9○ $\frac{1}{6}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 軟質。浅黄色	体部、ゆるやかに内湾してひろがり、 口縁部、わずかに外反する。底部、 回転糸切り、底部外縁に、丈の低い、 外行する四角形の貼付高台。器肉、 薄手、均質	内面、スス附着



第394図 8区2号住居跡遺構図

8区2号住居跡 (第394・395図、第136表、図版165)

本住居跡は、基本土層の第4層暗褐色土中で確認された。西側の半分程は道路敷にかかり未調査である。東辺側のカマド付近で5号土坑、2号溝、東南隅で4号溝と重複するが、土坑が最も古く、溝、住居跡と続く。規模は、確認をされた範囲で東辺3.65m、北辺2.35mを測り、平面形は、やや隅の丸い方形を呈する。床面は、波頭状の堀方に暗褐色土を厚さ約10cm、平坦に踏み固めている。住居中央とカマド手前付近に若干の固さが見られた。柱穴状のもの、周溝は確認されていない。カマドは、東辺の南寄りの位置で確認された。壁際に削面を持つ角閃石安山岩の転石を袖石に据え、カマドの大半は地山を掘り込んで壁外に突出している。袖石に角閃石安山岩の転石が使用されているのが特徴だが、中央部にも基部に削面を持つ支石が立った状態で見られた。焼土、炭化物の量は多いが、殆どカマド内に残存し、住居内へのかき出し状況は見られない。貯蔵穴は、カマドの位置から西南隅に求められるか。遺物は、住居内全体に散在し、甕、碗、瓶などの器種があり、「甲」と墨書銘されたものもある。時期は平安時代(10世紀初頭)である。(新井)



第395図 8区2号住居跡遺物図

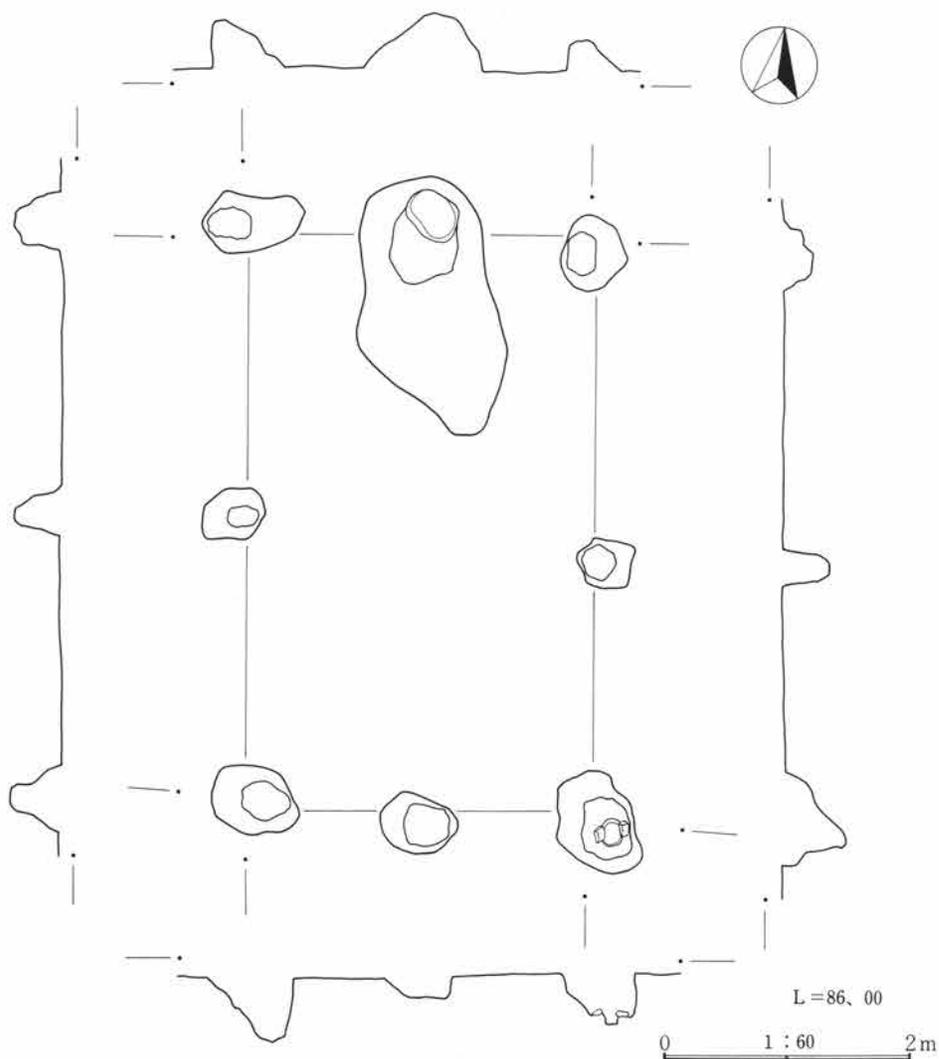
第136表 8区2号住居跡出土遺物観察表

(第395図、図版 165)

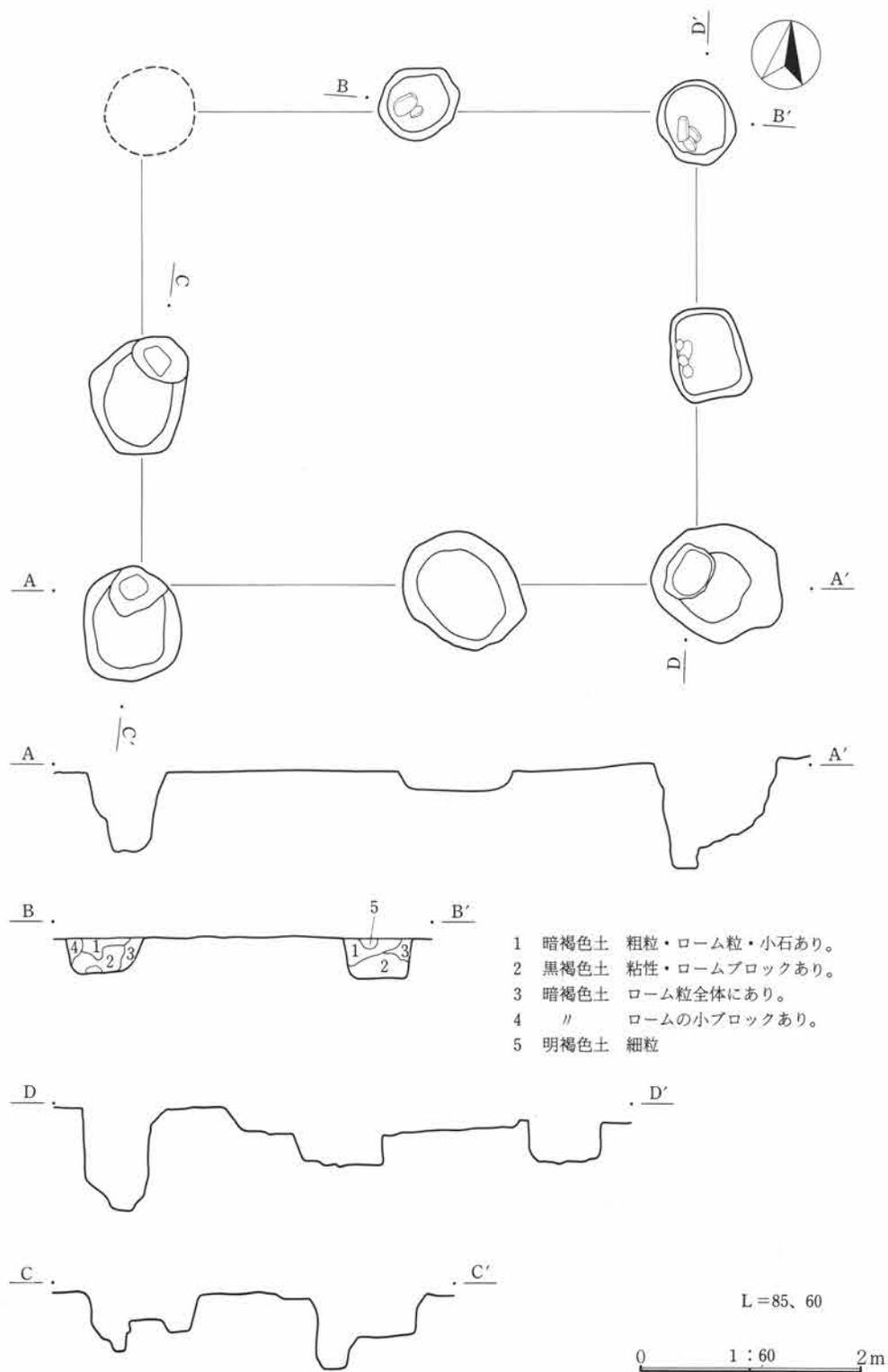
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
1641	埴須恵器	底—5.4、高一(3.1)○ $\frac{1}{3}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	体下部、高台部貼付調整時の、強いしぼり込みによる、稜をもち、体部直線的にひろがる。底部、回転糸切り痕残り、貼付高台、断面、外行する台形	底部、円盤別作り
1642	埴須恵器	底—6.8、高一(5.0)○ $\frac{1}{3}$	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰色	体下部で、大きく張りをもち、ひろがる、身の深い埴。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外行する、四角形。体下部、器肉、厚い	重ね焼きの痕跡あり 底部、円盤別作り
1643	埴須恵器	口—13.4、底—6.4、高一5.0○完存	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄褐色	体部、底部より区切りをもってたちあがる。やわらかく内湾して、ひろがり、口縁部、外反する。口縁端部、肥厚して、丸味あり。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外行する台形。ロクロ左回転	内面、リング状にスス付着 底部円盤別作り
1644	甕須恵器	口—[29.8]、頸—[21.0]、高一(8.3)○小片	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。灰褐色	広口、大型の甕。口縁部、外反し、2本の凹線めぐる、外縁帯をもつ。ロクロナデ調整	
1416 参	埴須恵器	底—[6.0]○小片、底部のみ	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質(爛し)。黒色	底部、内外面に、回転糸切り痕残る。貼付高台、断面、端部の丸い台形。底部、内面、化粧土残る	フク土出土 底部円盤別作り
1417 参	耳皿須恵器	底—4.3、高一(0.9)○ $\frac{1}{3}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。灰黄色	平底。底部より、一度、たちあがりひろがる。両側部、つまみあげて成形。底部、回転糸切り、無調整	フク土出土
1418 参	埴須恵器	口—[14.0]、高一(3.4)○ $\frac{1}{3}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい黄橙色	体部、直線的にひろがり、口縁部、外反する。口縁端部、内側、肥厚し丸味をもつ。体部、ロクロナデ調整	内外面、口縁部、リング状に、炭化物、厚く付着。堀方土壇
1419 参	埴須恵器	底—[6.4]、高一(1.1)○小片、底部のみ	砂粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	底部、回転糸切り、貼付高台、断面外行する台形	フク土出土 底部外面に、墨書あり。「甲」字

2 掘立柱建物跡

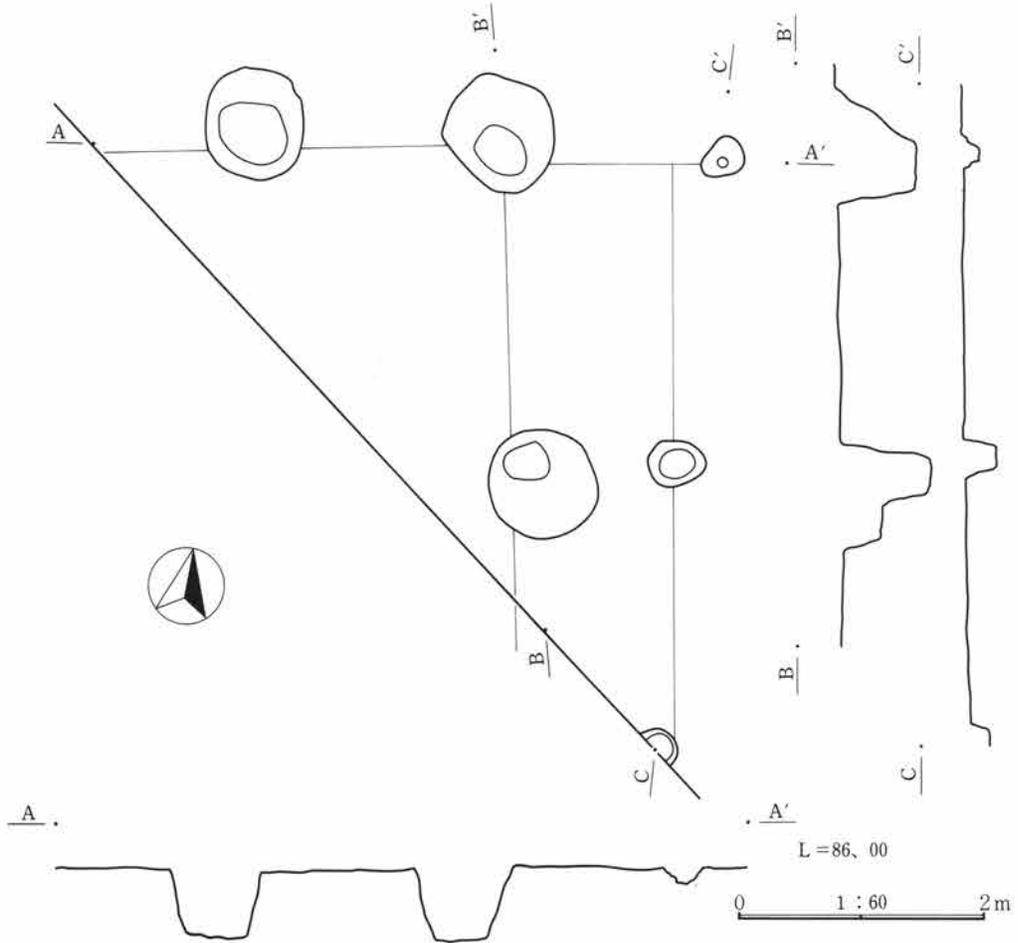
掘立柱建物跡は4区から7区にかけて18棟が確認された。4、6区では竪穴住居跡の一群に対応するかの様に単独棟としてあるが、7区に於いては、古墳に囲まれた狭い範囲に14棟が重複を主とした状態にある。4区の3棟は掘り方も大きく、規模、主軸方向を同じくするが、6、7区は円形で小形の掘り方を呈し、主軸方向を大別3つに分けられる。明確な遺物を伴う例はないが竪穴住居等との重複関係、6、7区の例の様に覆土中に浅間山B軽石を混入する様子から、竪穴住居跡と相前後し、北の6、7区がやや新しくなる平安時代の遺構として扱えた。 (女屋)



第396図 4区1号掘立柱建物跡



第397図 4区2号掘立柱建物跡



第398図 4区3号掘立柱建物跡

4区1号掘立柱建物跡 (第396図)

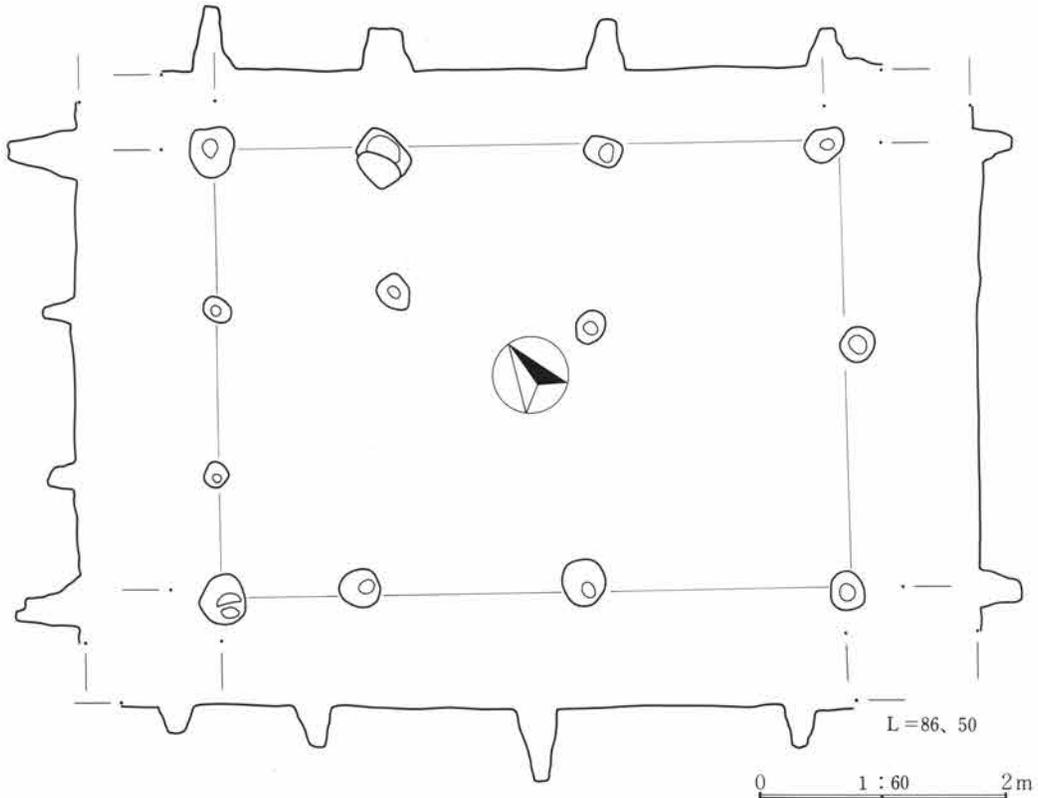
1号は、竪穴住居跡が稀薄になる所で確認された。規模は、桁行2間(4.60m)×梁行2間(2.80m)で桁方向の方位はN-6°-Wである。桁間は西面で北から2.30+2.30mを測り、梁間は北面で東から1.25+1.55mを測った。柱穴の規模は、直径40~50cmで、掘り方の形状は2号、3号に似ている。東南隅の柱穴には、直径約20cmの柱痕が残り、河原石2個が上面に見られた。深さは確認面から15~50cmである。遺物は出土していない。

4区2号掘立柱建物跡 (第397図)

2号は、30号住居跡、3、5、6号溝と重複し、最も古い。規模は、桁行2間(5m)×梁行2間(4.25m)で桁方向の方位はN-82°-Eである。桁間は南面で東から2.25+2.75mを測り、梁間は東面で北から2.20+2.05mを測った。柱穴の規模は、直径70~110cmあり、深さは確認面から15~60cmで不揃いである。東及び北面の3ヶ所の柱穴からは、柱痕位置を示す河原石数石が見られ、柱痕としては直径約15cmが推定できる。遺物は出土していない。

## 4区3号掘立柱建物跡 (第398図、図版166)

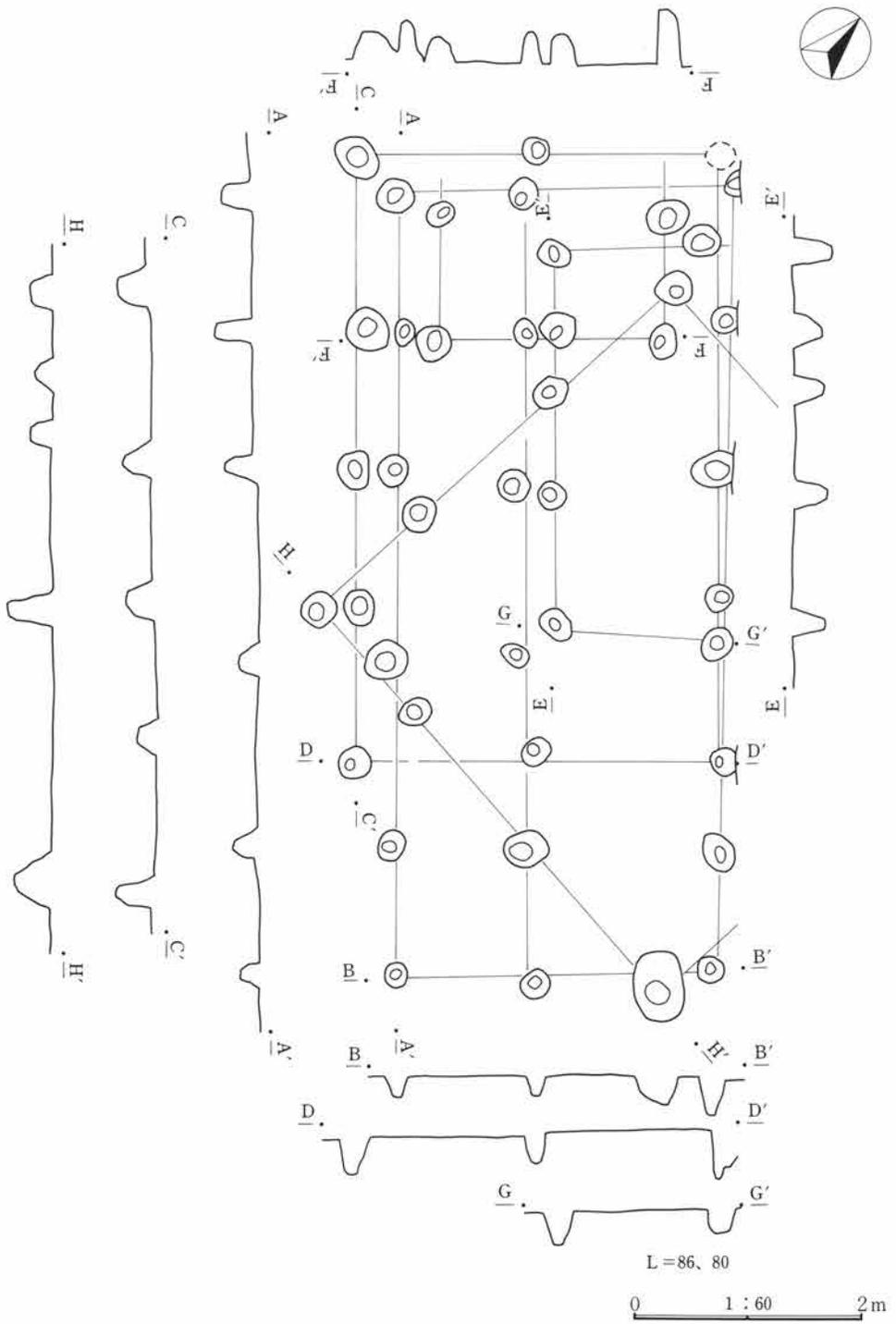
3号は、規模2間×2間と推定されるが、西南側は調査区外にある。桁間は北から2.50m、梁間は2.10mを測る。桁側に廂が付く。廂の柱間は北から2.40+2.30mを測る。柱穴の規模は、直径85~90cm、確認面からの深さ55~75cmで掘り方もしっかりしている。柱穴の掘り方、全体規模の特徴が2号と近似し、同時期のものか。遺物は出土していない。



第399図 6区1号掘立柱建物跡

## 6区1号掘立柱建物跡 (第399図)

1号は、5号住居跡を切って確認され、プラン内にも浅間山B軽石を攪拌土で覆土に持つ土壇2基がある。また、周辺10×10mの範囲には多数のピットが集中し、建替え及び複数の建物跡が存在する可能性がある。規模は、桁行3間(5m)×梁行2間(3.60m)で桁方向の方位はN-55°-Wである。桁間は北面で東から1.80+1.80+1.40mを測り、梁間は東面で北から1.60+2m西面で1.35+1.30+0.95mを測った。柱穴の規模は、直径約30cmの円形で、深さは確認面から40~60cmである。柱穴の掘り方、形状と方位は、7区に集中する掘立柱建物跡と近似する。竪穴住居跡との重複でも新しく、周辺にあるピットのいくつかには、B軽石純層で埋没したのがあり、ピット群を含めた時期を、住居跡より新しく、B軽石降下前後頃に求められるか。



第400図 7区1号～5号掘立柱建物跡

## 7区1号、2号、3号、4号、5号掘立柱建物跡（第400図、図版166）

この5棟は、ほぼ同一の範囲で重複して確認された。5号を例外として、軸方向は同じで各棟の柱穴の掘り方と形状は似ており、平面形に大小の差異が見られる。桁方向の方位は、1～4号がN-45°-W付近に集中し、5号が例外的にN-85°-Wである。各棟の柱穴に重複が見られるが、覆土等の特徴にも格別の差が見られず、また、遺構の時期を決定し得る伴出遺物もないことから、5棟の変遷については不明である。南北両側で異方向の掘立柱建物跡が複数確認されているが、軸方向が大別二分される点で、その各々に関係を求めることが可能か。

1号は、桁行5間（6.75m）×梁行2間（2.75m）の規模を持ち、総柱である。桁間は西南辺で東南から1.10+1.60+1.65+1.20+1.20mを測り、梁間は東南辺の北から1.55+1.20mを測った。柱穴の規模は、直径20～35cmで、確認面からの深さ25～45cmである。東北面の桁で2号、4号の柱穴と重複している。遺物は出土していない。

2号は、1号から約2mずらせた位置にある。桁行4間（5.25m）×梁行2間（3.15m）の規模を持つ。桁間は西南辺で東から1.35+1.20+1.20+1.50mを測り、梁間は東南辺の北から1.60+1.55mを測った。柱穴の規模は、直径25～30cmの円形で確認面からの深さ約30cmである。

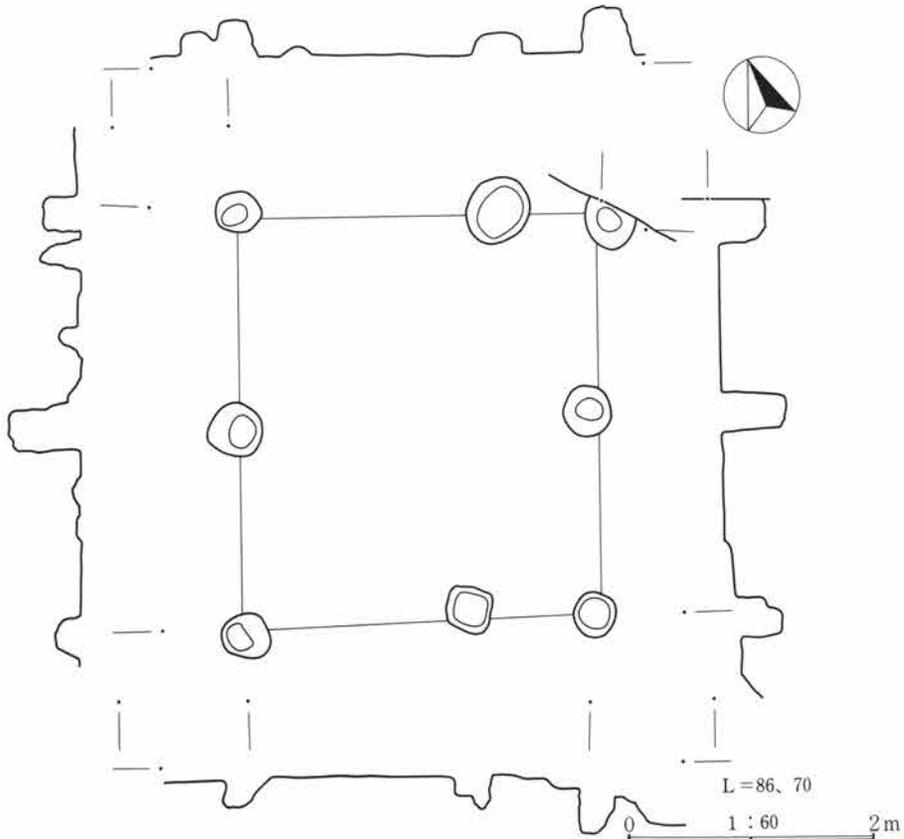
3号は、5号溝をはさんで更に西北方向へ広がると推定されるが、小規模な建物である。東南面の梁間が明らかだけで、桁については1間分のみである。規模は、桁間で1.05m、梁間は0.90+1.10mを測った。柱穴の規模は、直径25～30cmの円形で、確認面からの深さ19～53cmで不揃いである。

4号は、半分以上が調査区域外にある。規模は、桁行3間（3.20m）×梁行1間以上である。桁間は西南辺で東から1.10+0.90+1.20mを測り、梁間は1.30+1.40mである。柱穴の規模は、直径25～30cmの円形で、確認面からの深さは20～40cmである。遺物は出土していない。

5号は、先の4棟に対して約45°振れて重複するが、各柱穴の形状や掘り方に差異は見られない。規模は桁行、梁行ともに3間と推定されるが、半分以上の範囲は調査区域外である。西面を桁行とすると柱間は北から1.40+1.55+1.25mを測り、南面を梁行として、東から1.70+1.55+1.20mを測った。柱穴の規模は、直径22～28cmの円形で、確認面からの深さは21～47cmである。2ヶ所の柱穴が1号、4号の柱穴と重複している。遺物は出土していない。

## 7区6号掘立柱建物跡（第401図、図版167）

11号と重複しているが、新旧関係は不明である。規模は、桁行2間（3.40m）×梁行2間（3m）で桁方向の方位はN-22°-Eである。桁間は西面で北から1.80+1.60mを測り、梁間は北面で東から0.85+2.15m、南面で1.05+1.90mを測った。梁間の柱穴が一方に寄る。柱穴の規模は、直径が35～45cm、確認面からの深さ20～60cmである。遺物は出土していない。7号と平行し、12号と直交する位置にある。



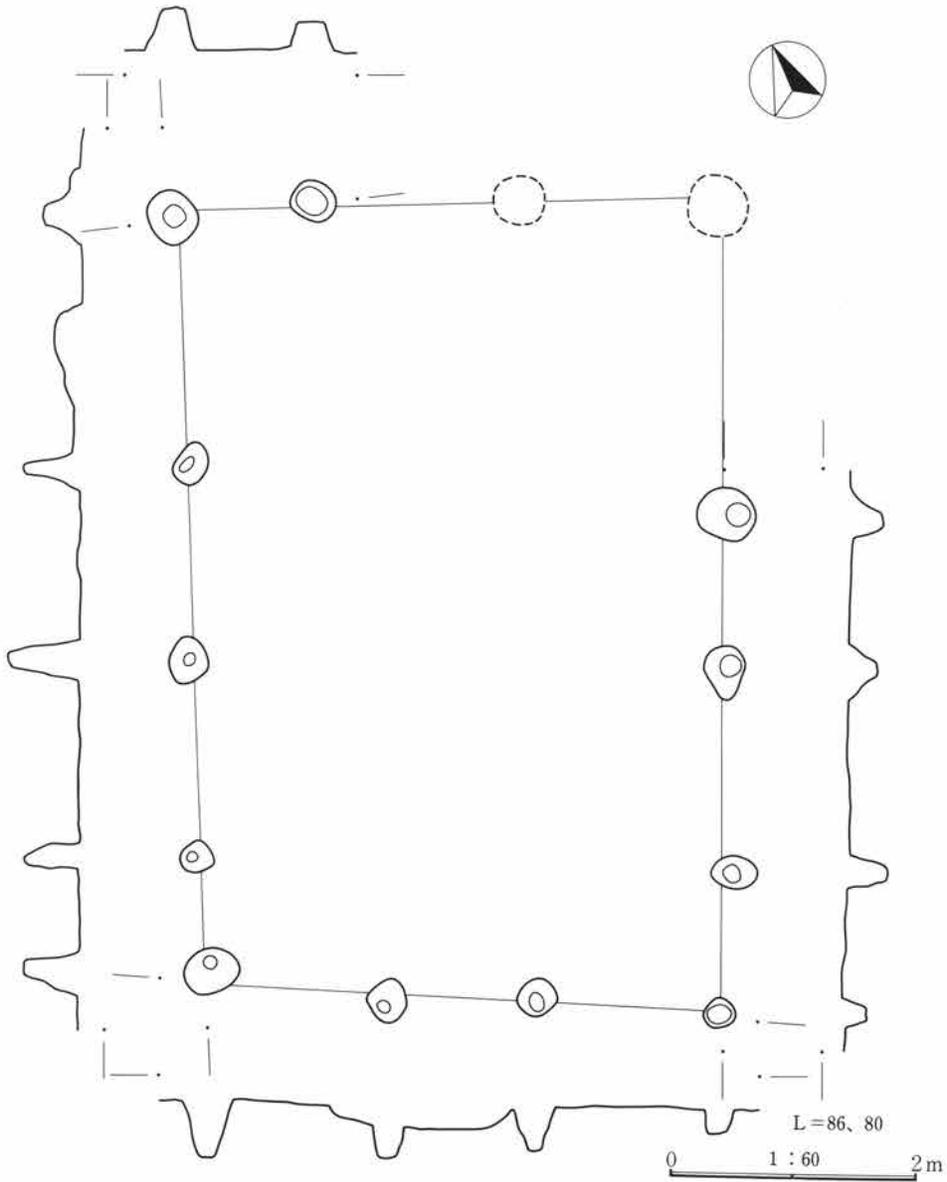
第401図 7区6号掘立柱建物跡

7区7号掘立柱建物跡 (第402図、図版167)

8号と重複しているが、新旧関係は不明である。東北隅は調査区域外である。規模は、桁行4間(6.10m)×梁行3間(4.15m)で桁方向の方位はN-22°-Eである。桁間は西面で北から2+1.55+1.60+0.95m、梁間は南面東から1.50+1.25+1.40mを測った。柱穴の規模は、直径が25~35cm、確認面からの深さ15~60cmと不揃いである。6号の梁行南面と7号の梁行北面とが、ほぼ同一線上にある。遺物の出土はない。周囲も含めて内外に多数のピットや土壇があるが、土壇よりは概して古い。

7区8号掘立柱建物跡 (第403図、図版168)

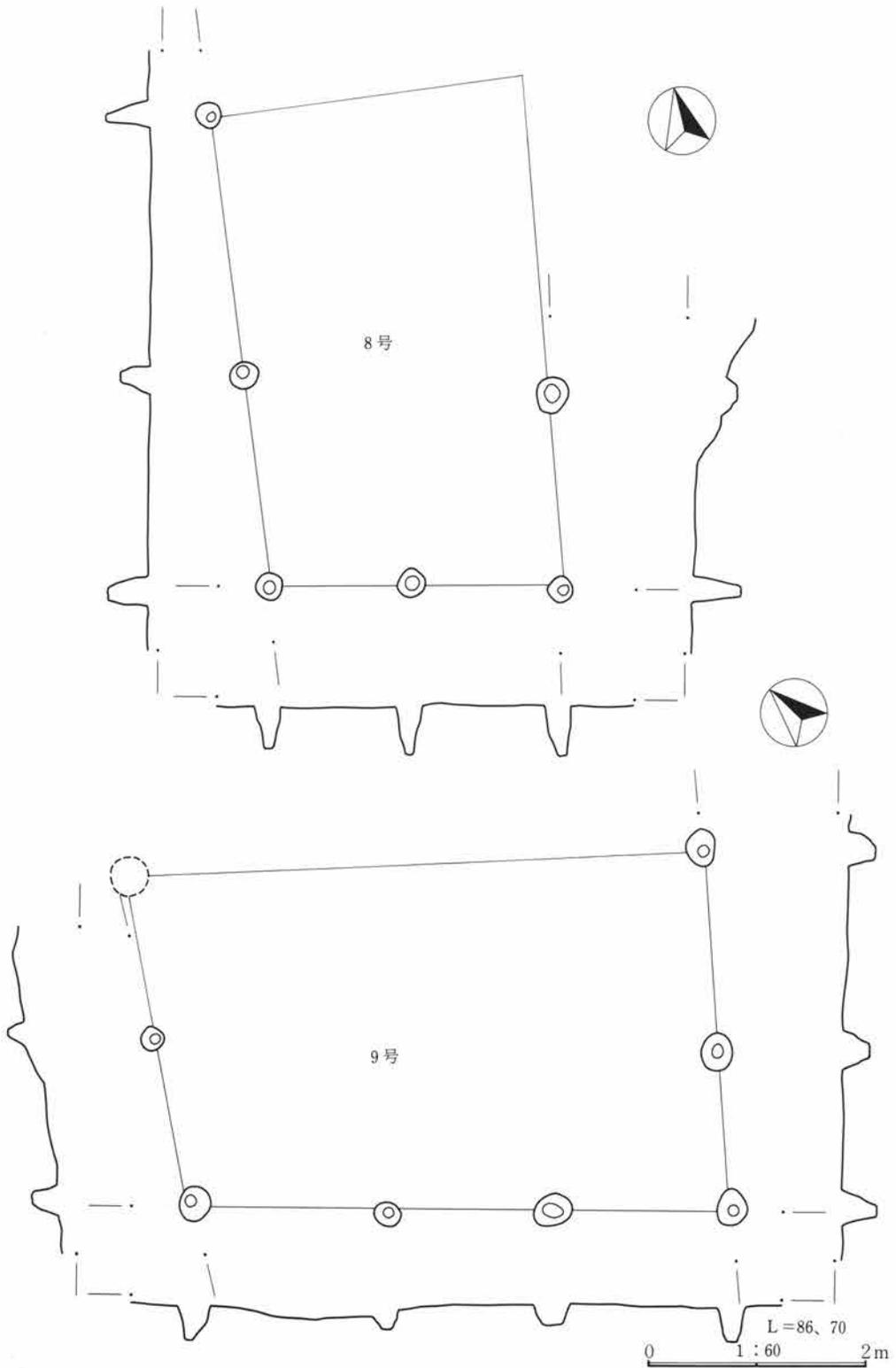
9号と交差する様に重複し、下面には古墳周堀と思われる5号住居跡と名付けた遺構がある。東北側は調査区域外にあり、5号住居跡との重複部分の柱穴は不明である。規模は、桁行3間(4.35m以上)×梁行2間(2.70m)と推定される。桁方向での方位はN-10°-Eである。桁間は西面で2.35+2.00mが計測され、梁間は南面東から1.40+1.30mを測った。柱穴の規模は、直径約25cm、確認面からの深さ30~45cmである。遺物は出土していない。



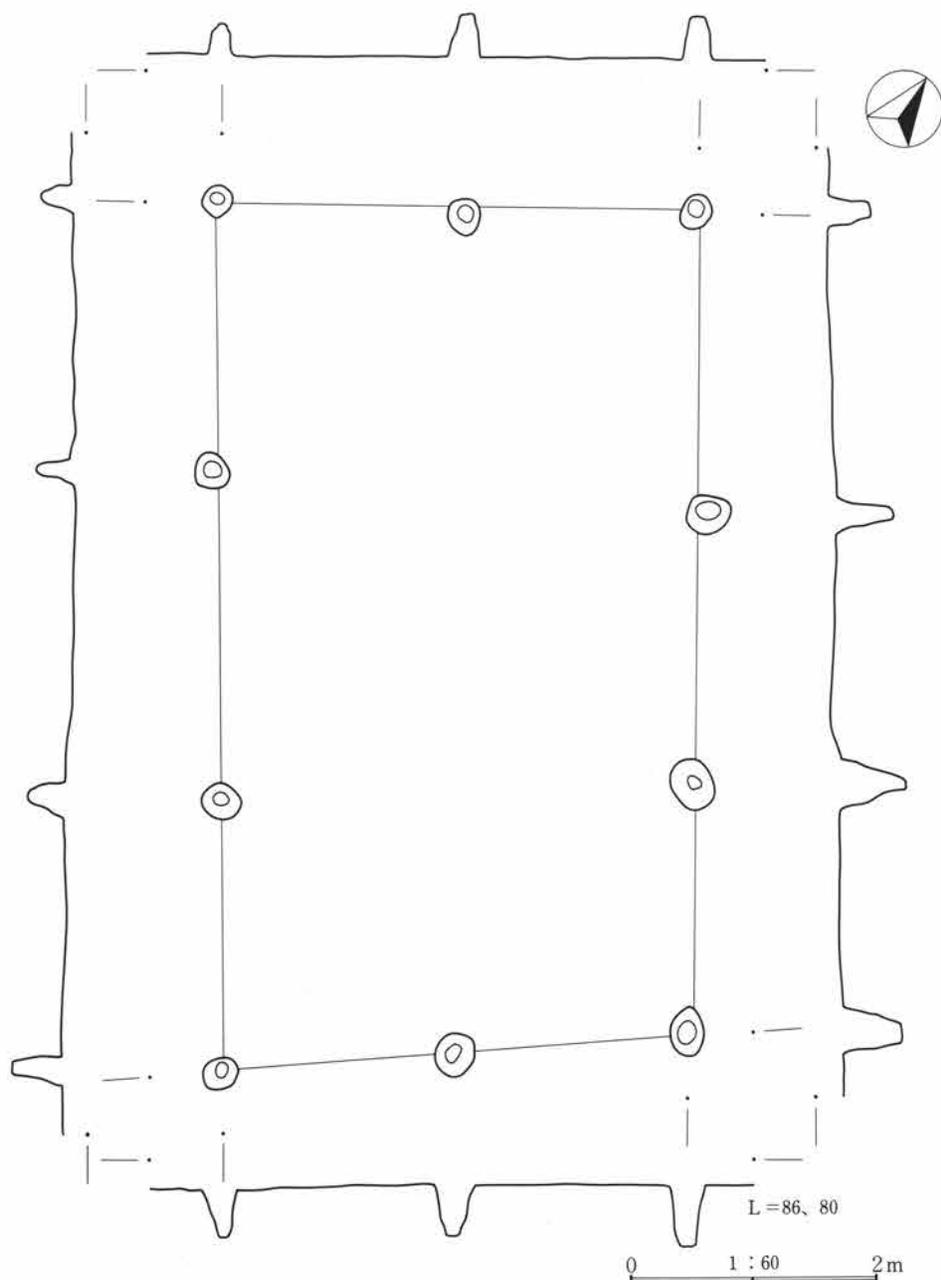
第402図 7区7号掘立柱建物跡

7区9号掘立柱建物跡 (第403図、図版168)

8号と交錯し、同様に5号住居跡上面にあり、一部の柱穴は不明である。規模は、桁行3間(5m)×梁行2間(3.30m)で桁方向の方位はN-44°-Wである。全体に北方向にかしいでいる。桁間は西南面東から1.65+1.45+1.80mを測り、梁間は東南面の北から1.85+1.45mを測った。柱穴の規模は、直径20~30cm、確認面からの深さ20~35cmである。遺物は出土していない。



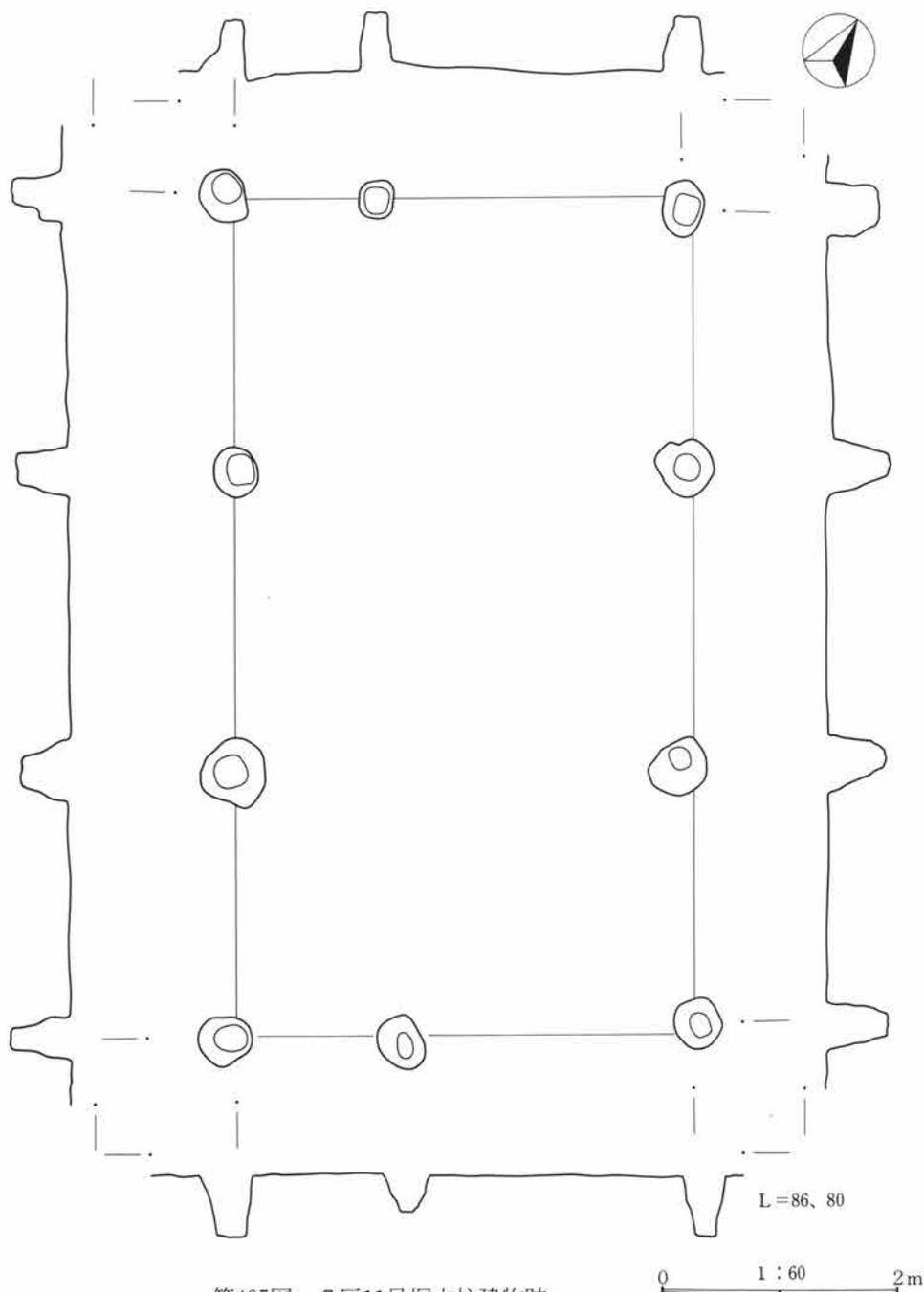
第403図 7区8号、9号掘立柱建物跡



第404図 7区10号掘立柱建物跡

## 7区10号掘立柱建物跡（第404図、図版168）

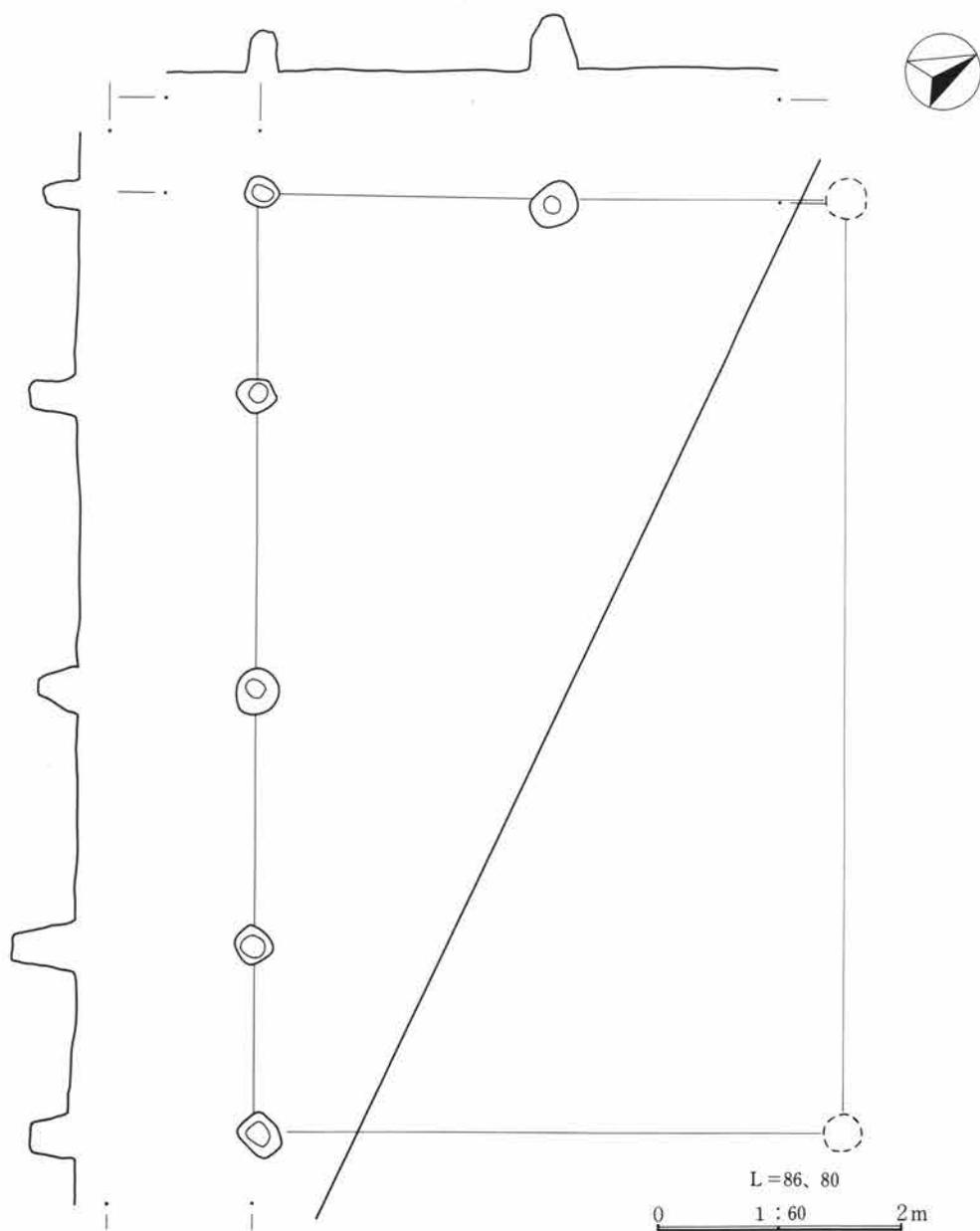
7号等の西に隣接して確認された。規模は、桁行3間（7m）×梁行2間（3.90m）で桁方向の方位はN-45°-Wである。桁間は東面で北から2.45+2.20+2m、西面で北から2.10+2.75+2.15mを測り、梁間は北面で東から1.90+2m、南面で1.90+1.90mを測った。柱穴の規模は、直径が約25cm、確認面からの深さ25~50cmでほぼ一定している。遺物は出土していない。11号と平行し、13号と直交する関係にある。



第405図 7区11号掘立柱建物跡

7区11号掘立柱建物跡（第405図、図版169）

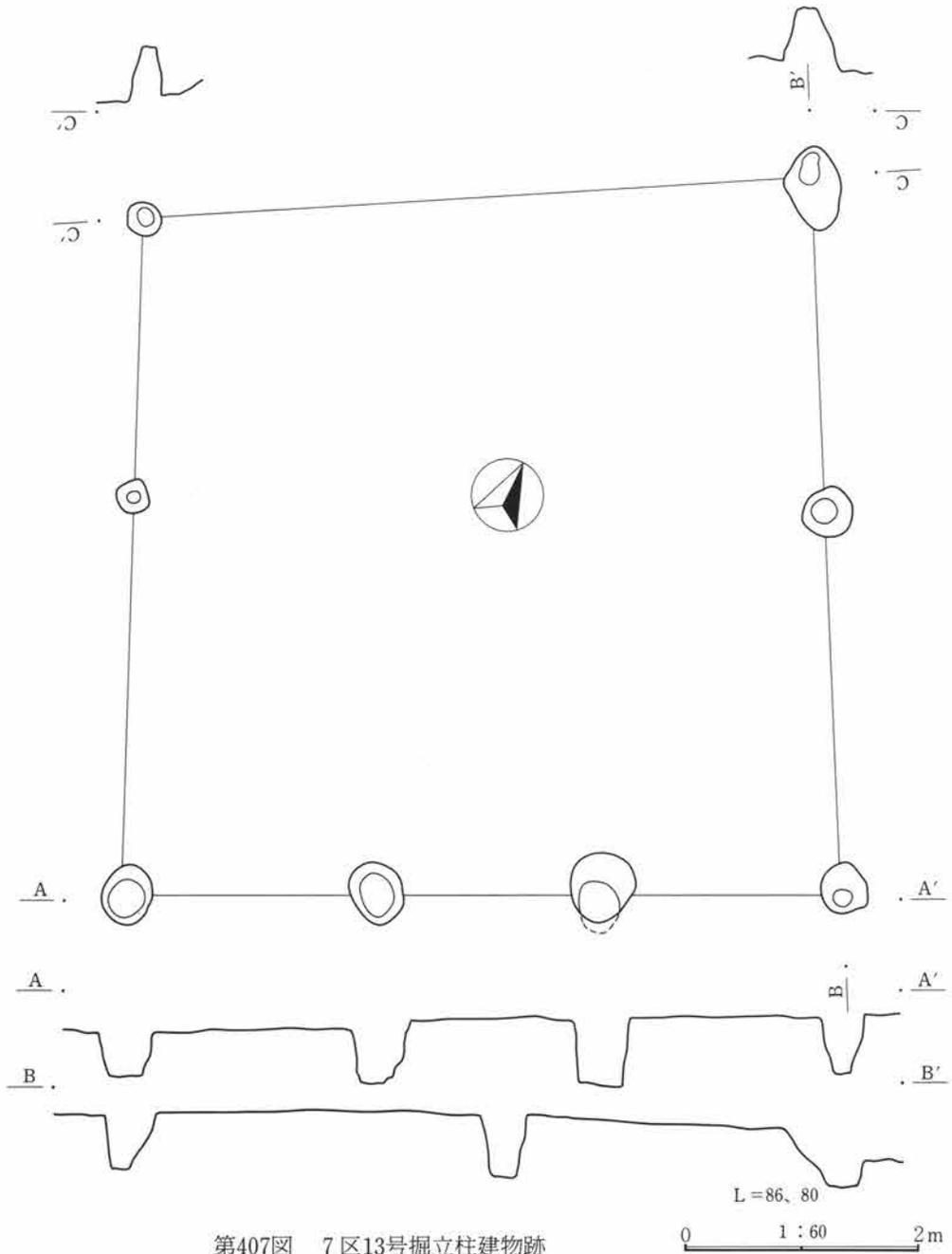
6号住居跡、土壇等と北側で重複し、住居跡よりは新しい。規模は、桁行3間(7.15m)×梁行2間(4m)で桁方向の方位はN-28°-Wである。桁間は西面で北から2.35+2.55+2.25m、東南で2.20+2.45+2.25mを測り、梁間は北面で東から2.65+1.25m、南面で2.55+1.45mである。



第406図 7区12号掘立柱建物跡

## 7区12号掘立柱建物跡（第406図、図版169）

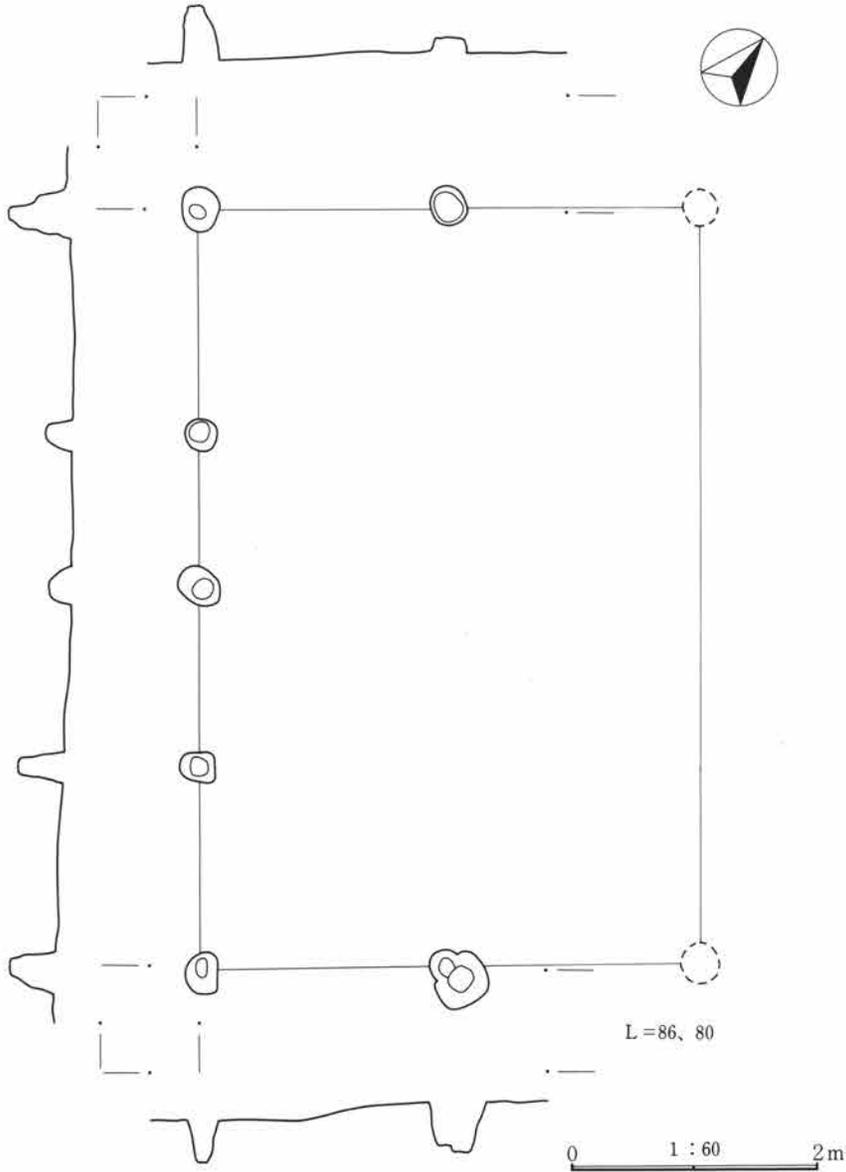
調査区の制約から西南側が確認されている。規模は、桁行3間(7.60m)×梁行2間と推定される。桁方向の方位はN-63°-Wである。桁間は南面で東から1.55+2.05+2.40+1.60mを測り、梁間は2.40mである。柱穴の規模は、直径が約40cmで、深さは確認面から30~55cmである。



第407図 7区13号掘立柱建物跡

7区13号掘立柱建物跡 (第407図)

2号古墳南側周堀と墳丘端にかかって確認され、14号と重複しているが新旧関係は不明である。規模は、桁行3間(6.10m)×梁行2間(5.80m)で桁方向の方位はN-63°-Eである。桁間は南面で東から2.05+1.90+2.15mを測り、梁間は西面で北から2.40+3.40mを測った。柱穴の規模は、直径25~50cmで、深さは確認面から35~55cmあり、掘り方もしっかりしている。



第408図 7区14号掘立柱建物跡

## 7区14号掘立柱建物跡（第408図）

2号古墳南側周堀内に北面の桁側があり不明な状態で確認された。13号と重複しているが新旧関係は不明である。規模は、桁行4間（6.10m）×梁行2間と推定され、桁方向での方位はN-50°-Wである。桁間は北から1.80+1.25+1.40+1.65mを測り、梁間は2mである。柱穴の規模は、直径30~35cmで、深さは確認面から20~50cmある。遺物は出土していない。

### 3 溝

平安時代の溝は、4～8区にかけて16条が確認されている。その状態は、調査区を縦、横断し、部分的な範囲にとどまり、全容をつかんだ例はない。殆どが直線的な走向性を持つが、現地形の等高線に平行する4区3号、5区4号の例、斜行する6区8号、7区6号の例、古墳周堀に近い覆土の様相を持つ5区7号、8区2号の例と、あり方は様々である。その中であって6区8号の様に、竪穴住居跡との重複もなく、あたかも規則的なあり方の6区以南の住居群と、7区古墳の間に群在する住居群とを分けるかの様なものもある。溝の性格を、部分的な調査で、にわかに断定しがたいが、集落の周囲や内部を区画するといったものが求められるか。(女屋)

#### 4区3号、5号、6号溝(第409・415図、第137表)

3号溝は、上幅40～60cm、深さ20～40cm、長さ約38mを測る。断面はU字型を呈し、東北方向への緩傾斜を持つ。24～28号、33号住居跡、2号掘立柱建物跡と重複するが、掘立跡より新しく各住居跡より古い。遺物は、混入の状態で土師器坏等の小破片が少量出土している。覆土は、上層に暗褐色土、下に黒褐色土が見られ、全体に均質、緻密で小石を含む。性格は、水が流れた形跡はなく区画を意図したものか。

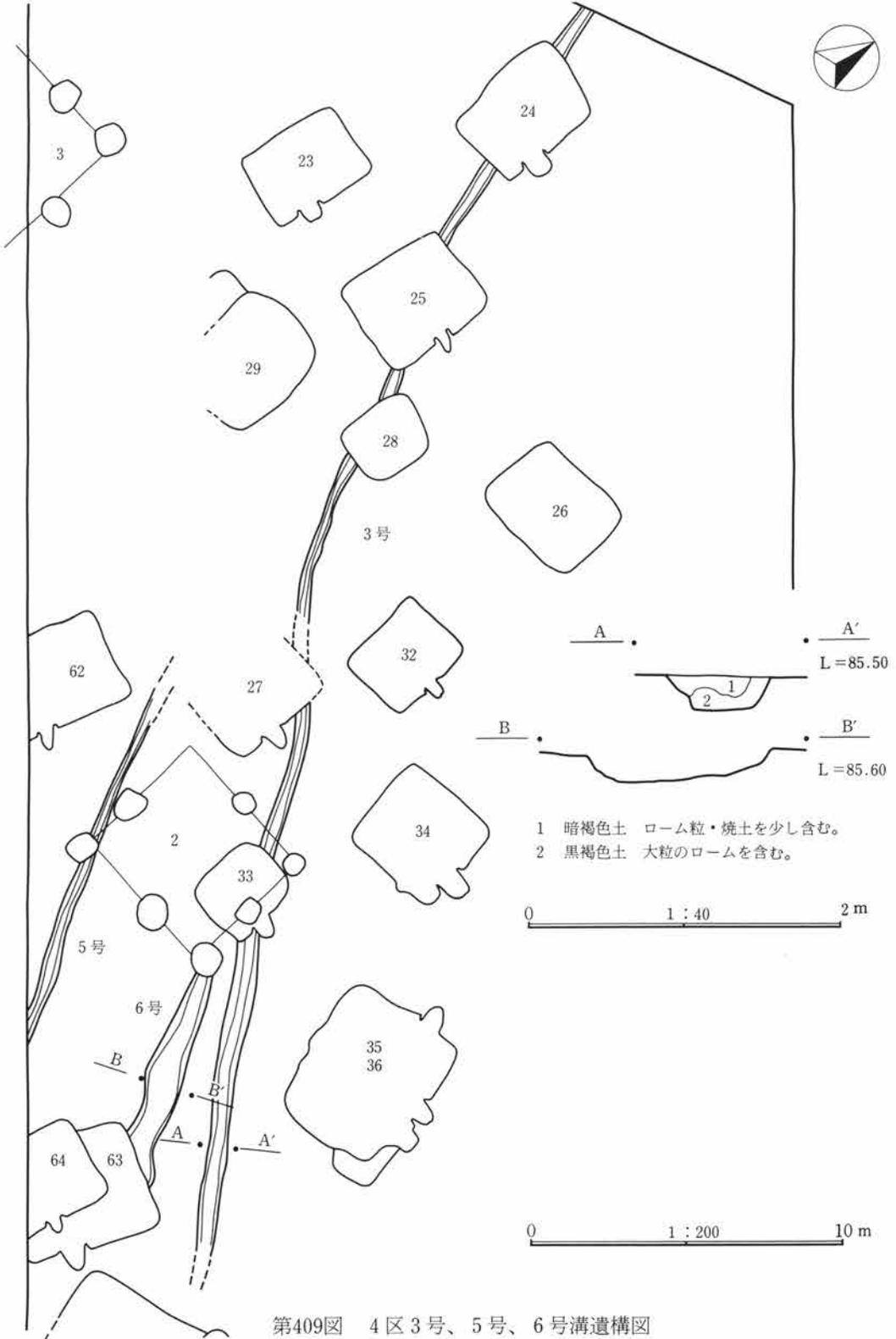
5号溝は、上幅約40cm、深さ約30cmで長さは11mを測るが、27号住居跡付近で攪乱を受けている。特徴は、直線的な走向を持つこと、隣接する溝と平行するが伴出遺物は少なく、重複する2号掘立柱建物跡との関係では、新しいことが判明している。

6号溝は、上幅約70cm、深さ20cm、2号掘立柱建物跡東南隅ピットと63号住居跡との間で長さ約6mを測る。覆土は、細粒の暗褐色土で礫を含む。遺物は、土師器の小破片が少量ある。遺構の時期は、掘立跡、住居跡よりも古い。

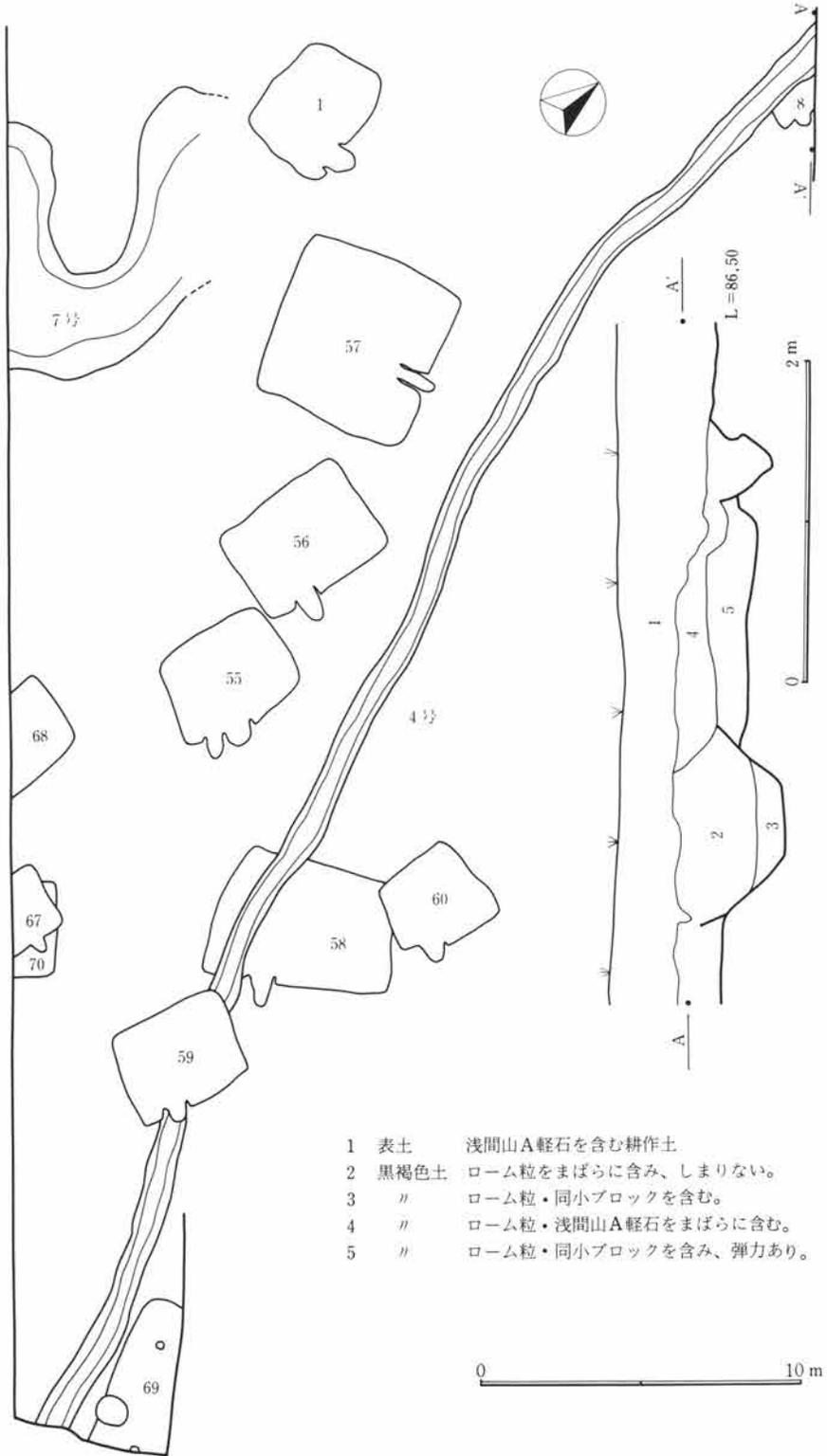
#### 5区4号、7号溝(第410・415図、第137表、図版173・174)

4号溝は、上幅約70cm、深さ60cmで一定し、直線的な走向性を持ち、長さは約50mを測る。底面はほぼ平坦で断面は箱型を呈する。傾斜は南方向へ若干見られる。5区58、59号、6区8号住居跡と重複するが、58号(古墳時代後期)より新しく、平安時代の住居跡である8号より新しいが59号よりは古い。遺物は、住居跡からの流れ込みで、中には墨書銘「七」を底部の表裏に持つ土師器坏があり注目されるが、隣接する55号住居跡にも墨書土器があり混入か。遺構の時期としては、重複する遺構との関係から凡そ10世紀前半代までには埋没したか。

7号溝は、上幅約3mを測るがU字型に大きく蛇行し、東北側に於いては不明瞭になる。西側での深さは70cmを越し、更に続く様相を持つ。遺物は、土師器坏、甕等の破片が出土している。遺構の時期としては、覆土中位に浅間山B軽石が約10cmの厚さで見られたことから平安時代中頃と推定され、覆土全体の様相は、この地区の古墳周堀の状態と近似している。



第409図 4区3号、5号、6号溝遺構図



第410図 5区4号、7号溝遺構図

## 6区1号、2号、4号溝（第411・412図、図版173）

この3条の溝は、基本土層の第4層で確認された。1号と4号については、13号住居跡を境にして名称を分けたが同一のものと判断される。

1号溝は、調査区内をS字状に蛇行をし、南北で形状、規模が異なる。北半分は、上幅、深さとも約60cmと一定し、底面は平坦で断面箱型、掘り方も一定する。南半分は、中段が幅広なテラス状となり上幅は3mを越し、深さは75～90cmにも及ぶ。南への緩やかな傾斜を持つ。13、14、21号住居跡よりも古く、1号掘立柱建物跡より新しい。遺物は、土師器坏、埴等の破片が少量ある。遺構の時期は、住居跡との重複関係から10世紀前半代に求められる。4号溝は、1号の続きだが掘り方形状は不明瞭になり、上幅も1mを越し、深さも30cmと浅くなる。13号住居跡より古い、2号溝よりは新しい関係を持つ。遺物は、土師器の小破片が少量出土している。1号と合わせた長さは約31mである。

2号溝は、調査区際で部分的な状態で確認され、溝状遺構としておくべき性格か。長さは約27m、上幅は広い所で1mを越すが、底面は凹凸があり一定しない。4号溝より新しく、11号住居跡より古い。また覆土の中位に攪乱され、固くしまった浅間山B軽石混土層がある。遺物は、土師器の小破片程度だが、先の重複関係から遺構の時期としては、4号溝より古い10世紀前半頃と推定される。

## 6区7号、8号、10号溝（第413図、図版173）

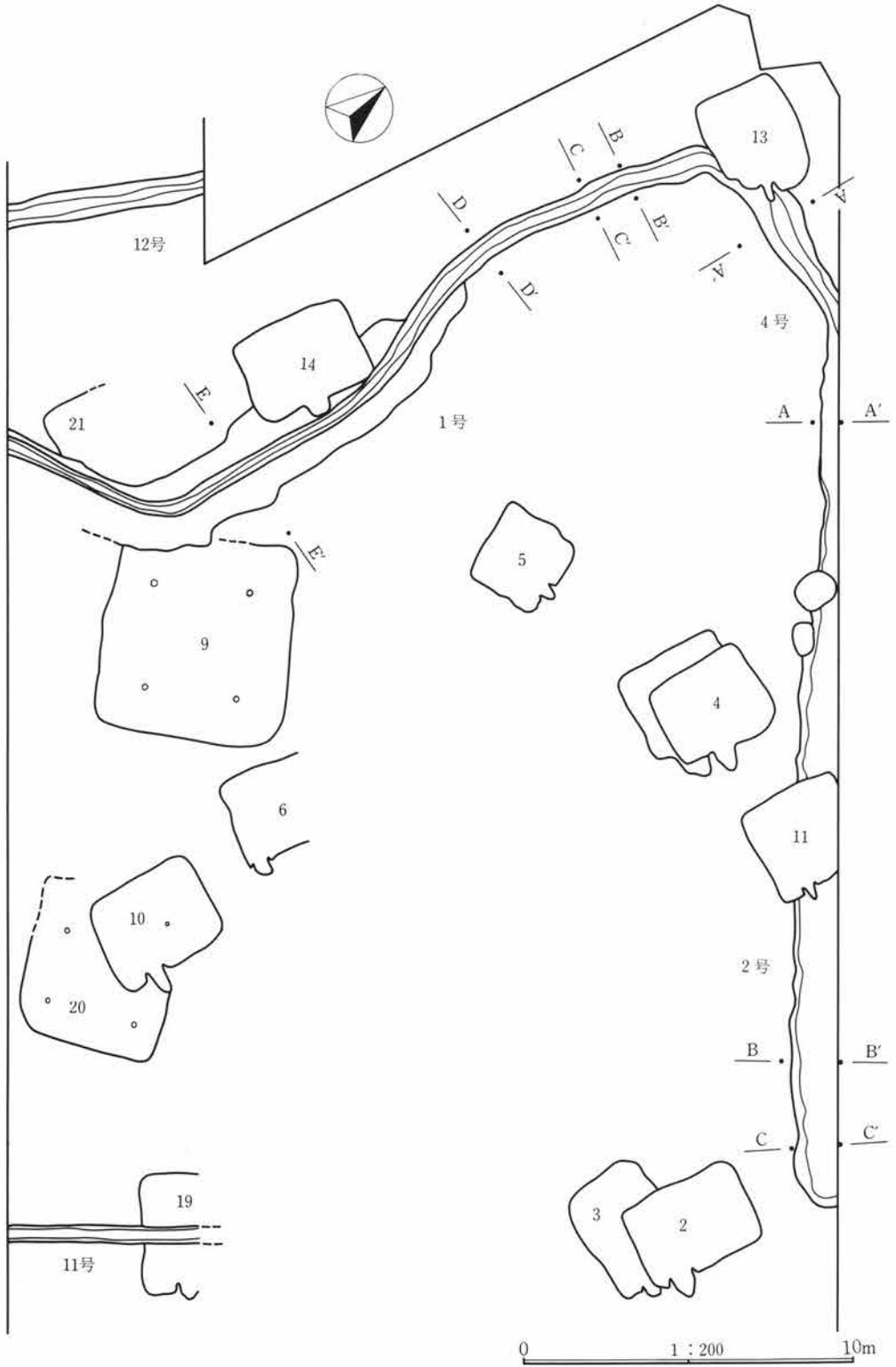
7号溝は、上半分全体に攪乱を受け、6号溝付近で西側に於いて不明瞭になる。上幅は3m、深さは50cmを越すと推定される。17号住居跡と重複するが、本溝の方が新しい。遺物は、17号住居跡からの混入と思われる土師器等がある。7区2号住居跡北側で確認された溝の一部に続く可能性を持つが、合せて考えると東北方向に蛇行しながら傾斜する、比較的大規模な溝と思われる。

8号溝は、上幅75cm、深さ40cmを測り、直線的な走向性と東南方向への傾斜を持つ。また、両側には段差10cm程のテラス状部分がある掘り方形状、走向性は1号溝に近似する。近世の6号溝、覆土の中位に浅間山B軽石層がある。2号井戸と重複するが、本溝の方が古い。本溝の覆土中にも、テラス状部分の少し上のレベルで同じB軽石純層が約10cmの厚さで堆積する。遺物は、縄文土器、土師器坏等がある。遺構の時期は、重複関係と覆土の様相から浅間山B軽石降下前である。10号溝は、上幅40cm程で8号側に傾斜を持ち、枝溝としての性格を持つか。

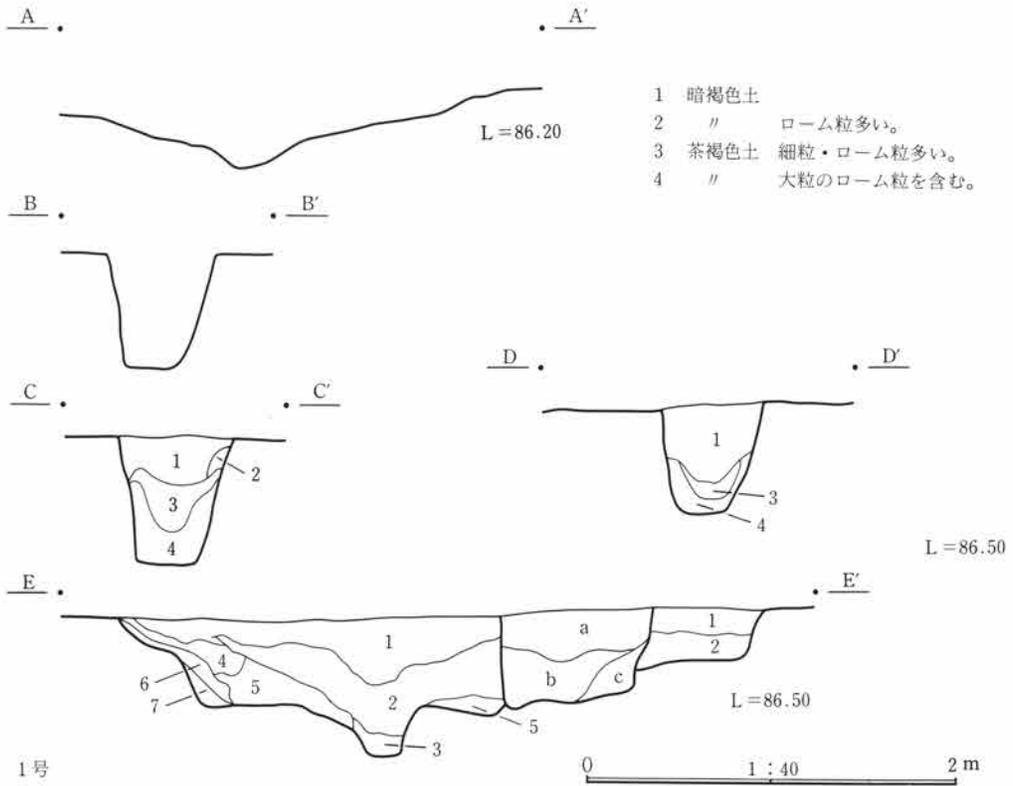
10号を含む8号溝は、2号井戸と重複するものの、住居跡群が稀薄な所に位置し、住居跡群を6区以南と7区とで分ける区画の役割を持ったものか。

## 7区6号溝（付図2参照）

この溝は、7区を東西方向に横断して基本土層の第4層で確認された。上幅は約70cm、深さは20～30cmで断面はU字型を呈し、ほぼ直線的な走向性を持つ。長さは約47mあり、東端は52号住居

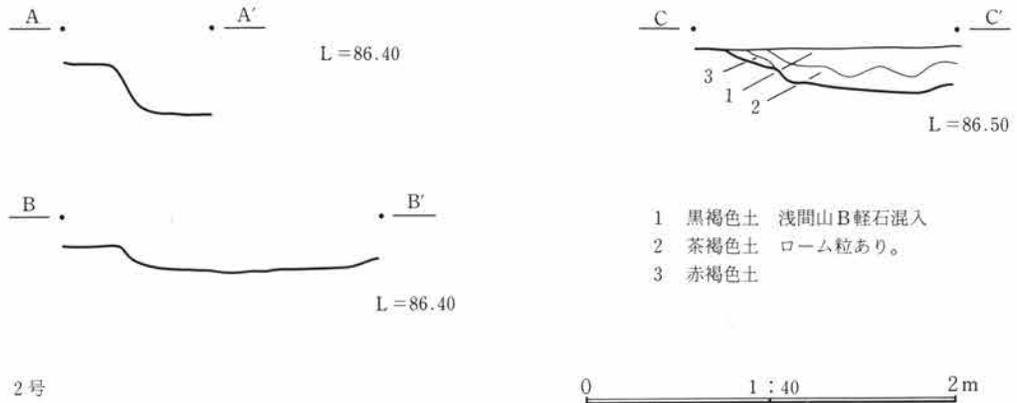


第411図 6区1号、2号、4号、11号、12号溝遺構図



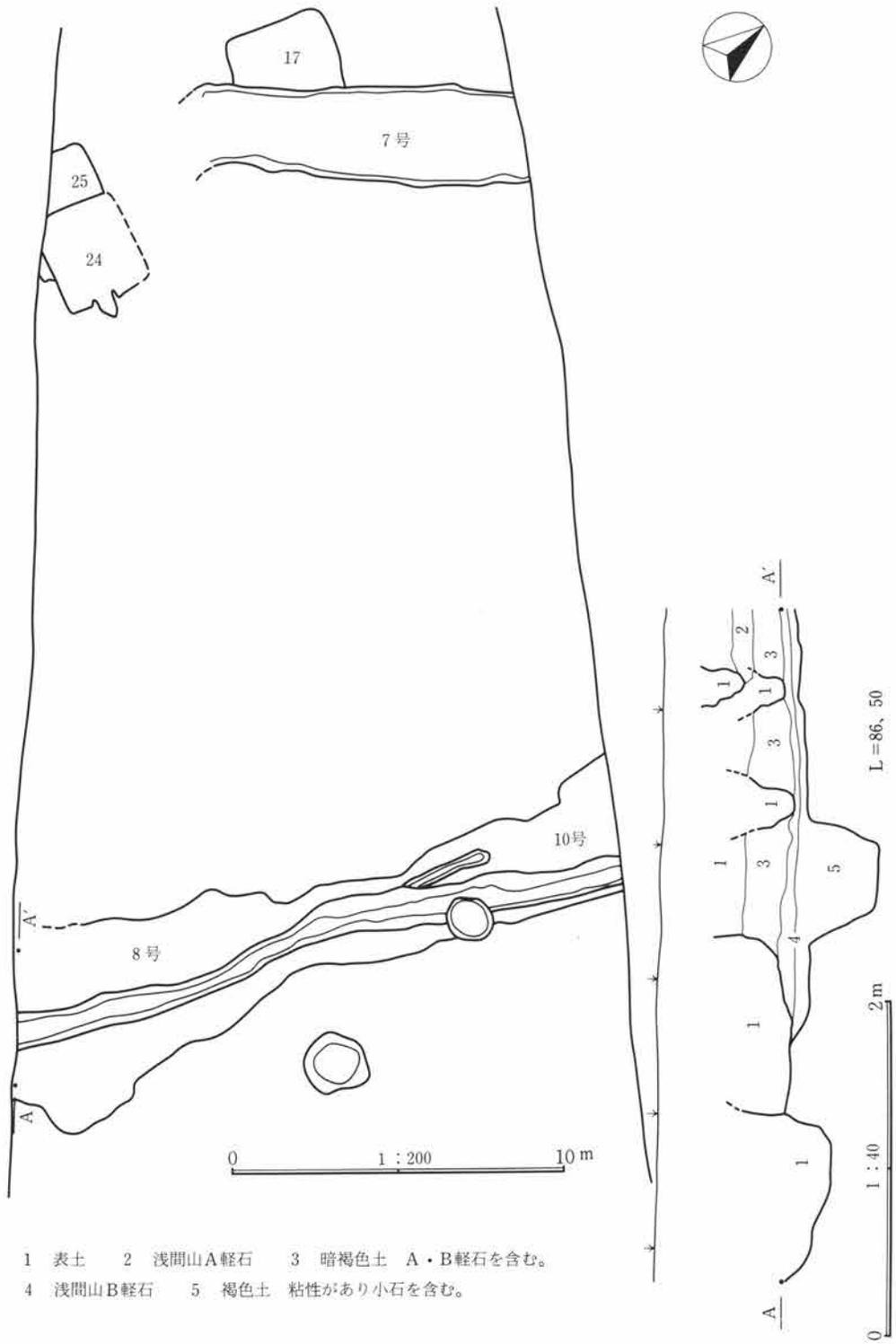
- 1 暗褐色土
- 2 // ローム粒多い。
- 3 茶褐色土 細粒・ローム粒多い。
- 4 // 大粒のローム粒を含む。

- 1 暗褐色土
- 2 黒褐色土 ローム粒あり。
- 3 // 粘性あり。
- 4 褐色土
- 5 黒褐色土 弾力あり。
- 6 黄褐色土 ローム粒多い。
- 7 // ローム漸移土。
- a 暗褐色土 A軽石あり。
- b //
- c // ローム粒あり。



- 1 黒褐色土 浅間山B軽石混入
- 2 茶褐色土 ローム粒あり。
- 3 赤褐色土

第412図 6区1号、2号溝断面図



第413図 6区7号、8号、10号溝遺構図

跡付近で不明瞭になるが西は崖線際まで続くと推定される。23号住居跡、3号方形周溝墓、89号土壇等と重複するが、いずれよりも新しい。遺構の時期は、覆土に浅間山B軽石を攪伴状態で含むことから凡そB軽石降下前後頃か。

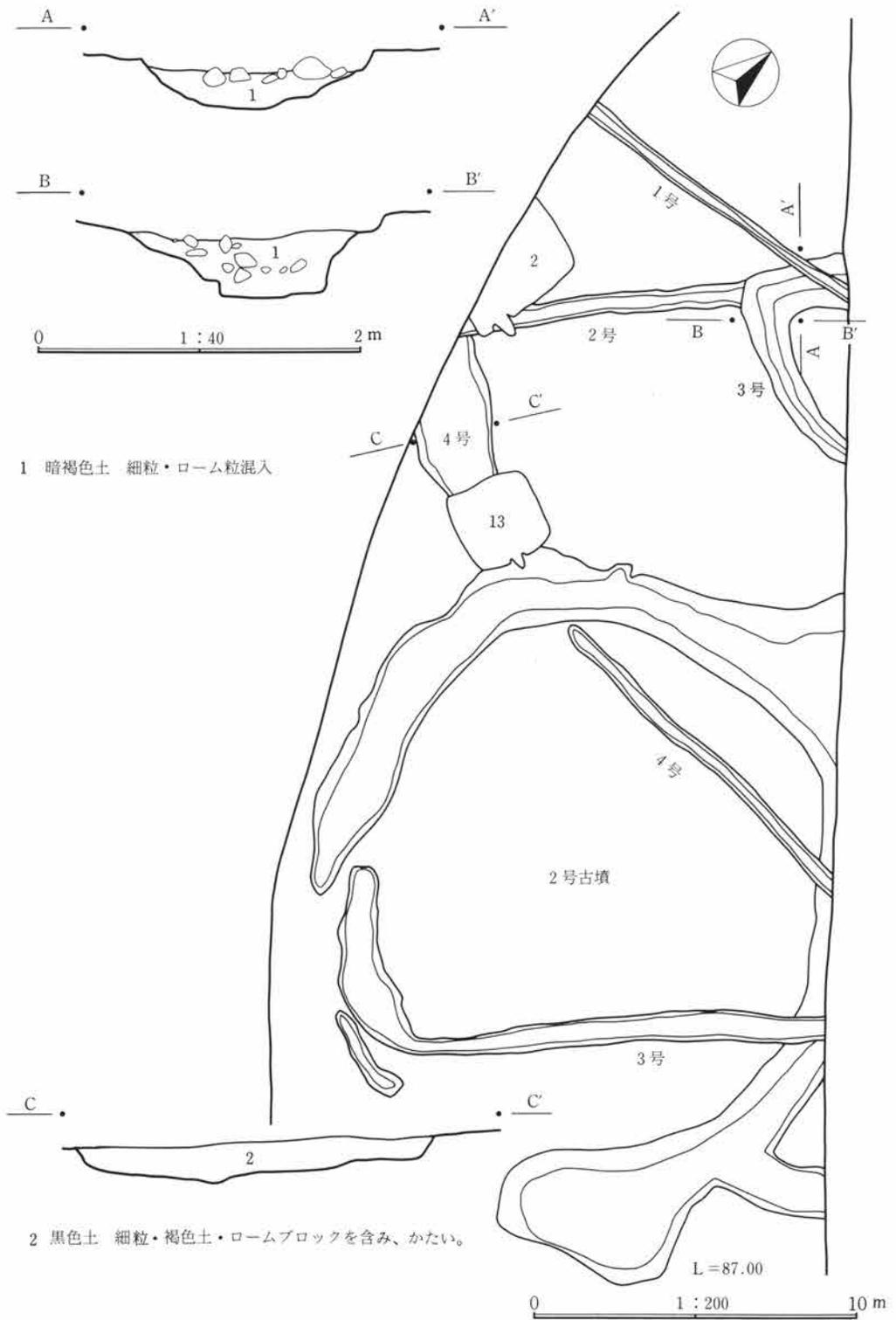
#### 8区2号、3号、4号溝（第414・415図、第137表、図版174）

2号溝は、上幅約60cm、深さ40cmを測り、直線的な走向性と東南方向への傾斜を持つ。2号住居跡、3、4号溝と重複するが4号溝より新しく、他より古い。遺物は、土師器の破片が出土している。

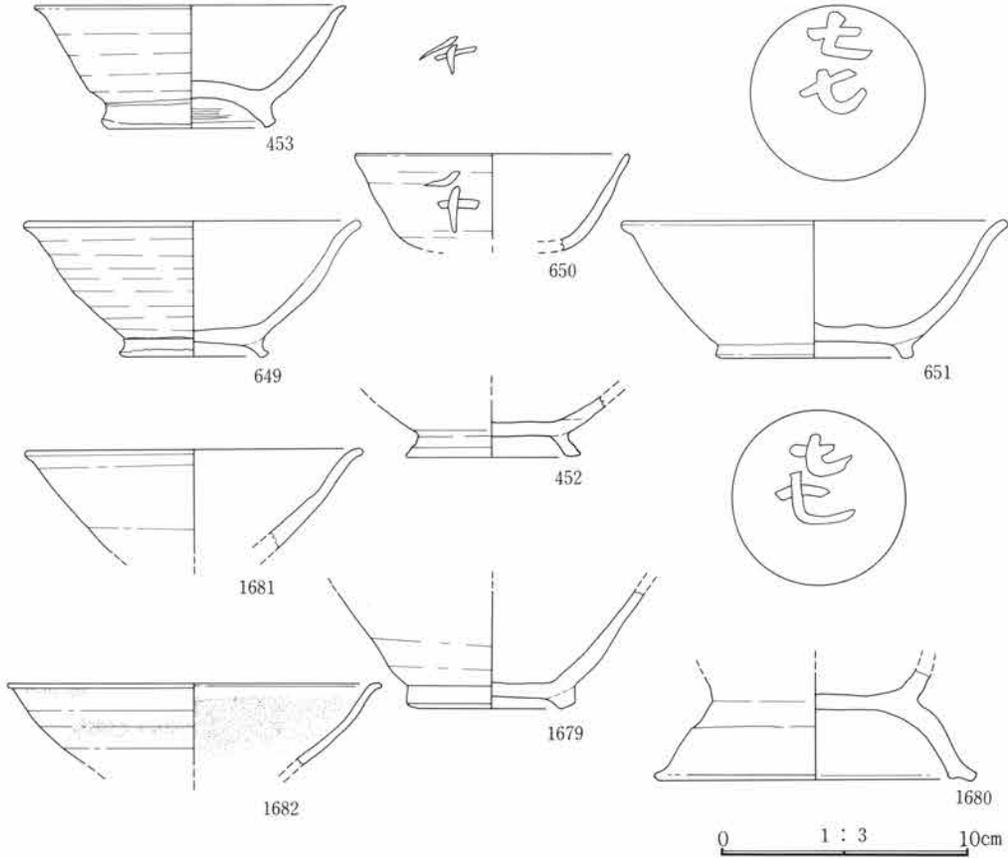
3号溝は、上幅1.0～1.5m、深さ約50cmを測り、調査区域外にむかって矩形に折れて確認された。近世の1号溝より古く、2号溝より新しい。西側隅付近の上面には拳大を主とする河原石の溜り状態が見られた。覆土の中位には、浅間山B軽石が攪拌状態で見られ、古墳周堀の様相に近似しているが断定できなかった。遺物は、土師器の破片が少量ある。

4号溝は、3条の中では最も古く、7区13号住居跡よりも古い。覆土は、褐色土とロームブロックを含む黒色土の単純層、遺物は土器細片が少量ある。上幅約2.40mあり、深さ25cmを測る。

第6章 検出された遺構と遺物



第414図 7区4号、8区2号、3号、4号溝遺構図



第415図 溝遺物集成図

第 137 表 溝出土遺物観察表

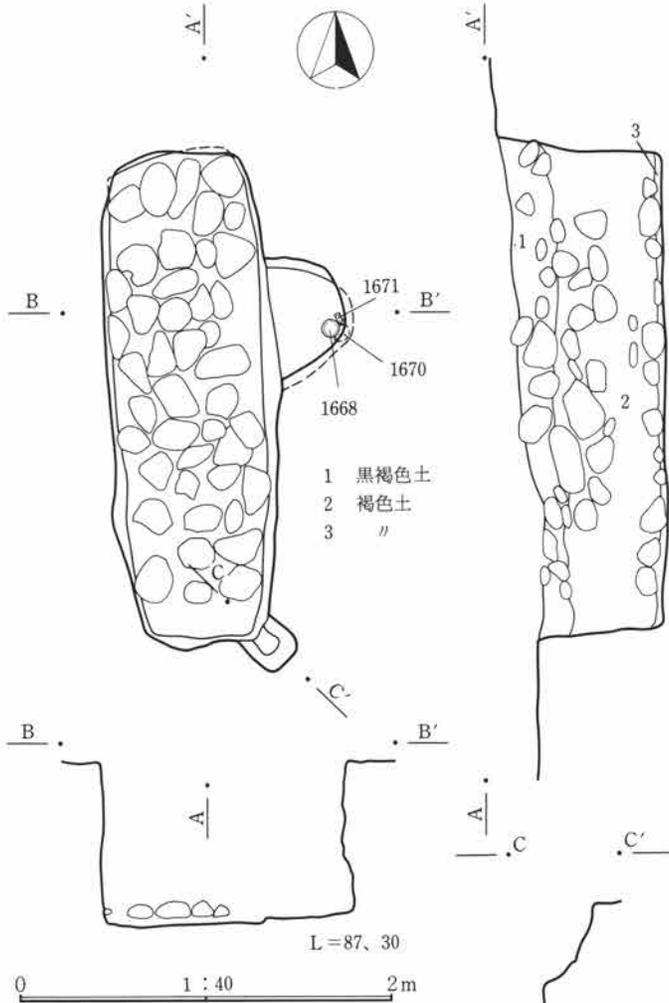
(第415図、図版 174)

番 号	土 器 種 類	法量 (口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
452	碗 須恵器	底-7.0、高一(2.0)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	体下部で、張りをもち、内湾する。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外行する長方形	5-4号溝
453	碗 須恵器	口-12.5、底-7.0 高一4.9○完存	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。灰黄色	体下部で張りをもち、直線的にひろがる。口縁部、外反し、端部薄手の仕上げ。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、端部が外側にめくれる台形。高台内面、ハケナデ	4-6号溝 高台、貼付の際ゆがみあり
649	碗 須恵器	口-[13.6]、底-[6.0]、高一5.4○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	体部、内湾してひろがり、口縁部外反する。端部丸味あり。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外行する長方形。体部、ロクロ目、細かい。器肉、やや薄手、均質	5-4号溝

第6章 検出された遺構と遺物

650	坏 土師器	口—[11.0]、高—(3.8)○ $\frac{1}{5}$	砂粒を多く含む。酸化、やや軟質。にぶい橙色	体下部で、張りをもってたちあがり、直線的にひらく。口縁端部丸味あり。体部、指ナデ、口縁部～体内部ヨコナデ	5—4号溝 体外面、墨書あり、「千」字
651	埴 須恵器	口—[15.6]、底—8.0、高—5.5○ $\frac{1}{5}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。灰白色	体部、やわらかく内湾してひろがり口縁部、外反する。口縁端部、丸味あり。底部回転糸切り、貼付高台、断面、やや外行する四角形。ロクロ右回転、ていねいな作り	底部、内外面、墨書あり、「七七」字。 5—4号溝
1679	埴 須恵器	底—6.8、高—(4.8)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	体部、内底部より、区切りをもってたちあがり、直線的にひろがる。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、丈の低い方形。器肉、厚手	8—4号溝
1680	埴 須恵器	底—[9.3]、脚裾—[13.0]、高—(4.1)○脚部のみ	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい褐色	高足高台付の埴。大振り。高台、貼付、断面、内湾しながら外行する。端部、中央に凹線めぐる。ロクロナデ調整	
1681	埴 須恵器	口—[13.6]、高—(4.2)○ $\frac{1}{5}$	砂粒、輝石を含む。酸化、やや軟質。にぶい黄橙色	体部、内湾してひろがり、口縁部、外反する。口縁端部、薄手の仕上がりがり、外側に稜をもつ。体部、ロクロナデ調整	
1682	埴 灰釉陶器	口—[15.0]、高—(3.3)○小片	砂粒を含むが、細密。還元、硬質。灰白色、釉—明緑灰色	体部、大きくひらき、体上部で内湾してたちあがる。口縁部外反し、端部、玉縁状。体部、ロクロナデ調整、体下部、回転ヘラケズリ調整。釉がかり、内外あり	

## 4 墓 塚



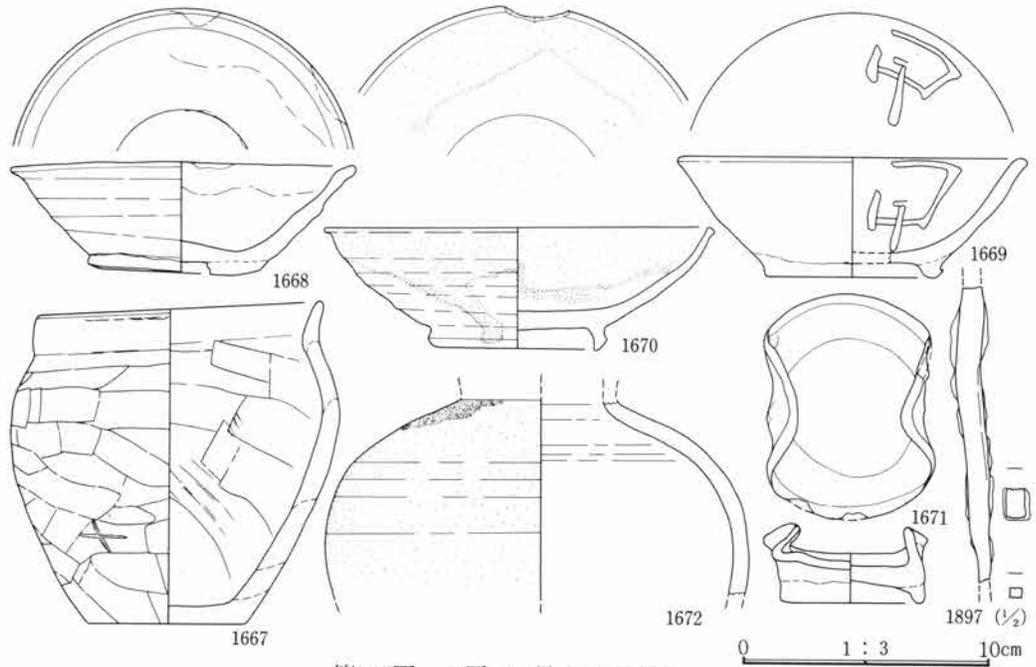
第416図 7区113号土塚遺構図

7区113号土塚(第416・417  
図、第138表、図版170)

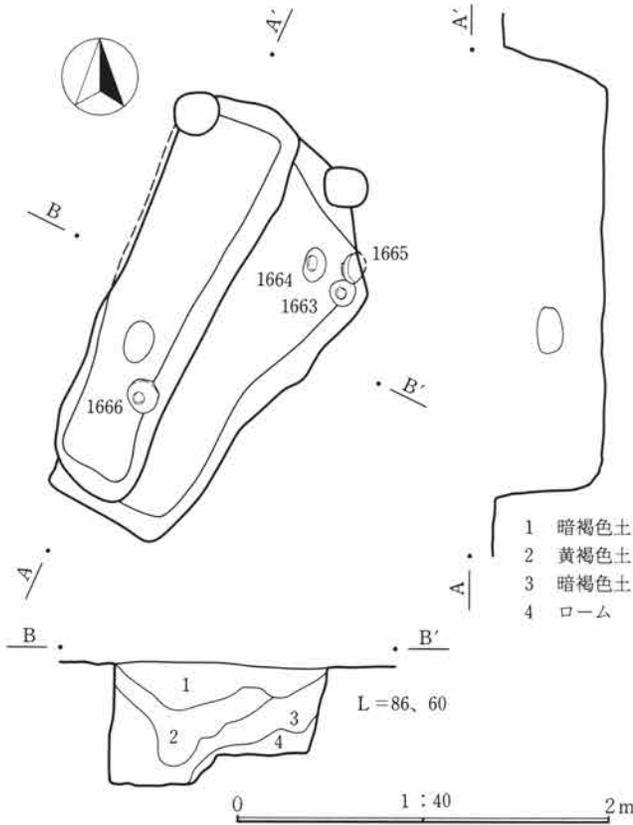
本土塚は、3号古墳後円部南側斜面で確認された。長軸258cm、短軸90cm、深さ94cmの長方形で、東辺中央北寄りに奥行40cm、間口68cmの台形状の横穴が付き、東南隅上面に半円状の掘り込みがある。掘り方の形状はしっかりしており、方位は長軸方向でN-1°-Eである。壁面は四辺とも垂直に近く、一部は内傾している。底面は平坦な堀方を持ち、ロームを主体とする褐色土で貼床している上に、大小の河原石約40個を上面のレベルを揃えて一面に敷いている。覆土は貼床を加えて3枚に分けられ、1層はローム粒、小石を含む黒色土、2層は黒色土と褐色土の混土、3層はロームを主体とする褐色土の貼床である。底面の石敷

とは間層において1、2層中には多量の河原石が折り重なった状態で見られる。東辺の横穴状の覆土は様相を異にし、ロームブロックを主とする明褐色土でややしまりが無い。確認面から覆土中位までの河原石は、土塚上面を覆っていた石が半ば陥没したもので、底面の石敷は棺床に相当するものか。遺物は、横穴の奥まった位置で灰釉陶器碗、須恵器碗、耳皿の各1点が片隅に寄せつけた状態で出土している。須恵器碗の口唇部には油煙が付着し、灯明皿として使用か。これらとは別に覆土上位で河原石に混在した遺物としては、小型甕、灰釉陶器瓶、土師器碗各1点があり、遺物としての組み合わせである。土師器碗の体部には「甲」の墨書銘がある。

墓塚としては、四辺の壁と河原石の陥没の様子から土留め板乃至木棺を伴うものか。横穴は副葬品の施設で、遺構の時期としては10世紀前半で59号土塚に類例が求められる。(女屋)



第417図 7区113号土壇遺物図



第418図 7区59号土壇遺構図

7区59号土壇(第418・419図、  
第138表、図版171)

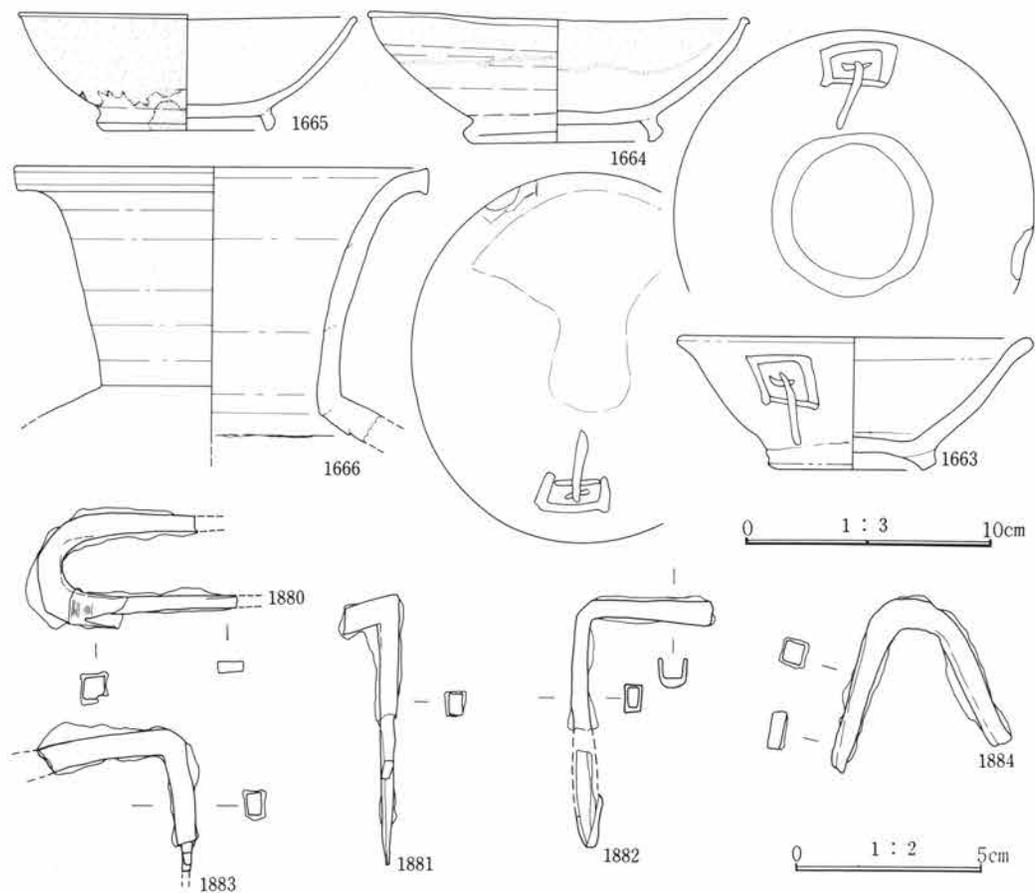
本土壇は、3号古墳周堀外縁付近の基本土層第5層上面で確認された。113号土壇からは北に22mの位置にあり、長軸方向上の方が東にずれることを除いて両者の様相は極めて似ている。また、馬具の出土した長方形土壇(61~63号)の3基が東北方向5m付近にあり、掘り方形状等の特徴が共通するが、一群のものか否かは不明である。また北には小石塚とした64号土壇もあり、古墳に囲まれた狭い範囲に形状や伴出遺物により3つに分けられる土壇が相接している。

平面形では2基の土壇が重複しているが、土層断面では同時埋没しており、遺物の出土状況と合せて埋葬部分（西側）、副葬用張出部（東側）とに分けて同一の遺構として扱う。

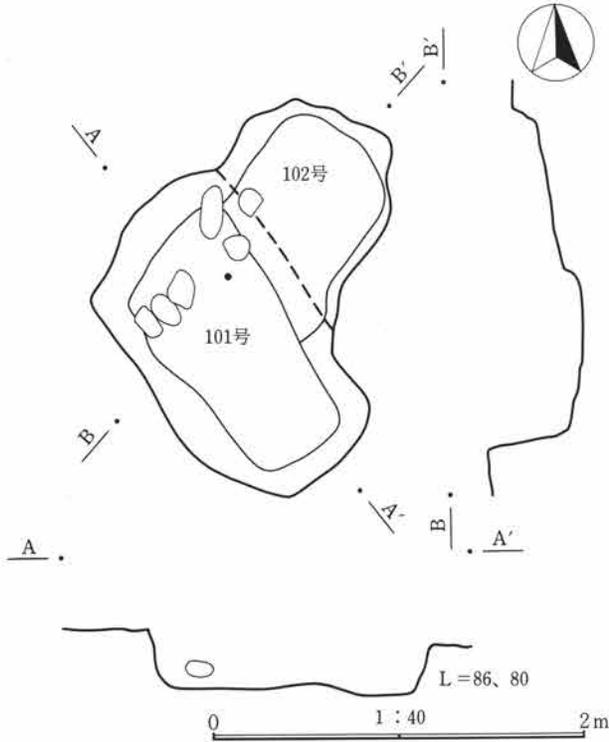
規模は西側で、長軸225cm、短軸50cm、深さ約60cm、長軸上の方位はN-25°-Eを示す。四辺の壁はロームを垂直に近く掘り込み、一部は内傾している。床面は詳細さを欠くが、平坦で東側より約10cm深い。東側は一部に掘りすぎ部分もあるが、113号と異なり長軸方向全体で張り出す構造で、遺物が集中する箇所は横穴状で、床面上のロームブロックは上面の崩落したものか。

覆土は4枚あり、1層はローム粒、軽石を含む暗褐色土、2層はロームブロックの多い黄褐色土、3層はローム粒が多く、粘性に富む暗褐色土、4層はロームである。

遺物は、西側で覆土中位に頸部以下を人為的に打ち欠く瓶1点、河原石1点、出土箇所が明確でないが木質が付着し、L字形、U字形をした鉄釘4点がある。東側からは、床直で集中した状態で土師器碗1点、灰釉陶器碗2点がある。土師器碗は灯明として使用され、体部内外面に墨書「甲」を持つ。113号の例とは異筆だが、同一文字という点で何か符号するものか。遺構の時期は出土遺物の特徴から10世紀前半である。 (女屋)



第419図 7区59号土壇遺物図



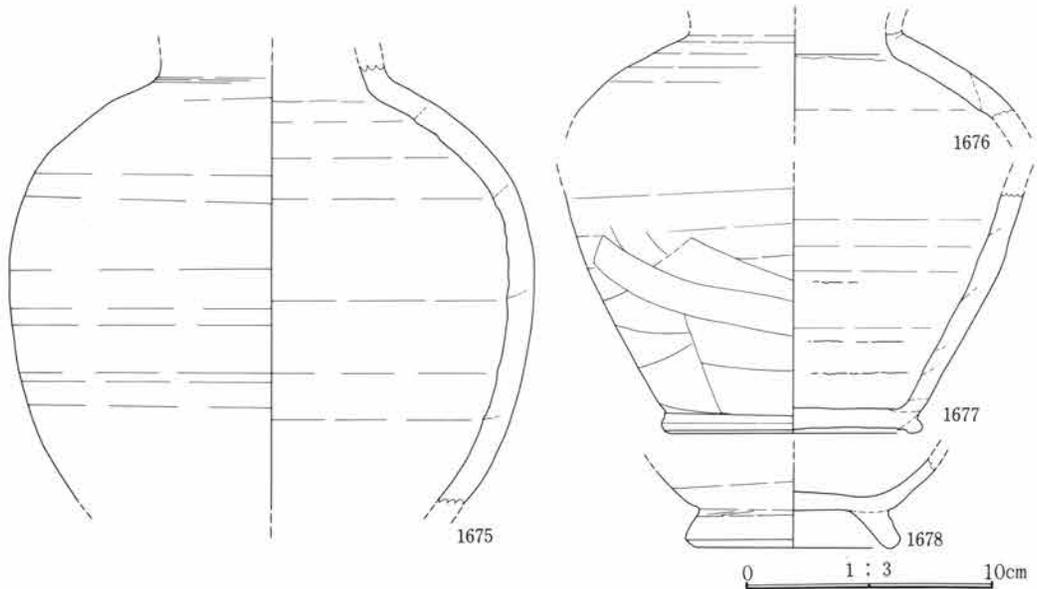
第420図 7区101号、102号土坑遺構図

位はN-36°-Eである。底面は西方向で深くなるが、101号とは10cmの段差を持つ。底面に密着して河原石が4個ある。明確な伴出遺物はない。両土坑の時期は10世紀前半である。(女屋)

7区101号、102号土坑(第420・421図、第138表、図版171・172)

本土坑は、3、4号古墳周堀が重複する境界付近で確認された。上面は周堀確認のため削平してしまい、全体の形状も崩れている。

101号は長軸153cm、短軸90cm、深さ50cmの隅丸長方形である。方位は長軸上でN-19°-W、底面は平坦で密着して河原石2個が並列している。両壁は崩れているため、少し開いているが旧状は垂直に近いものか。覆土はローム粒を多く含む暗褐色土の単純層で、よく締っている。遺物は底面直上で須恵器瓶があり、覆土中から須恵器瓶、高台付碗がある。102号は長軸推定160cm、短軸90cm、深さ30cmの隅丸長方形で、方位は



第421図 7区101号、102号土坑遺物図

第138表 7区113、59、101、102号土坑出土遺物観察表 (第417・419・421図、図版 170・171)

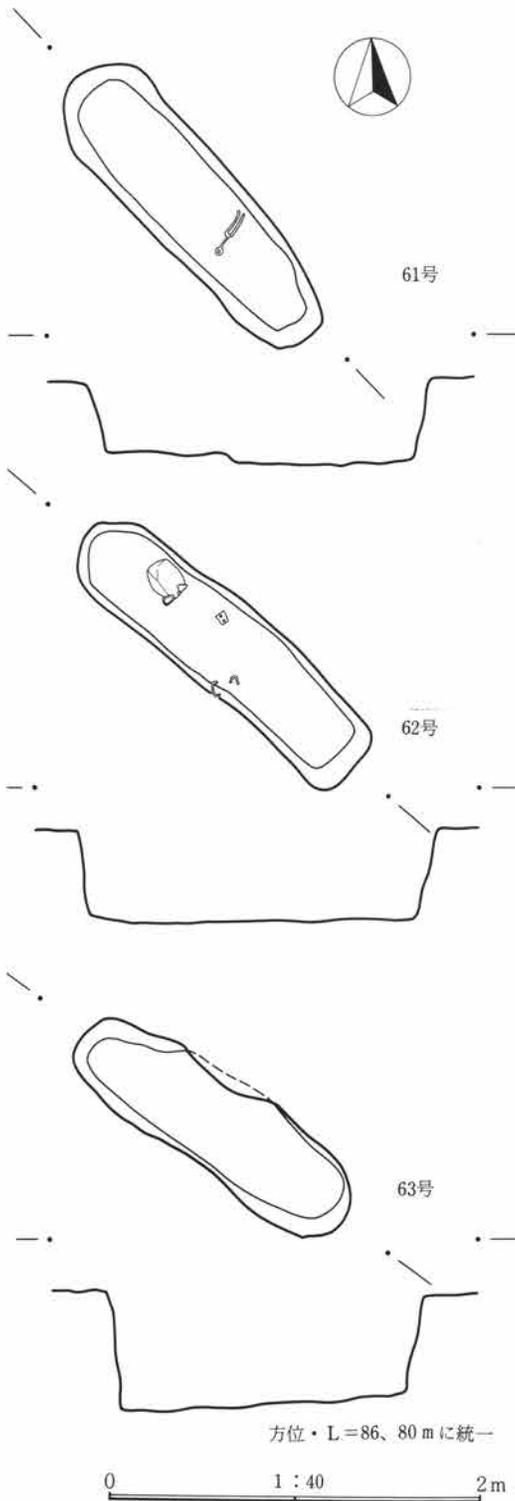
番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
1667 7区113号土坑	甕 土師器	口-[11.5]、底-6.4、高-12.9 $\circ \frac{2}{3}$	砂粒、石粒を含む。酸化、軟質。にぶい黄橙色	平底。体上部で張りをもち、頸部でややしまり、口縁部、わずかに外反する。底部、砂床。体部、ヘラケズリ調整。器内、厚手	
1668	埴 須恵器	口-13.9、底-7.0、高-4.5 $\circ$ 完存	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	体中部で、張りをもって、内湾し、ひろがる。口縁部、外反し、端部、肥厚して、丸味をもつ。底部、貼付高台、断面、不整形、不均質。粗雑	口縁部一部分に油煙状炭化物付着、及び内面リング状にスス付着——灯明用。重ね焼痕あり
1669	埴 須恵器	口-[14.2]、底-[7.1]、高-4.8 $\circ \frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	体中部で、張りをもって内湾し、口縁部、外反する。口縁端部、丸味をもつ。底部、回転糸切り、貼付高台。断面、端部丸く外行する台形	体部内側に墨書あり。「甲」字。重ね焼き痕あり
1670	埴 灰釉陶器	口-15.7、底-6.5、高-4.9 $\circ$ 完存	砂粒含むが細密。還元、硬質。灰白色、釉—浅黄へにぶい黄橙色	体中部で、大きく張りをもって内湾し、口縁部、たちあがって、端部外側へつまみ出す。底部へ体下部、回転ヘラケズリ調整、貼付高台。断面、外側に、丸い稜をもつ三日月状。釉、つけがけ	重ね焼き痕あり
1671	耳 須恵器	口-9.0、底-5.7、高-3.0 $\circ$ 完存	砂粒、石粒を含む。粗。還元、硬質。灰色	体部、短かく、ほぼ水平にひらき、両端、つまみあげて折りまげ。端部、丸味あり。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、端部の丸い台形	
1672	瓶 灰釉陶器	頸-[6.3]、胴-[17.2]、高-(7.7) $\circ \frac{1}{4}$	砂粒、黒色砂粒多く含む。気泡多し。還元、硬質。灰白色、釉—灰緑色	体上部で、丸く、張りをもち、頸部しまる。体部、ロクロナデ調整。頸部で接合。体外面、釉がかりあり	
1897	鉄製品	長-[7.8]、幅-0.6、厚-0.7、両端、折れ。長さ6.5cm程のところまで、木質付着、釘か		断面四角形で、中空。片端、細くなり、	
1663 7区59号土坑	埴 須恵器	口-14.4、底-6.8、高-5.3 $\circ$ 完存	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	体部、内湾してひろがり、口縁部外反し、口縁端部、丸味をもつ。底部回転糸切り、貼付高台、断面外行する台形	体部、内外、墨書あり、「甲」字。口縁部、一部欠けあり。口縁部油煙状炭化物付着——灯明用
1664	埴 灰釉陶器	口-15.4、底-7.2、高-5.2 $\circ$ 完存	砂粒を含むが、細密。還元、硬質。灰白色、釉—灰緑色	体部、内湾してひろがり、口縁部直下で、張りをもってたちあがる。口縁端部、丸く、外側に、つまみ出しあり。底部へ体下部、回転ヘラケズリ調整、貼付高台、断面三日月状	重ね焼き痕あり 釉—つけがけ

第6章 検出された遺構と遺物

1665 7区59号 土壇	碗 灰釉陶器	口—13.6、底—6.5、高—4.7○完存	石粒を含むが、細密。還元、硬質。灰白色、釉—灰緑色	体部、内湾し、口縁端部、丸味をもって、外側につまみ出す。底部～体下部、回転ヘラケズリ、貼付高台、断面、三日月状。釉、刷けがけ	重ね焼き痕あり
1666	瓶 須恵器	口—16.7、頸—[9.8]、高—(9.5)○口頸部のみ	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰白色	頸部、くびれてたちあがり、口縁部外反する。口縁端部、外縁帯をもつ。体部の上に、頸部を乗せる、接合方法。ロクロナデ調整。器肉、厚手	
1880	U字形鉄製品	長—(5.7)、幅—3.0、U字形を呈する。断面は、四角形で、幅—0.8、厚—0.6、端部、細く、扁平の断面となる			
1881	釘 鉄製品	長—(7.3)、幅—0.6、厚—0.6、断面、四角形で、片端は細く尖がる。片端L字形に、折れまがる。鋸状のものか。木質付着部分あり、長—2.5			
1882	釘 鉄製品	長—(3.6+2.6)、幅—0.8、厚—0.8、断面、四角形、中空の部分もあり、片端は細く尖がる。片端は、L字形に折りまげてあり、鋸状と思われる			
1883	釘 鉄製品	長—(4.0)、幅—0.6、厚—0.6、断面、四角形、L字形に折れまがる。片端は、細く尖がる。両端、折れあり			
1884	U字形鉄製品	長—(4.3)、幅—5.0、両端、ややひらきぎみのU字形を呈する。断面0.7×0.6の四角形で、端部、扁平となる。1880と同種か			
1675 7区101 号土壇	瓶	頸—9.1、胴—(21.2)、高—(17.6)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色	体上部で、丸く、張りをもち、頸部しまる。体部、ロクロナデ調整。器肉、厚手。長頸の瓶と思われる	
1676	瓶	頸—[8.6]、高—(3.5)○小片	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや軟質。灰白色	体上部で丸く、張りをもち、頸部、くびれる。体部、粘土積痕残り、ロクロナデ調整	
1677	瓶	底—10.5、高—(9.7)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を多く含む。酸化、やや軟質。にぶい橙色	高台付、瓶。体部、わずかに内湾してひろがる。体部、粘土積痕、残り、ヨコヘラナデ調整。体下部、ヨコヘラケズリ調整。底部、ヘラケズリ調整、貼付高台、断面、低い台形	1676と同一個体か
1678	碗 須恵器	底—8.0、高—(3.1)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を多く含む。還元、やや硬質。灰白色	体部、内湾してひろがる。底部、回転糸切り、貼付高台、ハの字にひろく、高足高台	

7区61号、62号、63号土壇（第422・423図、139表、図版176）

この3基の土壇は、形状、掘り方、主軸方位をほぼ同じくし、7区6号、7号、12号住居跡に囲まれた狭い範囲に約3mずつの間隔を置いて2列に並んで確認された。うち2基からは、古墳時代の遺物と見られる馬具が出土し、数ある土壇の中でも特異なものと理解される。6区4号住居跡の床面下にも同様な長方形土壇があり、地点を離れても同様な例が存在する可能性がある。遺構の時期は、馬具は古墳時代後期だが重複関係等から平安時代に属す。（女屋）



第422図 7区61号、62号、63号土壇遺構図

### 7区61号土壇

本土壇は、6号住居跡西辺下で確認された。規模は長軸185cm、短軸56cm、深さ36cmの長方形で長軸上の方位はE-49°-Sを示す。壁は、四辺とも垂直に近く、底面は貼床を伴ったらしく中央付近で段差を持つ。覆土は、ローム粒を全体に多く含む暗褐色土で、ややしまりがない。遺物は、底面中央部付近に接して、馬具引手部分が単独で出土している。土器類の伴出はないが、重複する6号住居跡より古く、覆土の特徴では平安時代である。

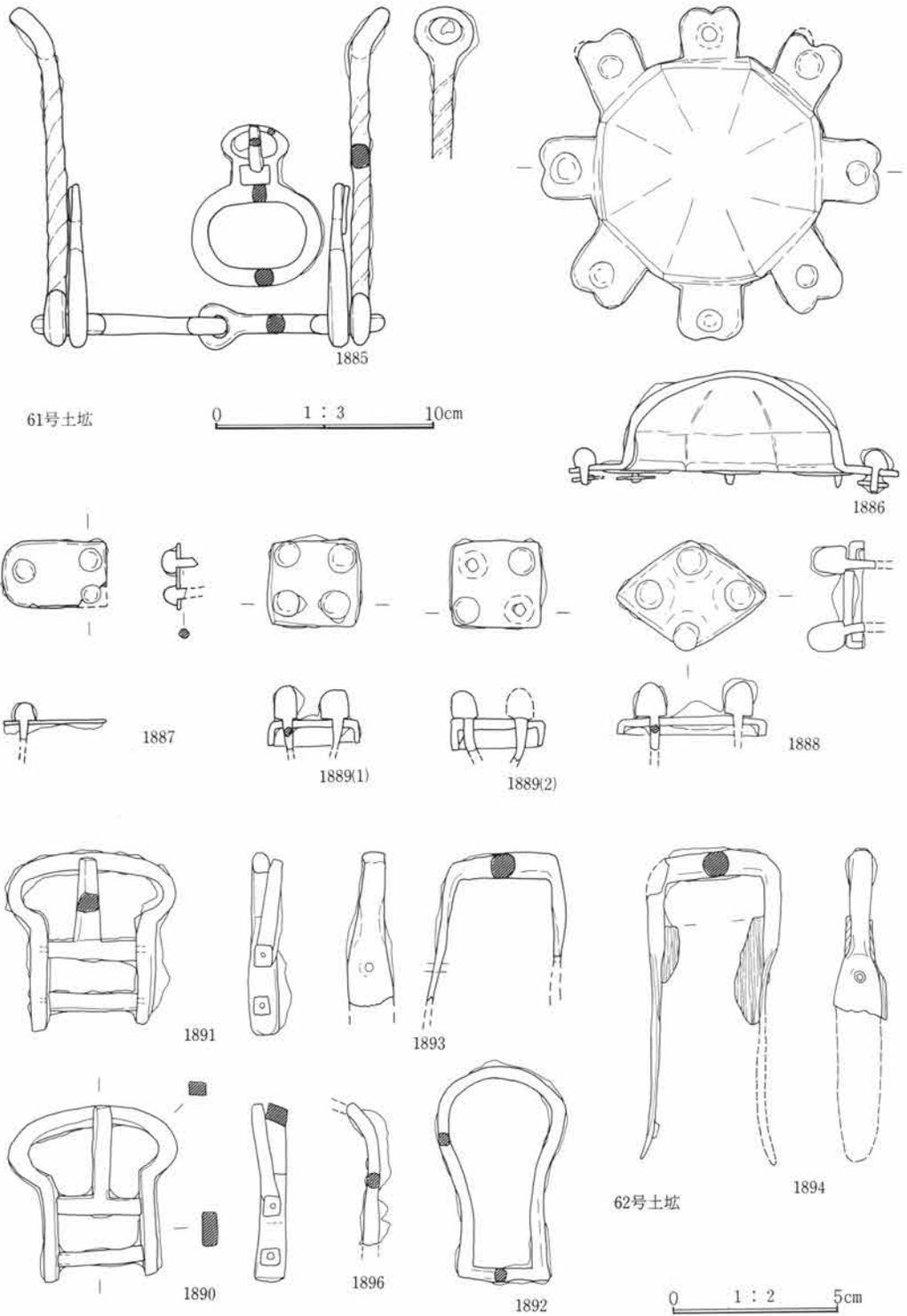
### 7区62号土壇

本土壇は、13号掘立柱建物跡より新しい。規模は長軸189cm、短軸47cm、深さ38cmの長方形で長軸上の方位はE-39°-Sを示す。壁は四辺とも垂直に近く、底面は平坦である。覆土は、ロームブロックを含む暗褐色土で、底面中央にローム塊がある。遺物は、覆土中位から底面に接した状態で、馬具の轡、鏡、金箔付の鉄地金の雲珠1点、帯金具4点がある。轡を除いてバラバラの状態だが、旧状は鏡に木質部分が残存していたこともあり、不揃いながら一式として埋納したか。

### 7区63号土壇

本土壇は、61、62号とは平行関係にある。長軸178cm、短軸48cm、深さ43cmの長方形で方位はE-37°-Sを示す。掘り方、覆土の特徴は61、62号と同様だが、鉄製品の出土がない。明確な伴出遺物がないものの、62号等とは、時期、性格を同じくする一群のものである。

第6章 検出された遺構と遺物



第423図 7区61号、62号土塚遺物図

第139表 7区61号、62号土坑出土遺物観察表

(第423図、図版176)

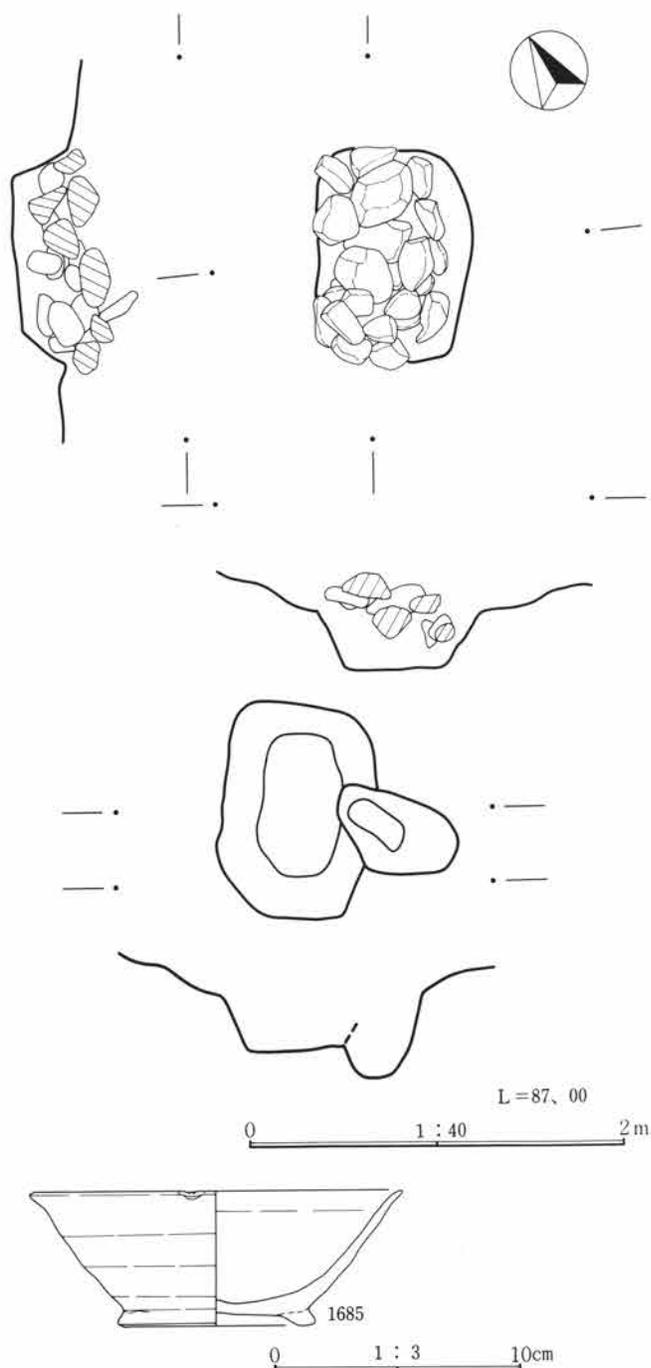
番号	種類	形態及び形状について	備考
1885 7区61号 土坑	轡 <sup>くつね</sup> 鉄製馬具	轡具付、素環鏡板の轡。銜は、二連式。鏡板、引手、伴に銜先の環で結ばれる。引手は、鏡板の外側にとりつき、左振りのついた一本引手である。引手壺、外側に34°ひらく。鏡板は、楕円の素環、上端に窓付の方形、及び、楕円鉸具のある立間が付く。各、断面は、ほぼ四角形、鏡板、立間部は、円形である	
1886 7区62号 土坑	雲珠 <sup>うんじゆ</sup> 鉄製馬具	鉄地金銅張り、伏鉢部中位で、稜をもって、丸く頂部に至る。伏鉢部の全体形状は、八稜をもち、頂部へ至る。下部より、地金を折りまげて、8脚を作り出し、両側部は、鋭く、直線的に仕上げ、端部は、花卉状に丸味をもたせている。脚部先端に、丸い鋸を打ちこみ、裏側に、止め座金を付けて先端をつぶしている	
1887	飾金具 鉄製馬具	鉄地金銅張り、長方形を呈し、片端、丸く面取り、鋸、3本、打ち込み。断面、端部を面取りした方形	
1888	飾金具 鉄製馬具	鉄地金銅張り、菱形を呈し、断面、コの字形、4本の鋸をもつ。厚手の作り	
1889	飾金具 鉄製馬具	鉄地金銅張り、ほぼ正方形で、断面、コの字形にたちあがる。4本の鋸をもち、厚手の作り	同種、2点あり
1890	鉸具 鉄製馬具	鉄製。基部は、垂直で頂部、扁平な楕円のカーブをもつ。枠が単一の地金で基部に2本の横棒をとりつけ、上の1本に刺金をからめる。断面、方形	
1891	鉸具 鉄製馬具	鉄製。1890と同形、同種。計測上も同数値である	
1892	鉸具 鉄製馬具	鉄製。枠のみ残存。軍配形で、単一地金。断面は、扁平な、楕円形である	
1893	コの字状 鉄製馬具	鉄製。中央部、断面円形で、両側部、扁平で板状となり、側部内側に木質付着し、外側からの鋸穴がみとめられる。鍔 <sup>みづお</sup> の部分か	
1894	コの字状 鉄製馬具	鉄製。1893と同形、同種。片側部、先端まで残存。内側に木質付着し、側部外側より、鋸穴2～3個みとめられる。鍔の部分か	
1896	鉸具 鉄製馬具	鉄製。枠の一部分のみ残存。軍配形となつと思われる。断面、円形。1892と同形、同種	

## 7区64号土坑 (第424図、図版172・174)

この土坑は、2号古墳東側周堀内で確認された小石塚である。当初、2号古墳に伴う主体部の一つかとも考えたが、古墳の葺石を側石等に用いている可能性があること、重複する13号掘立柱建物跡より新しいことの点から、周辺にある長方形土坑と同じ平安時代の遺構として扱う。

平面形は、長軸110cm、短軸70cm、周堀の底面から更に約40cm掘り下げた長方形土坑を堀方に持つ。長軸方向上の方位は、N-33°-Eである。壁面は緩傾斜で、底面はほぼ平坦である。

側石及び蓋石は、一部を欠くが良好な状態で残存していた。割石を一部に含むが、殆ど河原石の円礫で、調整された痕跡はなく、角閃石安山岩が1点ある。大きさは、側石で20～25cm、蓋石で20～35cmで厚い。側石は左右4石、小口側2石を上面にめぐらし、南辺小口壁面には1石が



黒色土を用いて貼付されていた。蓋石は北半分で大きめの石を平に用いているが、南は小ぶりの石を集石状に山盛りにしている。内法寸法は、長軸80cm、短軸約40cmで深さは約30cmか。主に上面に石を用いて、下半部は堀方に近い状態で使用したものか。覆土は、ローム粒を全体に多く含む黒褐色土で、しまりが無い。明確な伴出遺物はない。遺構の時期は、重複関係から平安時代とされるが、2号古墳の崩落した葺石よりは下面にある。

1685は、須恵器高台付碗一口径〔15.0cm〕、器高5.4cm、底径7.4cmで、器壁薄手、体部、ゆるやかに内湾し、口唇部、ツマミナデによる外反を示す。体部内外、ロクロ調整、底部、回転糸切り（右）後、付高台で、高台断面、外側へはり出しぎみの台形である。胎土は、白色石粒を多く含み、還元焰焼成で、軟質、灰褐色を呈する。時期は、9世紀末～10世紀初頭と思われる。

（女屋）

第424図 7区64号土塚遺構、遺物図

## (4) 中・近世その他

## 1 土 壇 (第425～447図、第140・141表)

土壇は、各時代に帰属できるもの、整理時に不明のもの、近、現代を除いて一括報告する。3区から8区に分布し、一部は群在する。時期は、覆土中に浅間山B軽石を攪拌状態で含むものを上限、同A軽石を純層乃至攪拌状態のものを下限とした。遺物は混入状態が殆どで、特徴的なものについては第447図に示した。覆土の特徴、形状、方位から下記4分類をした。

- 1 長方形、東北方向に方位をとり、B軽石を攪拌状態で含むもの。群在する傾向があり、7区113号等を類例とすると墓壇の可能性もある。例 6区23号、46号
- 2 1のタイプを小型にし、東西の方位、B軽石を攪拌で含むもの。例 6区13号、24号
- 3 B軽石を攪拌状態で含むが、径1m前後の円形のもの。例 6区43号、7区100号
- 4 径1m前後の円形で、A軽石を純層、攪拌で含むもの。例 6区18号、19号

このほかに、分類外の不整形のものがある。7、8区では覆土の様子から縄文時代の土壇と思われるものが多い。(女屋)

第140表 土壇一覽表

(第425～447図)

番 号	形 状	方 位	規 模(cm)	遺 物	備 考	挿 図
3区1号	円 形		150 × 135 × 69			425図
2	長 方 形		132 × 209 × 34			〃
3	方 形		84 × 120 × 40	瓶		〃
5	〃		74 × 183 × 31			〃
6	〃		93 × 225 × 34			〃
7	長 方 形		103 × 115 × 25			〃
9	方 形		81 × 120 × 57			〃
4区1号	長 方 形	N-49°-E	221 × 80 × 18		8号住より新しい	429図
2	円 形		86 × (75) × 13		2号住より新しい	426図
3	〃		96 × 89 × 17			〃
4	〃		107 × 98 × 26		7号住より新しい	〃
5	〃		104 × 104 × 25		5号住より新しい	〃
7	〃		99 × 99 × 44		9号住より新しい	〃
9	不整円形		136 × 114 × 38			429図
10	円 形		59 × 46 × 35			426図
23	不整方形		125 × 86 × 30	砥石		430図
24	円 形		80 × 67 × 23			426図
25	〃		99 × 85 × 37			〃
27	長 方 形	N-19°-W	(250) × 170 × 41	鉢、蓋、鉄製品	21号住より新しい	429図
28	円 形		104 × 104 × 20			426図
29	楕 円 形		259 × 207 × 24			428図
40	〃		165 × 121 × 26			〃
43	〃		131 × 76 × 24			429図

第6章 検出された遺構と遺物

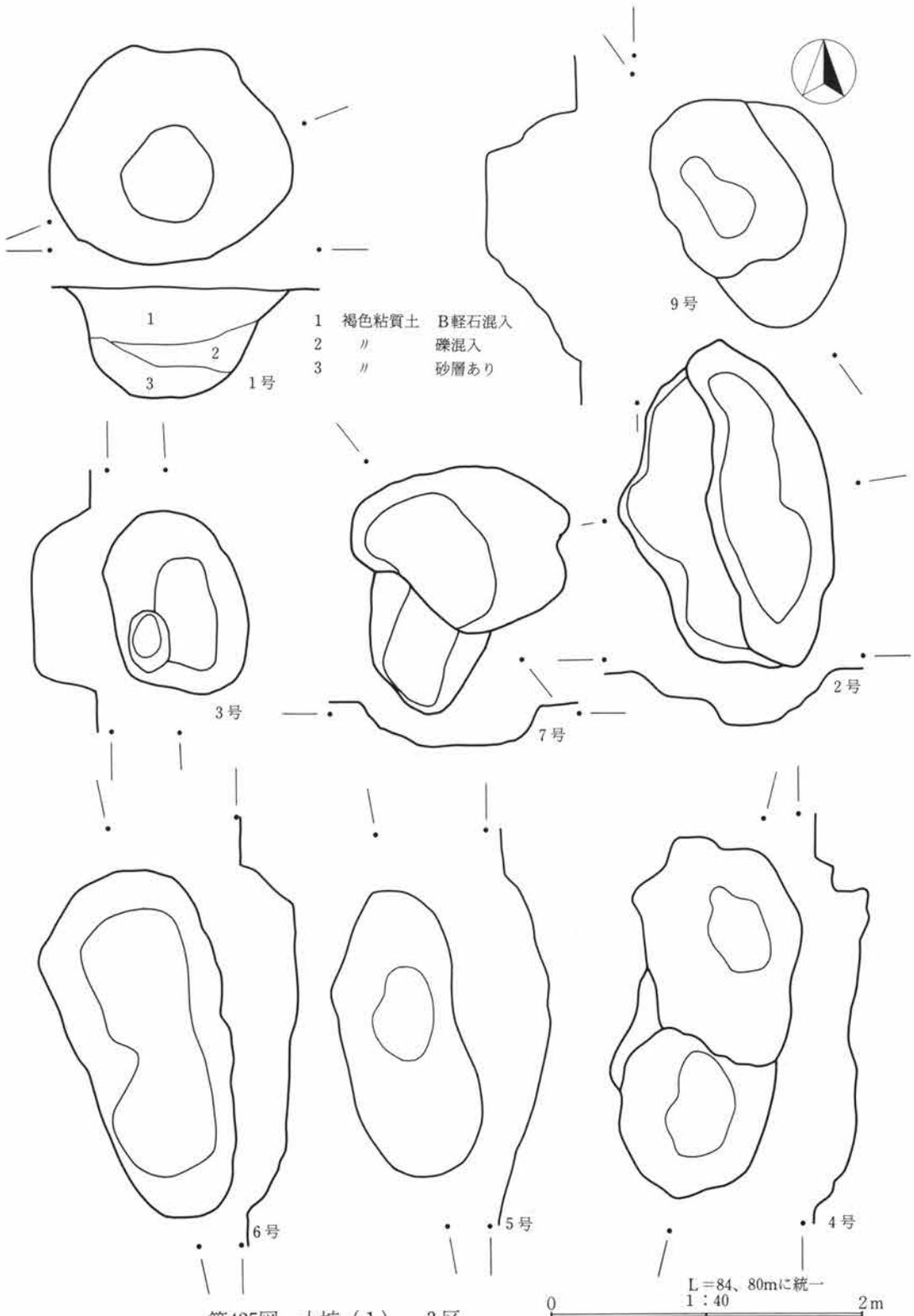
番 号	形 状	方 位	規 模(cm)	遺 物	備 考	挿 図
4区44号	楕円形		188 × 125 × 15			431図
45	〃		142 × 66 × 18			〃
46	〃		196 × 146 × 49			〃
5区47号	円形		87 × 81 × 27			427図
48	楕円形		135 × 100 × 21			〃
49	〃		102 × 69 × 32			〃
50	不整形		156 × 137 × 25			428図
51	楕円形		194 × 118 × 53			〃
52	〃		98 × 81 × 12			426図
53	円形		68 × 61 × 10			〃
54	〃		108 × 108 × 30			〃
55	〃		99 × 88 × 32			427図
56	〃		125 × 125 × 22	灰釉、羽釜、高台埴		〃
58	不整形		127 × 86 × 32			430図
59	楕円形		127 × 92 × 14			427図
61	円形		84 × 82 × 20			〃
4区64号	〃		115 × 115 × 17			〃
65	〃		(91) × (49) × (44)	石田川台付甕、須恵埴		〃
66	楕円形		(116) × (70) × (52)	石田川台付甕、土師埴		430図
67	〃		(316) × 140 × 61		3基連続したものか	〃
68	〃		(107) × (87) × 25			〃
69	〃		(168) × 106 × 36			429図
70	〃		206 × 129 × 43			430図
71	円形		86 × 86 × 32			427図
72	楕円形		(90) × (78) × 33			430図
73	不整形		200 × 198 × 45			428図
74	円形		69 × 69 × 28		65号住より新しい	427図
5区76号	〃		90 × 81 × 20			〃
77	〃		103 × 103 × 17			428図
80	不整形		170 × 82 × 38	埴(墨書)	小ビット2基あり	
82	方形		80 × (79) × 17		75号住より新しい	428図
1	不整形		175 × 135 × (45)		1号住より新しい	431図
2	不整形		(109) × (70) × 30		〃	〃
4	〃		175 × 180 × 100		10号住より新しい	〃
6区1号	円形		106 × 98 × 13			436図
2	長方形	N-45°-W	248 × 104 × 18			435図
3	円形		90 × 90 × 13			436図
4	〃		102 × 102 × 16			〃
5	〃		92 × 92 × 8			〃
6	楕円形		(145) × 96 × 6			438図
7	方形		96 × 85 × 30			437図
9	円形		100 × 100 × 16		12号住より新しい	436図
10	〃		115 × 115 × 27		〃	〃
11	〃		110 × 110 × 25			437図
13	長方形	N-36°-E	220 × 80 × 64		6区2号溝より新しい	434図
14	円形		108 × 99 × 28			436図
15	〃		112 × 100 × 22			〃
16	楕円形		179 × 104 × 63	縄文土器、玉未成品		435図
17	円形		80 × 70 × 22			437図
18	〃		120 × 118 × 31	鉄鎌1点	浅間山A軽石で人為埋没	438図
19	〃		145 × 142 × 20		中に円形のかたい面あり	〃
20	〃		130 × 128 × 20	陶磁器		437図

## 2 14地区の調査(中・近世その他)

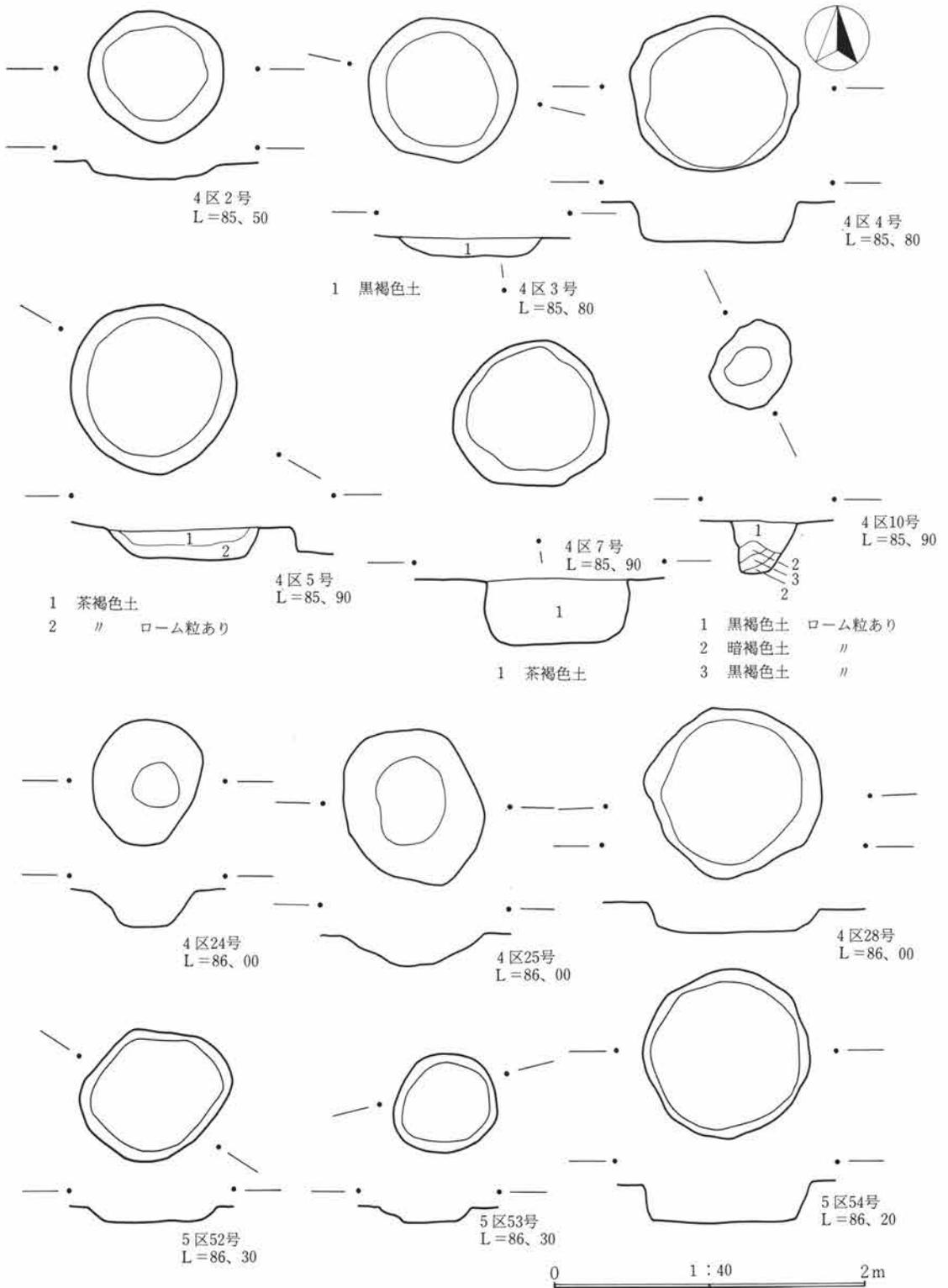
番 号	形 状	方 位	規 模(cm)	遺 物	備 考	挿 図
6区22号	長方形	N-31°-E	154 × 121 × 24	玉未成品	1号溝より新しい	434図
23	〃	N-43°-E	404 × 126 × 58	〃	底面にピットあり	432図
24	〃	N-39°-E	220 × 84 × 26		1号溝より新しい	434図
40	円形		75 × 53 × 21			436図
41	〃		90 × 90 × 10			437図
42	不整形		(45) × (175) × (20)			438図
43	円形		105 × 103 × 29			436図
44	長方形	N-49°-E	(193) × 88 × 27			433図
45	円形		86 × (49) × 40			438図
46	長方形	N-41°-E	366 × 127 × 54		6区10、20号住より新	432図
47	〃	N-43°-E	(232) × 102 × 38		46号より古い	433図
48	方形		113 × 88 × 22			435図
49	〃		(103) × 59 × 34		50号より新しい	434図
50	〃		96 × 80 × 27			438図
51	円形		102 × 83 × 20			436図
53	長方形	N-46°-W	125 × 63 × 15			434図
54	〃	N-47°-W	(100) × 60 × 15			〃
55	〃	N-44°-W	(216) × (115) × 43		1号溝、21号住より新	433図
56	〃	N-26°-W	105 × 65 × 26			435図
57	〃	N-24°-W	115 × 68 × 27		58号より新しい	〃
58	〃	N-54°-W	125 × 98 × 26			〃
59	〃	N-16°-W	142 × (66) × 55		11号溝より古い	〃
62	〃	N-50°-W	(107) × 85 × 86			434図
84	円形		108 × 106 × 46			437図
86	不整円形		(104) × 96 × 22			438図
87	長方形	N-69°-W	100 × 67 × 19			434図
88	円形か		(135) × (94) × 25		浅間山A軽石あり	438図
89	長方形	N-47°-W	81 × 63 × 27		6区6号溝より古い	435図
90	円形		137 × 126 × 25			437図
91	円形		185 × 179 × 40			〃
3号溝	長方形	N-50°-E	(379) × 68 × 26		6区2号溝より新しい	433図
5	〃	N-38°-E	(203) × 88 × 34			434図
7区1号	円形		115 × 94 × 37	縄文、羽釜、須恵甕		444図
2	長方形	N-41°-W	(180) × 107 × 36	羽釜、土師甕、高台埴		442図
3	円形		65 × 65 × 19	縄文		444図
4	〃		84 × 81 × 18	土師甕		〃
5	〃		70 × 71 × 19			〃
6	長方形	N-18°-E	180 × 115 × 20	縄文、羽釜、埴		441図
8	方形	N-30°-E	105 × 86 × 33			440図
9	長方形	N-74°-W	216 × 123 × 20			442図
10	〃		113 × 90 × 24			443図
11	〃	N-65°-W	219 × 116 × 33			442図
12	円形		93 × 75 × 19	円筒埴輪、須恵坏、鉢		444図
13	〃		104 × 101 × 37		14号より古い、礫あり	〃
14	〃		114 × (95) × 31			〃
15	長方形	N-27°-E	143 × 86 × 44			440図
16	円形		85 × 74 × 44			444図
17	〃		94 × 90 × 25			〃
19	〃		86 × 70 × 22			〃
20	長方形	N-27°-E	(119) × (54) × 37			440図
23	円形		115 × 102 × 21			444図
24	〃		81 × 60 × 31		礫あり	〃

第6章 検出された遺構と遺物

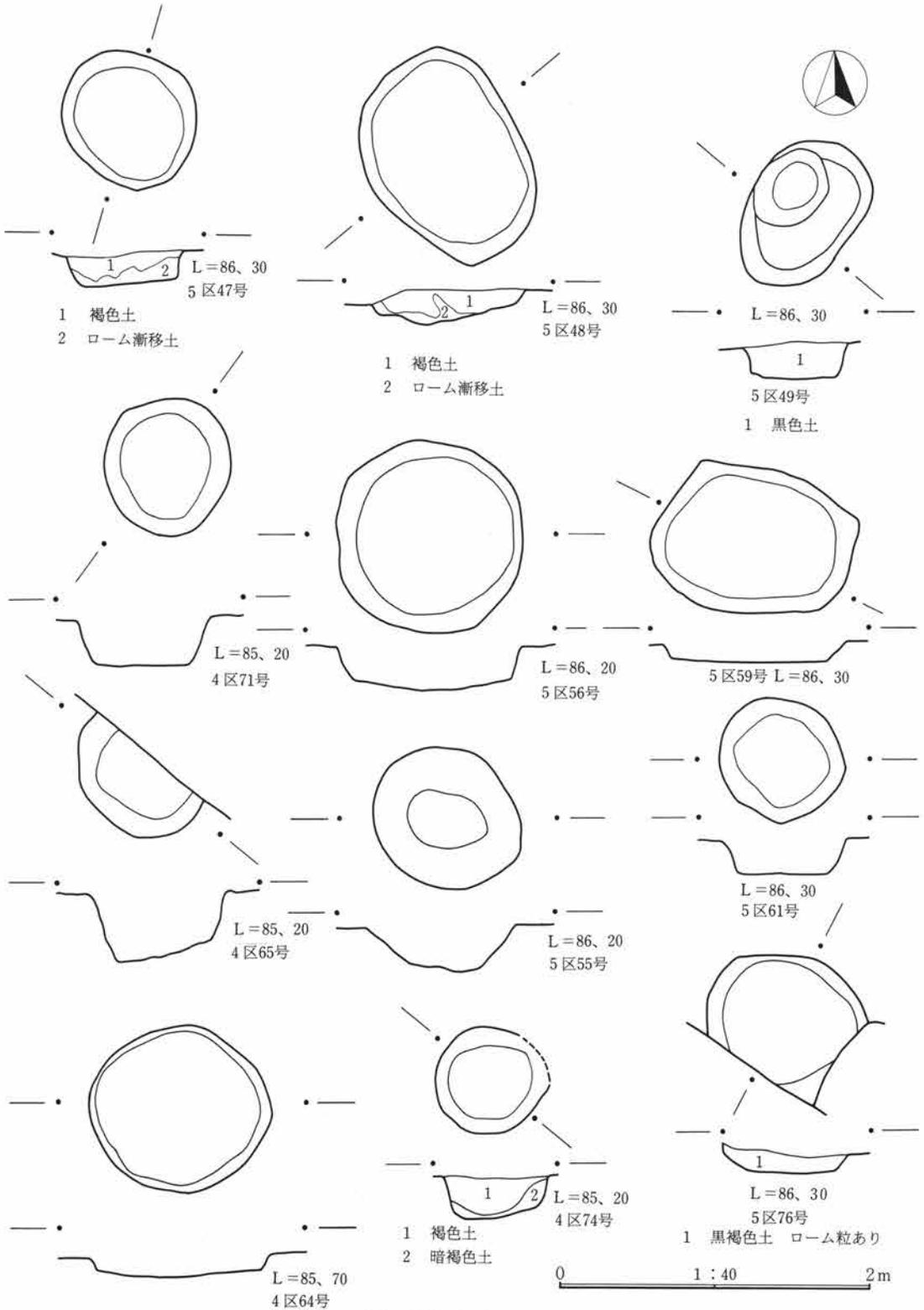
番 号	形 状	方 位	規 模(cm)	遺 物	備 考	挿 図
7区25号	円 形		69 × 65 × 22			445図
27	〃		85 × 88 × 12	円筒埴輪、砥石、縄文		〃
28	〃		115 × 105 × 19			〃
30	〃		140 × 123 × 105	土師甕	7区10号住より新しい	〃
31	長 方 形	N-59°-E	223 × 111 × 24		7区6号住より新しい	439図
32	方 形	N-64°-W	85 × 62 × 17	縄文、土師甕、須恵甕		432図
33	円 形		106 × 100 × 54	羽釜、土師甕、灰釉		445図
34	楕 円 形		(360) × (205) × 10		1号古墳より新しい	443図
35	方 形	N-47°-W	110 × 82 × 54		34号より新しい	432図
36	長 方 形	N-56°-E	200 × 74 × 34		37号より新しい	439図
37	円 形		98 × (85) × 17			445図
38	長 方 形	N-66°-W	54 × 44 × 8			443図
39	〃	N-23°-W	160 × 60 × 16		2号古墳上、40号より古	440図
40	〃	N-68°-E	125 × 65 × 19	土師埴	2号古墳上	〃
41	円 形		74 × 71 × 24			445図
42	〃		70 × 70 × 42		2号古墳上	〃
43	長 方 形	N-85°-W	80 × 49 × 12		〃	443図
44	〃	N-67°-E	175 × 75 × 11		〃	439図
45	〃	N-4°-W	233 × 95 × 6		〃	441図
46	〃	N-50°-E	192 × 94 × 24		〃	439図
47	〃	N-43°-W	134 × 58 × 18		〃	441図
48	〃	N-41°-E	106 × 54 × 12		〃	439図
49	〃	N-22°-E	(178) × 111 × 78		2号古墳上、53号より古	440図
50	〃	N-19°-E	253 × 110 × 13		2号古墳上	〃
51	〃	N-6°-W	105 × 76 × 18			441図
52	〃	N-5°-W	234 × (150) × 22	円筒埴輪、埴、玉未成品		〃
53	〃	N-48°-E	99 × 68 × 24		2号古墳上	440図
54	楕 円 形		(235) × (95) × 13		5号溝より古い	443図
66	円 形		76 × 70 × 84	縄文	2号古墳周堀内	446図
67	円 形		80 × 77 × 72	縄文、円筒埴輪		〃
70	長 方 形	N-27°-W	180 × 120 × 28	縄文、土師甕		441図
81	〃	N-70°-W	170 × 52 × 60			442図
83	円 形		57 × 44 × 42	石田川甕、砥石		445図
84	長 方 形	N-51°-E	135 × 42 × 5			440図
85	円 形		100 × 83 × 13			445図
86	〃		64 × 59 × 30			〃
87	長 方 形	N-58°-E	217 × 83 × 33		88号より新しい	439図
88	〃	N-46°-E	(101) × 59 × 13			〃
93	〃	N-73°-E	151 × 66 × 19	縄文、円筒埴輪		443図
94	円 形		97 × 93 × 18			446図
99	〃		70 × 54 × 14			〃
100	〃		60 × 60 × 15	縄文、羽釜	7区48号住より新しい	〃
8区1号	方 形	N-15°-W	91 × 71 × 16	縄文、須恵甕	8区1号溝より古い	〃
3 a	長 方 形	N-49°-E	(245) × 96 × 30	縄文、土師甕、埴	3 b号、2号住より新	〃
3 b	〃	N-48°-E	(265) × 105 × 15	縄文、灰釉		〃
4	方 形	N-15°-E	109 × 94 × 26	縄文、土師甕	8区2号溝より古い	〃
5	〃	N-56°-W	136 × 96 × 45			〃
6	〃	N-29°-E	73 × 77 × 45	須恵甕	8区2号住より古い	〃
7	円 形		142 × 130 × 22	土師埴(墨書)		〃
8	長 方 形	N-79°-W	(105) × 100 × 45			〃
9	円 形		128 × 103 × 55	縄文		〃
8区10号	方 形	N-53°-E	87 × 62 × 12	〃		〃



第6章 検出された遺構と遺物

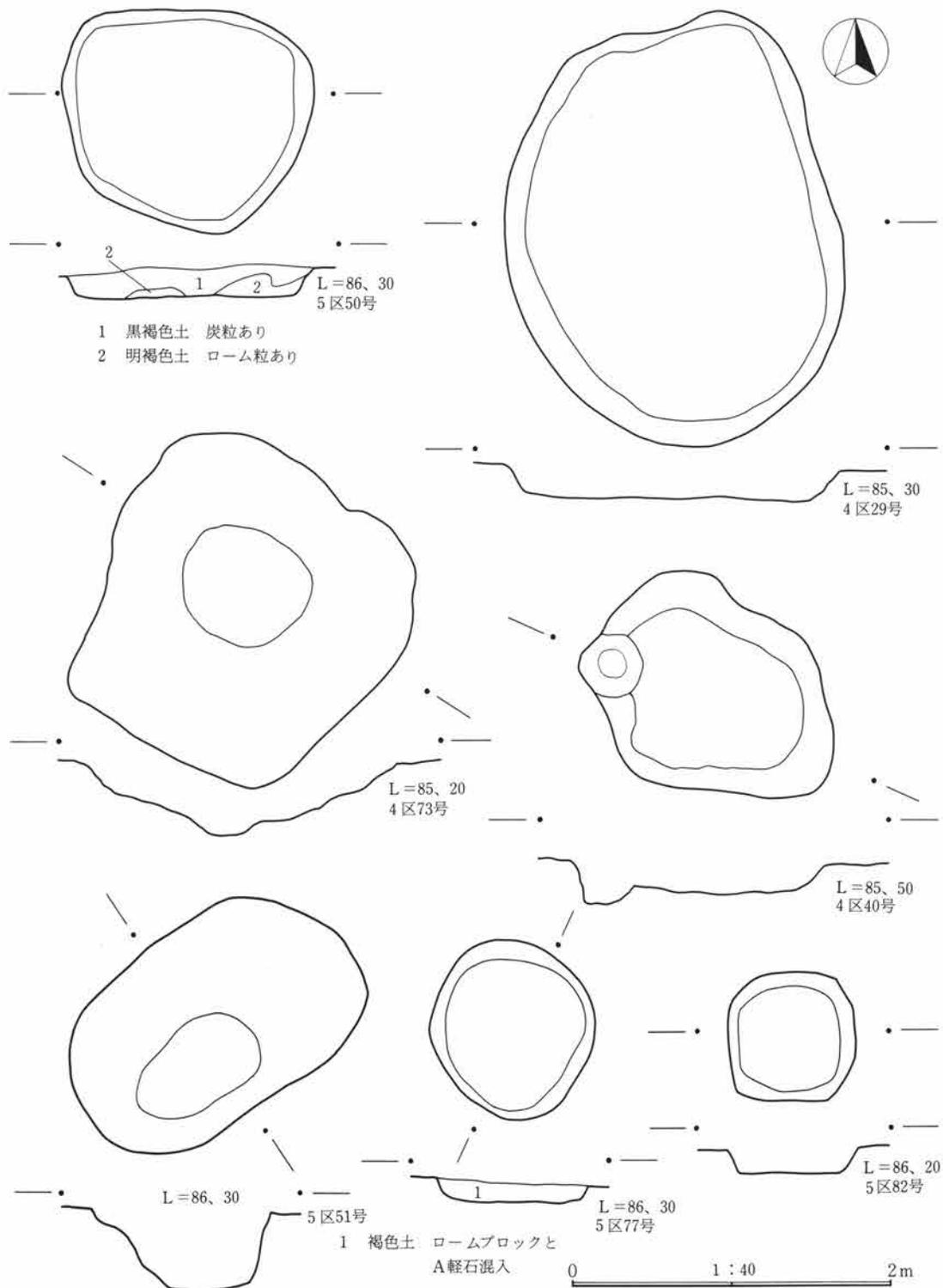


第426図 土坑(2) 4、5区(1)

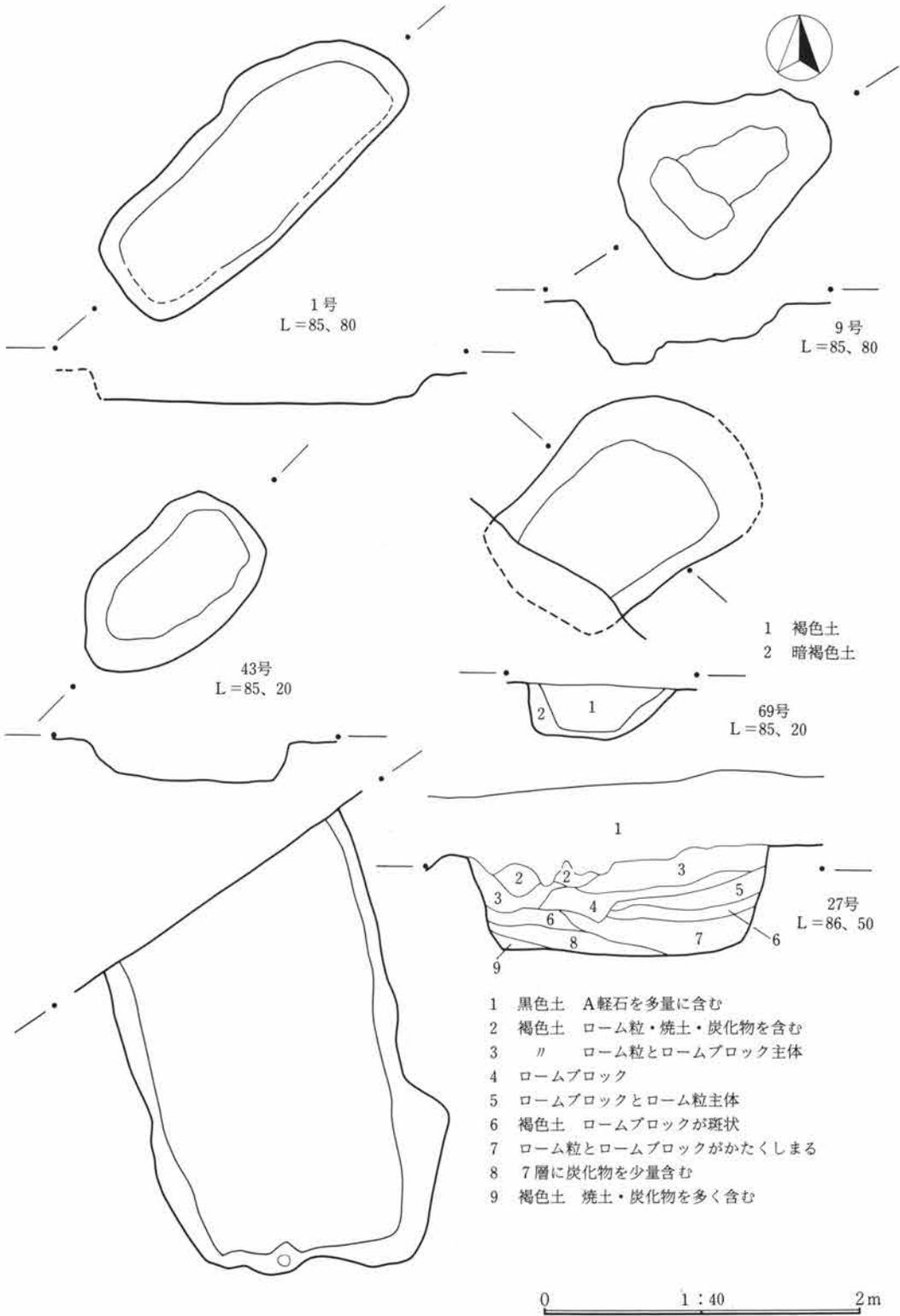


第427図 土坑 (3) 4、5区 (2)

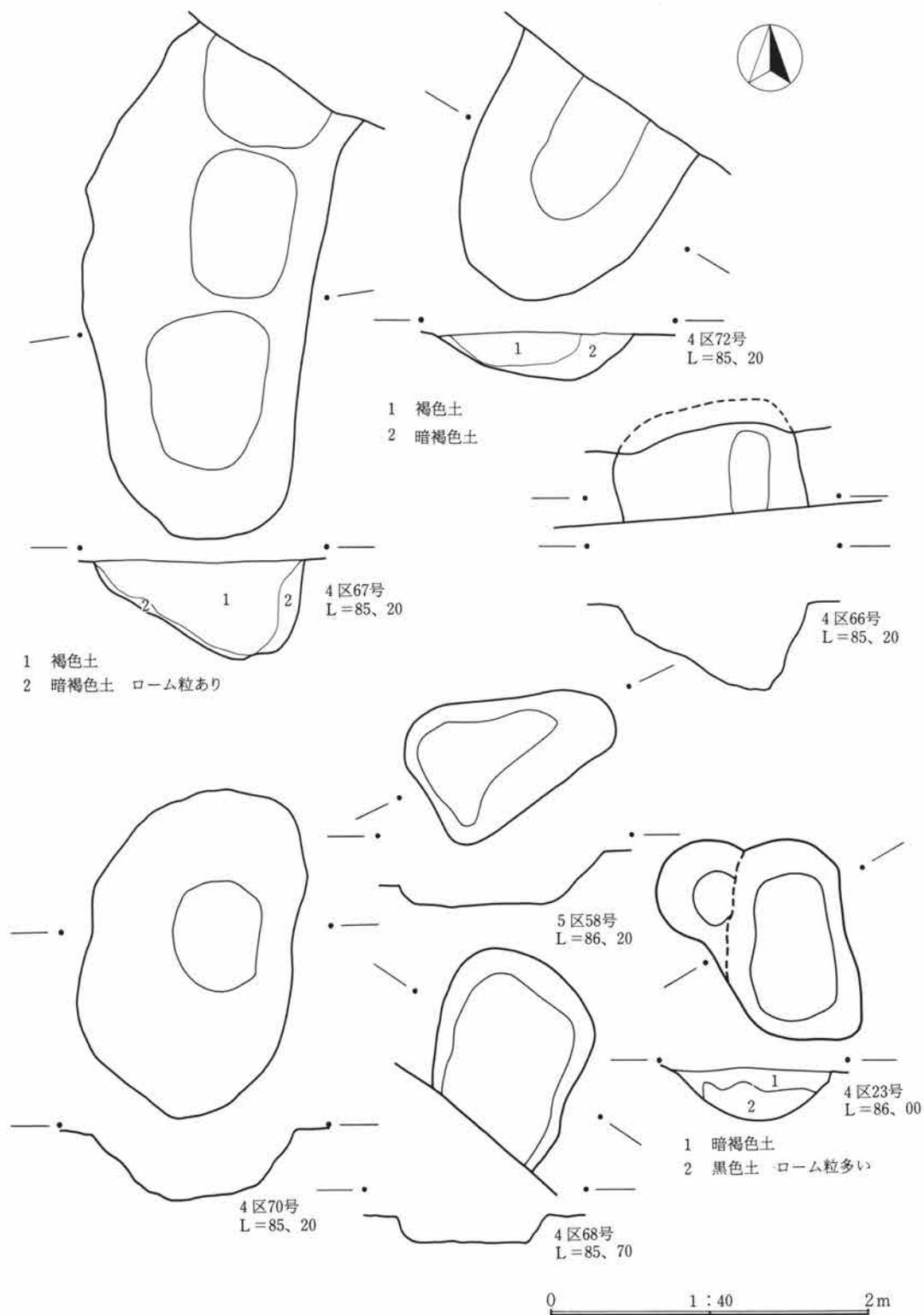
第6章 検出された遺構と遺物



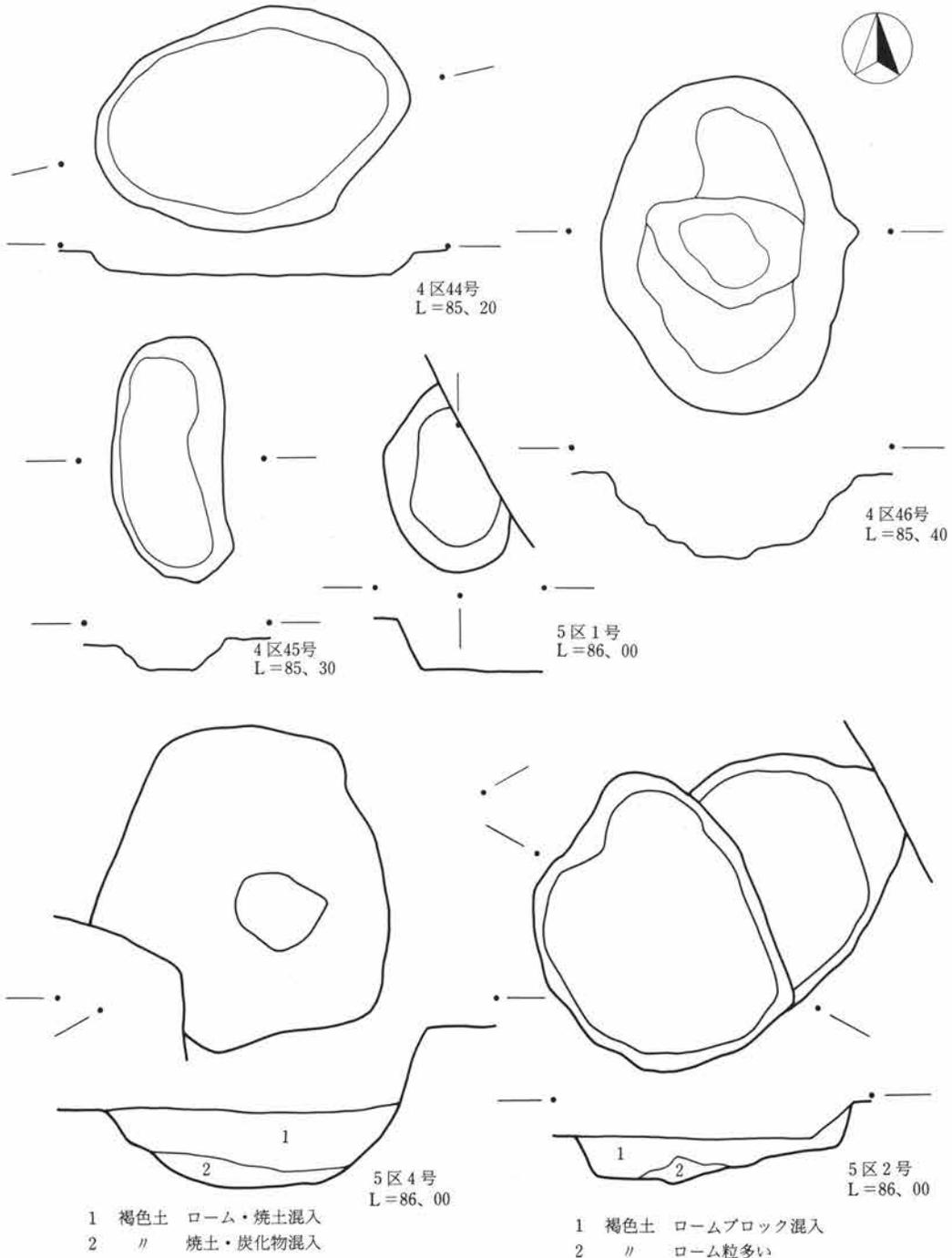
第428図 土坑(4) 4、5区(3)



第429図 土坑 (5) 4区

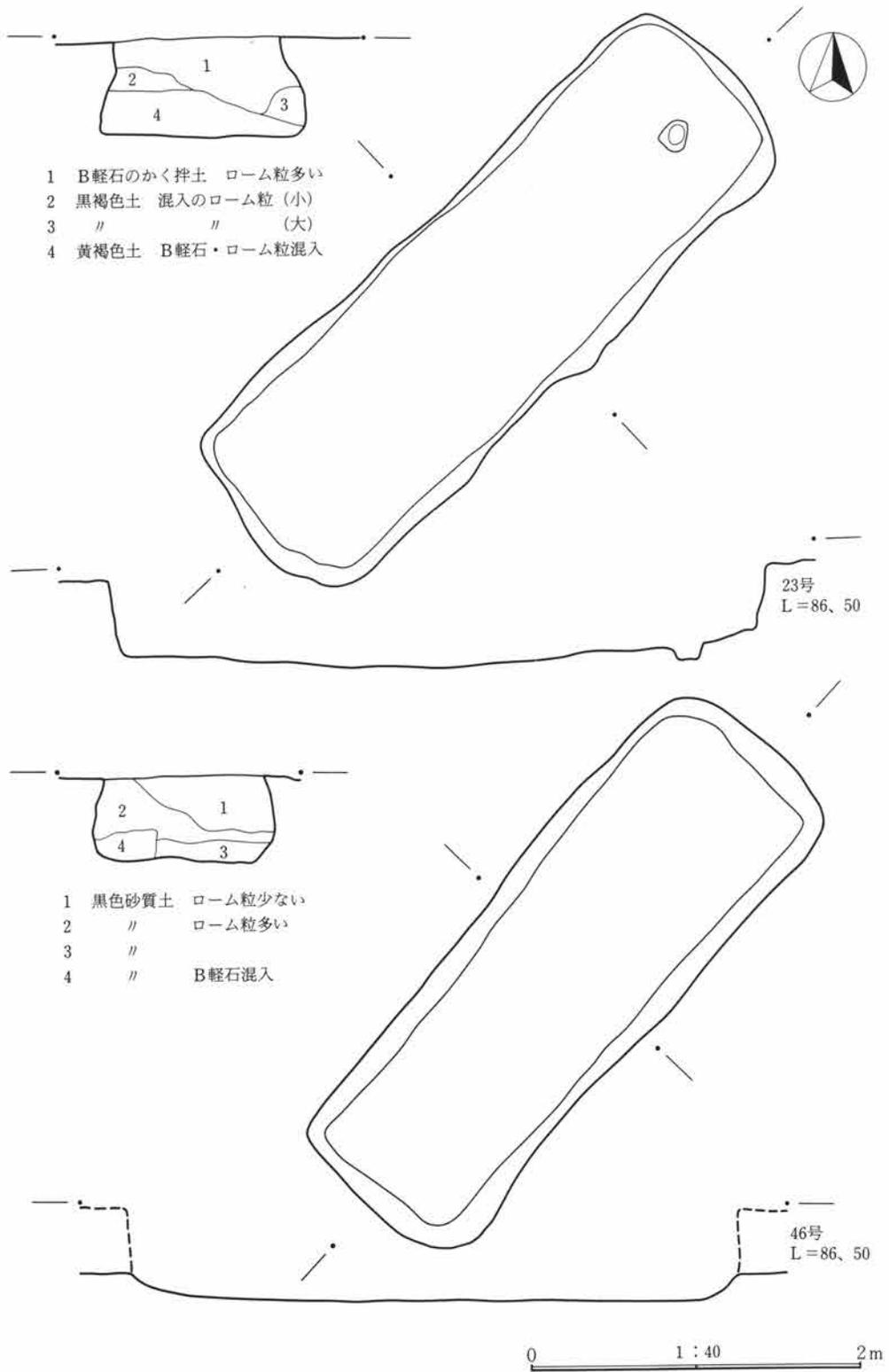


第430図 土坑(6) 4、5区(4)

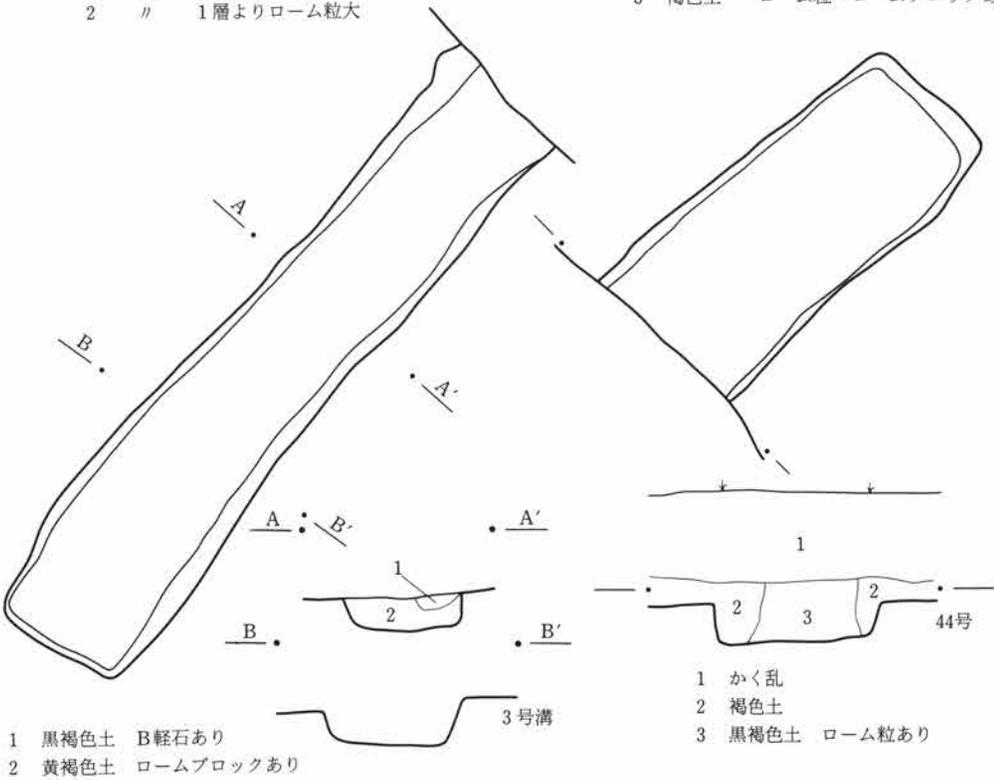
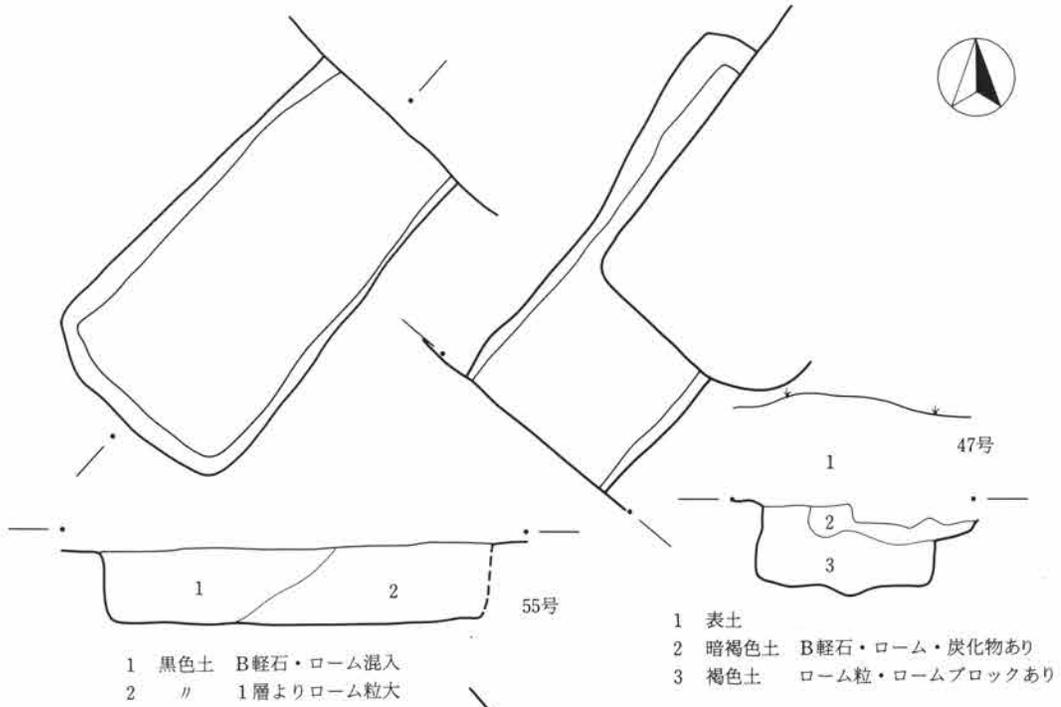


第431図 土塚 (7) 4、5区 (5)

第6章 検出された遺構と遺物



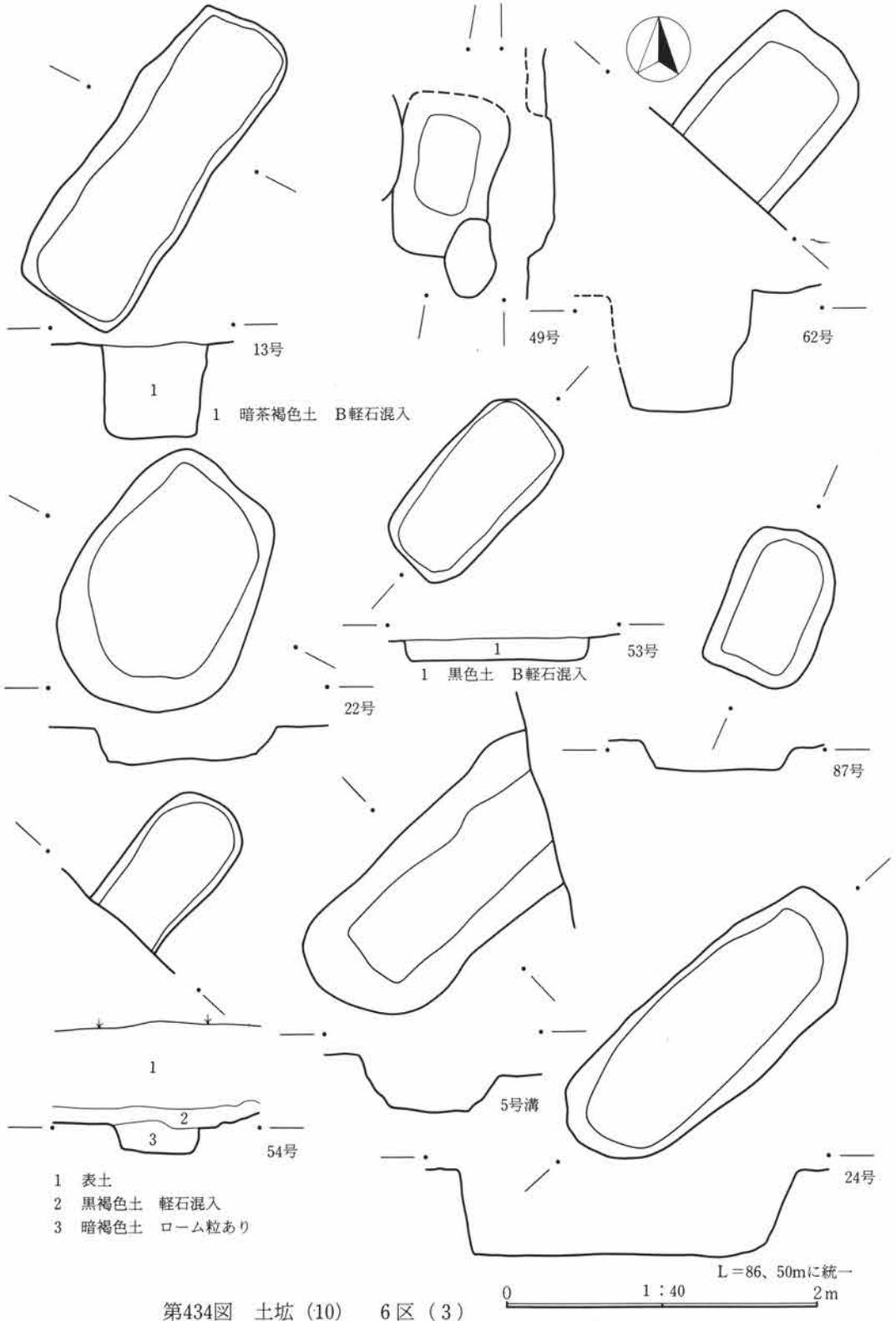
第432図 土坑(8) 6区(1)



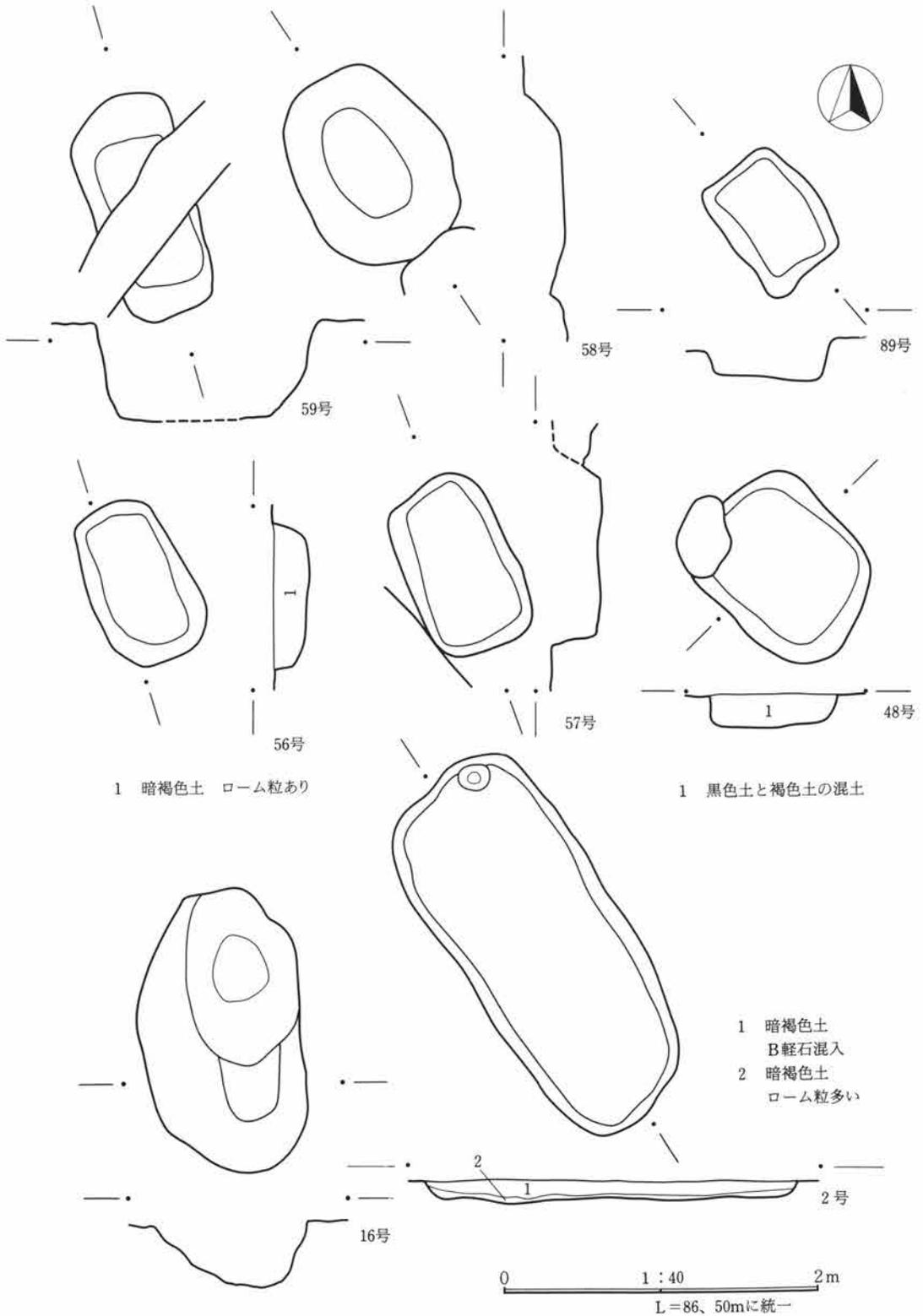
L=86、50mに統一

0 1:40 2m

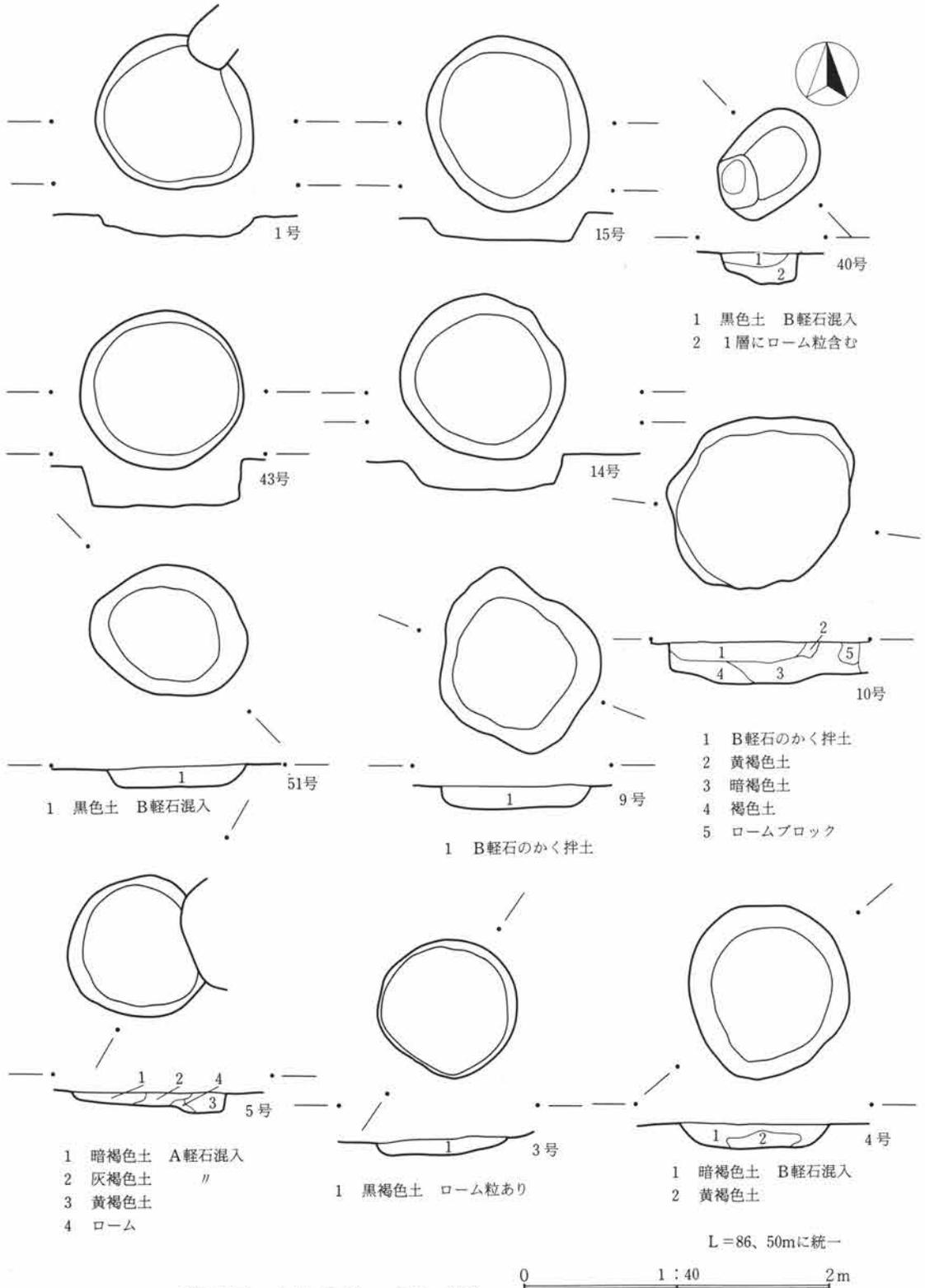
第433図 土壇（9） 6区（2）



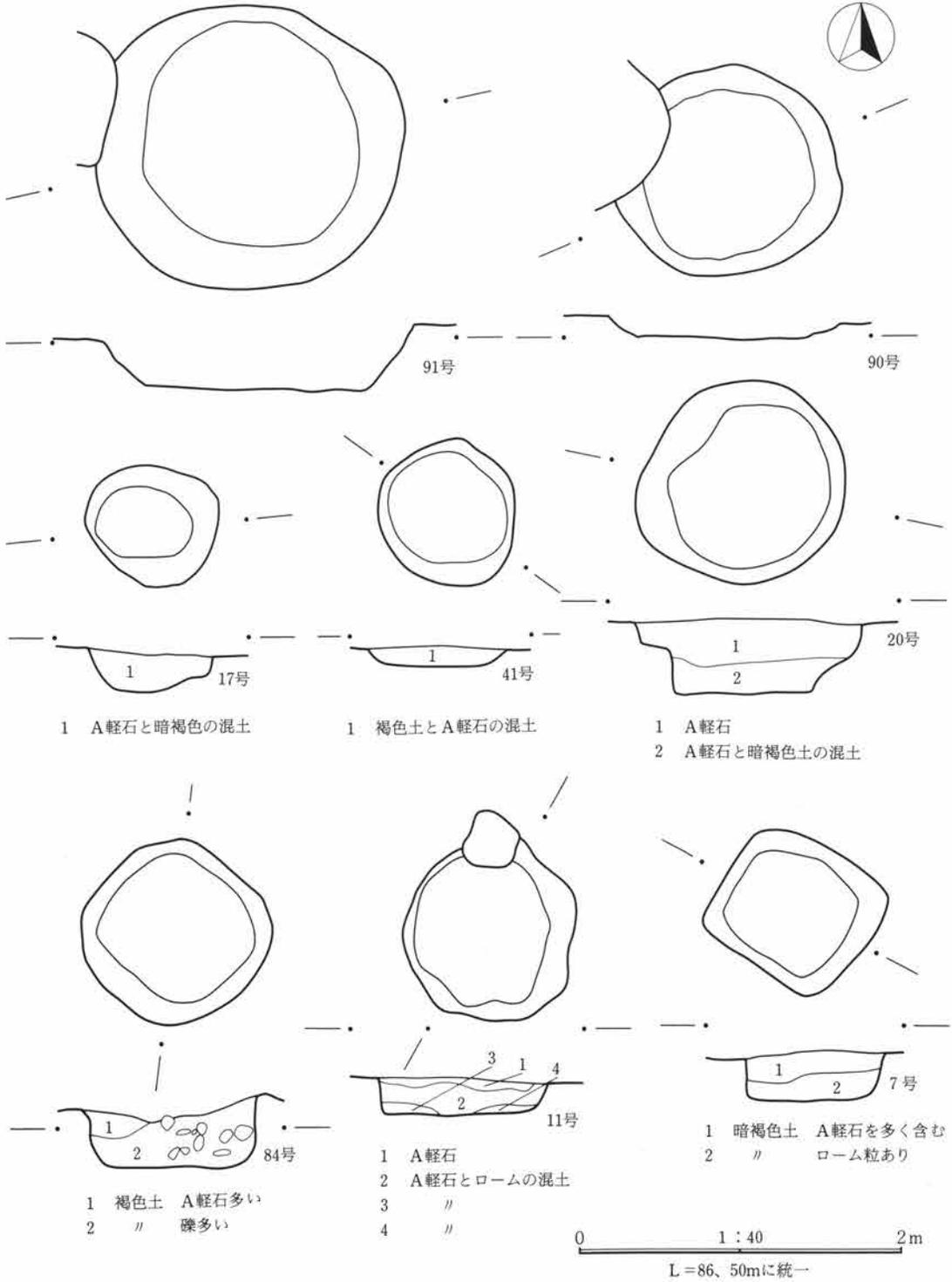
第434図 土坑 (10) 6区 (3)



第435図 土坑 (11) 6区 (4)

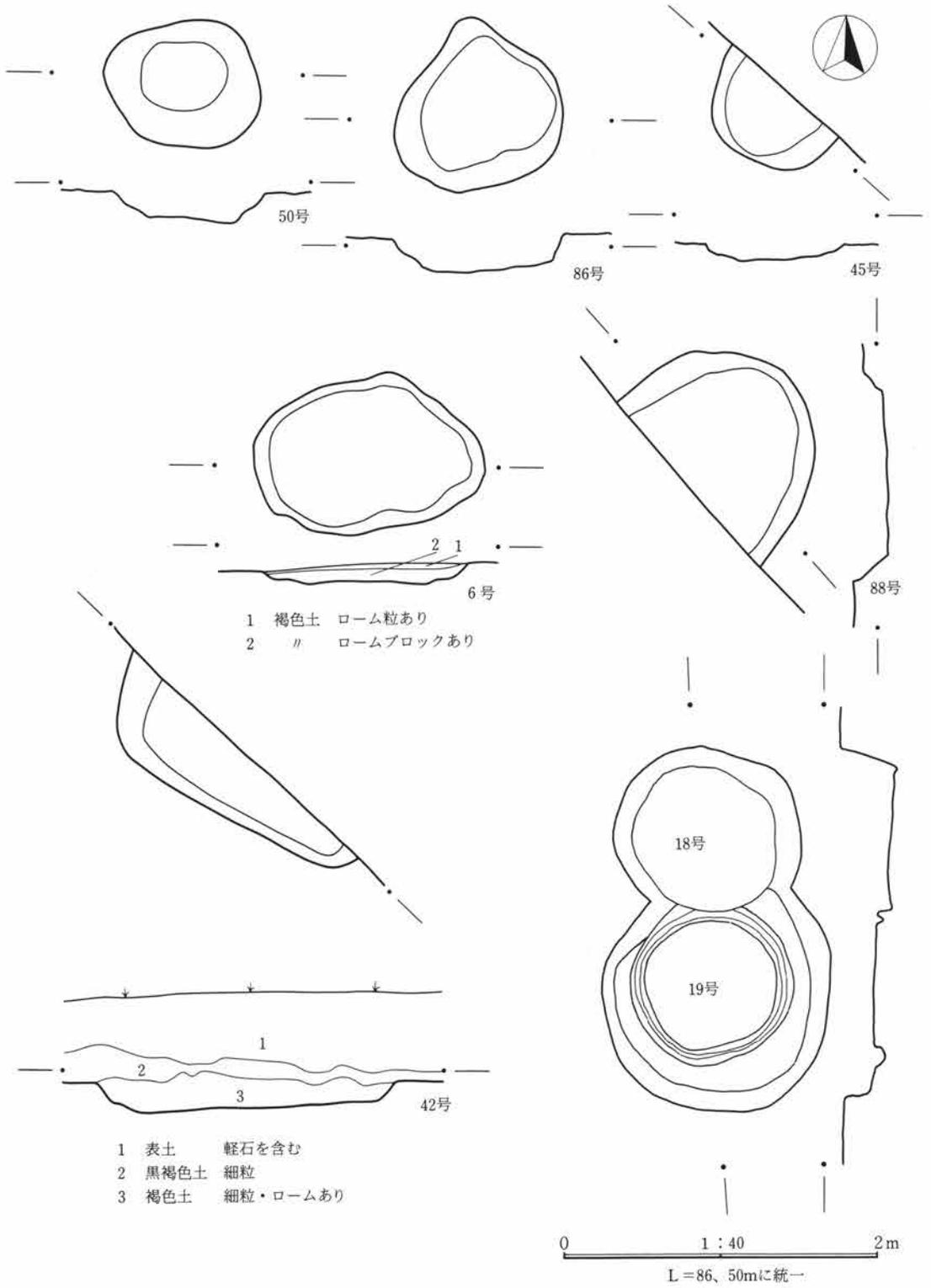


第436図 土坑 (12) 6区 (5)

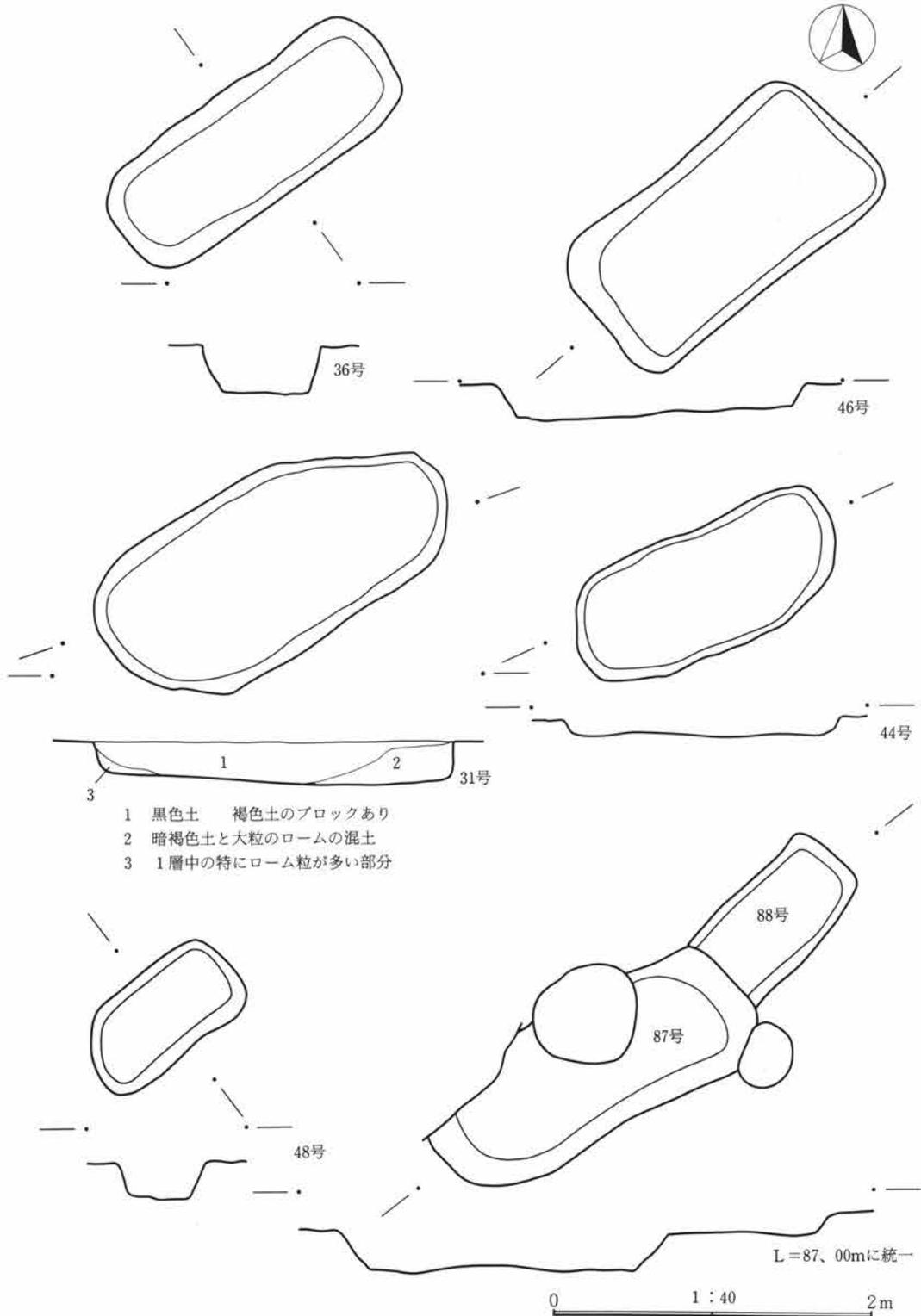


第437図 土坑 (13) 6区 (6)

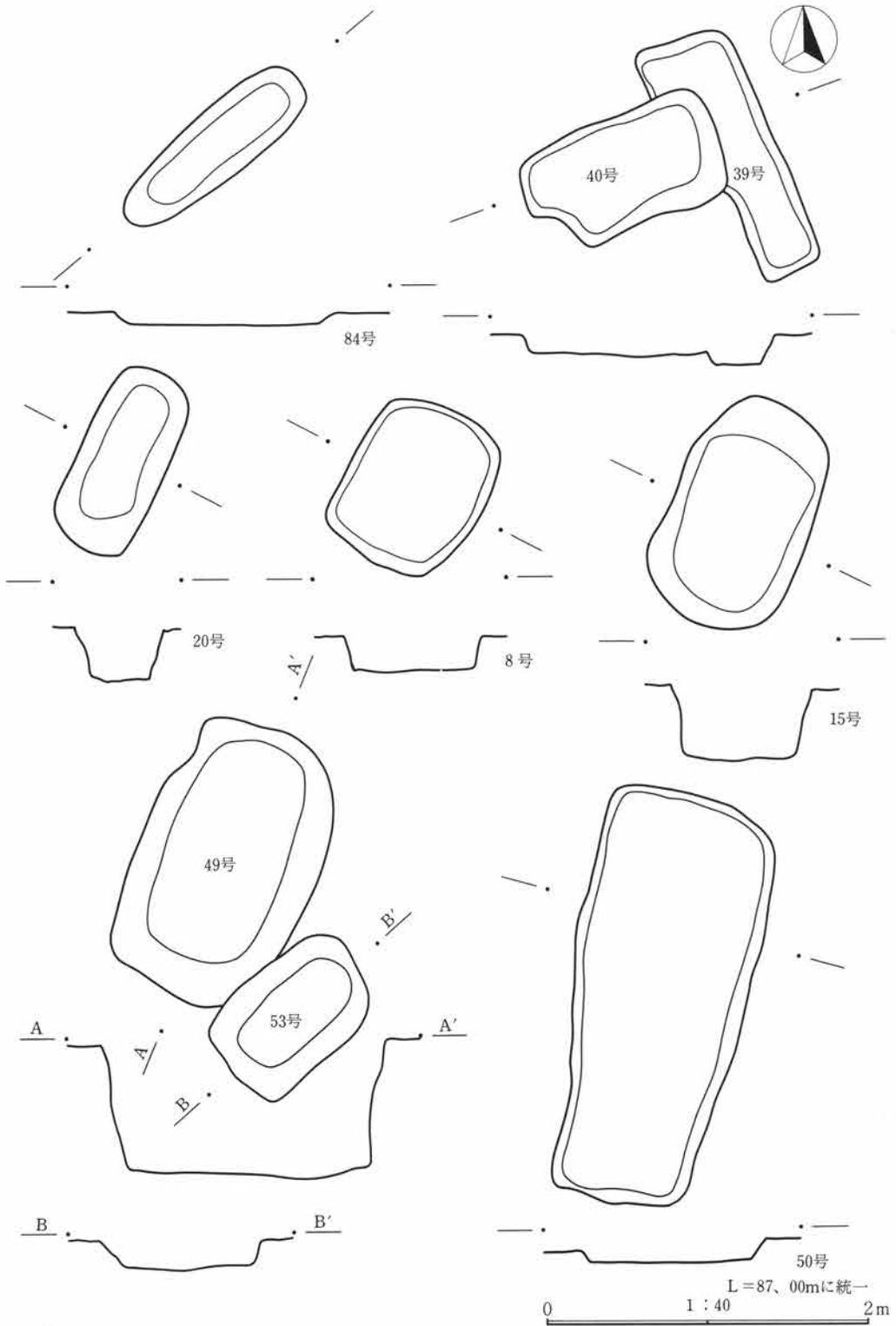
第6章 検出された遺構と遺物



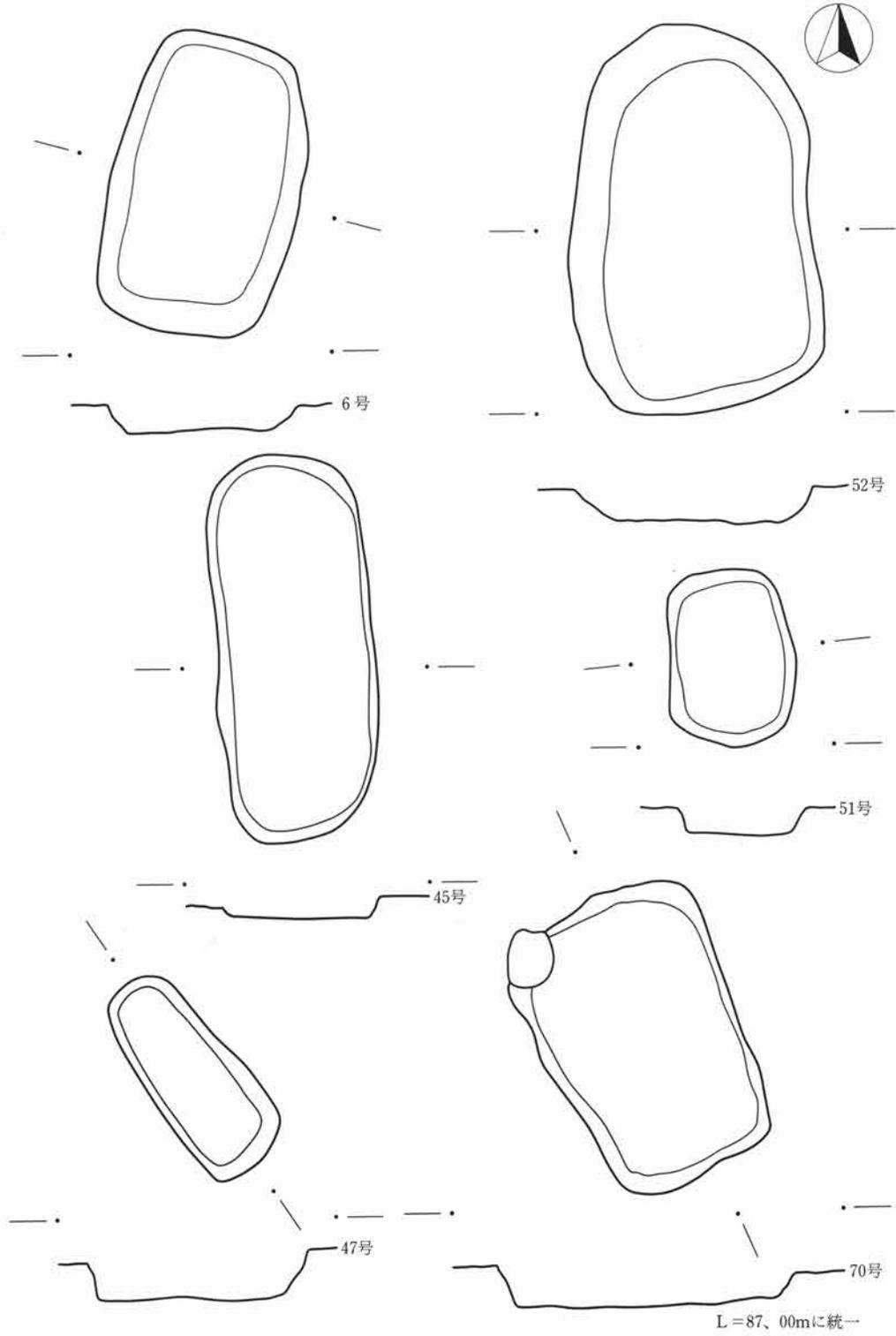
第438図 土坑 (14) 6区 (7)



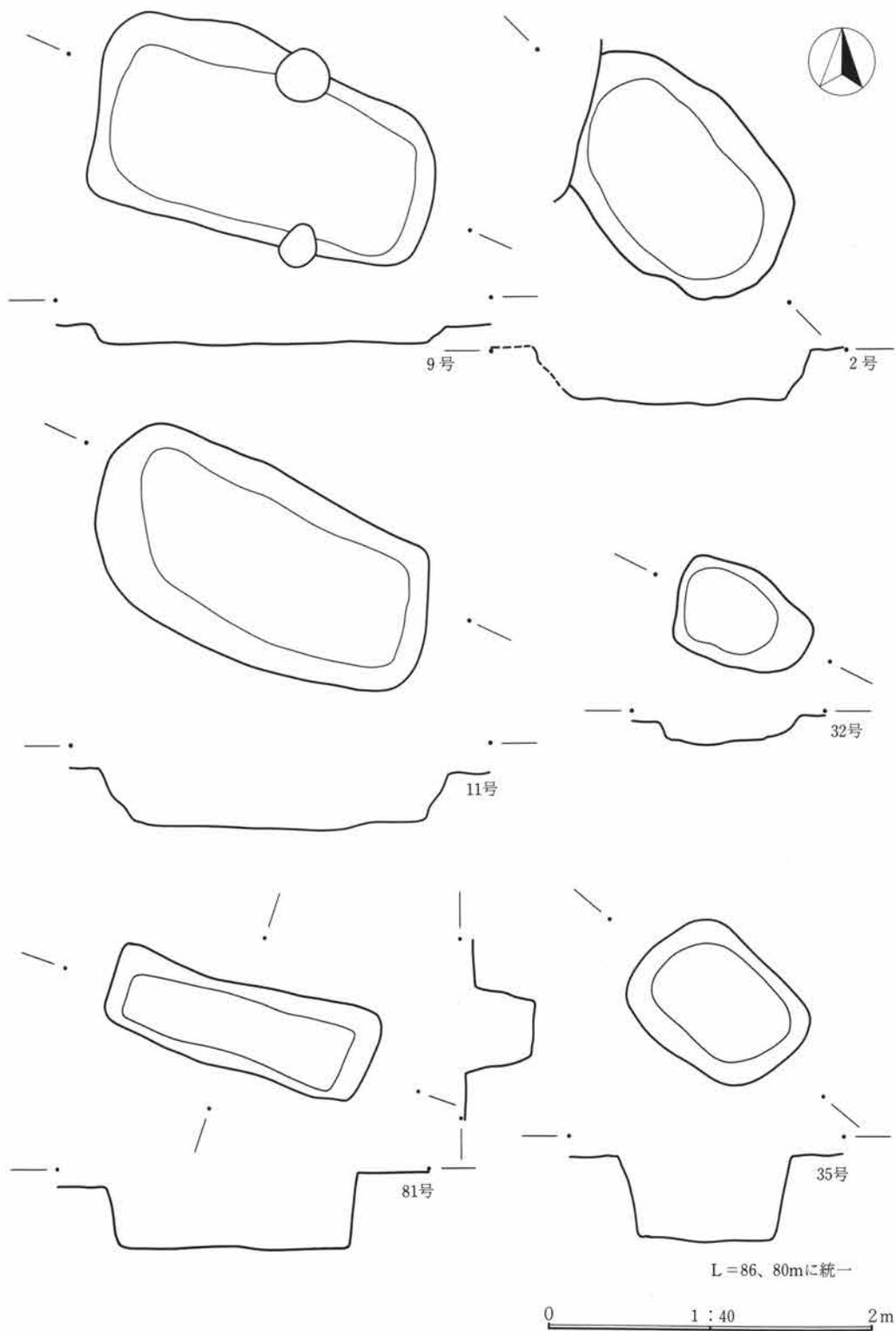
第439図 土坑 (15) 7区 (1)



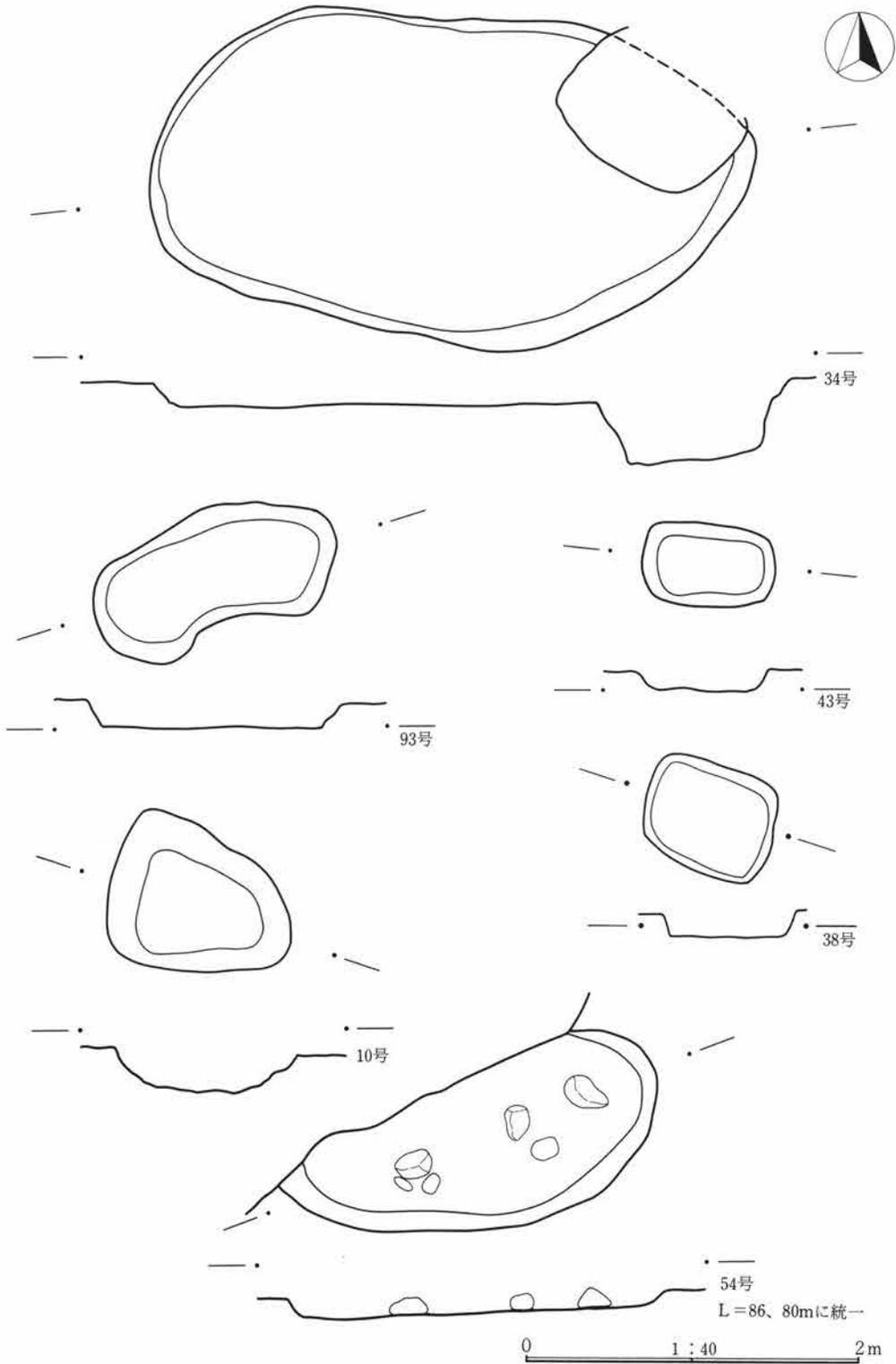
第440図 土坑 (16) 7区 (2)



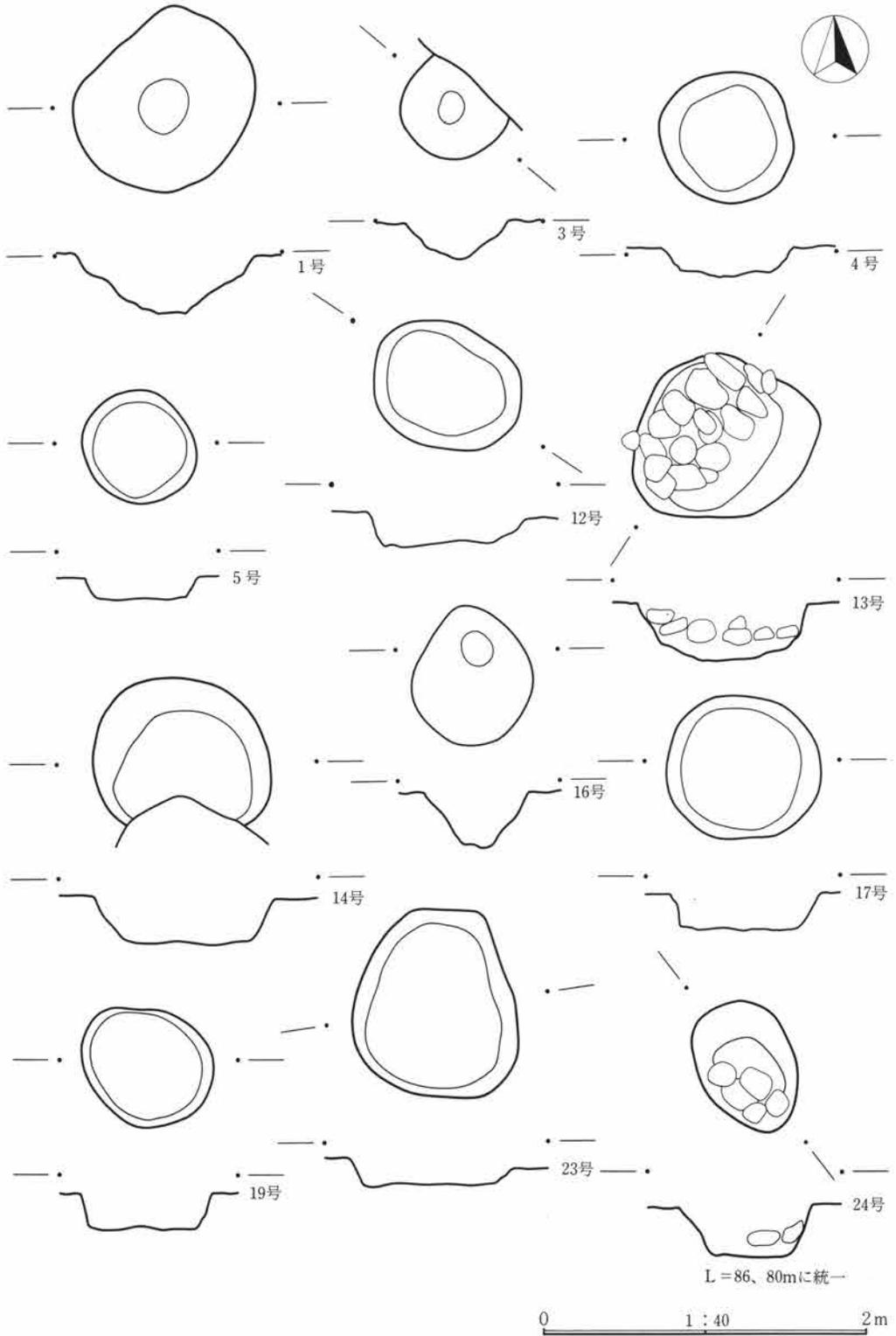
第441図 土坑（17） 7区（3）



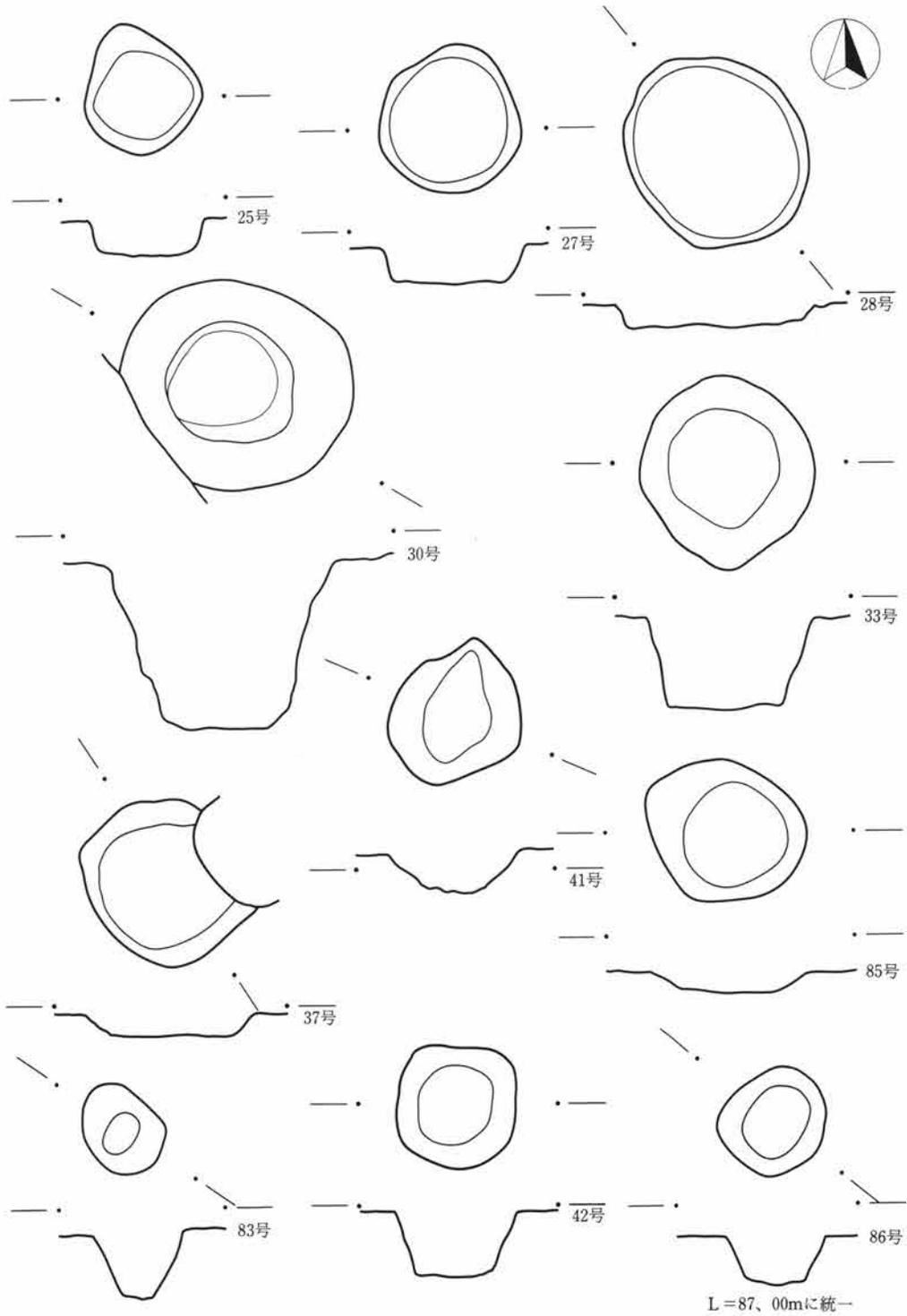
第442図 土壇 (18) 7区 (4)



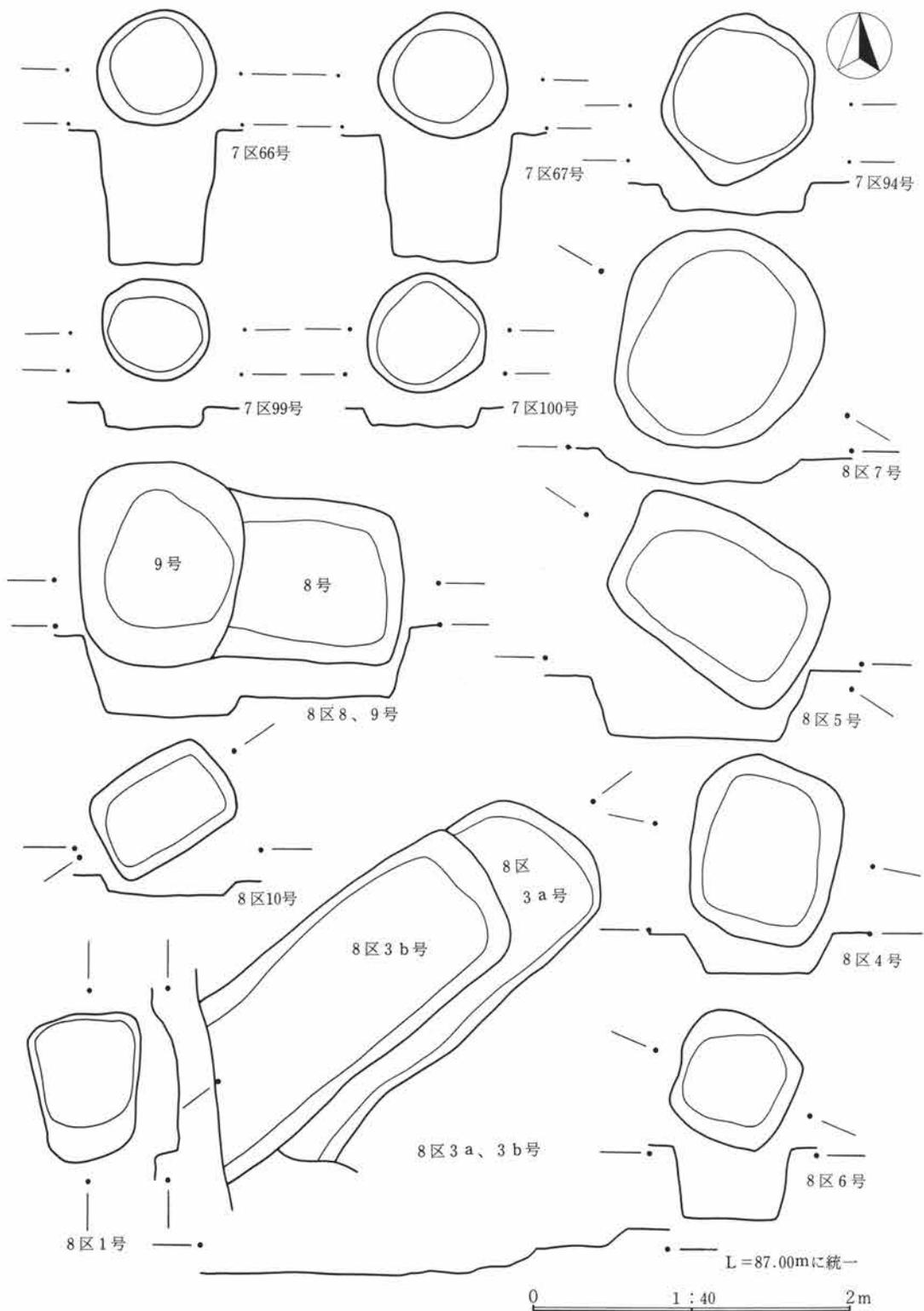
第443図 土壇 (19) 7区 (5)



第444図 土坑 (20) 7区 (6)



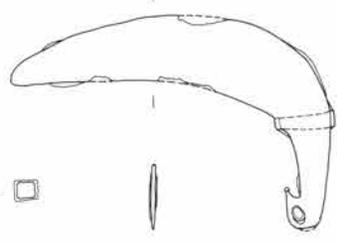
第445図 土坑 (21) 7区 (7)



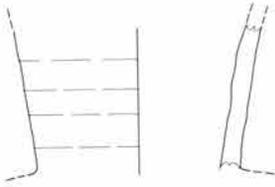
446図 土壇(22) 7区(8)、8区



3区21号 1823 (1/2)

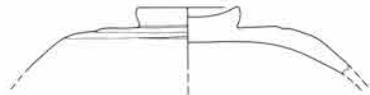


6区19号 1862 (1/2)



3区3号 503

5区27号 1903 (1/2)



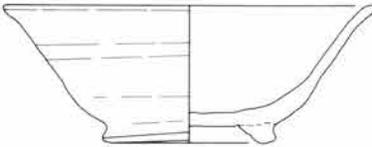
5区27号 657



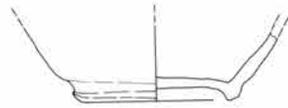
5区27号 656



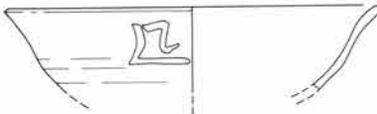
7区2号 1662



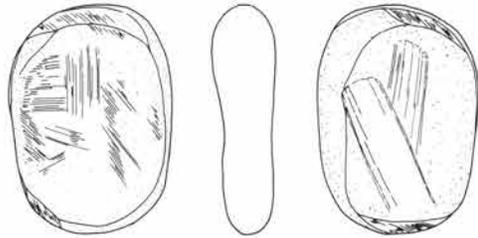
5区80号 658



7区2号 1661



8区7号 1674



5区23号 823



0 1 : 3 10cm

第447図 土坑遺物集成図

第141表 土坑出土遺物観察表

(第447図、図版 170・171)

番号	土器種類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器形・技法の特徴	備考
503	瓶	頸—8.2、高一(5.9)○頸部のみ	砂粒、石粒を含む。還元、やや硬質。灰色	長頸の瓶。ロクロナデ調整	3—3号土坑出土
656	鉢 須恵器	口—[16.8]、底—[10.8]、高一7.6○ $\frac{1}{3}$	砂粒を含むが、細密。還元、硬質。灰色	体下部で、張りをもち、直線的にたちあがる。身の深い、大振りの器。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、やや外行する縦長の台形	5—27号土坑出土
657	蓋 須恵器	つまみ径—[4.0]、高一(2.6)○ $\frac{1}{8}$	砂粒を含むが、細密。還元、硬質。灰白色	中央の凹む、ボタン状のつまみをもち、肩部で丸く張りをもつ。ロクロナデ調整。天井部、回転ヘラケズリ調整	5—27号土坑出土 体部周辺、打ち欠きあり
658	碗 須恵器	口—[15.0]、底—[6.0]、高一5.5○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。にぶい黄橙色	体下部で、張りをもって内湾し、ひろがる。口縁部外反し、端部丸味をもつ。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外行する四角形	5—80号土坑出土。体外面に墨書あり。文字不明。消滅
1661	碗 須恵器	底—6.0、高一(1.6)○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。酸化、やや軟質。橙色	内底部から、区切りをもってたちあがる。体下部外面やや丸くふくらむ。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、底部外縁に、丈の低い台形。ロクロ右回転	7—2号土坑出土。体部～底部の間、粘土積痕あり、底部円盤別作り
1662	碗 須恵器	口—[14.0]、高一(4.6)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を多く含む。還元、軟質(燻し?)。暗オリーブ灰色	体部、丸く内湾してひろがり、口縁部外反する。口縁端部、丸味あり。体部、ロクロナデ調整。器肉、薄手	
1674	碗 須恵器	口—[15.0]、高一(3.4)○ $\frac{1}{8}$	砂粒、石粒を含む。還元、やや軟質。灰白色	体部、内湾してひろがる。口縁部、外反し、端部丸味をもつ。体部、ロクロナデ調整	8—7号土坑出土。体部外面、墨書あり。文字不明
823	砥石	長—9.1、幅—6.4、厚—2.2、変質岩、自然の河原石を利用して、表裏、砥面として使用、ナナメ、タテの線条痕あり			5—23号土坑出土
1823	古銭	熙寧元寶、[熙寧元年—1068、鑄造、北宋] 表面、摩耗			3—21号土坑
1862	鉄製鎌	長—13.0、幅—2.6、厚—0.3、刃部と柄の角度、約90°、柄着装部、止具、及び、締具、残存			6—19号土坑
1903	鉄製釘	長—(6.0)、幅—0.6、厚—0.4、断面、方形の釘。両端、欠損。片端は、鈍角に折れまがる			5—27号土坑

## 2 井戸(第448~455図、第142・143表、図版175)

井戸は合計20基ある。5区以北のものは、殆どが中位のレベルまでに多量の投石で埋没しており、未完掘に終わっている。一部はボーリング棒などで、深度計測を行い法量の不備を補足した。資料に不揃いの点はあるが、分布の傾向、平面・断面形状、伴出遺物について特徴を記す。

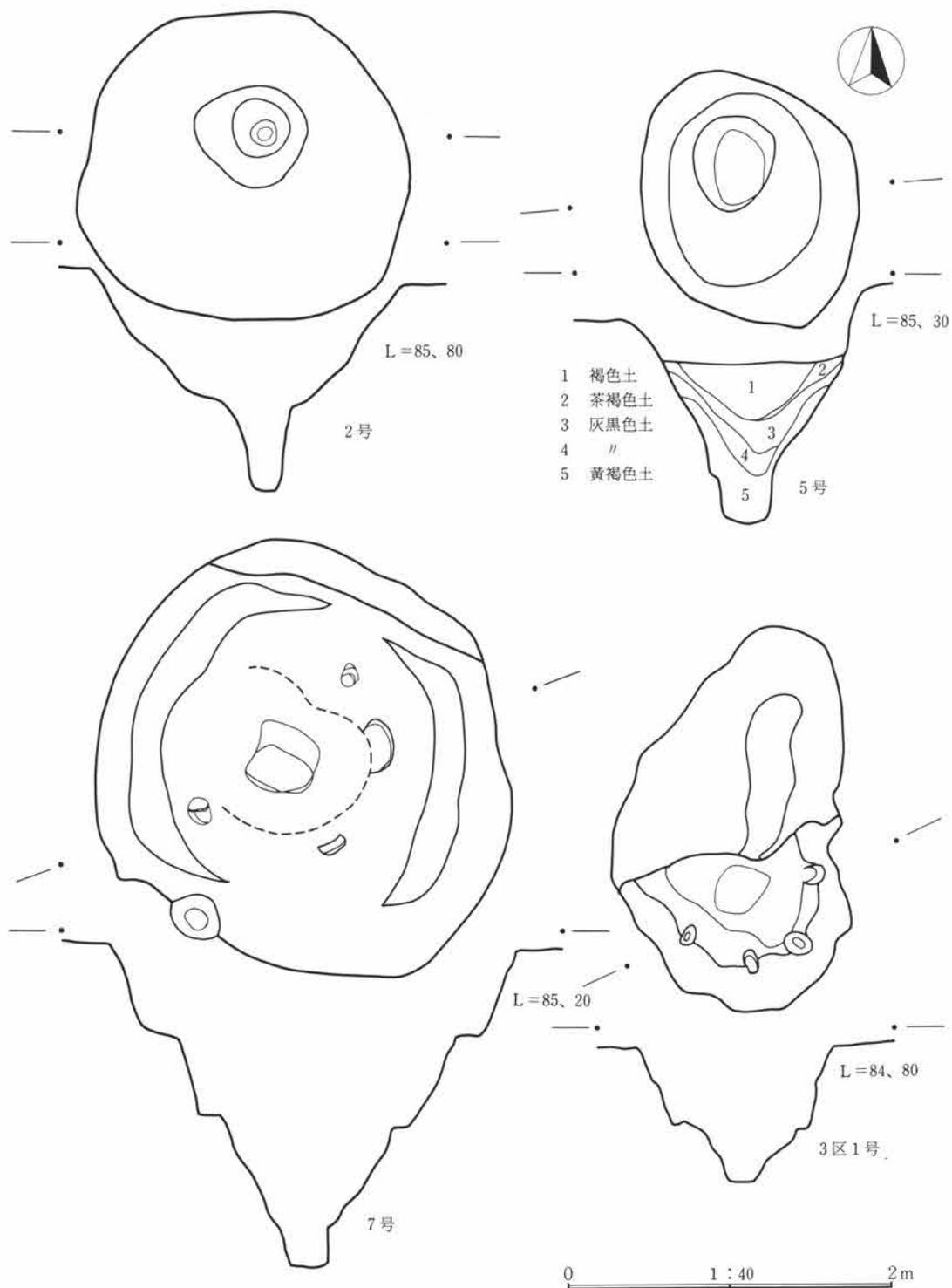
分布傾向は、竪穴住居跡のある3区北半から8区まで等しく確認され、住居跡との対応関係も望めそうだが、井戸自身、地下水脈との関係か、いくつか群在する傾向が見られる。しかし、竪穴住居跡を切る例も多く、単独に存在する例との比率は半々である。

平面・断面形状は、上面円形で、断面素掘り円筒形のものと、上面不整形でロート状のものに二分される。円筒形でも6区4号のように石垣を持つ可能性を持つものもあるが、ロート状のものは、上段に井桁もしくは石垣状のものを持った可能性が高い。4区7号には中段に2対の柱穴が見られ、5区8号は周縁に10ヶ所以上の小柱穴がめぐっている。

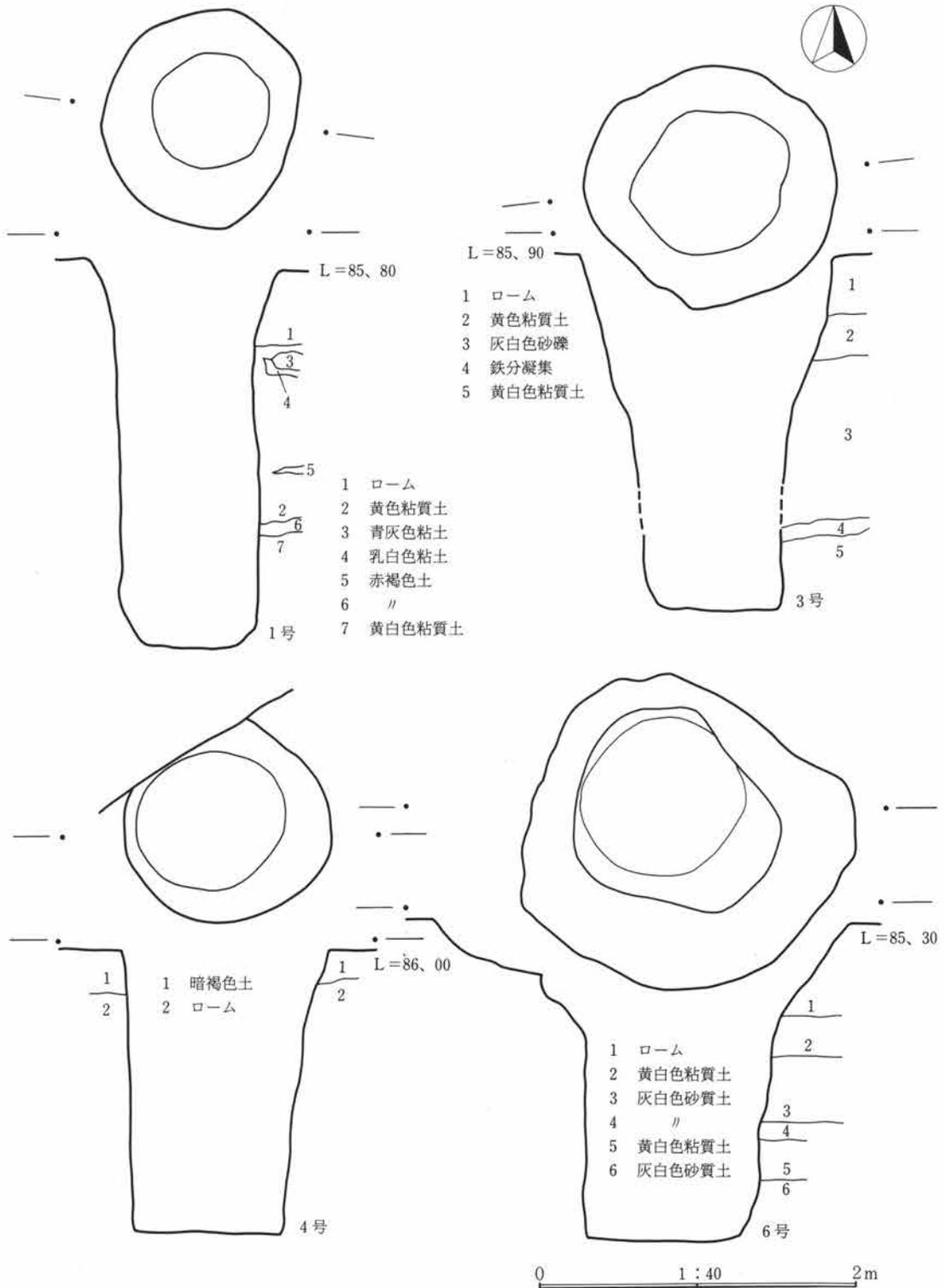
伴出遺物は、甕、坏に始まり縄文土器、台付甕、円筒埴輪にまで及び、混入したものが殆どである。新しいものは内耳、摺鉢があり、井戸としては最も新しい時期に属するか。遺構としての時期は、竪穴住居跡に対応する平安時代から中世にかけてが大半か。(女屋)

第142表 井戸一覧表 (第448~455図、図版175)

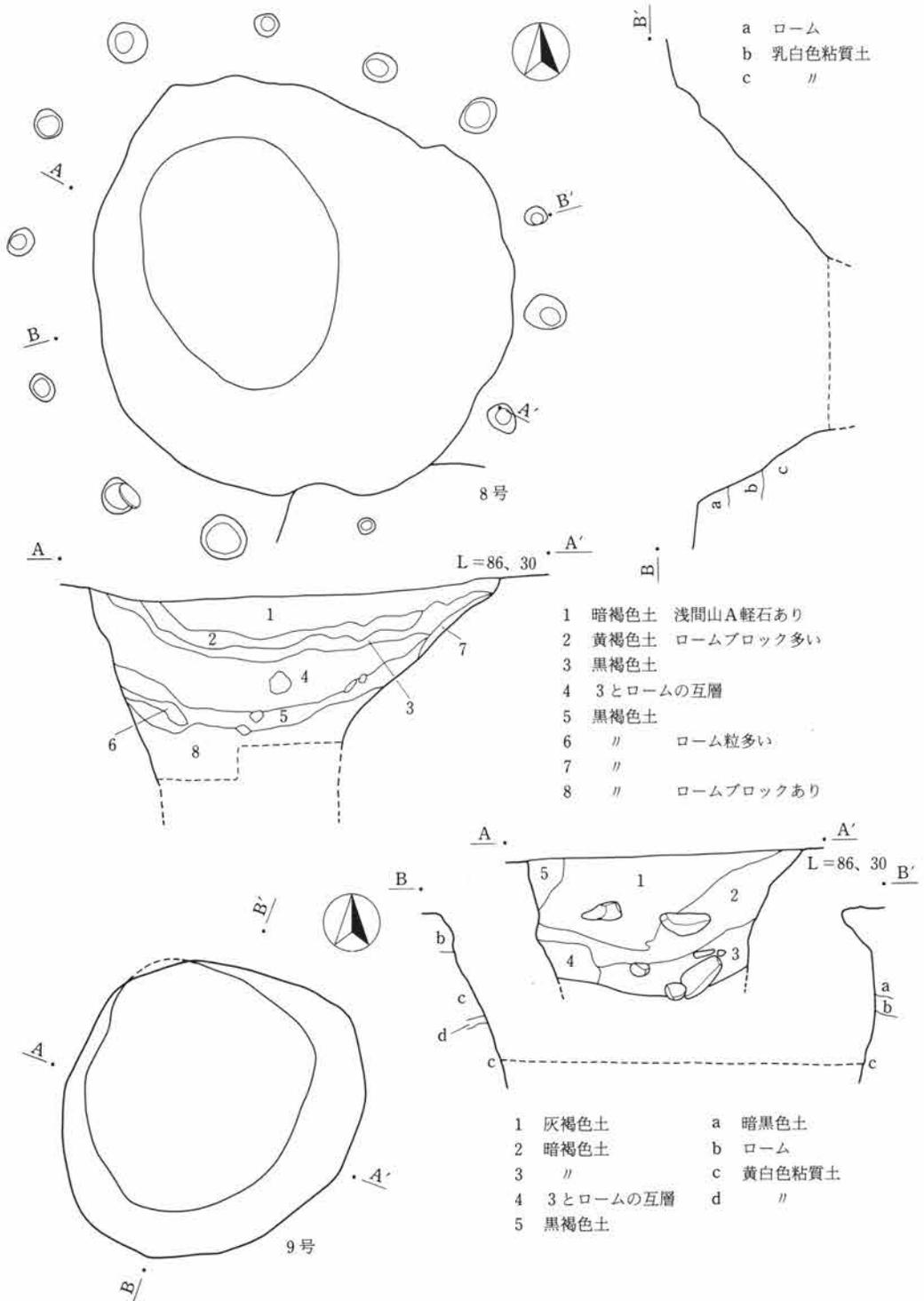
番号	形状	断面形状	法量 (長径×短径×深さ)	遺物	備考
3区1号	不整円形	ロート状	2.26×1.26×0.84		
2	隅丸方形	円筒状	1.54×1.25×1.06		
4区1	円形	〃	1.34×1.18×2.41		投石あり
2	〃	ロート状	φ=2.00×1.36		
3	〃	円筒形	φ=1.48×2.26		9号住より新しい
4	〃	〃	φ=1.25×1.78		20号住より新しい
5	楕円形	ロート状	1.65×1.38×1.46		37号住より新しい、B軽石上面にあり
6	円形	円筒形	1.98×1.77×2.00		〃
7	方形	ロート状	2.63×2.42×1.96		中段に棚状と2対の小柱穴、投石多い
5区8	不整円形	ロート状か	2.63×2.42×(1.80)	石田川台付甕、羽釜	中位に投石あり 未完掘
9	円形	〃	2.73×2.58×(1.40)	羽釜、内耳	52号住より新しい、投石多い 〃
6区1	〃	円筒形か	φ=1.20×(1.00)	円筒埴輪	投石あり 〃
2	〃	〃	1.44×1.31×(0.82)		8号溝より新しい、B軽石あり 〃
3	〃	ロート状か	1.86×1.66×(0.75)		6号溝より古い、B軽石あり 〃
4	〃	円筒状か	φ=1.70×(0.94)		多量の角安石あり 〃
5	〃	〃	φ=1.40×(1.70)	内耳	投石あり 〃
7区4	〃	〃	φ=1.90×(1.60)	円筒埴輪	〃 〃
5	〃	〃	φ=2.20×(1.20)	縄文、土師器甕	〃 〃
7	〃	〃	φ=1.60×(1.20)	台付甕、坏	投石あり、45号住より新しい 〃
8	〃	〃	φ=1.00×(1.00)	摺鉢	投石あり、48号住より新しい 〃



第448図 3区1号、4区2号、5号、7号井戸遺構図

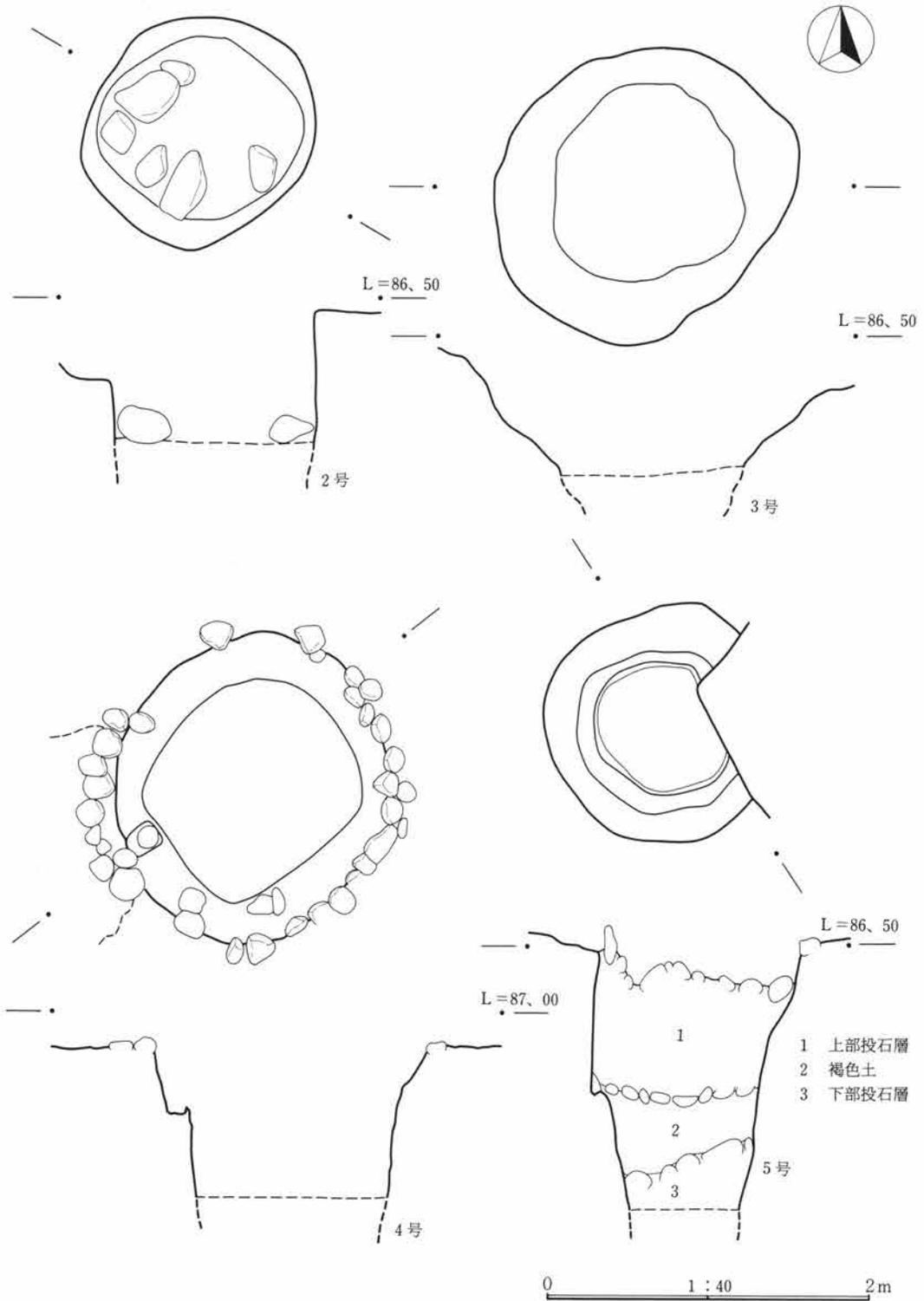


第449図 4区1号、3号、4号、6号井戸遺構図

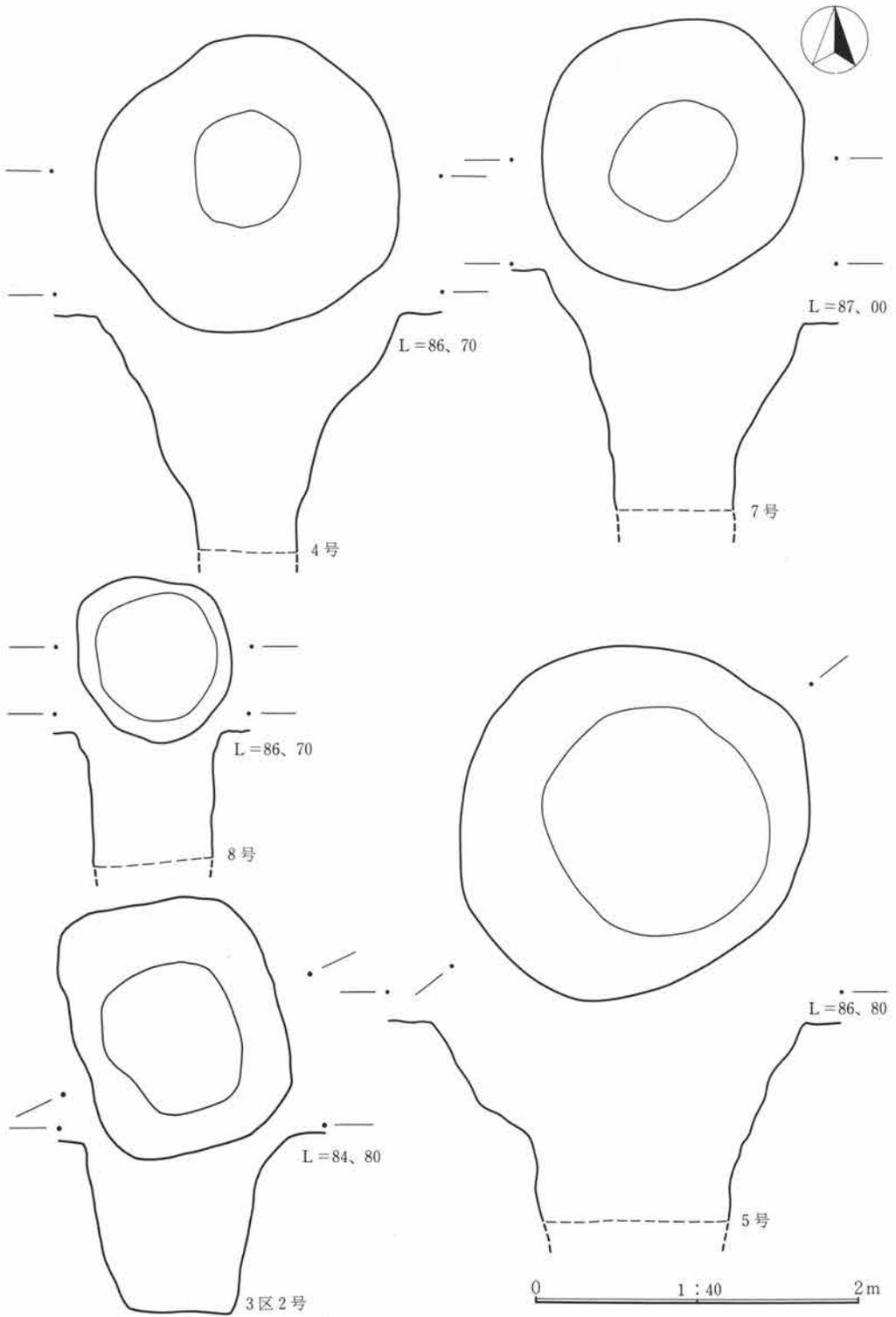


0 1 : 60 2m

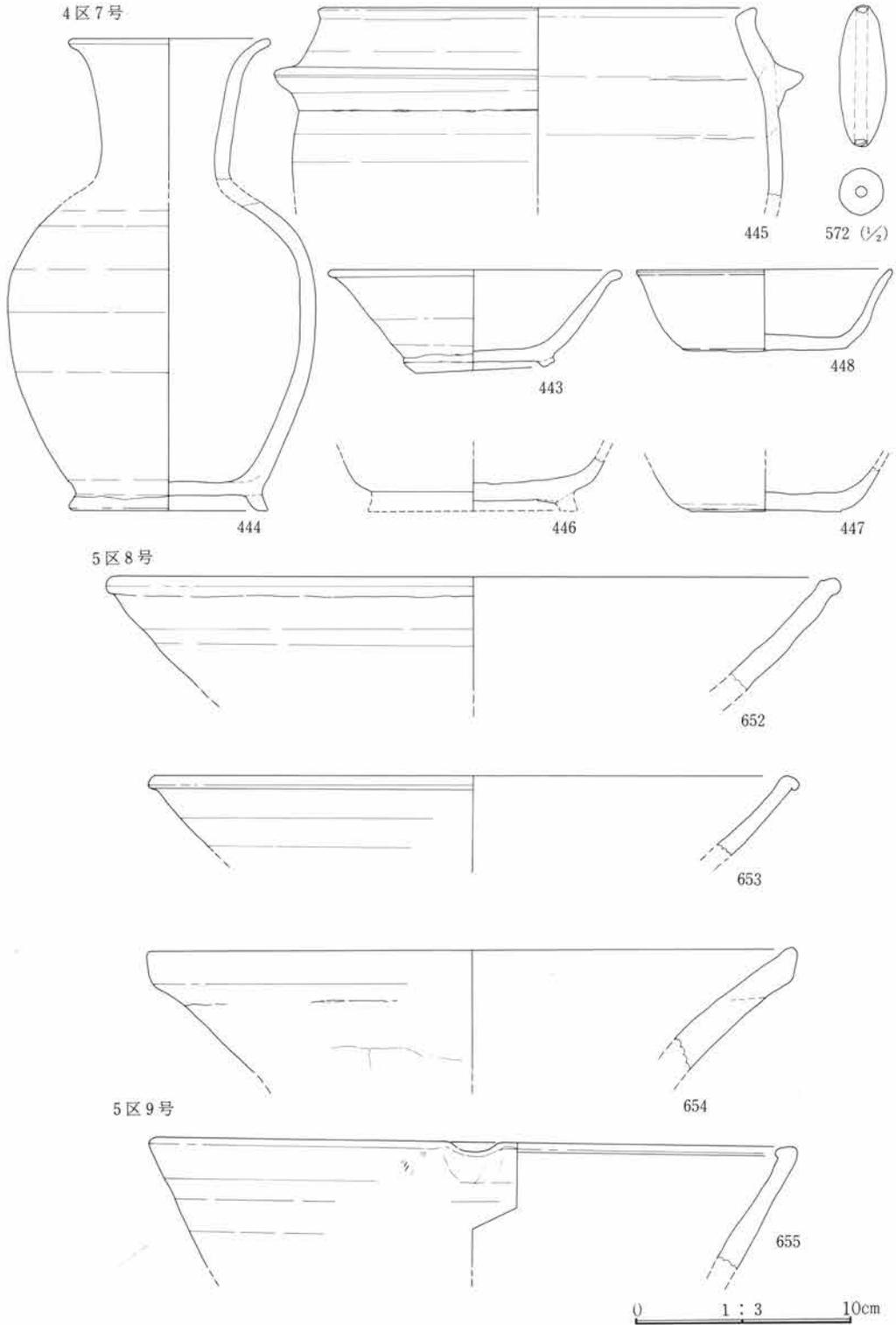
第450図 5区8号、9号井戸遺構図



第451図 6区2号、3号、4号、5号井戸遺構図

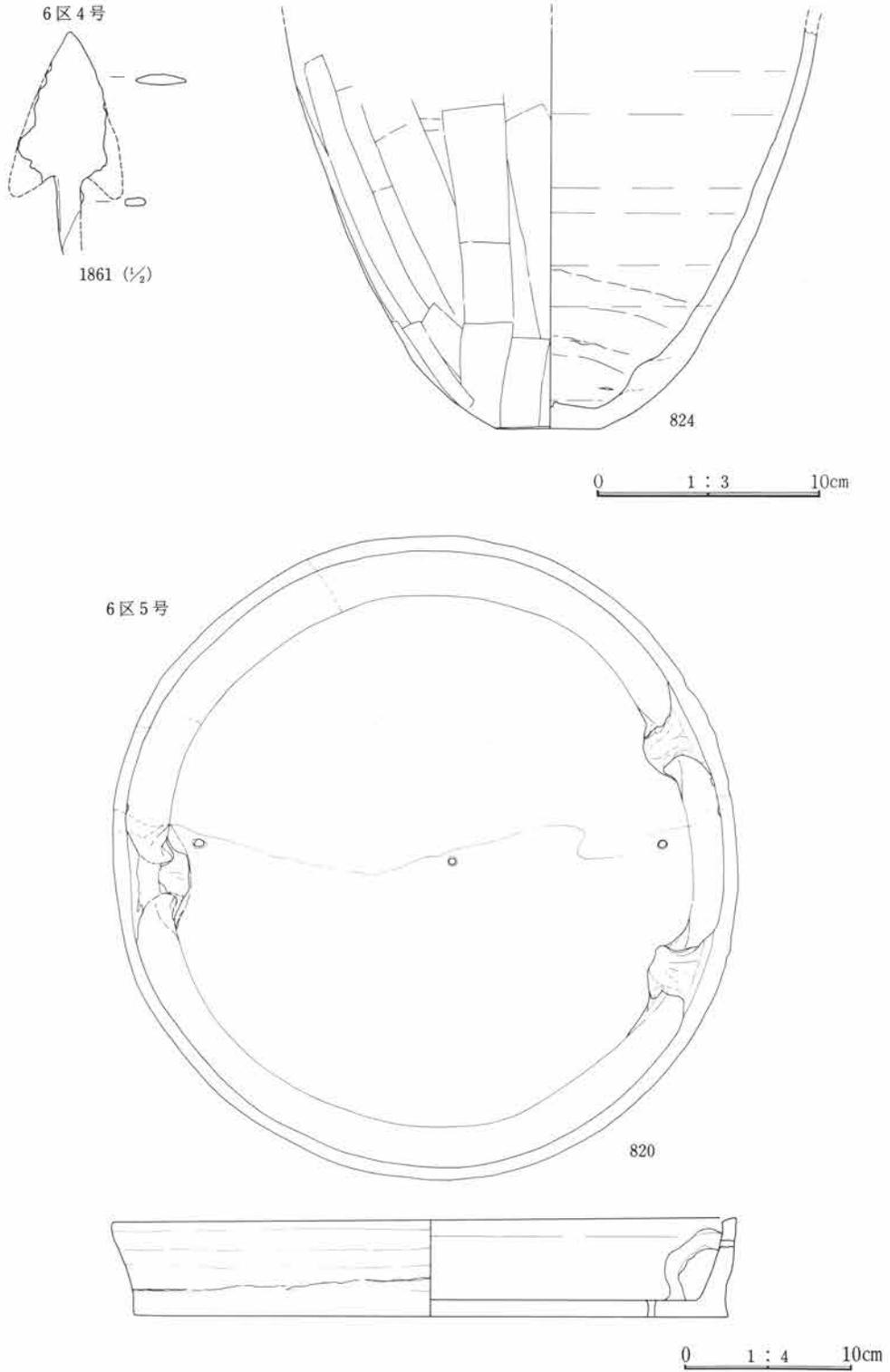


第452図 3区2号、7区4号、5号、7号、8号井戸遺構図

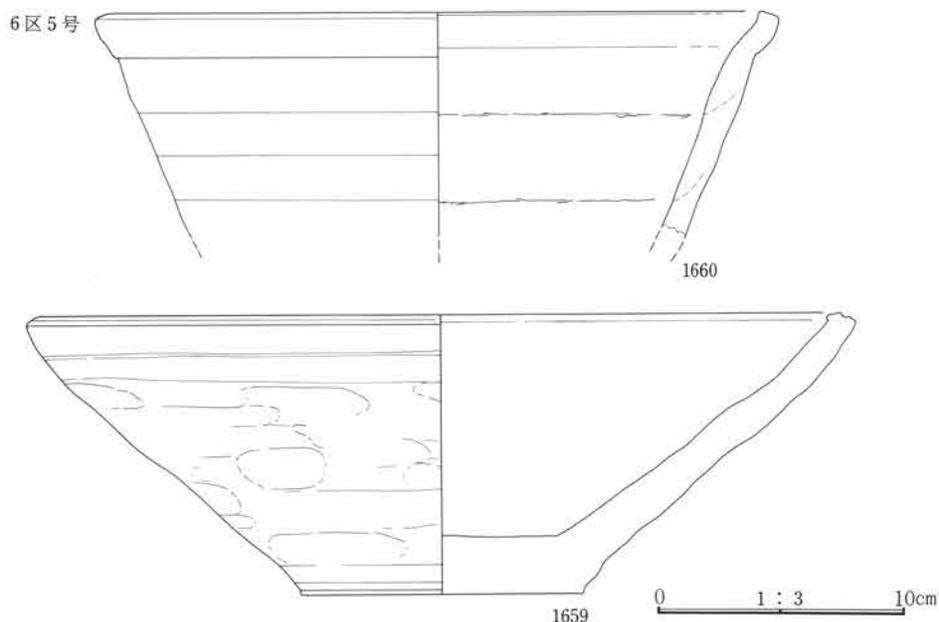


第453図 井戸遺物集成図(1)

第6章 検出された遺構と遺物



第454図 井戸遺物集成図(2)



第455図 井戸遺物集成図 (3)

第143表 井戸出土遺物観察表

(第453~455図、図版 177)

番 号	土 器 種 種	法量 (口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
443 4区7号 井戸	碗 須恵器	口—13.5、底—[6.4]、高—4.7 $\circ \frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含み粗。酸化、やや軟質。浅黄色	体部、わずかに内湾してひろがり、口縁部外反。口縁端部、丸味あり。底部、回転糸切り、貼付高台、断面、外行し、丈の低い台形	
444	瓶	口—[9.1]、頸—[6.0]、胴—[14.2]、底—[9.2]、高—[21.6] $\circ \frac{2}{3}$	砂粒、白色石粒を含む。還元、やや軟質。灰白色	体上部で張りをもち、頸部しまり、たちあがって、口縁部外反する。口縁端部、丸味をもつ。底部、貼付高台、断面、外行する方形。体部、ロクロナデ調整	上部、下部、接合不完全だが、同一個体である
445	羽 釜	口—[20.4]、高—(8.6) $\circ$ 小片	砂粒、石粒を含む。酸化、やや硬質。にぶい黄橙色	体部、丸味をもち、口縁部内傾する。口縁端部、外側につまみ出しのある平坦面で、内斜する。罫断面、端部の丸い台形。体部ロクロナデ調整	
446	碗 須恵器	底—[9.6]、高—(1.9) $\circ$ 底部のみ	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰白色	大振りの碗。体下部で張りをもち、たちあがる。ロクロナデ調整。底部～底部外縁に回転ヘラケズリ調整、貼付高台	
447	碗 須恵器	底—[7.0]、高—(1.9) $\circ \frac{1}{8}$	砂粒、石粒を含む。還元、硬質。灰白色	体下部で、丸く張りをもち、平底。回転糸切り、ロクロ左回転	

第6章 検出された遺構と遺物

448 4区7号 井戸	坏 須恵器	口-[11.8]、底 -[7.6]、高-3. 8○ $\frac{1}{4}$	砂粒、石粒を含む。還元、 硬質。灰色	平底。体下部で丸く張りをもち、た ちあがって、口縁部わずかに外反す る。底部、回転ヘラ切り	
572	土 鍾	長-4.3、径-1.4、孔径-0.3、完存。中ぶくらみで、両端、すばまる。中心に貫通 孔あり			
652 5区8号 井戸	鉢 焼締陶器	口-[34.0]、高 -(5.2)○小片	砂粒、白色石粒を含む。 酸化、硬質。明赤褐色	体部直線的にひろく。口縁端部、外 側に肥厚して丸味あり。体外面、タ テ方向、ヘラナデ、口縁部、及び内 面ヨコナデ	
653	鉢 焼締陶器	口-[30.0]、高 -(3.6)○小片	砂粒、白色石粒を含む。 酸化、硬質。にぶい赤褐 色	体部、わずかに内湾する。口縁端部 丸く、外側にめくれる。ロクロナデ 調整	
654	鉢 軟質陶器	口-[30.0]、高 -(5.7)○小片	砂粒を多く含み、重い。 還元、軟質。灰白色	体部、直線的にひろがり、口縁部、 外側に肥厚し、丸い稜をもつ。口縁 端部、丸味あり。体部、粗雑な、ナ デ調整、口縁部～体内部、ヨコナデ	
655 5区9号 井戸	片口鉢 軟質陶器	口-[30.0]、高 -(5.7)○小片	砂粒を多く含む。還元、 やや硬質。灰色	体部、直線的にひろき、口縁端部、 内側に、肥厚し、稜をもつ。口縁部 の一部分、内側よりつまみ出して片 口を造り出す。ロクロナデ調整	
824 6区4号 井戸	羽 釜	底-4.8、高-(17. 6)○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を多く含む。 酸化、やや軟質。浅黄色	体部、やや細身で、体下部で丸味を もつ。底部、小さな平底。粘土積 痕残り、ロクロナデ調整後、体下部 ～底部、タテ方向のヘラケズリ調整。 器肉、厚手	
1861	鉄製 鏝	長-(6.6)、莖部幅-0.6、厚-0.2、鏝身部幅-[3.0]、厚-0.25、有莖で、鏝身部 幅広、断面、レンズ状。莖部断面、扁平な長方形			
820 6区5号 井戸	ほうろく 内耳陶器	口-36.9、底-35. 2、高-5.9○略完 存	砂粒を多く含む。酸化、 軟質。黒色、内底面にお い褐色	体部、わずかに外反してたちあがり、 口縁端部、内斜する平坦面をもつ。 体外面、粘土積痕残り、ヨコナデ調 整。内面、ナデ、ヨコナデ。底部ち ぢれ目(註)、耳は、3個で、口縁部 直下より内底部縁に、貼付。2個は、 お互いの外側に、紐かけ様のスレあ り。1個の方は紐かけ部欠損	註 — 飯田 (1985—浜町 屋敷内遺跡C地 点) 口縁端部、スレ あり—蓋の使用 によるものか。 補修用小孔あり
1659	捏 鉢 陶質土器	口-[32.4]、底 -[11.4]、高-11. 2○ $\frac{1}{2}$	砂粒、石粒を含む。酸化、 硬質。暗褐色	平底。体部、外反してひろがり、上 部で、たちあがる。口縁端部、やや 肥厚し、内側に突出する。丸味をもち、 中央に凹線めぐる。体部、粘土 積痕あり、粗雑なヘラヨコナデ、底 部、ハケ目あり	
1660	土 鍋	口-[27.4]、高 -(9.0)○小片	砂粒、石粒を含む。還元、 やや硬質。灰色	体部、直線的にひろがり、口縁部、 区切りをもって、内湾してひろがる。 口縁端部平坦、内側凹線あり	内耳土器か？

### 3 溝

溝は、長短10条が確認されている。6区と7区の一部については、近世屋敷遺構に含めて除外した。確認面は、平安時代以前の遺構と同じく、基本土層の第4層もしくは第3層中にあり、底面はロームに達する。その性格は、4区北半から6区中央部にかけての断面で、主に調査区を横断する方向を持ち、浅間山A軽石で埋没した畠跡が数面分確認されているが、それらとの直接的な結びつきはない。しかし、中世遺構の存在が不明確な現在、その可能性にすぎないが何らかの区画を意味するものと、近世の畠に伴う区画溝の性格とに大別されるか。以下、個別に記す。(女屋)

#### 3区1号、2号溝（第456図）

基本土層の第4層で確認された。3区全体を南北に縦断し、1号、4号住居跡を切っている。全ての時代を通じた遺構の分布は、この溝付近を境界にして、北へ行くに従い多くなり、南になると形状のつかみにくい土壇状のもの、風倒木痕が多くなる。また、基盤となるローム層に粘性が強まり、大小の砂礫が増えるのも、この付近である。

1号は、長さ約52m、上幅約60cm、深さ20～40cm、断面は外方に開くU字形をなす。底面は平坦で、北端から約45m付近まで直線的な走向性を持ち、緩やかに東方へ弧をえがく。北から南へのわずかな傾斜を持つが、水の流れた形跡は不明である。

2号は、長さ約13m、上幅約60cm、深さ10cmで、断面形状等は1号に近似する。北から南への若干の傾斜があり、1号の中央部付近に接続し、枝溝の性格を持つ。遺物は、覆土中に青磁の細片と平瓦の破片があるが、1号と合せて遺構の時期を決定するものではない。

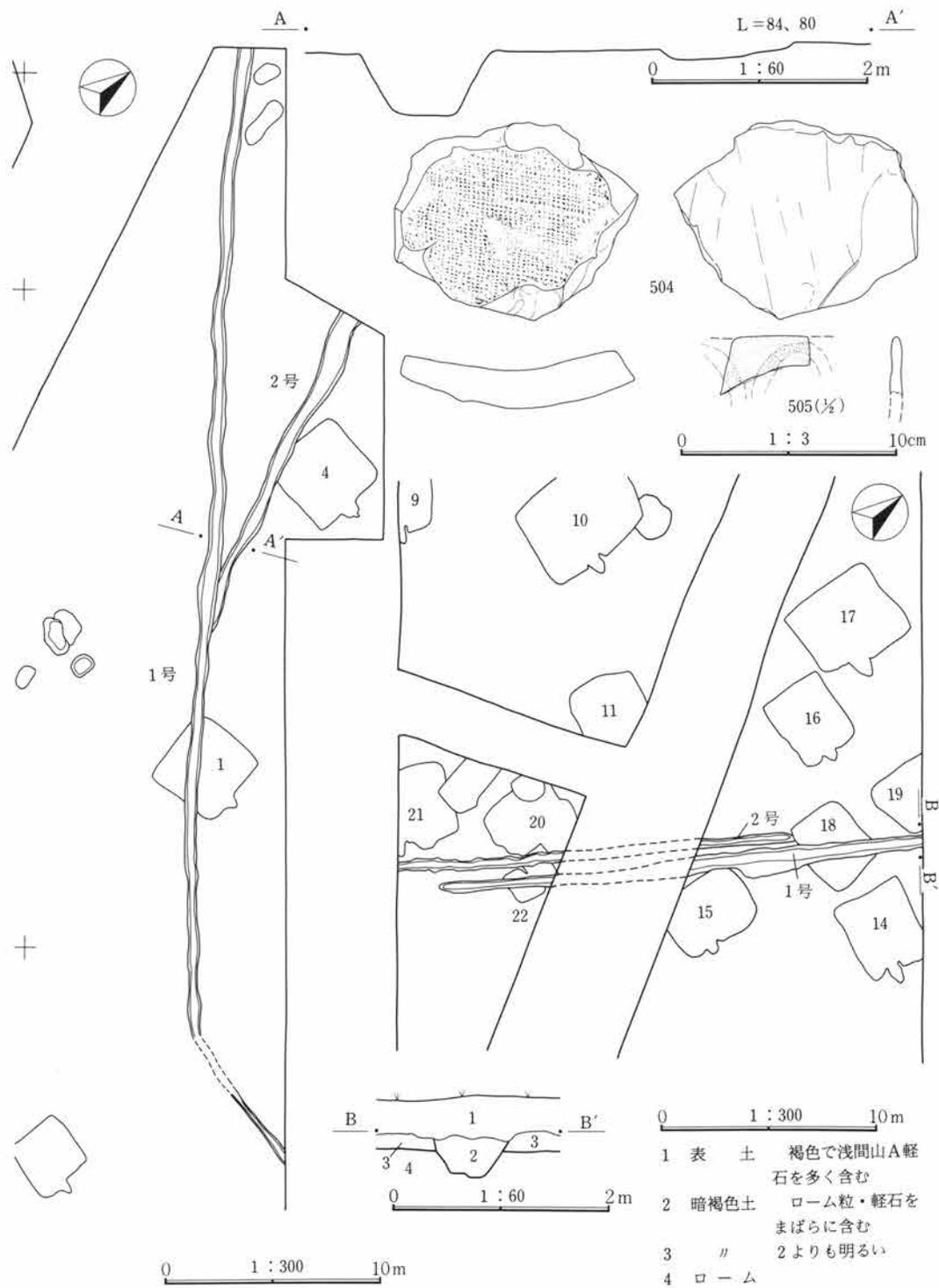
#### 4区1号、2号溝（第456図）

基本土層の第3層に掘り込み面を持つ。東西に直線的な走向性を持ち、約50cmの間隔を持って平行している。15、18、20、22号住居跡を切っている。1号は、長さ約24m、上幅約70cm、深さ約35cmで、地形の傾斜と逆に西南へ傾く。また、15号と18号住居跡との間で、覆土の中位に相当するレベルで、帯状に径5～10cmの河原石を敷いた様な状態が見られた。22号住居跡以西の底面は、鋤跡の様に波打つ。遺物は、周辺の住居跡からの混入土器のほかに染付陶磁器がある。

2号は、1号と同様の規模で、底面に約20cmの段差を持つ。時期としては、2条とも覆土中に浅間山A軽石を混入することから、近世後期頃か。

#### 6区11号溝（第411図）

基本土層の第3層に掘り込み面を持つ。19号住居跡の中央部を横断し、更に東西にのびる。上幅45cm、深さ15cm、西への傾斜を持ち、直線的である。覆土は浅間山A軽石を少量含む黒褐色土である。12号溝等と平行し、畠の区画溝としての性格か。



第456図 3区1号、2号、4区1号、2号溝遺構図

### 6区12号溝（第411図）

市道敷下に相当する基本土層4層で確認された。59号土壇を切っている。上幅約80cm、深さ55cm、断面は少し開く箱型で、底面は平坦、傾斜はない。掘り方はしっかりしており、直線的に伸びる。覆土は、浅間山A軽石を多量に含む暗褐色土の単純層で、人為的な埋没状態を示す。未調査部分をはさんだ9号溝とは同一のものと思われるが、覆土、掘り方の特徴に差異がある。道路面の確認はないものの、9号の新しい時期に対応する側溝としての性格を持つか。

### 7区3号、4号、8区1号溝（第414図）

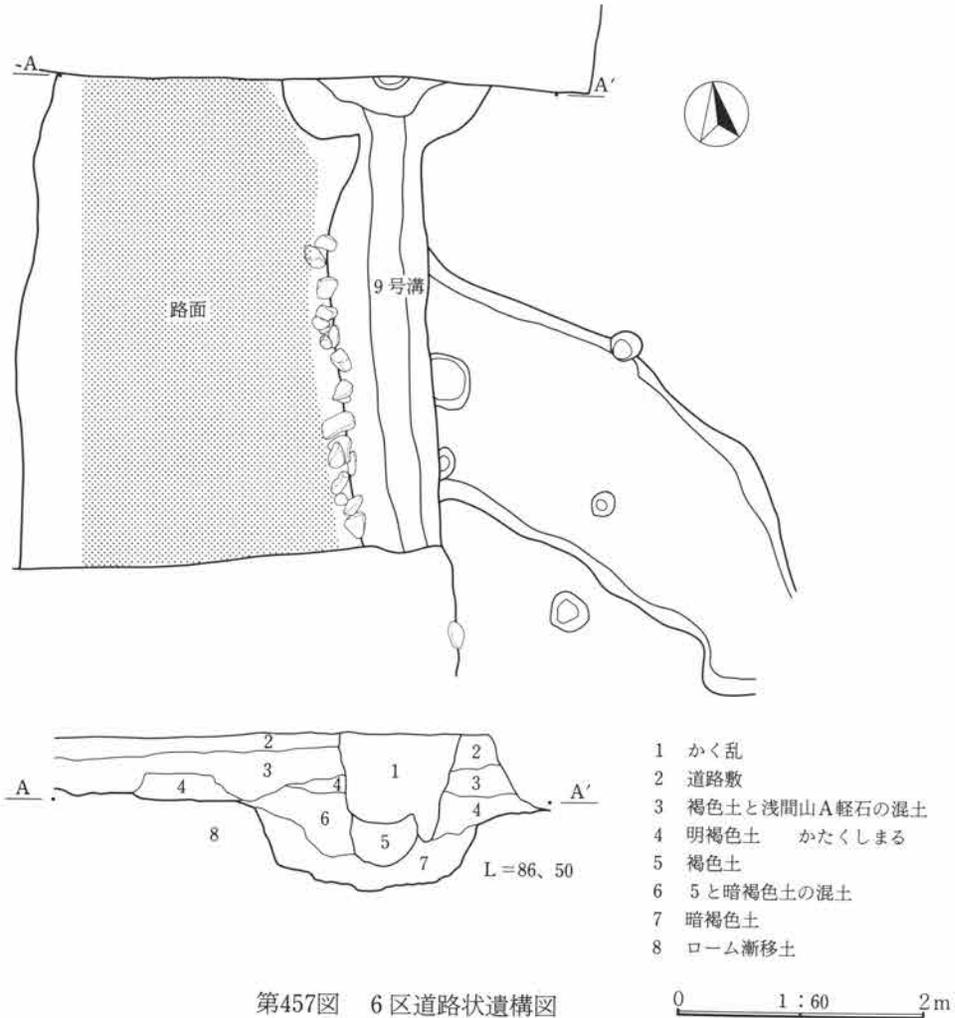
3条とも浅間山A軽石の純層で埋没し、調査区東側断面に点々と残るA軽石のレンズ状堆積と合せて近世畠跡として一括できる、一連の遺構である。上幅は50～70cmで、底面も軟かくA軽石も密着した状態にある。3号は、5号溝と22mの間隔で平行し、1号も14m間隔で4号と平行し、現在の字界と一致している。畠跡とした場合、現在の字切とは様相を異にして数枚分が推定できる。耕作面は、断面の所見によると現地表下約40cm付近にある。

### 7区5号溝（付図3）

市道をはさんで確認の状況が異なり、位置が10mずれるが同一の溝である。調査区を東西に横断し、長さは約60mあり、一方の端は崖線際まで続く。市道の西側では、3号古墳の墳丘部を大きく切断し、上幅約2m、深さ1.40mで、掘り方はローム層まで及んでしっかりしており、直線的である。覆土は、確認面から底面近くまで浅間山A軽石が埋め尽しているが、かき寄せによる人為的な埋没状態である。底面直上に粘性土が見られることから、一時的な冠水状態も考えられるが、強い傾斜もなく空堀様のものか。一方の東側では、A軽石の混入は少なく、上位から中位には古墳の葺石と思われるものが多量に投棄されていた。下位には、鉄分沈着があり粘性に富む暗褐色土があり、一時的な滞水状態が考えられる。断面覆土からは、上下3枚位に細分され、溝が埋没を繰り返すうちに規模を縮小させていく様子がうかがえる。現在の字界とは一部で重複し規模も大きいこと、断続的に構築されていることから、3、4号溝等に代表される畠地との境界をなす溝か。時期としては、東側の投棄された礫に混入して染付陶器が出土しており、覆土のA軽石と合せて近世後期頃か。西側は、軽石の処理場として埋没し、東側も消長を繰り返しながら葺石の投棄をもって最終埋没している。

## 4 道路状遺構（第457図）

この遺構は、6区中央部付近を横断する道路敷下で確認された。調査区内には10ヶ所近い道路が縦横断するが、下面を調査した唯一の例である。その範囲は、制約もあり長さ4mにすぎないが現在の路面下に更に続くことが推定される。遺跡付近の道路には、特定できないが鎌倉街道の伝

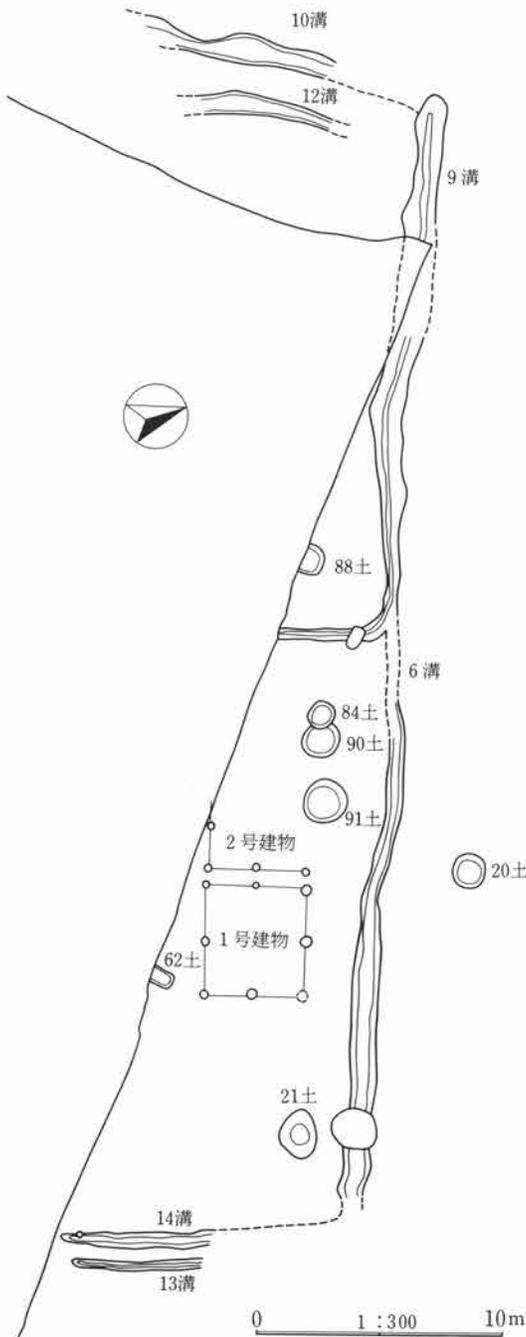


第457図 6区道路状遺構図

承があり、調査はその存否を確認することを目的とした。調査地脇の三叉路には、道祖神があり「〇〇庚〇天十月吉日、右ふじ岡・ちちぶ道、左翁道」と記されている。

道路路面は、現路面下50cmにある。北側は重機により削平し不明、南側は上幅約1mの側溝(9号溝)が付設され、路肩には長さ10~20cmの河原石を用いた縁取り様の石垣が見られた。石垣は半ば側溝内に崩落していたが2~3段が旧状か。路面は、幅約2.4m、ローム漸移土を平坦に削り出しているが、中央部に若干の固さが見られたものの、特に踏み固めた様子や小砂利敷、轍等は見られない。断面の所見では、現在の砂利敷を除いて浅間山A軽石を攪拌状態で多量に含む上位~中位までと、A軽石は混入程度で含まない下位~路面までとに土層が二分され、複数の路面が推定できる。遺構の時期としては、A軽石降下前と推定されるが、上限については断定できず、鎌倉街道と結びつく資料ではない。ただ、9号溝が南側で重複する溝状遺構は、周囲の平安時代の遺構と同じ覆土であり、9号溝に関しては、この溝状遺構より新しく、この重複関係からは年代的上限を凡そ平安時代以降、近世以前の枠内に求めることができる。(女屋)

## 5 近世遺構群(第458)



第458図 6区近世遺構群

この遺構は、建物跡、溝、土塚として個別に調査したが、屋敷跡として一括報告する。全体の遺構は、建物跡2棟、溝6条(6区6、13、14号、7区9、10、12号)と土塚がある。

全体の区画は、東南約10m離れて確認された道路状遺構とは平行し、これに面するか、基準にしたものと推定される。まず、全体は区画の溝がめぐり、南辺の2条(13、14号)を基点にすると北辺の7区10号溝まで約50mあり、東辺に6区6号溝がある。全体で南北約50m、東西は10m以上の長方形と推定される。この長方形は、6号の枝溝で東西に二分され、西側区画は整地、盛土を施し、一段高い。現状の調査範囲からは1軒分の屋敷としたい。

確認した溝は、その状況により差があるが凡そ上幅1mで一定し、空堀をなしていたか。東辺を画する6号は、屋敷側に面する法面に3～5段の石垣がふかれている。

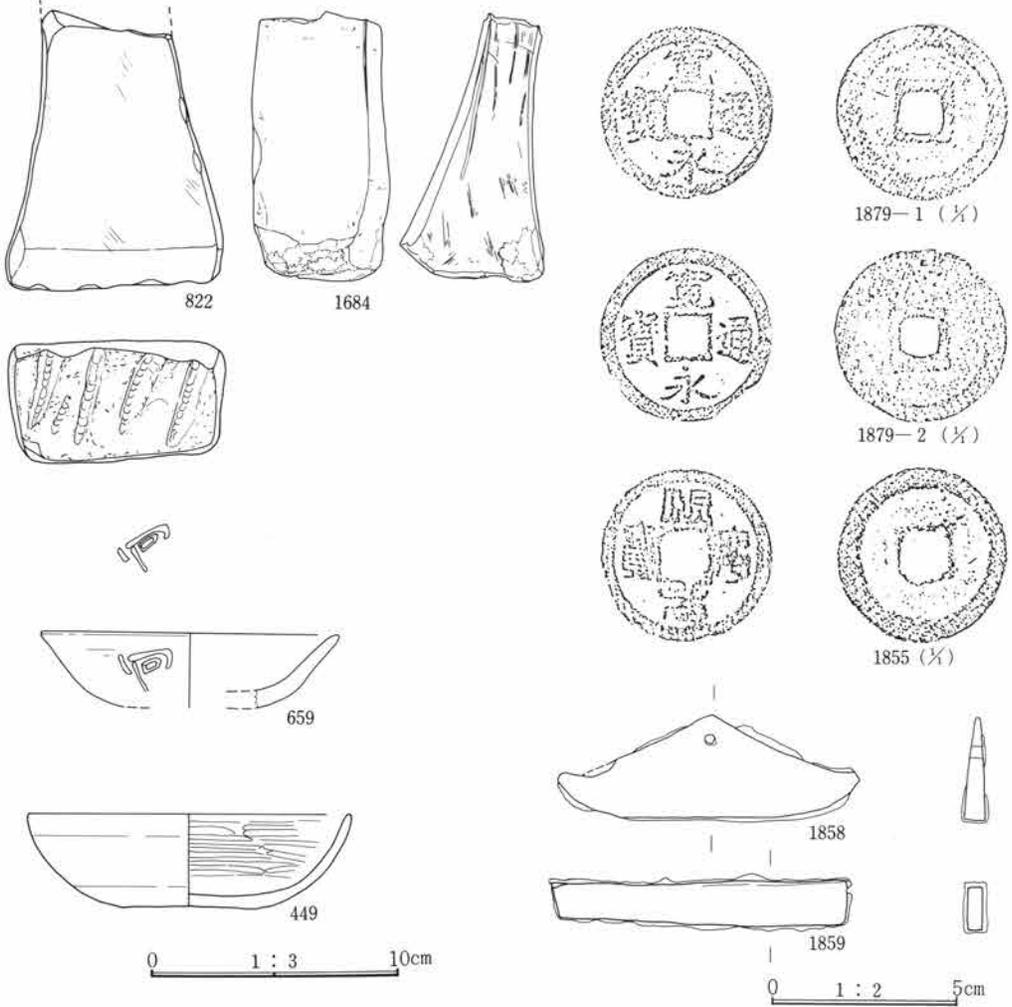
西側の区画は、東北隅を確認したにとどまるが、全体に整地され、盛土された様子が観察された。また、6号溝及び東西に分ける枝溝と盛土の間には、約20cmの段差で約60cmの平坦面がステップ状にある。この状況からして、中心的な建物は調査区外の西南側に推定されるか。

一方の東側の区画は、2棟の建物跡と土塚5基があり、いずれも浅間山A軽石を覆土に持つ。建物跡は、隣接する2棟のプランがあ

り、周辺に多くのピットがあることから新旧複数棟も推定される。

東側にある1号建物跡は、棟方向を東西に持ち、2×2間の規模である。桁行4.20m、梁行4mで、柱穴は上径約40cm、深さ約60cmの円筒形を呈する。底面は平坦で堅緻、礎石はなく、掘立柱

6 グリット遺物その他



第459図 グリット出土およびその他の遺物

式である。覆土の様子から浅間山A軽石の降下をはさんで建替えがあったものか。

2号建物跡は、1号と棟方向、規模等を同じくするが新旧が考えられる。柱穴は、やや小さくなり、東辺中央のものには扁平河原石の礎石がある。同じく掘立柱式である。

隣接する土坑は、長方形と円形のものがあり、後者にA軽石が多く、上面を河原石が覆っていた。6号溝にかかって5号井戸があり、内耳陶器が投棄されていた。

遺構の時期は、柱穴等の覆土に浅間山A軽石が見られることから江戸時代中期以降と推定される。調査前、この付近には蟹新田と通称された集落があり、下佐野町内では字翁、同原、同原新田の後に続くものか。遺構は、この東から西への開墾の経過に符号した、蟹新田内の初期屋敷跡の一部として位置付けることができる。(女屋)

第144表 グリット出土およびその他の遺物観察表

(第459図、図版182)

番 号	土 器 種 類	法量(口径・底径・器高) 遺存状態	胎土・焼成・色調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
449	埴 土 師 器	口—[13.0]、底—5.6高—3.8○ $\frac{1}{2}$	砂粒含むが、細密。酸化、やや硬質。橙色(内黒)	体部ゆるやかに内湾してひろく平底内黒の埴。底部回転糸切り後、ヘラケズリ調整。内面、ヘラミガキ、黒色処理。薄手で良質。	5区、P-31Gのピット群中
659	埴 須 恵 器	口—[12.0]、高—(2.9)○小片	砂粒を含む。還元、やや軟質。灰色	体下部で、丸く張りをもって、たちあがる。口縁部直行。体部ロクロナデ調整	体外面、墨書あり。文字不明
822	砥 石	長—(11.2)、幅—8.7、厚—4.8、硬質砂岩、断面、方形で、柱状の砥石、三面が砥面、裏面、及び端部に、列点状の敲打痕あり			6区、M-32G
1684	砥 石	長—(10.8)、幅—5.3、厚—5.8、流紋岩、断面、方形で、柱状の砥石、四面の砥面をもつ、両側面に太い条痕あり。中央部、使用による、薄化、折れ			4区、M-29G
1855	古 銭	熙寧元寶〔熙寧元年—1068、鑄造、北宋〕、表面、やや摩耗			6-9号住出土
1879-1	古 銭	寛永通寶		表面、やや摩耗	7区、Y-26G
1879-2	古 銭	寛永通寶			// //
1858	火打ち金	鉄製品、長—8.2、高—2.8、厚—0.6、両端のもちあがつた舟底形の底面で、頂部に紐穴のあく、三角形を呈し、断面も、底面の平坦な三角形である			6-20号住居跡出土
1859	火打ち金	鉄製品、長—(8.0)、幅—1.2、厚—0.4、断面、方形で、長方形の鉄片、1858と組合わせて、使用したと思われる			6-20号住居跡出土

### 3、ま と め

#### (3) 平 安 時 代

##### 1 平安時代の土器について

###### はじめに

本遺跡の平安時代の遺物は、そのほとんどが、竪穴住居跡より出土したもので、その他は、溝・土壇・井戸等より出土している。数量は、パン箱数で、220箱、そのうち、記載し得たものは、約1100点である。遺物の種類は、土師器・須恵器・灰釉陶器等の土器、土錘等の土製品、砥石等の石製品、刀子・釘・馬具<sup>註1</sup>等の鉄製品である。

遺物の整理にあたっては、遺構に帰属させることを、第一義とし、凡例でも記したように、住居跡より出土した遺物類は、床面直上、あるいは、それに近い状態で出土したものが、その住居の使用時点で最も近い時期と、その有様を示すと考えた。住居跡内出土の遺物は、住居の埋まり方と、その時間巾をどう考えるかにかかわってくる。当遺跡の平安時代の住居跡は、総じて、確認面から床面までが浅く、観察が充分に行えなかったが、少なくとも、住居廃棄後の埋没は、一気に人工的に行なわれるという事態は無かったようである。それにしても、意外と短時間の内に埋まったであろうことは、埋土が、単一土層であることが多いこと、覆土中の土器様相に、大きな差のないこと等からうかがえる。しかし、住居中から出土したものを、すべて同一時期と考えることは、個々の住居の埋まり方が規定できない以上、不安が残る。共伴頻度を示す数量処理等の方法が、こうした問題に答えを出す一つの方法であろうか。残念ながら、ここでは、そうした処理を行えなかった。そこで、住居が生活する場であった時点で最も近い、廃棄直後の遺物として、床面直上のもの、カマド内出土のもの、貯蔵穴出土のもの等を中心に、選択をし、記載した。また、掘方土壇出土のものは、参考資料として、記載をした。

###### 平安時代の土器について

私達が、調査によって手にすることの出来る遺物の中で、土器類が時期や時代の様相を、より良く反映すると考えられている。又、研究も多くの先学諸氏によってなされており、県内でも平安時代土器型式の編年がなされ、さらに地域差を考慮する段階<sup>註2</sup>に至っている。本遺跡においても、土器群の様相や、変化をみることによって、住居の時期の限定をすると共に、佐野の集落の出来方・あり方、強いては、当時の生活や、時代の様相を知る一助としたいと考えている。

本遺跡住居跡・土壇・溝・井戸出土の土器群は、縄文式土器と、古墳時代の石田川式・和泉式・鬼高式土器と、平安時代に属する国分式土器、中近世の土器群である。そのうち、弥生式土器のみられないこと、鬼高式土器もその一部分であること、真間式土器がみられないことが、特徴としてあげられる。平安時代に属する国分式土器をもつ遺構は、住居134軒、墓壇4基、溝10条で、年代は、8世紀末～9世紀初頭を初現とし、11世紀中頃まで建て替えられながら集落として存続したと思われる。

この平安時代の土器群をXI期に分離をしてみた。基準は主に、甕・坏・埴類の形態と、器種の組合せの変化により、遺構の重複関係、中沢 悟氏の清里・陣場遺跡における編年、坂口 一・<sup>註2-2</sup>三浦京子氏の中尾遺跡における編年を、<sup>註2-3</sup>からみ合わせて、住居毎に分離をした。以下、各期毎にその様相を述べてみる。

#### 第I期の土器群について（第460図）

4区3号住、8号住、29号住に代表される。土師器甕・坏、須恵器坏・鉢・蓋が認められた。

土師器甕は、謂ゆる、ケズリガメで、口径と胴部最大径がほぼ同じとなり、口縁部は端部に至って、わずかに内湾するゆるいくの字状、体部ヘラケズリ調整を行い、底部は小さい。器肉の調整が発達してきており、薄手の仕上がりである。坏は、前代よりの底部手持ちヘラケズリ調整、体下部指頭ナデ、口縁部ヨコナデの調整を行う坏で、底部が平底ぎみとなり、体部は丸く内湾して、たちあがる。

須恵器坏は、体部直線的にひらき、底径1に対し、口径1.6～1.7である。底部の切り離しは、回転ヘラ切り・回転糸切りの双方がある。鉢は、体部直行し、体下部に稜をもつ。底部回転ヘラ切り後、高台を貼付している。蓋は、天井部平坦で、回転ヘラケズリ調整を施し、中央凹むボタン状鈕みを貼付する。

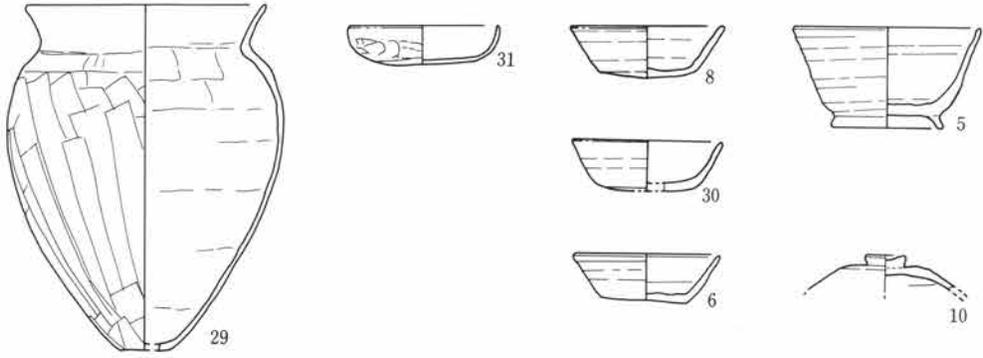
#### 第II期の土器群について（第461図）

3区3号住、4区34号住、35号住、36号住に代表される。第I期とII期の差は、主だって、土師器甕・坏の形態変化にあり、須恵器坏・埴類での変化は明確でない。

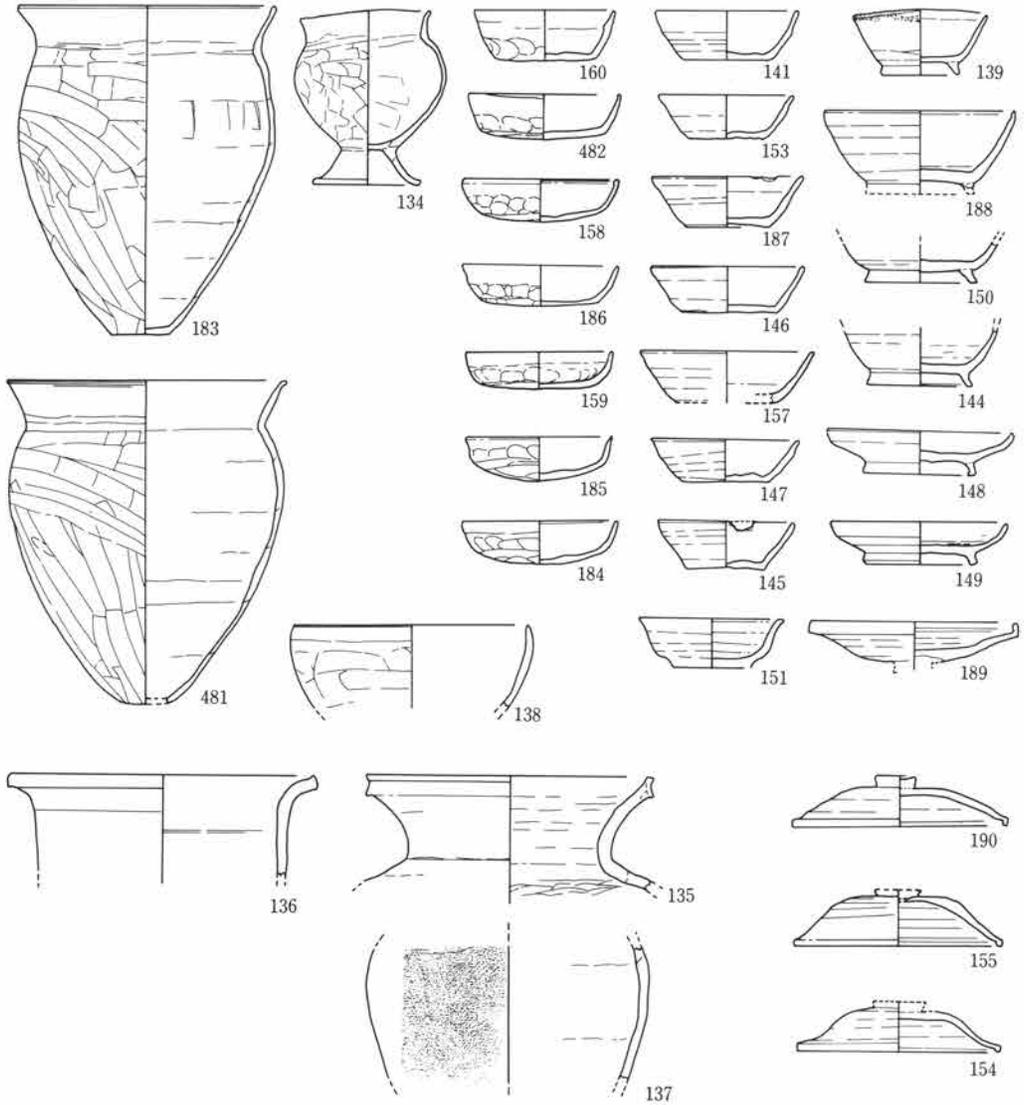
土師器では、甕・小型台付甕・坏・鉢があり、須恵器は、坏・高坏・高台付埴・皿（盤）・蓋・甕・甗があり、須恵器の占める割合が多くなる。

土師器甕は、最大径を胴上部に持ち、頸部くびれて、くの字状に外反する。体部のケズリ調整は強く、器肉薄手となる。小型台付甕も補助的な煮沸具として存在する。坏は、従来の手持ちヘラケズリの坏が、全体的に平底化へ進み、体部内湾のカーブを持ちながら外行する。前期よりも口縁がひらき、端部を外側につまみ出しているものが多くなる。土師器坏の中で、No160は、須恵器坏を模倣しているかと思われる。平底で、体部直線的にたちあがり、底部回転ヘラケズリ、体下部は指頭ナデ、口縁部ヨコナデである。胎土・焼成とも土師器で、器形と底部の調整が須恵器である。第I期（第460図）No30と伴に、注目される。

須恵器の坏は、大きさ・体部のたちあがり方で、いくつかに分類できるが、ここでは、強いて分類しなかった。大まかに、①体部直線的にひろがるタイプと、②体部わずかに内湾してひろがるタイプとがあり、さらに、③底部しぼり込みをする為か、体下部で張りを持つタイプが特筆できる。底部切り離しは、回転糸切りと、ヘラ切りとが共存し、No141は、周辺部回転ヘラケズリ調整を行っている古いタイプの残存と言えようか。埴類は、身がやや浅くなり、内湾のカーブを持つようになる。底部は、回転糸切り・ヘラ切り双方あり、回転ヘラケズリ調整のものもあり（No139）、貼付高台である。皿もあり、小型の盤とも言うべき折り口・高台付で、底部は、回転ヘラ切り、



第460図 第I期の土器群



第461図 第II期の土器群

無調整のもの(No148)と、回転ヘラケズリ調整のもの(No140)がある。埴、皿とも、全体の中での出土量は少ない。蓋は、天井部に平坦面を持ち、体部わずかに内湾しながらひらき、口縁部直立するもの(No190)と器高が高く、肩部に丸く張りをもち、体部中位で外反するもの(No155)とがあり、後者が多く見られる。又、前者と同形の身の作りで、高坏となるもの(No189)もあり、注目される。甕は、大型・中型とあり、体部の調整は、外面、平行タタキ目、内面無文のアテ具痕である。甕と思われ<sup>註3</sup>る器形のものも出土している(No136)。

この期に属する4区43号住では、カマド左袖内側より、カマド様の土製品が出土しており注目される(346頁・第260図)。内外面に粘土積痕を残し、調整も粗雑なナデのみで、底部平面形は方形を呈すると思われる。体部の器肉は薄く、接地部のみ肥厚し、二次的加熱痕と、ススの付着から、実際に使用されていたと考えて良いだろう。移動式の置きカマドと言うよりは、従来のカマドの内に据え、袖部粘土を両側に貼り付け、補強して使用した、カマド材と考えられる。県内でも、同類の出土例は少なく、高崎市雨壺遺跡<sup>註4</sup>と群馬郡箕郷町生原飯森遺跡<sup>註5</sup>にある。雨壺遺跡の例と比べると、各々に残存部位が異なるためかタイプが違うようである。把手の存在は不明であるが、残存高よりみて、無い可能性がある。口径も不明である。体部の成整形、及び胎土・焼成は似る。他県の例では、新潟県佐渡郡金井町旗射崎遺跡<sup>註6</sup>出土のものに似るかと思う。本遺跡でも唯一の出土例でもあり、今後の類例増加を待って、再考したい。

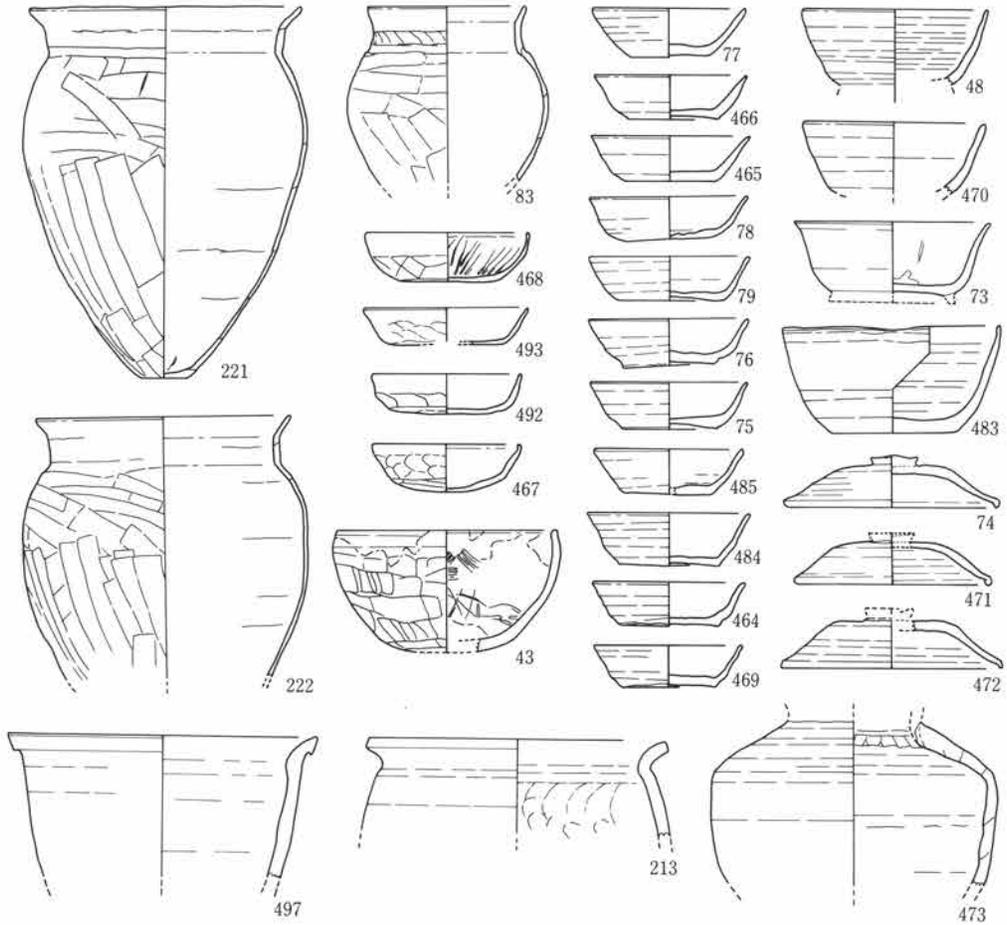
### 第Ⅲ期の土器群について(第462図)

3区1号住、4区13号住に代表される。土師器の甕が、口縁部コの字状を呈しはじめる。コの字口縁完成直前の一群と言えよう。基本的な土師器、須恵器の器種、組合わせに変化はない。

土師器では、甕・小型台付甕・坏・鉢、須恵器では、坏・埴・甕・壺・甗がある。

土師器甕は、煮沸具の中心で、体部卵形で、頸部くびれて、わずかに外行しながらたちあがり口縁部はさらに外行する。明瞭なコの字状口縁直前の形状と言える。小型台付甕も同様の口縁部変化をもつ。坏は、平底化が進み、底部より体部のたちあがり<sup>註6</sup>が明確となり、口縁部外反するものもでてくる。丸い鉢もある。

須恵器坏は、①体部が直線的にひらくもの(No77、465、466)②体下部に丸い張りをもち、口縁部わずかに外反するもの(No75~79)③底部のしぼり込みで、体下部に張り、あるいは段をもち、口縁部外反するもの(No464、469、484、485)の3つに分けられる。①の類は、前代からほとんど変わらず存在し、③の類は、第Ⅱ期よりみられ、②の類は、この期になって出現するようで、土師器の坏にも影響を与えていると思われる。3器種ともに、底径に対する口径は、1:1.6~1.8である。底部は、①には、回転糸切り・無調整のもの、ヘラケズリ調整のものを含み、③には、回転糸切り・回転ヘラ切りがある。②の類はすべて回転糸切り、無調整である。埴類は、大振りのものが主体で、No73のように、体下部に稜をもつものと、体部内湾ぎみのものがある。鉢もあり、底部回転糸切り後回転ヘラケズリを施している。蓋は、天井部から体部への変換がゆるやかで、口縁部の作りも丸味をおびて、シャープさに欠ける。その他、壺・甕・甗と思われ



第462図 第III期の土器群

もあるが、坏・蓋類と共に、灰白色を呈し、やや軟質である（No473、213、497）。碗類は、従来の還元、焼き締めで硬質である。

第IV期の土器群について（第463図）

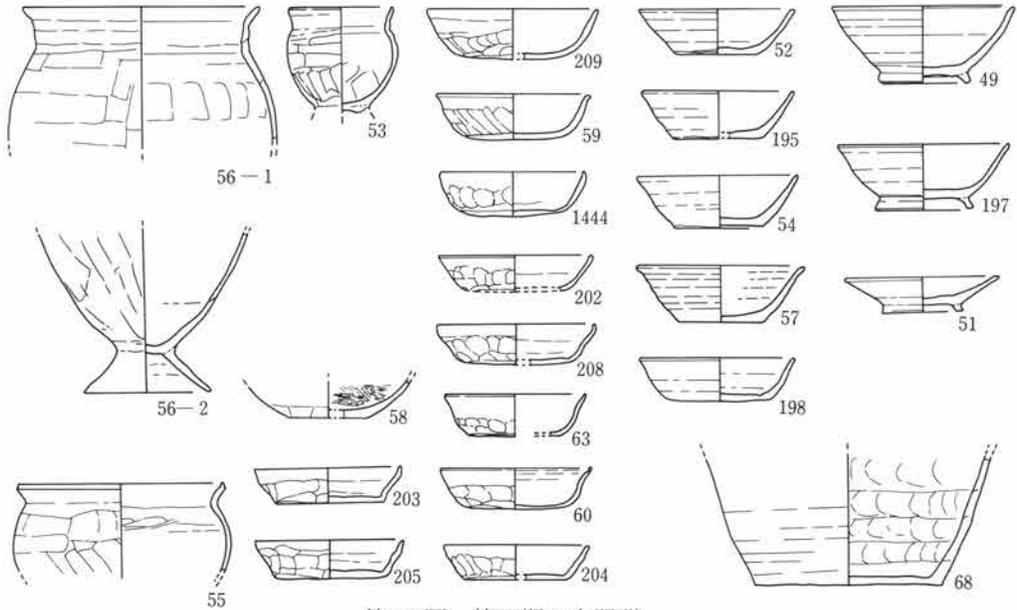
4区14号住、16号住、45号住に代表される。

土師器の甕が、コの字状口縁となり、体部のヘラケズリ調整も完成期に入る。

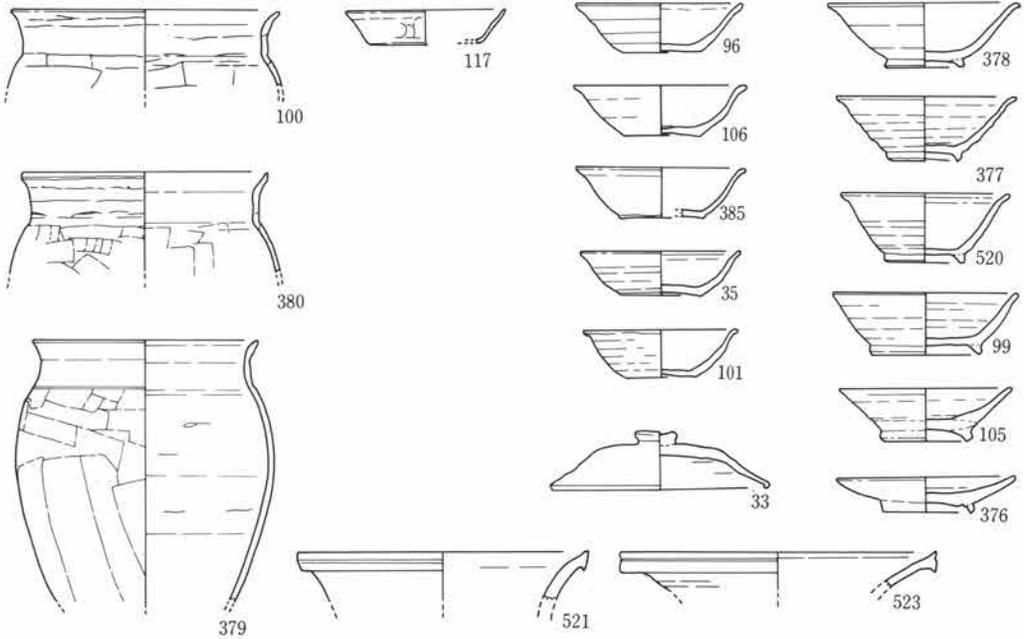
土師器は、甕・小型台付甕・坏で、III期にみられた丸い鉢がみられなくなる。須恵器は坏・碗・皿・甕があり、蓋は極端に少ない。

土師器甕は、胴部上位に最大径をもち、頸部しまつてたちあがり、口縁部を外反させる。口頸部内面に二段の稜をもち、体部はヘラケズリ調整によって器肉を薄く仕上げている。この手の甕には台付と、小型平底の場合とがあるようだが、必ずしもセットとして確立していない。坏は平底で、体部はゆるいS字状に湾曲してひろがる。口縁端部は内側につまみ出すことが多い。粗雑化が進むことも指摘できよう。

須恵器坏は、体部が直線的にひろくものが主体で、口縁端部を外側につまみ出すものも出てく



第463図 第IV期の土器群



第464図 第V期の土器群

る。底径に対して口径が、1.9~2.0になる。底部は、回転糸切り・無調整のもののみである。碗類は、III期とは様子が異り、体部のびやかに内湾してひろがり、口縁端部わずかにつまみ出し外反させている。底部は、回転糸切り後、貼付高台で、高台断面は、やや外行する四角形で、全体にていねいな作りである。器肉も均質・薄手である。すでに、灰釉陶器等の器形を意識しているかと思われるプロポーションと作りである。又、皿もあり、碗の器形とあわせて、注目されよう。

## 第6章 検出された遺構と遺物

やや大型の須恵器の甕は、平底で体部やや細身、体外面ヨコナデ調整、内面には無文のアテ具痕を残す。

この期は須恵器の変化が目につく。特に、埴の器形に代表されるように、須恵器従来の伝統的な器形ではなく、他からの影響を受けて、大きく対応を変えてゆくぎざしの見える時期である。

### 第V期の土器群について（第464図）

4区21号住、24号住、5区7B号住に代表される。コの字状口縁の甕は、前期で完成するが、ケズリによる調整がすでに退化傾向をあらわす時期である。

土師器は、甕と小型甕があり、坏もあるが極く少量である。須恵器は、坏・埴・皿・蓋・甕・瓶がある。

土師器の甕は、器肉がやや厚手となる。コの字状口縁は、明確さを欠き、頸部くびれて立ちあがりながく、口縁部外反するが短かくなり、内湾したりする変化もある。坏は、平底で体部ゆるく湾曲してひろがる。口縁部は、内湾ぎみで、IV期の坏よりひらく。

須恵器坏は、体部直行してひらくタイプと、体部内湾し、口縁部つまみ出しによる外反が強いタイプとあり、後者が主体を占める。底部はすべて回転糸切り・無調整である。底径に対する口径は、1:2となり、底径が小さくなる傾向がみられる。高台付埴は、体部わずかに内湾して大きくひろがり、口縁端部つまみ出しによる外反が明瞭となる。底部は回転糸切りで貼付高台・高台断面は四角形である。器肉は薄手、均質で、灰白色を呈し、やや軟質の焼成である。一方、器肉が厚く、体部直線的にひらく一群もある。皿もあり、No.376に代表される。還元焰焼成・硬質で、底部回転糸切り、貼付高台、高台端部丸味をおびる。蓋も少量ながらみられる。肩部ダレて、口縁端部の丸味強い。

この期で特筆されるのは、須恵器坏・埴類に、灰白色、軟質で、器形が灰釉からの影響をはっきりみせるようになることと、燻焼成の埴がみられる（No.377）ことで、IV期にみられた変化がさらに強まる時期である。

### 第VI期の土器群について（第465図）

4区5号住、5区10号住に代表される。この期は、羽釜が共伴することによって分離できる。羽釜の登場に伴って、他の器種にも変化がみられる時期である。

土師器甕は、煮炊具として、依然その位置を占め、小型台付甕も、その補助的な役割を果している。坏もある。須恵器は、坏・埴類が増加し、羽釜・甗・瓶・甕・鉢と、須恵器の伝統をひく器が増加する。（第290～292図参照）

土師器甕は、コの字状口縁の形を残し、No.19のように前代からひき続くものもある。全体的には、コの字がくずれ、ヘラケズリによる器肉調整が弱まって、さらに厚手となる。坏は、定型からはずれたようなものが散見する。（No.426）

須恵器の坏は、体部内湾し、口縁部つまみ出しによる外反の強いタイプが主流で、すべて底部回転糸切りによる切り離しで無調整である。底径に対する口径は、1:2.0～2.2で、還元焰焼成

である。高台付碗は、2つのタイプに分けられる。一つは、前期よりの、体部ゆるやかに内湾して、口縁部を外反させる、薄手・均質で、灰白色を呈し、焼き締りはないものである(No.13、14、419)。もう一つは、体部直線的にひろがり、口縁部内側に稜をもつ程強い外反をさせるものでこの期より、羽釜と伴に出現する。勢いを感じさせる作りであるが、やや粗雑で、高台はがっしりした四角形であることが多い(No.416、417、420、421)<sup>註7</sup>酸化焰と還元焰焼成のものがある。(No.422)は前者に含まれる皿である。羽釜は、口縁部内傾するものと、直行するものがあり、焼成も酸化・還元が共存する。甗の新たな登場も、特筆できる。全体の形を見ることが出来るのは小型品としての(No.16)と大型品として7区18号住(No.899、第366図)である。羽釜と伴に定型化して出現していると言える<sup>註8</sup>。又同じく、5区10号住より出土したNo.428の甗は、須恵器広口甗で、胴上部に羽釜状の鏝を付したもので、羽釜生産を考える上で興味深い(第292図)。灰釉陶器浅碗も出土している<sup>註9</sup>。

#### 第VII期の土器群について(第466図)

5区6号住、3B号住に代表される。VI期とそれ程大きな時間差はないと考えられるが、羽釜の占める割合が、飛躍的に大きくなる。

土師器では、甗・小型甗のみで、羽釜・甗、須恵器坏・碗・甗・瓶があり(第281図、No.364)灰釉陶器の碗・瓶も共伴する。

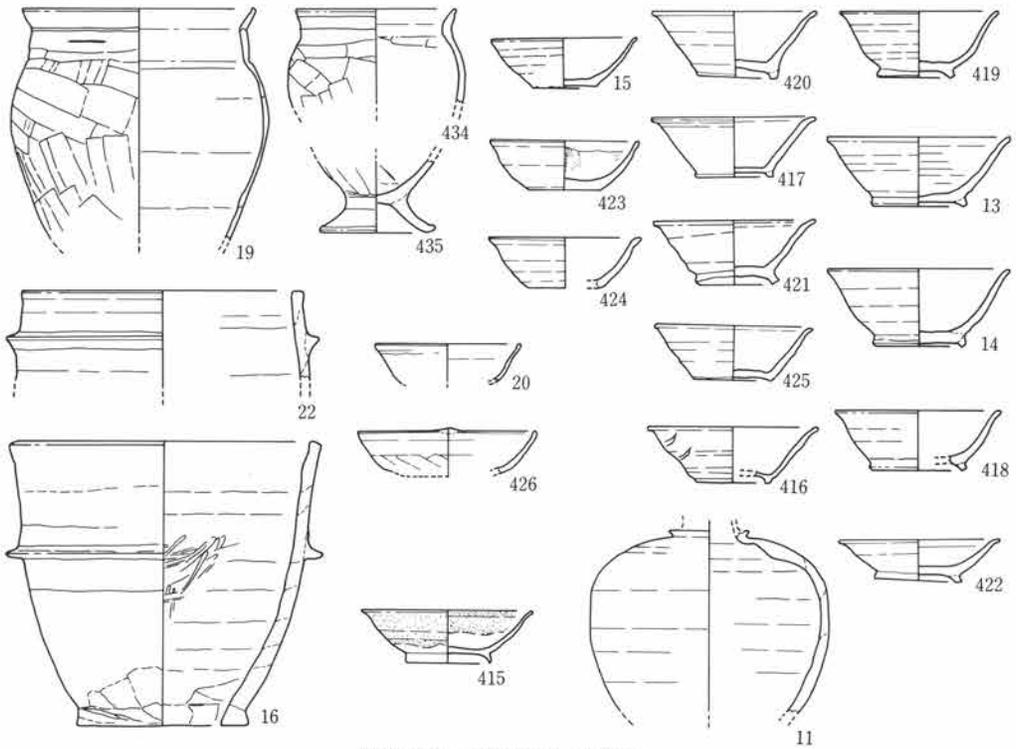
土師器甗は、口縁部ゆるいくの字に外反し、器肉が厚い。

須恵器坏は、前期と同じタイプのものであるが、口縁端部の外反が、やや丸味をおびてくる。還元と酸化、両方の焼成があり、還元のもの焼きしまりが無い。高台付碗は、体部の内湾するものと、直行するものと二種があり、双方ともに、酸化焰焼成が多くなる。前者は、口縁端部外反するが、やや肥厚し丸味をもつようになる。後者も、VI期のように、外反が強くなく、丸味をおびてくる。両者とも、高台は、がっしりした台形のものが多いが、作りが粗雑なものがみうけられ、器肉の厚いものがでてくる。羽釜は、口縁部内傾し、端部に平坦面をもち、鏝断面三角形である。胴上部に最大径をもち、卵形であろうか。甗も、口縁部平坦で、大型品、底部筒抜けで脚部くの字に外反させる。焼成は、酸化焰によるものがほとんどである。須恵器の甗類は、体部タキ締めて、外面ナデ消し、内面は無文のアテ具痕を残し、還元焰焼成の、従来の手法のものである、大型品が多い(第276図)。一方、粘土積痕は残すが、ロクロナデ調整によって、整形し、回転ヘラケズリ、あるいは、体下部ヘラケズリを行う羽釜の製作技法と同じ、広口甗・瓶が、前期につづいて盛行する。酸化焰焼成が主で、中型品である。5区6号住のセットをみると(第281図)、灰釉陶器の模倣の感を強くする。灰釉陶器の共伴例が増え、器種では、皿・碗・瓶で、ほとんどが、東濃産のものである<sup>註10</sup>。

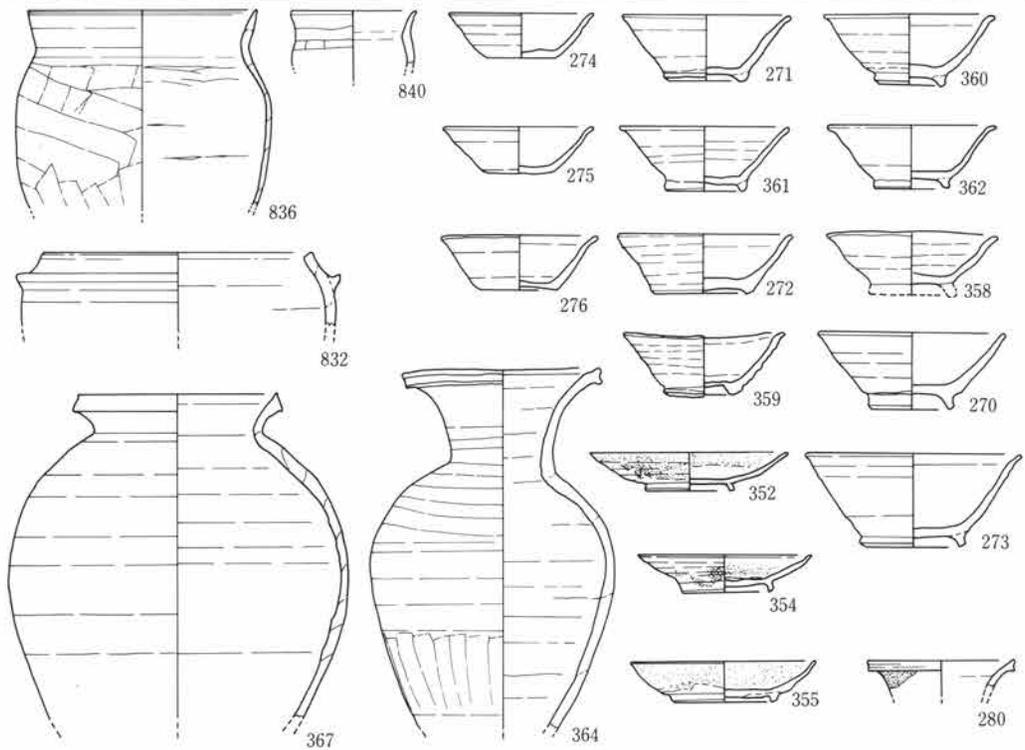
#### 第VIII期の土器群について(第467図)

5区8号住、6区19号住に代表されるこの期に至って、土器類は、ある種の規制をはずれたように、器形及び焼成の上でも変化をみせる。

第6章 検出された遺構と遺物



第465図 第VI期の土器群



第466図 第VII期の土器群

土師器は甕が未だ残り、羽釜・ロクロ調整の甕・甗・瓶、そして、須恵器の伝統を残しながら変化する坏・埴類である。その他、内面黒色処理の埴、灰釉陶器も、皿・埴・瓶をそろえる。

土師器甕は、口縁部ゆるいくの字状で、口縁端部外側に肥厚し、沈線をめぐらす。器肉は厚手であるが、体部は相変わらずヘラケズリを施す。大・小のセットとしてある。

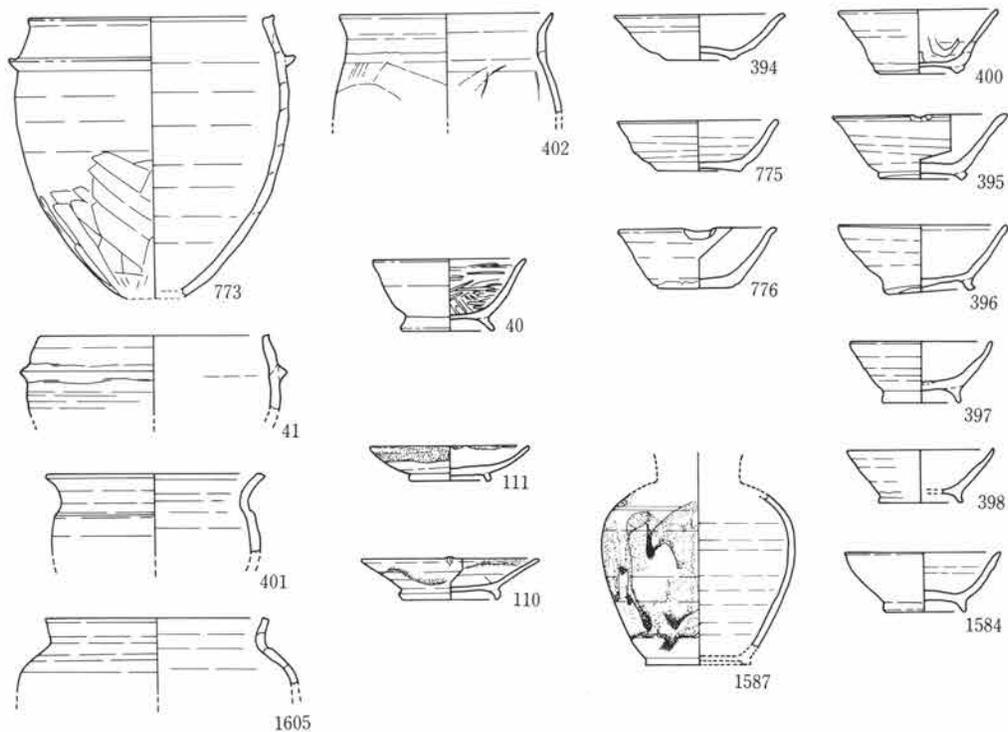
羽釜は、口縁端部平坦面をもち、体部卵形のものが多いが、口縁部にたちあがり傾向をみせる。口縁端部水平となり、外側につまみ出す格好になる。還元・酸化両方の焼成がある。小型の甕があり、ロクロ調整・酸化焰焼成で、前代からの、土師器小型甕に替わるものとして作られたようだが、量的には主体を占めない。長期に渡る器種として、命脈を保たないようで、時期的にも限定されるかもしれない。甗は、大型品が主流で、器形その他は大きな変化をみせないが、出土量は、減少する。坏類は、①体部内湾し、口縁部やや丸味をもって外反するもの(Na394)②体部やや下位で張りをもって内湾し、口縁部丸味のある外反するもの(Na775)③内底部から体部へ区切りをもち、直線的にひらいて、口縁部丸味をもって外反するもの(Na776)とがあり、①は底径に対する口径が1:2.5で、底径の小型化が目立ち、器肉が薄手の作りである。②③のタイプは、底径に対する口径が1:2で、器肉が厚手である。②がこの時期より出現するもので、次に述べる埴類の変化とあわせて、注目される。③は、VI期より出現した高台付埴の無高台のものである。高台付埴は、①体部直線的にひらき、口縁部外反するもの(Na395、400)②体部わずかに内湾し、口縁部直行するもの(Na396~398、1584)とがある。①は、VI期より出現する埴で、器肉厚手となり、口縁部の外反は弱まって丸味強くなる。②は、この期に出現するもので、体下部の張りの強いこと、焼成は酸化焰で軟質であること、やや身の浅い傾向にあることなどが特徴としてあげられる。(Na396~398)は、大・中・小と法量に差をもつセットと考えられる。やや粗雑ではあるが、謂ゆる土師質土器の初現の形と考えて良いだろう。両タイプとも、高台は台形でやや外行する。①のものは粗雑化が進む。その他に、内面ヘラ磨き、黒色処理をした埴がある。この手のものは、出土量が極端に少ない。灰釉陶器も、前期同様、出土量は多いと言えよう。

#### 第IX期の土器群について(第468図)

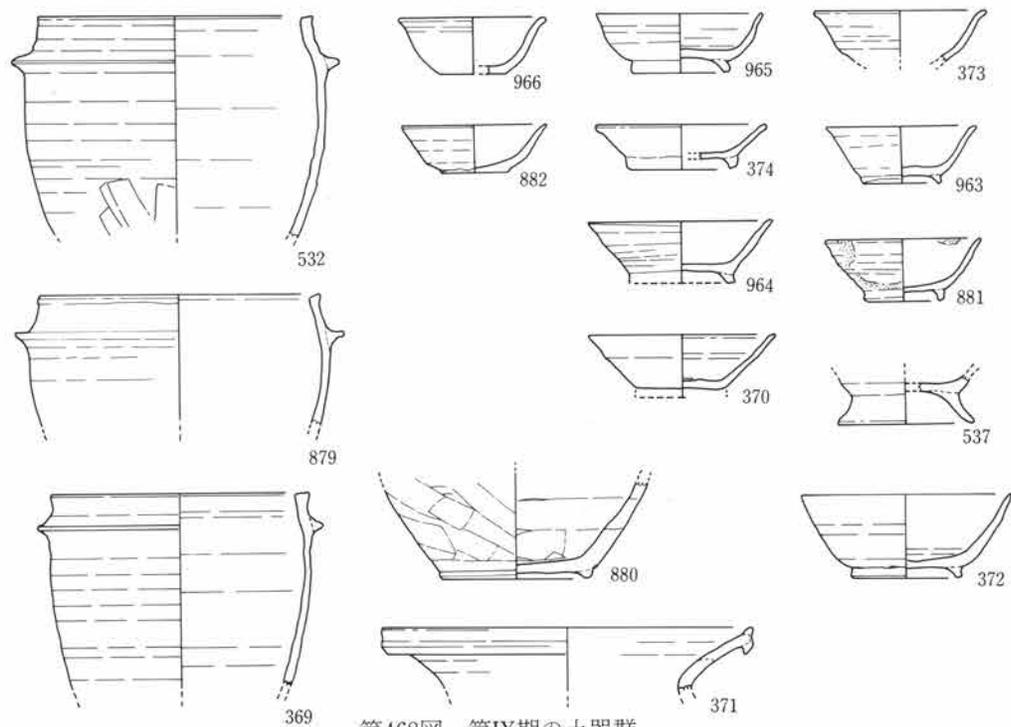
5区7A号住、7区16号住、27号住に代表される。土師器は、わずかに甕類が存続する。煮炊具は、羽釜が中心で、甗・甕・瓶があり、什器として、謂ゆる土師質の坏・埴類が本格化する時期といえる。

土師器甕は、器形の全容は不明であるが、頸部ゆるくしまつて口縁部外反するルーズシルエットで、器肉厚手、口縁端部外側に沈線をめぐらす。

羽釜は、口縁部の立ちあがり傾向がさらに強まる。口縁端部中央に凹線がめぐり、鋸断面は端部が丸い三角形である。甗も同じような変化をみせる。坏は、体下部に張りをもち、口縁部わずかに外反する。VIII期の坏②タイプが多いが、小型で、身の深めのものもみられる。双方とも、器肉は厚手である。高台付埴は①体部直線的にひらくもの、②体部内湾のものがあり、それぞれに、口縁部外反の有無・身の深さ・高台の形のちがいで、数種に分類できる。この中で注目され



第467図 VIII期の土器群



第468図 IX期の土器群

るのは、高足高台碗の存在で、大・小とある。体部は内湾する②のタイプで、口縁部丸味をもって外反する。Ⅷ期（第467図）No40の内黒碗と近似したプロポーションである。又、No372・965は、Ⅷ期で②とした碗に相当し、体下部に強い張りをもつものが特色である。灰釉は、碗・浅碗が出土しており、大原2号窯式期、及び、虎溪山1号窯式期<sup>註11</sup>のものである。

#### 第Ⅹ期の土器群について（第469図）

5区49号住、59号住、6区2号住に代表される。この期は、謂ゆる土師質土器の盛行期である。土師器はほとんどみられず、羽釜・甑・瓶・坏・碗・灰釉陶器碗がある。

羽釜は、口縁部のたちあがり傾向はさらに強まり、口縁端部も丸味をもつ。No665にみられるように、器高の浅くなるものが出現する。又、従来、底部～体下部までのヘラケズリ調整が、鏝直下まで行うようになることも新しい変化である。坏類は、小型坏がみられる。Ⅷ期で坏②としたものが小型化すると思われる。器肉は厚手で、焼成は酸化・還元両方がある。碗類は、①体部内湾してひろがり、高足高台を持つもの（No125、516）②体下部で内湾し、口縁は直行する身の浅い碗（No670）③体部直行してひろく碗とがあり、Ⅺ期に比べて、いずれも、整った器形をもつ。口縁端部が薄手となり、特に③にその傾向が強い。酸化焰焼成が主で、還元のものもあるが、いずれも軟質で、低火度焼成である。共伴する灰釉陶器としては、No515がある。やや小振りの浅碗で、体下部わずかに回転ヘラケズリ調整、口縁端部、丸く外反。高台は、貼付高台で、断面端部の丸い台形。釉がかりは、薄く漬けかけである。東濃産で、虎溪山1号窯式<sup>註10</sup>にあたる。

#### 第Ⅺ期の土器群について（第470図）

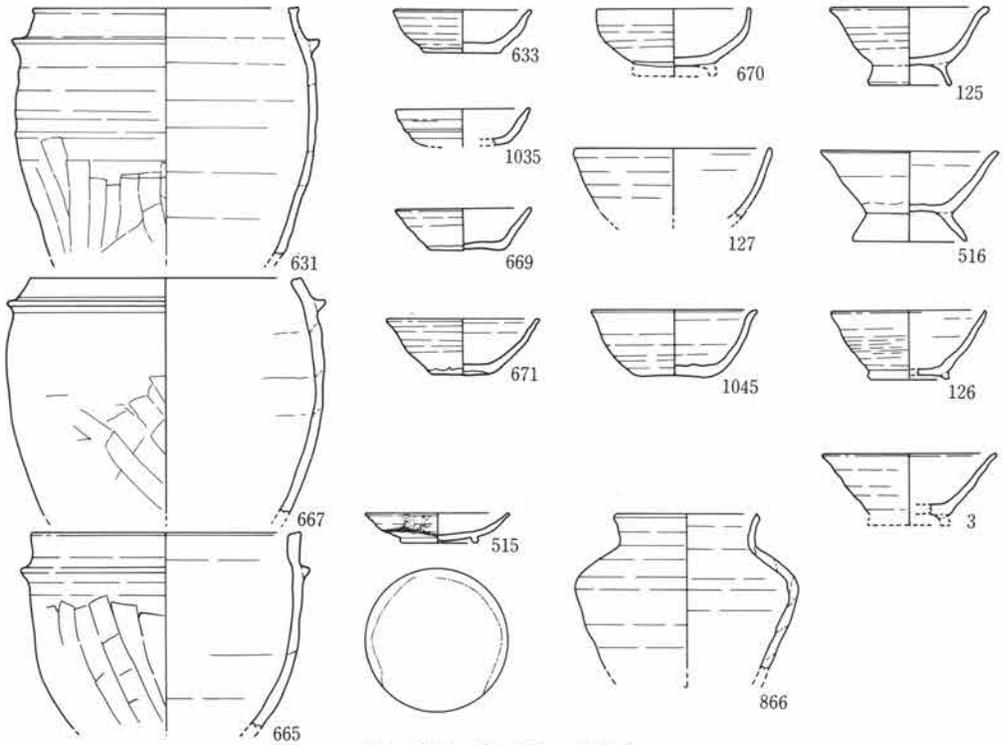
4区7号住、63号住、5区55号住に代表される。第Ⅹ期との分離は、高台付碗類の変化による。器種は、羽釜・坏・碗・小型甕があり、従来の土師器はみられない。灰釉陶器碗・浅碗があり、内面黒色処理の碗が共伴する。

羽釜は、体部にゆがみが多く、一定のプロポーションを示さなくなる。口縁部は立ちあがり、端部は丸味をもち、中央に沈線がめぐる。鏝は断面が丸い三角形である。体部の調整も粗雑化し体上部までのヘラケズリも行っている。坏は、体部直線的にひらき、口縁端部丸く、底径に対する口径は、1：2.5となり、底径が小さくなる。器肉厚手で、これも、器形、調整の粗雑化がみられる。高台付碗は、体部内湾し、口縁端部小さく外反、高台断面三角形のていねいな作りで土師質土器である。内面黒色処理の碗も、ほぼ同じ器形で、双方の影響のあり方を示唆する。Ⅹ期碗①高足高台碗や③の碗に相当する碗類も存在するが、前期よりさらに、口縁端部を薄く仕上げ、特に、No560のように、③類の碗では、口縁部と体部の間に稜をもつ。灰釉陶器は、いづれも底部に回転糸切り痕を残し、口縁端部、薄手にひき、体下部はナデ調整のみである。高台断面は、端部の丸い三角形で、外側に張る。灰釉陶器碗・内面黒色処理の碗・土師質の碗が、ほぼ同様の器形の特徴を示すことが指摘できる。碗類の変遷をみる上で注目したい。

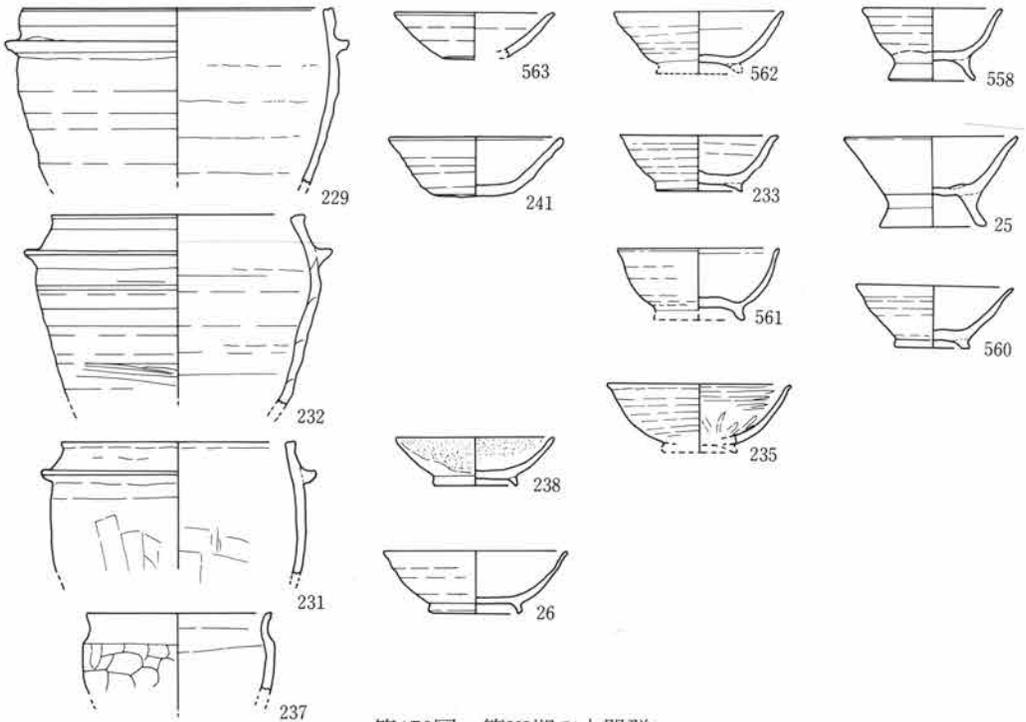
#### 各期の特徴

以上、各期の様相を概観したが、その特徴をまとめてみると、第Ⅰ～Ⅴ期までは、煮炊具が、

第6章 検出された遺構と遺物



第469図 第X期の土器群



第470図 第XI期の土器群

土師器の甕で、そのうち、IV期は、コの字状口縁の甕完成期である。IV期を中心にして、以前はコの字状口縁へ発展する変化、以後は衰退する変化を分離の目安とできる。又、同時に、須恵器では、IV期において、還元焰焼成の焼き締りのない高台付碗・皿が出現してくる。これは、灰釉陶器の出現と無関係ではないだろう。VI期～XI期は、羽釜の出現と、その発展変化の時期としてとらえられる。VI期は、羽釜と土師器甕の共存期であり、VII期からは、羽釜が、煮炊の中心的存在となる。VIII期からは、IV期より大きく器形を変えながらも命脈を保ってきた須恵器の碗類が、土師質土器と呼ばれる碗類に変化しXI期に至る。大ざっぱにみても、須恵器が、生活用具の中心にくだんでゆく過程と、さらには、変質をせまられてゆく過程が、おぼろげながら見えてくるようである。

### 実年代との対比

各期の実年代の対比は、本遺跡で独自に決定し得る資料を手にするのができなかったため、他遺跡での成果、研究を援用させていただいた。本県でも、実年代を推定し得る資料がいくつかあり、又、須恵器における実年代観も示されつつある。ここでは、中沢氏の清里・陣場遺跡の編年と対比させて、実年代を想定したい。

I～III期は、陣場1期にあたり、9世紀前半までに比定されている。そのうち、I期とII期の須恵器坏類は、8世紀代からの技法の伝統を残しており、8世紀末～9世紀初頭の年代が与えられる。IV、V期は、陣場2期に相当し、9世紀中頃～後半であろう。そのうち、V期は、須恵器坏に10世紀代に比定される要素を含み、9世紀末～10世紀初頭とも言えよう。VI期は、羽釜の出現が指標となり、V期に接する、10世紀初頭であろう。VII期と伴に、陣場3期である。VIII、IX期は、坏碗類に謂ゆる土師質土器の出現がみとめられ、陣場4期に相当する。10世紀後半である。X・XI期は、中沢氏の言われる土師質小型坏の出現により、陣場5期に相当させ得る。11世紀前半～中頃であろう。

### おわりに

以上のような土器群を持つ住居のあり方を示したものが付図(3)である。I期としたものは、佐野の平安時代集落が、まさに出来始める段階として、特に注目したいと考え区別して表示した。

II・III期は、土師器甕コの字状口縁への過渡期としてまとめ、IV・V期は、コの字甕の完成と須恵器の変質の始まりととらえた。VI期は羽釜の出現期であり、VII期と伴に、須恵器変貌の一応の成功期とした。VIII・IX期は、土師質土器を作り出してゆく過程としてとらえ、X・XI期は、VI期以来、煮炊具の中心となった羽釜の粗雑化に加え、什器類が、小型器種の開発と酸化焰焼成の本格化に見られる、須恵器土器作りの伝統が全く変貌をとげてゆく期としてとらえた。遺物から見た佐野の集落は、平安時代に入って成立する村として決して特別な色合いを見せていない。まさに、庶民の村であつたらう。例えば、灰釉陶器は、出土量がやや多いと思われるが、質的には、釉が煮たったものや、ゆがみが多くあり一流品とは言えない。二～三流品と思われる。共存する時期も又、県内での平均的レベルである。むしろ、当地における様な、灰釉のあり方は一つの問

題を提起している。官営施設や有力者層に一流品が渡るのは、それなりの流通経路が想定できるとして、それ以外の、二～三流品は、どんな経過をたどって、庶民の手に所有されるのか。流通の仕組み、形態と、それを支配する権力構造の問題にまでかかわると思われる。

又、消費者側である佐野の集落の人々は、全体的な流れの中で、これと言った好みも見せず生活用具を享受していった様に見うけられるが、羽釜のあり方や、土製の甗が多いこと、坏・埴類に須恵器の伝統が強いこと等、特に10世紀以後は、生産地と深く結びついていた感が強い。近隣の地区には、乗附古窯跡群もあり、今後窯跡の調査例の増加を待って、生産地と使う側の集落の関連を追いたいと考える。

土器群の変化の中から、ひとつ画期を設けるとすれば、羽釜の出現と、その発展期であるVI期・VII期をとりたい。羽釜の出現期は、10世紀前半と言われており、“10世紀の変化”としてとらえられる。これ以後、羽釜に代表される土器群の消長は、従来の須恵器工人集団の変化、さらに集団を動かし規定する組織の変化、社会の基礎構造の変化をも類推させる。10世紀に入っの、集落のあり方と合わせて、一考を要するだろう。

以上、下佐野遺跡II地区の平安時代の土器について述べてきたが、分類についても、解釈についても、多くの誤りをおかしており、先学諸氏の労作を充分消化できず、悔いの残る文章となった。今後、下佐野遺跡I地区の整理を進めるなかで、再度検討してゆきたいと考えている。

## 2 平安時代の甗について (付図4)

平安時代の土器で、群馬県内を中心として出土する羽釜と呼ばれる土器がある。この羽釜に器形、成整形技法、胎土、焼成まで近似するが、底部が筒抜けで接地部は肥厚させて平坦面を作るか、須恵器甗の口縁部のようにくの字に外反させ、端部には外縁帯をもつ土器がある。この土器は破片で出土した場合、口縁部と体部は羽釜で、底～脚部は、逆転させて甗として取り扱われやすく、その為か報告例が少ない。県内では、田口恵子氏が、「羽釜状底部穿孔土器」との名称を与え、甗としての機能を有する土器と規定している<sup>註18</sup>。下佐野遺跡II地区でも同類の土器が出土しており、近年、月夜野藪田・洞・村主遺跡<sup>註19 註20 註21</sup>、吉井町黒熊遺跡<sup>註22</sup>、荒砥上川久保遺跡<sup>註23</sup>、高崎市田端遺跡<sup>註24</sup>等で、全体形状を類推し得る資料が増加してきたこともあって、当遺跡でのあり方を検討しながら、あわせて一応のまとめを行っておきたいと考えた。

まず呼称であるが、各土器は、それぞれ器形上変化をもち、共通するのは、蒸すという機能を持つことにつきる。むしろ、甗形土器、あるいは単に甗と呼んでさしつかえないと考える。以下器形及び製作技法による分類をして、検討してゆきたい。

I類 口縁部が須恵器甗様に外反し、外縁帯をもつもの・(a)体部タタキ目を残し、還元焰焼成、硬質である。①体部に把手、鏝のないもの (No.1) ②把手をもつもの<sup>註25</sup> ③体部に鏝をめぐるもの (No.2) があり、底部の作りはそれぞれ異なる。①②は大概有底で、ヘラによって椀状、円形、楕円形の穿孔を行っている。③のNo.2は、底部を丸く切り取り、内底部に、簀子を受ける棒受けの小孔を対にあげているのが注目される。(b)体部ロクロナデ調整によるもの①体部に把手、鏝の

無いもの(No.3、4、7) No.3は有底で穿孔、No.4は無底で、受け孔を持つ、③有鏝のもの(No.8～12)、すべて無底筒抜け、くの字に外反する脚か、接地部を肥厚させ平坦面を作る。受け孔は有無両方である。体部に内湾のカーブをもつのも特色である。

II類 口縁部が直線的で、鉢状にひらくもの(No.5、6～20)、今のところ、体部調整はすべて(b)のロクロナデで、下部にはヘラケズリ調整も行う。①無把手、無鏝のもの ②把手をもつもの ③体部に鏝をもつものに分けてみると、①は県内外とも見あたらず、②は県内での出土例を知らないが、県外では福島県いわき市塙遺跡、福島県石川町七郎内D遺跡、武蔵新久C-1号窯出土のものが相当する。県内では③がほとんどである。底部は、I類(b)③と同様である。No.5、6が硬質の須恵器である以外は、酸化・還元ともあり、軟質で低火度焼成である。

以上の分類を、伴出遺物の時期<sup>註28</sup>によって、大体に並べてみたのが、付図4である。気をつくままに、記してみると、(1)9世紀も早い段階から、両類とも存在する。(2)I・II類共に、須恵器の甑よりそれぞれに変化してゆく。(3)9世紀に相当する甑は、月夜野方面に集中する。(4)II類の時間差による器形、技法の変遷は、羽釜の変化と同一步調をとる。<sup>註30</sup>(5)両類とも、大、小の法量差があり、10世紀も早い段階で(No.14、15)小型のものは姿を消す。(6)No.1、2の間では、時間差があって、I類(a)①→③への変化、あるいはa-①→b-①への流れが設定できる可能性がある。

次に分布についてみる。I a類に相当する甑は、県内では月夜野地域でみられ、県外ではやや様相を変えるが、千葉方面に出土例が知られている。<sup>註31</sup>栃木県でも出土しているが、全体的に量的には、少なく、むしろ特殊視される土器で、系譜を求めるとすれば、関西地方での須恵器甑にゆきつくと考える。I b類は、月夜野から、埼玉北武蔵までであるが、量的には少ない。I b類③の段階に至って、月夜野方面(藪田東、大釜、村主)、前橋台地(清里・陣場、下佐野)、西毛地区(田端)<sup>註33</sup>と、ほぼ県西部を南北に走る分布を示す。II類は、b③がほとんどで、前橋台地(新波、舞台、雨壺、日高、中尾、鈴の宮、中島)、赤城山南(荒砥、上川久保)、埼玉北部の宮西遺跡<sup>註37</sup>等で出土例がある。II類はNo.5・6を除いて、羽釜との共伴が指摘されている。これによって、II類の発展期には、羽釜との関係は無視できないと言える。以上、ざっと分布をみたが、県内でも、中央部よりやや西側に、埼玉でも同様に分布するようで、これは、県内でも、西部と東部では、土器種及び、変化のあり方に、差があることのあらわれと言えよう。

さて、甑は、どう使われたかも考えてみたい。甑は、9世紀代のI-a類はともかく9世紀末～10世紀代とされた甑類は、ほとんどが、二次的な加熱の結果によるススの付着が認められている。内面に炭化物の付着も認められることから、実際に使用されたと言える。とすれば、下から蒸気を送るべき器が必要となる。そこで、図中の右に、各時期に想定される煮炊具を記入してみた。平安時代の甑は、大体が、底部脚状か、肥厚させて平坦面をもつ。前代にみられたように、甕に挿入する型式ではなく、上置き式と考えられる。土師器甕は、同時期の甑底径(15～18cm)に対して、大きめであり、何よりも、甑の自重が、3.0kg程ある。例えばNo.1は、7割方物を入れて<sup>註38</sup>たとして、約13000ccの容量を持つ。これを、水と考えると、13kgにもなるわけで、米にすると約

9升である。甕の自重と入れる物の重量とを考えれば、土師器甕はふさわしくないだろう。羽釜では、口径は20cmを中心に19~25cmの中内で、甕脚裾径は、18~26cmで、21cmを中心とする。上置き式と考えると何とか組合わせられる大きさではある。10世紀の甕は大型品が多く、自重も4~5kgで、容量は、罌までとして、No161-9971、416-13929、10-8597、11-7079ccであった。重さの点で、下の器は、やはり別のものを考えるべきかと思う。又、甕の内底径は、14cm前後で、内底部に設ける簧子は、15cm程のもので良いだろう。羽釜と共に、出現し、変化する甕が、使用時のセットとなりにくいとは残念ではある。この時期、鉄製品の存在も考えられるため、再考したい。又、住居内のカマドでの使用はどんなものであろうかと考えるが、甕によって何を作るのか、住居構造の問題ともからんで、にわかには、解答が出せないだろう。

以上をまとめてみると、甕は、蒸し器であることにほぼ間違いはないだろう。時期的には、9世紀前葉より存在するが、須恵器であり、器の性格も別と考えられる。須恵器甕から変化して、羽釜と共に出現し発展する甕は、羽釜と製作技法、焼成、胎土も区別づけがたく、羽釜の生産と同一の人々によって製作されただろう。しかし、羽釜と甕は、出土の様子が異なる。羽釜は、必ず同時期の住居には出土するが、甕は、下佐野の例で言えば、10世紀初頭では、2軒に1軒程で出土したが、それ以後では、極端に少なくなる。一軒に必ず必要な器とも言えない。とすれば、甕は、「ハレ」時の儀式用とするのが、妥当であろうか。一時的に盛行することからは「糰ほしいい」を作<sup>註39</sup>って貢納したとする説にも、大きな魅力を感じている。又、当然木製品の存在も考える必要がある。奈良時代から、曲物の容器は盛行しており、檜も又存在したと思われる。使い易さから言えば木製に利があるのに、何故、土製甕が再現するのか、そして、何故10世紀なのか。この問題は甕が、須恵器甕より変化してきたこと、羽釜と共に出現したことを抜きにしては、解決しないだろう。このことは、須恵器作りの集団の問題としても、とらえてみる必要がある。須恵器窯業集団は、8世紀~9世紀にかけて、ある転期をむかえている。一般雑器の生産拡大という形で、あらわされているが、住居内より出土する須恵器も増加し、質的な低下はありながら、全体としては、集団の転進としてとらえられる。さらに9世紀後半になって、東国へも灰釉陶器が流入し、こんどは、灰釉陶器の形を写したものを作ることによって対応をしている。が、さらに変化しつつある窯業の歯止め役として作り出されるのが、羽釜に代表される器であったと考えられる。そして、それが一定の効果をあげただろうことは、その後11世紀に至るまで、羽釜が煮炊具の中心的存在としてあり続けたことからもうかがえる。関西地方では、10世紀に土師器の釜註40（土釜）が一般住居で使われ、盛行しているようである。関西での動きと、関東での動きが、土師器と須恵器の系譜の違いはあっても、一致するわけで、10世紀という時代を考える上で興味もたれるところである。現在までのところ、群馬型の羽釜の分布は、上野~北武蔵の一部のようで、甕も又、同じ様な分布を示すのも当然であろう。

最後に、下佐野遺跡II地区における甕の様子をみてみると、次の様な事が指摘できる。①時期によって出土量にバラつきのあること、9世紀段階では、個体数も、出土住居も少ない。10世紀

段階で爆発的に増加し、特にVI期では、同時住居中2軒に1軒から出土する。10世紀後半～11世紀には、減少する。②甗出土住居の分布が、南北2群に分かれる。<sup>註41</sup>又、使用と所有の関係についても、VI期の状況は一考すべきであろう。③佐野は甗の出土量が多いのではないか。認識によって、一遺跡内での出土量が増加する可能性はあるわけで、現状では、出土例の多少について比較の具体例を持たない。が、相対的には、出土量が多いという印象である。このことに、先の土器のまとめでも記したように、生産地と直結した消費地としての佐野の一側面が見出せよう。又、一方で、こうした甗の使われ方が規定できるとすれば、佐野の集落と人々が、組み込まれていた組織の性格と、時代の様相を指し示すことができよう。残念ながら、そこに至るまでには、山積する問題があり、解決には程遠いが、甗の問題もまた、時代を体現する一要素として、とらえ得<sup>註42</sup>るとして、筆を置きたい。今後ひきつづき、注目してゆきたいと考える。

尚、本稿を作成するにあたり、多くの方々に、御教示、御協力を賜わった。末尾ながら、記して感謝の意を表するものである。又、何よりも、手間のかかる仕事を厭わず協力してくれた、下佐野班の方々に感謝したい。

相京建史、飯田陽一、飯塚卓二、井川達雄、石塚久則、大江正行、大越道正、大塚昌彦、木津博明、国平健三、坂口 一、佐藤元彦、志村 哲、下城 正、須永光一、関 晴彦、関根慎二、中沢 悟、橋本澄朗、三浦京子、茂木由行、矢島 浩、山口逸弘、綿貫邦男

(外山政子)

註

- 1 本文570～573ページ参照
- 2-1 井上唯雄「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究第8号』1978
- 2-2 中沢 悟「清里・陣場遺跡」(群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982(以下、群埋文事業団とする))
- 2-3 坂口 一、三浦京子「住居伴出土器の相対年代」『中尾・遺物編』群埋文事業団 1984
- 2-4 井上 太「古墳時代から平安時代の土器について」『本宿・郷土遺跡調査報告書』富岡市教育委員会 1981
- 2-5 綿貫綾子「出土土器の分類と編年」『有馬条里遺跡第二分冊』渋川市教育委員会 1983
- 2-6 小島敦子「賀茂遺跡出土の平安時代の土器について」『賀茂遺跡』群埋文事業団 1984
- 2-7 志村 哲 他「堀ノ内遺跡群出土土器の分類と編年」『A1堀ノ内遺跡群』藤岡市教育委員会 1982
- 2-8 山下歳信「竪穴住居と出土土器について〈編年試案〉」『天神風呂遺跡発掘調査報告書』大胡町教育委員会 1981
- 3 後に述べる、甗I b類に属する
- 4 坂井 隆 「調査のまとめ・出土置きカマド・甗について」『熊野堂遺跡III地区、雨壺遺跡』群埋文事業団 1984
- 5 上記報告書による。
- 6 『新潟県佐渡郡金井町旗射崎遺跡』金井町文化財調査報告書 III
- 7 底部の作り方にも特徴があり、薄く、体部へのたちあがりに区分がつく。底部円盤別作りと考えている。底部にする円盤のみを、先に回転糸切りで作り出し、ある程度乾燥させてから、体部を粘土紐まきあげ等で作りクロロナデ調整を行う方法である。この手法については、稿をあらためて記したいと考えている。  
綿貫邦男氏による稿がある『埋文月報No52』(群埋文事業団1985、3月号)「須恵器製作の技法について」
- 8 5区10住No430、431・第291図参照
- 9 灰釉陶器No415は、田口昭二氏により、大原一2号窯式とされた。時期的に、多少不整合であるが、ありのまま掲載した。
- 10 多治見市、田口昭二、若尾正成氏による。光ヶ丘1号窯式、大原2号窯式、あるいは両者の中間形態のものもあるとのことである。
- 11 註10に同じ、5区7A号住、No1026は、0-2窯式、No1023はK-1号窯式である。(第284図)

## 第6章 検出された遺構と遺物

- 12 各期の細かい対比となると、本書では、明確に同時期性を検証し得る資料処理をしていないためと、何よりも、私の見識のため、混濁が多い。本書での土器群の期別分類は、型式ではなく、住居内出土のもののある時間巾におさまるものとして、覚悟して示したとお考えいただき、御許し願いたい。
- 13 松井田町愛宕山遺跡4号住の例、鳥羽遺跡S K332号土壇とB軽石の例である。
- 14 中沢 悟、大江正行 他『月夜野古窯跡群』群馬県利根郡月夜野町教育委員会
- 15 観音山古墳周溝内土壇出土の坏に近似する。註2-2による。
- 16 中沢 悟、歴史考古学同人会例会、「平安時代の土器編年」発表による1984、5、16、於前橋市中央公民館
- 17 県内では、灰釉が一般住居跡より出土するようになるのは、10世紀中頃を中心とするとされている。
- 18 註-4参照  
田口恵子 他『高崎市新波遺跡』高崎市文化財調査報告、第33集 1982  
県外 柿沼幹夫『甗形土器に関する一考察』『埼玉考古 15』 1976  
中村倉二『器種組成の変遷と時期区分』『土曜考古9号』土曜考古学研究会 1984、10  
中村倉二『大型甗』『土曜考古、5号』 1982、1  
大越道正 他『東作田C遺跡』『母畑地区遺跡発掘調査概報』福島県文化財調査報告第131集、福島県教委、勤文化センター
- 19 下城 正、関 晴彦 他『藪田遺跡』群埋文事業団 1985
- 20 下城 正により 近刊予定 群埋文事業団
- 21 中沢 悟により 近刊予定 群埋文事業団
- 22 茂木由行、『黒熊遺跡群 発掘調査報告書(4)図版編』吉井町教育委員会 1984
- 23 飯田陽一、『荒砥上川久保』群埋文事業団 1985
- 24 関 晴彦 他、により、現在整理中、近刊予定
- 25 今のところ、県内での出土例を知らない。千葉県地方でみられる。千葉印内遺跡6号住。口縁の形態がやや異り、別系列とされるか？
- 26 註18の報告書による、同報告書中の図よりみて、平安時代も後期（11世紀後半）と思われるが、器形が異り、千葉県地方のものに合わせて、別系統としてとらえたい。
- 27 坂詰秀一『武蔵新久窯跡』1971
- 28 Na 1、2は、須恵器坏類により、1が9C前半  
2が9C後半とされる。これによって有底一無底への時間差が設定できよう。  
Na 3はGrid出土であるが、9C代の須恵器甕が出土し、9C代に位置づけられると考えた。  
Na 5、6は、原 雅信、中沢 悟『藪田東遺跡』群埋文事業団  
Na 7は、野部徳秋 他『熊野遺跡発掘調査報告書』『埼玉県遺跡調査会報告 第22集』埼玉県遺跡調査会、1974による、共伴遺物は、土師器甕、須恵器坏があり、9C～10C初頭である。  
Na10は、灰色で還元焰焼成、焼き締りはない。器形、焼成とも、Na11とよく似る。体外面に成字のヘラ書きあり。共伴の遺物は、高台付碗で、器肉の厚い、口縁端部も丸味のあるもので、10C中～後であろう。  
Na11は、Na10に似る。共伴の遺物は、高台付碗で、10C後半のものか  
Na12は、註-2-2による。  
Na18は、註-22による。共伴の遺物は、高台付碗で、10C後半となろう。  
Na20は、註-23による同形のもので、4区11住にも出土している。銹部分に、2個で一对の小孔があき、注目される。
- 29 系譜のちがいをと言えるかどうかは、さらに検討を重ねたい。
- 30 口縁部の鈍化、体部調整の変化——ヘラケズリを強め、銹直下までおよぼす等。
- 31 註18による。
- 32 大西雅広 他『大釜遺跡』群埋文事業団1983
- 33 田口恵子、金子智一、『舞台(II)・清水(II)遺跡』高崎市文化財調査報告書第42集、1984(S107、108、109)
- 34 横倉興一 他、『日高遺跡(I)』高崎市文化財調査報告書第10集、1979
- 35 註18による。
- 36 唐沢保之 他『中島遺跡発掘調査概報』前橋市教育委員会 1980 この9号住、54号住出土の甗は、底部形状が異なる。
- 37 註18による。実見はしていない。

- 38 容量計測、計算は、佐藤元彦、関 晴彦氏に御尽力願った。
- 39 註18、中村論文による。糶の貢納については、近年、鎌倉で木簡の出土例を聞いている。
- 40 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『奈良国立文化財研究所三十周年記念論文集 文化財論叢』1982
- 41 図示しなかったが、南の一群は、5—54住を北限とし、北の一群は、6—24住を南限とする。6区中央部が空白地帯となる。まとめ (3) 遺構について、参照
- 42 この他、記載できなかった遺跡がかなりある。類別による出土遺跡一覧とともに稿をあらためたい。

## 参考文献

- 植崎彰一、齊藤孝正「猿投窯編年の再検討について」『シンポジウム「平安時代の土器、陶器」発表要旨』1981
- 植崎彰一、田口昭二 他『北丘』岐阜県多治見市教育委員会 1981
- 田口昭二「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」『考古学ジャーナル No211』1982
- 坂詰秀一編『武蔵新久窯跡』1971
- 橋本澄朗『薬師寺南遺跡』栃木県教育委員会 1979
- 稲田孝司「忌の竈と王権」『考古学研究 第25巻 第1号』1978、6
- 服部敏史「関東地方の窯掘出土須恵器編年と年代」『愛知県陶磁資料館 研究紀要2』1983

## 3 平安時代の遺構について

II地区の調査では、平安時代の遺構として竪穴住居跡134軒、掘立柱建物跡18棟、墓塚4基、溝10条が確認されている。未整理だが、北に続くI地区には竪穴住居跡約80軒が知られており、その数を合せると規模の大きな集落が復原されよう。また、明確な遺物を伴わないために、中・近世として一括をした、土塚、井戸の中には該期に含まれる可能性を持つものが多い。

この数年、県内では奈良～平安時代での100軒を越す集落跡の調査が相次ぎ、このいくつかは報告され、遺跡の特徴や土器編年が示されている。本遺跡周辺の前橋台地上では、矢中地区遺跡群や下之城条里遺構等の浅間山B軽石の降下を受けた水田跡が、広範囲に及んで調査され、対岸に相当する藤岡台地や微高地上での集落跡の調査も進んでいる。これら資料の蓄積と、研究上の視点を考えると、本遺跡の内容は課題とすべき点が多いが、I地区が未整理のため、本項では時期別の動向と構成上の特徴をのべる。

各遺構の時期は、竪穴住居跡を主とする出土土器の型式区分I～XI期によると、8世紀末～11世紀初頭の年代観が与えられる。竪穴住居跡は、第147表に項目を設けて示したが、文末に土器型式区分の時期を付した。特徴としては、以下の点がある。

第1点は、平面形、規模、方位の点で、一定の法量範囲に集中する均一な遺構であること。東辺側に一様にカマドを付設し、南北にやや長い長方形で、4.50×3.50mを平均値とする。これには、少数の例外もあるが、遺構が分布する3区～8区まで共通しており、時期区分をした中でも、前後の流れに関係なく一定している。また、国分期における大型住居という分類に該当するものはなく、むしろ、カマドが付設されない小竪穴に分類すべきものが少数例ある。

第2点は、時期別の動きを見ていくと、一見すると小群単位から成る、規則的な配列を思わせ

るが、土器の型式区分に従うと大きく2つのことがいえる。

- ① 8世紀末から11世紀前半にかけて継続する集落であるが、9世紀末から10世紀初頭頃に分村に係わる様な画期を持つこと。漸次、居住域を南から北へと拡大していることがわかるが、この画期の具体性には、長い佐野の地に対する、墓域としてのタブーを解いて、古墳群内への積極的な進出が見られる。竪穴住居跡自身は、古墳周堀内までであるが、墓壇としたものは墳丘上に築かれ、意識のつながりを思わせるが、古墳時代後期の馬具を埋納した状態のものもあることから、墳丘自身の削平か近い状態を暗示もしている。
- ② 古墳群内への進出を、集落構成を前後に画するものとしてとらえると、8世紀末から9世紀末頃を第一次段階、それ以降を第二次段階とできる。これは、付図4に示した様に時期別に見ると、分村という表現が適切か。

第一次段階は、3区北半から6区付近までを範囲とし、南北約200mに及ぶ。これに相当する遺構としては、土器型式区分のI期～V期までの竪穴住居跡45軒、掘立柱建物跡3棟、溝4条があり、4区3号、5区4号溝が区画を意味するものとして機能し、特に5区4号溝は北限に相当するか。3棟の掘立柱建物跡は、各柱穴の堀方も大きく、6区、7区の一群とは区別される。重複する例もあるが、単独存在の様相も強く、面積の点では竪穴住居跡と同様で住居としての性格を持ち、中心的なものに相当するか。竪穴住居跡は、この掘立柱建物跡に対応する形で、3区から4区南半、4区北半、5区と凡そ3つの小群に分けられる。このうち、最も古くに位置付けられるのは4区北半で、「コ」の字甕を伴う3軒の住居がある。4区3号溝を南限とし、規模と方位が不揃いで、散在的である。9世紀に代ると、上記の3つの小群に居住域が拡大をし、同一の平面形状と規模ならびに方位を特徴として示す。3区北半に3軒の住居が並列するが、これ以南に於いては所謂風倒木痕や不明瞭の落ち込みが見られただけの点で見ると、居住域の南限がこの頃に決定をしたか。

これら小群の構成の中には、竪穴住居跡、掘立柱建物跡だけではなく、カマドを付設しない小竪穴状のもの、中世頃には埋没をしている井戸が対応する形で含まれる。南限に近い、4区45号住居跡は、カマドを付設せず、坏類を主体とする遺物の集中出土が見られた。周囲に住居がめぐり、井戸が隣接し、居住域の場末的占地に祭祀の様相さえ感じさせる。

第二次段階になると、3区北半を南限としつつも、分村に係わる様相を持つて中心を北へ大きく移動する。時期は、土器型式の区分でいうVI期～XI期に相当し、2つの分布様相は、仮に南群と北群とに分けられる。その境界には、住居分布が空白帯として残る6区中央部付近に求められる。南群の構成は、第一段階に準じ、小群の単位を継承した竪穴住居跡82軒がある。第一段階で見られた、ほぼ同一の平面形と規模、方位に基本的な変化はないが、掘立柱建物跡は調査範囲からは消失している。一方の北群の構成は、対称的に墳丘の残る古墳群内への進出という、占地上の制約から群在する傾向を持つ。その各々が、南群でいう小群に対応するものであろうが、南群では重複する例が極端に少ないのに対して、多いのが特徴で

ある。また、南群では見られない掘立柱建物跡が、古墳隣接の空地に重複をして大小14棟見られた。主軸の点で3時期位に細分されるが、「コ」の字状、「L」字状を原則とした建物の配置か。各柱穴の堀方が「大」→「小」へ変化し、覆土中に浅間山B軽石をかく拌状態で含む7区12号の例もあることから、時間的に大分幅を持つか。南群での中心的建物という性格から、竪穴住居後の様相を占う資料でもあるか。

以上、遺構分布の特徴を、土器型式の区分に従い、第一段階と第二段階に分けて考えたが、この間に発展的要素の強い、居住域の拡大という画期を考えた。集落の基本的な構造としては、烏川の崖線際の微高地に依拠したもので、縄文時代、古墳時代のそれと変化はない。しかし、古墳時代との間には、約一世紀の空白があり、前代の伝統を継承しない、新しい背景を持ったものといえる。居住域のあり方も、縄文時代、古墳時代が東南方向へ拡大の様相を持っていたのに対して、逆に東南方向を起点にし、漸次、北への拡大をしている。その特徴の表われは、先の第二段階における、前時代の墓域—古墳群への積極的な進出であろう。この背景には、本遺跡の北方に広い範囲で確認されている、浅間山B軽石の降下を受けた水田跡—生産域の存在であろう。古墳時代のそれが、崖線際に依拠しつつ、前面にひらける平坦地や低湿地を生産域として求め、地域を確立していたのに対して、平安時代になると、条里制の施行に象徴される様に広域に及ぶ開発が可能になっている。具体的には、本遺跡も占地する前橋台地上には、推定国府から南面して、広い範囲に条里が推定され、本遺跡の北、高崎市下之城条里遺跡では、その一部が確認されている。この様に考えると、本遺跡は北側一帯に広がる生産域を背景にし、長い下佐野遺跡の歴史の中でも初めて、平坦地から崖線際の微高地を居住域の対象として見る様になったのではないか。広い生産域の確保と保持は、集落の構造が段階を追って古墳群を蚕食していく背景にあったのではないか。竪穴住居跡に見る、画一的ともいえる、ほぼ同一の平面形と規模、方位という特徴は、生産域のあり方と表裏をなすもので、計画的な村落としての性格を持つのではないか。

本遺跡は、土器資料の上からは11世紀前半という、北の生産域である水田跡が降灰を受けた、天仁元年(1108年)説のある浅間山の噴火前に、集落形成が不明になっている。その後は、天明三年(1786年)噴出の浅間山A軽石の降下を受けた、畠跡が一面に広がり、その前後に良質の土を求める様な形で古墳の破壊があったことが、1号古墳や2号古墳の様子からわかる。そして再び、集落に転ずるのは、現在の下佐野町の発展形態からすると、字翁から原、そして原新田の後に蟹新田という、最後の段階、江戸時代後期頃であろう。

第145表 平安時代竪穴住居跡一覧表

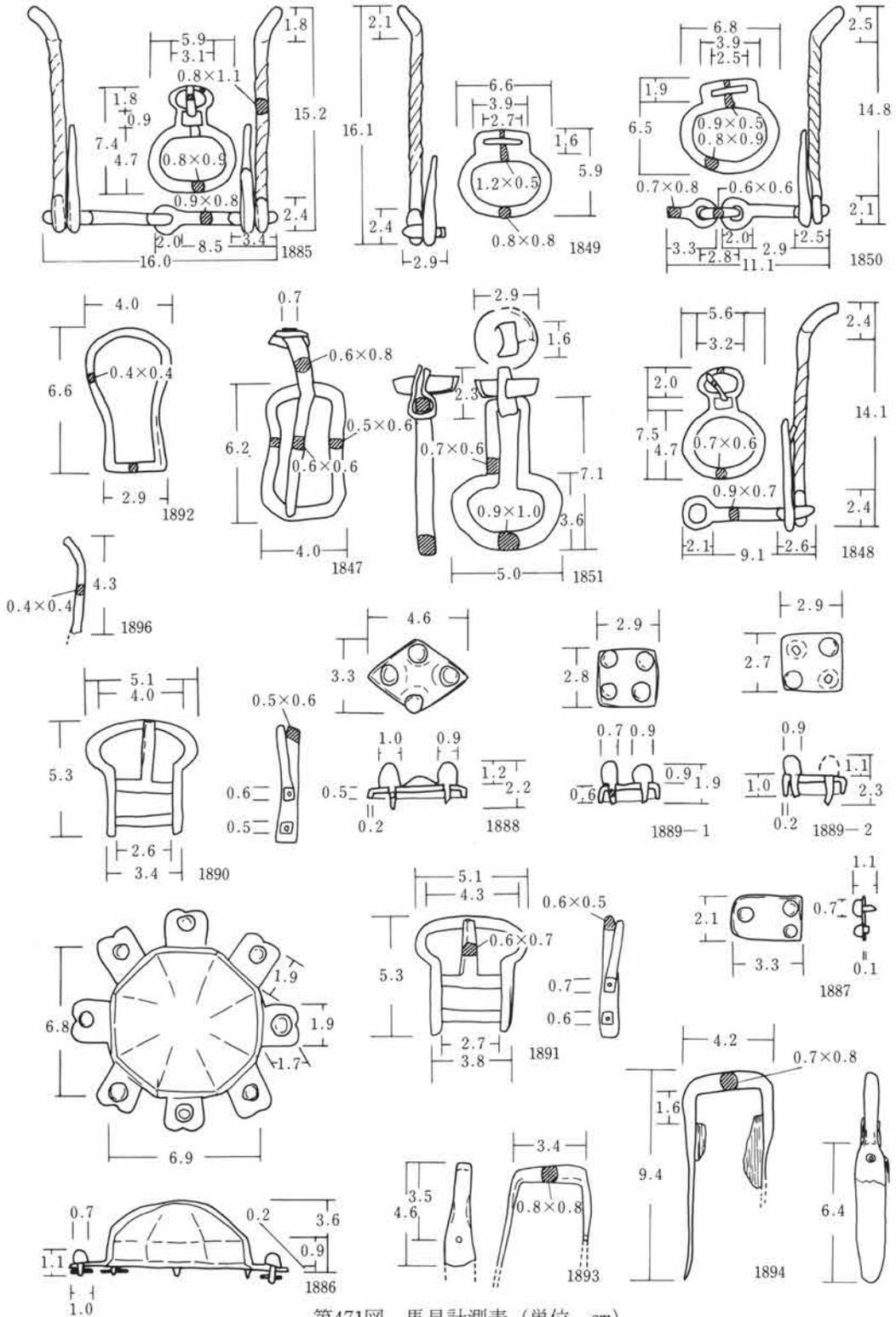
住居番号	現 状	規 模(cm)	方 位	カマド	貯蔵穴	重 複 関 係	時 期
3区1号	方 形	363 × 358	N-72°-E	東辺中央	東南隅		9C前葉
2	〃	292 × 285	E-4°-S	〃	〃		9C前葉
3	〃	284 × 276	N-80°-E	〃	〃		9C初頭
4	〃	370 × 350	N-83°-E	〃	〃		9C前葉
4区1号	〃	322 × 244	E-8°-S	東 辺 南			11C初頭
2	〃	(300) × 292		東辺中央			10C後葉
3	方 か	530 × (118)	N-75°-W	不 明			8C末葉
4	不 明	(156) × 257	N-85°-E	不 明			10~11C
5	方 形	394 × 336	N-85°-E	東辺中央			10C初頭
6	不 明	(85) × (250)	E-1°-S	不 明			9C後葉
7	台 形	290 × 240	E-5°-S	東 辺 南		8号より新しい	11C中葉
8	変則五角形	430 × 375	N-14°-E	〃		1号土壇あり	8C末葉
9	長 方 形	420 × (215)	N-80°-E	東辺中央			9C後葉
10	方 形	284 × 237	E-2°-S	〃	東南隅		9C後葉
11	方 か						9C
12	長方形か	400 × (316)	E-8°-S	東辺中央	東南隅		10C中葉
13	〃	438 × 425	E-10°-S	〃			9C前葉
14	〃	[392] × [295]	E-10°-S	〃			9C中葉
15	〃	385 × 295	E-3°-S	東 辺 南	東南隅		10C後葉
16	方 形	305 × 355	E-2°-S	東辺中央	〃		9C中葉
17	〃	460 × 380	N-90°-E	東 辺 南	〃		9C前葉
18	〃	365 × 280	N-76°-E	東辺中央		4-1溝が切る	9C前葉
19	〃	(310) × 292	N-74°-E	不 明			10C初頭
20	〃	390 × (400)	N-85°-E	不 明		22住、4-1、2溝が切る	9C中葉
21	方 か	350 × [350]	E-22°-S	東辺中央		27土壇に切られる	9C後葉
22	正方形か	145 × [145]		不 明		20住よりやや新しい	9C後葉
23	方 形	352 × 260	E-6°-S	東 辺 南			9C後葉
24	長 方 形	350 × 270	N-88°-E	〃			9C後葉
25	〃	285 × 380	E-1°-S	不 明	南西隅		10C中葉
26	方 形	290 × 368	N-80°-E	東辺中央	東南隅		9C後葉
27	〃	[315] × (215)	N-86°-E	〃	〃		9C後葉
28	〃	261 × 222	E-21°-S	不 明	南西隅		9C初頭
29	長 方 形	[430] × 300	N-73°-E	〃			8C末葉
30	方 形	(360) × [345]	E-6°-S	東 辺 南	東南隅	31住より新しい	11C初頭
31	〃	302 × (148)	N-74°-E	〃			9C中葉
32	〃	305 × [245]	N-80°-E	東辺中央			9C
33	〃	275 × 242	N-81°-E	〃		1号掘立より新しい	9C後葉
34	正 方 形	320 × 350	N-75°-E	東 辺 南			9C初頭
35	〃	480 × 410	N-69°-E	東辺中央		36住と重複	9C初頭
36				北 辺 東			9C初頭
37	長 方 形	[375] × 240	N-84°-E	東辺中央		5、6号井戸に切られる	9C後葉
38	方 形	485 × 385	E-5°-S	東 辺 南	東南隅		9C前葉
39	〃	354 × 316	N-85°-E	〃	〃		9C中葉
40	方 形	268 × 237	E-13°-S	不 明			9C前葉
41	正 方 形	370 × 390	E-3°-S	東辺中央	西南隅	41、42、46、47住の内最も新	9C中葉

## 3 まとめ(平安時代)

住居番号	現 状	規 模(cm)	方 位	カマド	貯蔵穴	重 複 関 係	時 期
4区42号	不整四角形	(490)×190	N-84°-E	北 辺 西	北 西 隅		9C初頭
43	〃	275×365	N-82°-E	東 辺 中央	東 南 隅		9C初頭
44	方 形	395×490		東 辺 南	〃		9C前葉
45	長 方 形	200×275	E-5°-S	不 明			9C中葉
46	長 方 形	[540]×340	E-5°-S	東 辺 南		41住より古い	9C前葉
47	隅丸長台形	400×[500]	E-5°-S	〃	東 南 隅	41、46住より古い	9C初頭
61	方 か	(90)×(198)		不 明			10C
62	方 形	(345)×302	E-12°-S	東 辺 中央	東 辺		9C前葉
63	〃	(430)×363	E-20°-S	〃	東 南 隅	64住より古い	11C初頭
64	〃	(270)×[290]	E-12°-S	〃			11C中葉
65	〃		E-29°-S	〃			9C
66	〃	[385]×[356]	N-67°-E	〃		38住より古い	9C前葉
5区1号	〃	385×315	E-6°-S	不 明	西 南 隅	1、2土壇より古い	11C初頭
3C	〃	(460)×(140)	E-11°-S	〃		3A住より新、3B住より古	9C後葉
5A	長 方 形	330×403	E-19°-S	東 辺 中央	東 南 隅	5B住より新しい	10C初頭
6	方 形	452×325	E-11°-S	〃	〃		10C前葉
7A	〃	285×255	E-6°-S	東 辺 南	西 南 隅	7B、7C住より新しい	10C後葉
7B	〃	330×345	N-86°-E	東 辺 中央	東 北 隅	7C住より新、7A住より古い	9C後葉
8	〃	510×475	E-7°-S	〃	東 南 隅		10C中葉
9	〃	(148)×438	E-8°-S	〃			10C後葉
10	五 角 形	490×402	N-0°-E	〃	東 南 隅	5-4土壇より古い	10C初頭
11	方 形	335×(361)	E-19°-S	東 辺 南	西 南 隅		9C後葉
48	〃	246×295	E-21°-S	東 辺 中央	東 南 隅		9C後葉
49	〃	437×316	N-87°-E	〃	西 南 隅		11C初頭
50	〃	320×425	E-3°-S	〃	東 北 隅		9C後葉
51	〃	354×285	E-7°-S	東 辺 南	東 南 隅		10C後葉
52	〃	[285]×(227)	E-7°-S	東 辺 中央			10C後葉
53	〃	263×[295]	E-5°-S	不 明			10C後葉
54	〃	385×330	N-90°-E	東 辺 中央			10C前葉
55	方 形	395×315	E-1°-S	東 辺 2基	東 南 隅	カマドは南より中央が古い	11C中葉
56	〃	450×340	E-6°-S	東 辺 南	〃		10C前葉
59	〃	385×290	E-4°-S	〃	〃	5-4溝より新しい	11C初頭
60	〃	[373]×[295]	N-86°-E	〃			
67	〃	(220)×223	E-4°-S	東 辺 北			10C前葉
68	〃	(298)×[250]	E-8°-S	不 明	西 北 隅		
71	方 か		N-61°-E	〃	東 南 隅		10C後葉
72						52、53住より古い	10C中葉
6区1号	方 形	382×302	N-84°-E	東 辺 南	西 南 隅		10C中葉
2	〃	380×256	E-13°-S	〃	東 北 隅	3住より新しい	11C初頭
3	〃	250×350	E-9°-S	〃	東 南 隅	2住より古い	10C後葉
4A、B	〃	346×290	E-3°-S	東 辺 中央	西 北 隅	Bは335×290、東カマド	A-10C前 B-10C初
5	〃	265×285	N-77°-E	〃			10C?
6	〃	(250)×270	E-25°-S	東 辺 南	西 南 隅		10C前葉
8	不 明	(154)×(167)	E-58°-S	〃		5-4溝より新しい	10C中葉
10	方 形	355×292	E-13°-S	〃	東 南 隅		10C後葉
11	方 形	[350]×278	E-16°-S	東 辺 南	東 辺 中央	2溝より新しい	10C前葉

第6章 検出された遺構と遺物

住居番号	現 状	規 模(cm)	方 位	カマド	貯蔵穴	重 複 関 係	時 期	
6区13号	方 形	275 × 346	E-31°-S	東 辺 南	東 南 隅	1、4溝より新しい 建替え住居か	10C後葉	
14	〃	360 × 270	E-24°-S	東 辺 中 央	〃		10C前葉	
17	〃	326 × [245]	E-40°-S	〃	東 北 隅		10C前葉	
19	〃	338 × 155	E-40°-S	〃	東 南 隅		10C中葉	
24	〃	(230) × [307]	E-21°-S	東 辺 中 央	〃		25住より新しい	10C前葉
25	〃	(230) × [305]	E-25°-S	〃	〃			10C前葉
7区1号	台 形	(361) × 360	E-26°-S	東 辺 南	東 南 隅		10C前葉	
2	方 形 か	(262) × (263)		東 辺			10C前葉	
3	方 形	305 × 230	E-15°-S	東 辺 南	東 南 隅		11C初頭	
6	〃	270 × 290	E-36°-S	〃	〃		10C初頭	
7	〃	[390] × 350		不 明		15住より古い	10C初頭	
8	長 方 形	265 × 525	E-12°-S	東 辺 北		9住より古い	10C初頭	
9	方 形	307 × 313	E-4°-S	東 辺 中 央	東 南 隅		10C前葉	
10	方 形 か	(240) × [265]	E-29°-S	東 辺		30土城より古い	10C中葉	
12	方 形	312 × 285	E-13°-S	不 明			11C初頭	
13	〃	263 × 290	E-27°-S	東 辺 北	北 辺 東		10C前葉	
14	方 形 か	[330]		東 辺 中 央	南 西 隅		10C	
15	方 形	[410] × 318		東 辺 北	西北隅か		9C末	
16	〃	355 × 308	E-18°-S	東 辺 南	東 南 隅		10C後葉	
17	〃	445 × 290	E-38°-S	〃	〃	36住より新しい	10C中葉	
18	〃	280 × 240	E-35°-S	〃	〃		10C初頭	
19	長 方 形	(445) × 275	E-25°-S	東 辺			10C後葉	
20	方 形	300 × 310	E-27°-S	東 辺 南			10C後葉	
21	不 明			東 辺 中 央			10C	
26	方 形	250 × 300	E-20°-S	東 辺		31住より新しい	11C	
27	〃	[235] × 294	E-4°-S	東 辺 中 央	東 南 隅	29住より新しい	10C後葉	
29	方 形	[250] × 266	E-4°-S	〃	〃		10C後葉	
31	〃	308 × 316	E-18°-S	〃			11C初頭	
32	〃	323 × 258	E-32°-S	東 辺 南	西 南 隅	19・40住より古、37住より新	10C中葉	
33	〃	365 × 246	E-15°-S	東 辺 中 央	東 南 隅		10C初頭	
36	方 形	425	E-40°-S	東 辺 南	〃	17住より古い	10C中葉	
37	〃	(180) × 234	E-20°-S	東 辺	西 南 隅 か		10C中葉	
38								
39	方 形	304 × 297	E-28°-S	東 辺 中 央	東 南 隅		10C前葉	
40	〃	290 × (225)	E-20°-S	不 明			10C後葉	
46	長 方 形	285 × 345	E-22°-S	東 辺 中 央	東 辺 南	54住より新しい	10C中葉	
47	方 形	330 × 210	N-88°-E	〃	〃	48住より新しい	10C中葉	
50	〃	240 × 215	E-4°-S	〃	東 南 隅	51住より新しい	10C中葉	
52	〃	381 × 277	E-19°-S	〃	〃		10C初頭	
53	方 形 か	[390] × [275]		〃			10C中葉	
54	台 形	330 × 250	E-29°-S	東 辺 南	東 南 隅	46住より古い	10C前葉	
55A	方 形	290 × 256		東 南 隅		A、B、C、Dの順でDが最古	10C初頭	
55B		310 × (190)		〃			10C初頭	
55C				東 南 中 央			10C初頭	
55D							10C初頭	
8区2号	方 形	(365) × (235)		東 辺 南	西 南 隅 か		10C初頭	



第471図 馬具計測表 (単位 cm)

## 結

下佐野遺跡は、縄文時代、古墳時代、平安時代という三つの顔を持った複合遺跡である。その範囲は、調査によれば南北約1.3km余りに及ぶことが確認され、北には尚、船橋遺跡が接している。遺跡の西には、榛名山系の諸河川を集める烏川が流れ、北には広大な前橋台地が続いている。下流には、県西部を流れる諸河川が集まり、肥沃な沖積地を形成している。

本書では、調査経緯から全体のうち、南半分を報告の対象としたために考察部分を除くが、ここでは残る I 地区の整理への課題を含めて、各時代の特徴をあげ結びとしたい。

縄文時代は、烏川に面した半円状の集落構造を持つと推定をしたが、前橋台地の井野川以南では、現在知ることの出来る唯一の資料であろう。地形区分では、周辺の高燥ローム台地、本遺跡のある前橋台地、藤岡台地とその縁辺微高地という三つをあげて、時期が下るに従ってより低位の地形への進出を考えた。具体的には、藤岡市谷地遺跡、同沖II遺跡に示される晩期末～弥生初頭の様相が弥生時代を招来するための第一段階に相当し、その前段階を本遺跡の内容に求めた。

古墳時代は、方形周溝墓を持った、古式土師器の集落形成に始まる。それは、縄文時代とは逆に烏川に背を向け、前橋台地の内側一低湿地への進出の第一歩にあたり、稲作りという新たな生産基盤を背景にしたものであり、弥生時代の伝統を欠く点に特徴がある。前期に属す、複数の玉作工房群は、規模の大きさと成品供給の背後に、地域並びに統括者の存在を感じさせるが、群在する方形周溝墓や前方後方型周溝墓がそれに相当するのか。これらは、5世紀前半代に築造された浅間山古墳、大鶴巻古墳に至る前段階の遺構群として位置付けられるが、6世紀後半築造の漆山古墳以後、7世紀前半代までの所謂佐野古墳群で総称される。長い墓域の歴史への始まりでもある。今後、遺構分布の中心がある15地区の整理により、その変遷が明示されるであろう。

「佐野屯倉」とそれに関する、山ノ上碑、金井沢碑、多胡碑の上野三碑も、本遺跡を語る重要な資料であるが、調査では直接に示す資料は得られなかった。しかし、古墳時代の遺構は、屯倉の存在を抜きにしても、この地域の中枢部の一画を占めることを示している。

平安時代は、堅穴住居跡だけで138軒が確認され、8世紀末から11世紀前半にかけての集落であることが復原された。その様相は、15地区の整理が進む中でより明らかにされるであろうが、9世紀末から10世紀初頭にかけて、分村を推定させる様な居住域拡大の画期を持つ。それは、前時代の墓域である古墳群内への進出を見、佐野の土地に対する墓域のタブーを解き放つ意味を持つ。集落に接して、水田跡等の生産跡の確認はなかったが、本遺跡の北方で面的に確認されつつある生産跡及び周辺集落跡との関連が今後の課題である。

本遺跡は、I地区として本書に記した以上の遺構・遺物を残し、課題とすべき点も多い。昭和52年の発掘調査開始以来、本書に至るまで約十年の歳月を要した。この間の事業遂行にあたり、関係各位に感謝するとともに、本書が活用されることを望んで結びとしたい。(女屋和志雄)

# 写 真 图 版





4区全景(北)



5区全景(北)



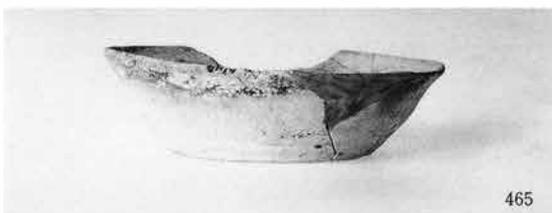
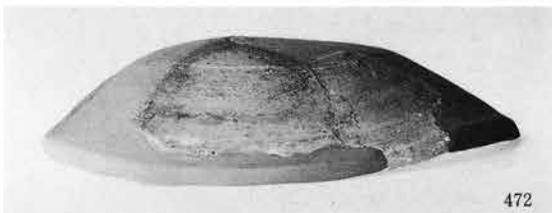
7区全景(北)



8区から15地区を望む



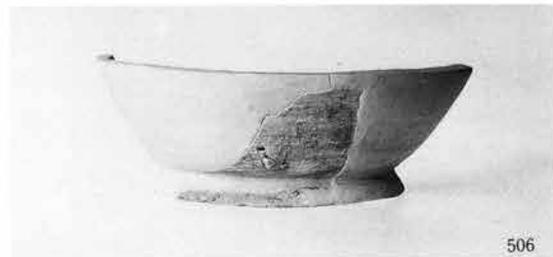
3区1号住居跡全景(西)



3区1号住居跡遺物(1)



3区1号住居跡遺物(2)



3区2号住居跡遺物



3区3号住居跡遺物



3区2号住居迹全景(西)



3区3号住居迹全景(西)



3区4号住居跡全景(西)



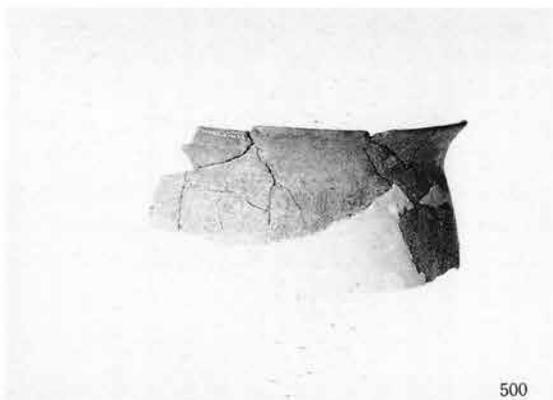
483



487

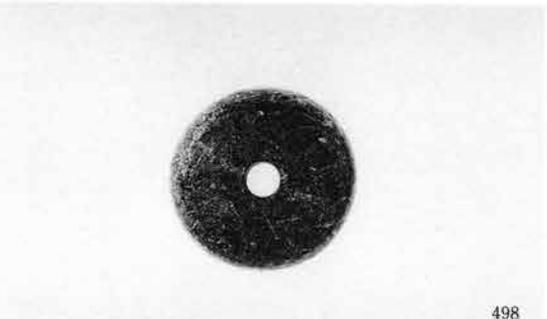
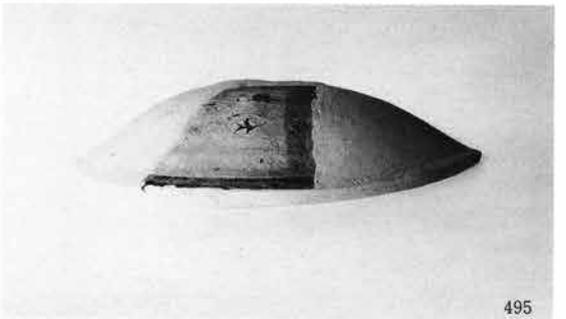


497



500

3区4号住居跡遺物(1)



3区4号住居跡遺物(2)



4区1号、2号住居跡全景(西)



1住  
1



3住  
5



2住  
4



3住  
6



3住  
6

4区1号、2号、3号住居跡遺物



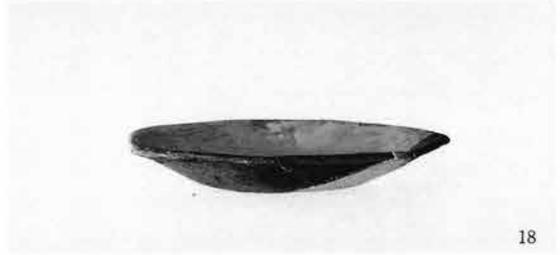
4区3号住居跡全景(北)



4区5号住居跡全景(西)



4区3号住居跡遺物



4区5号住居跡遺物



4区7号、8号住居跡全景(西)



7住  
25



7住  
26



7住  
27



29



30



31

4区7号、8号住居跡遺物



4区9号住居跡全景(北)



9住  
33



38



9住  
35



36



37



39

4区9号、10号住居跡遺物



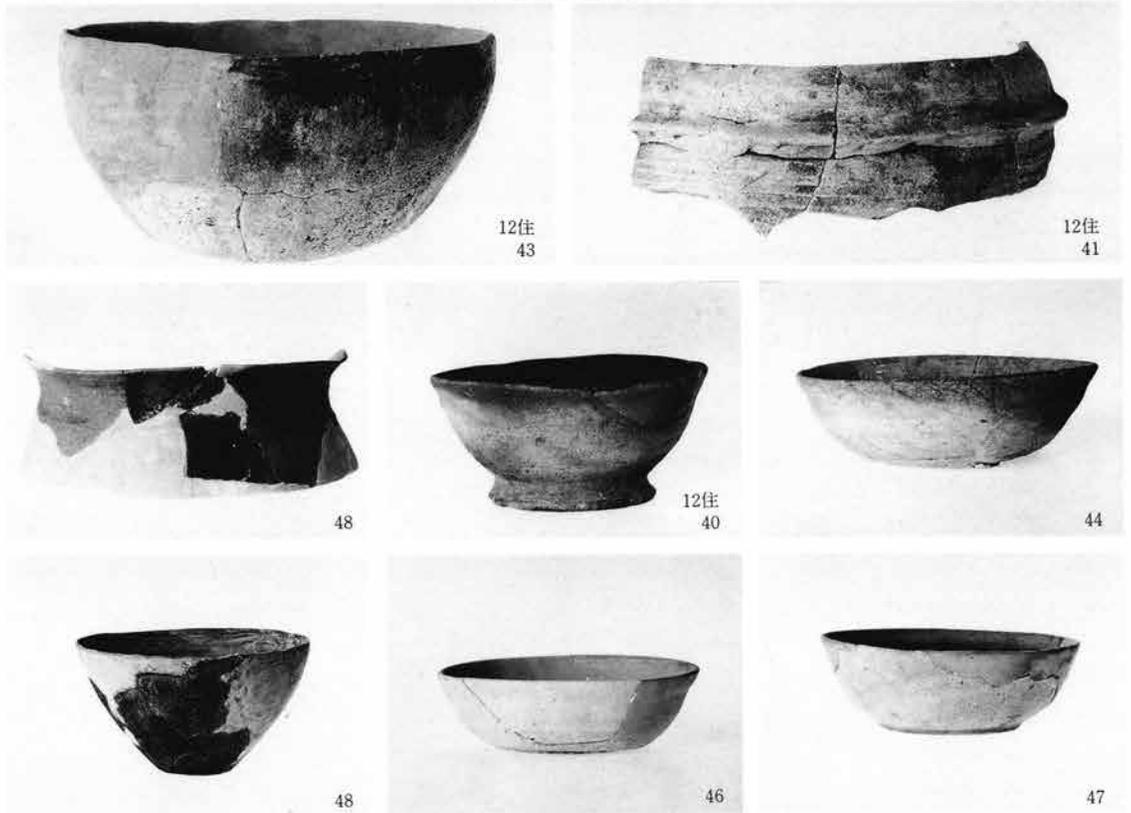
4区10号住居跡全景(西)



4区12号住居跡全景(西)



4区13号住居跡全景(西)



4区12号、13号住居跡遺物



4区14号住居跡全景(西)



52



56-1



53



50



52



56-2



50

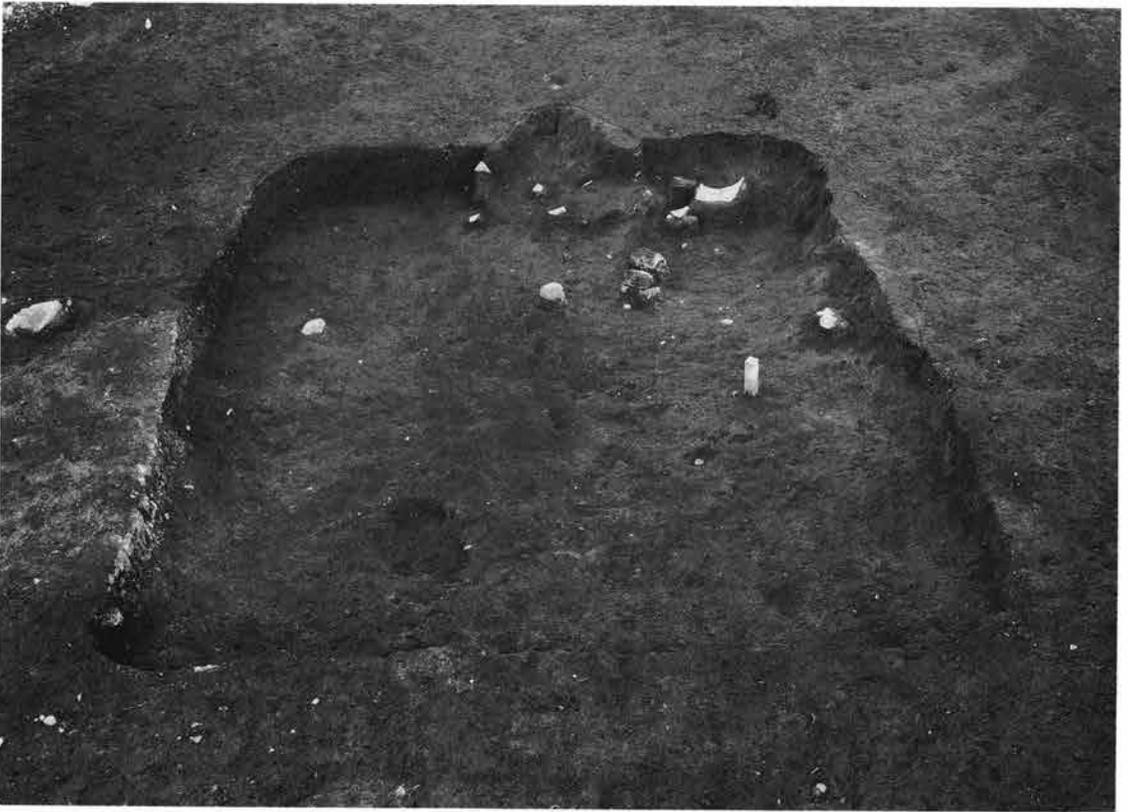
4区14号住居跡遺物(1)



4区14号住居跡遺物(2)



4区15号住居跡全景(西)



4区16号住居跡全景(西)



66



71



67



68



70-1



64

4区16号住居跡遺物



4区17号住居跡全景(西)



73



74



1007



73

4区17号住居跡遺物(1)



4区17号、18号、19号住居跡遺物



4区18号住居跡全景(西)



4区19号住居跡全景(西北)



4区20号、22号住居跡全景(西南)



91



92



94



450



104



94

4区20号住居跡遺物



4区21号住居跡全景(南)



4区23号住居跡全景(西)



4区24号住居跡全景(西)



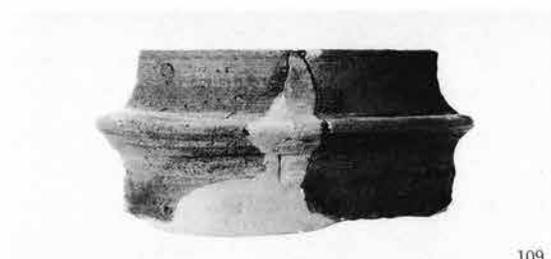
4区26号住居跡全景(西)



4区21号住居跡遺物



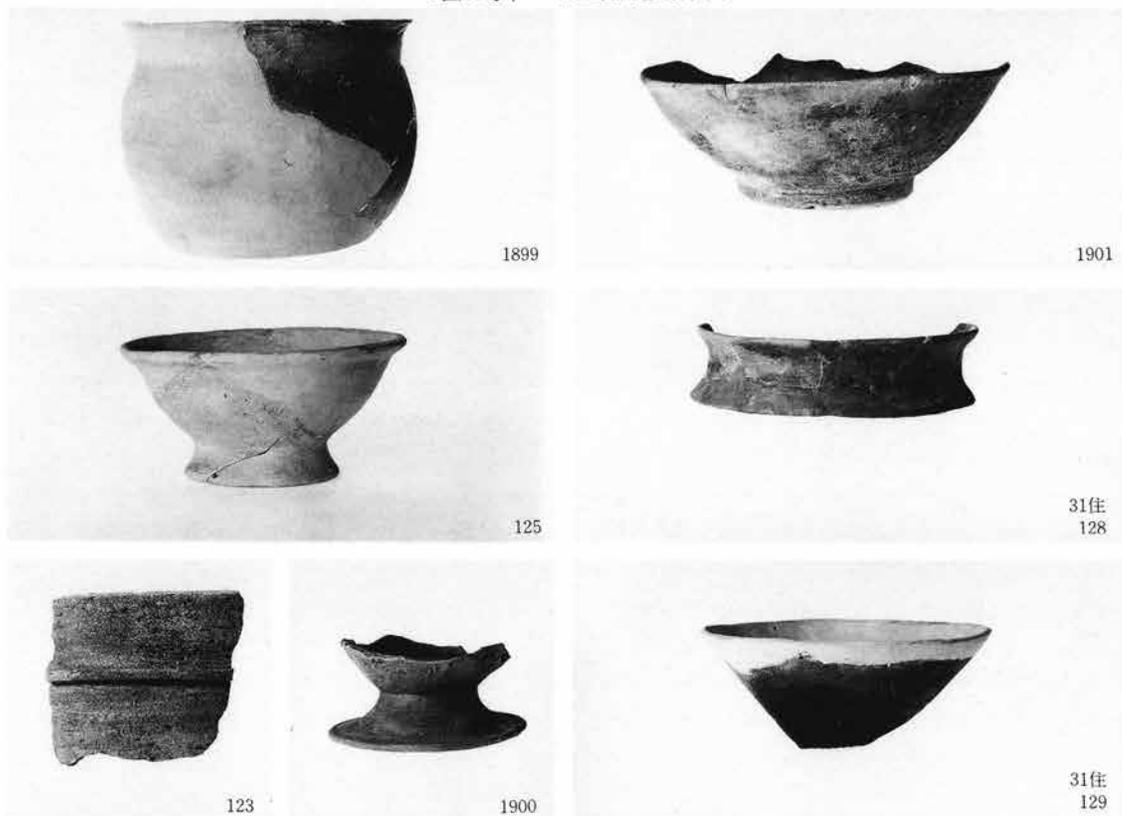
4区24号住居跡遺物



4区25号、27号、28号、29号住居跡遺物



4区30号、31号住居跡全景(東)



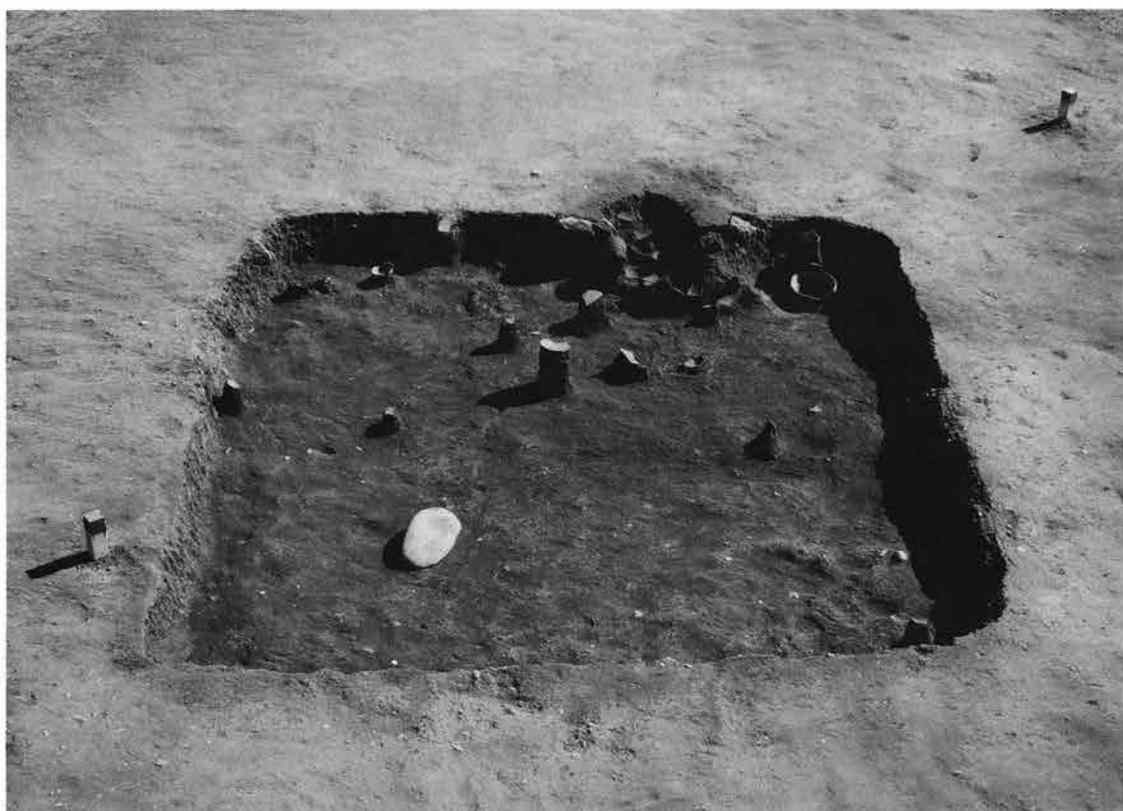
4区30号、31号住居跡遺物



4区32号住居跡全景(西)



4区33号住居跡全景(西)



4区34号住居跡全景(西)



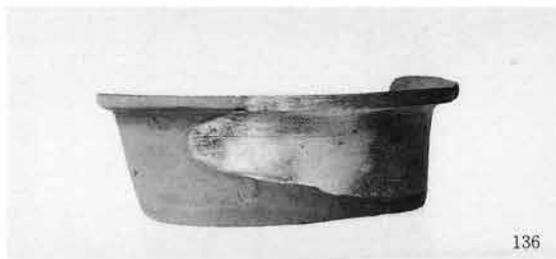
134



135



139



136



141-1



140

4区34号住居跡遺物



4区35号、36号住居跡全景(西)



147



151



147



151

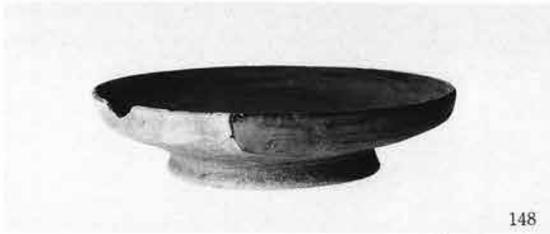
4区35号、36号住居跡遺物(1)



161



155

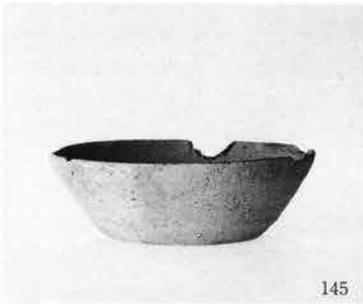


148



149

4区35号、36号住居跡遺物(2)



145



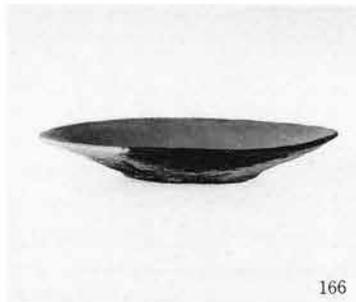
159



160



165



166



167

4区37号住居跡遺物



172



173



38住  
170

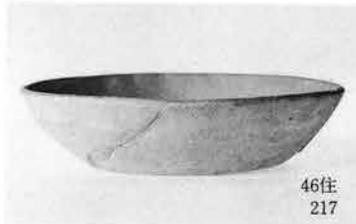
4区38号、39号住居跡遺物



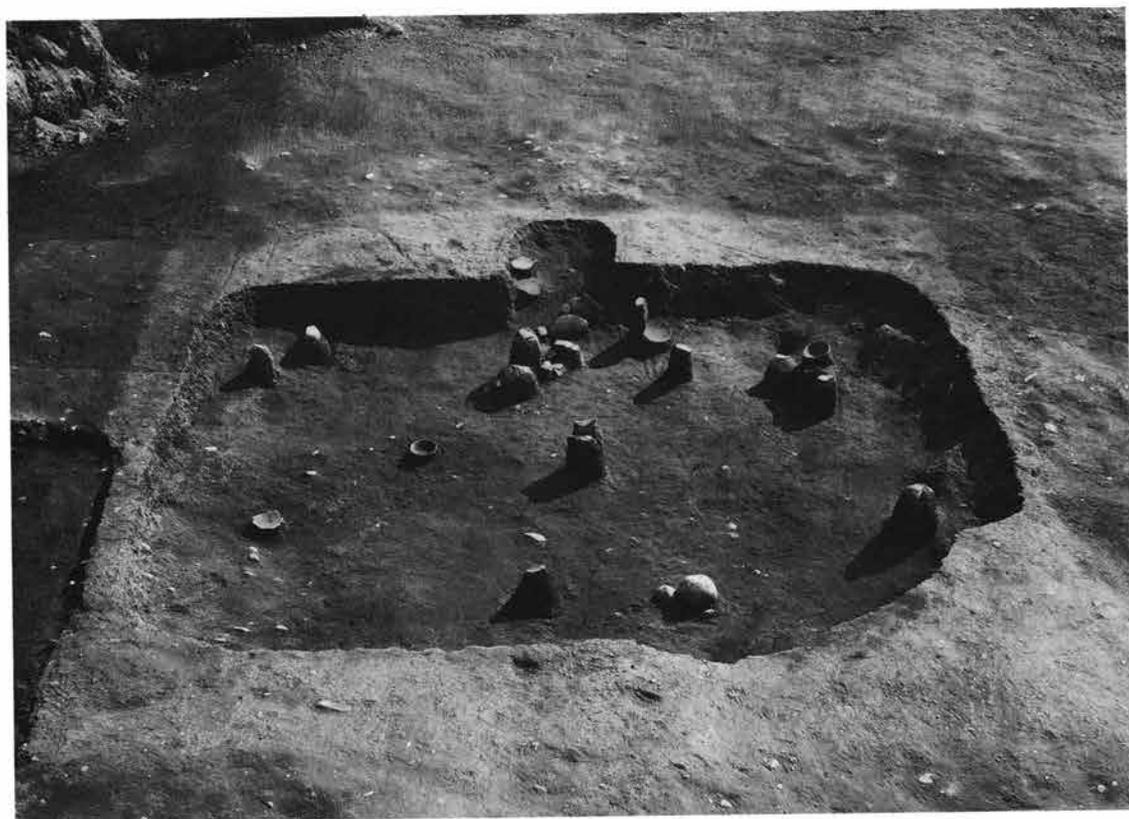
4区37号住居跡全景(西)



4区41号、42号、46号、47号住居跡全景(西)



4区41号、46号、47号住居跡遺物



4区43号住居跡全景(西)



189



191



189



191



190



188

4区43号住居跡遺物(1)



183



192



184



185

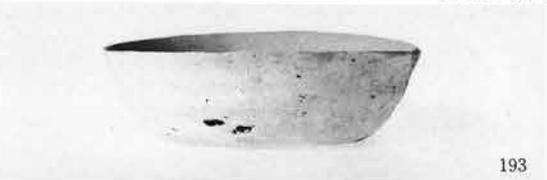


186



187

4区43号住居跡遺物(2)



193



194

4区44号住居跡遺物



198



203



205



198



203



205

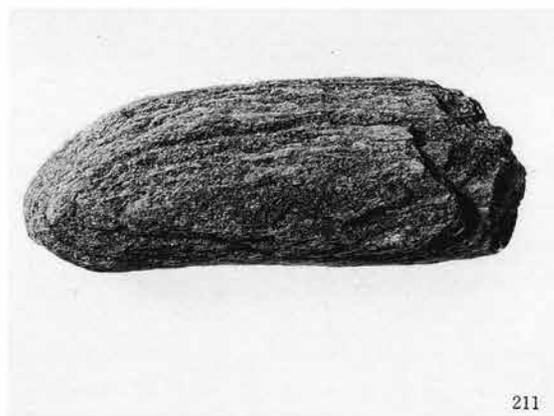
4区45号住居跡遺物(1)



4区44号住居迹全景(西)



4区45号住居迹全景(西)



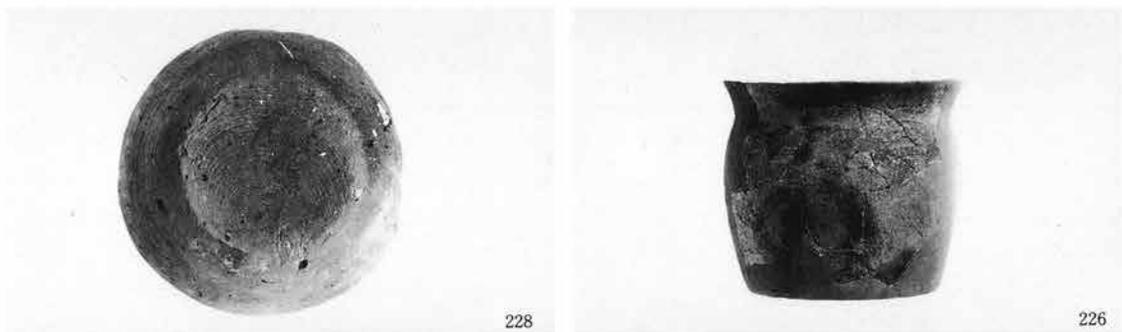


4区63号、64号住居跡全景(西)



228

227



228

226



63住  
234

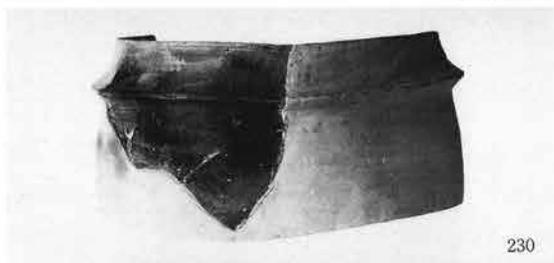
63住  
233

63住  
238

4区62号、63号住居跡遺物



4区65号住居跡全景(北)



230



229



237



241



64住  
242



64住  
243

4区63号、64号住居跡遺物



5区3号住居跡全景(南)



1住  
244



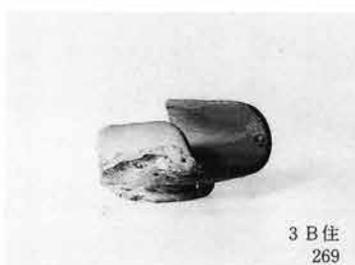
1住  
250



1住  
1016



3 A住  
283



3 B住  
269

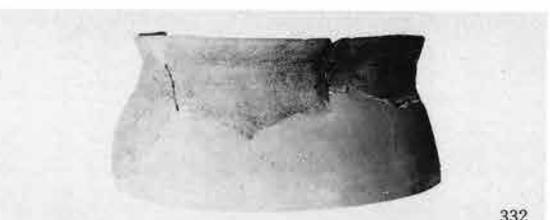


3 A住  
282

5区1号、3A号、3B号住居跡遺物



5区3B号住居跡遺物



5区5A号住居跡遺物



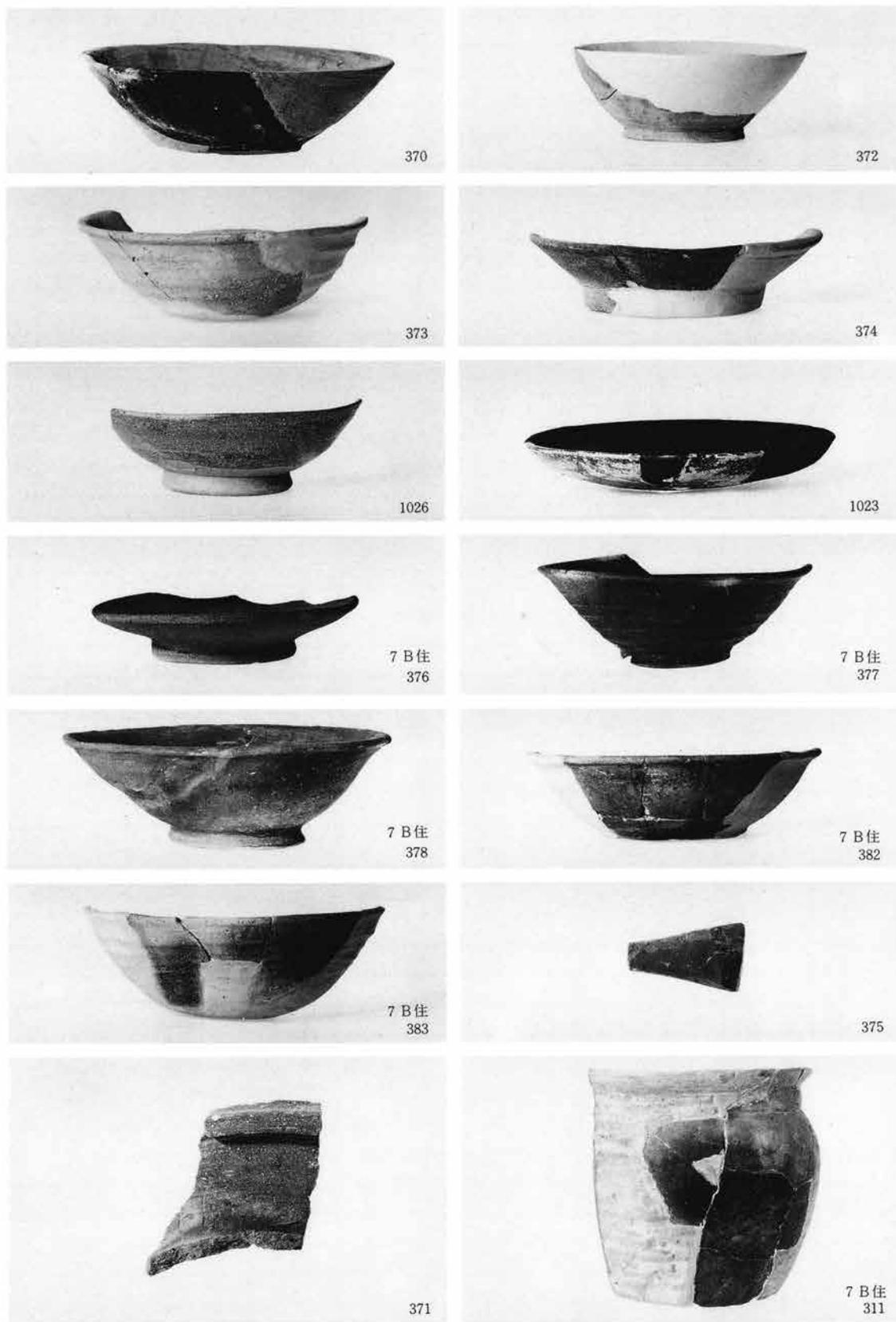
5区6号住居跡全景(西)



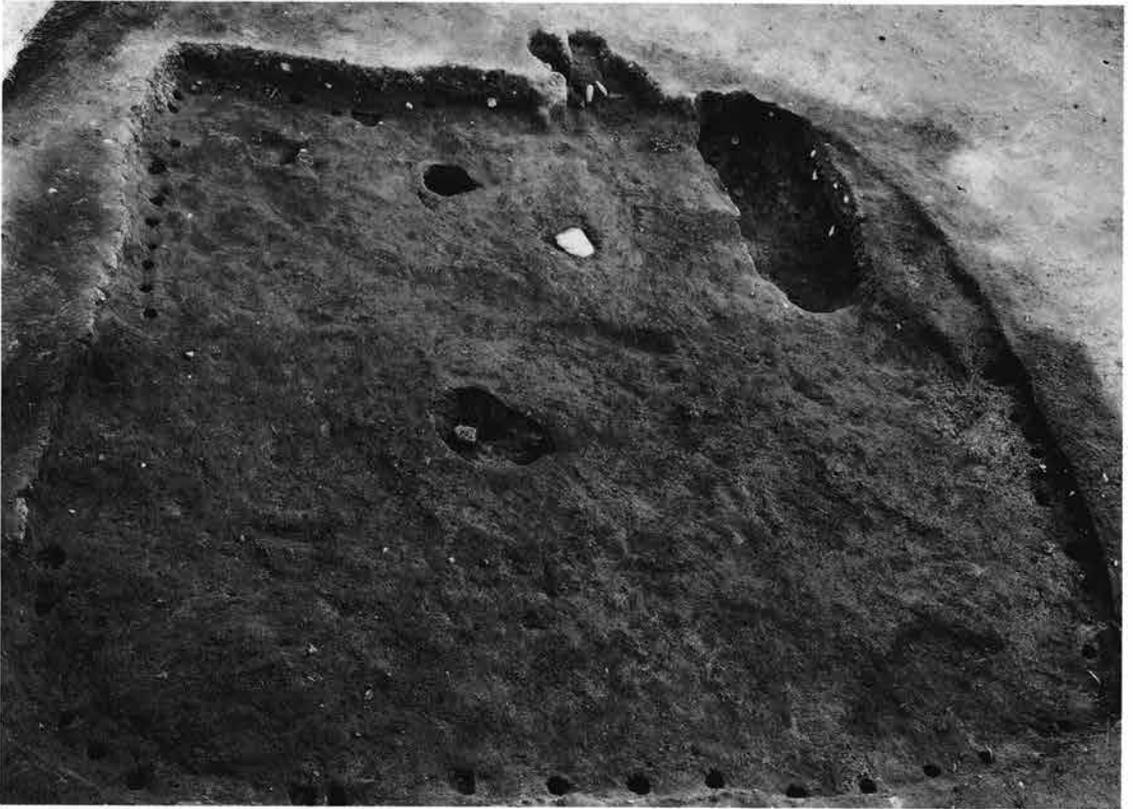
5区6号住居跡遺物(1)



5区6号住居跡遺物(2)



5区7A号、7B号住居跡遺物



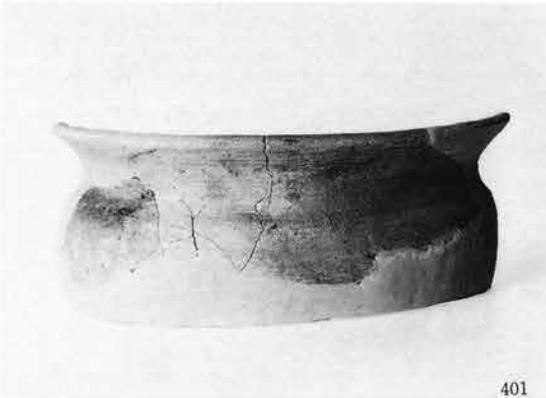
5区8号住居跡全景(西)



405



407

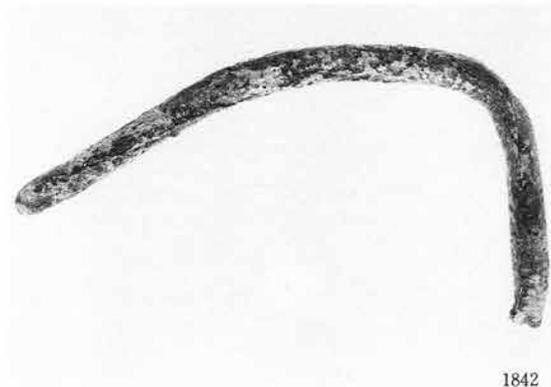
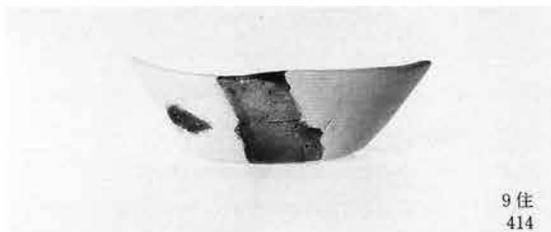


401



402

5区8号住居跡遺物





5区10号住居跡全景(西)



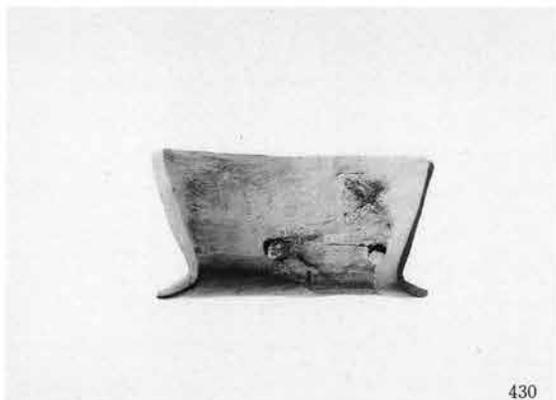
429



430

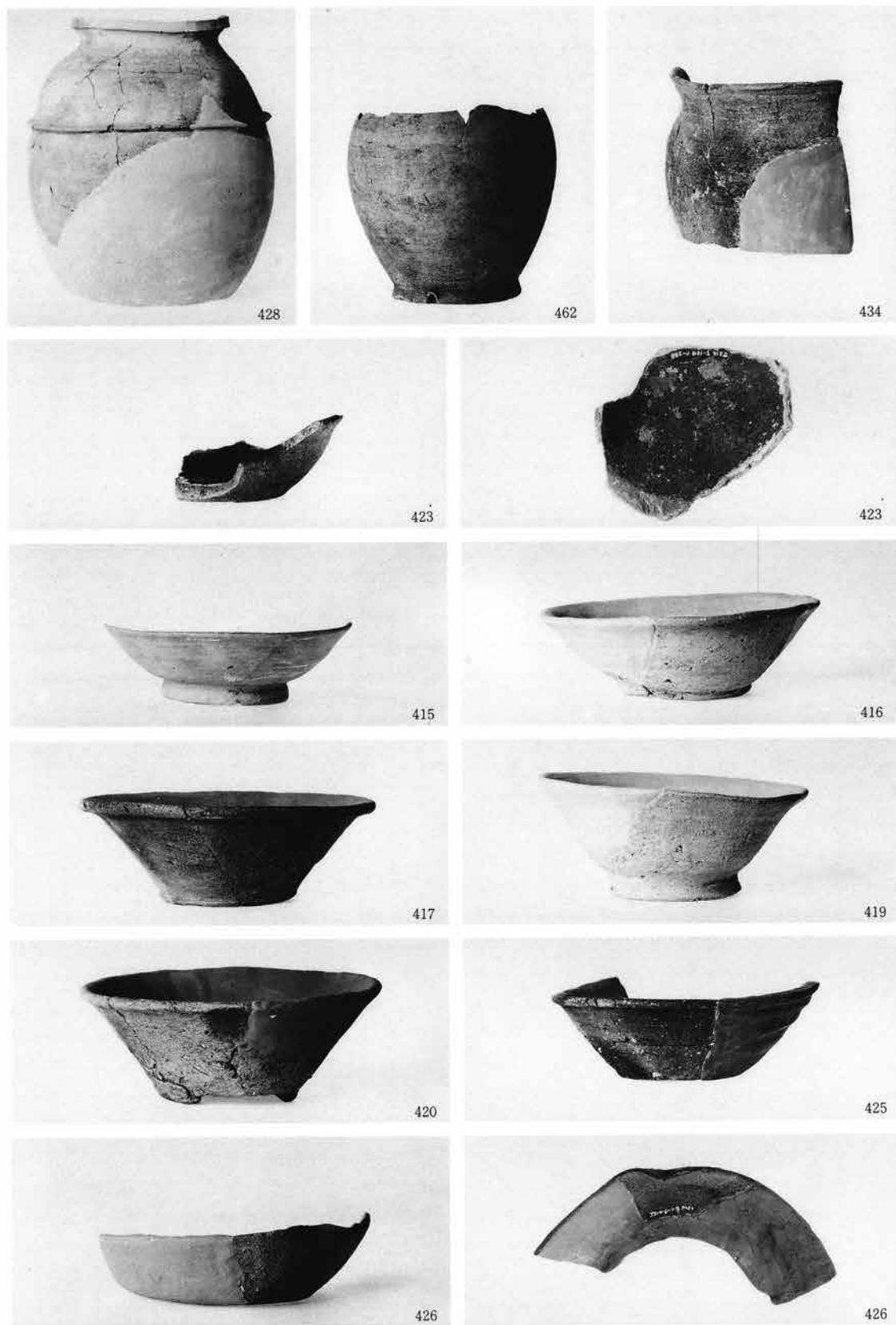


431



430

5区10号住居跡遺物(1)



5区10号住居跡遺物(2)



436



437



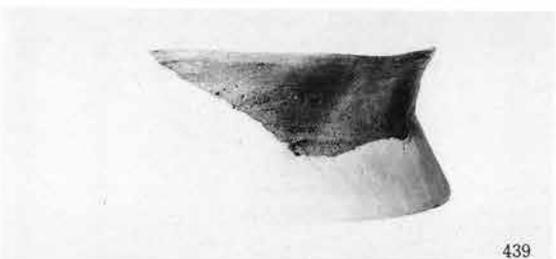
442



1028

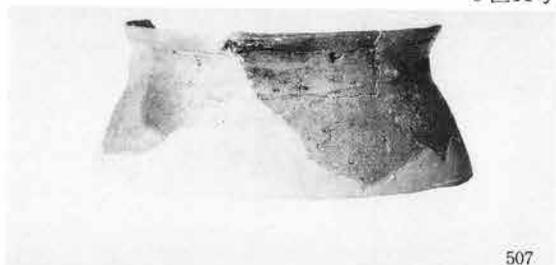


438

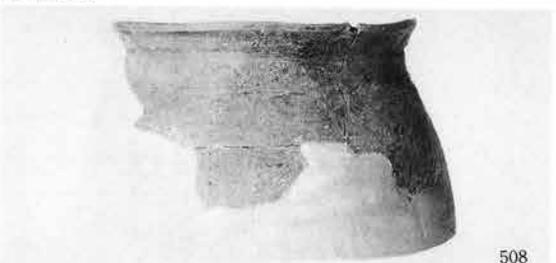


439

5区11号住居跡遺物



507



508



509



510



49住  
516

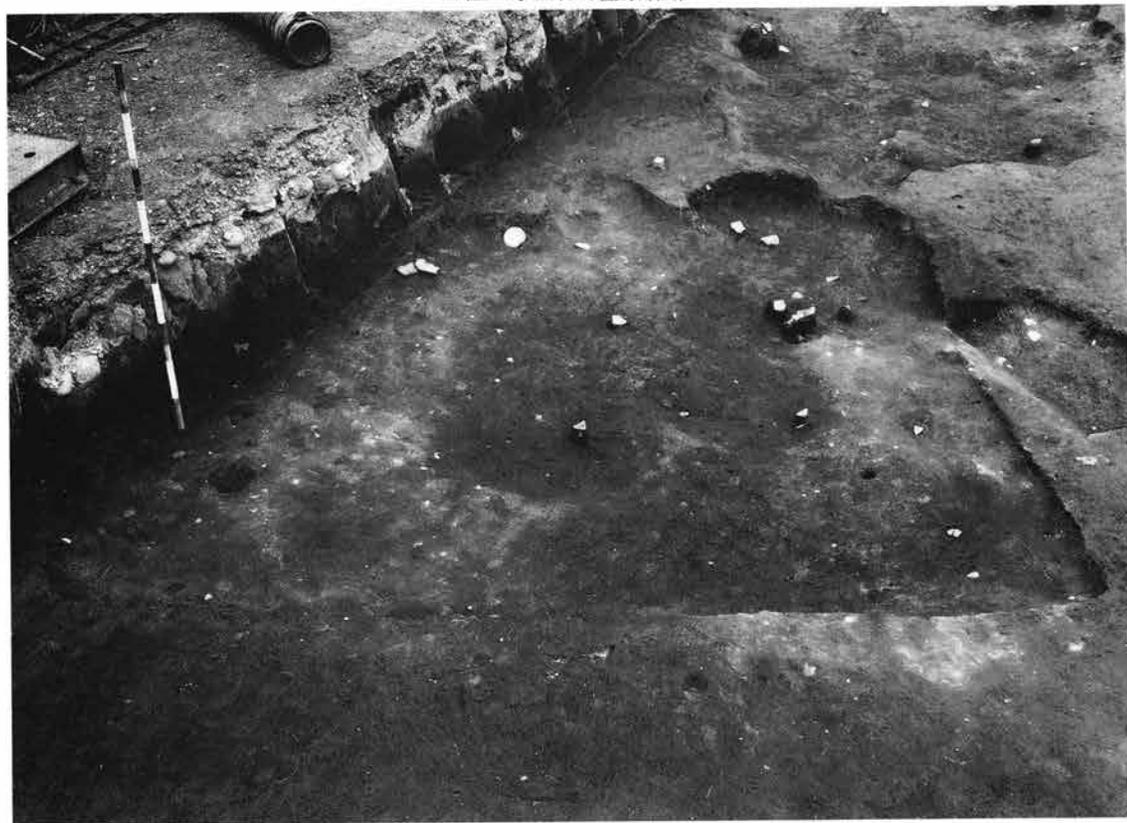


49住  
515

5区48号、49号住居跡遺物



5区48号住居跡全景(西)



5区49号住居跡全景(西)



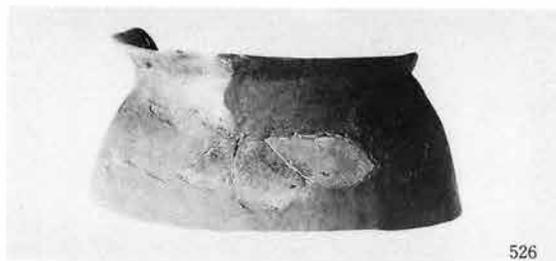
5区50号住居跡全景(西)



519



520



526



528

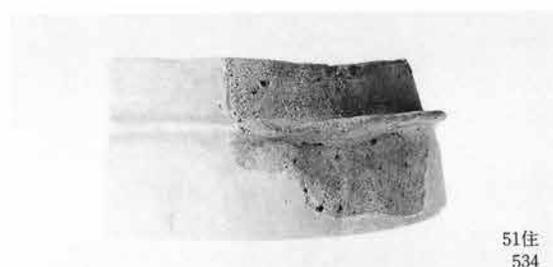
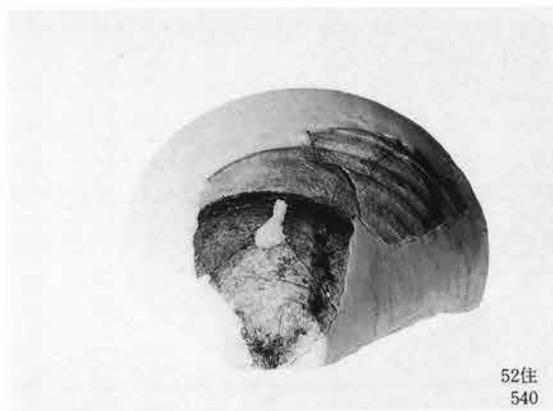
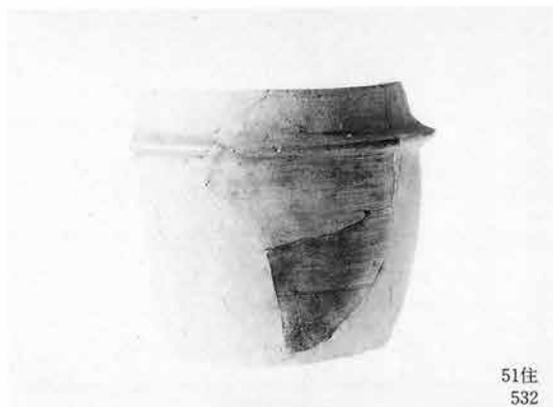


529



533

5区50号住居跡遺物



5区50号、51号、52号、53号住居跡遺物



5区51号住居跡全景(西)



5区52号、53号、72号住居跡全景(西)



5区54号住居跡遺物



5区55号住居跡遺物



5区54号住居跡全景(西)



5区55号住居跡全景(西)



5区56号住居跡全景(西)



580



573



574



575



576



577



1039



579

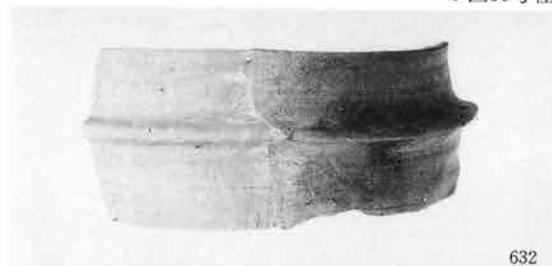


578

5区56号住居跡遺物



5区59号住居跡全景(西)



632



630



633

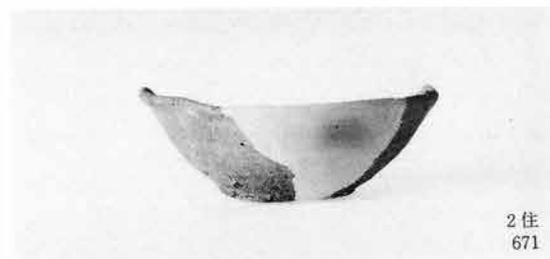
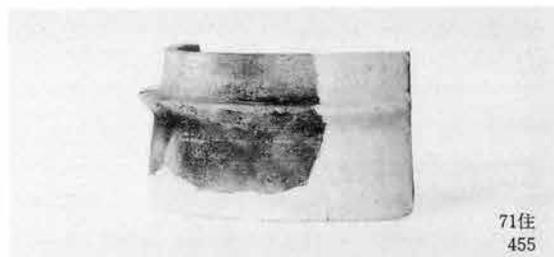


634



631

5区59号住居跡遺物



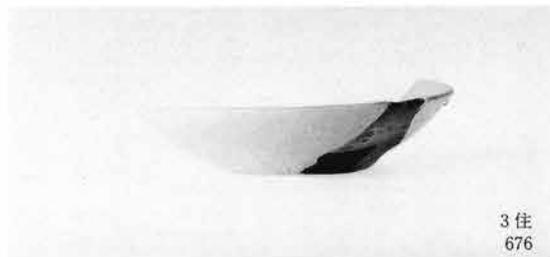
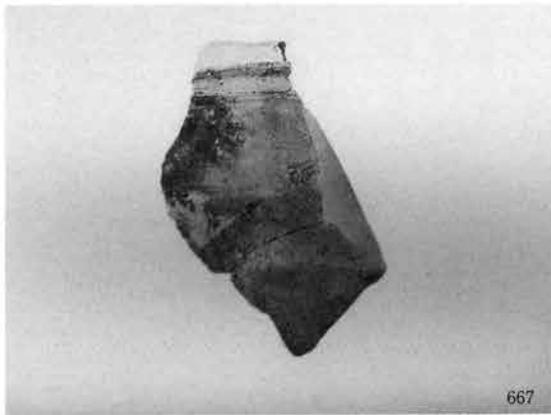
5区67号、71号、6区1号、2号住居跡遺物



6区1号住居跡全景(西)



6区2号、3号住居跡全景(西)



6区2号、3号住居跡遺物



6区4号住居跡全景(西)



681



680

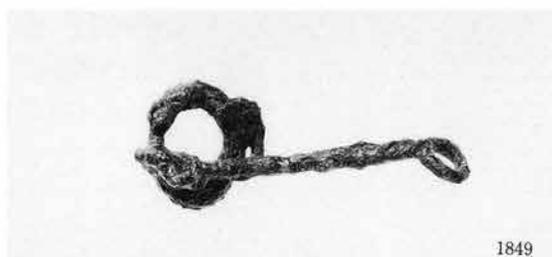


4 B住  
1051

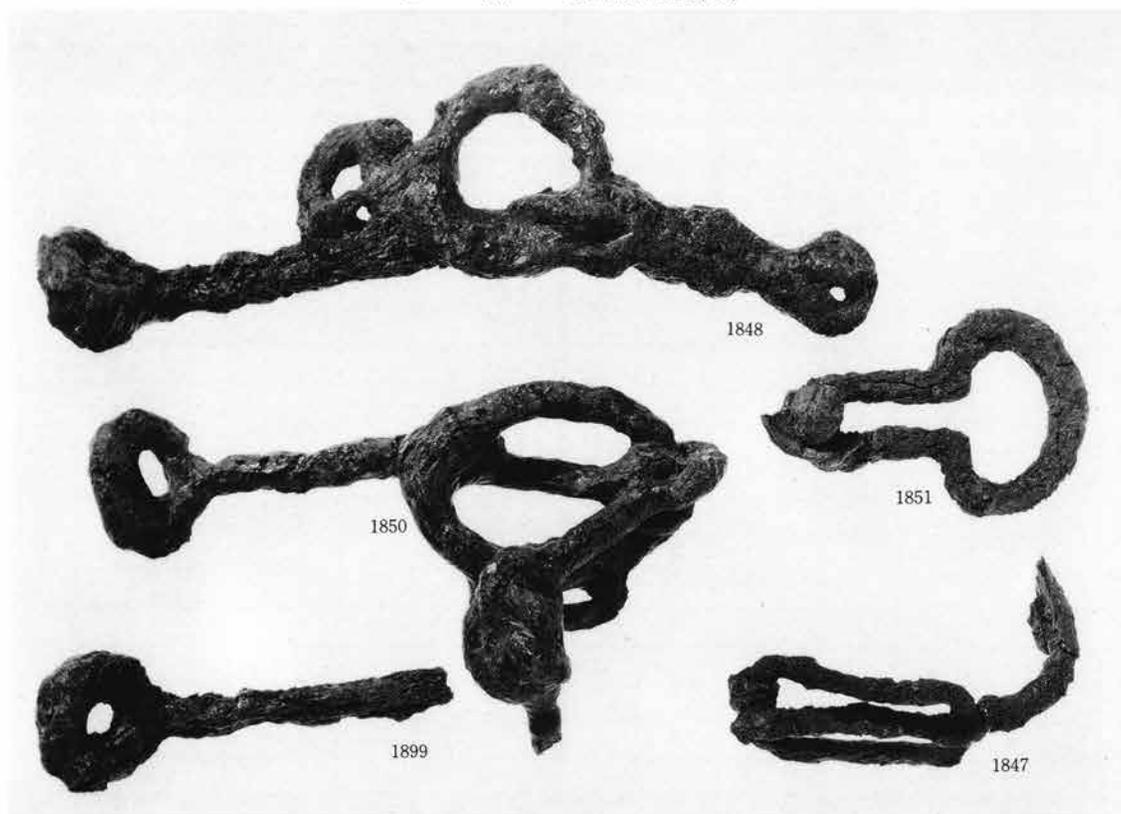


680

6区4A号、4B号住居跡遺物(1)



6区4A号、4B号住居跡遺物(2)



6区4B号住居跡遺物(3)



6区6号住居跡全景(西)



690



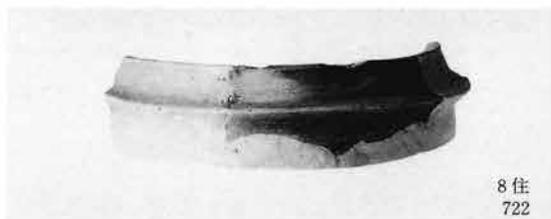
691



692



1054



8住  
722

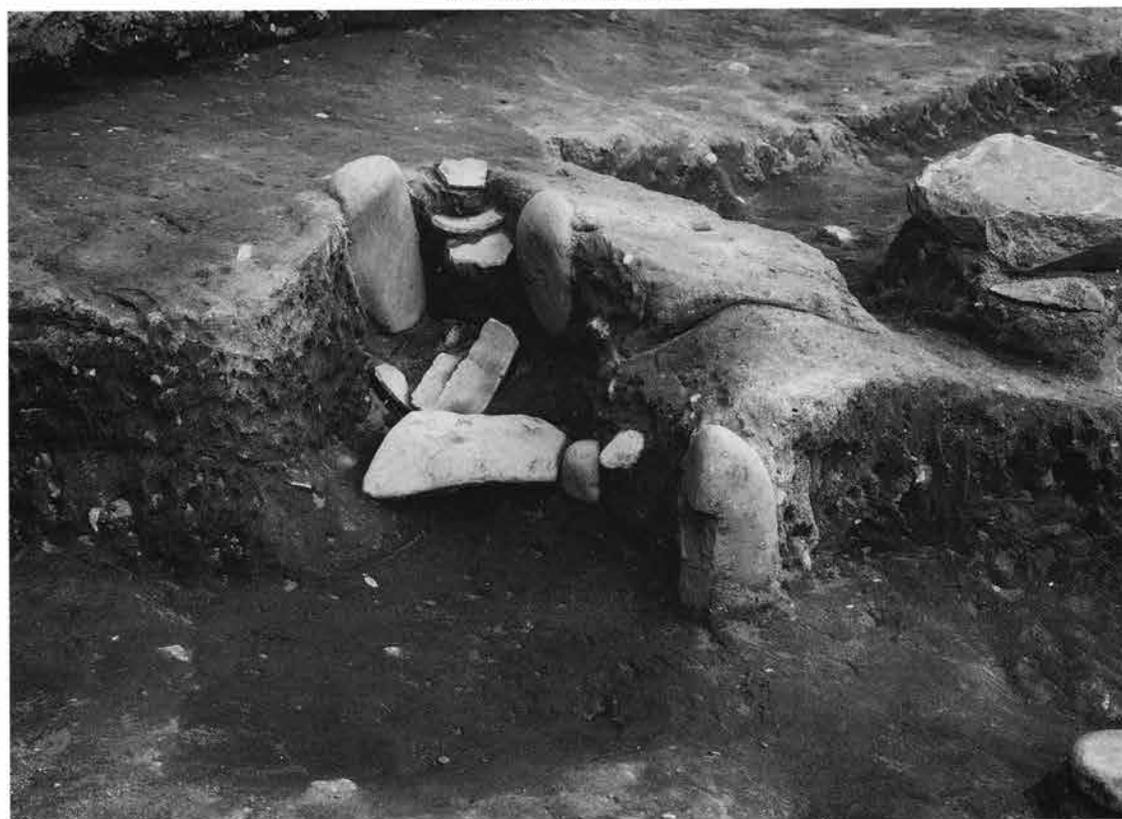


8住  
721

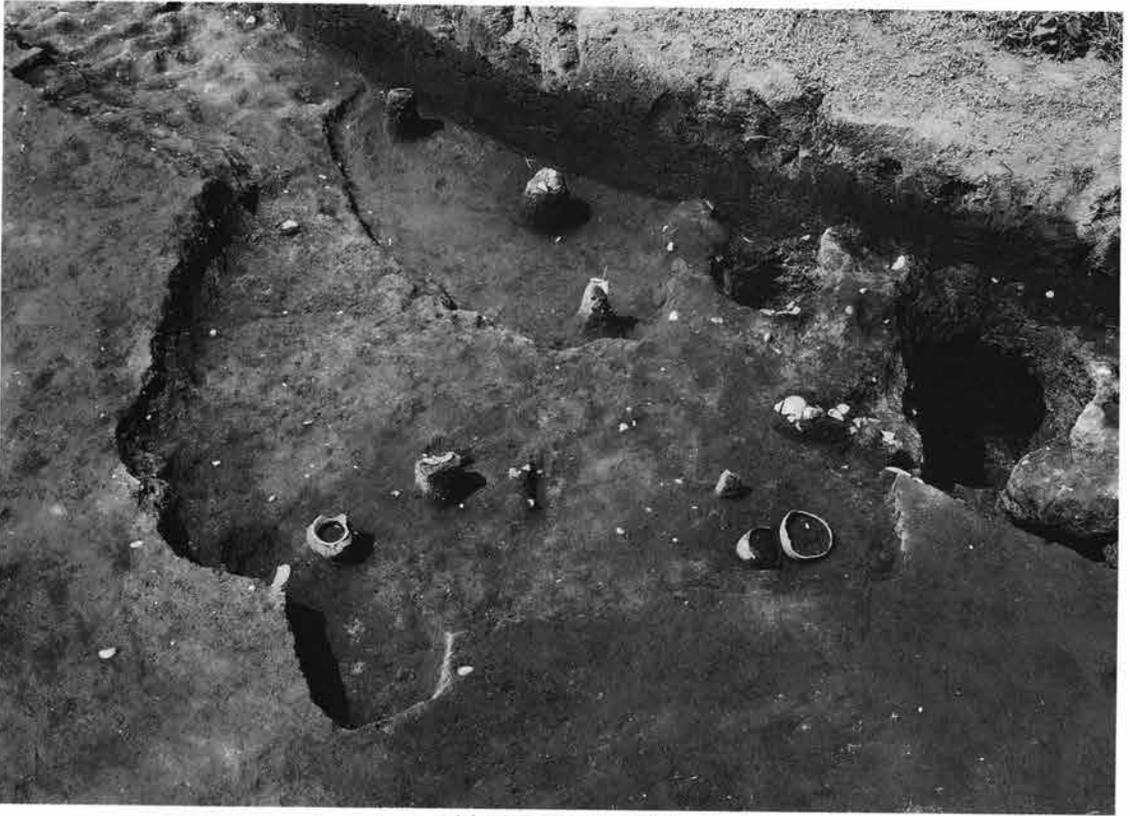
6区6号、8号住居跡遺物



6区10号住居跡全景(西)



6区10号住居跡カマド



6区11号住居跡全景(南)



743



744



747



739



740



741



742



745



746

6区11号住居跡遺物



6区13号住居跡全景(西)



748



749



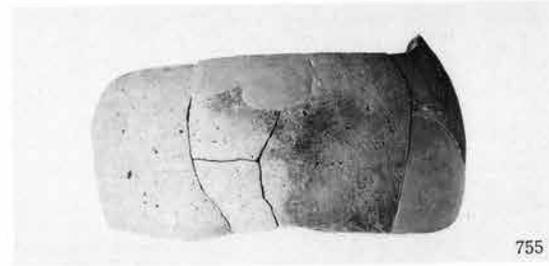
752



754



751



755

6区13号住居跡遺物



6区14号住居跡全景(西)



6区14号、17号、19号住居跡遺物



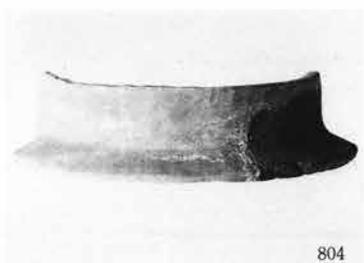
6区17号住居跡全景(北)



6区19号住居跡全景(東南)



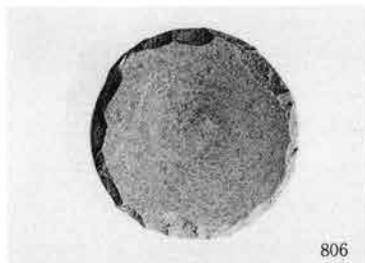
6区24号住居跡遺物



804



802



806



797



798



806



799



25住  
809



25住  
1072

6区24号、25号住居跡遺物



836



838



837



831



831



1076

7区1号住居跡遺物(1)



7区1号住居跡全景(西北)



834



833



835



825



826



827



829



830

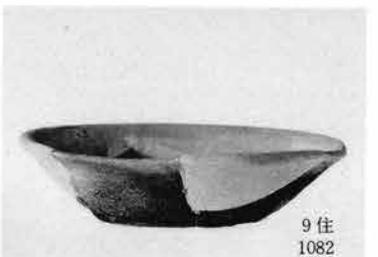
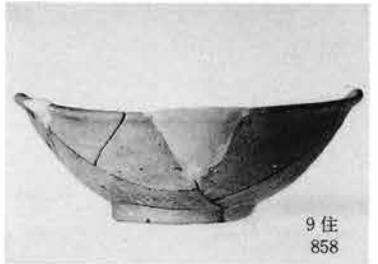
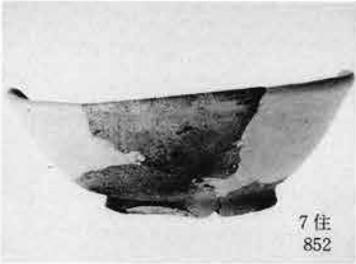
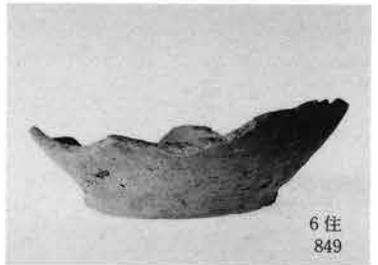
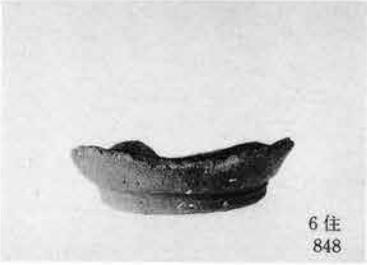
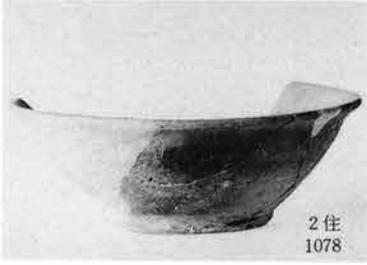
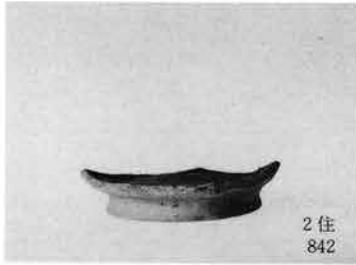
7区1号住居跡遺物(2)



7区3号住居跡全景(東)



7区6号住居跡全景(西)



7区2号、3号、6号、7号、9号住居跡遺物



7区8号、9号住居跡全景(西)



854



856



857



1080

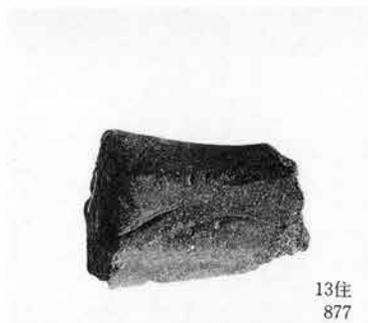
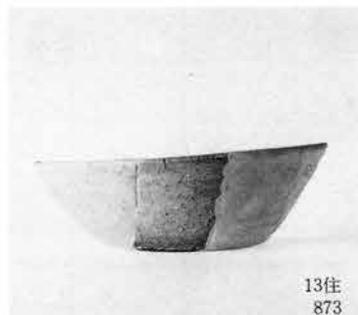
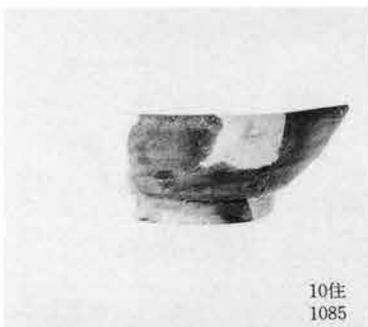
7区9号住居跡遺物



7区10号住居跡全景(北)



7区12号住居跡全景(西)



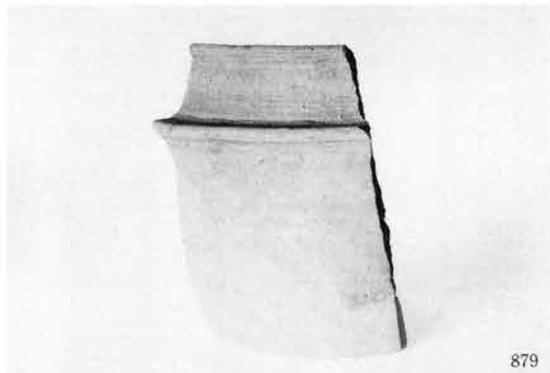
7区10号、12号、13号住居跡遺物



7区13号住居跡全景(東)



7区16号住居跡全景(西)



7区16号住居跡遺物



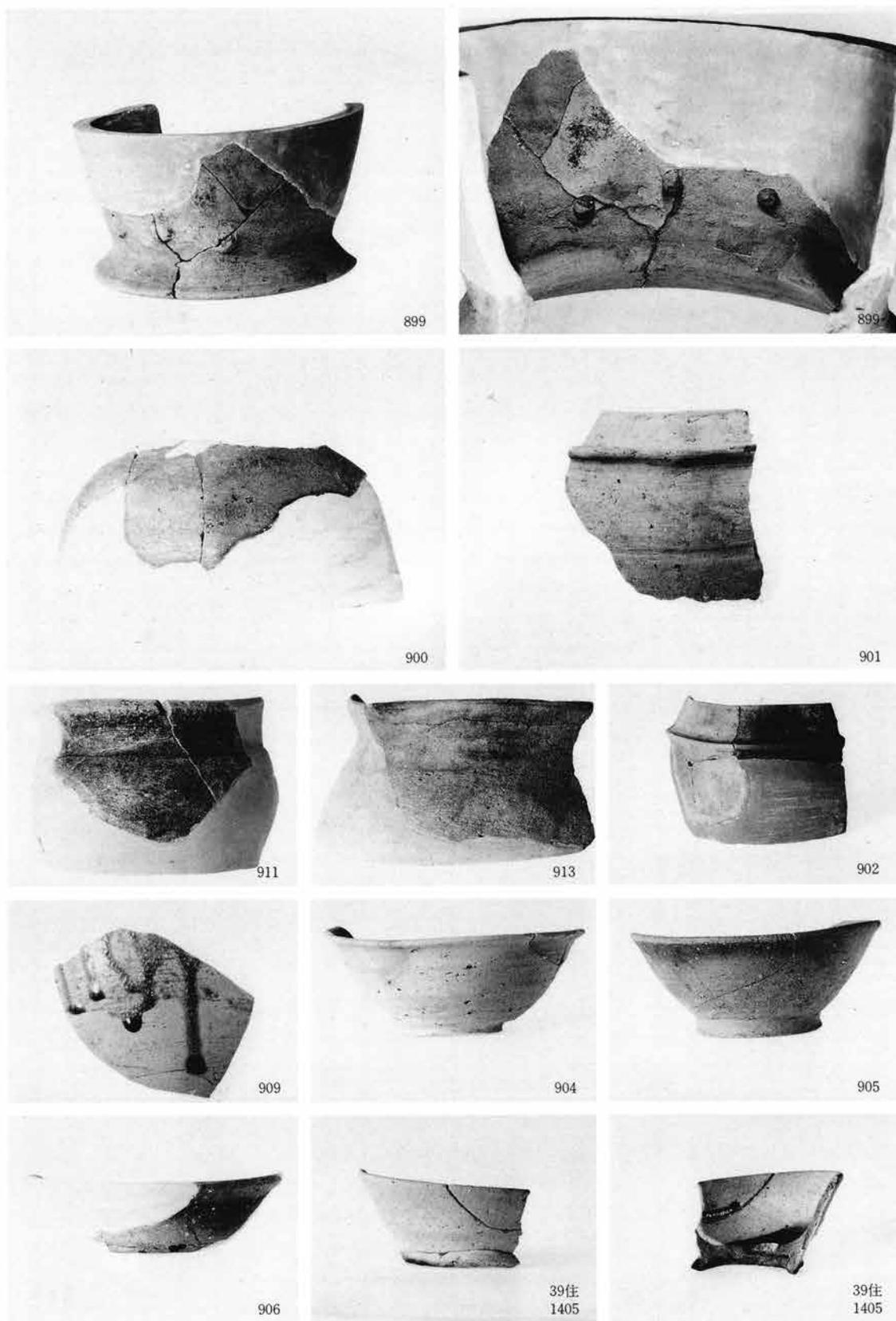
7区17号住居跡遺物



7区17号、36号住居跡全景(西)



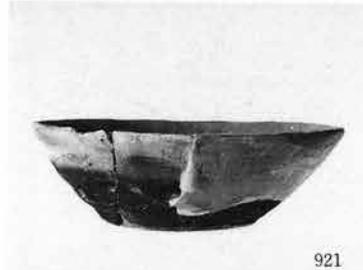
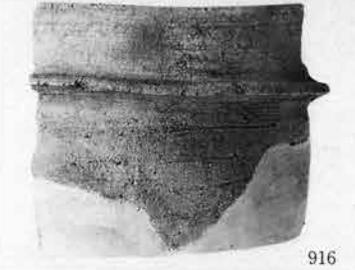
7区18号住居跡全景(西)



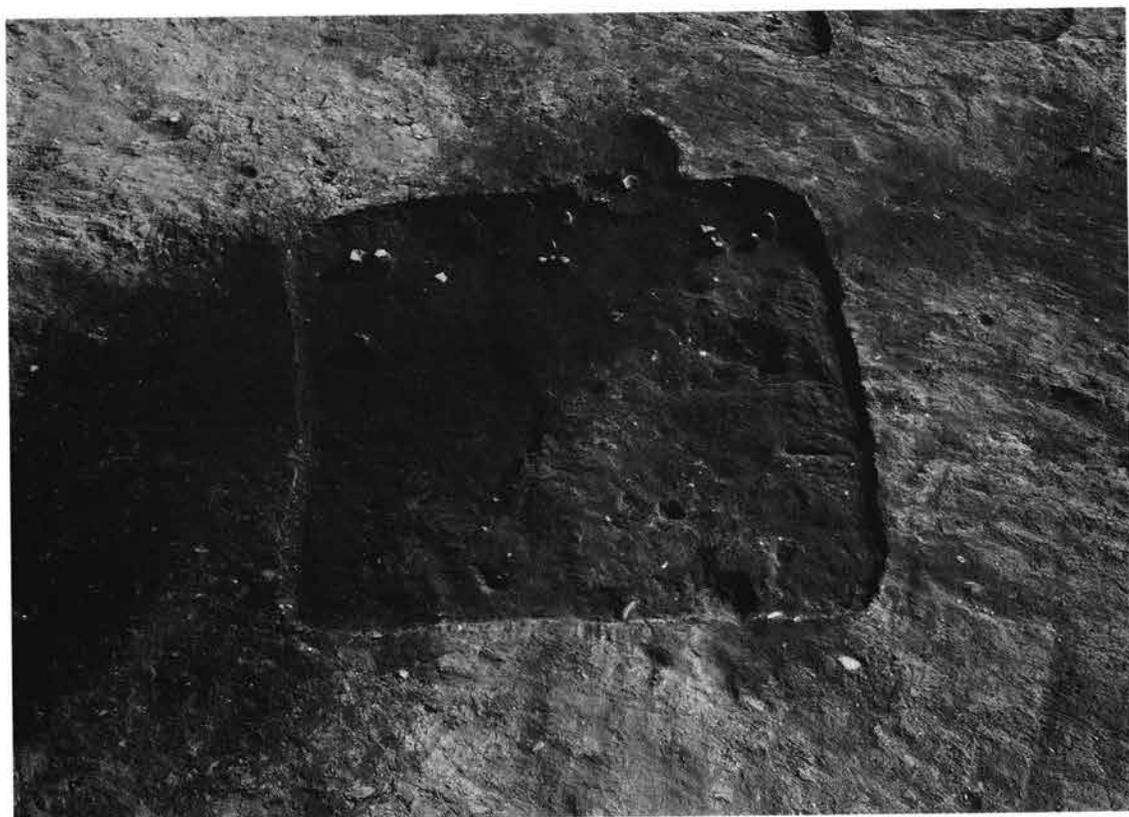
7区18号、39号住居跡遺物



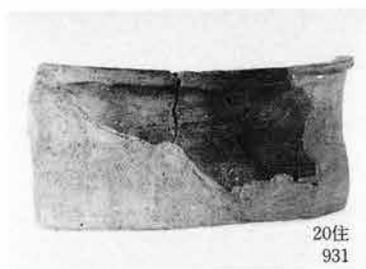
7区19号、26号、31号、32号、37号、39号住居跡全景(西)



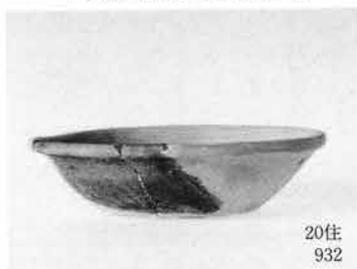
7区19号住居跡遺物



7区20号住居跡全景(西)



20住  
931



20住  
932



31住  
982



20住  
929



31住  
980



36住  
1415



26住  
962



37住  
989



39住  
1406

7区20号、26号、31号、36号、37号、39号住居跡遺物



7区27号、29号住居跡全景(西)



963



964



965



966



967



968



969

7区27号住居跡遺物



7区33号住居跡全景(西)



983



984



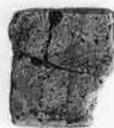
988



1402



1403

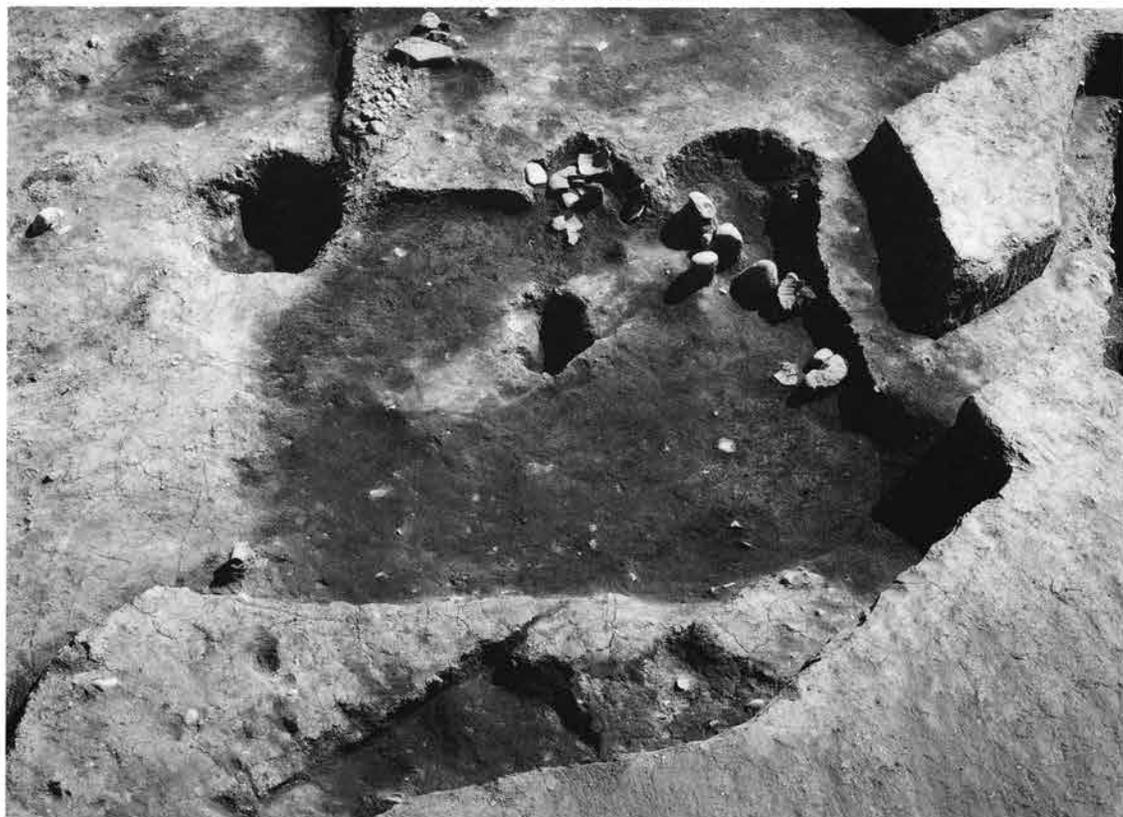


1404

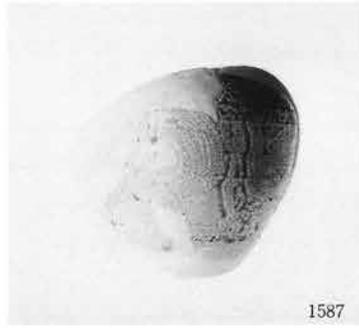
7区33号住居跡遺物



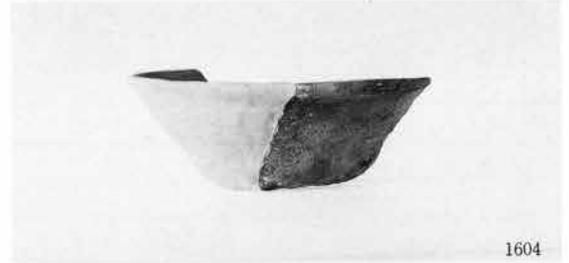
7区46号住居跡全景(西北)



7区50号住居跡全景(西北)



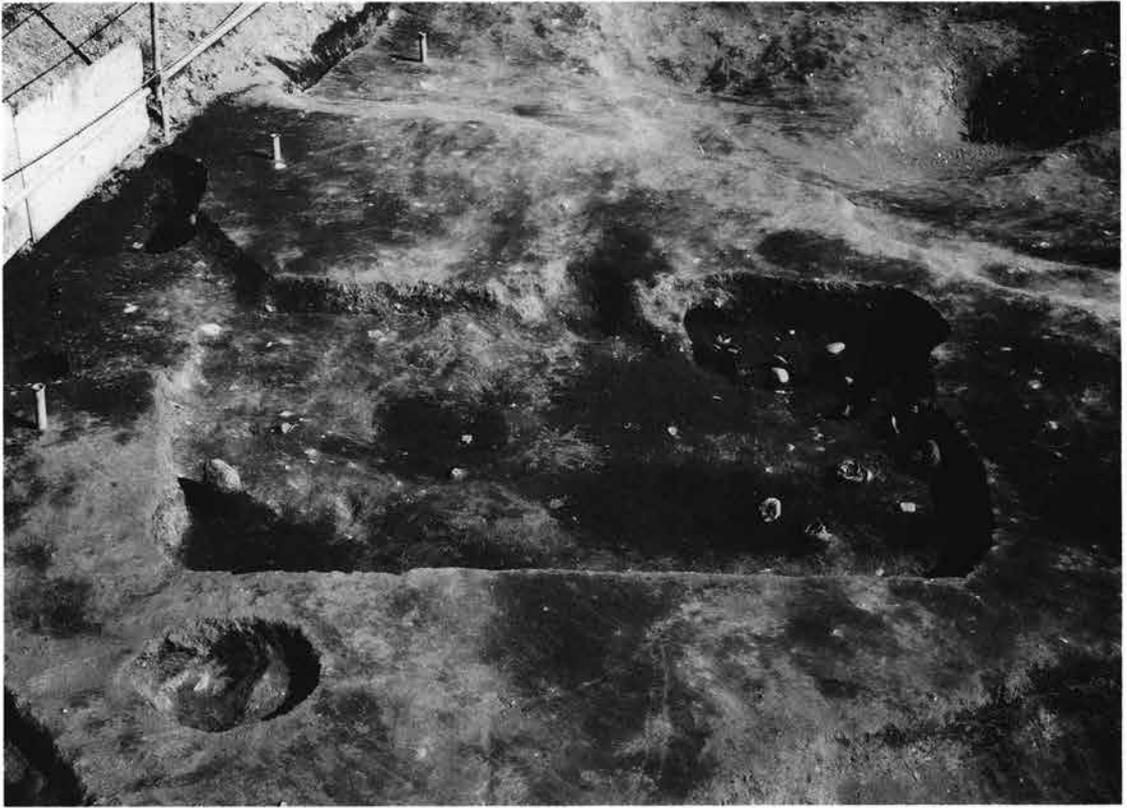
7区47号住居跡遺物



7区50号住居跡遺物



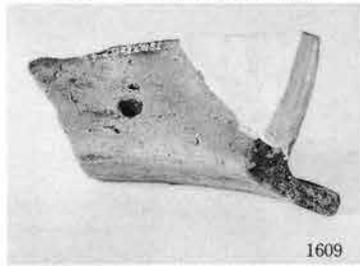
7区52号住居跡遺物



7区52号住居迹全景(西北)



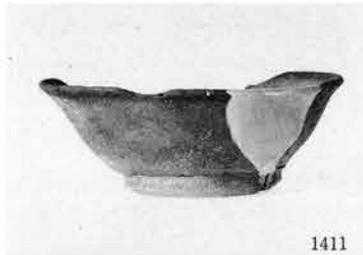
1609



1609



1607



1411



1412



1610



1611



1612

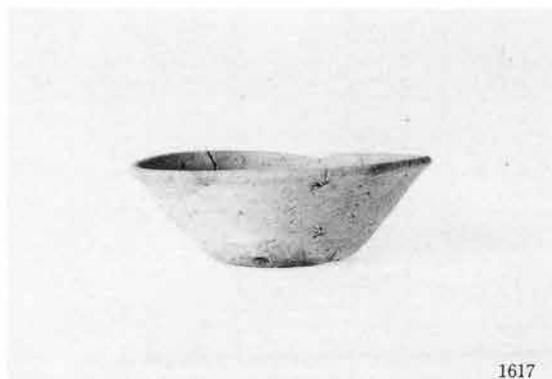


1613

7区52号住居迹遺物



1616



1617

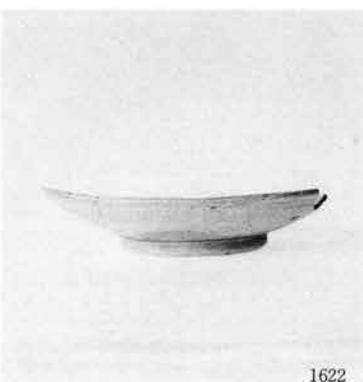
7区53号住居跡遺物



1618



1619



1622



1413



1414



1623

7区54号住居跡遺物

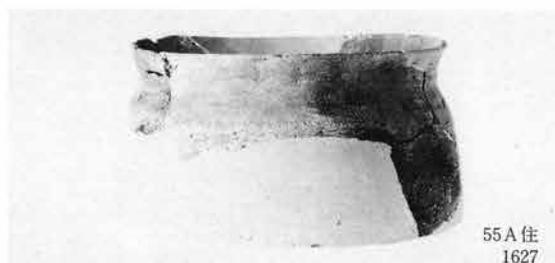


1629

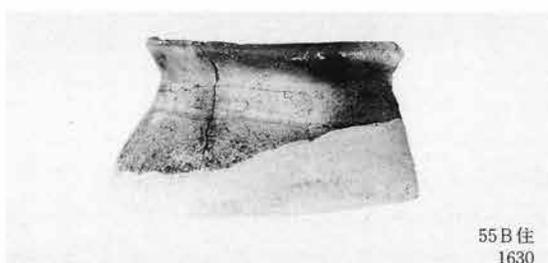


1629

7区55B号住居跡遺物



55A 住  
1627



55B 住  
1630



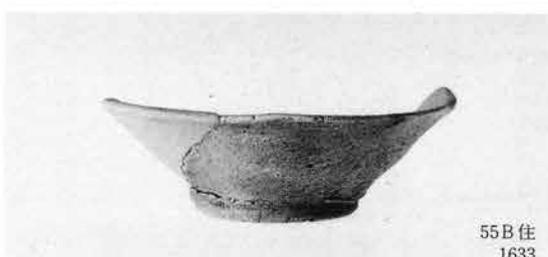
55A 住  
1628



55B 住  
1631



55B 住  
1632



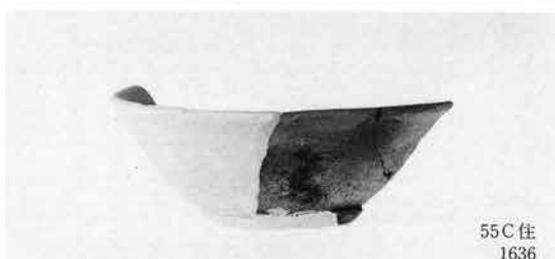
55B 住  
1633



55B 住  
1634



55C 住  
1635



55C 住  
1636



55A 住  
1658

7区55A号、B号、C号住居跡遺物



8区2号住居跡全景(東南)



1641



1642



1643



1644



1418

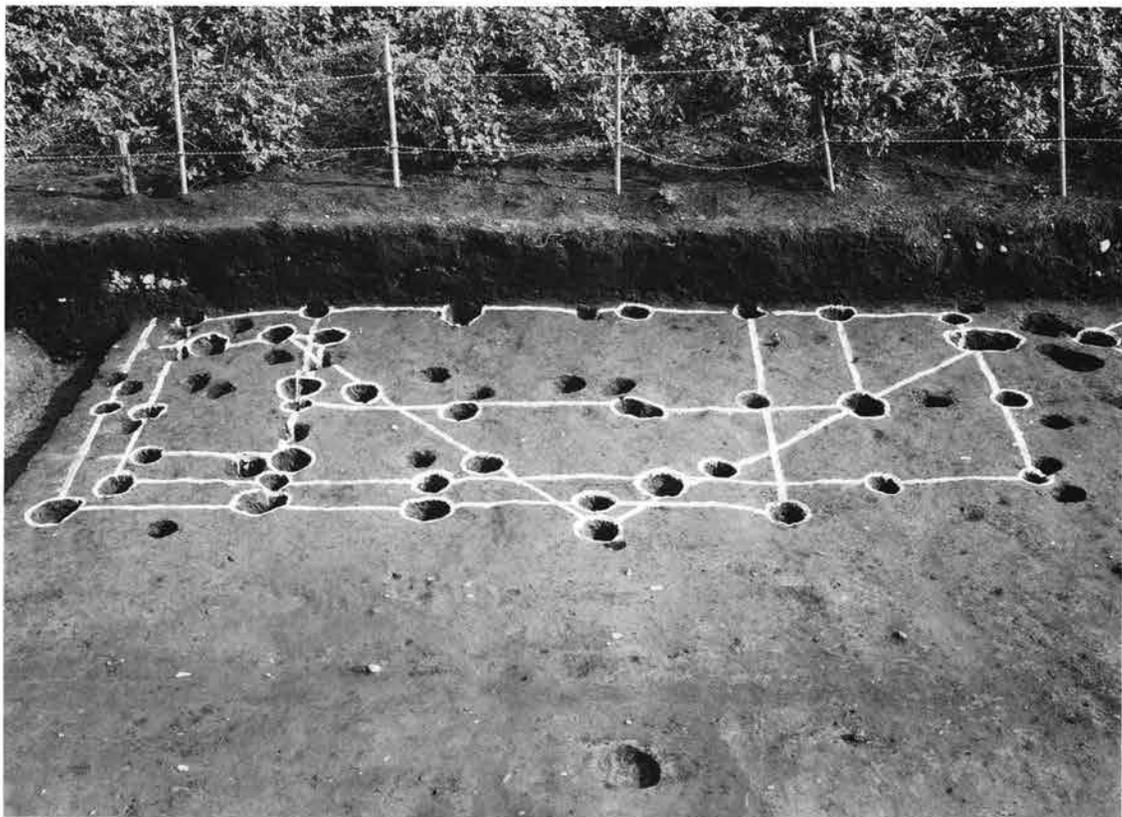


1419

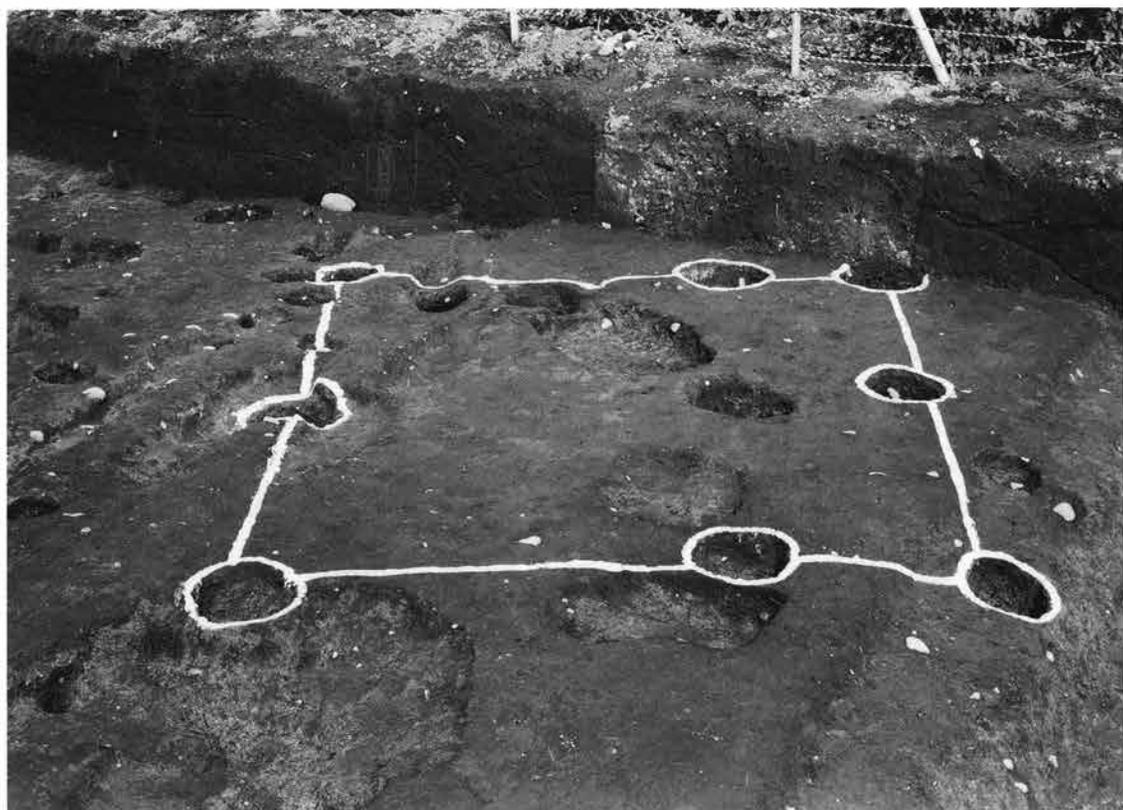
8区2号住居跡遺物



4区3号掘立(東)



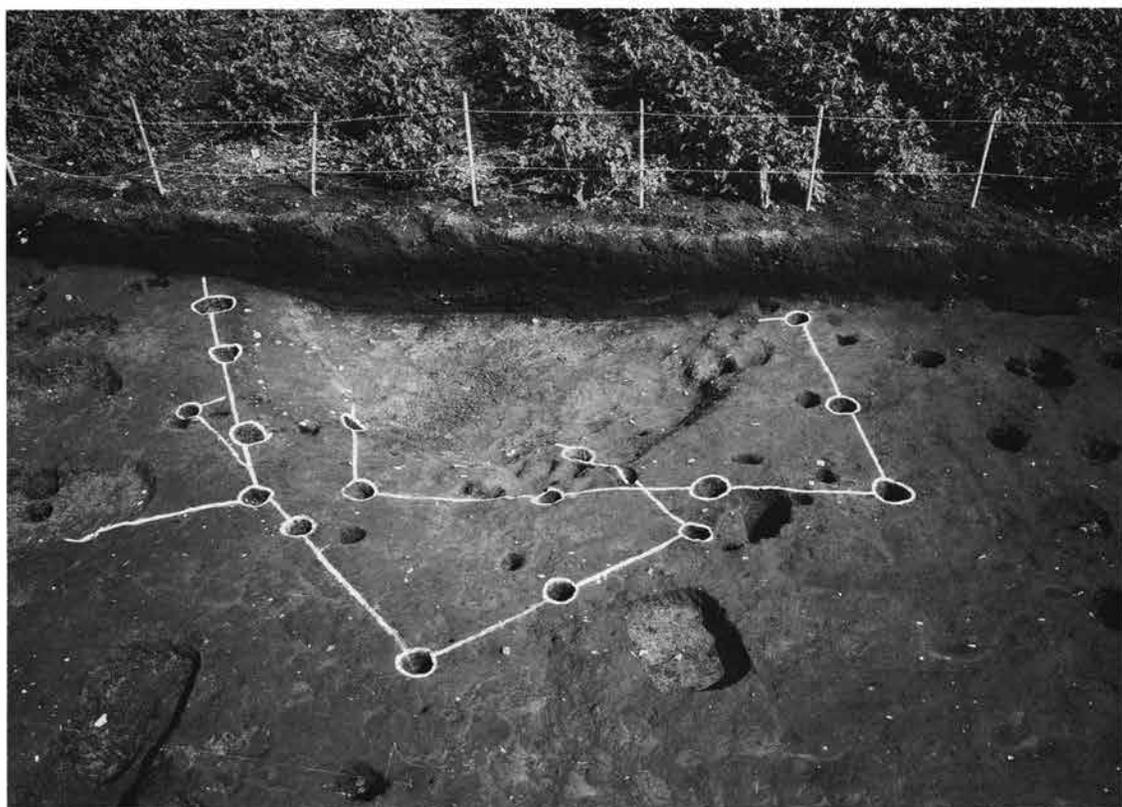
7区1号、2号、3号、4号、5号掘立(西)



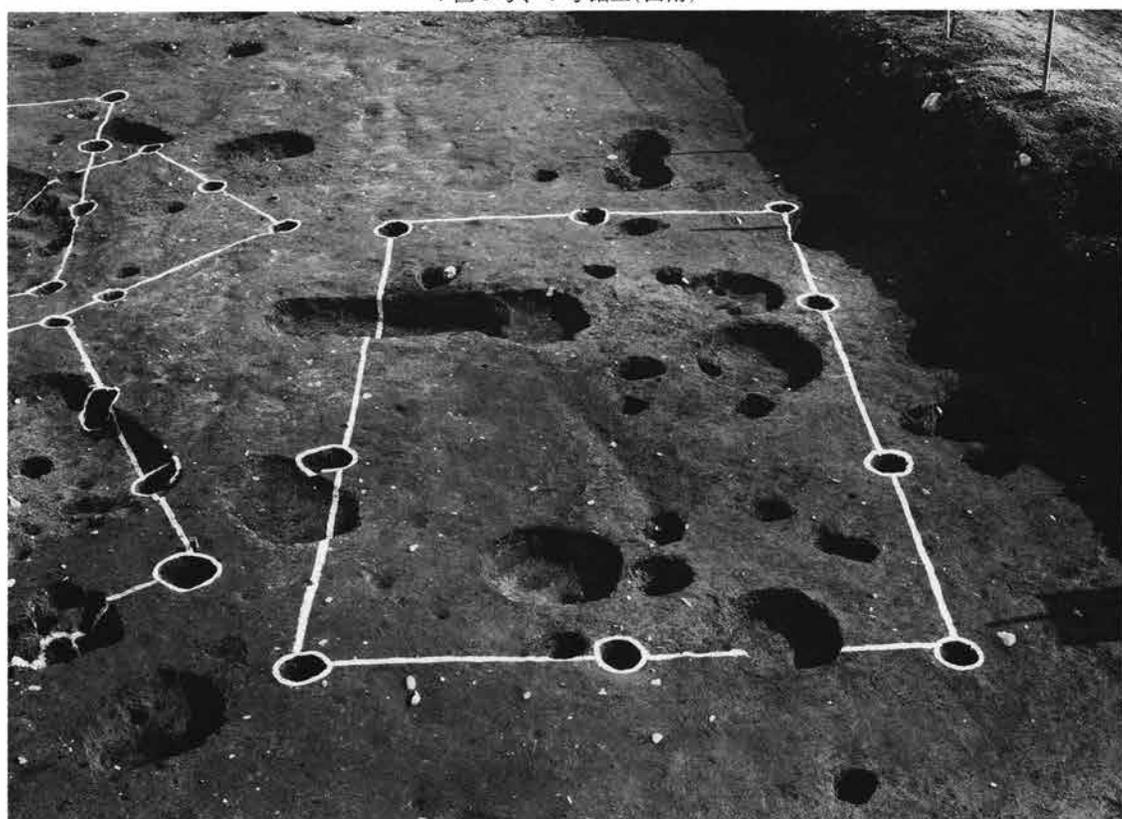
7区6号掘立(西)



7区7号掘立(西)



7区8号、9号掘立(西南)



7区10号掘立(北)



7区11号掘立(西)



7区12号掘立(西南)



7区113号土坑全景(西)



1672



1667



1671



1670



1671



1668

7区113号土坑遺物



7区59号土坑全景(西)



1663



1664



1665

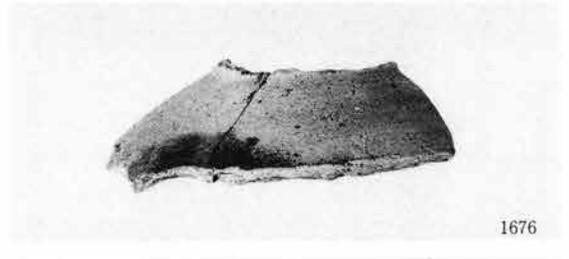


1666

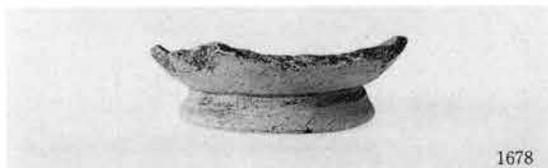
7区59号土坑遗物



1675



1676



1678



1677

7区101号土坑遗物



7区101号、102号土坑全景  
(東南)



7区64号土坑  
(東)



7区64号土坑  
(東)



5区4号溝



6区1号溝



6区8号、10号溝



657



656



658



1661



1685

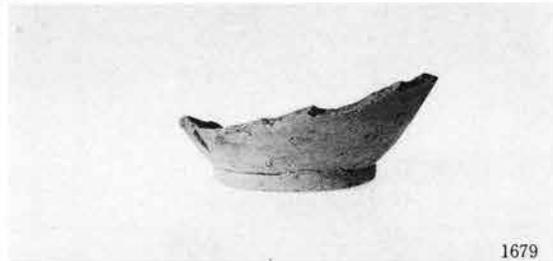


1674

土 塚 遺 物



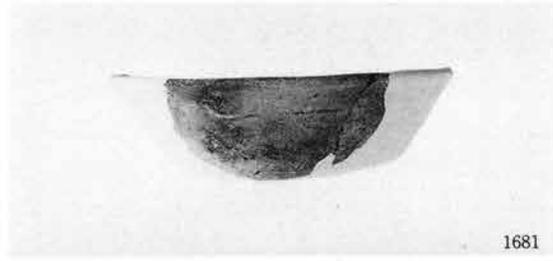
649



1679



651



1681



65



651

溝 遺 物



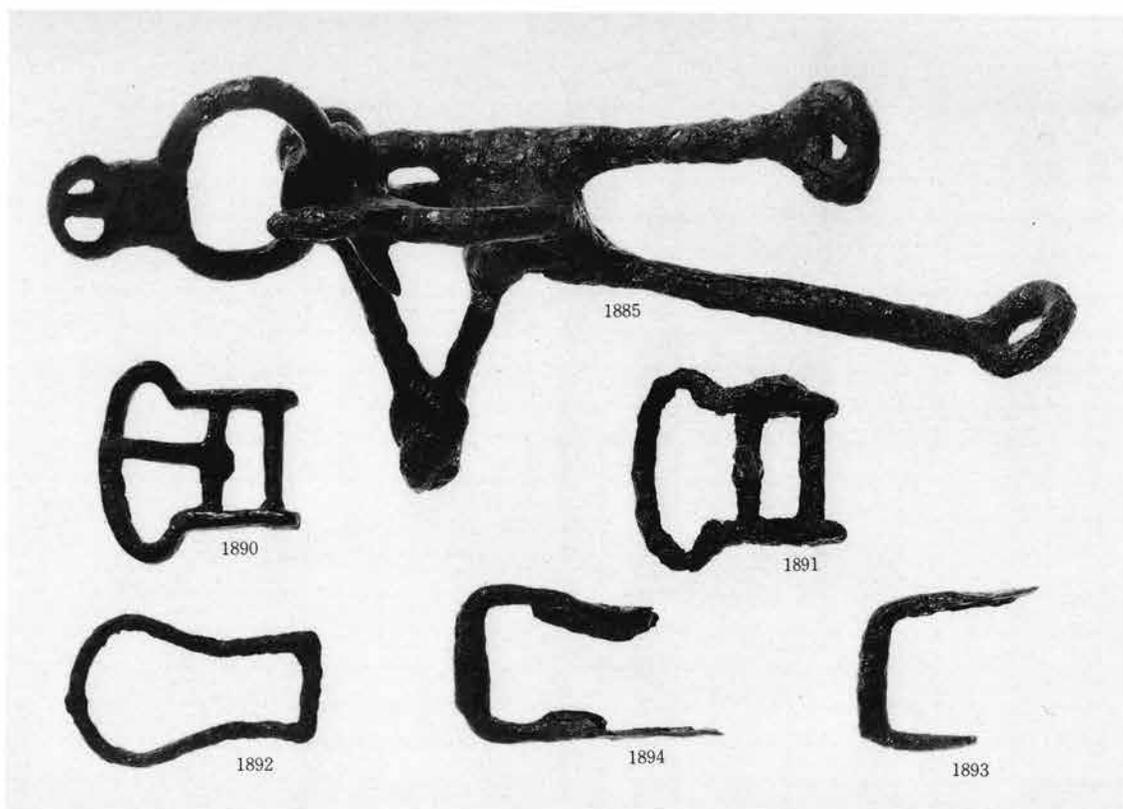
4区1号井戸



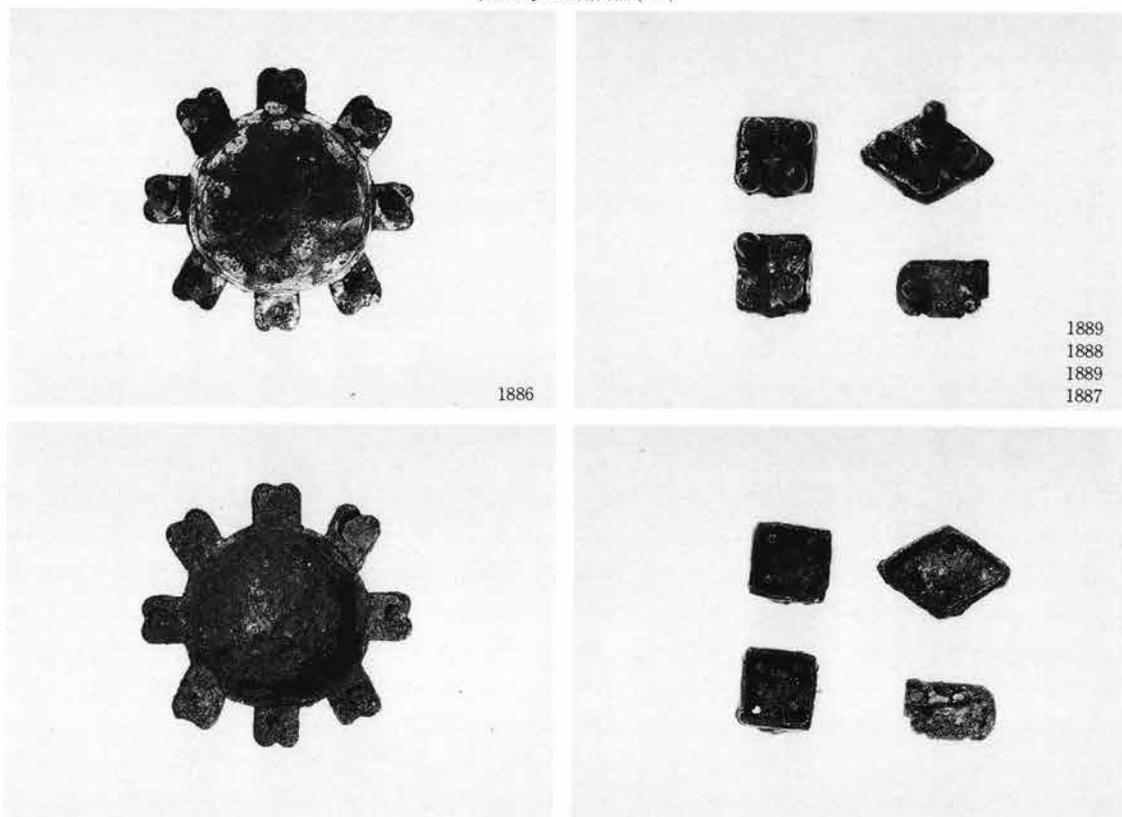
4区2号井戸



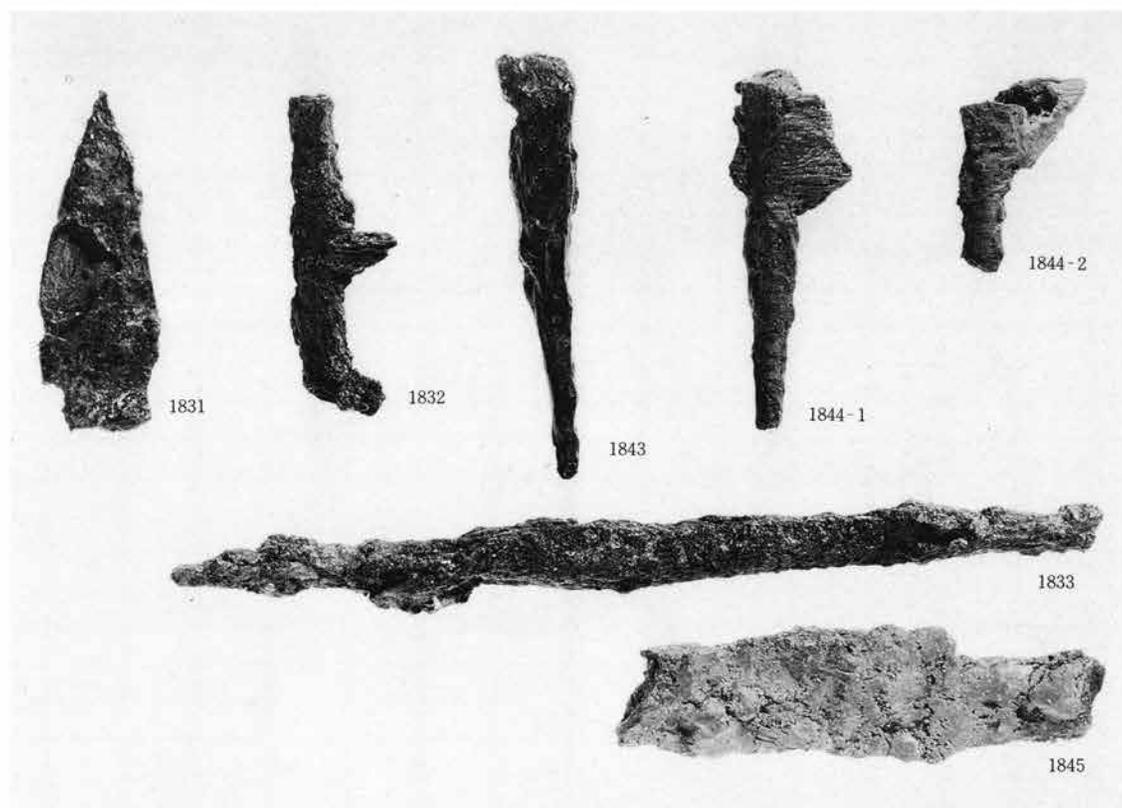
4区7号井戸



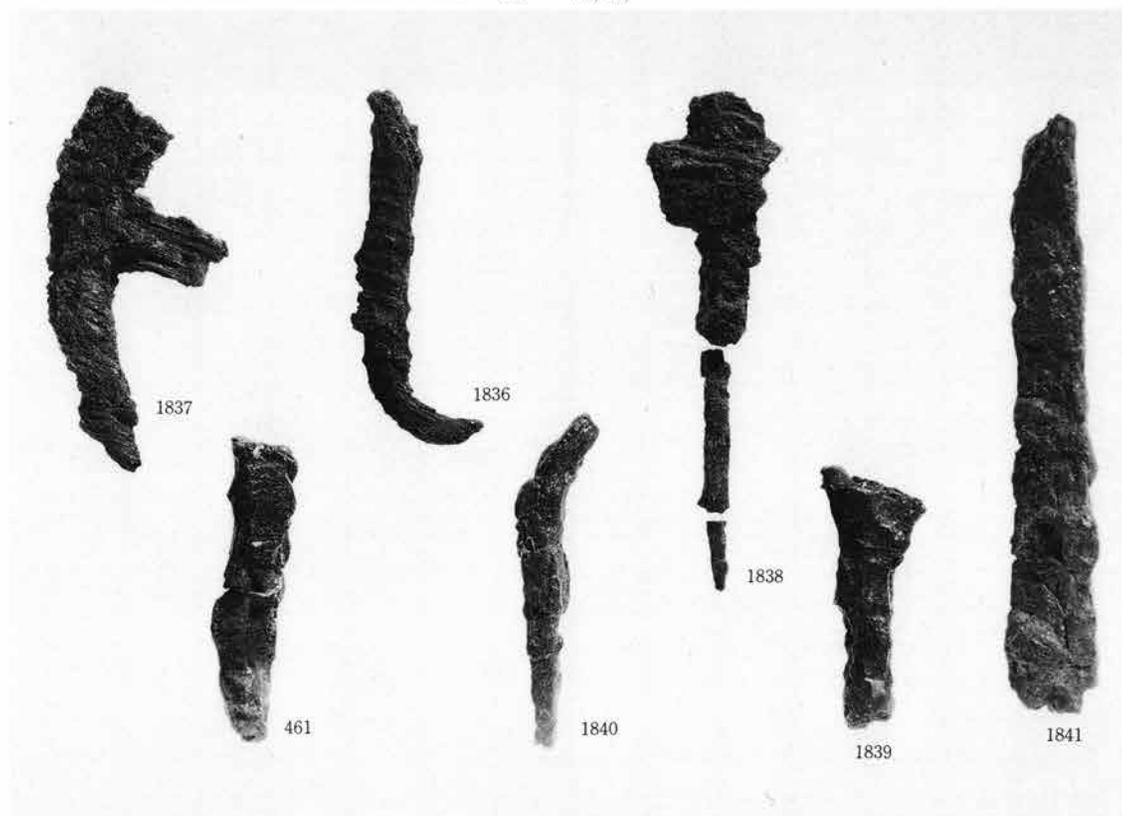
7区62号土坑铁器(1)



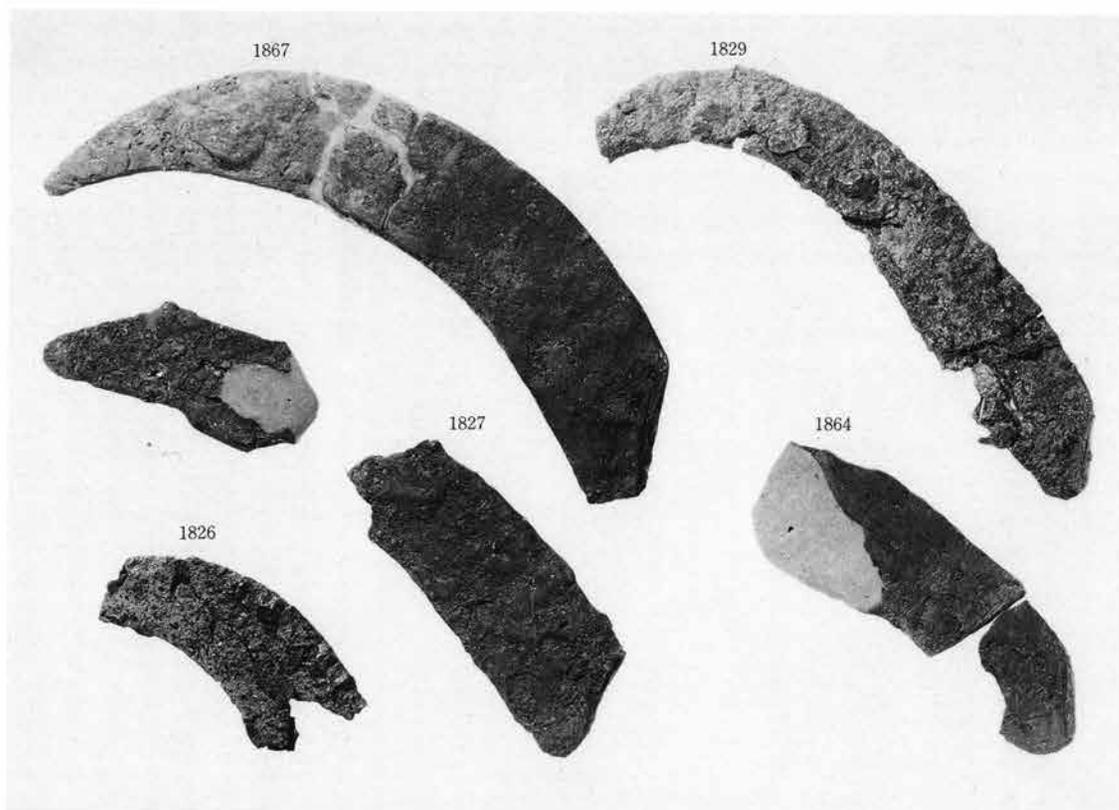
7区62号土坑铁器(2)



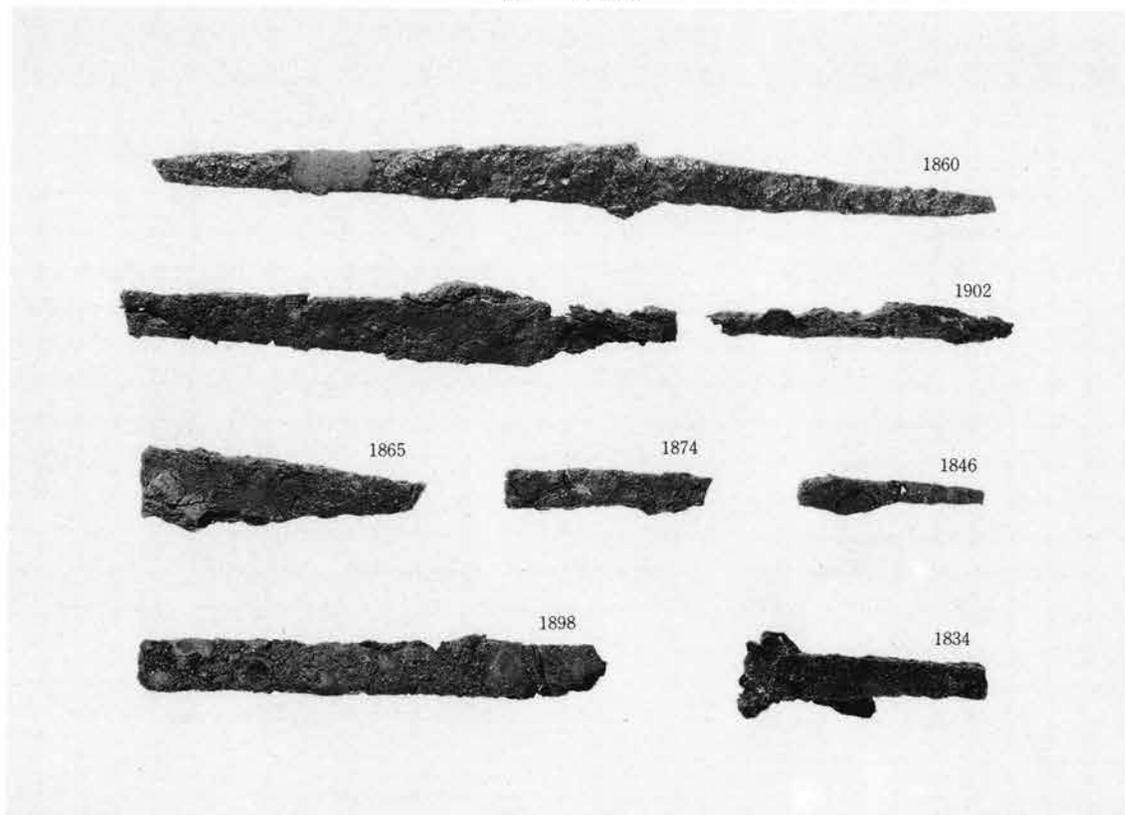
鉄 器(1)



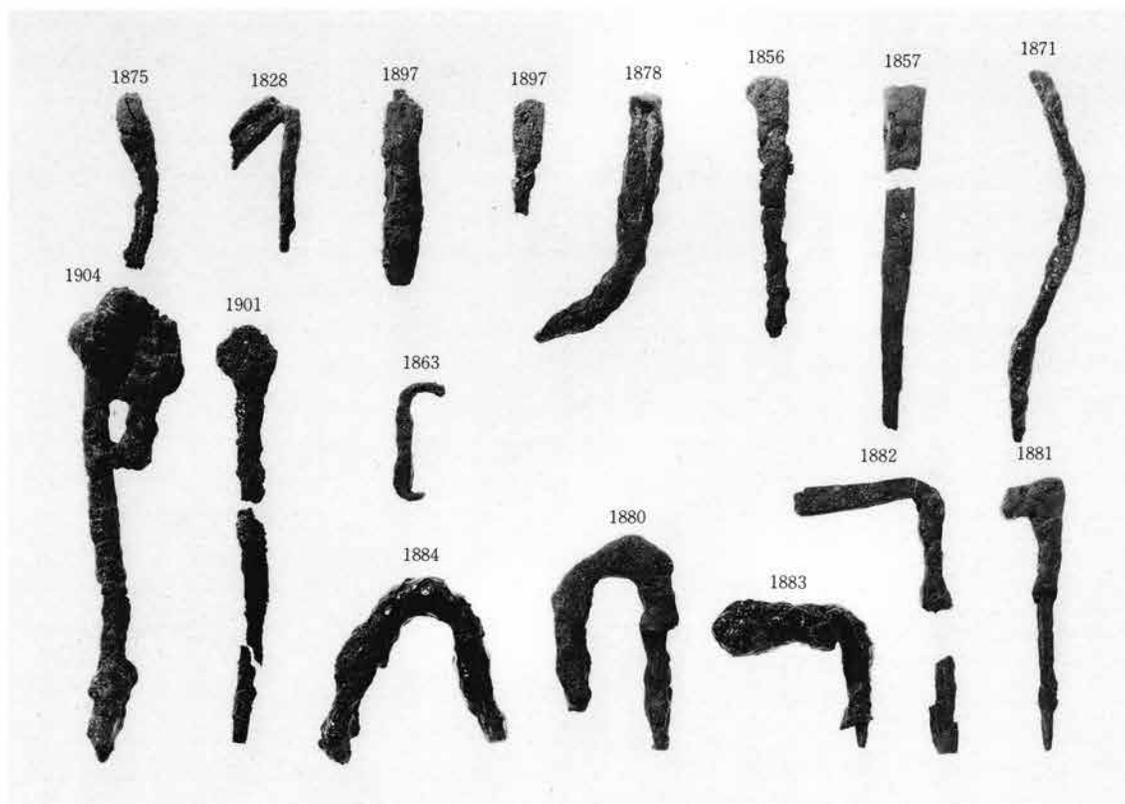
鉄 器(2)



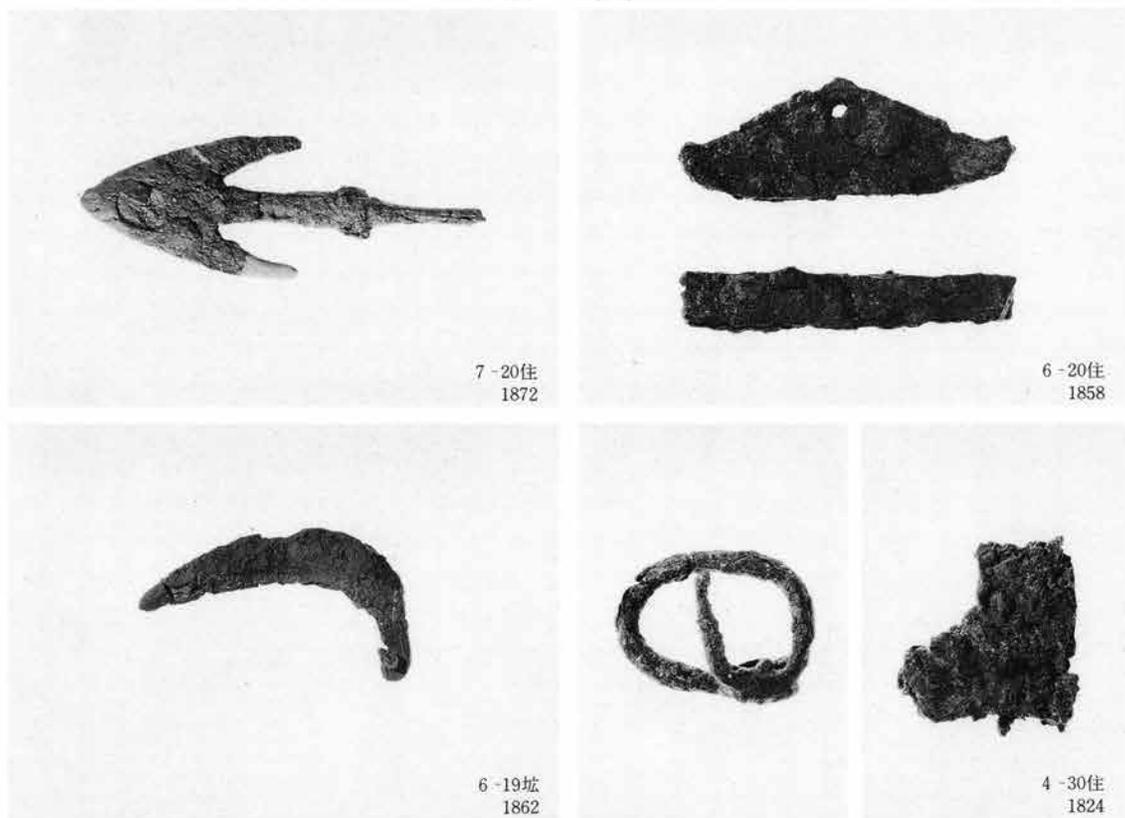
鉄 器(3)



鉄 器(4)



鉄器(5)



鉄器(6)

**下佐野遺跡II地区** (平安時代  
中・近世) —上越新幹線関係埋蔵  
文化財発掘調査報告第6集—

---

印刷 昭和61年3月26日

発行 昭和61年3月31日

編集・発行 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2  
(0279) 52-2511(代)

印刷 朝日印刷工業株式会社

---

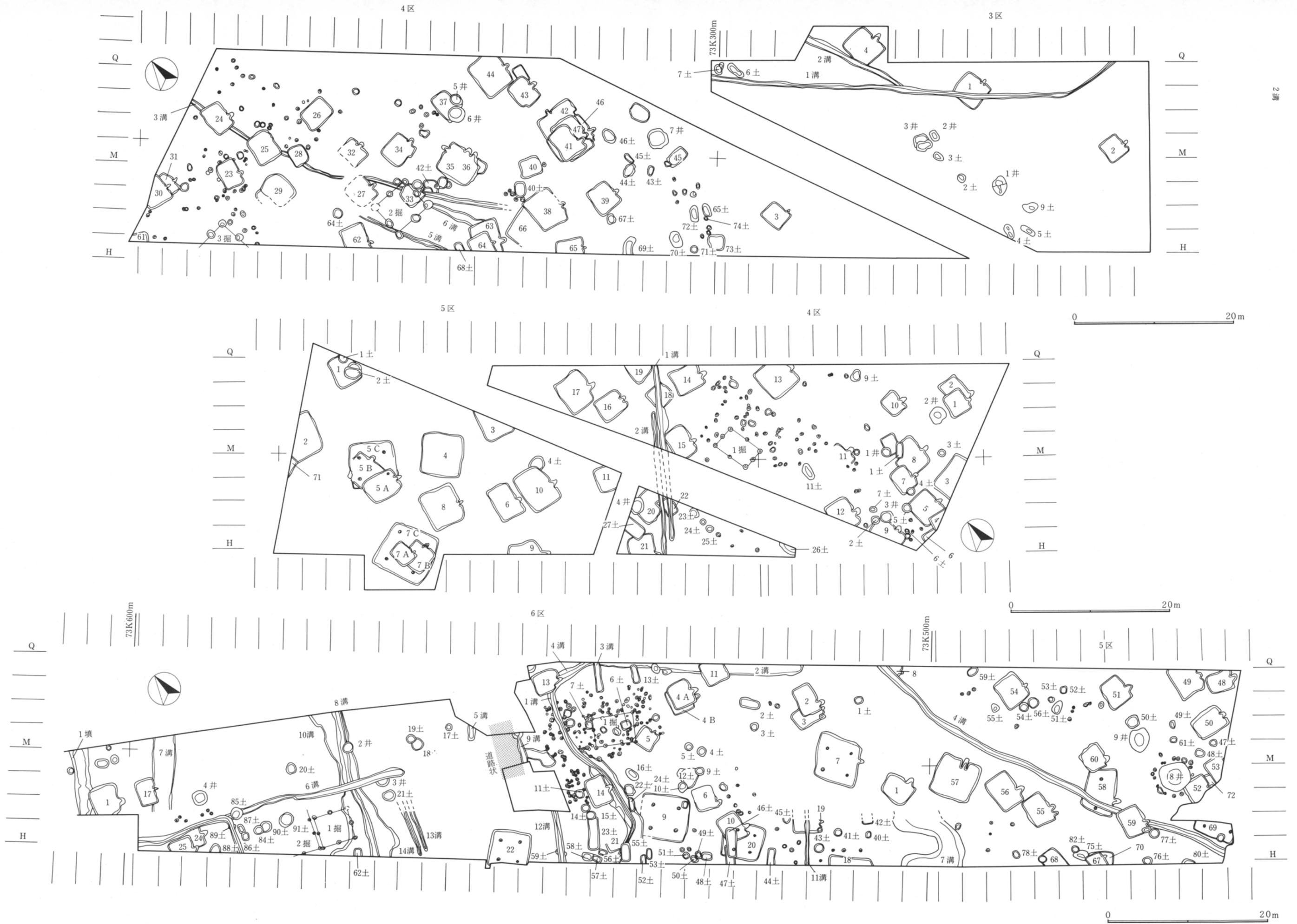


- 1 浅間山古墳
- 2 大鶴巻古墳
- 3 小鶴巻古墳
- 4 西山古墳
- 5 大山古墳
- 6 茶臼山古墳
- 7 天王山古墳
- 8 漆山古墳
- 9 御堂塚古墳
- 10 蔵王塚古墳

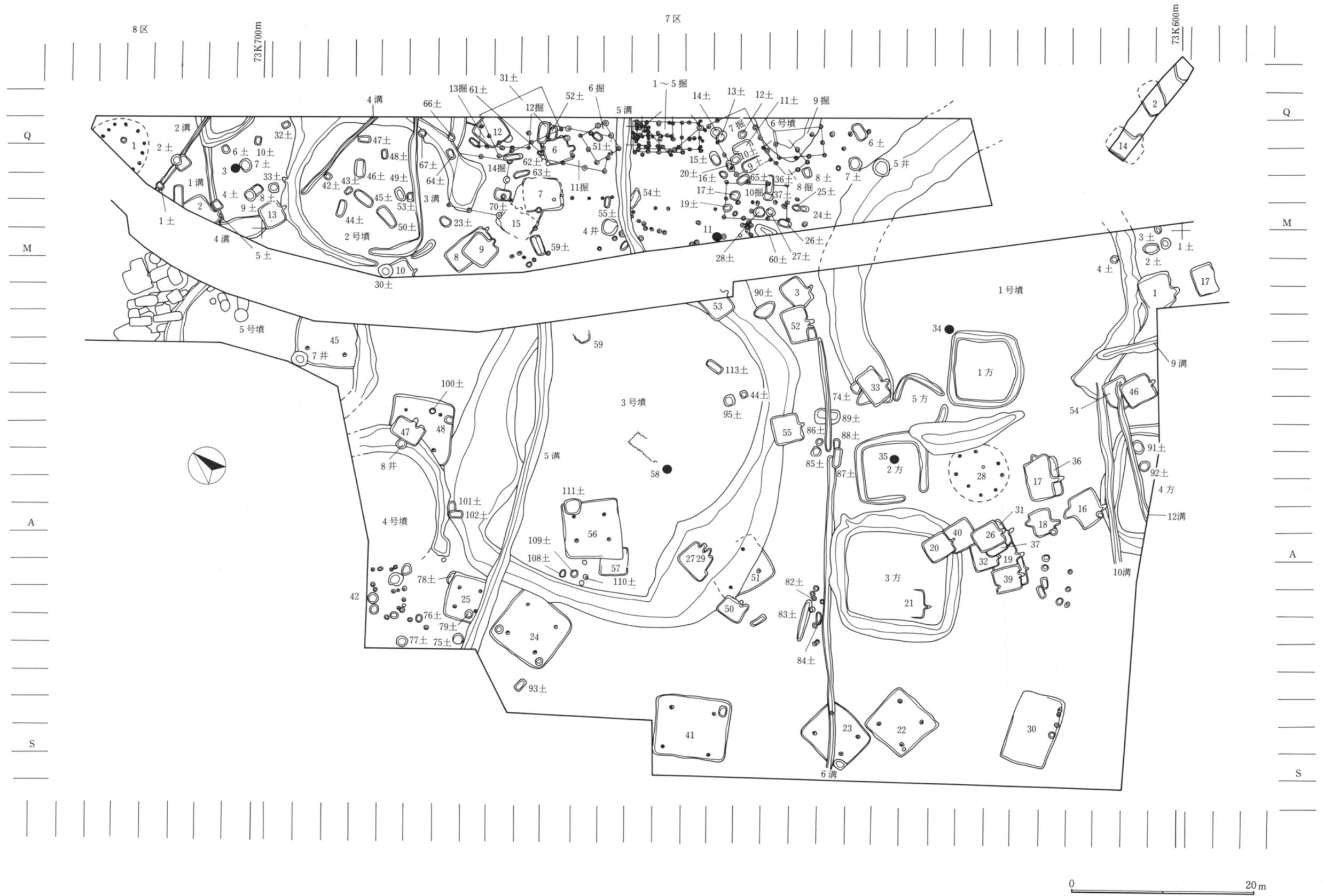


付図1 調査区位置及び佐野古墳群位置図

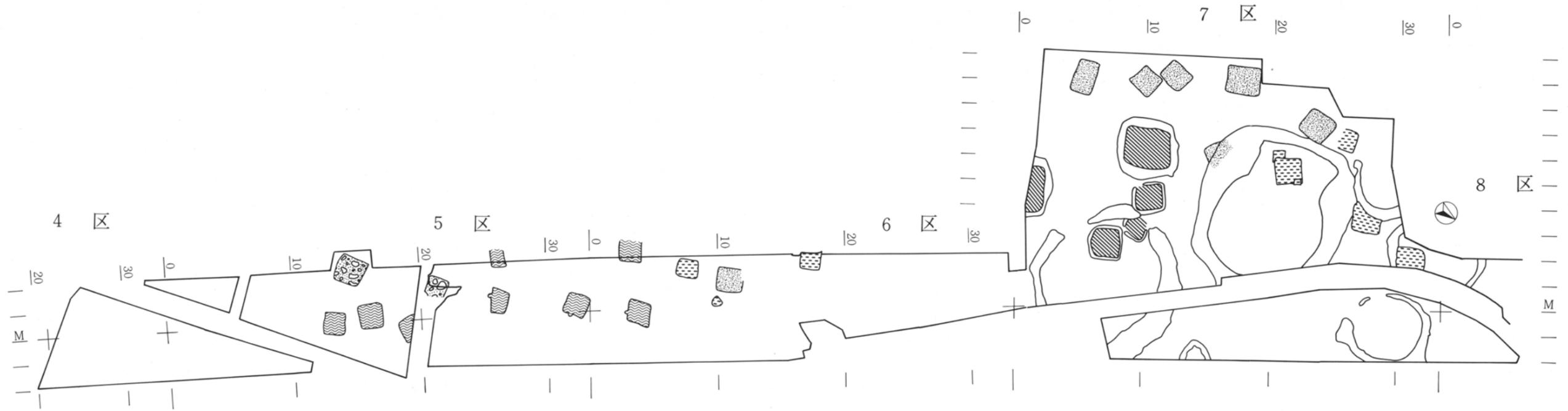
1:5,000  
0 100 500 1000



付図2 下佐野遺跡II地区全体図(1) 3、4、5、6区

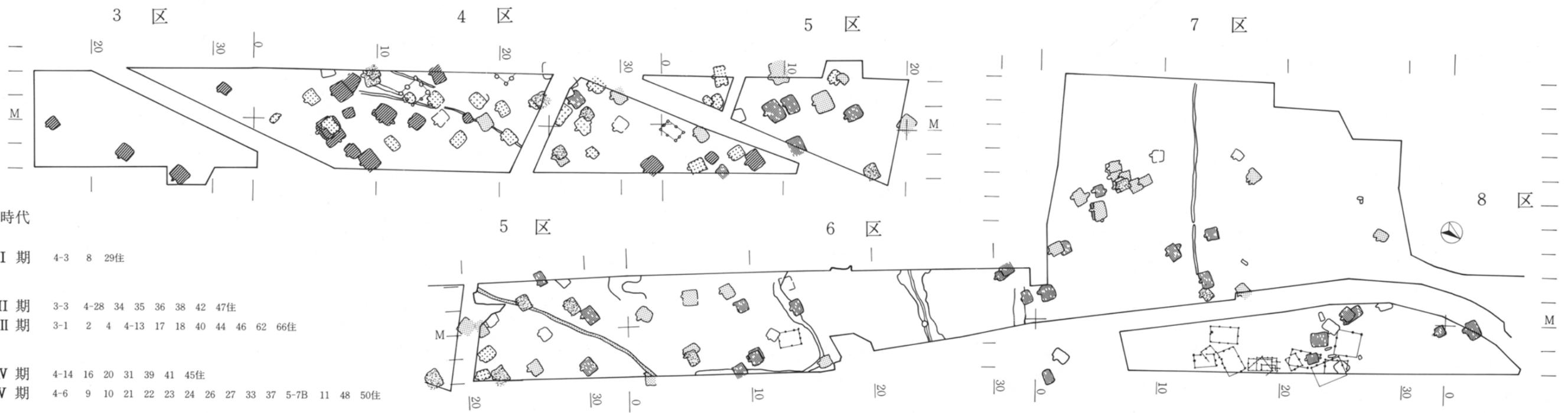


付図2 下佐野遺跡II地区全体図(2) 7、8区



古墳時代

方形周溝墓    
 玉工房跡    
 前期竪穴住居    
 中期竪穴住居    
 後期竪穴住居



平安時代

- |  |          |                                                    |
|--|----------|----------------------------------------------------|
|  | 第 I 期    | 4-3 8 29住                                          |
|  | 第 II 期   | 3-3 4-28 34 35 36 38 42 47住                        |
|  | 第 III 期  | 3-1 2 4 4-13 17 18 40 44 46 62 66住                 |
|  | 第 IV 期   | 4-14 16 20 31 39 41 45住                            |
|  | 第 V 期    | 4-6 9 10 21 22 23 24 26 27 33 37 5-7B 11 48 50住    |
|  | 第 VI 期   | 4-5 19 5-5A 10 6-4B 25 7-6 7 8 18 33 36 52 55A     |
|  | 第 VII 期  | 55B 55C 55D 8-2住                                   |
|  | 第 VIII 期 | 5-3 6 54 56 67 6-4 A 6 11 14 17 24 7-1 2 9 13      |
|  | 第 IX 期   | 39 54住                                             |
|  | 第 X 期    | 4-12 25 5-8 72 6-1 8 19 7-10 17 32 37 46 47 50 53住 |
|  | 第 XI 期   | 4-2 15 5-7 A 9 51 52 53 71 6-3 10 13 7-16 19 20 27 |
|  | 第 XII 期  | 29 40住                                             |
|  | 第 XIII 期 | 4-1 30 63 5-1 49 59 6-2 7-6 12 31住                 |
|  | 第 XIV 期  | 4-7 64 5-55住                                       |

0 25 m

付図3 時代別遺構図

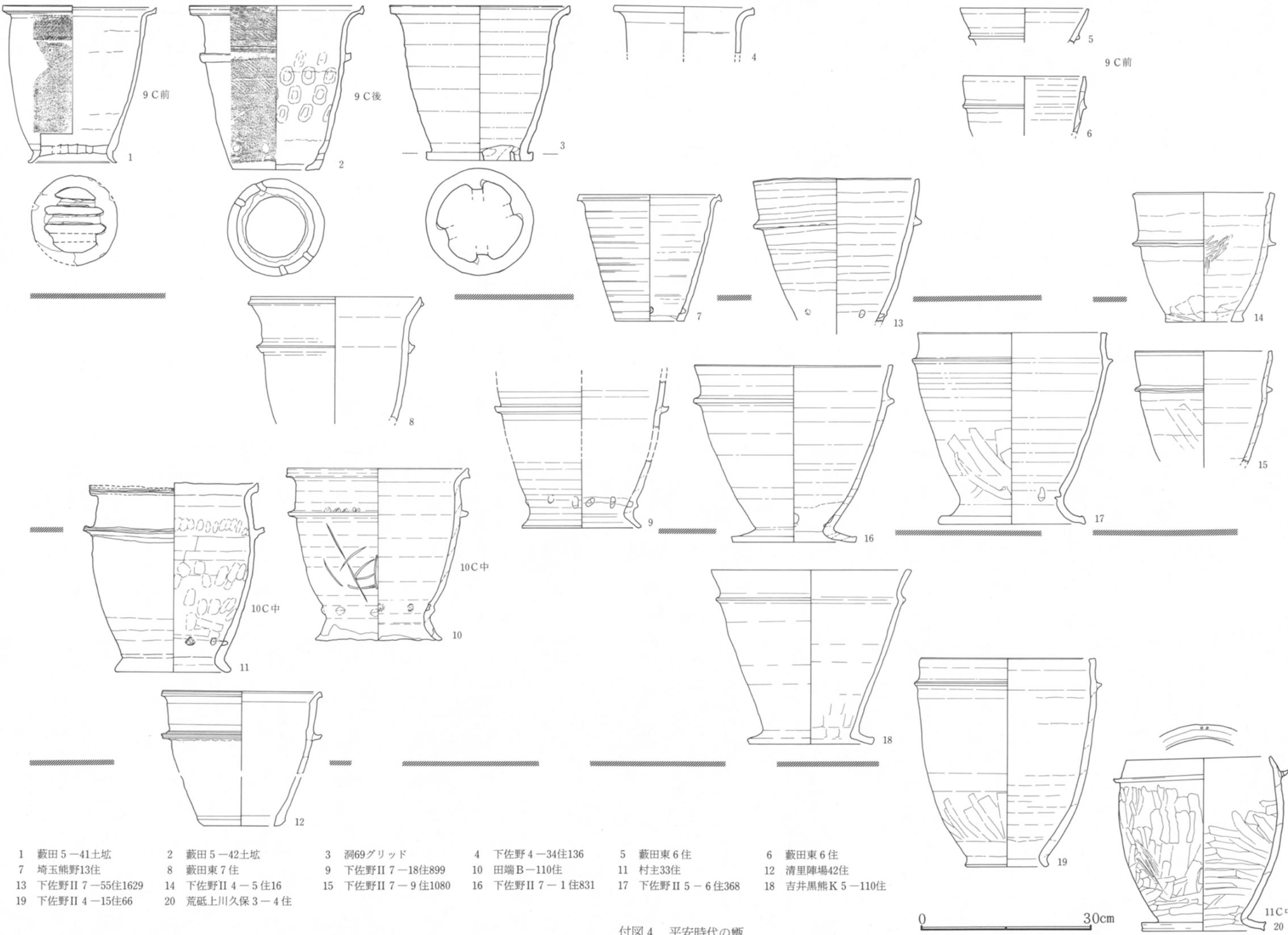
煮炊具  
土師器甕  
(体部ヘラケズリ)

土師器甕  
羽釜の出現

羽釜の盛行

羽釜  
土釜

羽釜  
土釜



- |                    |                 |                   |                  |                  |                 |
|--------------------|-----------------|-------------------|------------------|------------------|-----------------|
| 1 藪田 5-41土塚        | 2 藪田 5-42土塚     | 3 洞69グリッド         | 4 下佐野 4-34住136   | 5 藪田東 6住         | 6 藪田東 6住        |
| 7 埼玉熊野13住          | 8 藪田東 7住        | 9 下佐野II 7-18住899  | 10 田端B-110住      | 11 村主33住         | 12 清里陣場42住      |
| 13 下佐野II 7-55住1629 | 14 下佐野II 4-5住16 | 15 下佐野II 7-9住1080 | 16 下佐野II 7-1住831 | 17 下佐野II 5-6住368 | 18 吉井黒熊K 5-110住 |
| 19 下佐野II 4-15住66   | 20 荒砥上川久保 3-4住  |                   |                  |                  |                 |

付図4 平安時代の甕

0 30cm

11C中  
20